



部典宗
卷十二第

BL Tripitaka. Japanese. 1929
1411 Showa shinshu kokuyaku
T8J3 Daizokyo
1929
v.44

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和
新纂

國
譯大藏經



BL
1411
T8J3
1929
v. 44

昭和
新纂 國譯大藏經 宗典部 第二十卷

大乘義章第二 目次

卷 第 七	一
卷 第 八	七九
卷 第 八 末	一九
卷 第 九	一六
卷 第 十	二四七
卷 第 十 一	三三四
卷 第 十 二	四七
卷 第 十 三	五三

目次

大乘義章 第二

宗典部
第二十卷

大乘義章 卷第七

慧遠述す

染法聚の諸業の義に十六門有り。身等の三業。三性の業。三受の報業。三界の繫業。三時の報律儀。八種の語。九業。十の不善業道。十四垢業。十六惡の律義。飲酒の三十五失。開合廣略三。輕重四。上下五。

身等の三業の五門分別。名を釋し性を辨ず一。相を辨ず二。

【一】第三大段に染法聚を明す中、以下諸業の義を説く。今第一段に身等の三業を明すに五門の分別あり。第一に釋名。第二に釋性。第三に體性等。第四に辨性。第五に明す。【礙性】賞礙の性なり。

【成實】第七。

第一に、名を釋し、其體性を辨ず。色彩聚積は、之を名けて身と爲し、起説の門は、之を説いて口と爲す。伺縁を意と名く。斯に依つて起作するが故に、身業乃至意業と名く。名字是の如し。體性は云何。身業に二有り。一には作業、二には無作業なり。作業と言ふは、論釋不同なり。『毘曇』の如きに依らば、三聚法の中には、色法の所收にして、十二入の中には、色入の所攝なり。彼に説かく、身作は、是れ礙の性なるが故に、色聚の所收なり。是れ實法の色眼の所行なるが故に、色入の所攝なり。と。謂ゆる、高下、正不正等なり。若し『成實』に依らば、三聚法の中には、色聚の所收にして、十二入の中には、法人の所攝なり。色の義は前に同じ。何の義を以ての故に、十二入の中には、法人の所攝なる。彼宗の中には、實色は業に非ず。凡そ是業とは、要す是れ假色なり。相續の中には、損有り、益有り。方に名けて業と爲す。故に『成實』に言はく、餘處に生ずる時、能く損益有り。

【口業等】次に口業を明す。

之を名けて業と爲すと。相續の中、後に起るが前に異らば餘處生と名く。大乘法の中には、實に作業有り。相續して乃ち成ず。義に兩兼有り。偏に取ることを得ず。作業是の如し。無作業とは、毘曇の如きに依らば、三聚法の中には、色法の所收にして、十二入の中には、法入の所攝なり。是れ處の性なるが故に、色法の所收なり。此無作業は眼の所行に非ず。唯意識のみ知る。故に法入の攝なり。若し成實に依らば、三聚法の中には、是れ其非色非心の所收にして、十二入の中には、法入の所攝なり。彼宗には無作業有りと説かず。良に以れば無作業は、形處に同じからざるが故に非色と名け、情處に同じからざるが故に非心と曰ひ、意の所行と爲すが故に法入の所攝なり。大乘法の中には、義に兩兼有り。是れ身業なるが故に、名けて色と爲すことを得。色心の相無きを非色心と名く。身業是の如し。口業にも亦二あり。一には作業、二には無作業なり。作業と言ふは、論釋不同なり。『毘曇』の如きに依らば、三聚法の中には、色法の所收にして、十二入の中には、聲入の所攝なり。是れ處の性なるが故に、色法の所收なり。是れ實法の聲耳の所行なるが故に、聲入の所攝なり。彼宗には、假名の聲有りて、以て業と爲すと説かざるなり。若し成實に依らば、三聚法の中には、色法の所收にして、十二入の中には、法入の所攝なり。是れ處の性なるが故に、色法の所收なり。是れ假名の聲意の所行なるが故に、法入の所攝なり。相續の中、方に損益有るが故に、名けて假と爲す。無作業とは、論釋亦異なり。『毘曇』の如きに依らば、三聚法の中には、色法の所收にして、十二入の中には、法入の所攝なり。

【意業の等】次に
意業に就いて明す

【成實】 同論第七
【彼論】 成實論第
七。

是れ色の性なるが故に、色聚の所收なり。是れ無作法の意の所行なるが故に、法入の所攝なり。若し『成實』に依らば、三聚法の中には、非色心の收にして、十二入の中には、法入の所攝なり。形礙に同じからざるが故に非色と名け、情慮に同じからざるが故に非心と曰ひ、意の所行なるが故に法入の所攝なり。大乘法の中には、口業の相は身に類して知るべし。意業の中には、諸論、不同なり。『毘曇』の如きに依らば、但作業のみ有りて、無作業無し。故に彼論に言はく、「三種を以ての故に意に無作無し」と。三種と言ふは、謂はく、善惡等の三性の法なり。色法の中には三性並ぶが故に、善の身口の邊に惡の無作有り。惡の身口の邊に善の無作有り。心法は爾らず。善惡並ばず。善心の中には惡の無作無く、惡心の中には善の無作無し。是義を以ての故に、但作業のみ有り。然るに彼作業は、三聚法の中には、心法の所收にして、十二入の中には、法入の所攝なり。是れ心數の中の思數を體と爲すが故に、心法に收む。是れ意の所行なるが故に、法入の攝なり。若し『成實』に依らば、意地に具に作、無作の業有り。故に彼論に言はく、「因縁として、意地をして無作業無からしむること有ること無し」と。彼に作業を説くこと『毘曇』と同じ。言ふ所の異とは、心外に別に思の體有りと説かず。故に彼論に言はく、「思若し意に非ずんば、更に復何をか説いて、以て意業と爲さん」と。意、縁の中に行するを説いて、名けて思と爲す。無作業とは、三聚法の中には、非色心の收にして、十二入の中には、法入の所攝なり。形礙に同じからず。復情慮に非ざれば非色心と説き、意の所行なるが故に、法入の所攝なり。

【二】第二に三業の相を辨ず。初に身業に就いて。

大乘法の中には、作、無作有り。其中の作業は思數を體と爲す。三聚法の中には、心法の所收にして、十二入の中には、法入の所攝なり。無作業とは、是れ心業なるが故に、是れ心と言ふことを得、心相に非ざるが故に、非心と言ふことを得。十二入の中には、法入の所攝なり。意業是の如し。此一門

次に、其相を辨ず。身業の中に三種有り。善、惡、無記なり。善の中に二有り。一には止、二には作なり。身の三邪を離る、是を名けて止と爲し、禮拜等の事、是を名けて作と爲す。惡の中にも亦二あり。一には止、二には作なり。要期の作心、禮拜せざる等、是を名けて止と爲す。身の三惡を作す。殺、盜、邪淫、是を名けて作と爲す。無記にも亦二あり。一には止、二には作なり。無記心所起の身業を捨す、是を名けて止と爲し、起を名けて作と爲す。問うて曰はく、善惡の止業の中、彼惡作を捨するを、以て善止と爲し、彼善作を捨するを、以て惡止と爲す。無記の中に、何ぞ彼善惡の二作を捨する、之を以て止と爲さずして、乃ち無記の作起の業を捨するを以て止と爲すや。若し無記の中に、還つて無記所作の業を捨して、以て止と爲さば、善中の止は還つて、應に彼善中の作を止めて、惡作を捨せざるべし。惡も亦同じく爾らん。釋して言はく、「類せず。善惡の二門は正しく相違返す。正しく相違するが故に、二の相の翻有り。一には總、二には別なり。總じて之を論ずれば、善を以て惡に對し、惡を以て善に對す。別して之を論ずれば、善中の止は必ず惡作に翻じ、惡中の止は必ず善作に翻す。無記は彼善惡の二門に望めて、正しく相違

【口業にも等】二
に口業を明す。

【意業にも等】三
に意業を明す。

するに非ず。正しく違するに非ざるが故に、唯總じて相翻す。別の相の翻無し。總じて相翻するが故に、無記は彼善惡の二門に翻じ、別して翻ぜざるが故に、無記の止は善惡二門の作に翻ぜず。無記の作は善惡二門の止に翻ぜず。當分の中に、止作相翻す。口業にも亦三あり。善、惡、無記なり。善中に二有り。一には止、二には作なり。口の四過を離る、是を名けて止と爲し、讀誦、講說、如法の音、是を名けて作と爲す。不善にも亦二あり。一には止、二には作なり。讀誦せざる等、是を名けて止と爲し、口の四過を作す、是を名けて作と爲す。無記にも亦二あり。一には止、二には作なり。無記の心所起の口業を捨する、是を名けて止と爲し、起を名けて作と爲す。意業にも亦三あり。善、惡、無記なり。善に二種有り。一には止、二には作なり。止一切不善業の思を離する、是を名けて止と爲し、善業の思を起す、是を名けて作と爲す。惡の中にも亦二あり。一には止、二には作なり。要期の心止善の思を離する、之を名けて止と爲し、惡業の思を起す、是を名けて作と爲す。無記にも亦二あり。一には止、二には作なり。止威儀、工巧等の心を離する、之を名けて止と爲し、此を起すを作と名く。問うて曰はく、「殺生、劫盜、邪淫は是れ身作といはば、口に他を教へて殺さしめ、仙人忿怒して乾陀羅一國の人民を殺す。是れ何の業ぞや。」一論釋不同なり。若し『毘曇』に依らば、是れ身業の攝なり。究竟して殺を成ずること要す身に在るが故に、口に教へて殺すは、所殺の人要す身もて命を斷じて、方に始めて業を成ず。仙人忿怒して人を殺すは、近く住する鬼神、仙の意を知るが故に、彼國人を害す。

【成實】 同論第八

【餘の業道】 盜等をいふ。

若し『成實』に依らば、口に致へて殺すは、則ち是れ口業なり。意に隨つて殺すは、則ち是れ意業なり。故に彼『成實』三邪品に云はく、「口は亦能く致へ、意にも亦能く爲す。但身多なるが故に、名けて身業と爲す。餘の業道の中に、互に造るも例して然なり。邪淫の一種は唯是れ身作なり。其業を成ずること要す身に在るを以ての故に、『淫殺』に説くが如く、此三業の中の意を正業と名け、身口の二種を名けて期業と爲す。期は、謂はく、期會なり。其業の思に従つて、期會集成して身口に在り、故に期業と名く。又彼經に言はく、「意は直に業と名け、身口の二業は、名けて業果と爲す。業の思に従つて身口を成ずるを以ての故に。此二門

【三】 第二に開合 廣略の義を明す。

(三) 次に、開合廣略の義を明す。開合は不定なり。或は總じて一と爲し、通じて名けて業と爲す。或は分つて二と爲す。一には作業、二には無作業なり。此れ上に辨ずるが如し。或は説いて三と爲す。中に於て三有り。一には具に就いて分別す。謂はく、身口意の三種の業なり。二には義に隨つて分別す。一には作業、謂ゆる、身口二種の作業なり。二には無作業、謂ゆる、身口の無作の業なり。三には非作非無作業、謂ゆる、意業なり。三には性に就いて分別す。謂ゆる、善、惡、無記の業なり。或は説いて四と爲す。謂はく、黑白等の四種の業なり。或は説いて五と爲す。『雜心』に説くが如し。身業に二有り。作と無作となり。口業も亦爾り。則ち以て四と爲す。意は唯作のみ有り。前に通じて五と説く。若し『成實』に依らば、意地にも亦作、無作の業有り。若し是義に従はば、業を説いて六と爲

【成實】 同論第七

【成實】 同論第九

【三種の作業】 善惡、無記の三種作業なり。
【成實】 同論第七

【四】 下第四に三業輕重の義を辨ず

【一闡提】 イツチ

す。或は分つて九と爲す。身、口、意業に、各三種有り、善、惡、無記なり。則ち九と爲すなり。又『成實』九業品の中の如きは、更に説いて九と爲す。何者か是なる。『彼欲界を説くに、其三種有り。一には是れ作業、二には無作業、三には非作非無作業なり。此れ上に辨するが如し。色界も亦爾り。則ち以て六と爲す。無色に二有り。一には無作業、二には非作非無作業なり。前に通じて八と爲す。及び無漏業を前に通じて九と爲す。或は十三を分つ。『毘曇』に説くが如し。身口に五有り。一には善の作、二には不善の作、三には無記の作なり。無作に二有り。前に通じて五と爲す。無作の二とは、一には善の無作、二には惡の無作なり。無記は癡劣にして、無作を發さず。身業既に然り。口業も亦爾り。則ち以て十と爲す。意地には唯三種の作業のみ有り。前に通じて十三なり。若し『成實』に依らば、意地にも亦善惡の無作有り。斯に據つて、以て論ずれば、業に十五有り。或は復説いて二十三業と爲す。善業に十有り。謂はく、不殺等なり。不善にも亦十あり。謂はく、殺、盜等なり。身口意の三種の無記に通じて、便ち是れ二十三種の業なり。廣く以て之を分たば、數別窮め難し。此三川

(同) 次に、三業の輕重の義を辨ず。三業の中、何者か最も重き。中に於て、先づ身口の二業を以て彼意業に對し、以て輕重を辨じ、後に別して之を論ず。身口を以て意に對して辨ずと言ふは意業最も重し。一切の身口は意に由つて成ずるが故に。又惡業の中には、邪見最も重し。能く善根を斷じて一闡提と作る。善業の中には、三乘の出道、最も殊勝と爲す。

ヤーンテイカ (C. Pauline) 歸善根と譯す、本來解脱の因を欠いて、到底成備することの出來ぬものをいふ。

【五】 下、第五に上下の得報の不同を辨ず。
【龍樹の説く等】 大智度論第九十六

【報業】 北本第三十七迴葉 菩薩品。クツタラ
【傳單】 ウツタラ
普通北俱盧洲といひ、須彌四洲の一前世に十善行を修したる者を生るる所、土正方にして一萬由旬、欲樂多く、人すべて悦樂に酔ふといふ。

世間の中には、非想の業勝れたり。皆是れ心作なり。故に知んぬ、意重きことを。次に三業に就いて、別して輕重を明さば、身の中に最も重きは、出佛身血なり。口の中に最も重きは、謂ゆる、破僧、謗方等經等なり。意の中に最も重きは、謂ゆる、邪見なり。惡業是の如し。善業の中には、菩提の業最も以て重と爲す。此三種の中、身は輕く、口は中にして、意を最も重しと爲す。此四門

(五) 次に、上下の報を得ること異なるを辨ず。龍樹の説くが如く、不善に三有り。謂はく、下中上なり。下は餓鬼に生じ、中は畜生に生じ、上は地獄に生ず。善の中にも亦三あり。謂はく、下中上なり。下は修羅に生じ、中は人中に生じ、上は天上に生ず。亦更に分別す。惡に四品有り。謂はく、下中上及與び上上なり。下は修羅に生じ、中は餓鬼に生じ、上は畜生に生じ、上上の者は地獄の中に生ず。善の中にも亦四あり。下の者は人に生じ、中の者は天に生じ、上品の者は二乘の果を得、上上の者は無上の果を得。亦『涅槃』の中には、善に四品を分つ。下は瞿曇に生じ、中は非婆に生じ、上は瞿耶に生じ、上上の者は閻浮提に生ずと。蓋し乃ち道に對して、以て上下を分つ。彼の瞿曇越は道を受くるに任へず。下善之に生ず。中下の二品は生處解し難し。若し道法に對すれば、中品の善は、應に瞿耶に生じ、上は非婆に生ずべし。但彼經の中、中と上との兩品は、報に約して分つのみ。南閻浮提は道を受くる中には勝たり。上善之に生ず。若し果報に對して、以て四品を分たば、下は閻浮に生じ、中は非婆に生じ、上は瞿耶に生じ、上上の者は瞿曇越に生

す。三業の義略して辨ずること是の如し。

【弗婆】プールツ
ーギデーハ (Purva
vaidika) 東勝身洲
といひ、須彌の東
側にありて半月形
をなし、縱廣九千
由旬、人壽二百五
十歳、身長八肘と
【羅耶】ゴードニ
ヤ (Rohana) 西

牛貨洲のこと、須
彌の西に位し、形
半月の如く、縱廣
八百由旬、人壽五
百歳、身長十六肘
と。

【八】下諸業の義
を明す中、第二段
中に三性の義を明す
り、初に釋名辨體

【七】第二に三性
業の相を辨ず。相
別に五、一に世法
に約して辨ず。

三性業の義の三門分別。名を釋し體を辨ず一。相を分
つ二。人に就いて分別す三。

第一門の中に、名を釋し體を辨ず。三性業とは、謂ゆる、善と惡と及與び無記となり。

順を名けて善と爲し、違を名けて惡と爲す。此違と順とは、下の五品十善の中に釋するが

如し。非違非順を、説いて無記と爲す。解に兩義有り。一には果に對して分別す。中容の

業は苦樂の兩報を記得すること能はず。故に無記と名く。二には説に就いて分別す。中容

の業を、如來は善と爲し、惡と爲すと記さず。故に無記と名く。名義是の如し。體性は云

何。『善に二種有り。一には生得、宿習今成ず。二には方便、緣に對して新に起る。不

善は唯一にして、生得方便の別を分たず。』何が故に、是の如くなる。『一切の惡法は皆

過去に由る。久習して性成するに、現在に方便修起することを假らず。是が爲に分たず。

無記に四有り。謂ゆる、報生と威儀と工巧と及び變化となり。苦樂の兩報を、名けて報生

と爲す。進止往來は是れ其威儀なり。營世生務を、説いて工巧と爲し、十四化等を、名け

て變化と爲す。此一門
竟る。

次に、其相を辨ず。相別に五有り。一には世法に約して、以て三性と爲す。一切凡聖の

身口意の中の止作兩善は、斯を名けて善と爲す。止作兩惡を、齊く不善と名け、報生、威

儀、工巧、變化を、通じて無記と名く。二には出家の道法に約して分別せば、一切凡聖の

【二には等】二に出家の道法に約して分別す。

【三には等】三に果に對して分別す

【突吉羅罪】ツシユクリタ (Dushti) 惡作と翻す、身口になすところの惡をいふ。【四には等】四に理に對して分別す

【五には等】五に實に對して分別す

身口意の中の止作兩善は、之を名けて善と爲す。止作兩惡を、齊く不善と名く。報生は無記なり。威儀、工巧、及與び變化は、義別に三有り、律の中に説くが如し。法に順する所作は、斯を名けて善と爲し、法に違する所作を、通じて不善と名く。違順に非ざる者を、説いて無記と爲す。三には果に對して分別せば、樂を生ずるを善と名け、苦を生ずるは不善なり。生ずること能はざるを、説いて無記と爲す。此門の中に於て、凡夫學人の身口意の中の止作兩善は、之を名けて善と爲す。能く樂を生ずるが故に、止作の兩惡を、齊く不善と名く。能く苦を生ずるが故に、報生、威儀、工巧、變化を、説いて無記と爲す。生ずること能はざるが故に、無學の聖人の一切の所作を、通じて無記と名く。未來の果を記得すること能はざるが故に、故に「地持」の中に、羅漢の所犯を、名けて無記の突吉羅罪と爲す。罪既に無記なり。善等も亦然り。四には理に對して分別せば、理は、謂はく空理なり。理に順するを善と名け、理に違するは不善なり。非違非順を、説いて無記と爲す。此門の中に於て、凡夫所作の善、惡、無記を、悉く不善と名く。取性の心起つて空理に違するが故に。三乘の聖人の順理の行は、之を名けて善と爲し、三乘の聖人の隨事の所作を、説いて無記と爲す。五には實に對して分別せば、實は、謂はく不空如來藏性なり。此實性に於て、順を名けて善と爲し、違を不善と名け、非違非順を、説いて無記と爲す。此門の中に於て、諸佛菩薩の眞證、行徳は、之を名けて善と爲し、凡夫二乘の一切の所作を、悉く不善と名く。菩薩法の中の緣修の無漏も、亦善、不善あり。相順を善と名く。性違を以

【八】次第三に人に就いて三性業を論ず。

ての故に、説いて不善と爲し、餘の非情法を、説いて無記と爲す。此二門
次に、人に就いて論ず。人は、謂はく、凡夫、聲聞、緣覺、菩薩及び佛なり。凡夫と二
乗と及び菩薩とは、共に三業有り。如來一人は、大小不同なり。小乘法の中には、如來
に善、無記有つて、不善業無しと宣説す。『雜心』に説くが如し。亦『成實』の如きは、佛
の報は無記にして、餘の徳は是れ善なり。大乘法の中には、如來は一向に是れ善にして惡
無く、無記なりと宣説す。故に『地持』に云はく、『唯如來のみ有つて、一切皆善なり』と。
『大智論』の中も、亦此説に同じ。故に彼に宣説す、『十八不共は、一向に是れ善なり』と。
三性の業之を略して云ふこと爾り。

三受報業の義の三門分別。名を釋す一。相を辨ず二。

【九】下諸業義の第三段に三受報業の義を明すに三門分別あり、第一に釋名。

【成實論】 同論第八

第一に名を釋す。三受と言ふは、謂ゆる、苦、樂、不苦不樂なり。逼惱を苦と名け、適
悦を樂と名く。中容の受は前の二種を捨す。是故に名けて不苦不樂と爲し、亦捨受と名く。
言ふ所の業とは、善惡等の因三受を起作するが故に、名けて業と爲す。問うて曰はく、『善
惡能く五陰を生ず。何の義を以ての故に、偏に受業と云つて、色業と想等の業を説かざる
や。』『成實論』三受品に説くが如く、受は是れ實報なり。故に受業と云ふ。餘は是れ報と
名く。故に闕して論ぜず。受は實なりと言ふは、苦樂等の報は、正しく過去の善惡の因に酬ゆ
るが故に實報と名け、自餘の色等は、是れ止しく善惡の二因に對するに非ざるが故に實と名

【彼論】 成實論第八。

【二〇】 第二に辨相

けず。但是れ相從つて、説いて以て報と爲す。故に報と名くと曰ふ。彼論に復言はく、「受は是れ最勝なるが故に受業と云ひ、餘の者は如かず」と。所以に説かず。と言ふ所の勝とは、酬因明顯にして欣を生じ厭を生ず。其力功強きが故に、名けて勝と爲す。餘は是の如くならず。故に不如と名く。彼論に復言はく、「受は縁の中に於て、相別して得べきが故に、受業と云ふ。餘は是の如くならず。廢して論ぜず」と。云何が受心は縁の中に得べき。人の説いて、火は苦にして火は樂なりと言ふが如し。是の如き一切なり。受は縁の中に差別を發生するを以て、酬報の義顯なり。故に受業と名く。此一門。

次に、其相を辨ず。問うて曰はく、「何の業か能く苦受を得、乃至何の業か能く捨受を得る。」釋して言はく、「惡業は能く苦受を得、善業は能く樂捨の二受を得。惡業の苦を得るの義在ること知るべし。」善業の中に、何者か樂を得、何者か捨を得る。四禪已上上妙に、兩師別論す。一師釋して云はく、「善に三品有り。謂はく、下中上なり。四禪已上上妙の善は、能く捨受を得」と。故に彼論に言はく、「不苦不樂を得る、是を説いて上善と爲し、中下の二善皆樂受を得」と。問うて曰はく、「下地は、何の義を以ての故に、捨受の報無きや。」毘曇に釋して言はく、「下地は是れ麤なり。捨受は是れ細なり。下地は寂ならず。捨受は寂靜なり。亦復下地は善を作すの時、但受樂の爲にして、捨の爲にせず。是故に下地に捨受の報無し」と。此説の如きは、三禪已還報心有ること無く、而も命終する者報捨無きが故に。一師の所立は三品の善の中、上下二善は能く捨受を得、中善は樂を得。此

説の如きは、三禪已還も亦報捨有り。報捨有るが故に、三禪已還は、報心の中にも亦命終を得。成實法の中には、向の後説に同じ。三品の善の中、上下の二善は能く捨受を得。下は能く三禪已還の捨受の報を得、上は能く四禪已上の捨受の報を得。良に善法起ること頗に成ぜざるを以て、始は微、次は著、終に則ち微妙離相寂靜なり。是故に上下同じく捨受を得、中は樂受を得。』問うて曰はく、『捨受既に善より生じて善因に酬逐するを、應に名けて樂と爲すべし。何の義を以ての故に、説いて名けて捨と爲すや。』釋して言はく、『以有り。下善の所得は、通じて應に樂と名くべし。輕微なるを以ての故に、覺心は不了なり。故に名けて捨と爲す。上善の所得は、實に是れ勝樂なり。寂靜なるを以ての故に、靈覺の心を捨す。故に説いて捨と爲す。』問うて曰はく、『所感の上下の二樂を名けて捨と爲さば、能感の善を應に無記と名くべし。』釋して言はく、『類せず。夫れ無記とは、當來の果報を記得すること能はざるを、方に無記と名く。良に記法は生果を義と爲すを以て、但果を生ぜしむる、斯を名けて記と爲す。樂とは、是れ其覺知を義と爲す。上下の二樂は覺心微少なるが故に、樂と名けず。説いて捨と爲すなり。』問うて曰はく、『下善所得の樂果は、覺心微なるが故に、便ち捨と名けば、下の不善業の所得の微苦は、覺心も亦少なり。何の義を以ての故に、名けて捨と爲さざる。』釋して言はく、『類せず。苦は性靈重にして、心に違する義強し。皆覺知有るが故に、捨と名けず。樂は性輕薄にして、起れども心に違せず。生覺の義微なるが故に、説いて捨と爲す。』問うて曰はく、『苦樂は並に業より生ず、

何の義を以ての故に、苦は羶にして樂は微なる。釋して言はく、『三界有爲の法は、體は無常生滅の行苦なり。彼苦受とは、彼微細の行苦を用て體と爲す。苦の上に苦を生ず。苦増するが故に羶なり。彼樂受とは、亦微細の行苦を用て體と爲す。苦の上に樂を生ず。浮薄なるが故に微なり。苦は羶なるを以ての故に、輕重の苦を皆苦受と名く。樂は微なるを以ての故に、羶を樂受と爲し、細を捨受と爲す。此二門』

【二】次に第三に三受報業を處に就いて論ず。中に二あり先づ三界に就いて明す。

【成實】同論第六

【彼論】成實論第六。

【有頂】有頂天、即ち色界第四天、非想非々想處天のこと。三界九地の頂上なればこの名あり。

第三門の中に、處に就いて之を論ず。處は、謂はく、三界五道に差別す。先に三界に就いて、其相を分別す。苦受業とは、『毘曇』の如きに依らば、起は欲界に在り。所得の果報も亦欲界に在り。若し『成實』に依らば、苦受の業は、起は三界に通じて、繫屬は欲界なり。欲界は正起にして、上界は寄起なり。所得の果報は、起は三界に通じて、繫屬は欲界なり。欲界は是れ其正受報の處にして、上界は是れ其寄受の處なり。問うて曰はく、『上界云何が苦を起す。』釋して言はく、『上界の報盡きんと欲する時、憂惱の心を生ず。憂惱は即ち是れ苦受の攝なり。故に彼論に言はく、『苦樂は身に隨つて四禪に至り、憂喜は心に隨つて有頂に至る。憂喜は並に是れ苦受の攝なるが故に』と。』樂受業とは、『毘曇』の如きに依らば、欲、色界三禪已還に在り。所受の報も亦欲色三禪已還に在り。若し『成實』に依らば、樂受の報業は三界に通じて起す。繫屬は三禪已還に在り。三禪已還は是れ正起の處、三禪已上は是れ寄起の處なり。所得の報は亦三界に通ず。繫屬は三禪已還に在り。三禪已還は是れ正受の處にして、三禪已上は是れ寄受の處なり。捨受業とは、起は三界に通じ、

【成實】 同論第六

【次に等】 下二に五道に就いて明す

【成實】 同論第六
【彼論】 成實論第七

受報は不定なり。若し『成實』に依らば、三界に之を受く、問うて曰はく、『捨受既に三界に通ず。何が故に、經の中に、四禪の上に捨受有り」と説くや、『成實』に釋して言はく、『四禪已上は更に餘受無し』と。故に偏に捨を説く。然も實に捨受は下に通ぜざるに非ず。若し『毘曇』に依らば、唯四禪の上に捨受の報有り。下地に之無し。下地には、設ひ受有れども、是れ方便の捨なり。『三界是の如し。次に五道に就いて、其相を分別す。苦受業とは、五趣通じて起す。受報も亦然り。下の三趣の中には總報の苦を受け、人天の二趣は別報の苦を受く。樂受業とは、『毘曇』の如きに依らば、五趣に遍く起す。所得の樂果に、總有り、別有り。總報の果は、唯人天に在り。別報の樂受は、唯地獄を除いて餘の四趣に遍す。此れ云何が知らん。『雜心』に説くが如くんば、善業に四有り。一には現報業、二には生報業、三には後報業、四には不定報業なり。此四種の中に、地獄は三を造る。現報業を除く。地獄の中には善報無きを以ての故に。餘の四趣の中には、具に四業を起すと。明に知んぬ、餘趣には通じて善報有ることを。若し『成實』に依らば、樂受の業は、五趣に通じて起す。所得の樂受も亦五道に遍す。故に彼論に言はく、『善業の大利は人天の報乃至涅槃を得、善業の小利乃至三塗も亦少樂を得』と。捨受業とは、『毘曇』の如きに依らば、人天通じて起す。報は色天に在り。若し『成實』に依らば、捨受の業は五趣通じて起す。受果も亦然り。三受の報業略述することは是の如し。

【二】 諸業義第四段に三界繫業の義を明すに五門の分別あり、第一に釋名。

三界繫業の義の五門分別。名を釋す一。能繫二。所繫三。處の分別四。治斷五。

第一に、名を釋す。三界の繫とは、謂ゆる、欲、色、無色の繫業なり。欲は、謂はく、欲界なり。塵境に染愛する、之を名けて欲と爲す。欲、上界に別なるを、名けて欲界と爲す。然るに欲界の中にも亦已身に著し、但五塵を欲す。下には有り、上には無し。上界に別たんが爲に、欲に就いて名くるなり。色は、謂はく、色界なり。下に對して以て名けば、應に無欲と名くべし。此界の中に、内の色形に著するを以て、其所著に従ふ。故に名けて色と爲す。色は上下に別なる、稱して色界と曰ふ。無色と言ふは謂はく、無色界なり。其所取に従はば、應に心界と名くべし。此界の中には其色散を絶するを以て、下に背して名を彰す。故に無色と云ふ。斯れ下に別なるを以て無色界と名く。繫業と言ふは、釋に四義有り。一には業體に就いて、以て繫の義を辨す。有漏の業は、體三界に屬す。是故に名けて三界繫業と爲す。二には得果に就いて、以て繫の義を辨す。有漏の業は、受報の處定んで三界に在り。是故に名けて三界繫業と爲す。三には業果に就いて、相對して繫を辨す。三界の中に於て、業果相結す。是故に名けて三界繫業と爲す。故に『成實』に云はく、『始め地獄より乃ち他化に至る。中に於て、報を受くるを欲界繫と名く。始め梵世より色究竟に至る。中に於て、報を受くるを色界繫と名く。始め空處より乃ち非想に至る。中に於て、報を受くるを無色繫と名く』と。四には惑に對して、繫を辨す。其當界の煩惱の爲に、縁縛せらるるが故に繫業と名く。問うて曰はく、『業果共に相縛するが故に、名けて繫と爲さ

【成實】 同論第八
【他化】 欲界天の
【梵世】 色界初禪
【中】 天中の第一、色究竟天は第四禪の最高天。
【空處】 無色界の初天、悲想とは其

第四、非想非々想
處天のこと。

【成實】 同論第八

【三】 第二に能繫
を辨ず。中に四を
分つ、一に漏無漏
相對分別。

【二には等】 二に
三性について分別
す。

ば、何の義を以ての故に、繫果と名けずして、偏に繫業と云ふや。」釋して言はく、「果に就いて繫と説くことも、亦得たり。今は業門に據るが故に、繫業と名く。亦業は是れ本なるが故に、偏に之を説く。」亦問はく、「煩惱も亦能く果を繫す。何の義を以ての故に、煩惱を説いて、之を以て繫と爲し、偏に繫業と云はざるや。」釋して言はく、「煩惱は理も亦是れ繫す。今は業門に就くが故に、繫業と云ふ。亦業は正種なり。故に偏に之を説く。」問うて曰はく、「無記不定業報は、何の界の繫なるや。」成實に釋して言はく、「是れ欲界繫なり。所以は何ん。此は是れ欲界の業果報なるが故に」と。亦問はく、「繫業、繫法は何の別ぞ。」釋して言はく、「繫業は局つて三業に在り。餘法に通ぜず。若し繫法を論ずれば、業、煩惱及び彼相應の心心法等に通じて、皆繫法と名く。名義是の如し。」此一門次に、能繫を辨ず。中に於て四有り。一には漏、無漏相對して分別す。有漏は是れ繫にして、無漏は不定なり。小乘法の中には、一向に不繫なり。大乘法の中には、無漏に二有り。一には眞證。一向不繫なり。二には緣照。亦繫不繫なり。分段の果に望むれば、集まらず、招かず。故に不繫と名く。變易の果に望むれば、因果相縛す。亦名けて繫と爲す。謂はく、變易世間の中に於て、果報を受くるが故に。二には善、惡、無記に就いて分別す。若し業體は定んで三界に屬し、亦當界の煩惱の縛の爲の故に、繫業と名くと言はば、一切有漏の善、惡、無記は、斯を繫業と名く。若し得果は定んで三界に屬し、亦三界に在つて因果相縛するを名けて繫と爲すと言はば、有漏の善惡を名けて繫業と爲す。無記は不繫な

【三には等】三に三業について分別す。
【四には等】四には罪福不動について分別す。

【二】次に第三に所繫を辨ず。中に二あり。初に繫業に對して其所繫を

【成實】 同論第八

り。果報無きが故に、彼善惡二業の中に就いて、不善の業は定んで欲界に繫す。善業に二有り。一には定、二には亂なり。亂とは、謂ゆる、施、戒等の善は、欲界に繫屬す。定とは、謂ゆる、八禪定業なり。八の中の四禪は色界に繫屬し、四空定業は無色に繫屬す。三には身、口、意業に就いて分別す。身口の二業は欲、色に繫屬し、意業の一種は通じて三界に繫す。四には罪福不動に就いて分別す。罪とは、謂ゆる、不善の業なり。福とは、謂ゆる、散善の業なり。不動と言ふ、八禪定業なり。此三種の中に、罪福の二業は欲界に繫屬し、不動業は上二界に繫す。此二門

次に、所繫を辨ず。中に於て二有り。一には繫業に對して其所繫を明し、二には繫法に對して其所繫を明す。業所繫の中の分別に四有り。一には有漏無漏に就いて分別す。【毘曇】の如きに依らば、有漏の報法は業より生ずる所なれば、是れ業の所繫なり。無漏は有漏の業より生ぜざれば、業の所繫に非ず。若し「成實」に依らば、一切の有漏は皆過去の有漏業より生ず。是れ業の所繫なり。無漏の法も亦過去の施戒等より生ずれども、但是れ業果にして業繫に非ず。何が故に、是の如くなる。經の中に、「不繫の受有り」と説くが故に。又無漏法は、起は必ず因に藉り、生は必ず縁に託す。過去の所修の施戒等の善は、之を以て縁と爲し、方便の無漏は、之を以て因と爲す。因の力大なるが故に、所以に不繫なり。論釋是の如し。若し因果共に相屬著するを言はば、之を名けて繫と爲す。理も亦傷ふこと無し。大乘法の中には、眞證の無漏は業の所繫に非ず。變易の無漏は、是れ業の所繫なり。

【彼論】 成實論第
八。

【不能男】 根闕の
こと。

【彼論】 成實論第
八。

二には三性を分別す。『毘曇』の如きに依らば、無記法の中の報無記の法は、是れ其業果にして、業の所繫と爲す。餘は業繫に非ず。若し『成實』に依らば、有漏法の中の三性の法は、皆過去の有漏業より生ず。是れ業の所繫なり。故に彼論に言はく、「我業報を説くに、其三種有り。善、惡、無記なり。善報と言ふは、人有つて過去に善法を修するが故に、今の報は純善なり。不善報とは、不能男等の食欲の報、毒蛇蝎等の瞋恚の報なり。是の如きは一切なり。無記の報の義在ること知るべし。是れ業報なるが故に、是れ業の所繫なり。又彼論に言はく、「諸の所生の法は、皆業を木と爲す。若し業木無ければ、云何が能く生ぜん。故に知んぬ、諸法は皆業の所繫なり」と。三には内外に分別す。毘曇法の中には、衆生の内報は業より生ず。是れ業の所繫なり。外の山河大地は、乃ち是れ衆生の依報の果なり。云何が説いて業の所繫に非ずと言ふや。又人善を作さば、便ち好處に生じ、若し人惡を造さば、便ち惡處に生ず。云何が説いて業繫に非ずと言ふや。『毘曇』に釋して言はく、「外の山河等は還つて外法の四大を用て因と爲し業に由つて起らず。故に業繫に非ず。善業を作して好處に生じ、不善業を作して惡處に生ずと言ふは、業力は風の如し。善業の風の故に、諸の衆生を吹いて好處に業を受け、惡業の風の故に、諸の衆生を吹いて惡處に苦を受け、然も所住の處は業に由つて起らざるが故に、業繫に非ず」と。若し『成實』に依らば、一切の内外は、皆是れ業果、並に是れ所繫なり。問うて曰はく、「外法は非業生數にして、先より自

【成實】 第八。

之有^レり。業^ニ由^テ有^ラず。云^ハ何^ガ説^キて、是^レ業^ノ繫^ト言^フや。又^モ復^外法^ハ同^類相^生ず。
 豆^ハ豆^ヲ生^ジ、麥^ハ麥^ヲ生^ズる等^ノ如^シ。何^ガ業^ヲ用^テ、業^ノ果^業ノ所^ノ繫^ト云^フや。『成
 實』に釋^シて言^ハく、『外^法は復^非業^生數^{ナリ}と雖^モ、而^モ是^レ業^生共^業ノ果^ナるが故^ニ、
 亦^業より起^ル』と。若^シ外^法は同^類相^生ずるも業^ニ由^ラずと云^フは、是^レ義^然らず。『云^ハ何
 が然^ラざる。』彼^業生^ノの如^キは、父^母の和^合より生^ズる所^ナりと雖^モ、亦^業を假^スる。外^法
 も亦^爾り。復^同類^迭に相^因起^スと雖^モ、業^ニ由^ルこと何^ゾ傷^マん。又^一切^ノの物^ハ盡^ク同
 類^因より生^ズるにあら^ズ。劫^初の時^ノの如^ク、一^切の萬^物は無^因にして起^ル。明^ニ知^ルぬ、
 業^ニ由^ルことを。業^ニ由^テ生^ズるが故^ニ、是^レ業^ノ所^ノ繫^ナり。四^ニは三^聚を分^別す。三
 聚^ト言^フは、謂^ハゆる、色[、]心[、]非^色、非^心なり。『異^二の如^キに依^ラば、色^法の中^ニ、唯^報の五
 根^及び彼^扶根^の色^香味^觸のみ是^レ其^業果^ニして、業^ノ所^ノ繫^ナり。自^餘の一切^ノの方便[、]長^養
 の眼^等の五^根、及^び外^ノの五^塵は、皆^業果^ニ非^ズ、業^ノ所^ノ繫^ニ非^ズ。心^法の中^ニは、唯^報生
 のみ有^リ。心^心數^法は、是^レ其^業果^ニして、業^ノ所^ノ繫^ナり。自^餘の一切^ノの三^性の心^法は、
 皆^業果^ニ非^ズ、業^ノ所^ノ繫^ニ非^ズ。非^心法^{の中}には、唯^命根[、]無^想天^報、衆^生種^類及^び彼^相
 應^の生[、]住[、]滅^等のみ有^リ。是^レ其^報法^ニして、業^ノ所^ノ繫^ナり。餘^は皆^報に非^ズ、業^ノ所^ノ
 繫^ニ非^ズ。若^シ『成^實』に依^ラば、有^漏法^{の中}の、一^切の色^法、一^切の心^法及^び非^色心^は、
 通^ジて是^レ業^果、是^レ業^ノ所^ノ繫^ナり。上^來の四^門は、業^ニ對^シて分^別す。次^に繫^法に對^シ
 て、其^所繫^ヲ明^ス。『毘^曇』の如^キに依^ラば、欲^界地^{の中}の一切^ノ有^漏は、欲^界の中^ノ煩^惱

【次に等】二に繫法に就いて其所繫を明す。

【二五】 第四に處所に就いて三界繋の相を分別す。

の爲に縁縛せらるるを欲界繋と名け、色界地の中の一切の有漏は、色界の中の煩惱の爲に縁縛せらるるを色界繋と名く。無色も亦爾り。『成實論』の中には、此義を存せず。此三門(二五)三次に、處所に就いて、繋相を分別す。毘曇の如きに依らば、欲界繋の業は、唯欲界にのみ起す。受報の時も亦欲界に在り。色界繋の業は、起は欲色に在り。受報の時、唯色界に在り。餘處に通ぜず。無色界の業は、三界に通じて起す。受報の時、必ず無色に在り。問うて曰はく、『何が故に、下界の中には上業を起すことを得、身上界に在つては下業を起さざる。』釋して言はく、『其れ界地に斷ずるを以ての故に、身上界に生じて下地の法斷ず。是故に上に在つて下業を起さず。』問うて曰はく、『若し既に欲界繋の業は、唯欲界に受して、餘處に非ざれば、經の中に説くが如く、洗僧の福は梵世に生ずることを得。洗僧は散善にして、是れ欲界の業なり。云何が、而も上界に受くることを得るや。』釋して言はく、『洗僧の福徳の因縁、導いて禪定を生ず。故に梵世に生ず。洗僧の福親く能く彼に生ずるに非ず。經は遠縁に就くが故に、洗僧は梵世に生ずることを得と説く。』又問はく、『禪定は是れ上界の業なり。唯上界に受して、下界に非ずとは、經に説かく、『慈を修する正報は梵世なり。後に欲界に生じて、身心に憍無し』と。云何が、而も下界に受くるに非ずと言へる。』釋して云はく、『慈の體は是れ上界の業にして、唯上界に受く。經の中に説く所の、後に欲界に生じて身に憍無しとは、彼の慈を修する時、前後の方便身口柔軟にして、衆生を憍さず。此方便は、是れ欲界の善なるが故に、欲界に生じて身心無憍なり。若し成

【成實】

同論第八

實に依らば、三界繫の業は、當地にも亦起す。他界の中に在りても亦起すことを得。欲界に在つて八禪を修起するが如く、則ち是れ下界の上業を寄起す。又上界に在つて邪見等を起すは、則ち是れ下界の不善を寄起す。又初禪の婆伽梵王諸の梵衆に語りて「汝は但此に住すべし。我能く老死の邊を盡くさしむ。汝等須らく瞿曇の所に詣くべからず」といふが如く、亦是れ欲界の不善を寄起す。又諸の梵等の見佛禮拜發言讚歎するは、則ち是れ欲界の善業を寄起す。「問うて曰はく、『上界の邪見等の心は、是れ無記法なり。云何が、説いて下界不善と言ふや。』」成實に釋して言はく、「經に説かく、邪見は是れ苦の因縁なり。其れ猶苦報所有の四大は、一切皆苦なるがごとし」と。邪見是の如し。三何が、無記たらん。是れ不善なるが故に、欲界に繫屬す。」又『成實』の中に、三界の果は、亦寄受することを得。上二界の報盡きんと欲する時、心に憂惱を生ずるが如し。此の憂惱は、欲界に繫屬して、上界に寄受す。又經の中に説かく、「洪僧の福は梵世に生ずることを得」と。亦是れ上界に欲の果を寄受す。又經の中に説かく、「慈を修する因縁正しく梵世に生じ、後に欲界に生じて、身心に惱無し」と。亦是れ欲界に上報を寄受す。大乘法の中には、『成實』の説に同じく、一切の諸業皆寄起することを得、悉く寄受することを得。乃至正報も亦是れ寄受す。直殘氣に非ず。此四門

【六】

下第五に治斷を辨ず。中に二あり、初めに位じて明す。

次に、治斷を辨ず。中に於て二有り。一には總じて治斷を明し、二には位に隨つて、別して論ず。言ふ所の總とは、毘曇法の中には、不善思業は煩惱相應すれば、正しく其體を

【次に等】二に別して諸位に約して別して治斷を明す

【九無礙道】九無礙道ともいふ、一品の惑を斷ずるに就いて、加行、無間、解脱、勝進の四道あり、その無間道とは、前の加

斷ず。體を斷ずるを以ての故に、此業盡くる處を、名けて數滅と爲す。自餘の一切の身口の惡業及び諸の善業は、但業思の繫縛の義を斷じ、業の體を斷ぜず。業の體を斷ぜざるが故に、數滅と名けず。成實法の中には、煩惱を斷ずるが故に、業をして起らざらしむるを、名けて業を斷ずと爲す。然るに彼宗の中には、煩惱を斷ずるに由つて、業をして起らざらしむるは、悉く是れ數滅なり。『毘曇』の是有り、非有るに同じからず。故に彼論に言はく、「見斷の法とは、謂はく、示相慢及び彼所起の諸餘の法なり。修斷の法とは、不示相慢及び彼所起の諸餘の法なり。示相我慢は、是れ見諦の惑なり。所起の法とは、謂はく、此所生の業及び苦果なり。不示相慢は、是れ修道の惑なり。所起の法とは、謂はく、此所生の業及び苦果なり」と。故に知んぬ。斷ずる處は則ち是れ數滅なることを。大乘法の中には、亦業體を斷ず。諸業は妄想心より起して、本無の法なりと知るを以ての故に。總相是の如し。次に諸位に約して、別して以て之を論ず。『毘曇』の如きに依らば、三塗の惡業に、是れ見斷なる有り、是れ修斷なる有り。凡夫の先より來、見諦の惑に依つて起す所の業は、見道の時に斷じ、凡夫の先より來、修道の惑に依つて起す所の者は、欲界の修道の九無礙に斷ず。此義は後の四業章の中に、具に廣く分別するが如し。欲界地の中の、人天所受の別報の惡業は、那舍を得る時、一切皆斷ず。人天の善業は、那舍を得る時、永く繫縛を斷じ、上地に生ずる時、永く更に行せず。上界の善業は地に隨つて、別して九無礙道に、其繫縛を斷じ、上地に生ずる時、涅槃に入る時、永く更に行せず。若し『成實』に依

行道の加行の功に
より無間に煩惱を
斷ずる刹那の無漏
の一心なり、修惑
に九品あるが故に
九無間道となるな

らば、三塗の惡業は一向に見道の中に在つて斷ず。問うて曰はく、「毘曇」には三塗の業の中に、分つて兩分と爲す。是れ見斷なる有り、是れ修斷なる有り。何が故に成實には三塗の惡業は、唯見道斷なる。」釋して言はく、「兩宗の惑を辨する、各異なり。毘曇法の中には、凡夫は並に見諦修道二種の煩惱を起す。理に迷つて生ずる者は是れ見諦の惑、事を緣じて生ずる者は是れ修道の惑なり。此二種の惑は並に三塗不善の意業を發す。業を造り已竟つて、恆に能得の法有り。彼往の業を得して、行人に繫屬す。見道に入る時、見惑所起の不善が家の得は一切皆斷じ、欲界の修道の九無礙の時、修惑所起の不善が家の得は一切皆斷ず。故に兩處に分つ。身口の二業は、唯修惑のみ起す。彼は是れ世斷刹那斷の故に、得の之を得すること無し。但欲界の業思の爲に繫縛せらる。業思を斷する時、彼縛も亦斷ず。故に名けて離と爲す。成實法の中には、凡夫の時、唯見惑を起す。修惑は成就して現行せず。何が故ぞ、是の如くなる。」彼宗の中には、一切の煩惱皆取性有り。凡夫の起す惑は取性にして、則ち重し。見道の時に斷ず。是故に凡夫所起の煩惱を、悉く見惑と名く。聖人の起す惑は、取の性輕微なり。凡夫の起す惑は、是の如くなること能はず。故に凡夫の時は、修惑を起さず。良に以れば彼宗凡夫の時は、唯見諦の惑を起す。故に三塗の惡業は、悉く見惑の起なり。是故に一切唯見道斷なり。欲界の人天の別報の惡業及與び欲界の一切の善業は、那含を得る時、一切行ぜず。中に於て、禮拜等の善有りと雖も、名用の心より起る。是れ無漏善にして、欲界の業に非ず。上界の善業なり。斷結の處に隨つ

【釋經】第三十二
師子吼菩薩品。

【論】地持論第一

て、一切不生なり。中に於て、禪定等の業を修すと雖も、名用の心より起る。是れ繋着に非ず。大乘法の中には、三塗の惡業未起の者は、種姓の時に至つて、畢竟じて起さず。已起の者は、重有り、輕有り。重は定繫と爲し、輕は不定と爲す。言ふ所の定とは、三種の定有り。一には時定、現生後の時定んで報を受くるが故に。二には報定、定んで果を得るが故に。三には處定、定んで三塗に於て果報を受くるが故に。不定と言ふは亦三種有り。一には時不定、現生後の時、定在ること無きが故に。二には報不定、緣に遇へば則ち受け、緣無ければ受けず。三には處不定、六道の中に於て受を得れば便ち受く。定所無きが故に。彼定業は、種姓の時斷ず。復之を用て惡の果報を受けず。種姓の上は生自在なるを以ての故に。彼不定業は、初地の時斷ず。故に『地經』の中に宣說すらく、「初地に惡道の畏を離る」と。又『地持』に云はく、「解行の菩薩は惡趣の業を轉じて、歡喜地に入る」と。明かに知んぬ、初地に惡業永く盡くすことを。解行已還は悲願の力を以て、之を用て生を受く。故に『地持』に云はく、「種姓、解行は、其は惡道に生ず」と。又『涅槃』に云はく、「地前の菩薩は過去世の中の微塵等の業願力を以ての故に、一切悉く受す」と。問うて曰はく、「論に説かく、「種姓の菩薩は、聲聞、辟支佛の上を超過す」と。聲聞法の中には、見道に入る時、已に惡道に於て、畢竟じて受けず。云何が種姓乃至解行は猶惡道を受くる。」釋して言はく、「二乘は生死の中に於て、一向に厭離して願せざれば、墮せず。故に見道の時、三惡道の業は畢竟じて受けず。地前の菩薩は、悲願力に隨ふが故に、三塗に於て惡の果報

を受く。一若し爾らば、地上は何が故に受けざる。二業盡くるを以ての故に、欲界の天人別して、報の惡業も亦初地に至つて、畢竟して永く盡す。惡業是の如し。人天の善業未起の者は、初地に至る時、法の空寂を見、取著を捨離して復更に起さず。若し復通じて論ずれば、種姓已上は諸法の如を見て、復之を起さず。已起の者も亦二種有り。一には定繫、取性の心起す。二には不定、世諦に隨順して、假名の心起す。彼定繫の中に、正有り、習有り。不定も亦然り。定の中の正とは、種姓の時盡す。復之を用て三有に受生せず。種姓の上は、六道の中に於て、生自在なるを以ての故に。定中の習とは、種姓已上は、悲願力を以て、轉じて不定と爲り、之を用て受生す。初地に至る時、究竟窮盡す。故に初地の上を出世間と名く。故に彼『法花優婆提舍』に初地を宣説して、分段を離ると爲す。又『楞伽』に云はく、「初地の菩薩は二十五三昧を得て二十五有を離る」と。明かに知んぬ。初地に三有の報盡くることを。不定の中の所有の正業は、初地已上に猶用て身を受く。彼初地の上は、復内に法性の身有りと雖も、猶彼報を雜ゆ。故に『大品』の中に、「七地に其肉身有り」と宣説す。良に此に在り。八地に至る時、究竟して窮盡す。故に『涅槃』に云はく、「八地已上を阿那含と名く。復二十五有に還來せず。又更に臭身、虫身を受けず」と。不定の中の微細の習氣は、佛に至つて乃ち窮む。十地は還つて未だ窮盡せざるを以ての故に、名けて斷と爲すことを得ず。有頂の種は唯佛に盡す。故に獨り佛善く有頂の種を斷するなり。三界の繫業之を略して云ふこと爾り。

【七】諸業義第四
 段に三時報業を明
 す中、五門の分別
 あり、先づ第一に
 釋名辨相。初に釋
 名。

三時報業の義の五門分別。名を釋し相を辨ず一。其業體を定む二。界趣の分
 別三。因縁の分別四。得果の多少遲速の分別五。

第一に、名を釋し、其相を辨ず。三報業とは、謂ゆる、現、生、後の報業なり。果を今
 に受く、之を名けて現と爲し、現報に次いで起る、之を目けて生と爲し、生を過ぎて方に
 受く、之を謂つて後と爲す。現に善惡を起して彼報を造作するを、三報業と名く。名義是
 の如し。『相狀は如何。』『開合不定なり。或は分つて二と爲す。謂はく、定と不定となり。
 三時に定んで受くる、之を名けて定と爲し、不定に受くる者を、名けて不定と爲す。或は
 分つて三と爲す。時を以て統攝するに、現生後の時業を出づること無きなり。良に受報は
 現生後報の時出づること無きを以ての故に。定不定業とは、現報を得る者を通じて現業と
 名く。生後も亦然り。或は分つて四と爲す。經の中に説くが如く、前三種のの上に、更に一
 種の不定報業を加へて、則ち以て四と爲す。若し現に業を作つて、現に遇つて之を受け、
 現に若し受けざれば、即ち受けざるに於て、現報業と名く。若し現に業を作つて、次の生
 に應に受くべく、生に若し受けざれば、即ち受けざるに於て、生報業と名く。若し現に業
 を作つて、生後に應に受くべく、後に若し受けざれば、即ち受けざるに於て、後報業と名
 く。若し現に業を作つて、三時の中に於て、縁に遇はば便ち受け、遇はざれば受けざるを、
 不定報業と名く。或は離して八と爲す。向前の四業は果に望めて、各定と不定と有り。故
 に八有るなり。』『相狀は如何。』『業の現に屬して、遇つて現の時に於て、定んで果報を受く

【相狀は等】 二に相狀を辨ず。

ること有るを、則ち以て一と爲す。業の現に屬して、而も現在に於て果を受くること不定にして、縁に遇はば便ち受け、遇はざれば受けざること有るを、則ち以て二と爲す。業の生に屬して、而も生の時に於て、定んで果報を受くること有るを、則ち以て三と爲す。業の生に屬して、而も生の時に於て、報を受くること不定にして、縁會すれば便ち受け、遇はざれば受けざること有るを、則ち以て四と爲す。業の後に屬して、而も後の時に於て、報を受くること不定にして、縁會すれば便ち受け、會せざれば受けざること有るを、則ち以て六と爲す。業不定にして三時に屬し、而も三時に於て、定んで果報を受け、移轉すべからざること有るを、則ち以て五と爲す。業の後に屬して、而も後の時に於て、報を受くること有るを、則ち以て七と爲す。業不定にして三時に屬し、而も三時に於て、報を受くること不定にして、縁會すれば便ち受け、會せざれば受けざること有るを、則ち以て八と爲す。此八種の中の義別して四有り。經の中に説くが如し。一には時は定にして報は不定なり。二には報は定にして時は不定なり。三には時報俱に定なり。四には時報俱に不定なり。一相狀は如何。二彼三時の定業の中に就いて、分つて兩句と爲す。定んで報を得る者を、以て一句と爲す。時報俱に定なり。不定に得る者を、復一句と爲す。時は定にして報は不定なり。彼不定の三時の業の中に就いて、亦兩句を分つ。定んで報を得る者を、以て一句と爲す。報は定にして時は不定なり。不定に得る者を、復一句と爲す。時と報との二俱に不定なり。此一門を究る。

【二八】第二に三時
報業の體を辨す。

【成實】 同論第八

【末利夫人】 勝鬘
夫人の母。

次に、業體を辨す。若し三報に對して、以て其業を定むれば、此相分ち易し。一切の業の中、現に受くる所の者を、説いて現業と爲し、次の生に受くる者を、説いて生業と爲し、後の中に受くる者を、説いて後業と爲す。若し四業に就いて、以て其相を定むれば、分別に二有り。一には心に隨つて分別す。現報を求むる者を、説いて現業と爲し、生報を求むる者を、説いて生業と爲し、後報を求むる者を、説いて後業と爲し、心に期限無くして、而も業を造る者を、説いて不定と爲す。二には業相に就いて、義に隨つて分別す。【成實】に説くが如し。利にして重ならざる、是れ現報業なり。謂ゆる、佛及び諸の賢聖、父母等の所に於て、數善惡を起す。數起るを利と名く。起ること慳至ならざるを、説いて不重と爲す。上境を求むるを以て、數善惡を起す。故に現報を得。若は上境に於て重心に業を作る。此報廣大にして、現に能く受くるに非ず。是故に偏に不重の者を簡んで、現報業と爲す。問うては、若し利にして重ならざるを、現報を得と言はば、末利夫人一食を佛に施して、便ち現報を得。何ぞ利を待たんや。釋して言はく、一以有り。利にして重ならざるは現報を得とは、是れ現報業にして、現報を得。因に就いて論を爲し、其緣に據らず。末利夫人一食を佛に施して果を得とは、心に約して以て分つ。是れ現報業なり。現報を求むるが故に。若しくは業相に就いて、以て四業を分つ。此不定業は現の果報を得れども、現報業に非ず。利ならざるを以ての故に、但緣に爲つて彼過去の不定報業を助けて、今の果を受くべし。因の事に關せず。重にして利ならざる、是れ生報業なり。謂はく、五

逆等は、一境の上にて於て、一逆、兩逆を起すに過ぎず。故に不利と曰ふ。上境界に於て、此違害を起す。極重の心に非ざれば、成辨すること能はず。故に説いて重と爲す。此報重きが故に、現に受くることを得ず。一何が故に是の如くなる。二身小なるを以ての故に、則ち大苦無く、命促なるを以ての故に、便ち久惱無し。是故に現在に重報を受けず。五逆の業は報を引いて促なるが故に、後の中に至らず。故に生は之を受く、亦利亦重なる、是れ後報業なり。謂ゆる、輪王菩薩業等なり。彼業は成じ難し。數に非ざれば就かず。是故に須らく利なるべし。彼報は階し難し。慙至にして方に尅す。是故に須らく重なるべし。成じ難きを以ての故に、後の中に之を受く。利ならず、重ならざる、是れ不定業なり。此業の中に就いて、現及び不定には善惡通じて論じ、生報業の中に、偏に其惡を説き、後報業の中に、偏に其善を彰す。蓋し隱顯のみ。此二門

【一九】 下第三に界趣に就いて其相を分別す。中に二あり。一に三界に就いて分別す。別づりて分別す。凡夫入地に隨つて、別説する中、一に凡夫についで。

次に、界趣に就いて其相を分別す。界は、謂はく三界なり。趣は、謂はく六趣なり。先に三界に就いて其業を分別す。三界の中に於て、一一に皆具に四業を起すことを得。總相是の如し。若し入地に隨つて、以て別して之を論ずれば、則ち無量有り。人は、謂はく凡聖、地は、謂はく九地なり。始め欲界より乃ち悲想に至る。凡夫は彼九地の中に於て、身に隨つて、何處にも但自地煩惱をして未だ盡きざらしめ、自地の中に於て、具に四業を起す。若し結盡くる者は、欲界の中に在り。退轉姓の人は、自地の中に於て具に四業を起す。彼退還して自地に生すべきを以ての故に、生業有り。餘の三は知るべし。若し不退の者は、

【成實】 同論第八

自地の中に於て但三業を造る。生報業を除いて餘の三種を起す。不退の者は、次の身必ず定んで上地に生ずるを以ての故に、上八地に在つて、自地の結盡くるは、退性及び不退性を問ふこと莫し。自地の中に於て、皆三業を造る。生報業を除く。自地に結盡くれば、次の身必ず定んで上地に生ずるが故に、一切の上界皆退無し。故に退者を簡ばす。自地是の如し。上地の中に於て、結未だ盡きざる處に、具に三業を起す。現報業を除く。身下に在るが故に、身欲界に在つて、上地の中に於て結已に盡くる處に、退種姓の人も亦三業を起す。現報業を除く。身下に在るが故に。退種姓の人は上を退して彼地に生ずべきが故に、生業有ることを得。後及び不定の義の在ること知るべし。若くは不退の者は、但二業を造る。現生業を除いて餘の二種有り。身下に在るが故に、現報業を除く。不退の者は彼地に結盡き、次の身に必ず定んで上地に生ずるを以ての故に、生報業を除く。若くは身初禪已上に在り。無所有に至るまでに、上地の中に於て、煩惱盡くる處に退者及び不退者を問ふこと莫し。上地の中に於て、皆二業を起す。謂ゆる、後報及び不定報なり。身下に在るが故に、現業を造らず。天に退無きが故に、次の身に隨逐し、結有る處に生ず。故に結盡くる處は、生業を造らず。身上地に在つては、下地の中に於て一切起さず。下結斷するが故に。『毘曇』是の如し。若し『成實』に依らば、凡夫の身一切地の中に在つて、其自地に於て、結の盡不盡皆四業を起す。上地の中に於て、所得の禪處に具に三業を起す。現報業を除いて餘の三種を起す。下地の中に於ても亦三種を起す。現報業を除く。彼宗の中の三界

【次に等】次に聖人に就いて。

【花嚴】 同經第十

【大智論】 同論第

九十五。

の業は寄起することを以ての故に。凡夫是の如し。次に聖人を論ず。若し聖人を論ずれば、身は欲界、二禪、三禪及び第四禪に在つて、但自地の煩惱をして未だ盡きざらしむるは、皆自地に於て具に四業を起す。此四地生處多きを以ての故に、身は初禪に在つて、自地の中に於て煩惱未だ盡きず。唯業を造る具後報を除く。何が故に、是の如くなる。』

『初禪の中の天は三有りと雖も、處は但一有り、梵身は一處にして、梵輔、大梵は同じく一處に在り。聖人は一處にして重生せざるが故に、後報業無し。』毘婆沙『是の如し。若し『花嚴』『大智論』等に依らば、初禪に共四天三處有り。是れ則ち聖人は初禪の中に在つて、亦四業を起す。一切の聖人の身は四空に在つて、自地の中に於て、煩惱未だ盡きず。皆二業を起す。謂ゆる、現報、不定報業なり。現報の業は身に隨つて之を受くるが故に、現業有り。不定の業は現在に受くることを得るが故に、不定有り。多處無きが故に、其生報及び後報業無し。一切の聖人は所在の處に隨つて、自地の結盡くれば、自地の中に於て但二業を造る。謂ゆる、現報、不定報業なり。自地の中に於て、煩惱盡くと雖も、猶報業を造らず。問うて曰はく、凡夫退種姓の者は、自地の中に於て、煩惱盡くと雖も、猶四業を起す。聖人にも亦退種姓の者有り。何が爲に具に四業を起すことを得ざる。』釋して言はく、『聖人に退著有りと雖も、終に生を経ず。是故に具に四業を起すことを得ず。』自地是の如し。一切の聖人隨つて何の地に在りても、上地の中に於て、所得の處に結未だ盡きざる者は、具に三種を起す。現報業を除く。身は欲界に在つて、上地の中に於て、結已

【有人】 成實論第
八所引。

に盡くる處に退種姓の人も亦三種を起す。現報業を除く。退種姓の人、上を退して彼地に生ずべきが故に、不退の者は、彼上地に於て、結已に盡くる處に但一種を造る。不定報業なり。身彼に在らざるが故に現業無く、更に彼に生ぜざるが故に、生報及び後報業無し。一切の聖人は、身初禪より無所有に至るまでに在つて、上地の中に於て、結盡くるの處に但一種を造る。不定報業なり。天に生ずる者は退轉無きを以ての故に、「何が故に、聖人天に生じては退無き。」色界上には退緣無きを以ての故に、下地の中に於て、一向に造らず。學人は是の如し。「無學は云何。」釋して言はく、「無學は現報及び不定業の二種の善業を造ることを得。文證無しと雖も、彼那舍に准ずるに業を造ること知るべし。毘婆沙。是の如し。成實法の中の人の釋同じからず。有人説いて言はく、「聖人は一向に新業を造らず。之を用て生を受く。設令造れる者も、但現報、不定報業を起して、餘の二を作らず。論文爾るに似たり。故に彼「成實」三報品に云はく、「無學の聖人は諸業を集めず。學人も亦然り」と。此言有りと雖も、其義解し難し。「云何が解し難き。」一人有つて先づ見道已前に在つて初禪を修得し、此初禪に依つて見諦道乃至那舍に入る。後更に二禪、三禪乃至非想を修得して、之を用て上生す。則ち是聖人は造業受生す。云何が造らざらん。此業を以ての故に、今更に之を釋せん。無學の聖人は一向に造らず。學人は不定なり。結盡くる處には一向に造らず。羅漢と同じ。結未だ盡きざる處には造る義有ることを得。問うて曰はく、「聖人業を作つて生ずれば、何が故に、論に、一切の聖人諸業を散壞して、集めず、積まず、減して然

らず等と言ふや。』答へて曰はく、『聖人の結盡くるの處には、集めず、造らず。結有る處にも亦業を造らざるに非ず。故に彼『成實』三報品の中に問うて曰はく、『若は人此地の欲を離れて、還つて能く此地の業を集起するや不や』と。論に自ら釋して言はく、『有我心の者は還つて復之を起し、無我心の者は復更に起さず』と。無我心の者は是れ其聖人なり。聖人は彼離欲の處に於て、方に始めて起さず。明に知んぬ、未だ離れざるは起の義有るを得と。』問うて曰はく、『聖人業を造ることを得ば、何等の業をか造る。』『中に於て、略して三門を以て分別す。一には惑相を辨じ、二には惑を約して業を辨じ、三には地に就いて分別す。惑相と言ふは、一切の聖人修道の煩惱伏斷の不同に乃ち四種有り。一には未伏未斷なり。未だ上禪を得て下の煩惱を伏せざるを、名けて未伏と爲し、未だ聖慧有つて下の煩惱を斷ぜざるを、名けて未斷と爲す。二には已伏未斷なり。已に上禪を得て下の煩惱を伏するを、名けて已伏と爲し、未だ慧有つて除かざるを、名けて未斷と爲す。三には已伏少斷なり。已伏は前に同じ。少斷と言ふは斯陀含の如し。欲界の修惑已に六品を斷じ、三微猶在るを、名けて少斷と爲す。一切地の中に、同く此義有り。四には已伏已斷なり。已伏は前に同じ。已斷と言ふは、已に聖慧有つて之を斷ずること畢竟す。此四義遍く諸地に通ず。惑相是の如し。次に諸惑有無の義に約して、其起業の多少不同を明す。當に知るべし、聖人は彼未伏未斷の處に於て、具に四業を起すと。所起の中に就いて、善は具に四を起し、不善は唯二なり。謂はく、現不定なり。聖は惡を造ると雖も、但意業を起して身口を發さ

す。又意業の中には、輕にして重ならず。是故に唯現及び不定を造つて、餘の二は全く無し。彼已伏未斷の處、及び少斷の處に於て、但善の中の現と不定とを造り、餘は悉く起さず。彼已伏已斷の處に於て、一切造らず。設令之を起すとも、是れ習にして正に非ず。報を牽くこと能はず。次に地に就いて論ぜば、彼宗の如きに依らば、聖人の身は欲界、二禪、三禪、四禪に在つて、煩惱未だ盡きざるは四業を起すことを得。若し已に盡くる者は、一向に造らず。若し初禪に在つて煩惱未だ盡きざるは、三業を造ることを得、其後報を除く。若し已に盡くる者は、一向に造らず。上地の中に於て、結未だ盡きざる處に三業を造ることを得、現報業を除く。結已に盡くる處には、一向に造らず。下地の中に於て、一向に爲さず。『成實』是の如し。大乘法の中には、分段の業種姓已上は一向に爲さず。若し別して之を分たば、不善の四業は、種姓已上は一向に作さず。人天の善業は、初地已上は一向に爲さず。地前の菩薩は、縱令身を受くとも、但悲願を以て木業を受く。初地已上は法性身を得。設ひ人天の微細の習身有るとも、乃ち是れ本業にして、是れ新に作るに非ず。種姓已上は業を造らざるが故に、須らく界地に約就して之を論すべからず。種姓已前は、位分未だ成ぜず。相は凡に説くに同じ。實を以て之を論すれば、十信已上も亦能く分段の業を起さず。聖人の造業の差別是の如し。『問うて曰はく、『離自地の煩惱有つて、猶未だ窮盡せずして、而も上地の業を造作することを得るや不や。』釋して言はく、『有ることを得。謂はく、欲界の中の煩惱未だ盡きざるに、未來禪定を修習し成就す。此れ則ち是なり。』

未來禪定と彼初禪とは、同く梵果を招く。故に上業と名く。『問うて曰はく、『此業四種の業の中に、幾の業を具することを得るや。』』此義不定なり。『毘曇』の如きに依らば、凡夫の修得は則ち三義を具し、現報業を除く。聖人の修得は則ち二業を具す。謂ゆる、生報、不定報業なり。『相狀は云何。』或は凡夫有り。欲愛未だ盡きざるに未來を修得し、未來を得竟れば、更に殘結を斷じ初禪定を得。是人命終して此未來及び初禪定を用て、而も梵處に生ず。此れ則ち名けて生報の業と爲す。復凡夫有り。欲愛未だ盡きざるに未來を修得し、則ち欲界に於て生を經已つて、後復殘結を斷じ、此未來及び初禪定を用て梵處に生ず。此は則ち是れ其を名けて後と爲し、後報の業と爲す。不定は知るべし。凡夫是の如し。『聖人は何が故に但二業を造る。』『聖人の中、初二果の人は欲愛未だ盡きずして未來禪を得。是人後時に欲愛を斷じ盡し、此未來及び初禪定を用て梵處に生ず。此は則ち是れ其生報の業なり。不定は知るべし。』何の義を以ての故に、後報業に非ざる。』『聖人の欲界に經生するの者終に上生せず。凡夫の經生して往くに同じからず。故に後業に非ず。又未來禪の中下品は、設ひ梵處に生ずるも、唯初天の一身の果報を得。二身に至らざるが故に後報に非ず。若し『阿育王傳』に依らば、欲界地の中の經生の聖人も亦上生することを得。彼説の如きに依らば、聖人も亦未來禪定を用て三報業と爲す。凡夫と同じ。『界別是の如し。次に趣に就いて論ず。』毘曇の如きに依らば、不善の四業は五趣具に起す。善の中の内業は、人、天、鬼、畜の四趣具に起す。地獄の中には、但三種有り。現報業を除く。

【次に等】二に六趣に就いて明す。

【二】 第四に因縁を明す。

【論】 成實論第八

【三】 第五に得果の多少遲速を明す

地獄の中には善報無きが故に、三種有りとは雖も、成じて行ぜず。此義解し難し。仙譽王、婆羅門を殺して地獄の中に生じ、信心を發生して甘露園に生ずるが如し。慈童女地獄の中に在つて、慈心を發生して地獄の身を捨するが如し。『涅槃』に説くが如く、魔王、彼地獄の衆生を教へて専ら如来を念じ、施に於て隨喜せしむ。此等は皆地獄の中に於て、善心を發生す。云何が行ぜざる。『釋』して言はく、『論』に善不行と説くは、當應に彼方便に就いて言を爲すべし。地獄の中には、聞思修無きを以て善不行と名く。生得の善根は、行ぜざらしむるに非ず。向前に擧ぐる所は、當應に悉く是れ生得善なるべし。若し『成實』に依らば、善惡の四業五趣皆起す。彼は三塗に善報有りと言くが故に。此三門

次に、因縁を辨す。現報業の中、若し當に一たび作して報を獲べき者は、但縁と名けて因と名くることを得ざるべし。斯れ乃ち現縁なり。過去の不定報業を助けて今の果を得るが故に。若し當に數作して果を得べき者は、名けて因と作すことを得。其多作を用て、方に因と名るるが故に。論の中に宣説す、利にして重ならざるは、是れ現報業なり。現業、果を得ること、是れ甚た難きが故に、多作の者は方に因と爲すことを得。若し生後の不定報業を論すれば、一作多作皆因と爲すことを得、亦縁と爲すことを得。生を経て業熟すれば、果を得ること易し。故に中に於て、親しく生ずる、之を説いて因と爲し、疎く他を助くる者、之を説いて縁と爲す。此四門

次に、得果の多少遲速を明す。問うて曰はく、『幾の業か一身の報を得る。』『雜心』に釋

して言はく、「生後の不定は一身の果を得、現報業は但別報の苦樂等の愛を得て一身を得ず」と。』多少是の如し。遲速と言ふは、問うて曰はく、「頗前念に業を作り、後念の中に則ち報を得ること有りや不や。』論に言はく、「得ず。業未熟なるが故に、要す多時を経て方に乃ち報を得」と。』三時の報業略して辨ずることは是の如し。

曲穢濁業の義

【三】 諸業義第五
段に曲穢濁業の義を明す。

(二二) 曲穢濁業は「毘曇」に説くが如し。彼論に宣説すらく、「曲は諂より起り、穢は瞋恚より生ず。欲生ずるを諂ひて濁と爲す。世尊の所説なり」と。諂心は不端にして生死を出で難く、涅槃に入り難し。猶曲木の稠林を出で難きが如し。故に名けて曲と爲す。斯曲法より起す所の三業を、皆名けて曲と爲す。其れ因果相似の法なるを以ての故に。瞋恚の心は能く自他を穢す。故に名けて穢と爲す。穢法所起の身口意業は、之を名けて穢と爲す。果は因に似るが故に。貪心濁亂にして、猶し濁水の如し。故に名けて濁と爲す。濁法所起の身口意業は、之を名けて濁と爲す。問うて曰はく、「餘結も亦能く業を起す。何が故に説かざる。』釋して言はく、「今は一門に據つて論を爲す。餘結の起業は皆是中に入る。所以に説かず。』曲穢濁業は之を略すること麁爾り。

黑白四業の義に兩門分別あり。名を釋す一。相を辨ず二。

【三】 諸業義第六段に黑白四業の義を明すに兩門の分別あり、第一に釋名。

【涅槃】 南本第三十四。

【成實】 同論第八

【龍樹等】 大智論第九十四。

【三四】 第二に黑白業の相を辨ず、初に毘曇の説。

第一に、名を釋す。四業の義は、衆經に通じて説く。「名字は是れ何ぞ。」一には黒黒業、二には白、白業、三には黒白業、四には不黒不白業なり。黒黒と言ふは、是れ不善業なり。不善業は、之を名けて黒と爲す。因果俱に黒なるを、黒黒業と名く。白、白業と言ふは、是れ其善業なり。善法鮮淨は、之を名けて白と爲す。因果俱に白なるを、白、白業と名く。黒白と言ふは、是れ其雜業なり。善惡の交參を黒白業と名く。言ふ所の不黒不白業とは、是れ無漏業なり。「涅槃」に云ふが如し。無漏は寂靜にして黒白の相を離る。是故に名けて不黒不白と爲す」と。問うて曰はく、「無漏は白の中に最勝なり。何の義を以ての故に、名けて不白と爲すや。」『成實』に釋して言はく、「一切世人は有漏の善を重んず。故に彼善を名けて、之を以て白と爲す。無漏は彼を捨するが故に、不白と名く」と。又涅槃寂靜の果を得て白相を離れ、其所得に従ふが故に、不白と云ふ。又無漏の業は白の中に最勝なり。餘白に過ぎたるが故に、不白と云ふ。轉輪王の體は實に是れ人なるも、殊勝なるを以ての故に、世間咸く轉輪聖王は清淨にして人に過ぎたりと言ふが如し。無漏も亦爾り。故に不白と云ふ。龍樹釋して云はく、「是無漏業は空、無相、無作と相應して、別の相を離分す。是故に名けて不黒不白と爲す。又有漏業は黒白相待す。無漏は待を離るるが故に、不黒不白業と名くるなり」と。「名字は是の如し。此一門」

次に、其相を辨ず。論釋不同なり。若し「毘曇」に依らば、色界の善業を名けて白、白と爲し、三塗所受の一切の惡業を名けて黒黒と爲し、鬼畜の中の別報の善業、欲界の人天

【雜心】 同論第三

の一切所受の善惡二業を黑白業と名け、亦是雜業と名く。此前の三種の對治の無漏は、是れ第四業なり。故に「雜心」に云はく、色有の中の善業は、是れ白にして自報有り。黑白欲の中に在りては、俱に黒にして、不淨と説く」と。若し思有つて能く斷じて、是諸の業に餘無くんば、當に知るべし、第四業なることを。問うて曰はく、「何が故に、色界の善業を、偏に名けて白となす。」「白相顯なるが故に。無慚愧及び瞋恚を離るるが故に。」「欲界の善業は、何が故に白に非ざる。」「不善を雜ふるが故に。」「無色の善業は、何が故に白に非ざる。」「彼實には是れ白なれども、白相顯ならず。是を以て説かず。」「云何が顯ならざる。」「造因の時、三業十善道の相を具せず。受報の時、但生陰のみ有つて中陰無し。又生陰の中、但四陰のみ有つて色陰無し。是の如き等の白相具せざるを以ての故に、白と名けず。」「何が故に、三塗の一切の惡業を皆黒黒と爲すや。」「其因果は一向に黒なるを以ての故に。故に彼「成實」に「毘曇」を破して云はく、「有人宣説すらく、色界の善業を以て白白と爲し、三塗の業を以て黒黒と爲し、欲界の人天所受の業を以て黑白と爲し、十七學思を不黑白と爲すと。是義然らず。彼に准じて以て驗す。故に知んぬ、「毘曇」に三塗の惡業を以て黒黒と爲すことを」と。」「何が故に、鬼畜の中の別報の善業を宣説して、以て雜業と爲すや。」「彼作因の時惡と和雜し、得報の時苦と參受するが故に、説いて雜と爲す。」「問うて曰はく、「何が故に、別報の善業は、偏に鬼畜に在つて地獄に通ぜざる。」「地獄は苦重し。能感の因唯不善なるが故に。鬼畜は報輕し。能感の因雜善を得るが故に。」「此

【成實】 同論第八

れ云何が知る。『雜心』の中に、現報、生報、後報、不定報業を辨明するが如し。此四善業は、地獄に三有り。現報業を除く。地獄の中には、善果無きを以ての故に、餘の四趣の中には、具に四業を造る。明に知んぬ、鬼畜に善業有ることを。其現報の善を造ることを得るを以ての故に。又經に説くが如し、「阿修羅等の受報は天の如し」と。善業有ること明けし。問うて曰はく、「若し鬼畜の中に善果有りと言はば、何が故に『成實』に『毘曇』を破して、「有人三塗の業を宣説して黒黒と爲す」と言ふや。彼は惡業を擧げ、善有ることを妨げず。若し善有らば『成實』と同じ。『成實』の論家、竟に何の破する所かあらん。」釋して言はく、「同なる者は『成實』には破せず。中に於て、異なる者は『成實』に之を破す。『成實』に宣説すらく、「地獄の中に、初め炎火を出すときは、則ち寒氷を得て身に觸るるの樂、並に猪犬等の糞を食するの樂、是の如きの一切皆是れ善果なり」と。『毘曇』に説いて、不善の報と爲す。此れ『成實』に乖く。『成實』は、之を破して善果を破せず。『何』が故に、人天一切の善惡を悉く雜業と爲すや。『因』に惡を雜へ、果に苦を雜ふるを以ての故に。』第四業とは、彼論に説くが如し。其十七無漏の學思有るを、第四業と爲す。思は是れ思數、此は是れ業體なり。故に偏に之を説く。『何者か十七なる。』彼論に説くが如し。十二思有つて、黑報業を斷じ、四思は能く白を斷じ、一思は二俱に離ると説く。是れ則ち通じて、合して十七思有り。言ふ所の十二斷黑業とは、見道の中に、其四思有り、修道の中に、其八思有り。是故に通じて、合して其十二有り。見道の四とは、謂はく、四法忍相

應の思なり。此四正欲界地の中の三塗の惡業を斷ず。故に斷黑と云ふ。問うて曰はく、
 『忍の體も亦惡法を斷ず。何の義を以ての故に、偏に思を説くや。』釋して言はく、『忍心
 惡を斷ぜざるに非ず。但思は是れ業なり。今は業を辨せんが爲の故に、偏に之を説く。相
 從つて以て論ず。忍等は是れ其思業なり。眷屬も亦思と名くることを得。』問うて曰はく、
 『法智相應の思は、何が故に説かざる。』釋して言はく、『法智果外の證除す。正斷に非ざ
 るが故に。所以に論ぜず。』又問はく、『比忍相應の思は、何が故に説かざる。』釋して言は
 く、『比忍相應の思は、但上界の無記染の思を斷じ、不善を斷ぜず。所以に説かず。』修道の
 八とは、欲界地の中の修道對治に、九無礙、九解脱道有り。九無礙の中の前の八は、無礙
 相應の思なり。此八正欲界の黑業を斷ず。故に斷黑と云ふ。問うて曰はく、『毘曇』に
 三塗の業を説いて、以て黑黑と爲す。見道の中に斷ず。是中何れの處に、更に黑業有つて
 而も修道の八思を言ふや。』『黑を斷ずるは此れ上の釋の如し。凡夫は具に見修の二惑に依
 つて三塗の業を發す。見道の煩惱は理に迷つて生ずるが故に、但意業を發す。修道の煩惱
 は事を緣じて起るが故に、具に三業を發す。見修の煩惱所發の意業、起し已つて謝往すれ
 ば、得の之を得する有り。聖道に入る時、彼業の得を斷じて己に屬せざらしむ。之を名け
 て斷と爲す。見惑の所起は、見道の中に斷じ、修惑の所起は、欲界の修道の九無礙に斷ず。
 第九の一品は後に在つて、別して論ず。故に前の八黑報業を斷ずと説く。修惑所起の身口
 の二業は、其世斷、刹那斷なるを以ての故に、得の之を得すること無し。但修惑の爲に彼

業を縁縛す。修惑斷する時、修業縛を免る、之を名けて斷と爲す。之を斷する品數と、修惑所發の意業を斷するとは、其義相似す。言ふ所の四思能く白を斷すとは、四禪地の中の修道の煩惱相應の染思は、皆能く自地の善業を繫縛す。一一の地の中に、各九品の無礙解脫有つて、其繫縛を斷す。彼四禪の九無礙の中に就いて、第九相應の思業を分取して、以て四思と爲す。此四正しく四禪の善の上の繫縛の義を斷するを、名けて白を斷すと爲す。善體を斷ぜず。問うて曰はく、『四禪の九無礙の思、皆能く善の上の繫縛を斷除す。何の義を以ての故に、偏に第九能く白を斷すと説くや。』釋して言はく、『前の八は、斷すること能ざるに非ず。但彼四禪地の地の中の九品の染思、共に自地は一切の善法を縛す。前の八重の縛、復斷じ竟ると雖も、第九の一重の繫縛猶在りて、自地の中は一切の善法をして皆脱を得ざらしむるが故に、斷と名けず。彼第九品の無礙起る時、彼微品の染汚の業思を斷じて、自地の中は一切の業法をして皆解脱を得しむるが故に、偏に之を説いて、以て白を斷すと説く。』言ふ所の一思は一俱に離るとは、欲界の修道の九無礙の中の第九品の邊相應の業思は、之を以て一と爲し、此思正しく黒黒業の中の第九の微品を斷じ、并に欲界の一切の雜業を斷するを、名けて俱離と爲す。故に『雜心』に云はく、『黒黒業及び黒白業を斷するを俱離と名くるなり』と。彼黒業及び雜業の中に於て、不善意業は其得の體を斷す。自餘の一切の不善の身口及び雜業の中は一切の善法は、但繫縛を斷じて得の體を斷ぜず。問うて曰はく、『欲界の前の八無礙は、但黒のみを斷するに非ず。亦雜業を斷す。何の義を以て

の故に、俱離と名けざる。』釋して言はく、『前の八、黒業を斷する時、雜中の惡業は分に隨つて亦斷す。但雜善の上の繫縛未だ盡きず。是故に雜業を斷すと説くことを得ず。彼雜善業、猶白地微品の黒業及び雜惡業の爲に、繫縛せらるるが故に。』問うて曰はく、『若し雜善の上の繫縛未だ盡きざれば、名けて雜業を斷すと爲すことを得ずと言はば、前の八無礙、黒を斷すること未だ盡きざるも、亦應に黒業を斷すと説くことを得ざるべし。』釋して言はく、『惡業は體を斷するを斷と名く。體を斷するを以ての故に、分に隨つて盡くる處に斷の名を與ふることを得。善は繫縛を斷じて其體を斷ぜず。善は縛を斷するが故に、欲界地の中の九品の不善、共に欲界の一切の善法を縛す。前の八無礙、善の上の八重の繫縛を斷すと雖も、第九の一重の繫縛猶在り。繫縛在るが故に、一切の善法未だ脱する處有らず。故に斷すと説かず。』問うて曰はく、『若し惡は體を斷するが故に、分に隨つて盡くる處に斷と名くることを得しめば、前の八無礙も亦雜の中の八品の惡業を斷す。何の義を以ての故に、雜を斷すと説かざる。』釋して言はく、『彼惡と欲界の善とを、合して雜業と爲す。雜惡を斷すと雖も、雜善未だ出ざるが故に、斷と説かず。其れ猶頭頂手足等の事共に人身を成じ、手足を斷すと雖も、人を殺すと名けざるがごとし。此も亦是の如し。』問うて曰はく、『若し前の八思の時、雜善未だ出ざれば、雜惡を斷すと雖も、斷と名けずと言ふは、黒業の中意業を斷すと雖も、身口の二業未だ緣縛を免れず。何の義を以ての故に、黒を斷すと名くることを得るや。』釋して言はく、『以有り。彼黒業の中、意を正業と爲す。身口は隨業なり。』

【成實法の等】次
に成實論の説。同
論第八。

【成實】 同論第九
【大智論】 同論第
九十四。

【白雲繁經】 北本第
三十七。

意を正と爲すが故に、前の八思の時、身口業と雖も、未だ縁縛を免れず。正業已に除くが故に、黒を斷すと説く。人の頭を斬り、或は復腰を截るが如し。手足在りと雖も、而も殺さると名く。雜の中に、不善の意業を斷すと雖も、善の中の意業縛せられて未だ出ず。善悪の身口も亦未だ縛を免れざるが故に、斷と説かず。問うて曰はく、「無色の無漏の業思は、何が故に、説いて無漏業と爲さざる。」理も亦通じて是なり。但前の三對治の法に非ざるが故に、所以に論ぜず。『毘曇』是の如し。成實法の中の四業は、復彼説に異なり。色界、無色界の業は、一向に是れ白なり。及び欲界の中の純善の業も亦名けて白と爲す。阿鼻の業は、一向に是れ黒なり。自餘の地獄及び鬼、畜の中の純善の業も亦名けて黒と爲す。欲界の天人の純樂に非ざる業、及び下三趣の純苦に非ざる業を、通じて名けて雜と爲し、一切無漏を通じて不黒不白業と名くるなり。無漏の中に就いて、別して之を論ずれば、唯思心を取つて、以て業體と爲す。故に彼「成實」九業品に云はく、「意思を業と名く」と。通じては則ち俱に是れ「大智論」の中の地獄の業なり。鬼畜の少分は是れ其黒業なり。論に自ら釋して言はく、「是中の衆生は大苦悶極す。故に名けて黒と爲す」と。一切の天業は是れ其白業なり。論に自ら釋して言はく、「三界の諸天所受の樂報は白に明了なり。故に名けて白と爲す」と。人及び修羅、八部神等所受の業を黒白雜と名く。此業の中に善有り、惡有り、受報の時、苦樂雜はるを以ての故に、一切の無漏能く不善及び有漏の善を便し、并に衆生善惡の果を抜くを、不黒不白と名く。「涅槃經」の中に、三塗の業は之を名けて黒

と爲し、上二界の業は之を説いて白と爲す。欲界地の中の人天の業は、之を以て雜と爲し、一切の無漏を不黒不白と爲す。四業是の如し。

【五】諸業義第七段に五逆の義を明す。中に七門の分別あり、第一に釋名辨相。先づ釋名

五逆の義に七門分別あり。名を釋し相を辨ず一。三業三毒の分別二。輕重の分別三。多少

第一門の中に、名を釋し相を辨ず。五逆と言ふは、謂はく、殺父、殺母、殺阿羅漢、出

佛身血、破和合僧なり。此五種を經に説いて逆と爲し、亦無間と名く。何が故に、此五を

偏に名けて逆と爲すや。『其恩に背き、福田に違するを以ての故に。殺父、殺母は恩に背

くが故に逆なり。餘の三は福田に違するが故に逆なり。殺阿羅漢、破和合僧は僧福田に違

し、出佛身血は佛福田に違す。』問うて曰はく、『三寶は皆是れ福田なり。何の義を以ての

故に、法に違するを説かざる。』釋して言はく、『謗法は五逆より重し。是故に五逆罪の中

に入れず。其れ猶五逆は四重に入れざるがごとし。』此五を、何が故に無間業と名くる。』

釋に四義有り。一には起果無間なるが故に無間と曰ふ。故に『成實』に言はく、『此身を

捨し已つて次の身に即ち受くるが故に、無間と名く』と。二には受苦無間、五逆の罪、阿

鼻獄に生じて、一劫の中苦苦相續して、樂の聞ること有ること無し。因、果に従つて、稱

して無間業と名く。三には壽命無間、五逆の罪、阿鼻獄に生じて、一劫の中壽命絶するこ

と無し。因は果の因に従つて、名けて無間と爲す。四には身形無間、五逆の罪、阿鼻獄に

生ず。阿鼻地獄は縱廣八萬四千由旬なり。一人中に入つて、身も亦遍滿す。一切の人入る

【次に等】二に五
道の相を辨ず。
【羯磨僧】阿闍梨
によつて懺悔の法
を修する僧。
【今宜しく等】下
破僧の義を辨ずる
に六句の分別あり
一に破法を明す。

に身も亦遍満して、相障礙せず。因は果の號に従つて、名けて無間と曰ふ。名義是の如し。次に其相を辨ず。前の四種は相顯にして知るべし。破僧は識り難し。今宜く廣く破僧の義を辨ずべし。況く釋するに二有り。一には羯磨僧を破し、二には法輪僧を破す。中に於て、略して六句を以て分別す。一には破法を明し、二には破人を明し、三には破時を明し、四には破處を明し、五には破相を明し、六には破性を明す。破法と言ふは、法に二種有り。一には邪、二には正なり。邪は能破と爲し、正は所破と爲す。正法の中に就いて、況く釋するに三有り。一には出家衆法、謂はく、百一羯磨なり。出家の者詳崇して乖かず。方に僧を成ずることを得。若し是の如くならざれば、名けて僧と爲さず。是故に名けて出家衆法と爲す。二には出家行法、謂ゆる、四依なり。一には形壽を盡して樹下に常坐す。二には形壽を盡して糞掃衣を著す。三には形を盡して乞食す。四には形を盡して病有り。陳棄藥を服して共に此法を行するを、方に出家と名け、方に名けて僧と爲す。若し此を行せざれば、名けて僧と爲さず。是故に名けて出家の行法と爲す。三には隨行別法、謂ゆる、禮拜、學問、誦經、坐禪、念定乃至無漏の聖慧を修得す。是の如きの一切なり。人に隨つて異習す。出家に非ざる者は同じ之法を崇む。是故に名けて隨行別法と爲す。三の中の前の二は、是れ其僧法出家の行なり。後の一種は道俗通じて行す。止出家のみにあらざれば、僧法と名けず。僧法の中に就いて、初は是れ其羯磨僧法なり。第二は是れ其法輪僧法なり。是僧とは、是れ其所破にして、僧法に非ざる者は是れ所破に非ず。所破是の如し。何者か能破

【次に等】二に破人を辨す。中に復三、先づ所破を明す。

【如來四依の正法】出家の依りて修むべき四種の行法、著蓂掃衣、常乞食、樹下坐、服陳腐藥これなり。

なる。一破羯磨の中には更に別法無し。破法輪僧は五邪を用ふ。一には乞食、二には著蓂掃衣、三には樹下坐、四には不食酥鹽、五には不食魚肉なり。前の三は相似せり。後の二は妄語なり。此五種を以て正法に翻違するが故に、名けて破と爲す。一破法是の如し。次に破人を辨す。中に於て三有り。一には所破を明し、二には能破を明し、三には能所に就いて多少を辨定す。所破の中に就いて、其二種有り。一には羯磨僧、出家の中に具戒の比丘四人已上、凡聖を簡ばず。一界の内に在つて、彼百一羯磨の法に於て、同く遵じて乖かざるを羯磨僧と名く。二には法輪僧、出家の士、凡聖を簡ばず。同く如來四依の正法を行じ、和して乖かざるを法輪僧と名く。有人説いて言はく、「四眞諦とは、是れ其法輪なり。會諦の人を法輪僧と名く。」然るに彼四諦は乃ち是れ隨人別行法の中の法輪の義にして、僧法の中の戒僧法輪に非ず。若し當に四諦は是れ法輪なるべくんば、調達、僧を破するに、應に五諦を説いて四諦に翻違すべし。五邪を説いて四依に翻するを以ての故に、明かに知んぬ、四依は是れ其法輪なることを。若し聖人會諦の者は是れ法輪僧なりと言はば、在家の聖人は、應に名けて僧と爲すべし。彼は僧に非ざるが故に、明に知んぬ、會諦の人を以て法輪僧と爲さざることを。良に世人の所取は謬濫するを以て、今四句を以て之を辨じて、異ならしめん。一相を辨すること云何。一には法輪にして無漏に非ず。謂はく、出家凡夫なり。四依を奉行するが故に法輪と名け、未だ聖道を證せざるが故に無漏に非ず。二には無漏にして法輪に非ず。謂はく、在家の聖人なり。内に聖解有るが故に無漏と名け、四依を行ぜ

【次に等】 二に能破を辨す。

【次に等】 三に能破所破の人に就いて。

ざるが故に法輪に非ず。三には無漏にして亦是れ法輪なり。謂はく、出家の聖人なり。内に聖解有るが故に無漏と曰ひ、四依を奉行するが故に法輪と名く。四には無漏に非ずまた法輪に非ず。謂はく、在家の凡夫なり。内に聖解無きが故に無漏に非ず、四依を行ぜざるが故に法輪に非ず。此を以て之を辨す。相別知るべし。此二僧の中、破羯磨僧は通じて凡聖を破す。凡僧聖に乖くも亦破と名く。故に破法輪僧は凡に在つて聖に非ず。聖信成就して壞すべからざるが故に。所破是の如し。次に能破を辨す。破羯磨僧は、見愛俱に能く破す。法輪僧は、局つて見行に在り。利根の人は、方に能く破するを以ての故に。又破羯磨は、其淨行毀禁の人に通ず。犯重者を除いて皆能く之を破す。破法輪僧は、局つて清淨に在り。毀禁の人は人を信ぜざるを以ての故に、僧を破すること能はず。故に『雜心』に云はく、「久しき清淨の人は、乃ち能く僧を破す」と。能破是の如し。次に能破所破の人に就いて、多少を辨定す。破羯磨僧は、一界の内に於て、極少八人にして破僧を成ずることを得。破此衆を成じて別に作法するが故に。破法輪僧は、一界の内に於て、極少九人にして方に破を成ずることを得。何が故に九を須ふるや。『正衆四人は是れ其所破にして、邪衆五人は是れ其能破なるが故に、九を須ふるなり。』『邪衆の中、何が故に五を須ふるや。』『調達一人自ら稱して佛と爲し餘の四を衆と爲すが故に、五を須ふるなり。』問うて曰はく、邪の中に佛有り、衆有るが故に。五を須ふれば、正の中にも亦佛と衆と有り。何んが十と説かずして乃ち九と説くや。釋して言はく、『正の中に復佛有りと雖も、佛は僧の攝

【次に等】三に破
時を明す。中に二、
先づ正破の時に就
いて。

に非ず。是故に論ぜず。邪の中に調達自ら佛と稱すと雖も、實には是れ僧なるが故に、
説いて五と爲す。又正破の時は佛は衆に在らず。もし佛衆に在らば、調達比丘は威徳有る
こと無し。僧を破すること能はざるが故に、佛を論ぜず。』問うて曰はく、『彼羯磨僧を破
する時、兩衆異處にして別に羯磨を作す。故に彼此並に皆衆を成ずることを須ふ。破法輪
は、但行法を破して衆事に關せず。何ぞ彼此皆衆を成ずることを須ひんや。』答して曰はく、
『以有り。破法輪は必ず羯磨を須ひて和衆忍可し、邪法方に行ずるが故に、彼此皆衆を成
ずることを須ふるなり。』破人は是の如し。次に破時を辨す。中に於て二有り。一には破時を
明し、二には破し竟つて久近の時を明す。正破の時とは、破羯磨僧は時節寛長なり。佛
の在世より乃ち法末に至つて、皆之を破することを得。破法輪僧は時節短促なり。唯佛の
在世にして末代に通ぜず。故に『雜心』に云はく、結界せざると前と後と牟尼の嚴涅槃と
麁肉未だ出でざる時と、及び第一雙無きとなり。此六時の中に於て、則ち破法輪無きは不
結界にして一なり。破僧の前は二、破僧の後は三、牟尼涅槃は四、麁肉未出は五、無第一
雙は六なり。此六時の中には、破法輪無し。不結界とは、破法輪の時必ず羯磨に依る。羯
磨は界に依るが故に結界せざれば僧を破することを得ず。前後と言ふは、破僧の前及び
破僧の後なり。此二時の中には、衆僧一味にして破壞すべからず。故に破僧無し。已涅槃
とは、佛涅槃の後には正師無きが故に、亦邪師無し。故に破僧無し。言ふ所の麁肉未出時と
は、調達悪人の惡戒惡見の患を起すは、瘡瘻肉の如し。此未出の時も亦破僧無し。無第一

【布薩】 ボーシヤ
ダ (Dohai) 諸の
惡法及び煩惱を斷
じて、究竟清淨の
梵行を修すること
をいふ。

雙とは、舍利、日蓮なり。此二人は、弟子の中に標にして第一雙と名く。此れ未だ有らざる時は則ち破僧無し。何が故に是の如くなる。『調達、佛に勝弟子有るを見て、佛に學んで別して勝弟子を蓄ふるが故に。又此二人能く僧を和合するが故に、此雙有つて方に破僧を起す。蓋し乃ち是れ其佛力、法力、一切衆生の善根の力の故に然らしむるなり。』問うて曰はく、『世尊未だ出でたまはざるの時も亦破僧無し。何が故に論ぜざる。』釋して言はく、『六時不破僧とは、僧有る時に説く。佛未だ出でたまはざる時、未だ僧有らず。知んぬ、後何に就いて、説いて破せずと爲さん。是を以て論ぜず。此六時に僧を破せざるを以ての故に、名けて短促と爲す。』問うて曰はく、『破僧に前後の二時あり。一には王舍城に調達比丘五邪を宣説す。壽を行つて衆を和す。五百の新學壽を受くるの時なり。二には伽耶に在つて邪正の兩衆別に作法する時なり。此二時の中には、何れの時にか正しく破する。』釋して言はく、『二時俱に破の義有り。王舍に壽を行するは行法を破する時なり。伽耶に布薩するは衆法を破する時なり。是故に二時皆破僧と名く。』問うて曰はく、『伽耶に別に布薩を作法は、乃ち衆法を破して行儀に闕せず。何が故に名けて破法輪と爲すや。』一、彼麁磨を作さば、邪を忍すること必ず定まる。故に亦名けて破法輪と爲すなり。此れ正破の時なり。破し竟つて久近に還つて復和合す。經の中に説くが如し。一宿を経ずして、僧遇つて和合す。何に因るが故に和するや。舍利弗及び日蓮に由るが故に。日蓮は通を以て、其調達をして眠つて覺らざらしむ。又勝通を現じ、彼新學の五百の比丘を化して、其をして信を生

【次に等】次に破處を辨ず。

【次に等】次に破相を明す。

ぜしむ。舍利の辨説は其をして解を生ぜしめ、還り來つて正に歸す。故に和合することを得。破時は是の如し。次に破處を辨ず。論の中に説くが如し。破羯磨僧は三天下に在り。鬱單越を除く。彼には僧無きが故に、破法輪僧は唯閻浮に在つて餘方に在らず。何が故に是の如くなる。一論に自ら釋して言はく、此れ正道有るが故に邪道有り。此れ正師有るが故に邪師有り。故に閻浮に在り。又被羯磨は、局つて界内に在り。所損の處も亦界内に在り。破法輪は、處を破す。局つて一界の内に在り。所損は遍く三千世界に滿つ。故に律經に言はく、「三千世界は一時の中に、應に擧すべきを擧せず、應に誦すべきを誦せず、應に禪定を習すべきに禪定を習せず。乃至應に無漏聖道に入るべきに、之に入ることを得ず」と。破處是の如し。次に破相を辨ず。破羯磨僧は、要す是れ大僧、一界の内に下八人を極む。分つて兩衆と爲す。彼此各如法の羯磨を作す。方に破僧と名く。若は一處には作し、一處には作さず。此を直に名けて別衆羯磨と爲す。破僧を成せず。設ひ二處並に羯磨を作すも、若し當に其非法羯磨を作すべければ、法羯磨は皆破を成ぜざるを以て、其所作は僧法に非ざるを以ての故に。破法輪とは、亦是れ出家具戒の人、一界の内に在つて、下九人を極む。正衆に四有り。邪衆に五有り。調達一人自ら大師と稱するを、五邪と宣説す。四人忍可して正衆に違背し、同く四依の法を崇むることを得ざるを、破法輪と名く。有人釋して言はく、「調達五人彼正衆を化して四人邪に従ふを、方に破僧と名くるが故に、九人を須ふ」と。是義然らず。正を化して邪に従ふは破僧の所損にして、是れ破僧に非ず。言ふ所

【次に等】 六に破性を明す。

の破とは、本是れ一和す。今は兩和を分つて、方に破僧と名く。破羯磨と大況相似たり。問うて曰はく、「向前の破羯磨の中に、兩衆皆如法の羯磨を作すを、方に破僧と名く。破法輪の中には、何ぞ是の如くならずして、一正一邪を乃ち破と名くるや。」釋して言はく、「兩異にして相類することを得ず。前の破羯磨は、情乖くが故に破なり。是法乖くに非ざるが故に別法無し。破法輪とは、法に乖くが故に破なり。故に邪法を立てて正軌に翻違するを、名けて破と爲すなり。」破相是の如し。次に破性を明す。破僧は何の性ぞ。若し破罪を論すれば、是れ其口業不善の性なり。若し所破を論すれば、不和合性なり。不和性と、是れ四相の中には第四の壞相、三性の中には是れ不隱沒無記性なり。破僧是の如し。此破僧の中、破羯磨の僧は罪輕くして逆に非ず。破法輪の僧は罪重きが故に逆なり。上來第一に名を釋し相を辨ず。竟る。此一門

【二六】 下第二に三業三毒に就いて分別す。

次に三業三毒に就いて分別す。三業と言ふは、五逆の中の殺父、殺母、殺阿羅漢、出佛身血は是れ其身業にして、破僧の罪は是れ其口業なり。三毒と言ふは前の四種は瞋心の所起にして、破僧の一種は貪嫉の心發す。名聞を貪するを以て、妬嫉の心の故に、僧輪を破壊す。此二門 竟る。

【二七】 下第三に五逆の輕重に就いて成實】 同第八

次に輕重を辨ず。殺父は最も輕く、殺母は次に重く、殺阿羅漢は罪復轉重し。出佛身血は轉轉して彌重く、破僧は最も重し。故に「成實」に云はく、「破僧最も重し」と。「何が故に是の如くなる。」三寶を離するが故に、僧をして佛を離れしめ、亦法寶を礙す。又佛

【二六】 下第四に多
少次第の義を辨ず

所に於て、深嫉の心を起し、正法を違轉し、復大衆を惱まし、應に聖に入るべき者は、聖に入ることを得ず。坐禪、學問、讀誦、禮拜、是の如き等の事一切得ず。所以に最も重し。此三門

【二八】 次は多少次第の義を辨ず。多少と言ふは、一人極多は兼逆をか造ることを得る。若し佛在を論ずれば、具に五を造ることを得。先に破僧を作り、後に餘の四を造る。若し佛世を去れば、極多は三を造る。謂はく、殺父母及び殺羅漢なり。問うて曰はく、「前には一人二三を起すに過ぎずと説くに、今は云何が具に五を起すことを得と言ふや。」釋して言はく、『義もて推すに具に理有ることを得。人に就いて別して論ずれば、二三に過ぐることを無し。』次第と言ふは、殺父、殺母、殺阿羅漢、出佛身血の此四相望するに其次第無し。何に隨ふも先に在つて皆之を起すことを得。若し破僧を以て殺父母、殺羅漢等に對すれば、破僧先に在り。久しく清淨の人は能く僧を破するが故に。若し先に父を殺し、母、羅漢を殺さば、人信受せず。何ぞ能く僧を破せんや。若し破僧を以て出佛血に對すれば、次第不同なり。若し「雜心」に依らば、要す先に僧を破し、後に佛血を出す。清淨の人は能く僧を破するが故に。『四分律』の中には、先に出血を明し、後に破僧を明す。『破説』は云何。『提婆達多先づ世王に教へて其父を殺害し、自ら佛を殺さんと欲す。新王新佛と爲りて世を化することを望むが故に先づ佛を害す。佛を害するを以ての故に、惡名は流布し、利養斷絶す。五人相將めて家家に乞食す。因つて即ち破僧の心を起し、遂に便ち僧を破す。故に知

【世王】
のこと。 阿闍世王

【二六】第五に人處に就いて五逆の相を分別す。

んぬ、破僧は定んで其後に在ることを。『二説は云何。』並に是れ聖言にして是非を定め難し。若し和會せんと欲すれば、律の中に説く所は、最初には出血は犯無きに就くが故に、僧を破することを得。『雜心』に論ずる所は、破後時に防々所の者に據つて語す。必ず先に僧を破し、後に血を出すことを得。若し先に血を出さば、僧を破することを得ず。此四門。
次に人處に就いて其相を分別す。人に就くと言ふは、『雜心』の如きに依らば、唯男と女と能く逆罪を成す。唯男のみにては其逆罪を成ずること能はず。五逆の中に就いて、破僧の罪は唯男子に局つて、男女に通ぜずと、『成實』には文無し。彼の明す所に准ずるに、七惡律儀は不能男等成ずる義有ることを得。五逆も應に然るべし。中に於て、破僧は其れ唯男子のみにして餘は男女に通じ、不能男等も亦能く之を起す。處に就くと言ふは、明ゆる、三界、五道の處なり。三界の中に欲界は能く起し、上界は能くせず。五道の中に人趣は之を起す。人趣の中に就いて、破僧、出血は局つて閻浮に在り、餘は三天に適す。譯單處を除く。此五門。

【三〇】下第六に受報の時節の久近に就いて辨ず。
【雜業】第十九。
【毘曇】雜心論第八。
【成實論】第八。

次に、受報の時節の久近を明す。五逆の罪若し作すこと有らば、阿鼻獄の中の一劫の壽報なり。明うて曰はく、『有人具に五逆を造る。是人當に一劫の中に具に五報を受くべしと爲んや、當に前後あるべしと爲んや。』阿含の中の如くんば、同じく一劫に在つて火に厚薄有り。『涅槃』も亦然り。若し『毘曇』に依らば、五逆を具する者は五劫に報を受け、一時に在らず。『成實』も亦然り。故に彼論に言はく、『是れ罪重きが故に、久く重苦を受く。』

是の中に於て死し、還是中に生ず」と。若し此劫盡くれば、他方の阿鼻獄の中に生ず。問うて曰はく、「五逆は是れ生報業なり。次身に受くる者は、是れ生業なるべし。後に餘劫の中に受くる所の者は、便ち是れ後業なり。云何が名けて生報業と爲すや。」釋して言はく、「重罪は報分相擲す。所以に過無し。若し初逆無くんば後劫に至らず。是故に猶生報業と名くるなり。」此六門。

次に、五逆の可盡不盡を明す。五逆の罪は是れ定報業なり。假令對治を修するも、但輕からしむべく、盡さしむべからず。故に「成實」に云はく、「五逆の罪は但滅せしむべく、都て盡すべからず。王法の中、重罪有る者は但赦して輕からしむるも、全く放つべからざるが如し」と。故に彼闍王殺父の意を諸佛に懺悔す。如來は但阿闍世王の重罪を微薄と言うて、滅盡と言はず。五逆の業之を略して爾云ふ。

六業の義

六業の義は「成實」に説くが如し。謂ゆる地獄、畜生、餓鬼、人、天の業、及び不定業にして、是れ其六なり。三塗の業とは、經の中に説くが如し。十不善業の上は地獄に生じ、中は畜生に生じ、下は餓鬼に生ず。又身口意に具に不善を起し、地獄の中に生ず。二重を具する者は畜生の中に生じ、二輕を具する者は餓鬼の中に生ず。彼「成實」六業品の中の如く、無量の分別あり。具に論ずべからず。人天業とは、散善の下業は人中に生じ、散善

【三】諸業義第九段に六業の義を明す。

【成實】 同論第九

【二】次に第七に五逆の可盡不盡を明す。

【成實】 同論第七

諸義第十
段に七不
義を明す
分別あり
一に釋名
辨相。

の上業は欲天に生じ、八禪定業は色、無色に生ず。不定業とは、論の中に説くが如し。微善下惡を不定業と名く。微末の善は或は欲界人天の中に在つて受くるが故に、不定と曰ふ。下惡も亦然り。問うて曰はく、「三塗は善惡の果無し。云何が下善は三塗の中に受くるや。」論釋不同なり。毘曇法の中には、地獄の中には全く善果無く、鬼畜は分に有り。成實法の中には、下の三惡には皆善果有り。」六業是の如し。

七不善律儀の義の五門分別あり。名を釋し相を辨す一。開合密略二。對治の分別三。得捨の成廢四。形趣の分別五。

第一門の中に、名を釋し相を辨す。不善律儀は無作の惡なり。惡法の違損を稱して不善と曰ふ。禁制の法は、之を名けて律と爲す。律は猶法のごとし。惡行の法に順する、之を稱して儀と爲す。問うて曰はく、「惡法何の禁する所ぞ。」釋して言はく、「善を禁するを、通じて禁と名くるなり。律儀は不同なり。一門に七を説く。謂はく、殺、盜、姪、妄語、兩舌、惡口、綺語なり。」相狀は如何。「論の中に説くが如し。殺律儀とは、屠牛、屠羊、屠犬、獵師、司獵、鬪鬪、守獄、養猪、養雞、捕魚、捕鳥、呪龍等の事、是の如きの一。是れ殺律儀なり。」問うて曰はく、「養猪、養雞等の事は皆是れ殺に非ず。云何が名けて殺生律儀と爲すや。」養は持殺の爲なり。故に殺の中に入る。殺律儀とは、謂はく、常に賊を作して、以て命を活かす等なり。姪律儀とは、論の中に説くが如し。非道の行姪及び姪女等なり。妄語律儀とは、論に言はく、「謂ゆる、常習の歌戲及び侍兒等なり」と。兩舌律

【三六】第二に開合を辨ず。

儀とは、謂はく、喜んで譏謗し、讒書を誦誦し、圖事を造言する、是の如き等なり。惡口律儀とは、論に言はく、「猛卒及び常に惡口して自ら活命する等なり」と。綺語律儀とは、謂はく、「常に不正の言辭を合集して、人をして笑はしむる等なり」と。此一門

次に開合を辨ず。之を總すれば唯一なり。具に就いて二を分つ。前の三は身業、後の四は口業なり。相別して七義有り。上に辨ずるが如し。因に對して分別するに二十一有り。謂はく、前の七種は上中下の三品の心に隨つて發る。是故に合して二十一種有り。惑に約して分別するに六十三有り。前の二十一は貪瞋癡の三煩惱に隨つて起る。是故に通じて、合して六十三有り。問うて曰はく、「有人先に下心に依つて惡律儀を得し、後に更に彼中上の心を以て起す。更に得するや否や。」論釋不同なり。若し「毘曇」に依らば、一たび得して已後、終に重ねて得せず。善律儀と其義相似す。若し「成實」に依らば、何の心に隨つて起るも、念念に更に得す。亦問はく、「有人貪心の中に惡律儀を得。是人後時に更に瞋癡を以て不善を起す。重ねて得するや。以て論ぜざるや、亦同じからずや。」前に就して知るべし。此二門

【三七】次に第三に境に對して論ず。

次に、境に對して論ず。問うて曰はく、「所殺、所盜、所姪等の所に望めて、而も律儀を發すと爲んや、一切衆生の邊に於て得すと爲んや。」答へて曰はく、「一切衆生の邊に得す。若し別境に望むれば、但不善を得て律儀と名けず。其律儀は類通するを以ての故に闕り。類通するに由るが故に、一衆生を殺すに二の無作を得す。一には惡業無作、二には律儀無

【成實】 同論第九

【云】次に第四に得捨成實の義を明す。初に其得に就

【成實】 同論第八

【次に等】二に其捨を辨す。

作なり。餘の衆生に望めては、但一種の律儀無作を得ず。」問うて曰はく、「已に知んば、不善律儀は普く一切衆生の邊に於て得ず。現在の衆生の邊に於て得すと爲すや。亦過去の衆生の邊に於て得すや。」論釋不同なり。若し「毘曇」に依らば、唯現在の衆生の邊に於て得す。過去、未來は殺すべからざるが故に、若し「成實」に依らば、通じて三世の衆生の邊に於て得す。三世は皆惡心を起すことを得るが故に、此三問

次に、得捨成實の義を明す。先に其得を明す。「毘曇」の如きに依らば、二種の得有り。一には作得、二には受事得なり。作得と言ふは、人有つて屠殺家の家に生在して、未だ殺さざるより已來、未だ律儀を得せず。一たび殺して已後惡律儀を得ず。乃至壽を盡すまで更に新得無し。受事と言ふは、人有りて非屠殺家に生在して、是の如きの言を作す。我當に壽を盡すまで生を殺して自活すべし」と。爾時即ち不善律儀を得ず。乃至壽を盡すまで更に新得無し。盜等皆然り。若し「成實」に依らば、惡を行する時に隨つて、念念に皆不善律儀を得ず。前の二に局らず。問うて曰はく、「七種は具に作し具に受けて、方に律儀を得するや。具せざるも亦得するや。」毘婆沙に説かく、「具足して乃ち得ず。若し具せざれば律儀と名けず」と。「毘曇」成實は、具せざるも亦得す。故に「成實」に言はく、「若し具不具皆律儀を得す」と。「雜心」に説いて言はく、「言ふこと能はざる者は、身律儀を得して口律儀に非ず」と。明かに知んば、具せざることを。次に其捨を辨す。「毘曇」の如きに依らば、四時の捨有り。一には善戒を受け、二には命終する、三には諸難を得る、四には二

【次に等】 三に成就を問す。

【七】 次に第五に形趣に就いて其相を辨ず。
【成實】 同論第九

形生ず。設ひ衆生有つて深善の心を發し、永斷の意を作すとも、若し戒を受けざれば、皆捨すること能はず。成實法の中には、三時の捨有り。一には善戒を受け、二には命終する、三には深善心を發して不作を要期す。此三時の中に惡律儀を捨す。得て捨は、彼論に説かず。二形生は、論に捨せずと言ふ。故に彼論に言はく、「不能男等も亦律儀を得ず。云何が二形能く律儀を捨せん」と。問うて曰はく、「人有つて八戒を受くる時、惡律儀を捨し、明清且に至りて八戒を捨し已つて、還つて復彼惡律儀を得するや不や」と。言人言はく、「得す」と。復有人言はく、「八戒を受くる時、惡律儀を捨して善律儀を得ず。明且に至り已つて善律儀を捨するも亦、更に不善律儀を得せず。作事及び受事無きを以ての故に」と。捨の義是の如し。次に成就を問す。問うて曰はく、「善くの時にか惡戒を成就する。」【成實】の如きに依らば、未だ捨せざるより已來、現在の時の中に、念念に成就す。惡律儀は念念に生ずるを以ての故に、過未を成せず。異曇法の中には、最初の一念は現在に成就し、第二念の後は、若し未だ當に捨すべからざれば、念念の中現在に成就し、及び過去を成す。心法に非ざるが故に、未來に通せず。此四門

次に、形趣に就いて其相を分別す。趣は、謂はく、五趣なり。五趣の中唯人のみ成就す。餘趣の中には、但業道のみ有つて惡律儀無し。故に【成實】に言はく、「但人のみ成就す」と。【異曇】亦同り。問うて曰はく、「成實」には「龍等善律儀を得す」と宣説す。何が故に惡律儀を得せざるや。【善律儀は師に従つて受くるを以て、緣強きを以ての故に、所以に

【三八】諸業義第十一段に八種類の義を明す。相狀を明す中、先づ見聞等四種の心の異りを明す。

之を得ず。悪は是の如くならず。所以に得せず。趣別是の如し。形別は如何。『毘曇』の如きに依らば、男女の二形は惡律儀を得ず。餘は皆得せず。成實法の中には、不能男等も亦皆之を得ず。不善律儀、之を略して云ふこと隨り。

八種類の義

八種類の義とは、謂ゆる、見聞覺知にして説き、不見不聞不覺知にして説く。『相狀は如何。』今先づ其見聞覺知の四種の心の異りを明し、後に見等の發語の差別を明す。見聞覺知は分別に三有り。一には根に隨つて分別す。『毘曇』に説くが如し、「眼識は隨つて見を生じ、耳識は隨つて聞を生じ、鼻舌及び身は塵到つて方に知る。合して名けて覺と爲し、意識を知と名く」と。二には境に約して分別す。『成實』に説くが如し、「六識の心理の境界を得る、之を名けて見と爲す」と。故に論に説いて言はく、「見は現信に名く」と。不現の境界は教に藉つて知る、之を説いて聞と爲す。故に論に説いて言はく、「聞は賢聖の語を信するに名く」と。彼不見不聞の境界に於ては、前の見聞に依つて譬度して知る者を、説いて以て知と爲す。故に論に説いて言はく、「知とは比知なり」と。前の三心の後に重ねて分別する心は、之を説いて覺と爲す。云何が分別する。『先に見に因り已つて、後に重ねて思惟して見想を起し、或は前の見を忘れて不見の想を起す。此は則ち是れ其見後の覺なり。聞知して後の覺は、類して亦知るべし。然るに此覺心は、直に見聞及び知の三心従り後に起る

【次に等】二に見聞等の發語の不同を明す。

に非ず。蓋し亦不見、不聞、不知従り、後に生ず。先の不見の如きは、後に不見を忘れて見想を生ず。此は則ち是れ其不見の後の覺なり。不聞、不知の覺を生ずるも、例して、然り。此は是れ第二の境に約しての分別なり。三には四心に就いて義に隨つて分別す。識心を見と名く。現境を得るが故に。想心を聞と名く。境は現ぜざるが故に。又復想心は假名を知るが故に、説いて聞と爲す。受心を覺と名く。違順を覺するが故に。行心を知と名く。強ひて分別するが故に。四心是の如し。次に見等の發語の不同を明す。要略すれば唯八なり。廣すれば則ち衆多なり。『廣相は如何。』若し『毘曇』の所説に依らば、見等の發語の不同に三十二有り。十六は正語、十六は邪語なり。是故に通じて、合して三十二有り。十六の正語とは、心境俱實に其八語有り。境虚心實に復八語有り。故に十六有り。心境實とは、人有つて實に見て亦見想を生ず。他、見不を問ふに、答へて言はく、「實に見る」と。聞覺知等も亦復是の如し。即ち以て四と爲す。有は實に見ざるに不見の想を生ず。他、見不を問ふに、答へて言はく、「見ず」と。聞覺知等も亦復是の如し。復以て四と爲し、前に通じて即ち八種の實と爲すなり。境虚心實の八種語とは、有は實に見ざるに、後に不見を忘れて便ち見想を生ず。他、見不を問ふに、答へて言はく、「實に見る」と。其境虚なりと雖も、心實なるを以ての故に、亦實語と名く。聞覺知等も類して亦同く然り。即ち以て四と爲す。人有つて實に見て、後に此見を忘れて不見の想を生ず。他、見不を問ふに、答へて言はく、「見ず」と。事に稱はずと雖も、心實なるを以ての故に、亦實語と名く。聞覺知等も類し

【成實論】

第九。

て亦同く然り。復以て四と爲し、前に通じて八と爲す。此前の十六は是れ其正語なり。邪語の中に就いて、心境並虚に其八語有り。境實心虚に復八語有り。是故に通じて、合して十六語有り。境心並虚の八種の語とは、人有つて實に見、還つて見想を生ず。他、見不を問ふに、答へて言はく、「見ず」と。聞覺知等も類して亦同く然り。即ち以て四と爲す。有は實に見ざるに、答へて言はく、「見ず」と。聞覺知等も類して亦復是の如し。復以て四と爲し、前に通じて八と爲す。境實心虚の八種の語とは、人有つて實に見て、後に此見を忘れて不見の想を生ず。他、見不を問ふに、答へて言はく、「實に見る」と。前の事に當ると雖も、心虚なるを以ての故に、亦妄語と名く。聞覺知等も類して亦同く然り。即ち以て四と爲す。有は實に見ざるに、後に不見を忘れて便ち見想を生ず。他、見不を問ふに、答へて言はく、「見ず」と。前の事に當ると雖も、心虚なるを以ての故に、亦妄語と名く。聞覺知等も亦復是の如し。復以て四と爲し、前に通じて八と爲す。上の八種に并せて、合して十六と爲し、彼「成實論」に明す所の見等の發語の差別は、人釋不同なり。有人釋して言はく、「見聞及び知の此三は、是れ本各別に發語す。覺とは、是れ前の三種の後に重ねて分別する心にして、別の所知無し。別に發語せず」と。若し此義を存すれば、所發に但二十四語有り。見の中に八有り。四は正にして、四は邪なり。聞知も亦然り。是故に通じて、合して二十四有り。中に於て、具に辨すること前と異らず。「成實」を驗求するに、覺も亦發語す。「云何が知ることを得る。」「彼「成實」八語品の中の如き、見發語の差別

を明し已竟つて、聞覺知等も亦復是の如しとす。論の中既に聞覺知等を以て見心に類同す。明かに知んぬ、覺心も亦別に發語することを。若し此義を存すれば、所發も亦三十二語有り。上と相似せり。問うて曰はく、「覺心云何が發語する。」人有つて先より來會て覺心を起し、亦覺想を生ず。他覺不を問ふに、答へて言はく、「實に覺す」と。此は是れ初句なり。人有つて先より來覺心を起さず。不覺の想を生ず。他、覺不を問ふに、答へて言はく、「覺せず」と。此は是れ兩句なり。人有つて先より來會て覺心を起し、後に覺心を忘れて不覺の想を生ず。他、覺不を問ふに、答へて言はく、「覺せず」と。前の覺に違すと雖も、已想に違せず。猶實語と名く。此は是れ三句なり。人有つて先より來覺心を起さず。後に不覺を忘れて便ち覺想を生ず。他、覺不を問ふに、答へて言はく、「實に覺す」と。想に稱ふを以ての故に、亦實語と名く。此四は正語にして、後の四は邪語なり。上に翻じて知るべし。八種語の義略して辨ずることは是の如し。

九業の義に二門分別あり。名を列して辨釋す一、三性の分別二、趣に就いての分別三。

第一門の中に、名を列して辨釋す。九業の義は「成實論」に出づ。名字は是れ何ぞ。彼論に説くが如し。欲界繫の業に其三種有り。一には作業、二には無作業、三には非作非無作業なり。色界も亦爾り。即ち以て六と爲す。無色に二有り。一には無作業、二には非作非無作業なり。前に通じて八と爲す。及び無漏業を前に通じて九と爲す。作業と言ふは、謂

【九】 諸義第十
二段に九業の義を
明す中、三門の分
別あり、先づ第一
に列名辨釋。
【成實論】 同第九

はく、身口業なり。無作業とは、謂ゆる、身口の無作業なり。無作の差別汎く釋するに九有り。一には形俱の無作、謂ゆる、五戒、出家戒等なり。二には心俱の無作、謂ゆる、禪戒、無漏戒等なり。三には要期の無作、謂はく、八戒等なり。乃至一切の善惡の諸業皆要期有るなり。相狀は如何。世人の如きは要期の心を起し、我某の時に齊くして常に此業を爲さん。要期する所に隨つて、分齊已來無作常に生ず。期を過ぐれば則ち止む。故に要期と曰ふ。四には怖望の無作、人有つて言ふが如し。我今日より常に此業を爲さん。期限を作らず。自ら怖心に從つて未だ息まざるより已來、無作常に生ず。心息れば便ち止む。故に怖望と曰ふ。五には作俱の無作、人の善惡業を造作する時の如し。即ち善惡有つて、無作隨つて生ず。六には從用の無作、人の橋梁等の事を造作するが如し。人の受用するに隨つて、無作隨つて生ず。名けて從用と爲す。七には事在の無作、人の塔廟等の事を造作するが如し。未だ壞せざる已來、常に善有つて生ず。名けて事在と爲す。八には異縁の無作、人の手書して口業を成するが如し。是の如く一切なり。九には助縁の無作、人の他に教へて自ら罪福を得るが如し。此れ前の九種の身口の無作なり。成實の如きに依らば更に一種有り。心法の無作なり。唯心に從つて生ず。「毘曇」には之無し。此無作の中に心俱、道共の無作を除却して、餘は皆無作業と名くるなり。言ふ所の非作非無作とは、謂ゆる意業なり。思は是れ意業なり。向前の身口の作業に同じからず。故に非作と名く。身口の無作の業に同じからざるを、非無作と名く。無漏業とは、謂ゆる、無漏の身口意業なり。

【四】以下、第二に三性に就いて九業の相を分別す。

【三】第三に趣に就いて論ず。

道共無作は是れ身口業にして、無漏の思心は是れ共意業なり。問うて曰はく、『無色は何の義を以ての故に其作業無きや。』身口に業を造作すること無きを以ての故に。此一門。

次に三性に就いて其相を分別す。三性と言ふは、謂ゆる、善、惡、無記の業なり。欲界の作業は、其三性に通ず。色界の作業は、唯善、無記にして不善に通ぜず。若し欲界の惡業を寄起すと言はば、不善有ることを得。毘曇法の中には、悉く寄起無し。界地斷の故に、欲界の無作は、唯善と惡にして無記に通ぜず。無記は羸劣にして、無作の業を發生すること能はず。故に色界の無作は、其れ唯善業なり。若し下界の惡業を寄起すと言はば、不善有ることを得。無色の無作は色界と同じ。欲界の非作非無作とは、三性に該通す。色界の非作非無作とは、當界を以て論ずれば、唯善、無記なり。若し欲界の惡業を寄起すと言はば、不善有ることを得。無色の非作非無作とは、色界と同じ。無漏業とは、局つて唯善に在り。此二門。竟る。

次に、趣に就いて論ず。趣は、謂はく、五趣なり。若し毘曇、成實法の中に依らば、人天の二趣は具に九業を起し、餘の三趣は唯欲界の三種の業を起す。自餘の六業は皆悉く起さず。『雜阿含』天品の中に依らば、鬼神母有り。富那婆藪と名く。佛、爲に說法して聖道に入ることを得。案ずるに彼論の如きは、鬼道も亦無漏の業を起すことを得。方等經の中も亦彼説に同じ。然るに彼既に能く無漏業を起す。明かに知んぬ、亦能く上界の業を起すことを。無漏法は禪に依つて生ずるを以ての故に。九業是の如し。

【四】諸業義第十
 三段に十不善業の
 義を明す中に、七
 門の分別あり、第
 一に釋名。

【成實】同論第九
 十不善業の品。

十不善業の義に七門分別あり。
 名を釋す一。體を辨ず二。業起の次第三。料簡の寬
 狹四。作無作五。三毒の分別六。界趣の分別七。

第一に、名を釋す。十不善業とは、謂ゆる、殺生乃至邪見なり。多生相續するを、名けて衆生と曰ふ。相續を隔絶する、之を目けて殺と爲す。他の資財に於て、非理に侵奪するが故に、名けて盜と爲す。姦行體に違するを、稱して邪淫と曰ふ。此三は身業なり。問うて曰はく、「一切の打縛等の事も亦、是れ身業なり。何が故に説かざる。」彼輕なるを以ての故に、所以に論ぜず。又打縛等は、是れ殺の眷屬にして、殺業を助成す。但正業を擧ぐれば、助も亦之に隨ふ。是故に論ぜず。又十業道は、唯根本を論ず。彼は是れ方便なり。所以に説かず。言はく、實に當らざるが故に、稱して妄と爲し、妄に所談有るが故に、妄語と名く。言はく、彼此に乖く、之を謂つて兩と爲す。兩朋の言は舌に依つて起るが故に、兩舌と曰ふ。言辭麤鄙なる、之を目けて惡と爲す。惡は口より生ずるが故に、惡口と名く。前には兩舌と言ひ、此には惡口と言ふ。綺互の言なるのみ。邪は、言はく正しからず。其れ猶綺色のごとし。喩に従つて稱を立つるが故に、綺語と名く。此四は口業なり。瞋境に業愛す、之を目けて貪と爲す。違境に忿怒するを、説いて以て瞋と爲す。正道理に迷うて邪心に推求するが故に、邪見と曰ふ。問うて曰はく、「三根、三毒の中、皆説いて癡と爲す。今此には何が故に説いて邪見と爲すや。」成實に釋して言はく、「夫れ邪見とは、癡の中に増上なり」と。瞋思の煩惱は、必ず是れ増上なり。故に邪見と説く。此後の三種は、

是れ意業道なり。然るに此十種の起作を業と名け、能通を道と曰ふ。總相是の如し。中に於て別して論ずれば、釋に三義有り。一には思に對して以て辨ず。不善の業思は能く殺等を起すが故に、名けて業と爲し、殺等の十種は前の思を通暢するが故に、名けて業道と爲す。二には果に對して以て釋す。殺等の十種は能く來報を起すが故に、名けて業と爲し、人を通じて果に至らしむるを、稱して業道と曰ふ。三には當相に辨釋す。殺等の十種は緣の中に集起す。故に名けて業と爲す。若し業思に望むれば、思を通ずるを道と名け、若し後報に望むれば、人を通じて果に至らしむるが故に、名けて道と爲す。名義是の如し。此門竟

【釋】第二に十不善業の體性を辨ず中に三、先づ身業を明す。初に作業を辨ず。

【成實論】 第七。

次に、體性を辨ず。先に身業の中に、作、無作有ることを論ず。先づ作業を辨ず。宗別同じからざれば、所説各異れり。毘婆沙法の中には、方便の色を説いて身の作業と爲す。此れ方便の色なり。是れ具色入は眼の所行と爲す。問うて曰はく、若し此は是れ色入といはば、青黄等の二十色の中に於て、何の色の攝ぞ。』謂ゆる、高下、正不正等なり。若し『成實』に依らば、是れ假名の色、法入の所收なり。』是義云何。』色塵の上に於て、相續の中に能く損益有り。是れ身の作業なり。有人宣説すらく、『成實法の中には、身業は彼思を用て正體と爲し、身を業の具と爲すと。是義然らず。業前の方便は、思を正主と爲し、身口を具と爲す。正しく成業を論ずれば是れ則ち身業は假色を體と爲す。故に『成實論』業相品に云はく、『色法相續して餘處に生ずる時、能く損益有るを、名けて身業と爲す』と。

【次に等】次に無作を辨ず。
【次に等】二に口業に就いて。

【次に等】三に意業に就いて。

【成實】同論第七

【高】第三に業起次第の義を明す。中に二、一には業起の次第の相を明す。

思は是なりと言はず。明かに知んぬ、思を用て正體と爲さざることを。色法相續して、後に起つて前に異なるを、餘處生と名く。次に無作を辨ず。『毘曇』の如きに依らば、亦是れ色性法入の所收なり。若し『成實』に依らば、非色心の性、法入の所攝なり。次に口業を論ず。中に於て、亦作無作の別有り。先づ作業を辨ず。『毘曇』の如きに依らば、聲入を體と爲し、耳の所行と爲す。若し『成實』に依らば、是れ假名の聲、法入の所收なり。實聲の上に於て、前後相續して能く損益有るは、是れ口の作業なり。次に無作を論ずれば、身業と同じ。次に意業を論ず。『毘曇』の如きに依らば意は但作有つて無作業無し。心法の中には三性並べざるを以て、善の時には惡無く、惡の時には善無し。故に無作無し。故に論に説いて言はく、「三種を以ての故に、意に無作無し」と。作業の中に就いて、思を正主と爲し、餘の心心法相續を業と名く。若し『成實』に依らば、作無作に通ず。思を作業と爲す。此作の邊に隨つて無作の法生ずるを無作業と名く。此無作業も亦非色心なり。業性は是の如し。此二門

次に、業起次第の義を明す。中に於て二有り。一には業起の次第の相を明し、二には業道通局の義を明す。次第と言ふは、業起の次第に乃ち四重有り。第一に生づ三根の煩惱を起し、第二次に不善業思を起し、第三次に三道の煩惱を起し、第四次に身口の七業を起す。殺生せんと欲するが如し。或は先づ貪を起し、或は瞋癡を起す。次に思心をして命を斷せんと思欲す。此思に従つて後に、次に重貪或は重瞋癡を起して前思を通轉し、然る後に

【通局と言ふは等】
二に業道通局の義を明す。

重ねて威儀の心を起し、身手を發動して彼命を隔斷す。殺の如く既に然り。盜等も亦爾り。次第是の如し。通局と言ふは、業道相對して四句に之を辨す。一には業にして道に非ず。謂ゆる、思心籌慮造作す。故に名けて業と爲し、前に所通無きが故に、道と名けず。二には道にして業に非ず。謂ゆる、思後の貪癡邪見は前思を通暢するが故に、名けて道と爲し、而も作の性に非ざるが故に、業と名けず。三には亦業亦道なり。謂はく、身口の七業縁の中に起作するが故に、稱して業と爲し、前の思を通暢するが故に、名けて道と爲す。四には業に非ず道に非ず。謂ゆる、思前の三根の煩惱の體は起作に非ず。思等に同じからざるが故に、業と名けず。前は所通無きが故に道と名けず。然るに此四種は、若し來果に望むれば、俱に業と稱することを得、齊く道と名くることを得。能く來果を作すが故に、通じて業と名け、能く通じて果に至るが故に、通じて道と名く。問うて曰はく、「思前の三根の中に、思業有りや不や。」若し「毘曇」に依らば、思は是れ通數にして一切處に有り。故に三根の中にも亦思業有り。但諸の心法は時に隨つて名を受くるが故に、隱して論ぜず。若し「成實」に依らば、心の起るに先後あり。三根の中には、思有ることを得ず。」問うて曰はく、「思の時、貪等有りや不や。」若し「毘曇」に依らば、不善心の邊に常に煩惱有るが故に、思心の邊にも亦貪等有り。亦心法は時に隨つて名を受くるを以て、所以に彰さず。若し「成實」に依らば、別の思數無し。愛分の願を説いて、名けて思と爲す。是思業の外に、更に別體の貪等の得べき無し。若し思心に就いて、義に隨つて有と説く。理も亦傷

【曇無德】小乘二十部の中、法藏部のこと。

【四五】以下、第四に其寛狭を辨す。

【四六】以下、第五に有作無作の義を明す。

ること無し。』問うて曰はく、『思の後の三道の中に、思業有りや不や。』是義は前の三根と相似せり。』問うて曰はく、『正しく身口業を起す時、思心及び三道有ることを得るや不や。』若し『毘曇』に依らば、皆具に之有り。義を彰すに隱顯あり。所以に説かず。『曇無德』に依らば、爾時、但身口を運動する惡威儀の心有り。是故に一切の不善業の中に、皆非威儀突吉羅罪有り。此三門（四五）寛狭を辨す。中に於て、其十不善業を以て彼三邪、七惡律儀に對し、以て寛狭を

明す。此三門の中、身口意等の三種の邪行は一向に是れ寛なり。四義を具するが故に。『何者か四義なる。』一には身口意を具し、二には根本及び方便に通じ、三には輕重に通じ、四には作、無作に通ず。此四義を具す。是故に最も寛なり。十不善業を七律儀に望むれば、互に寛狭有り。十不善業は三は寛、一は狭なり。三寛と言ふは、一には三業に通じ、二には輕重に通じ、三には作無作に通ず。一狭と言ふは、唯根本に在つて方便に通せず。七惡律儀は三は狭、一は寛なり。三狭と言ふは、前に翻じて知るべし。一寛と言ふは、其根本及び方便に通ず。根本と言ふは、謂はく屠殺等なり。方便と言ふは、謂はく蓄養等なり。此四門（四六）次に、有作無作の義を辨す。中に於て、先づ根本業道に就いて作無作を明す。彼身口七業の中に就いて、邪淫の一種は一向に作と無作とを具足す。究竟じて業を成ずることは、要す自身に在り。是故に作有り。作に隨つて即ち無作の罪生ずること有り。故に無作有り。自餘の業道は無作にして、是れ定なり。作業は不定なり。無作の業は、若し身に自ら作り、

【四七】以下、第六に三毒に對して十不善業を分別す。

【四八】以下、第七に界趣に就いて業道を分別す。

若は他に教へて作らしむ。皆悉く隨つて生ずるが故に、稱して定と爲す。若し作業を論ずれば、自作には則ち有り、教他には則ち無し。故に不定と曰ふ。根本是の如し。次に方便に就いて作無作を明す。當に知るべし。一切の前後の方便は作業にして、是れ定なり。無作は不定なり。云何が不定なる。『重心に作す者は則ち無作有り、輕心に作す者は則ち無作無し。故に不定と曰ふ。作無作有り。略して辨ずることは是の如し。此五門。』

次に、三毒に對して諸業を分別す。『毘曇』の如きに依らば、一切の業道は皆三毒より起る。成ずれば則ち不定なり。殺生、惡口及び瞋業道は瞋心の所成にして、盜、姪及び貪は貪欲をもて究竟す。邪見業道は唯癡心をもて成ず。餘の三業道は三事を具して成ず。若し『成實』に依らば、邪姪の一種は三事より起る。唯貪欲の成なり。自餘の業道は皆三事より起り、三事を具して成ず。宗別各異り。以て會通し難し。此六門。』

次に、界趣に就いて業道を分別す。界は、謂はく、三界なり。『毘曇』の如きに依らば、十不善業は欲界に繫屬す。唯欲界に起す。若し『成實』に依らば、欲界に繫屬す。起は則ち不定なり。殺、盜、邪姪、惡口、兩舌は唯欲界に起す。妄言、綺語は欲界に俱に起す。梵天王の如き、自ら言はく、「尊勝れて能く諸梵をして老死の邊を盡さしむ」と。即ち是れ妄語なり。此れ法に應ぜず。即ち是れ綺語なり。貪及び邪見は三界に皆起す。彼邪不善は寄起することを得るが故に。趣は、謂はく、五趣なり。『毘曇』に説くが如し。地獄には五業道あり。瞿單越には四有り。餘方には各十有り。及び餘の惡趣と天となり。地獄の五

とは、地獄は唯惡口、綺語、貪、瞋、邪見の五業道を起す。受罪の時獄卒を惡罵するが故に惡口有り。惡口は法に違す。即ち是れ綺語なり。爾時、忿怒するは即ち是れ瞋恚なり。貪及び邪見は、成じて行ぜず。瞋單の四とは、唯綺語、貪、瞋、邪見有り。彼は欲諷有るが故に、綺語有り、貪、瞋、邪見は、成じて行ぜず。問うて曰はく、「彼方に行欲の事有り。何が故に姪業道有り」と説かざるや。」釋して言はく、「彼方に夫妻共に相配匹すること有ること無し。共に姪を行すと雖も、相凌奪すること無ければ、邪姪と名けず、是故に邪姪業道と名けず。」問うて曰はく、「瞋單に行欲の事有り。欲は貪に因つて起る。云何が説いて貪心成就して欲現行せずと言ふや。」釋して言はく、「彼方に姪を起すの貪は、其れ實に現行なり。但此貪心所起の姪は、十惡の收に非ず。能起の貪は亦不善業道の所攝に非ず。故に此を起すと雖も、貪欲業道現行すと名けず。人の夫妻共に相纏愛するが如きは、業道と名けず。彼も亦之の如し。」問うて曰はく、「若し彼起姪の貪は業道に非ずといはば、善、惡、無記の三性の中には、何の性の所收なるや。若し性は是れ善ならば、貪欲煩惱は應に善と名くべからず。若し是れ無記ならば、論に、「欲界の一切の煩惱は、身邊の見を除いて餘は悉く不善なり」と説けり。貪欲は是れ其無記なりと言はず。若し性は不善ならば、便ち是れ十惡業道の所攝なり。何んが説いて、貪欲業道は現行すと名けずと言ふことを得るや。夫妻相愛する事も亦同じく爾り。」釋して言はく、「此貪の性は是れ不善なり。性は不善なりと雖も、其過輕微なり。三毒の所收にして業道の攝に非ず。故に現起すと雖も、

貪欲業道は現行すと名けず。』問うて曰はく、『體單は既に綺語有り。綺語は必ず貪瞋癡に依つて起り、亦彼に依つて成ず。何が故に、貪等現行すと名けざる。』釋して言はく、『彼方の所有の綺語は、實に癡に依つて起る。但佛經の中には邪見を宣説して、以て業道となし、癡心を以て業道と爲すと説かず。是故に彼癡復現行すと雖も、但是れ癡毒にして、猶故に邪見現行すと名けず。推求無きが故に。良に彼方の邪見は行ぜざるを以ての故に、斷善破僧の事等無し。』問うて曰はく、『彼方に歌詠等有り。此れ法に應ぜず。即ち是れ妄語なり。何が故に妄語有りと説かざるや。』『彼には誑心無きが故に、妄語に非ず。餘方の十とは、餘の三天下に各十を具すなり。惡趣天とは、謂はく、餘の鬼畜及與び天趣なり。皆十を具す。若し『成實』に依らば、唯鬪單越は『毘曇』と同じ。自餘の三方、三惡及び天は皆十業を具す。彼地獄の中の重處には少しと雖も、輕處には具に有り。』十不善道之を辨ずること略して爾り。

十四垢業の義

十四垢業は『長阿含淨生經』の中に出づ。『何者か十四なる。』『彼中に説くが如く、四結業有り。即ち以て四と爲す。四處に依つて諸の惡行を作す。復以て四と爲す。前に通じて八と爲す。六損財業を、前に通じて十四なり。四結業とは、謂はく、殺と盜と姪と及び妄語となり。問うて曰はく、『何が故に兩舌、惡口、綺語を説かざる。』『在家の者は離るる

【高九】 諸業義第十四段に十四垢業の義を明す。

こと能はざるを以ての故に、所以に説かず。』四處と言ふは、謂ゆる、愛、恚、悔、癡の處
 なり。此四種は起業の所依なり。故に四處と云ふ。六損財とは、一には是れ耽酒、二には
 是れ博戲、三には是れ放蕩、四には迷妓樂、五には悪友相得、六には是れ懈惰なり。飲酒
 の過に其六失有り。一には財を失し、二には病を生じ、三には鬪諍し、四には惡名流布し、
 五には瞋怒暴生し、六には智慧の目損ふ。博戲の過にも亦六失有り。一には財物耗減し、
 二には勝と雖も怨を生じ、三には智者嘖せられ、四には人敬信せず、五には人の爲に疎外
 せられ、六には盜竊の心を生ず。放蕩の過にも亦六失有り。一には自ら身を護らず。二に
 は財貨を護らず。三には子孫を護らず。四には常に自ら驚懼す。五には諸の苦惡の法常
 に自ら身を纏す。六には意んで虚妄を生ず。妓樂に迷ふにも亦六失有り。一には歌を求め、
 二には舞を求め、三には琴瑟を求め、四には波内早、五には多羅繫、六には首呵那なり。
 此後の三門は胡語にして翻せず。是れ何なるかを知らず。悪友相得にも亦六失有り。一に
 は方便して欺誑し、二には屏處を好意し、三には他家の人を誘ひ、四には他の物を圖謀し、
 五には財利自に向ひ、六には好んで他の過を發す。懈惰の過にも亦六失有り。一には富樂
 にして肯じて作勞せず。二には貧窮にして肯じて勤修せず。三には寒の時に肯じて勤修せ
 ず。四には熱の時に肯じて勤修せず。五には時早に肯じて勤修せず。六には時晚に肯じて
 勤修せず。十四垢の業之を辨すること闕なり。

【五】 諸業義第十
五段に十六惡律義
を明す。

十六惡律儀の義

十六惡律儀は『涅槃經』に出づ。無作の惡常に生じて相續す。説いて律儀と爲す。律儀は不同なり。十六を宣説す。一には利の爲に羊を養ひ、肥え已つて轉た賣る。二には利の爲の故に、賣買し已つて屠殺す。三には利の爲に猪を養ひ、肥え已つて轉賣す。四には利の爲の故に、賣買し已つて屠殺す。五には利の爲に牛を養ひ、肥え已つて轉賣す。六には利の爲の故に、賣買し已つて屠殺す。七には利の爲に鶏を養ひ、肥え已つて轉賣す。八には利の爲の故に、賣買し已つて屠殺す。九には魚を釣り、十には鳥を捕ふ。十一には獵師。十二には劫盜。十三には魁膾なり。十四には兩舌して専ら破壞を行す。十五には獄卒にして、十六には龍を呪す。『毘曇論』の中に、十二を宣説す。一には屠羊、二には養猪、三には養雞、四には捕魚、五には捕鳥、六には獵師、七には作賊、八には魁膾、九には守獄、十には呪龍なり。此れ前と同じ。十一には屠犬、十二には司獵なり。此二は前に異なり。屠羊と言ふは、『毘曇』に説く如し。殺害の心を以て、若は賣り若は殺すを悉く屠羊と名け、十六の中の第一第二に攝す。養猪と言ふは、亦殺の心を以て、若は賣り若は殺すを悉く養猪と名け、十六の中の第三第四に攝す。養雞も亦爾り。十六の中の第七第八に攝す。捕魚と言ふは魚を殺して自活す。捕鳥獵師も亦復是の如し。作賊と言ふは常に劫盜を行す。魁膾と言ふは常に人を殺すことを主つて、以て自ら存活す。守獄と言ふは獄を守つて自活す。呪龍と言ふは謂はく、龍蛇を呪して、戲樂して自活す。屠犬と言ふは謂はく、

【毘曇論】 雜心論
第三十。

旃陀羅犬を屠して自活す。司獵と言ふは謂ゆる、王家の獵を主る者はなり。然るに屠羊に就かば、心を起して餘の衆生を殺さずと雖も、而も一切の諸の衆生の所に於て惡律儀を得ず。一切の衆生悉く皆羊と作る理有るべし。故に餘は皆兩り。問うて曰はく、「此等は七律儀の中の幾の律儀の攝ぞ。」釋して言はく、「若し『涅槃』の所説に依らば、殺、盜、兩舌の三律儀の攝なり。此三種は損惱の處多きを以ての故に、偏に之を説く。『毘奈耶』の所説は、唯殺、盜の攝なり。作賊は是れ盜なり。餘は皆是れ殺なり。十六律儀之を辨ずることは是の如し。

飲酒三十五失の義。

飲酒の過に三十五失有り。「大智論」に出づ。一には現世に財物空竭す。二には衆病の門なり。三には鬪諍の本にして、多く忿訟を致す。四には裸露恥づること無し。五には醜名惡聲にして、人恭敬せず。六には智慧を覆没す。七には應に物を得べき所にして、而も之を得ず。已に得るの物も、而も復散失す。八には私匿の事を他に向つて論説す。九には種種の事業を廢して成ぜず。十には憂愁の本なり。十一には身力減少す。十二には形色損壞す。十三には父を敬ふことを知らず。十四には母を敬ふことを知らず。十五には伯叔尊長を敬せず。十六には沙門を敬せず。十七には婆羅門を敬せず。十八には佛を敬すること知らず。十九には法を敬することを知らず。二十には僧を敬することを知らず。二十一

【五二】 諸業義第十五
六段に飲酒三十五失の義を明す。
【大智論】 同第十
三。

には悪人に親附す。二十二には善人を疎遠す。二十三には破戒の人と作る。其れ飲酒は戒法に違するを以ての故に。二十四には心に慚愧無し。二十五には根門を守らず。二十六には色を縦にして放逸す。二十七には人に憎惡せられ、之を見ることを意はず。二十八には貴重親屬及び諸の知識に、共に摺棄せらる。二十九には不善法を行す。其れ飲酒に由つて多く罪を生ずるが故に。三十には善法を棄捨す。三十一には明人智士の信用せざる所なり。三十二には涅槃を遠離す。三十三には多く世世狂癡の因縁を種う。三十四には身壞命終して諸の惡道に墮す。三十五には若し人と爲ることを得ば、所生の處に隨つて常に當に愚騷なるべし。酒過是の如し。應當に之を斷すべし。

大乗義章 卷第八

遠法師撰す

染法聚苦報の義に十四門有り。一には二種生死の義。二には四生の義。三には四有の義。四には七識住の義。五には九衆生居の義。六には五陰の義。七には六道の義。八には十八界の義。九には八難の義。十には二十五有の義。十一には十二入の義。十二には十八界の義。十三には二十五有の義。十四には四十居止の義。

二種生死の義に六門分別あり。名を釋す。一。相を辨ず二位に就いての分別三。界に就いての分別四。因縁の分別五。治斷の分別六。

第一に、名を釋す。二種の生死は『勝鬘經』に出づ。『名字は是れ何ん。』一には分段

生死、二には變易生死なり。分段と言ふは、六道の果報三世に分異するを名けて分段と爲す。分段の法の始起を生と名け、終謝を死と稱す。變易と言ふは汎く釋するに三有り。一

には微細生滅の無常念念に遷異す。前後變易を、名けて變易と爲す。變易是れ死なれば、變易死と名く。故に『地持』の中に、生滅の壞苦を變易の苦と名く。此は凡身に通ず。二

には緣照無漏所得の法身は神化無礙にして、能く變じ能く易するが故に、變易と名く。變易は是れ死なれば、變易死と名く。此は大小を該ぬ。三には眞諦の法身は顯自在にして、能く變じ能く易するが故に變易と言ふ。變易は死に非ざれども、但此法身未だ生滅を出でず。猶無常死法の爲に隨せられ、變易身の上に其生死有れば、變易死と名く。此は唯大に在り。三義有りと雖も、『勝鬘』に説く所は、第二を宗と爲す。下の諸門の中に、此言を總

【二】染法聚第三に苦報の義を明す中十四段あり、以下第一段に二種生死の義を明し六門の分別あり、第一に釋名。

【二】第二に其體相を辨ず。先づ分段生死に就いて。

【變易の等】次に變易生死に就いて

【論】大論第九十

かんののみ。分段生死を「勝鬘」には亦有爲生死と名け、變易生死を「勝鬘」には亦無爲生死と名く。蓋し乃ち人に從つて、以て名を別つなり。凡夫は多く有漏の諸業を起す。集を建て果を有すれば、名けて有爲と曰ふ。有爲の衆生の受くる所の生死なれば、有爲生死と名く。無爲生死は前に翻じて稱を立つ。聖人は有漏の諸業を起して分段の報を受けず。名けて無爲と曰ふ。無爲の聖人の所有の生死を、無爲生死と名く。名義是の如し。此一門(二〇〇)次に、體相を辨ず。分段生死は開合不定なり。之を總すれば唯一なり。或は分つて二と爲す。一には善、二には惡なり。人天を善と名け、三塗を惡と名く。或は分つて三と爲す。謂はく、三界の中の所有の生死なり。或は分つて四と爲す。謂ゆる、胎生と卵生と濕生と及び化生となり。此は後に釋するが如し。或は分つて五と爲す。謂はく、五道の中の受生の差別なり。或は分つて六と爲す。六道の報の中の生死の不同なり。前の五の上に於て阿修羅を加へて、名けて六道と爲す。類に隨つて別して分てば、數に無量有り。分段是の如し。變易の中にも亦開合不定なり。之を總すれば唯一なり。或は分つて二と爲す。一には事識の中の變易生死、二には妄識の中の變易生死なり。六識の中に於て、緣照の無漏の受くる所の報を、事識の中の變易生死と名け、第七識の中の緣照の無漏所得の果を、妄識の中の變易生死と名く。彼事識の中の變易生死は、因果別に在り。此世に業を造り、餘世に報を得。論の中に説くが如し。妙淨土有り三界を出過す。是れ阿羅漢にして、當に彼中に生ずべし。是の如き等なり。彼妄識の中の變易生死に、麤有り、細有り。地前を麤と名

【二輪の煩惱】見
惑と修惑となり。

六。【涅槃經】南本第

【涅槃】第二十一

け、地上を細と名く。中に於て、塵とは因果の世別なり。前と相似す。微細の者は前念を因と爲して、後念の果現す。是中微細にして、復世別を以て之を論すべからず。念念の中に細分して、異世にも亦得ること傷ふこと無し。或は分つて三と爲す。謂はく、三乘の人の變易生死なり。或は分つて四と爲す。『勝鬘』に説くが如し。一には阿羅漢、二には辟支佛、三には大力菩薩なり。地前の菩薩は二輪の煩惱全く未だ斷除せざれども、而も彼煩惱の爲に牽かれず。又三界に於て、生を受くること自在なり。故に大力と名く。問うて曰はく『地前の大力菩薩を『涅槃經』の中に説いて、凡夫は煩惱性を具すると爲す。『勝鬘』には、何が故に説いて變易と爲すや。釋して言はく、『涅槃』は初地の上の出世の聖人に對して、名けて凡夫と爲し、未だ地上二輪の惑を斷ぜざれば、具煩惱と名く。若し聲聞、辟支佛等に對すれば、此は是れ大聖、二障清淨なり。何爲れぞ説いて變易と爲すことを得ざらん。故に『涅槃』の中に「須陀洹は八萬劫に到る。乃至辟支は十千劫に到る」と説く。謂はく、性地の阿耨菩提に到るなり。此れ既に大聖なり。變易何ぞ疑はん。四には意生身なり。初地已上の受生は意の如くなれば、意生身と名く。意に何の義か有つて、生は意の如くなるや。』意に三義有り。一には能速疾、二には能遍到、三には能無礙なり。初地已上の身を受くること是の如し。或は分つて六と爲す。『勝鬘』に説くが如し。謂はく、此三地及び彼三種の意生身等なり。此三地とは、謂はく、此地前の羅漢、辟支、大力菩薩の三乘地なり。彼三種とは、謂はく、初地の上の三種の生なり。三種の意生とは『楞伽』に説

【三】第三に位に就いて明す。先づ總相の麤分。

くが如し。一には三昧意生身、謂はく、禿地より乃ち五地に至つて禪度増上す。故に三昧意生身と名くるなり。二には覺法自性性意生身、六、七、八地に慧行成就して、法の有性を知り法の無性を知るを、名けて覺法自性性身と爲す。前の自性とは、是れ法の有性なり。有法の中の色は礙の性と爲り、心は知の性と爲る。是の如きの一切を、名けて自性と爲す。復性と云ふは是れ法の無性なり。無は是れ一切の法の實性なり。故に名けて性と爲す。此有無の性は、皆能善く照すが故に、名けて覺と爲す。三には種類俱生無作行意生身、謂はく、九地の上は無功用の行任運に轉起するを、種類俱生無作行身と名く。此三と彼三とは九地已上に行報純熟す。前の七地の中に修する所の種類彼地の中に至り、報熟して現前するを、種類俱生と名く。法流水の中に任運に上昇して功用を捨離す。此三と彼三とを合して、以て六と爲す。別すれば則ち無量なり。變易是の始し。此二門

(三)次に位に就いて論ず。總相麤分せば、分段死とは、是れ虛偽業生、變易死とは、謂はく、阿羅漢、辟支伽、大力菩薩、意生身等なり。小乗の中の凡夫學人、大乘の中の外凡菩薩は、皆三界に於て妄愛受生す。名けて虚偽と爲す。小乗の人の中の羅漢、辟支、大乘の人の中の種性已上は、無漏業を以て正智受生す。故に虚偽に非ず。虚偽の所受を分段死と名け、非虚偽の受を變易死と名く。問うて曰はく、小乗の須陀已上、大乘の人の中の十信以上、亦五分法身の功德有り。何が故に、名けて變易死と爲さずして、乃ち分段と名くる。一釋して言はく、是れ人は三界の中に於て有漏の結業を受けて生じ、未だ盡きざるが故に分段と

【中に於て等】次に總相の中の細分を明す。先づ分段に就いて。

【地持】 第八。

【花嚴】 舊經第六
【賢首】 十信滿の位。

【地經】 第二。
【地持】 第八。
【地持】 第七。
【地持】 第二。

名く。無漏の五分法身有り」と雖も、是れ因の法身にして未だ果報を得ず。是故に變易死と名くることを得ず。一、學分是の如し。中に於て細を謂へば、分段に二有り。一には惡道、二には善道なり。三塗を惡と名け、人天を善と名く。小乘法の中には、惡道の分段は見道の時盡す。故に須陀洹を名けて無債と爲す。三塗の債に舐れて著す。復通じて論ずれば、増上忍の時、三惡道の報は皆非數減なり。善道の分段は無學の時盡す。大乘の人の中には、惡道の分段の盡す處に三有り。一には惡業を因と爲し、四住を緣と爲して惡道の報を受け、十信の時盡す。身或は心慧等く行を修め、惡業を轉ずるを以ての故に。云はく「地持」の中に説いて善趣と爲す。又「花嚴」の中に宣説すらく「賢首は能く現に作佛す」と。明かに知んぬ、亦能く惡趣の報を離することを。二には惡業を因と爲し、四住を緣と爲す。緣力微薄にして生を牽くこと能はず。少悲願を加へて惡趣の身を受け、種性の時盡す。故に「勝鬘」の中に説かく「種性の上の大力菩薩は分段死を離る」と。三には惡業を因と爲し、惡願を緣と爲す。四住の殘氣は隨逐佐助し、惡趣の生を受けて初地の時の時盡す。地前に未だ斷ぜず、初地に盡すが故に。「地經」に宣説すらく「初地の菩薩は惡道の畏を離る」と。「地持」に宣説すらく「解行の菩薩は惡趣の報を轉じて歡喜地に入る」と。又彼隨助の四住の煩惱は初地に盡すが故に。「地持」に宣説すらく「増上及び中の惡趣の煩惱は初地に出過す」と。其れ地前に未だ斷滅せざるを以ての故に。「地持」に宣説すらく「種性解行は或は惡道に墮す」と。惡道既に是の如し。善道の分段にも亦三階有り。一には善業を因と爲

【法華論】 同論類 勸品。

【地持】 第七。

【地持】 第七。

【涅槃經】 第六。

【大品經】 大智論 第五十。

し、四住を縁と爲して人天の報を受け、種性の時盡す。二には善業を因と爲し、四住を縁と爲す、緣力微薄にして生を牽くこと能はず。少悲願を加へて人天の身を受け、初地の時盡す。地前に未だ斷ぜず、初地に盡すが故に。『楞伽』に宣説すらく、「初地の菩薩は二十五昧を得て二十五有を破す」と。前には未だ斷ぜざるが故に。『法華論』の中に宣説すらく、「地前に猶三界の分段生死有り」と。故に彼論に言はく、「言ふ所の八生乃至一生に菩提を得るとは、謂はく、初地の證智なり。言ふ所の八生より一生に至るとは、是れ三界の分段の生なり」と。三には善業を因と爲し、悲願を縁と爲し、四住の殘習隨逐佐助して人天の生を受け、佛に至つて乃ち盡す。前より未だ斷ぜず、佛に至つて盡すが故に。經に嘆すらく、「唯佛のみ有頂の種を斷す」と。十地已還人天の受生は未だ窮盡せざるが故に。『地持』には但「解行の菩薩の惡趣は報を轉じて歡喜地に入る」と云つて、善を轉ずと言はず。又十地已還人天に生を受くる煩惱未だ盡さざるが故に。『地持』の中には唯「初地は増上の中の惡趣の煩惱を過ぐる」と説いて、善趣の煩惱を出過すと言はず。斯文證を以て、人天の殘習は十地に至ることを明す。中に於て、別して分てば、人の分段とは、八地の時盡す。前より未だ斷ぜず。八地に盡すが故に。『涅槃經』の中に宣説すらく、「八地を阿那含と爲す」と。肉身を受けざる前には未だ斷ぜざるが故に。『大品經』の中に説かく、「前七地は猶是れ肉身なり」と。天の分段とは佛に至つて乃ち盡す。前より未だ斷ぜず、佛に至つて盡すが故に。唯佛のみ一人有頂種を斷す。前には未だ斷ぜざるが故に。八地以上を阿那含と名く。

【次に等】次に變易に就いて。

【地持】第一。

阿羅漢に非ず。問うて曰はく、「地上は遍く六道に生ず。何が故に、偏に入天の中に生ずるを説いて、以て分段と爲すや。」釋して言はく、「地上には惡業盡くるが故に、惡道に生ずと雖も、但是れ應現なり。人天の善業は未だ窮盡せざるが故に、人天の中に生じて彼凡の時の微業と相應するを、分段と名くるなり。次に變易を辨ず。變易の中に、因有り、果有り。小乗の人の中には、見道以上に變易の因生じ、無學の果の後に變易の報起る。何者か是なる。」論の中に説くが如し。妙淨土有り。三界を出過す。煩惱無き者は是れ阿羅漢にして、當に彼中に生ずべし。是の如き等なり。大乘の人の中には、分齊に四有り。一には起因の處、十信已上なり。二には得果の處、種性以上なり。故に「勝鬘」の中に説かく、「種姓已上の大力菩薩を變易死と爲す」と。問うて曰はく、「法華優婆塞」に説かく、「解行の前を分段死と爲す」と。「勝鬘」には、何が故に説いて變易と爲すや。」釋して言はく、「菩薩の種性已上に五種の身有り。一には法性身、謂はく、性種性及び解行の中の清淨向等なり。「地持」に説くが如し。六入殊勝にして無始法爾なり。是の如き等なり。二には實報身、謂はく、習種性及び解行の中の前方便を得るなり。「地持」に説くが如し。若は先より來善を修して得る所なり。是の如き等なり。三には生滅變易法身、謂ゆる、緣照無漏の業果なり。四には分段身、謂はく、無始より來の有漏の業果なり。五には應化身、物に隨つて生を現するなり。此五種の身に各因緣有り。法性身とは、佛性を因と爲す。諸度を緣と爲す。實報身とは、六度を因と爲し、佛性を緣と爲す。更に餘義有り。後二種

種性の中に説くが如し。變易身とは、無漏業を因として、無明を緣と爲す。分段身とは、有漏業を因として、悲願を緣と爲す。應化身の中に、其二種有り。一には法應は法身に依つて起る。二には報應は報身に依つて現す。此二種の應は因緣各別なり。其法應を論ずれば、如來藏の中の化用三昧法門を因と爲し、悲願を緣と爲す。若し報應を論ずれば、悲願を因と爲し、化用三昧法門を緣と爲す。此五身の中、初の二は死に非ず、次の二は實死にして、後の一は應死なり。是故に實應性已上に於ては、實報身の中に變易の體有り、應化身の中に分段の體有り。『法化論』の中には、第四門に據つて、説いて分段と爲す。

『勝鬘經』の中には、第三門に據つて、説いて變易と爲す。各是一義は相乖背せず。此は是れ第二の得果の處なり。三には漸捨の處、初地已上なり。四には窮盡の處、如來地に在り。位分是の如し、此三門

【四】第四に三界に就いて論ず。

【論】大智論第九十三。

次に、界に就いて論ず。界は、謂はく、三界なり。中に於て、略して一門を以て分別す。一には相に隨つて分別す。分段生死は、是れ三界の攝なり。三界の有漏業の界なるが故に。變易生死は、三界の攝に非ず。出世の無漏業の果なるが故に。故に論に説いて言はく、「妙淨土有り。三界を出過す。是れ阿羅漢にして、當に彼中に生ずべし」と。明かに知んぬ、出世なることを。是の如き一切なり。二には性に就いて、通じて論ず。二種の生死は皆三界の攝なり。『此義云何。』『勝鬘經』の中に説くが如し。世間に二有り。一には無常壞、二には無常病なり。無常壞とは、是れ分段の三界、無常病とは、是れ變易の三界なり。分

【五】第五に因縁を辨ず。初に總相に應論ず。

【別に等】二に別に隨つて細分す。

段生死は、還つて是れ分段の三界の所收なり。變易生死は、還つて是れ變易の三界の所攝なり。問うて曰はく、一分段は三界の中に於て分齊知るべし。變易生死は、三界の中に於ては、分齊何れの處ぞ。一唯聖の知る所なり。亦變易なるべし。禪地に依つて説かば、初禪地に依つて無漏の業を發す。變易の報を受くれば、初禪に繫屬す。是の如きの一切なり。』此四門

次に、因縁を辨ず。親生を因と名け、疎助を縁と目く。總相に應論せば、分段生死は、有漏の業を因とし、四住を縁と爲す。故に『勝鬘』に云はく、「又取を縁とし有漏の業を因として、而も三有を生ずるが如し」と。取は猶愛のごとし。受生の時に於て、或は姪愛を起し、或は復花池等の愛を起して、逐つて即ち身を受くるが故に、説いて縁と爲す。三界に受生する愛の力増強なり。故に偏に之を説く。變易生死は、無漏の業を因として、無明を縁と爲す。故に『勝鬘』に云はく、「無漏の業を因とし、無明を縁と爲して阿羅漢許支佛等を生ず」と。縁に二種有り。一には前後縁、前の無明は諸法の本性平等なるを見ざるを以ての故に、後の生を求む。二には同時爲縁、無明住地は是れ七識の體なり。變易の業果は、是に依つて立つることを得るが故に説いて縁と爲す。夢の所作の皆睡心に依るが如し。總相是の如し。別に隨つて細分せば、分段生死に善有り、惡有り。惡道分段の義に附を別つ。一には凡夫の所受は惡業を因と爲し、四住を縁と爲す。二には十信の所受は惡業を因と爲し、四住は正縁にして悲願は助助なり。三には種性已上初地に至つて受くる

十。【涅槃】

南本第三

は惡業を因と爲し、悲願は正縁にして四住は隨助なり。若し惡業無ければ、苦果生ぜず。是故に彼惡業を用て因と爲す。若し悲願無ければ、則ち往いて受けず。是故に彼悲願を用て縁と爲す。故に『涅槃』に云はく、「地前の菩薩の過去の所有の微塵等の業は、願力を以ての故に、一切悉く受く」と。且く願力を説くとも、當に知るべし、亦悲力を以ての故に苦を受くと。善道分段にも亦三階有り。一には凡夫、二乘乃至大乘の十信の所受は、善業を因と爲し、四住を縁と爲す。二には種性解行の所受は善業を因と爲し、四住は正縁にして悲願は隨助なり。三には地上の所受は善業を因と爲し、悲願は正縁にして四住は隨助なり。變易に二有り。一には事識の中の變易生死、二には妄識の中の變易生死なり。事の中の變易の義に三階を別つ。一には是れ羅漢、辟支の所受は、事識の中の衆生空の觀を用て、以て正因と爲し、無明を縁と爲す。二には是れ種性解行の所受は、事識の中の法空の觀を用て、以て正因と爲し、無明を縁と爲す。三には地上の所受は、事識の中の非有非無思想の解を用て、以て正因と爲し、無明を縁と爲す。妄の中の變易にも亦三階有り。一には地前の所受は、妄識の中の一切の妄想依心の觀を用て、以て正因と爲し、無明を縁と爲す。二には地上の所受は、妄識の中の一切の妄想依眞の觀を用て、以て正因と爲し、無明を縁と爲す。三には是れ八地以上の所受は、妄識の中の唯眞無妄思想の觀を用て、以て正因と爲し、無明を縁と爲す。問うて曰はく、「唯眞無妄の觀は能く妄智をして、更に後を牽かざらしむ。云何が能く變易の與に因と作るや。」釋して言はく、「此觀は後の同類に望めて生を

【六】第六に斷處を明す、初に分段に就いて。

【成實】 同論第十

【涅槃】 南本第三十一。

牽かずと雖も、後の勝品に望めて能く生ぜざるに非ざるが故に、因と爲すことを得。此等の觀は別に、前の八識章の中に具に辨ずるが如し。前の分段死は因なるが故に、縁は新なり。是因同なるに由りて、縁に差異有り。此變易死は縁なるが故に、因は新なり。是縁同なるが爲に、因に差別有り。義に隨つて細論せば、分段の因、變易の縁は差別無きに非ず。異相分ち難し。是を以て説かず。理實に無明にして、亦分段を扶く。四住の習も亦變易を佐く。相隠れて微妙なり。故に廢して論ぜず。此五門

(六)次に、斷處を辨ず。分段の中に、五道差別して斷處不定なり。小乘法の中には、大位之を論ずること盡く無學に在り。中に於て別して分てば、三塗の分段盡くる處に三有り。一には不受の處、『成實』の如きに依らば、煖心已上は一向に受けず。彼宗の中に於て、煖心已上を名けて住分と爲す。復退して三塗の中に墮せざるが故に。故に彼『成實』に經を引いて證して言はく、「世上正見の者は、往來百千世するも終に惡道に墮せず。煖心已去を上正見と名く」と。若し『毘曇』に依らば、忍心已上は方に是れ住人なり。一向に三塗の報を受けず。『涅槃經』の中も亦此說に同じ。此に據つて之を言はば、忍心以上を方に名けて世上正見と爲すことを得。此は是れ第一の不受の處なり。二には非數滅の處、『毘曇』の如きに依らば、増上忍の時、三惡道の報は皆非數滅なり。此一生に於て、定んで其因を斷ず。報を受けざるが故に。『涅槃經』の中も亦此說に同じ。故に『涅槃』に言はく、「増上忍の時、三惡道の報は、當に知るべし、智縁に從はずして滅す」と。三には縁盡の處、見

【地持】 第八。

道の中に在り。潤惑永く斷じ、業障盡くが故に、人中の分段、邪舍已去は復更に受けず。天分段とは、羅漢、辟支永く更に受けず。大乘法の中に大位之を分てば、一切の分段盡く種性に在り。故に「勝鬘」に云はく、「一分斷死とは、是れ虚偽未生なり」と。中に於て分別せば、分段生死に其二種有り。一には定繫、業の爲に牽かれ、定んで時處に繫せらる。時とは、謂ゆる、生後の時にして、更とは、謂はく六道なり。二には不定繫、業自在を得、生自在を得て時處に繫せられず。時に繫せられざるが故に、現生後の時、意に隨つて之を受く。處に繫せられざるが故に、六道の中、意に隨つて之を受く。彼三塗の中の定繫の者は、十信已上身心慧の行を修習するが故に、漸次に斷除し、種性の時盡す。不定業とは種性已上漸次に斷除し、初地の時盡す。地持は此に據つて宣説すらく、「初地に惑趣の報を斷る」と。人天の定まる者は、種性已上に漸次に斷除し、初地の時盡す。若し復通じて論ずれば、十信已上に漸次に斷除し、初地の時盡す。「楞伽」は此に據つて宣説すらく、「初地に二十五昧を得、二十五有を破す」と。不定の者は初地以上に漸次に斷除し、佛に至つて乃ち盡す。中に於て分別せば、人の分段とは八地の時盡す。故に八地の上を阿那含と名く。更に重ねて臭身、肉身を受けず。天の分段とは佛に至つて乃ち盡す。故に佛一人有頂の種を斷じ、生死の流を度す。然るに初地の上は復人天分段有りと説くと雖も、但復聲有り。謂はく、大悲應現の身の中に於て、少しく殘氣有れども、能く分段の報を受くる者有ること無し。分段是の如し。次に變易を論ず。變易の中に、因有り、果有り。盡處は不

【次に等】 二に變易に就いて。

定なり。小乘法の中には、變易の因盡くるに二處有り。一には滅定暫滅す。那含已上なり。二には無餘永滅す。無學果の中なり。變易の果は小乘未だ滅せず。大乘法の中には、變易の因は種性に暫滅し、佛に至つて乃ち盡す。變易の果は初地に漸滅し、佛に至つて乃ち盡す。二種の生死大泥縛斷り。

四生の義に三段分別あり。相を辨ず一。通局二。電快三。

【七】 苦報義の中第二段に四生義を明す中三門の分別あり。先づ第一に辨相。

【八】 第二に五趣に就いて四生の通局を辨ず。

四生と言ふは謂はく、胎、卵、濕、化なり。胎生と言ふは今の人等の如く、精氣を稟託して報を受くる者を、名けて胎生と爲す。卵生と言ふは諸鳥等の如く、卵殼に依つて形を受くる者を、名けて卵生と爲す。濕生と言ふは今の夏日に濕生する虫等の如く、父母を假らず濕に依つて形を受くる所を名けて濕生と爲す。化生と言ふは諸天等の如く、依託する無く、無にして忽に起るを、名けて化生と曰ふ。若し依託無ければ、云何が生ずることを得る。地入論に釋するが如し。業に依るが故に生ず。生相位の如し。

次に、五趣に就いて其通局を辨ず。四生の中、化生の一趣は全く二趣及び三の少分を攝す。全く二を攝すとは、諸天地獄は一向に化生なり。三の少分とは、人、鬼及び畜の少分と有り。劫初の時の如く、人、鬼及び畜は一切化生なり。今の時は多くは無なり。故に少分と曰ふ。胎生の一趣は、人、鬼及び畜の少分之有り。餘趣は全く無し。卵、濕二生は唯人、畜に在つて、餘趣には皆無し。人の中の卵生は毘舍尼の如し。毘舍尼母其肉卵を生ず。

卵中らんちゆうには其三十二兒有り。是こゝの如ごとき等の類るいは是こゝれ卵生らんじゆうの人ひとなり。人ひとの濕生しつじゆうとは、預生よじゆう王わうの如ごとし。過去くわこに王わう有り。名なけて善住ぜんぢゆうと曰いふ。頭あたまに肉胞にくほうを生しず。十月じふぐわつ満足まんじやくして、中なかより一兒いちじを生しず。因よつつて頭生あたまじゆうと字なづく。是こゝの如ごとき等らう、此こゝは是こゝれ濕生しつじゆうの人ひとなり。畜生ちくじゆう道だうの中なかの卵らん、濕しつ知るしべし。

【九】第三に四生の寛狹を辨ず。

次に、寛狹くわんけつを辨べんず。「雜心ざつしん」に問とふが如ごとく、「生しじゆうに趣しゆを攝せつすと爲なんや、趣しゆに生しじゆうを攝せつすと爲なんや」と。論ろんに自みづから釋しやくして言いはく、「四生しじゆうは趣しゆを攝せつす。趣しゆは生しじゆうを攝せつするに非あらず」と。何なにが故ゆゑに是こゝの如ごとくなる。「一切いつせつの五趣ごしゆは四生しじゆうを出いづること無し。故ゆゑに生しじゆうは趣しゆを攝せつす。五道ごだうの中なか、陰いんは皆みな是こゝれ化生けしじゆうにして、五趣ごしゆに收こめず。是ゆゑに五趣ごしゆは四生しじゆうを攝せつせず。四生しじゆうの義ぎ略りやくして辨べんずることと是こゝの如ごとし。

【一〇】苦報義第三段に四有の義を明す中六門の分別あり、先づ第一に辨相。

四有しいうの義ぎに六門ろくもん分別ぶんべつあり。相あひまを辨べんず一いつ。時ときに就じゆいての分別ぶんべつ二に。處ちよに就じゆいての分別ぶんべつ三さん。第一だいいちに、相あひまを辨べんず。四有しいうの義ぎは「阿含經あかんきやう」に出いづ。「毘婆沙論びばしあろん」の中なかに、具ぐに廣ひろく分別ぶんべつす。生死しじゆうの果報くわくはうは、是こゝれ有うにして無むにあらず。故ゆゑに名なけて有うと爲なす。有別うべつ不同ふどうなり。一門いつもんに四を説とく。四しの名なは是こゝれ何なにん。「一いちには生有しじゆう、二にには死有しじゆう、三さんには本有ほんじゆう、四しには中有ちゆうじゆうなり。」報分ほうぶん始めて起おこるを、名なけて生有しじゆうと爲なし、命報終めいほうしゆうに謝しゃするを、名なけて死有しじゆうと爲なし、生後しじゆうご死前しじゆうぜんを、名なけて本有ほんじゆうと爲なす。死し及び中ちゆうに對たいするが故ゆゑに、説といて本もとと爲なす。兩身りやうしんの間まに受うくる所の陰いんの形かたちを、名なけて中ちゆう有うと爲なす。中ちゆう有うの相あひま隱いんれたり。九句くくもて之これを辨べんず。一いちには其有そいう無むを

定むるに、經論不同なり。毘曇法の中には、定んで中陰有り、成實法の中には、一向に定んで無し。有無を偏に定むるが故に、諍論を成ず。故に『涅槃』に云はく、「我諸の弟子我意を解せず。唱へて言はく、如來中陰を宣説す。一向に定んで有り、一向に定んで無し」と。大乘の所説は、有無不定なり。上善重惡の趣の散速疾なれば、則ち中陰無し。五道等の如し。餘業は則ち有なり。偏定に異なるが故に諍論無し。二には其生分を定む。生に四種有り。胎、卵、濕、化なり。一切の中陰は同一に化生す。三には其形類を辨す。中陰の形は生陰を髣像す。天に趣く中陰は髣像すること天に似たり。乃至地獄に趣向する中陰は地獄に髣像す。四には中陰の形量の大小を明す。論の中に説くが如し。人に生ずる中陰は有知の小兒の如し。上天の中陰は、以て漸く轉た大なり。是の如く中陰は、所向の處に隨つて、生陰よりも小なり。人に准じて知るべし。五には其形色を辨す。『地持』に説くが如し。色に好惡有り。好色に二有り。一には極好、明月の光の如し。二には微光、波羅捺衣の如し。惡色にも亦二あり。一には極惡、夜の黒闇の如し。二には微惡、黑羊の毛の光の如し。然るに實に中陰の色は萬差なり。『地持』には、且く曇影に就いて言を爲す。六には中陰の趣向する差別を明す。論の中に説くが如し。地獄の中陰の地獄に向ふ時は、是上頭下直に地獄に趣く。地獄の中に至つて報を受くるの時、形は人の立てるが如し。諸天の中陰は天に上趣する時、箭の空を射るが如し。餘は則ち僞行す。七には中陰の相見の不同を明す。有人の宣説すらく、「一切の中陰は皆相見ることを得」と。復有人の言はく、「上は

【二】 第二に四有の時分の久近を明す。

【有人】 世友の説

【有人】 法救の説

【三】 第三に三界五道の處に就いて四有を分別す。

下を見ることを得。下は上を見ず」と。此説の如くんば、地獄の中陰は、唯地獄の中陰を見ることを得て、餘の者を見ず。畜生の中陰は、能く畜生、地獄の中陰を見て、餘の者を見ず。乃至天の陰は、能く一切五趣の中陰を見る。八には中陰所食の不同を明す。欲界の中陰は、四食を具足す。其中の段食は、還つて生陰の所食の香氣を食す。上界の中陰には、則ち段食無し。但識、觸、意思食等有り。九には中陰の衣服の有無を明す。諸天の中陰は、一向に衣有り。人の中は不定なり。佛地に近き諸大菩薩、轉輪聖王及び白淨比丘尼等の如し。福德殊勝にして、又慚愧を具する中陰には、衣有り。餘の者は則ち無し。此一門。

次に、四有の時分の久近を明す。生有、死有は時分極短にして、唯一念に止まる。故に『雜心』に云はく、「生有及び死有は是れ各一刹那なり」と。本有、中有の時分は不定なり。本有の極短は一念に至る。長は則ち或は億百千劫を經。中有の長短は人の説不同なり。有人宣説すらく、「極短は一念にして、極長は七日なり」と。此説の如きは、七日に齊して來、必ず生處を得、若し七日より來、生處を得ざれば、前陰滅し已つて更に中陰を受く。

有人復説かく、「中陰の極長は壽七七日なり。七七日より來、必ず生處を得。若し處を得ざれば、死して更に生ず」と。復有人の説かく、「壽命は不定なり。乃至父母未だ和合せざるより來、常に在つて滅せず」と。此諸説の中には、後の説を善と爲す。此二門。
次に、三界五道の處に就いて、四有を分別す。先づ三界に就いて、其通局を辨す。生死本有は遍く三界に通ず。中有は不定なり。小乘法の中には、欲色界に有り、無色界には則ち

【華嚴】 第四十二

【二三】 第四に五陰六根に四有の具不具を論ず。先づ五陰に就いて。

【次に等】 次に六根に就いて。

無し。大乘法の中には、四空に色有り。色有るを以ての故に、亦中陰有り。故に『華嚴』の中に、「菩薩の鼻根は能く無色宮殿の香を聞く」と。明かに知んぬ、色有ることを。次に就いて論ず。當に知るべし、四有遍じて五越に通ずることを。此三門

次に、根陰に具不具有ることを辨ず。陰とは謂はく五陰、根とは謂はく六根なり。先に五陰に就いて、具不具を明す。生死本有、此三若し欲界の中に在れば、定んで五陰を具す。色、無色界は大小不同なり。小乘に説かく、「彼色界地の中の無想天處には、色有つて心無く、四空地の中には、心有つて、色無く、五陰を具せず。餘の色界天は齊く五陰を具す」と。大乘に説かく、「彼無想天處には猶心無有り、四空に色有り。是れ則ち三界皆五陰を具す」と。故に『地論』に言はく、「乃至有頂は一切の五陰苦聚を増長す」と。中有の一種は、定んで五陰を具す。終に缺減無し。次に六根に就いて、具不具を明す。生有の中には、唯意根有り。所著の色木だ己が體を成ぜざるが故に、身根無し。身無きを以ての故に、亦眼耳鼻舌等の根無し。死有は不定なり。欲界の衆生の漸命終の者は、身根及具び意根有つて最後に滅壞し、頓命終の者は、一念に死する時、六根俱に壞す。色界の衆生には漸命終無し。是故に死する時、六根俱に壞す。無色の衆生は大小不同なり。小乘に説かく、「彼は唯意根有りて最後に滅壞す」と。大乘に説かく、「彼は猶形色有り。色界と同じと。本有の中には、諸根不定なり。欲界の衆生は多く六根を具し、乃至極少は身及び意を具す。色無色界は、大小不同なり。小乘に説かく、「彼色界地の中には、無想處を除いて其餘の諸天は齊く六根を具し、

四有染淨の義を辨ず。

第六に凡學に就いて分別す。

無想天の中には、其意根無く、無色界の中には、單に意根有りて餘の五種無し」と。大乘に説かく、彼色界は六根を具すと、何が故に是の如くなる。一大乗の説は彼無想無色に色心有るが故に、中有の一種は寔んで六根を具す。無殘缺の者は、何が故に是の如くなる。一中陰の身中には、純業の果を受けて後業の累を受けざるが故に、六根を具す。又中陰の身形は色微にして、餘縁有つて其根を壞する者無きが故に、六根を具す。又六根の中に受生の處を求む。是故に中陰は、寔んで六根を具す。然るに此中陰の六根は猛利にして、淨きこと諸天に過ぐ。一切の世界の應に受生すべきの處は、見聞無礙なり。其生を求むるに、自在力なるを以ての故に。此四門。

次に、四有染淨の義を辨ず。生有の一種は、唯樂にして淨無し。受生は必ず是れ煩惱の心なるが故に、餘は染淨に通ず。故に『雜心』に云はく、「一は染、三に二有り」と。一は染と言ふは是れ生有なり。三に二有りとは、本と死と及び中とは、染淨に通ずるなり。此れ乃ち局つて凡夫二乘を論ず。若し菩薩の願力受生に通ずれば、是れ則ち四有にして、皆染淨に通ず。此五門。

次に、凡聖に就いて、四有を分別す。凡聖異なりと雖も、齊く四有を具す。凡夫は知るべし。聖人の中に、學は四有を具し、無學は唯三なり。略して生有無し。無學の聖人は更に生ぜざるが故に。四有是の如し。

【六】 苦報義第四
段に四識住を明す
中、四門の分別あ
り、先づ第一に辨
相。

【成實】 同論第二
第五。

四識住の義に四門分別あり。明を辨ず一。漏無漏の分別二。地に
二六に識住とは、五陰の中の色、受、想、行は識の所依と爲るが故に、識住と名く。住の義

云何。『毘曇』の如きに依らば、心王の體は同時の色、受、想、行に依る。故に識住と名
く。問うて曰はく、『彼宗の心識數法は、同時に相依る。何が故に、偏に識は餘に依つて住
すと説いて、受等は餘に依つて住すと説かざるや。』釋して言はく、『住の義理實に齊く通
ず。但識は是れ王なるが故に、偏に之を説く。又外道の識は神に依つて住すといふを破す
るが故に、識住と説く。若し『成實』に依らば、心の起るに前後あり、同時に相依して住
すと説かず。但心識は餘の四陰を緣すと説く。緣じて愛著するが故に、識住と名く。』問う
て曰はく、『彼宗の食は行心に在り。識の中に食無し。云何が、經の中に、説いて識住と爲
すや。』釋して言はく、『彼實に二種有るに依る。一には起食は唯行心に在り。二には性食
は過ぐ四心に在り。性食通ずるが故に。識の中に之有るが故に得し識に就いて、説いて識
住と爲す。』何者が性食なる。『取性煩惱は境界に執著するが故に、性食と名く。』問うて曰
はく、『性食既に四心に通ず。何の義を以ての故に、偏に識住を説いて受住、想行住等と説
かざる。』釋して言はく、『住の義理は四心に通ず。今は三義を以て、偏に識住を説く。一
には何を以て後に顯す。識心は初に在りて但識住を言ふ。餘は類して知るべし。故に具に
論せず。二には弱を擧げて強を顯す。四心の中に就いて、識心の取性を最も後討と爲し、
乃至行心の取性最も強し。弱に就いて住と説く。増強なるは知るべし。故に闕して論ぜ

【論】 成實第五。

す。三には外道の識は神に依ると説くを破せんが爲の故に、識住と名く。彼外道は多く心識は神に依ると取するを以ての故に。』問うて曰はく、『若し貪の故に住すと云はば、何が故に、論に「喜潤の故に住す」と言ふや。』釋して言はく、『理實は貪著の故に住す。貪心は必ず前の喜に由つて生ず。故に喜潤と説く。又後の貪の中には、猶喜の義有つて彼貪を助成す。故に喜潤と説く。』問うて曰はく、『前に性貪の故に住すと説く。性貪常に有り。何ぞ喜潤を假らん。』釋して言はく、『識中の所有の性貪は、是れ前の行中の重貪の氣分なり。彼前の行中の増上の重貪は、喜潤に由つて生ず。識中の性貪は本に従つて之を論ず。故に喜潤と曰ふ。』問うて曰はく、『色等は、何の識に望めて、説いて識住と爲すや。若し「毘曇」に依らば、通じて六識に望めて、説いて識住と爲す。成實法の中には、人解不同なり。』『有人釋して言はく、『唯意地の行心に望めて住と説く。彼行中の貪愛強きを以ての故に。』又人復言はく、『通じて六識の行心に望めて住と説く。前の二心に貪愛無きを以ての故に。』此れ皆然らず。經に識住と説いて行住と言はず。』云何が説いて、行心に望めて住すと云ふや。』人復釋して言はく、『彼宗の中に、想受及び行は是れ通じて識と名く。故に識住と云ふ。若し行心は是れ通じて識と名け、識住と説くと云はば、通を論じて別に非ず』と。』『云何が四識住の異を分つことを得ん。』『當に知るべし。』『成實』も亦六識に望めて、説いて識住と爲す。』『何を以てか知ることを得る。』『毘曇法の中には、通じて六識に望めて、説いて識住と爲す。』『成實』も非せず。明かに知んぬ、共に用ふることを。又六識

【成實】 同論第五

【七】次に第二に有漏無漏に就いて四識住を分別す。

の中、性貪の義等しく住著して殊らず。故に通じて之に望めて、以て識住と説く。『問うて曰はく、『若し通じて六識に望めて識住を説くと言はば、六識の心は、局つて一色を緣じて餘法を緣ぜず。云何が四種の識住有ることを得る。』釋して言はく、『通じて六識の心に望めて四識住を説く、一一に皆四住を具すと謂ふには非ず。』又問はく、『五識は局つて一念に在り。云何ぞ住と名くる。』此れ住と言ふは、住著を住と名く。經停を以て説いて住と爲すにあらす。故に一念の五識も亦住と名くることを得。』問うて曰はく、『何が故に、唯色、受、想、行等の陰を説いて、以て識住と爲し、還つて識を説いて、以て識住と爲さざる。』

『若し『毘曇』に依らば、識は是れ心王なり。兩王並せざるが故に識を説いて、以て識住と爲さず。若し『成實』に依らば、識の時は少識なるが故に、識を説いて、以て識住と爲さず。』彼何が少識なる。』六識の中には唯意識のみ有り。通じて續念を具す。自餘の五識は、局つて一念に在り。通じて相續せず。六想、六受、六行並に通じて續念するが如きにはあらす。故に少識と曰ふ。少の故に論ぜず。又復能住、所住の兩義の差別を分たんが爲の故に、識を説いて、以て識住と爲さず。』此一門

次に、有漏無漏に就いて分別す。有漏の四陰は有漏の識に望めて、名けて識住と爲す。無漏は則ち非なり。何が故に是の如くなる。『毘曇』に釋して言はく、『無漏の法は有漏の識を壞す。故に識住に非ず。又無漏の識は有漏の法を厭ふ。亦識住に非ず。又無漏の識は、無漏の法に於ても亦貪著せず。故に識住に非ず。有漏の識は、有漏の法に於て、樂著して

【二八】次に第三に諸地に就いて識住を分別す。

捨せず。故に識住と名く」と。「成實」も亦同じ。此二門
次に、諸地に就いて、識住を分別す。地は謂はく、九地なり。始め欲界より乃ち悲想到
至る。若し「毘曇」に依らば、要す當地の法を當地の識に望めて、説いて識住と爲す。異
地は則ち非なり。細別なるが故に、若し是の如くならば、下地の身に依りて上心を起す
時、下地の身は應に識住に非ざるべし。論に自ら釋して言はく、「住相成就すれば、猶識住
と名く」と。若し「成實」に依らば、自地及與び他地を問ふこと莫し。但緣著有り。斯を
識住と名く。此三門
【二九】次に第四に三世に就いて識住を分別す。

次に、三世に就いて、住の義を分別す。若し「毘曇」に依らば、三世の中に於て、同時
に相依する、斯を識住と名く。異時は則ち非なり。若し「成實」に依らば、三世に於て、
同時及與び異時を問ふこと莫し。但緣著せしむる、皆是れ識住なり。前の四識を簡ばず。
住の義之を略して附云ふ。

四食の義に兩門分別あり。相を辨ず一。趣に
二。四食と言ふは、謂ゆる、段食、觸食、思食及與び識食なり。此四食は論釋不同なり。若
し「成實」に依らば、糞飯等の事を名けて段食と爲し、冷煖等を名けて觸食と爲し、或は
衆生有つて、思を以て活命するを名けて思食と爲す。此言有りと雖も、何れの思といふ
ことを知らず。有人釋して言はく、「過去の業思は是れ其命根なり。命をして斷ぜざらしむ

【二〇】苦報義を明
す中、第五段に四
食の義を明すに、
兩門分別あり、先
づ第一に辨相。

【三】次に第二に
趣に就いて四食を
辨ず。

るを説いて思食と爲す。若し是の如くならば、一切衆生所有の壽命は、皆往思に由る。應に無と言ふべからず。或は當應に彼現在の思想を以て活命すべき者を、説いて思食と爲す。玄妙を思うて不死を得る等の如し。有漏の識心命報壞せざるを、名けて識食と爲す。若し『毘曇』に依らば、欲界地の中には、香味觸等は是れ其段食なり。心數法の中には、有漏の觸數は能く一切の心心數の法を知る。法をして今散壞せざらしむるを、説いて觸食と爲す。有漏の思數起つて後絶せざるを、説いて思食と爲す。有漏の心識は是れ其心王なり。能く一切の諸の心數法をして、住持して壞せざらしむるを、説いて識食と爲す。問うて曰はく、『無漏は何が故に食に非ざる。』釋して言はく、『無漏は相續の相を壞す。是故に食に非ず。』此一門

次に、趣に就いて論ず。先づ生陰を論すれば、地獄の中は論釋不同なり。若し『成實』に依らば、但識食有り。毘曇法の中には、具に四食有り。彼に説かく、地獄に熱鐵等を呑んで能く飢餓を壞するを、即ち段食と爲す。餘の三は心法常に有り。知るべし、鬼畜の兩趣は齊く四食を具することを。人中不定なり。若し有心の者は皆四食を具す。滅心の者は論說不同なり。若し『毘曇』に依らば、段食の餘勢は身をして壞せざらしめ、更に餘食無し。故に彼宗の中には、滅定に入る者は遠く七日に至つて、即ち須らく定を出づべし。若し七日を過ぐれば、段食の勢盡く。起れば則ち身壞す。成實法の中には、滅心の者は現に心無しと雖も、識在ることを得るが故に、猶識食と名く。識食を以ての故に、滅定に入つ

て多時を遷と雖も、身も亦壞せず。天中は不定なり。欲界の諸天は人と相似す。色界の諸天は、若し『成實』に依らば、唯識食有り。毘曇法の中には、彼有心の者は、唯段食無く餘の三種有り。若し滅心の者は、四食俱に無し。無色界の天は、色界の中の有心の者と同じ。無色界の中には滅心無きが故に。生陰是の如し。次に中陰を辨す。成實法の中には、一切の中陰は唯識食のみ有り。『毘曇』は不定なり。欲界の中陰は、具に四食有り。其起る所に隨つて、遷つて彼趣の所食の香氣を食し、以て段食と爲す。餘の三は心法之有り。知るべし。色界の中陰は、唯段食無く、餘の三種有ることを。彼說の中陰は、三食有りと雖も、思食最も増す。生を求むるを以ての故に。四食是の如し。

【三】 苦報義第六段に五陰の義を明すに七門分別あり先づ第一に釋名。

五陰の義に七門分別あり。名を釋す一。相を辨す二。先後の次第三。三性の分別四。第一に名を釋す。五陰と言ふは、謂ゆる、色、受、想、行、識なり。質礙を色と名け、又復形現も亦名けて色と爲す。領納を受と稱し、『毘曇』には亦覺知を受と名くと言ふ。取相を相と名け、『毘曇』には亦順知を想と名くと言ふ。起作を行と名け、了別を識と名く。『毘曇』には、亦分別を識と名くと云ふ。此五種を、經に名けて陰と爲し、亦名けて衆と爲す。聚積を陰と名く。多法を陰積するが故に、復衆と名く。問うて曰はく、『一の色、一の受想等は、多く聚積すること無し。云何が陰と名け、而も復衆と名くるや。』釋して言はく、此等は陰積の分なるが故に、名けて陰と爲し、多くの中の分なるが故に、復衆と名く。

【三】次に第二に五陰の體相を辨ず先づ色陰に就いて

衆僧の中に請じて一人を得るを衆僧を請すと名くるが如し。此も亦是の如し。此一門次に、體相を辨ず。色陰の體は離合不定なり。總じては唯一色なり。或は分つて二と爲す。一には内、二には外なり。眼等の五根は是れ其内色にして、色等の六塵は是れ其外色なり。或は分つて三と爲す。『毘曇』に説くが如し。一に、可見對、謂はく、眼所行の青黄等の色なり。二には不可見有對、謂はく、耳鼻舌身所行の色なり。三には不可見無對の色、意根所行の無作の色なり。前の二種の色は其對礙の色根の所對と爲るが故に、有對と名け、後の一無作は對礙の色根の所對と爲らざるが故に、無對と名く。成實法の中には、無作は色心に非ずと宣説するが故に、唯前の二有り。略して第三無し。或は分つて六と爲す。謂ゆる、色、聲、香、味、觸、法の六塵の色なり。前の五は知るべし。法塵の色とは、若し『毘曇』に依らば、五根の無作は是れ法塵の色なり。成實法の中には、過未の五塵、五根、四大假名の色は、是れ法塵の色なり。或は分つて十と爲す。『涅槃』に説くが如し。故に彼經の中上下數處に皆十色を説く。五根五塵は是れ其十なり。彼經は何が故に無作を説かざる。『彼に説かく、無作は但是れ色法にして、是れ色事に非ず。身を成ずる相微なり。故に陰して彰さず』と。或は十一を分つ。『毘曇』に説くが如し。五根、五塵及び無作色は、是れ其十一なり。彼に説かく、無作は是れ身口業の性、四大の造なるが故に、色陰の收なり」と。成實法の中には、色に十四有り。五根と五塵と及與び四大とを十四と爲すなり。有人説いて言はく、「成實法の中には、聲人を成せざれば、是れ色陰に非ず」と。此言然ら

【成實】 同論第三

【次に等】 次に受
【陰に就いて明す】
【或は等】 次に二
【地持】 第一。

す。陰積の義異にして、人を成ずる法異なり。何んが説いて人を成せざるが故に、聲をして陰に非ざらしむと言ふことを得ん。云何が陰異にして、人を成ずる法異なる。陰は内外に通じ、人を成ずるは唯内なり。陰は色聲に通じ、人を成ずるは唯色なり。是れ其異なり。云何が聲は是れ色陰なりと知るや。彼成實の色相品に説くが如し。色陰と云ふは、謂ゆる、四大及び大所因の色、香、味、觸なり。亦四大に因つて成ずる所の五根なり。是等は相觸るるが故に、聲生すること有り。此を擧げて以て色陰の體相を釋す。寧ろ色陰に非ざらんや。又『毘曇』の中には、聲を説いて陰と爲す。成實に非せず。明に知んぬ、共に用ふることを。問うて曰はく、『毘曇』には、無作色を説いて、以て色陰と爲す。成實法の中には、何が故に論ぜざる。釋して言はく、『成實』に宣説するく、無作は非色心と爲し、行陰の所收なり」と。色陰に攝せざるが故に、此に論ぜざるなり。問うて曰はく、『成實』は根塵の外に、別に四大を説いて、以て色陰と爲す。毘曇法の中には、何んが是の如くならざる。釋して言はく、『成實』には、四大は是れ假名の色にして、四塵を攬つて成す。能く五根を成す。根塵を收せず」と宣説するが故に、別して之を説く。毘曇法の中には、『四大は是れ實法の色、觸入の所攝なり』と宣説するが故に、別して説かず。色陰是の如し。次に受陰を明す。受陰の體の中には、廣略不定なり。總すれば唯一受なり。或は分つて二と爲す。一には身受、二には心受なり。『地持』に説くが如し。五識相應を、名けて身受と爲し、意識相應を、名けて心受と爲す。問うて曰はく、『五識は是れ心にして、

【或は等】次に三受を別つに、略して五門あり、一に三受を分つ。

【成實】 同論第六

【成實】 同論第七

身に非ず。何が故に此と相應するの受を、名けて身受と爲すや。一釋して言はく、此れ所依に従つて以て名く。五識は五根の身に依つて意心を生ずるが故に、所生の受を名けて身受と爲し、意識は心に依るが故に、所生の受を名けて心受と爲す。又復苦業にも亦二を分つことを得。悪果を苦と名け、善果を樂と名く。一切の報受は、善惡二業の果を出づること無きが故に。一問うて曰はく、一捨受は何れの受の中の擲ぞ。一釋して言はく、一業の擲なり。善業の果なるが故に。一或は分つて三と爲す。一には苦、二には樂、三には不苦樂なり。亦是捨受と名く。此三受を尋ずるに、略して五門有り。一には三受を分ち、二には優劣を定め、三には通局を明し、四には生過の不同にして、五には廢捨の難易なり。初門の中に就いて差別するに六有り。一には當相に分別す。彼成實の受相品に説くが如し。身心を損傷するを名けて苦受と爲し、身心を損益するを名けて樂受と爲し、非損非益を不苦樂と名く。二には因に對して分別す。一切の惡果は斯を名けて苦と爲し、一切の善果を説いて樂捨と爲す。是義云何。一毘曇の如きに依らば、三觀已過の下善の業果は、之を名けて樂と爲し、四阿已上の上善の業果を説いて、以て捨と爲す。是れ則ち彼宗には、三觀已過に捨受の觀無し。若し一成實に依らば、善を分つて二と爲す。一には欲界の散善、二には上界の定善なり。散善の中には、増上の業果を説いて樂受と爲し、微下の業果を名けて捨受と爲す。此微樂は覺知し難きを以ての故に。問うて曰はく、一苦の中にも亦微下の不淨の業果有り。何ぞ捨と名けずして、偏に下樂を説いて捨受と爲すや。一釋して言はく、一苦

果は違害の法なり。性は情と返す。微しく有れば即ち覺す。故に苦の中に入る。捨と名く
 ることを得ず。樂果は情に順ず。切心の法に非ず。微なる者は覺し難し。故に分つて捨と
 爲す。又復一切の苦樂の二受は、皆微細の行苦を用て體と爲す。行苦の上に於て苦受を宣
 説す。苦受は必ず重し。心覺悟するが爲の故に、捨と名けず。行苦の上に於て樂受を宣説
 す。樂受は必ず微なり。中に於て上なる者は心覺適するに爲つて、當相に樂と名く。輕微
 の者は心能く覺するに非ず。博く名けて捨と爲す。定善の中には、下善の業果は之を名け
 て樂と爲し、四禪已上は、勝善の業果は之を説いて捨と爲す。彼は寂靜にして覺知し難
 きを以ての故に。三には縁に對して分別す。縁に三種有り。謂はく、違順中なり。違縁の
 違順を名けて苦受と爲し、順縁の生適を名けて樂受と爲し、中境の所生を名けて捨受と
 爲す。四には想に對して分別す。適想の所起を名けて樂受と爲し、不適想の生を名けて苦
 受と爲し、中容想の發を名けて捨受と爲す。五には行に對して分別す。瞋を生ずるは是れ
 苦、貪を起すは是れ樂、癡を生ずるは是れ捨なり。六には時に就いて分別す。中に於て、
 三縁に約對して之を辨す。若し違縁に對すれば、相應する時は苦、離する時は樂を生じ、
 久しく離すれば則ち捨す。若し順縁に對すれば、初受到樂を生じ、中受到則ち捨し、久受
 に便ち苦しむ。或は順縁有り。相應する時は樂、離する時は苦を生じ、久しく離すれば則
 ち捨す。若し中縁に對すれば、初受の時捨し、久受到苦を生じ、離する時に樂を生ず。或
 は中縁有り。初受の時捨し、久受到樂著すれば則ち樂受を生じ、離する時苦を生ず。此六

【次に等】二に三受の優劣不同を明す。

【次に等】三に三受の通局の義を明す。

【彼文】成實論第六。【次に等】四に三受の生過の不同を明す。

【次に等】五に三受の厭捨の難易を明す。

義を以て、受を分つて三と爲す。次に三受の優劣不同を明す。苦受は最も劣なり。樂、捨の二受は上中不定なり。若し「毘曇」に依らば、樂受は定んで下なり。下善の果なるが故に。捨受は定んで上なり。上善の果なるが故に。若し「成實」に依らば、欲界地に在りては、捨受を中と爲し、樂受を上と爲す。上二界に在りては、樂受を中と爲し、捨受を上と爲す。次に三受通局の義を明す。「毘曇」の如きに依らば、苦は欲界に局り、樂は欲、色に通じ、捨は三界に通ず。成實法の中も雖は「毘曇」に同じ。實を以て細に論ずれば、並に三界に通ず。故に彼文に言はく、「苦樂は身に隨つて四禪に至り、憂喜は心に隨つて有頂に至る」と。次に三受の生過の不同を明す。中に於て二有り。一には三受の生過の多少を明す。苦は過を生ずること少し。局つて欲界に在りて、瞋悲を生ずるが故に。樂は過を生ずること中なり。欲、色界に在りて、能く不善穢汚の法を生ずるが故に。捨は過最も多し。遍く三界に通じて、具に一切の諸煩惱を生ずるが故に。二には三受の生過の輕重を明す。捨受は最も重し。能く邪見を起し、善根を斷滅して闡提と作るが故に。又無明を生じて能く一切生死の本と爲るが故に。苦樂の二受は輕重不定なり。若し所爲を論ずれば、樂は重にして、苦は輕なり。樂受を求めんが爲に多く罪を作るが故に。若し所生を論ずれば、苦は重にして、樂は輕なり。瞋恚の大罪は苦に從つて生ずるが故に。三受の生過の不同是の如し。次に三受の厭捨の難易を明す。中に於て二有り。一には三受厭を起す難易を明す。欲界地の中の所有の三受は、苦を厭ひ易しと爲す。人憎惡するが故に。捨受は次に難し。

【或は等】

次に五

極備にあらざるが故に。樂受は最も難し。保愛深きが故に。若し上界の樂捨の二受を論ずれば、樂を厭ひ易しと爲す。其れ盛動にして憎惡し易きを以ての故に。捨受は厭ひ難し。其れ寂靜にして覺知し難きを以ての故に。二には三受之を捨する難易を明す。苦受は捨て易し。初禪を得る時、已に遠離するが故に。問うて曰はく、「若し初禪に苦を離ると言はば、何が故に、經に「二禪に苦を滅す」と言ふや。」答して言はく、「初禪に眼耳鼻身の三種の識の在る有り。此三識の身は苦根の所依なり。所依未だ盡きず。是故に初禪に苦を滅すと云かず。理實に苦受は初禪に滅盡す。樂受は次に難し。四禪に至つて滅す。捨受は最も難し。涅槃の時滅す。三受是の如し。或は分つて五と爲す。謂ゆる、憂、苦、喜、樂、及び捨なり。此五種は、處に隨つて不定なり。若し欲界に在れば、五識地の中には、遍憊を苦と名け、適悅を樂と稱す。意識地の中には、廣橋を憂と名け、慶悅を喜と名く。六識地の中には、中容受の心苦樂等を捨する、之を説いて捨と爲す。問うて曰はく、「何が故に苦樂の二受は意地に流至して、返つて憂喜と名け、捨は是の如くならざる。六識地の中には、通じて、名けて捨と爲すや。」答して言はく、「苦樂は微想より生ず。憂喜の二受は強想より發す。是に爲つて須らく分つべし。六識の中の捨は同じく微想より生ず。是に爲つて分たず。欲界是の如し。若し初禪に在らば、眼耳及び身の三識身の中に適悅を樂と名け、意識地の中の慶悅を喜と名け、四識身の中の中容の受心を説いて、以て捨と爲す。三の中に喜受は定の内外に通じ、餘の二は定の外なり。初禪已上は、鼻舌識無ければ亦憂苦無し。

【或は等】 次に六
 受、
 【或は等】 次に十
 八受、
 【成實】 同論第六
 【或は復等】 次に
 三十六受、
 【或は等】 次に百
 八受、
 【龍樹の等】 大智
 度論第三十六、
 【想陰の體等】 次
 に想陰に就いて明
 す。

【行陰の體等】 次に
 行陰の體想を明す

是に爲つて論ぜず。二禪地に在れば、唯意識に就いて喜を説き、捨を説く。三禪の中に在れば、唯意地に就いて樂を説き、捨を説く。既に意地に在り。何んが喜と名けずして、乃ち説いて樂と爲すや。是れ樂の性なるが故に、意地に在りと雖も、喜と名くることを得ず。故に『雜心』の中に之を説いて、以て樂根意行と爲す。『涅槃』の中には、『下を名けて喜と爲し、上を名けて樂と爲す』と説く。塵況すること此の似し。四禪已上は、唯意捨のみ有つて、更に餘の義無し。五受是の如し。或は分つて六と爲す。謂ゆる、六根所生の受なり。或は十八を分つ。六根の所生に、各苦、樂、不苦不樂有り。故に十八有り。又『成實』に十八と説く。意行も亦是れ十八なり。謂はく、五意識、第六意識所生の受に、各憂、喜、不憂、不喜有るが故に十八と爲る。或は復分つて三十六受と爲す。『成實』に説くが如し。六根の所生に、各苦、樂、不苦、不樂有り。並に染淨に通ず。是故に合して三十六受と爲す。或は百八を分つ。龍樹の説くが如し。前の三十六を三世に分別するが故に、百八有り、若し廣く分別せば、受は乃ち無量なり。受陰是の如し。想陰の體とは、開合不定なり。總じては一想と爲る。或は分つて三と爲す。一には適想、二には不適想、三には非適非不適想なり。順を取るを適と名け、違を取るは不適にして、中容を取るを名けて非適非不適想と爲す。或は分つて六と爲す。謂ゆる、六識相應の想なり。或は十八を分つ。六想の中に各三種有り。適不適等にして、十八と爲すなり。緣に隨つて想を辨ずれば、想も亦無量なり。想陰是の如し。行陰の體とは、廣略不定なり。總ずれば唯一行なり。或は分つて二と爲す。

【雜心】 第一。

【論】 雜心論第一

一には心法、二には悲心法なり。心法の中に、「毘曇」の如きに依らば、汎爾に具に論ずるに四十六有り。行陰の所攝に四十四有り。四十六とは、通地に十有り。想、欲、觸、慧、忿、思、解脫、憶、定及び受なり。善地に十有り。謂ゆる、無貪、無瞋、慚、愧、信、倚、不放逸、不害、精進及び捨なり。前に通じて二十なり。不善に二有り。謂はく、無慚無愧なり。此を以て、前に通じて二十二と爲す。大煩惱の中の別數に五有り。不信、懈怠、無明、悼、放逸なり。此を以て、前に通じて二十七と爲す。少煩惱の中に、其十種有り。謂ゆる、忿、恨、誑、慳、嫉、惱、詔、覆、高、害なり。此を以て、前に通じて三十七と爲す。餘の數に五有り。謂ゆる、覺、親睡、眠及び悔なり。此を以て、前に通じて四十二と爲す。十使の中に、別して四數有り。貪、瞋、慢、疑なり。此を以て、前に通じて四十六と爲す。此等は前の三有爲の中に具に廣く分別するが如し。四十四は行陰の攝と言ふは、前の四十六の心法の中に就いて、受を除き想を除いて、自餘の一切皆行陰の攝なり。問うて曰はく、「何が故に、諸の心法の中に偏に受想を分つて、別して兩陰と爲し、行の中に入れざる。」

「雜心」に釋して言はく、「受は愛の根と爲し、想は見の本と爲る」と。此二種を以て生死に輪轉するが故に、之を分別す。又復論に言はく、「受は諸禪を修し、想は無色を修す」と。此二種は地に別つ義強きを以ての故に、別して陰を立つ。成實法の中には、心法無量なり。識、想、受を除く自餘の一切は、皆行陰の攝なり。「心法是の如し。非心法の中、「毘曇」の如きに依らば、十四不相應行を宣說して、非色心と爲す。此も亦前の三有爲の中に、具

【雜心】 第一。

【次に等】 次に諸の體を辨ず。

に廣く分別するが如し。成實法の中には、唯無作を説いて、以て色心不相應行と爲す。問うて曰はく、「五陰通じて皆是れ行なり。何の義を以ての故に、偏に此一を説いて、以て行陰と爲すや。」二雜心に釋して言はく、「行陰の中には、有爲行多きが故に、偏に行と名け、餘の四陰の中には、行を攝すること少きが故に、更に異名を與ふ」と。行陰是の是し。次に、識陰を辨ず。開合不定なり。總じては唯一識なり。或は分つて二と爲す。一には有漏、二には無漏なり。或は分つて三と爲す。一には善、二には惡、三には無記なり。或は分つて四と爲す。一には善、二には惡、三には隱沒無記なり。謂はく、欲界地の身邊兩見及び上二界の一切の煩惱相應の心なり。四には白淨無記なり。謂ゆる、報生、威儀、工巧、變化の心なり。或は分つて六と爲す。謂ゆる、六識にして、始め眼識より乃至意識に至る。或は分つて七と爲す。謂はく、七心界にして、前の六識の上に加ふるに意根を以てす。是れ其七なり。或は分つて九と爲す。一には方便善心、二には生得善心、三には不善心、四には陰沒無記、五には報生心、六には威儀心、七には工巧心、八には變化心、九には無漏心なり。或は分つて十と爲す。一には方便善心、謂ゆる、一切の開思修等の相應の心なり。二には生得善心、通智所成の信、進、念等の相應の心なり。三には不善心、謂はく、欲界地の身邊見を除いて、自餘の一切の不善結業相應の心なり。四には隱沒無記、謂はく、欲界の中の身邊見の兩及び上二界の一切の煩惱相應の心なり。五には報生心、謂はく、三界の中の報無記心なり。六には威儀心、謂ゆる、一切の行住坐臥見聞等の心なり。七には工

巧心（巧）、謂（謂）ゆる一切（一切）の營生（營生）の心（心）なり。八（八）には變化心（變化心）、謂（謂）はく、是念（是念）を作（作）さくニ我當（我當）に是（是）の如（如）き（き）の事業（事業）を化（化）作（作）すべし（し）と。是（是）の如（如）き（き）の心（心）なり。九（九）には學心（學心）、謂（謂）はく、三乘（三乘）人の因體（因體）の無漏（無漏）及び學等見（學等見）なり。十（十）には無學心（無學心）、謂（謂）はく、三乘（三乘）の人の果體（果體）の無漏（無漏）及び無學等見（無學等見）なり。三乘（三乘）の果中（果中）の盡無生智（盡無生智）は是（是）れ無學（無學）の體（體）にして、遊觀（遊觀）の無漏（無漏）は是（是）れ無學等見（無學等見）なり。或（或）は十二（十二）を分（分）つ。『雜心（雜心）』に説（説）くが如（如）し。欲界（欲界）に四（四）有り。一（一）には善心（善心）、二（二）には不善心（不善心）、三（三）には隱沒無記（隱沒無記）、四（四）には白淨（白淨）、無記（無記）なり。色界（色界）に三（三）有り。前（前）の四（四）の中に於（於）て、不善心（不善心）を除（除）く餘（餘）の三（三）種（種）有り。無色（無色）も亦然（亦然）なり。此（此）十（十）有漏（有漏）に學無學（學無學）を併（併）せて十二（十二）と爲（爲）すなり。或（或）は二十（二十）を分（分）つ。欲界（欲界）に八（八）有り。一（一）には方便善（方便善）、二（二）には生得善（生得善）、三（三）には不善心（不善心）、四（四）には隱沒心（隱沒心）、五（五）には報生心（報生心）、六（六）には威儀心（威儀心）、七（七）には工巧心（工巧心）、八（八）には變化心（變化心）なり。謂（謂）はく、上禪（上禪）に依（依）つて欲界（欲界）の化（化）を爲（爲）す。色界（色界）に六（六）有り。前（前）の八（八）種（種）の中に、不善心（不善心）及び工巧心（工巧心）を除（除）く。一切（一切）の上界（上界）に、不善及び工巧（不善及び工巧）有（有）ること無し。故（故）に餘（餘）の六（六）種（種）有り。無色（無色）に四（四）有り。前（前）の八（八）種（種）の中に、不善心（不善心）、威儀（威儀）、工巧（工巧）及び變化心（變化心）を除（除）いて、餘（餘）の四（四）種（種）有り。學無學（學無學）を併（併）せて二十（二十）と爲（爲）すなり。廣（廣）くは則（則）ち無量（無量）なり。識陰（識陰）是（是）の如（如）し。此（此）二門（二門）竟（竟）る。

【四】次に第三に五陰次第の義を明す。

次に、五陰次第の義を明す。諸論不同なり。毘曇法の中には、五陰同時なり。義に隨つて以て論ずるに、二の次第有り。一には順、二には逆なり。順の次第とは、先づ色陰を明し、次に受、次に想、次に行、後には識なり。『何が故に是の如くなる。』論に釋するに三

有り。一には麤細の次第、色陰最も麤にして相狀顯著なり。故に先に色を明す。受は色より細にして、餘の心法より麤なり。人の患ふる所の首足等の痛の如し。惱を覺すること増強し。故に次に受を明す。想は受より細にして、餘の心法より麤なり。相を取ることに分明なり。故に次に想を明す。行は想より細にして、心識より麤なり。作用の相顯なり。故に次に行を明す。識心最も細なり。故に後に在つて説く。二には破患の次第、論の中に説くが如し。本際已來男は女色の爲に、女は男色の爲に染著する處なるが故に、先づ色陰を觀じて、人をして厭離せしむ。樂受は貪の故に、色に染著す。故に次に受を觀す。想顛倒するが故に樂受の貪を起す。故に次に想を觀す。其れ貪愛の煩惱行するを以ての故に、顛倒の想を起す。故に次に行を觀す。心に依るを以ての故に、煩惱行を起す。故に後に識を觀す。三には觀入の次第、論の中に説くが如し。二種の色觀は佛法の中に入るに、甘露門と爲る。一には不淨觀、二には安般の念なり。故に先に色を觀す。色を觀するを以ての故に、便ち受の妄を知る。故に次に受を觀す。受の妄を知り已つて、想顛倒せず。故に次に想を觀す。想不倒の故に、煩惱行ぜず。故に次に行を觀す。煩惱行ぜざれば、心則ち堪忍す。故に次に識を觀す。上來の三種は、是れ順の次第なり。道の次第とは、前に翻す。即ち是れ論の中に説くが如し。淨穢の生は、心を以て本と爲す。故に先に識を觀す。識を觀するを以ての故に、煩惱微薄なり。故に次に行を觀す。煩惱薄きが故に、便ち法の想を起して一切の苦無常等を想す。故に次に想を明す。法の想を起すが故に、貪受生ぜず。故

【五】 第四に三性に就いて五陰を分別す。

次に受を觀す。貪受息するが故に、能く色過を見る。故に次に色を觀す。此は逆の次第なり。「毘曇」是の如し。成實法の中には、陰の起る前後一時なることを得ず。「次第は如何」先づ色陰を明し、次に識、次に想、次に受、後には行なり。「何が故に是の如くなる」一心識の起る、必ず六根に託す。中に於て、五識は五色根に依り、意識の一種は意根に依る。多に従つて論を爲さば、識は色に依つて生ず。故に先に色を明し、第二に識を明す。識の所縁に於て、分別して相を取る。故に次に想を明す。取想の所に於て、違順非違非順を領納す。故に次に受を明す、所受の法に於て、貪瞋等を起す。故に次に行を明す。大乘法の中にも亦説かく、「五陰の體性は同時なり。用の際顯に隨つて、先後無きに非ず」と。

其中の次第は多く「毘曇」に同じ。此三門

次に、三性に就いて五陰を分別す。三性と善ふは謂ゆる、善、惡、無記の性なり。「毘曇」の如きに依らば、陰に別して九有り。相從つて三と爲す。言ふ所の九とは、一には生得善陰、二には方便善陰、三には無漏善陰、四には不善の五陰、五とは穢汚の五陰、六には眾生の五陰、七には威儀の五陰、八には工巧の五陰、九には變化の五陰なり。生得善とは、一切の衆生無始より已來、曾て善根を修す、未だ壯見を起さずして、斷滅してより已來、此善相續して生ずれば、便ち之を得。生得善と名く。生得善根の身口業を起すは、是れ其色陰にして、餘の心法等は餘の四陰と爲す。方便善とは、現在世に於て、友に近き法を聞き、思惟修習して諸の善根を起す。是れ方便善なり。中に於て、起す所の身口の二業は、

是れ其色陰にして、餘の心法等を餘の四陰と爲す。問うて曰はく、「方便と生得善とは、同く是れ現に起す。何の差別有るや。」釋して言はく、「此二分齊く知り難し。但宿習に由つて、性に任じて能く起するは、是れ生得善なり。他の教化に因つて法を聞き、思惟し力勵して起す者は、是れ方便善なり。」無漏善とは、繫縛を遠離し、理に合して相應す。是れ無漏善なり。中に於て、道共の無漏の律儀は、是れ其色陰にして、餘の心法等は餘の四陰と爲す。不善と言ふは、一切の無慚、無愧と俱なる者は是れ不善陰なり。中に於て、起す所の身口の惡業は、是れ其色陰なり。餘の四は知るべし。問うて曰はく、「善惡は相對の法なり、善の中に生得方便有ることを得。不善は、何が故に總じて、説いて一と爲し、二を分たざるや。」釋して言はく、「齊く類せば、理も亦應に然るべし。但今は、惡法は本來九品の性成じて、是方便進習を始めて具するに非ざることを明さんが爲に、是故に其方便の名を隱す。既に方便を隱す。生得も亦廢す。又復善法は、以て類に成じ難し。須らく上下を分つて漸習せしむべし。故に生得方便の異を説く。惡法は斷じ易し。總相に厭離す。是を以て生得方便の兩種の別を分たす。穢汚と言ふは欲界地の中の身邊兩見及び上二界の一切の煩惱、能く心を染汚するを、名けて穢汚と爲す。中に於て、初禪の穢汚の煩惱は、能く身口を動じて五陰の性を具す。彼梵王の諸の梵家に語るが如し、「汝但此に住せよ。我能く汝をして老死の邊を盡さしめん」と。即ち是れ安語なり。牛の黑齒を牽いて鼻處に之を求す、是れ身邪の諂なり。此身と口とは是れ其色陰にして、餘の心法等は是れ餘の四陰

なり。欲界の穢汚は是れ迷理の惑にして、親く身口の二業を發すること能はず。二禪已上は煩惱微細にして、身口を動ぜず。無色界の中には、身口業無ければ、一向に發さず。故に色陰無く、但餘の四有り。報生と言ふは、過因所生の眼等の諸根は是其色陰にして、報心の法等は餘の四陰と爲す。威儀と言ふは、身口の進止は是れ其色陰にして此を起す心法は餘の四陰と爲す。工巧と言ふは、身に世務を營み口に分處を言ふ、是れ其色陰にして餘の四陰なり。化を起さんと欲する時、先づ此念を作さく、「我今當に是の如きの色像、是の如きの語言を作すべし。此化を起す心心數法を以て餘の四陰と爲す」と。問うて曰はく、「化」と身通の體とは一異とや爲ん。」釋して言はく、「是れ異なり。」異相は如何。」「變化」とは、是れ起化の心、身通の體とは、是れ起化の力なり。又復化の心は、是れ遠方便なり。身通の體とは、親く能く化を起す。又復化の心は、唯是れ無記なり。身通の體とは、或時は是れ善にして、或時は復無記なり。」何が故に是の如くなる。」「通體に二有り。一には是れ修慧、二には是れ生慧なり。定に依つて修得する、是れ其修慧なり。天龍鬼等は、習性を假らずして能く變現す、是れ其生慧なり。是修慧は、體唯善にして定と相應す。生慧は無記なり。又復化の心は、或は自地の收、或は他地の攝なり。自地の化を起すは即ち自地の收、他地の化を起すは則ち他地の攝なり。其通體を論ずれば、唯自地に在り。」問うて曰はく、「何んが直に通體に依つて變化を起さずして、別して化心に從つて化を起すや。」通

【三〇】第五に有漏無漏に就いて五陰を分別す。

體能く化事を起すこと有り。雖も、若し化心無ければ、終に化を起さず。故に化心を須ふ。問うて曰はく、『若し要す化心に從つて化を起さしむれば、何ぞ通體を須ひん。』若し通體無ければ化心有りと雖も、前事を化さんと欲するに、終に現すること能はず。故に復之を須ふ。問うて曰はく、『色を化するには、當に正しく化心に從つて現すべしと爲んや、當に正しく通體に從つて發すべしと爲んや。』釋して言はく、『色を化するには、正しく通體に依り、遠くは化心に依る。化心は親く身口を動ずること能はず。是故に必ず通體に依つて化するなり。九陰是の如し。相從の三とは、初の三は是れ善、次の一は不善、後の五は無記なり。』毘曇是の如し。成實法の中には、唯一の行陰は三性に該通し、餘は皆無記なり。大乘の所説は多く『毘曇』に同じ。此四門（二六三）。

次に、有漏無漏に就いて分別す。『毘曇』の如きに依らば、向の九種の五陰の中に就いて第三は無漏、餘の八は有漏なり。成實法の中には、義に兩兼有り。若し漏を斷ずるが故に名けて無漏と爲さば、唯行心に在り。餘は皆有漏なり。若し漏を生ぜざるを名けて無漏と爲さば、無學の五陰は一向に無漏にして、凡夫の五陰は一向に有漏なり。學人は不定なり。若し斷結の處は是れ其無漏なれば、結未だ盡きざる處は是れ其有漏なり。大乘法の中には、眞徳の五陰は一向に無漏にして、分段の因果は一向に有漏なり。變易の因果相に隨はば無漏にして、體性は有漏なり。相は理に順ずるを以ての故に無漏と名け、性違するを以ての故に、名けて有漏と爲す。此五門（二六四）。

【三七】第六に五陰の常無常の義を辨ず。
【經】南本涅槃經第三十五。

【十五】涅槃經第二

【三八】第七に三界有無の義を明す。

次に、五陰の常無常の義を辨ず。小乘法の中には一向に無常にして、大乘法の中には大位に分つ。生死の五陰は一向に無常にして、涅槃の五陰は一向に是れ常なり。故に經に説いて言はく、「色は是れ無常なり。是色を滅するに因つて、常色を獲得す。受想行識も亦復是の如し」と。義に隨つて通じて論ずれば、生死の五陰は常無常有り。涅槃も亦爾り。生死の陰の中に、相有り、實有り、六識、七識は是れ其陰相なり。如來の藏一に滅諦に在るは、是れ其陰實なり。陰相は無常にして、陰實は是れ常なり。涅槃の陰の中に、體有り、用有り。體は則ち是れ常なり。上に説く所の如し。用は則ち無常なり。故に經に説いて言はく、「功德莊嚴は有爲、有漏、有礙、非常なり。良に以れば、世に隨つて生滅有るが故に。」此六門

次に、三界有無の義を辨ず。小乘法の中には、四空は色無く、滅定涅槃は一向に心無し。其無想定及び無想報は、兩論不同なり。「毘曇」には心無く、「成實」には之有り。故に彼論に言はく、「凡夫は心を滅すること能はず。心法は但塵心無きが故に、無想と説く」と。大乘法の中には、四空に色有り。故に「涅槃」に言はく、「非想天の亦色非色の如きは、我は非色と説く」と。非想既に有り。下の三類も然り。又大乘の中には、無想定を説く。乃至小乘無餘涅槃は、悉く皆心有りと。六識亡すと雖も、七識心在り。故に有心と説く。有心を以ての故に、受想行識の四陰無きにあらず。五陰の義を辨ずること是の如し。

大乘義章卷第八 本

大乘義章 卷第八 末

【一】 苦報義第七段に六道の義を明す中四門分別あり先づ第一に釋名。
 【地獄】 第八ニラヤ
 【泥犁】 (Niraya) 地獄のこ

六道の義の四門分別。名を釋す一。開合二。相を辨ず三。因を明す四。
 第一に、名を釋す。六道と言ふは、謂ゆる、地獄、畜生、餓鬼、人、天、修羅、是れ其六なり。地獄と言ふは、「雜心」に釋するが如きは、不可樂の故に、名けて地獄と爲す。地獄の中に釋すらく、「増上可厭の故に、泥犁と名く」と。泥犁は胡語にして、此には地獄と云ふ。不樂可厭は其義一なり。此兩釋は、皆厭心に對して、以て其過を彰す。是れ當相をもて其名義を解するに非ず。若し正く之を解すれば、地獄と言ふは、處に就いて名くるなり。地下の牢獄は、是れ其生處なり。故に地獄と云ふ。畜生と言ふは、「雜心」に釋するが如きは、傍行なるを以ての故に、名けて畜生と爲す。此れ乃ち相を辨じて名を解するに非ず。若し正く解釋すれば、畜生と言ふは、主の畜養するに従つて、以て名と爲すなり。一切の世人、或は飲食の爲に、或は驅使の爲に、此生を畜養す。行是義に従ふが故に、畜生と名く。餓鬼と言ふは、「雜心」に釋するが如きは、他に從つて求むるを以ての故に、餓鬼と名く。又常に飢虚せるが故に名けて餓と爲し、恐怖して畏多きが故に名けて鬼と爲す。言ふ所の人とは、「雜心」に釋するが如きは、意寂靜なるが故に、之を名けて人と爲す。此は人の徳に就いて、以て人を釋するなり。人は能く思うて邪念を斷絶するを以て、意寂

【雜心】 第八。

【地持】 第八。

【阿修羅】 アスラ (Asura)

【二】 第二に六道の開合を辨ず。

靜と名く。若し『涅槃』に依らば、多恩の義を以ての故に、名けて人と爲す。人中の父子、親戚相憐を多恩の義と名く。言ふ所の天とは、『雜心』に釋するが如きは、光明有るが故に、之を名けて天と爲す。此れ相に隨つて釋す。又云はく、天と云ふは、淨なるが故に天と名く。天の報清淨なるが故に、名けて淨と爲す。若し『地持』に依らば、所受自然なるが故に、名けて天と爲す。阿修羅とは、是れ外國の語にして、此には劣天と名く。又人相傳して不酒神と名く。阿の言は無なり。脩羅をば酒と名く。何の義をか不酒神と名くるを知らず。此六種を、羅に名けて趣と爲し、亦是名けて道と爲す。言ふ所の趣とは、蓋し乃ち因に對して、以て果に名くるなり。因は能く果に向ふ。果は因の趣と爲るが故に、名けて趣と爲す。言ふ所の道とは、因に從つて名くるなり。善惡の兩業は人に通じ、果に至る、之を名けて道と爲す。地獄等の報は道の所詣と爲るが故に、名けて道と爲す。故に『地持』に言はく、「惡行に乗じて往くを、名けて惡道と爲す」と。亦是可道とは、當相に名くるなり。六趣の道別なるが故に、六道と名く。此一門

(三) 次に、開合を辨ず。開合不定なり。之を總すれば、唯一の分段生死なり。或は分つて二と爲す。一には惡趣、二には善趣なり。此二門を以て統攝すること斯に盡す。或は分つて三と爲す。謂ゆる、三界生死の果なり。或は分つて五と爲す。謂はく、三惡道と諸天及び人となり。何の義を以ての故に、脩羅を説かざるや。『法念經』に依らば、脩羅に二あり。一には鬼、二には畜なり。良に以れば、鬼畜兩趣の攝なるが故に、更に別して論ぜ

【三】第三に六道の相を辨ず。先づ地獄の相に就いて明す。

『龍樹の説く等』大智論第十六。

す。「伽陀經」に依らば、脩羅に三有り。一には畜、二には鬼、三には是れ天なり。鬼畜天三趣の擲なるを以ての故に、別して之を論ぜず。或は分つて六と爲す。上の所説の如きは、脩羅は復鬼畜等の攝なりと雖も、種類衆多なり。故に別して之を分つ。形異に隨つて論ずれば、差別無量なり。開合是の如し。竟二門

(三)次に、其相を辨ず。先に地獄を辨ず。地獄に二有り。一には正地獄、二には邊地獄なり。正地獄とは、大海の下に在り。邊分に八有り。細に一百三十六所有り。邊分の八とは、一には活地獄、二には黒繩地獄、三には衆合地獄、四には叫喚地獄、五には大叫喚地獄、六には熱地獄、七には大熱地獄、八には阿鼻地獄なり。此南方の大海の下五百由旬に於て、閻羅界有り。閻羅は是れ鬼にして、罪人を分判す。閻羅界の下五百由旬にして、活地獄に至る。龍樹の説くが如くんば、此地獄の中、諸の受罪者は、各共に鬪諍す。惡心熾盛にして手に利刀を捉り、互に相殘害し、悶絶して死す。宿業の縁の故に、涼風來つて吹き、獄卒之に咄す、「罪人還活せよ」と。聲に應じて即ち活す。行是義に従つて活地獄と名く。多くは殺生に由るが故に、其中に生ず。此地獄の下に黒繩獄有り。一切の苦具轉前より過ぐ。黒繩繩を以て諸の罪人を斬して、悉く斷絶せしむるが故に、黒繩と云ふ。此地獄の中の苦事衆多なれども、黒繩の事顯なるが故に、偏に之を名く。其先世に良善言を譏謗し、妄言、綺語、兩舌、惡罵枉げて無辜を殺し、或は奸史と爲りて酷暴無道なるを以ての故に、其中に生ず。此黒繩の下に、次に衆合有り。一切の苦具轉前より重し。中に於て、獄卒、

種種の虎、狼、獅子、猪、羊、牛、犬一切の種形を化作して罪人を殘害し、或は復兩山を
 化作して相合し、鐵輪、鐵網一切の苦具をもて諸の罪人を治す。衆の苦具同く皆合會
 して罪人を殘害するを以ての故に、衆合と云ふ。其先世に多く衆生を殺すを以ての故に、
 其中に生ず。此衆合の下に、次に叫喚有り。一切の苦具博蘭よりも過ぐ。大鐵城の五百四
 旬なる有り。獄卒中に在りて、或は斫り、或は刺ぎ、或は刃し、或は刺し、或は擲ち、或
 は打ち、或は棒ち、或は杵き、其頭を打碎き、或は東西に驅る。是の如く一に非ず。諸
 の罪人をして、幡を發して叫喚せしむるが故に、叫喚獄と名く。良に先世に斗稱をもて欺
 誑し、非法をもて事を離はり、寄を愛けて還さず、下劣を侵陵し、諸の貪苦を惱まし、
 或は城邑を破し、傷害純切し、他の眷屬を離し、或は復善を許り、誘誑して之を殺し、人
 をして叫喚せしむるを以ての故に、其中に生ず。此叫喚の下に大叫喚有り。一切の苦具轉
 前よりも重し。獄卒中に於て或は罪人を驅り、熱鐵の屋に入つて大いに叫喚せしむ。大叫
 喚獄と名く。其先世に重ずれば、一切穴居の衆生を殺し、或は復深坑に墜し、墜陥して、
 大いに叫喚せしむるを以ての故に其中に生ず。此叫喚の下に熱地獄有り。一切の苦事復轉
 前よりも過ぐ。此地獄の中に、二の銅鐵有り。一を羅陀と名け、二を跋羅陀といふ。熱沸
 の鹹水中に涌波す。獄卒羅刹諸の罪人を斂して、之を中に投ず。或は炭坑に投じ、或は
 沸灰に投じ、或は膿血を以て自ら煎熬せらるるを、熱地獄と名く。其先世に父母及び諸
 の師長、一切の沙門、婆羅門等を惱亂し、其心をして熱せしむるを以ての故に、其中に生

【涅槃】第十九梵行品。

【龍樹の説く等】大智度論第十六。
【安浮陀】アルブダ(Arhubda) ニラル
【阿羅邏】アタタ
【阿波波】アババ(Apapa)
【眼】ハハーダラ(Hahadara)
【漚鉢羅】ウトバ
ラ(Utpala)

す。此下に、次に大熱地獄有り。一切の苦事轉前よりも重し。其先世に活ながら衆生を煮、或は復生ながら爛し、或は木を以て貫き、生ながらにして之を炙し、或は山澤及び諸の聚落、佛塔、僧房を焼き、或は衆生を推して湯火に墜さしむるを以ての故に、其中に生ず。此下に、次に阿鼻地獄有り。「涅槃」に説くが如し。此獄縱廣八萬由旬にして、其中の苦事前の七獄及び餘の別處に過ぐるること二千倍に足る。鐵の網羅を覆うて、上の火は下に徹し、下の火は上に徹して、交過通徹す。一人中に入れば、身亦遍満す。第二の身入れば、身亦遍満す。壽命一劫にして、苦暫くも廢すること無し。其先世に五逆罪を作り、方等經を謗し、大邪見を起し、因果無きを謗し、善根を斷滅するを以ての故に、其中に生ず。十不善業は皆此等の八大獄の中に生ず。向より來は日く曇相に隨つて言ふのみ。言ふ所の一百三十六とは、前の八地獄の一一に各十六の眷屬有り。八は是れ寒氷、八は是れ炎火なり。八の寒氷とは、龍樹の説くが如し。一には安浮陀、此には多孔と名く。應に是れ陵山には諸の孔穴多きが故に、多孔と名くべし。亦は此處に諸の罪人を凍して、穿穴をして多からしむるが故に、多孔と名くべし。二には足浮陀、此には無孔と名く。前に對して知るべし。此二種は、相に隨つて、之を名く。三には阿羅邏、此は寒を患ふる聲なり。四には阿波波、亦寒を患ふる聲なり。五には眼障と名く。亦是れ寒の聲なり。此三種は、聲に従つて以て名く。六には漚鉢羅、此には青蓮と名く。獄城の相狀、青蓮華に似たるが故に、青蓮と名く。亦は此處に諸の罪人を凍して、青蓮の色に似たるをもつて、漚鉢羅と名く

【鉢頭摩】 バドマ (Pāṭha)
【摩訶鉢頭摩】 マハーバドマ (Mahāpāṭha)。

【次に等】 次に畜生の相を辨ず。

【次に等】 次に餓鬼の相を辨ず。

【彼經】 法念經餓鬼品。

るなるべし。七には鉢頭摩、此には紅蓮と名く。釋するに兩義有り。前に準じて知るべし。八には摩訶鉢頭摩と名く。此には大紅蓮華と名く。義も亦前に同じ。此後の三種は、色に従つて名くるなり。八の炎火とは、一を炭坑と名け、二を沸屎と名け、三を燒林と名け、四を劍樹と名け、五を刀道と名け、六を刺棘と名け、七を鹹河と名け、八を銅柱と名く。前の八大獄は東西南北に、各二氷及び二炎火有り。故に十六有り。八大地獄に、各十六有り。即ち是れ一百二十八所なり。八大獄に通じて、便ち是れ一百三十六なり。『法念經』の如きは、此一百三十六所を明す。名字各異にして、業果も亦異なり。具に論ずべからず。正處是の如し。邊地獄とは、或は鐵圍の間に、或は餘の山中に、或は大海の裏に、諸の罪を治する處を邊地獄と名く。地獄是の如し。次に、畜生を辨ず。『法念經』の如きは、畜生を説く中に、凡そ三十四億の種類有り。中に於て、具に四生の不同、四食の異、業果の差殊有り。備には彼經の如し。具に説くべからず。畜生是の如し。次に餓鬼を辨ず。『法念經』に説くが如きは、餓鬼の申處に要す二有り。一には人中に在り、二には鬼界に在り。彼經に説くが如し。閻浮提の下五百山句、縱廣三萬六千山句なり。是れ餓鬼界なり。類別不同にして、三十六有り。一には餓身、餓鬼は其形饑に似たり。頭頂、眼、耳、鼻、舌、手、足等の相有ること無し。餓鬼界に任ず。初生の時倍して人身に過ぐ。後漸く增長して一山句に滿つ。猛火は餓身の中に滿ちて、其身を焚燒す。飢渴、熱惱能く救ふ者無し。人中の十歳は彼日夜に當る。餓身は彼に於て壽五百歳なり。其先世に財利を貪るが爲に、雇を受けて屠殺し、

【次に等】次に修羅の相を辨ず。

又池の寄を受けて抵拒して還さざるを以ての故に、其中に生ず。二には針口、餓鬼の身は
大なること山の如く、口は針孔の如し。亦鬼界に住して、壽は錢身に同じ。飢火身を燒き、
焦熱して救ふこと無し。并に一切の寒熱、衆毒、種種の苦を受く。其先世に人を雇つて屠
殺し、或は婦人有り、夫、沙門淨行を供養せしむるに、誑言して無と道ふ、是の如き等
比を以ての故に、其中に生ず。三には食吐鬼、四には食糞鬼、五には無食鬼、六には食氣
鬼、七には食法鬼、八には食水鬼、九には怖望鬼、十二は食唾鬼、十一には食鬘鬼、十二
には食血鬼、十三には食肉鬼、十四には食香煙鬼、十五には疾行鬼、十六には伺便鬼、十
七には地下鬼、十八には神通鬼、十九には熾鬼、二十には伺嬰兒便鬼、二十一には欲色
鬼、二十二には住海渚鬼、二十三には使執救鬼なり。是闍羅王なり。二十四には食小兒鬼、
二十五には食人精氣鬼、二十六には羅刹鬼、二十七には火爐燒食鬼、二十八には住不淨巷
陌鬼、二十九には食風鬼、三十には食火炭鬼、三十一には食毒鬼、三十二には曠野鬼、三
十三には住塚間食熱灰土鬼、三十四には樹中住鬼、三十五には住四交道鬼、三十六には殺
身餓鬼なり。鬼の別無量なり。要擇するに此に有り。其中の果報業因は各異なり。備に
は經に説くが如し。餓鬼是の次に脩羅を辨ず。『佛陀經』に依らば、脩羅に三有り。一には
天、二には鬼、三には畜生なり。『法念經』の中には、唯二種を説く。鬼と畜となり。鬼脩
羅とは、是れ其殺身餓鬼の所攝にして、地上の衆相山中に住す。畜脩羅とは、北方須彌
山の側の海底の地下に住し、四重の別有り。地に入ること二萬一千由旬にして、其羅睺

阿脩羅の住有り。地の曠さ一萬三千山旬にして、城を光明と名け、縱廣正等八千山旬なり。千柱の殿有りて寶房行列す。城地、山池一切の樂具皆寶を以て嚴り、其城内に於て四寶の園有り。各百山旬なり。一一の園の中に、三千種の如願の樹有り。樹は皆眞金、精靈虚妙にして、雲の如く影の如し。其園池の内には、雜寶色の鳥遊集して中に滿つ。王此城に住す。城外に別に十三の住處有り。一一の處に於て、各無量の阿脩羅衆有り。羅漢脩羅は是れ師子兒にして、形須彌の如し。能く自身を變じて、大小意に隨ふ。入中の五百歳は彼の日夜に當る。羅漢は彼に於て、壽五千歳なり。四の姪女有り。憶念に従つて生ず。其十二那由他の姪女有りて、以て眷屬と爲し、羅漢を圍繞す。其王過去に婆羅門と作る。曠野の處に於て、一の佛塔有り。高さ二十五里なり。中に於て種種の佛像を畫作す。種種の華葉樹林を莊嚴するに火の爲に燒かる。是婆羅門之を救うて免るることを得たり。救ひ已つて念を作さく、「我此塔を救うて福有りや以不や。若し福有らば、願くは大身を得ん」と。又外道の中多く布施を行す。故に斯散を受く。餘の阿脩羅は、過去世に於て、他の生を殺すを見て、強逼して放たしむ。或は名利の爲にし、或は王使と爲り、或は父祖の爲に不殺の法を習ふ。慈悲の心に非ず。淨戒を持たず、諸善を作さざるが故に、其中に生ず。次下の二萬一千山旬は、是れ其勇健脩羅の住處なり。王を勇健と名け、民を摩曠と名く。此には骨咽と云ふ。地を月鬘と名く。漸く前地より廣し。城を遊戯と名く。縱廣正等八萬山旬なり。嚴好前に過ぐ。其城は四金山の中に住在す。其山の高廣五千山旬なり。

王此城に住す。別に更に城有り。名けて星臺と曰ふ。民其中に住す。城外に園有り。縱廣一萬三千由旬なり。中に於て、凡そ七國の差別有り。種種に莊嚴す。是れ諸の脩羅なり。中に於て樂を受く。勇健脩羅は其形長大にして、二須彌の如し。若し自界に住して身を變ずること短小なれば、勢力轉勝る。人の六百歳は、彼の日夜に當る。此地の脩羅は壽八千歳なり。其王過去に他物を劫奪して、外道離欲の人に供養す。故に斯報を受く。餘の衆は往昔外道の欲を離れざる者、及び破戒の人を供養す。故に其中に生ず。次下の二萬一千由旬に、其華鬘脩羅の住處有り。王を華鬘と名け、民を遊戯と名け、地を脩那と名け、城を鎰毘羅と名く。縱廣一萬三千由旬なり。莊嚴微妙にして、諸前よりも勝れたり。華鬘脩羅の受くる所の形は、三須彌の如し。若し自界に住して、微小の身を現すれば、勢力轉増す。人の七百歳は、彼の日夜に當る。此地の脩羅は、壽七千歳なり。其王過去に飲食をもて破戒の病人に施與す。故に斯報を受く。餘の衆は前世に種種の戲に因つて、物を聚めて食と爲し、用以て人に施すも、木淨心無きが故に、其中に生ず。次下の二萬一千由旬に、鉢訶婆毘摩質多脩羅の住處有り。王を鉢訶と名く。亦是波羅訶と名く。此れ本一名にして、人の語音異なるなり。亦是毘摩質多と名く。所領の民を一切忍と名け、地を不動と名く。廣さ六萬由旬なり。城を鎰毘羅と名く。縱廣一萬三千由旬なり。七寶の宮殿微妙なること天の如し。毘摩質多是、其形長大にして四須彌の如し。若し本界に住して微小の身を現すれば、勢力は前三地の脩羅に過ぐ。人の中の八百歳は、彼の日夜に當る。此地の脩羅は

【次に等】次に人越の相を辨ず。

壽八千歲なり。其王前世に正見の心無く、持戒の者の來り從つて乞求するを見て、久うして乃ち之に施す。施し已つて、語つて言はく、「我今汝に施す、何の福德か有らん。我癡を以ての故に、汝に飲食を施す」と。邪見の心をもて施すが故に、斯報を受く。餘の脩羅衆は、前世の時に於て自ら身の爲り故に、菓樹一切の諸物を守掌して已か所には用ひず。然る後に人に恵むが故に、其中に生ず。此諸の脩羅は天と怨對し、天と共に戰ひ競ふ。備には經に説くが如し。具に諫ぶべからず。脩羅是の如し。次に人越を辨ず。人類は無量なり。大約四有り。謂はく、四天下の人散處別す。四天下の人に八の不同有り。一には住處の不同、須彌山の南に一の海渚有り。閻浮提と名く。縱廣二十八萬里なり。人其上に住す。東方に渚有り。弗婆提と名く。倍して閻浮より廣し。人其上に住す。西方に渚有り。瞿耶尼と名く。倍して弗婆より廣し。人其上に住す。北方に渚有り。鬱單越と名く。倍して瞿耶より廣し。人其上に住す。二には形相の不同、南閻浮の渚は、其地尖邪なり。人面之に像る。弗婆提の渚は、地半月の如し。人面之に像る。瞿耶尼の渚は、地滿月の如し。人面之に像る。北鬱單越は、其地正方なり。人面之に像る。三には長短の不同、閻浮提の人の身長は四肘、弗婆提の人の身長は八肘、瞿耶尼の人の長は十六肘、鬱單越の人は三十二肘なり。四には壽命の不同、閻浮提の人は壽命不定にして、下十歳を極め、上は八萬四千歳を極む。弗婆提の人の壽命は二百五十歳、瞿耶尼の人の壽は五百歳、鬱單越の人は定壽千歳なり。唯鬱單のみ定にして、餘は皆不定なり。五には果報の不同、南閻浮提の人は、壽十歳の時、

【次に等】次に天趣の相を辨ず。

- 【提頭頼吒】ドリ
タラーシニトラ
(Dhritānītra)
- 【毘舍闍】ガンダ
ルマ (Vishālakṣaṇa)
- 【毘舍闍】ヒル
イテヤ (Vishālakṣaṇa)
- 【毘舍闍】ヒル
イテヤ (Vishālakṣaṇa)
- 【鳩槃荼】クムバ
ーンダ (Kumbhānāda)
- 【薩婆多】ブレタ
タ (Sāvaka)

或は飢饉劫、或は疫病劫、或は刀兵劫の三劫互に起る。東西の二方は飢饉劫の時、飲食足らざれども、而も餓死すること無し。疫病劫の時、四大不和なれども、而も命を喪はず。刀兵劫の時、少しく瞋恚を増すとも相殺害せず。北鬱單越は、全く變異無し。六には優劣の不同、若し受道を論ずれば、閻浮提は上にして、弗婆は次下なり。瞿耶は漸く劣にして、憍單は最下なり。若し果報を論ずれば、憍單は最上にして、瞿耶は次下なり。弗婆は漸く劣にして、閻浮は最下なり。七には起業の不同、東西南方は具に十悪を行じ、鬱單越國には但綺語、貪瞋、邪見有り。綺語は業道成じて現行し、餘の三は業道成じて行ぜず。十業章に、具に廣く分別するが如し。八には起果の不同、北の鬱單越は死して皆天に生じ、餘趣に向はず。惡無きを以ての故に、餘の三天下は所向不定なり。人趣是の次に天趣を辨ず。天に欲、色、無色の差別有り。欲天に六有り。一には四天王天、須彌の四面の乾陀羅山は、地を去ること四萬二千由旬にして、縱廣も亦然り。上に四王有り。東に天王有り。提頭頼吒と名く。此には治國と名く。寶樹婆及び毘舍闍二部の鬼神を領す、南に天王有り。毘樓勒と名く。此には増長と名く。鳩槃荼、薩婆多二部の鬼神を主領す。西に天王有り。毘樓博と名く。此には雜語と名く。龍宮、單那二部の神を主領す。北に天王有り。毘沙門と名く。此には多聞と名く。夜叉、羅刹二部の鬼神を主領す。此四天王所領の天衆の種類に四有り。處別に四十有り。種類の四とは、一には鬘持天、餘處には名けて持華鬘天と爲す。二には遺留足天、此には鳥足天と名く。三を常恣意天と名け、四を三筵覆天と名く。初の

【毘樓博】 卑ル

【ハークシヤ(Vinipitaka)】

【見沙門】 ヲイシ

ユラマナ(Varamana)

【須彌】 スメル

【提婆那民】 シ

ヤクラ、デーワー

ナム、インドラ

(Sakra devanam I

laha)

【摩訶迦】 カウシ

カ(Kauzika)

【龍樹の説く等】

大智度論第五十六

豎持天に十住處有り。一を白摩尼と名け、二を峻崖と名け、三を果命と名け、四を功德行
 と名け、五を常喜と名け、六を行道と名け、七を愛欲と名け、八を愛境と名け、九を意動
 と名け、十を樂戲林と名く。此十は須彌の四面に居在して、龕窟の中に住す。南方に二有
 り。東南も亦然り。北方に四有り、彼一の窟は、廣さ千由旬なり。多く諸山に有り。寶
 樹寶池の無量莊嚴す。人の中の五十年は、彼の日夜に當る。彼天の壽命は五百歳なり。此
 十天の中、業果は各異なり。法念に説くが如し。迦留足天に十住處有り。一は行蓮華、
 二を勝路と名け、三を妙聲と名け、四を香樂と名け、五を風行と名け、六を覺喜と名け、
 七を普觀と名け、八は常歡喜にして、九を愛香と名け、十を均頭と名く。此十住處は皆
 須彌を繞る。業果の差別は「法念」に説くが如し。常慈意天、三摩婆天に、各十處有り。
 具に論ずべからず。初天是の如し。第二天は忉利天と名く。此に翻じて、名けて三十三天
 と爲す。須彌の頂に在り。須彌山は、善高山と名け、亦安明と名く。地を去ること八萬
 四千由旬なり。縱廣も亦然り。六萬の諸山を以て眷屬と爲す。上に三十三處の差別有り。
 中に帝城有り。名けて喜見と曰ふ。亦高きこと八萬四千由旬なり。帝城の四面に、各八
 處有り。人民の所居なり。是中の天王を釋提婆那民と名け、此方に翻じて、能爲天王と名
 く。釋とは是れ能、提婆とは是れ天、那民とは是れ主なり。佛も亦之を呼びて橋尸迦と爲
 す。蓋し乃ち其本姓に従つて名と爲す。龍樹の説くが如し。過去世の時、摩伽陀國に婆羅
 門有り。姓は橋尸迦にして、名は迦陀と曰ふ。大福德有り。共同友三十二人と共に善業を

【法念經】 第二十

【夜摩】 ヤー マ

【兜率陀】 ツジタ

(Tustā)

【龍樹の説く等】

【大智度論第五十四】

【須摩蜜陀】 スニ

ルミタ (Zummitā)

【婆舍跋提】 バリ

ニルミタ、ワシヤ

ヅルテイ (Pāṇi

Ṛṇṇāvāsvarūṇ)

【華嚴】 第十三。

修し、命終して皆切利天上に生ず。各一處に在り。木の橋戸迦を今は天主と爲す。故に不

姓に從つて橋戸迦と名く。三十二友は即ち輔臣と爲つて、四面に居在す。左輔右弼、前承

後儀なり。其天主を併せて、合して三十三なり。是故に名けて三十三天と爲す。【法念經】

に具に名字を列し、廣く以て分別するが如し。此前の兩天は、是れ地居天なり。第三天は、

名けて夜摩と曰ふ。此には妙善と云ふ。中に於て、凡そ三十六處の差別不同有り。是中の

天主を牟脩樓陀と名く。第四天は兜率陀と名く。此には妙足と名く。龍樹の説くが如し。

蓋し乃ち天主に從つて名と爲す。第五天は須摩蜜陀と名く。此には化樂と云ふ。自ら樂具

を化し已つて、受用することを得るが故に、化樂と云ふ。第六天は婆舍跋提と名く。此に

は他化自在天と云ふなり。他は樂具を化し已つて受用することを得るが故に他化と曰ふ。

此他化の上に、別に應天有り。處は他化に近し。亦他化の攝なり。此六は是れ其欲界天な

り。問うて曰はく、『欲界の日月星天は何れの天の攝ぞ。』釋して言はく、『近きに隨はば

四天王の攝なり。別に隨つて之を分たば、六天に收めず。』何が故に是の如くなる。『四

天王天は是れ其地居にして、彼は是れ空居なり。又六欲天は壽命短促なり。此は壽一劫な

り。是故に攝せず。』欲天是の如し。色界天とは、經論不同なり。若し『雜心』『地持論』

等に依らば、十八天有り。初二三禪に、各三天有り。第四禪の中に、獨り九天有り。故に

合して十八なり。若し『華嚴』に依らば、色界に具に二十二天有り。初禪に四有り。一に

は是れ梵天、二には梵衆天、亦是れ梵身と名く。此前の兩天は小梵の生處なり。三には梵輔

天、四には梵衆天、亦是れ梵身と名く。此前の兩天は小梵の生處なり。三には梵輔

【地持】 第二。

【阿迦尼吒】 アカ
ニシニエタ (Akaniṣṭha)

天、貴賈の生處なり。四には大梵天、是れ中間の禪梵王の生處なり。前の梵輔と同じく一處に在り。臣民の別なり。二禪に四有り。一には是れ光天、二には少光天、三には無量光天、四には光音天なり。三禪に四有り。一には淨天、二には少淨天、三には無量淨天、四には遍淨天なり。四禪に十有り。當分に四有り。一には福天、二には福生天、三には福愛天、四には廣果天なり。『地持』等に依らば、此四禪の中には皆初の天無し。當應に近きに隨つて第二に攝屬すべし。故に別に論ぜず。此等の差別は、合して十二有り。第四禪の中、其別種に隨つて、更に六天有り。謂はく、無想天及び五淨居なり。無想天は、前の廣果と同じく一處に在り。諸の外道有り。此無想を取つて、以て涅槃と爲し、無想定を修して斯報を趣求す。是人命終して廣果處に生ず。初後は有心にして、中間は無心なり。五百劫を経、此れ別に無心の法を得るを以ての故に、別して一天と爲す。五淨居とは、一には無煩天、亦是無凡と名く。二には無熱天、三には善見天、四には善現天、五には阿迦尼吒天、此には無小と名く。阿那含の人は、無漏道を以て第四禪に熏ず。熏に五階有り。是故に此五天の報を得。何となれば、五階は、謂はく、下と中と上と上の上となり。下は無煩を得、乃至上上は無小天を得。之を熏すること云何。『那含は先に第四禪を得竟つて、禪を熏するが爲の故に、四禪の中に於て、先づ百千の無漏の心に入る。次に百千の有漏禪の心に入り、復百千の無漏の心に入る。以て漸く之を略す。乃至先に二の無漏心に入り、次に二の有漏、後に二の無漏なり。是を禪を熏するの方便道成すと爲す。然して後に復一

【大智論】 同論第九。

【摩訶首羅】 マヘーシーユヅラ (Mahe Svaha)

【四】 第四に六道の因を辨ず。

【龍樹の等】 智度論第三十、八十六、九十六。
【地經】 第四。

の無漏心に入り、次に一の有漏、後に一の無漏なり。是の如く五遍合して十五心有り。十は是れ無漏、五は是れ有漏なり。是を禪を熏するの究竟成就すと爲す。此五遍の中、初品を下と爲し、乃至最後を以て上と爲す。純熟するを以ての故に、是の如く第四禪を熏修し竟つて、次に三禪を熏じ、次は二にして、次は初なり。熏の法は前に同じ。然して後に、彼五淨居の中に生ず。此五淨居は、那含の住處なり。是故に、亦是五那含天と名く。此を以て、前に通じて二十二と爲す。『大智論』に依らば、五淨居の上に別に、更に一の菩薩の淨居有り。摩訶首羅と名く。此方には名けて大白在天と爲す。是れ第十地の菩薩の住處なり。此を以て前に通じて、色界に合して二十三天有り。無色に四有り。一には是れ空處、二には是れ識處、三には無所有處、四には非想非非想處なり。此等の因行は、八禪の中に具に廣く分別するが如し。天趣是の如し。此三門(四つ)に、次に、其因を辨ず。因に通別有り。通じて之を論ずれば、唯善と惡となり。善は、謂はく、十善にして、惡は、謂はく、十惡なり。十善は是れ三塗の通因にして、十善は是れ其く、十善にして、惡は、謂はく、十惡なり。十善は是れ三塗の通因にして、十善は是れ其

人、天、傍生、龍樹の言はく、「惡に三五品有り。謂はく、下中上なり。下は餓鬼に生じ、中は畜生に生じ、上は地獄に生ず」と。『地經』の中も亦此說に同じ。善も亦三品有り。下は傍生に生じ、中善は人に生じ、上善は天に生ず。問うて曰はく、「脩羅は四惡趣の攝なり。何が故に、論に、「下善、中に生ず」と言ふや。」釋して言はく、「脩羅は雜業の招く所なり。是雜業の中に、善有り、惡有り。惡業は彼總報の果を得。故に惡趣

【經】 法念經。

と名く。善業は彼別報の樂受を得。是故に名けて下善生と爲すなり。又復惡業は彼正報を得るが故に惡趣と名け、善は依果を得るが故に善生と説く。問うて曰はく、「諸餘の鬼畜等の中にも、亦樂受有り。並に善生と爲すべし。何が故に、偏に脩羅に善生すと言ふや。」釋して言はく、「脩羅は樂受増上す。經の中に説くが如し、「脩羅の受くる所は、其樂、天の如し。是故に偏に脩羅に善生す」と言ふ。」問うて曰はく、「脩羅の樂既に天に次ぐ。樂を感ずるの善を、應に名けて中と爲すべし。何が故に下と名くるや。」釋して言はく、「彼樂は施福の招く所なり。施福増上す。故に樂、天の如し。施福を戒に望むるに、戒善に及ばず。是故に下と名く。」問うて曰はく、「施福能く勝樂を生ず。何が故に、善道の身を生ずること能はずして、乃ち惡趣に生ずるや。」釋して言はく、「善趣は必ず戒に由つて得。彼は戒善に非ず。是故に善趣の身に生ずること能はず。又脩羅の中に、鬼有り、畜有り。是れ天なる者有り。鬼畜脩羅の樂は、善に従はずして生ず。總報は惡より得。故に惡趣と名く。天脩羅は、總報善業に従つて得と雖も、疑心劣なるが故に、聖に會ふこと能はず。是故に名けて下善生と爲すなり。」通因是の如し。若し別因を論ずれば、六道の中には種類無量にして、業因皆異なり。「法念經」に、具に廣く分別するが如し。六道の義之を辨すること嚴爾り。

七識住の義。

【五】 苦集義第八
段に七識住の義を
明す。

七識住とは、經の中に説くが如し。何が故に説くとならば、外道の別計を破せんが爲の故なり。諸の外道有つて、識を計して我と爲し、善を擇んで居す。佛之を破せんが爲の故に、識住にして我住に非ずと説きたまふ。識住の不同は、離分して七と爲す。七名とは是れ何ぞ。一、欲界の五天、之を以て一と爲す。初禪を二と爲し、二禪を三と爲し、三禪を四と爲し、空處を五と爲し、識處を六と爲し、無所有處を以て第七と爲す。此七處は、心識樂にして安んず。故に識住と名く。問うて曰はく、「何が故に、受作、想行住等と名けずして、偏に識住と云ふや。」釋して言はく、「住の義理も亦應に通ずべし。但識は是れ主なるが故に、偏に説くのみ。」問うて曰はく、「欲界に三惡趣有り。何が故に説かざる。」一論に「三惡には苦の逼迫有つて、識、樂安せず」と言ふ。是を以て論せざるなり。」又問はく、「色界に、具に四禪有り。第四禪の中の寂樂は下に過ぎたり。何の義を以ての故に、識住と名けざる。」一論に自ら釋して言はく、「第四禪の中に、無想定有つて心識を殘害す。識、樂居せざるが故に、識住に非ず。又四禪の中に、五淨居有つて涅槃に趣入す。亦心識を殘、識、樂在せざるが故に、識住に非ず」と。問うて曰はく、「無色に、四空處有り。何の義を以ての故に、非想を説いて、以て識住と爲さざる。論に、「非想には滅盡定有つて、亦心識を殘ひ、識、樂安せざるが故に、識住に非ず」と言ふ。」七識住の義之を辨ずること論爾り。

【七〇】 苦報義第九段に入難義を説く
中五門の分別あり
第一に釋名。

八難の義に五門分別あり。名を釋す一。相を辨ず二。五趣の分別三。煩惱業報の分別四。四輪に約對する明治の差別五。煩惱

第一に、名を釋す。八難と言ふは、一には是れ地獄、二には是れ畜生、三には是れ餓鬼、

四には盲聾瘖瘂、五には世智辯聰、六には佛前佛後、七には瞽單越國、八には長壽天なり。

初の三と後の一とは、趣に就いて名を彰す。中に於て、初の三は全く三趣を攝す。是故に

直に地獄、畜生、餓鬼難と言ふなり。第八の一難は天趣を盡さず。長壽は之を別つ。是故に

に名けて長壽天難と爲す。盲聾瘖瘂と世智辯聰とは當體に稱を立つ。正しく盲聾、世智辯

聰を用て、以て難と爲すが故に。佛前佛後は、時に就いて目を彰す。瞽單の一難は、處別

を號と爲す。此八種は能く聖道を礙ふるが故に、名けて難と爲す。此一門

次に、其相を辨ず。此八種は四義有るが故に、所以に是れ難とす。一には苦障ふるが故

に難とし、二には樂障ふるが故に難とし、三には惡増すが故に難とし、四には善微なるが

故に難とす。一切の三塗、盲聾瘖瘂は苦障ふるが故に難とし、長壽と瞽單とは樂障ふるが

故に難とし、世智辯聰は惡増すが故に難とす。其れ相見にして正道に違するを以ての故に。

佛前佛後は善微なるが故に難とす。言ふ所の地獄鬼畜難とは、一切の三塗は報障深重にし

て能く聖に會すること無し。是故に難と爲す。問うて曰はく、若し三塗は是れ難にして、

聖に會すること無からしむとならば、是義然らず。方等に説くが如し。諸の衆生有つて地

獄の中に在り。佛の光明に遇ふに、光を尋ねて佛に詣り、法を聞いて道を得。龍樹の説

くが如し。鬼畜の兩種は佛の説法を聞いて、道を得る者有り。『長阿含』天品の中に説くが

【七】 第二に入難の相を辨ず。

如し、鬼子母神は法を聞いて道を得。『提謂經』の如きは、諸の龍鬼等、佛の説法を聞いて、亦皆道を得。三塗の中には、聖に會ふことを妨げず。云何が是れ難ならん。』釋して言はく、『三塗は是れ障難の處にして、應に道を得べからず。但衆生有つて久く勝因を習ふ。遇三惡に墮するも、今如来及び大菩薩の不思議力に値ふ。品縁の爲の故に、道を得る者有り。難陀等の如し。煩惱障纏するをもつて、應に道を得べからず。佛を縁と爲すが故に、聖道に入ることを得。此も亦是の如し。自力及び舍利等の小因縁有ること無きが故に、能く聖道に入る。故に名けて難と爲す。又三惡の中に、聖に値うて道を得。多くは是れ權人にして、餘の生を引いて出心を起さしめんが爲に、所得有ることを示す。是れ實凡に非ず。實凡は得ざるが故に、名けて難と爲す。言ふ所の盲聾瘖癡とは、盲は聖を覩ず、聾は法を聞かず、瘖は諸受せず、聖に入るに堪へず。是故に難と爲す。』問うて曰はく、『一切の盲聾瘖癡悉く皆是れ難なりや、難に非ざる者に有りや。』釋して言はく、『生盲、生聾、生瘖は是れ八難に收む。餘の者は難に非ず。』問うて曰はく、『一切の盲聾瘖癡は行見聞無く、諸受到堪へず。何が故に、偏に生盲聾瘖を説いて、以て難と爲すや。』釋して曰はく、若し生盲聾瘖に非ざれば、先に友を見、法を聞き、諸受し、後依つて道に階るべし。全障に非ざるを以て、是故に難に非ず。世智辯は、人有り、聰利にして妄執廻し難し。所以に是れ難なり。言ふ所の佛前佛後の難とは、佛前佛後は佛法無き時なり。出道を知らず。聖を求むるに心無し。所以に是れ難とす。』問うて曰はく、『辟支は無神の世に出づ。佛前佛

【八】第三に五趣に就いて八難を分別す。

後に何の難有らんや。釋して言はく、「辟支は久修純熟す。自力能く度す。師教を假らず。其餘の衆生は是の如くなる者無し。故に餘人に就いて、之を説いて難と爲す。」憍單越とは、北憍單越は樂報殊勝にして、都て苦事無し。其中の衆生は慧力微弱にして、厭離して過を觀、出を求むることを知らず。是故に難と爲す。問うて曰はく、「欲天の樂は憍單越に勝る。何が故に難に非ざる。」釋して言はく、「六天は樂報勝ると雖も、而も彼天の中の慧力増強にして、能く厭離して過を觀じ、出を求むるに堪へたり。是を以て難に非ず。又彼天の中に、佛の化する所の鏡林、鏡壁有り。諸天中に於て己が來世の所向の惡趣を見て、愁憂の心深く、天の樂を失す。千世を隔つるが如く、遺餘有ること無し。又報盡きんと欲して、五衰現する時、愁憂して頼むこと無し。此二時の中に、能く三有を厭ひ、出離を趣求す。是を以て難に非ず。」憍單越國には、是の如きの事無し。所以に是れ難とす。長壽天とは、色、無色界は、命報延長にして、下半劫を極むるをもつて、長壽天と名く。彼天の中は、寂離安隱なり。凡夫彼に生じて、多くは涅槃と謂つて保著の情深し。又佛法の依つて出を求むべき無し。所以に是れ難とす。問うて曰はく、經に「生般涅槃、行、無行等皆長壽に在つて、涅槃の果を得」と説く。云何ぞ説いて、長壽は是れ難と言ふや。」釋して言はく、「難とは、凡に就いて以て説く。彼生般等は是れ那名の人にして、上に生じて滅を得。是を以て過無し。」此二門

次に、五趣に就いて八難を分別す。地獄鬼畜は、下の三趣に在り。盲聾、世智、佛前佛

【九】第四に煩惱業報に就いて分別す。

【一〇】第五に四輪に就いて對治を辨法す。【成實】第二、四

後及び瞽單越は、人趣の少分なり。但人の中に就いて、盲聾、世智、佛前佛後は、瞽單越を除いて餘の三方に在り。瞽單は唯瞽單越國に在り。長壽の一難は、天趣の少分なり。欲界天は是れ難に非ざるを以ての故に。此三門

(九) 次に、煩惱業報に就いて分別す。地獄、鬼、畜、盲聾瘖瘂、長壽瞽單は、報に就いて難を説く。中に於て、地獄、鬼、畜、盲聾は是れ其苦報にして、瞽單、長壽は是れ其樂報なり。世智辨聰は是れ煩惱の分なり。邪見の攝なるが故に。佛前佛後は煩惱業報の三分に收めず。但佛法の依つて出を求むべき無し。是故に難と爲す。此四門

(一〇) 次に、四輪に就いて、以て對治を辨す。『何者が四輪なる。』『成實』に説くが如し。一には善處に住す。謂はく中國に生ず。二には善人に依る。謂はく佛世に値ふ。三には自ら正願を發す。謂はく正見を具す。四には善根を宿植す。謂はく、現在に於て諸根完く具す。此四は唯天と人との中に在つて有るが故に、論に名けて天人の四輪と爲す。言ふ所の輪とは、喻に就いて名くるなり。能く八難を摧いて、聖道無漏の法輪を出生す。故に名けて四輪と爲す。四輪是の如し。治相は云何。論の中に説くが如し。初め善處に住して能く五難を摧く。謂はく、三惡趣と長壽と瞽單となり。人天に在つて、生じて中國に住するを以ての故に、斯五を離る。善人に依らば、佛前佛後の難を遠離す。佛世に値ふを以ての故に、斯難を離る。自ら正願を發さば、世智辨聰の難を遠離す。正求を以ての故に、彼邪難を離る。善を宿根すれば、盲聾瘖瘂の難を遠離す。諸根を具するが故に、彼難を遠

離す。八難是の如し。

九衆生居の義

【二】苦報義第十
段に九衆生居の義
を明す。

九衆生居は、經の中に説くが如し。何が故に説くとならば、外道の聰計を破せんが爲の故なり。諸の外道有つて、總じて衆生を計し、以て神我と爲し、善を擇んで居す。佛之を破せんが爲の故に、斯九を説きたまふ。是れ衆生の居にして、我の居に非ざるなり。何者か是なる。『欲界の天人は、之を以て一と爲す。初禪を二と爲し、二禪を三と爲し、三禪を四と爲し、無想を五と爲し、空處を六と爲し、識處を七と爲し、無所有處は、之を以て八と爲し、悲想を九と爲す。此九處は衆生樂住するをもつて、衆生居と名く。問うて曰はく、『向前の七識住の中には、無想及び非想處を説かず。今此には、何が故に、通じて説いて居と爲すや。』釋して言はく、『此處は心識を殘害するが故に、識住に非ず。衆生を滅せず。是故に説いて衆生居と爲すなり。』問うて曰はく、『欲界三塗の中にも亦衆生有り。何が故に、説いて衆生居と爲さざる。』釋して言はく、『衆生は同く三惡を厭ふ。樂住の處に非ず。是を以て説かず。』又問はく、『色界第四禪の中には、無想天を除いて、餘に八天有り。衆生樂住す。何が故に、説いて衆生居と爲さざる。』『雜心』に釋して言はく、『彼四禪の中に五淨居有り。涅槃を樂求して久住を欲せず。是故に説いて衆生居と爲さず。餘に福生、福愛、廣果有り。或は淨居を求め、或は無色を求め、或は涅槃を求めて、久住する

【二】 苦報義第十一段に十二入を明す中、六門の分別あり、先づ第一に釋名。

ことを欲せず。是故に亦衆生居に非ざるなり」と。九居の義略して辨ずること是の如し。

十二入の義に六門分別あり。別四。除に對しての分別五。界に對しての分別六。

第一に、名を釋す。十二入とは、識を生ずるの處なり。之を名けて入と爲す。八勝處を八除入と名くるが如し。又復根塵迭に相觸入す、亦名けて入と爲す。入の義同じからざるをもて十二を離分す。謂ゆる、眼、耳、鼻、舌、身、意、色、聲、香、味、觸、法なり。此十二の中、初の六は是れ内、後の六は是れ外なり。内を六根と名け、外を六塵と名く。云何が眼と名け、乃至意と名くる。一釋に兩義有り。一には對に約して以て論ず。色に對するを眼と名け、乃至第六法に對するを意と名く。二には能に就いて以て釋す。能見を眼と名け、能聞を耳と曰ひ、能嗅を鼻と稱し、能嘗を舌と名け、能覺を身と稱し、能思を意と曰ふ。云何が色と名け、乃至法と名くる。一釋に云はく、二有り。一には約對して以て釋す。眼に對するを色と名け、乃至第六意に對して法と名く。二には當相に釋す。眞礙を色と名く。通じて之を論ずれば、聲、香、味等は皆悉く眞礙す。而も後色は眞礙の相顯なり。故に偏に之を名く。又復形顯を亦名けて色と爲す。眞礙を聲と稱し、芬靄を香と名く。此名不足なり。中に於て、亦腥臊臭等有り。備に擧ぐべからず。且く香の稱を存す。此名則ち是れ其語門を盡さず。可嘗を味と名け、可業を觸と曰ひ、自體を法と名く。名字是の如し。

【二】 第二に十二人の體性を顯す先づ内の六入に使いて

【成實】 同論第四

第二の四の中に、其體性を明す。眼等の五根は、淨色を體と爲す。毘曇の如きに依らば、四大所造の淨色を體と爲し、成實に依らば、四大所成の淨色を體と爲す。問うて曰はく、四大所成に増減無し。云何が體を成じて九種各別なる一體して言はく、「四大所成は法爾として、外の四大の増減無しと雖も、而も其所成の粟麥豆等の各各差別有るが如し。又業に由るが故に、根の差別を成ず。業有れば能く一種の四大を生じ、眼根を集成して能く色を見る。乃至業有れば一の四大を生じ、身根を集成して能く觸を覺す。燈明を燃して其眼根を得。鏡、鈴等燃して其身根を得るが如し。是の如きの一切なり。」問うて曰はく、「若し業に由つて能く見乃至能く覺せしむれば、何ぞ眼を用ふるや。」釋して言はく、「復業有つて因と爲ると雖も、必ず縁縁を積る。發は復業に由つて得と雖も、必ず種子を積るが如し。此も亦是の如し。」次に意入を辨す。心を以て體と爲す。「毘曇」の如きに依らば、一切の六識能く後を生ずる義は、悉く是れ意根なり。亦く意入と名く。自餘の一切の想受行等の前を以て後を生ずるは、皆意入に對す。法人の教なるが故に。問うて曰はく、「若し一切の六識能く後を生ずる義をして、悉く是れ意根ならしむれば、所生の六識は通じて名けて意識と爲すことを得るや以不や。」論に自ら解釋す。依に二種有り。一には共依、六識共に意根に依つて生ず。二には不共依、六識の心各別に根に依るなり。其共依に望むれば、同じ意識と名け、不共依に望めては、眼等の五識各別に名を受けて意識と名けず。若し「成實」に依らば、義釋に三有り、一には通相して以て論す。一切の四心前を以て後を生ず

【次に等】次に外
の六入に就いて。

【二三】第三に十二
入の相を辨ず。先
づ眼入。

るは、悉く是れ意根なり。同く意入と名く。前より生ずる義は齊く意識と名け、法入の所
收なり。二には五識を簡別す。五識を生ずるを除いて、自餘の一切の識想受行の前を以て
後を生ずるは、悉く是れ意入なり。此一門に據らば、五識已前の次第滅の心は、是れ法入
に收む。是れ意入に非ず。三には別名の意識に對して以て意入を明す。識想受行の四心の
中、局つて唯行末の心の意識を生ずる者を分取して、以て意入と爲す。餘の者は皆是れ法
入の所攝なり。大乘の所説は「毘曇」と同じ。内入是の如し。次に外入を辨ず。色等の五
塵は、色を以て體と爲す。毘曇の如きに依らば、四大所造の色香味觸を以て五塵と爲し、
成實法の中には、四大所因の色香味觸を以て四塵と爲す。四大相擊つて便ち聲發すること
有り。是れ則ち、四塵は是れ四大の因、聲は是れ大の果なり。五塵是の如し。次に法入を
辨ず。法入は寛く通ず。前の十一を除いて、自餘の一切の有爲無爲は、悉く是れ法入な
り、體性是の如し。

第三門の中に、次に其相を辨ず。眼入に二有り。一には肉、二には天なり。肉に二種有
り。一には報根、二には長養なり。人鬼畜等の所有の眼根は、過の因より生ずれば、説い
て報根と爲し、現の飲食、醫藥等の縁に藉つて眼を得れば、説いて長養と爲す。天眼の中
にも亦二種有り。一には報根、二には方便なり。始め欲天より色究竟に至つて報得する淨
眼は是れ其報根にして、四禪に依つて天眼を修得するは、是れ其方便なり。問うて曰はく、
「經の中に、五眼有りと説く。何が故に、是中には但二種のみを説くや」と釋して言はく、

【次に等】次に耳
乃身入に就いて

【次に等】次に意
入に就いて。

「慧眼、法眼、佛眼は、體是れ慧性にして、是れ色根に非ず。故に此に論ぜず。」眼入是の如し。次に耳入を論ずれば、眼根と同じ、鼻舌身入も亦二種有り。一には肉二には天なり。肉は前と同じ。天の中には但報生の根のみ有つて、其方便無し。何が故に是の如くなる。』欲界の諸天は香を嗅ぎ、味を嘗め、觸を覺せんと欲するが爲に、又嚴身の爲の故に、報根有り。色界の諸天は觸身の爲の故に、亦報根有り。然るに鼻舌身は神通の性に非ず。摩到れば方に覺す。玄知すること能はざるが故に、禪に依つて方便修起せず。問うて曰はく、「若し天の鼻、舌、身有らば、經論の中には、何が故に説かざる。釋して言はく、『經論には、實に、上天に鼻、舌、身有りと説く。但し此三根は神通の性に非ず。人と別無きが故に、經論の中には、天鼻、天舌通等を説かず。』次に意入を辨ず。毘曇法の中には、六識後に生ずるを即ち六意と爲す。成實法の中には、意に通別有り。行末の心意識を生ずるは、之を以て別と爲し、一切の四心後に生ずるを意と爲し、之を以て通と爲す。別名の意は、義別に三有り。一には五識の後行末の心意識を生ずるを、説いて意入と爲し、二には五意識の後行末の心意識を生ずるを、説いて意入と爲し、三には第六獨頭識の後行末の心、意識を生ずるを、説いて意入と爲す。若し意入前の五識の開導を藉つて生ずること有らば、五意識と名け、五識の開導を藉らずして生ずれば、名けて獨頭と爲す。別名是の如し。若し通を論ずれば、要は四重と爲し、廣は十二と爲す。四重と言ふは、識、想、受、行能く一切を生ず。通じて意根と名け、齊く意入と名く。十二と言ふは、五識已後の一重の四心

【次に等】 次に色入を辨ず。

【次に等】 次に聲入に就いて。

【次に等】 次に香入に就いて。

と、五意識の後の一重の四心と、獨頭識の後の一重の四心となり。三重の四心各能く後を生ず。斯を意根と名け、齊く意入と名く。故に十二有り。義に隨つて別して分たば、意は乃ち無量なり。次に色入を辨ず。總じては唯一色なり。或は分つて三と爲す。謂はく、好惡中なり。或は分つて五と爲す。謂ゆる、青、黄、赤、白、黒色なり。或は二十を分つ。『毘曇』に説くが如し。謂ゆる、青、黄、赤、白、煙、雲、塵、霧、光、影、明、闇、方、圓、長、短、高、下、正、不正等なり。成實法の中には、其定數無し。但し彼論の中には、唯、青、黄、赤、白、黒等の諸雜の色を説いて、以て色塵と爲し、自餘の一切の煙、雲、塵、霧、方、圓、長等は、皆是れ假色なり。法入の所收にして、是れ色入に非ず。光、影、明、闇は、彼宗の中に於ては、其色相に隨ひ、青、黄、赤等の諸色の所攝なり。若し復廣く論ずれば、乃ち無量なり。次に聲入を辨ず。總じては唯一聲なり。或は分つて三と爲す。一には因受四大の聲、衆生身の能く受心を生ずるを受の四大と名く。斯に依つて發する聲を、名けて因受と爲す。二には因不受四大の聲、謂はく、外の四大所發の聲なり。三には因俱聲、謂ゆる、擊鼓、吹貝等の聲の内外俱に發するを、名けて因俱と曰ふ。廣くは則ち無量なり。次に香入を辨ず。總じて唯一香なり。或は二種を分つ。『成實』に説くが如し。一には成實香、即ち樹香等なり。二には落生香、彼香質に依つて香氣を緣生して、質を離れて去る。緣生不同なり。或時は地を成ず。香を衣に熏じて衣をして香有らしむるが如し。或時は水を成ず。香を塵に熏じて、油に香有らしむるが如し。或時は風を成ず。風、香樹を

【次に等】次に味入を辨す。

【次に等】次に觸入に就いて。

經過して、來つて風中に香有るが如し。或は復孤り遊び、更に所成無し。此二香の中、成實の香は鼻根聞かず。緣生の香氣の來つて鼻根に至るは鼻根の所得なり。問うて曰はく、「香氣來つて鼻に至る時、當に獨り來るとや爲ん、更に伴有りとや爲ん。」外道宣説すらく、「十微相扶けて、來つて鼻根に至る」と。十微と言ふは、色等の五塵と地等の五大となり。「毘曇」に宣説すらく、「八微相扶けて、來つて鼻根に至る」と。八微と言ふは、前の十微の中、聲及び空を除く。「成實論」の中には、廣く此義を破す。若し香氣と彼色等と俱に來つて鼻に至ると言はば、前賢應に減すべし。亦都て盡すべし。又香を燒くが如く、質壞して香盛なり。明かに知んぬ。色等と俱に來らずして、唯風大と俱に來つて鼻に至ることを。或は復孤り來る。或は分つて三と爲す。「雜心」に説くが如し。謂はく、好、惡、中なり。此好、惡、中は、情に隨つて分別す。情に順するを好と名け、情に違するを惡と名け、非違非隨を説いて、以て中と爲す。相に隨つて別して論ずれば、香は乃ち無量なり。次に味入を辨す。總じては唯味なり。或は分つて三と爲す。謂はく、好、惡、中なり。或は分つて六と爲す。謂はく、辛、苦、甜、酸、鹹、淡の別なり。「涅槃」の中の如きは、「甜酥八味具足す」と宣説す。彼文に數あらず。是れ何なるかを知らず。別に隨つて以て分たば、味も亦無量なり。次に觸入を辨す。總じては唯一觸なり。或は分つて三と爲す。謂はく、好、惡、中なり。或は十一を分つ。「毘曇」に説くが如し。謂はく、堅、濕、煖、動、輕、重、澁、滑、冷、飢、渴等なり。堅は是れ地大、濕は是れ水大、煖は是れ火大、動は是れ風大

なり。此四は能造にして、後の七は所造なり。後の七は復四大所造なりと雖も、中に於て、亦増徴の不同有り。『雜心』に説くが如し。火風増の故に輕、地水増の故に重、地風増の故に澁、水火増の故に滑、水風増の故に冷、風増の故に飢、火増の故に渴なり。義を以て之を推さば、觸は應に十五なるべし。十一は前の如し。更に應に四有るべし。地火偏増するに應に強觸を立つべし。地増の増の故に飽、水増の故に滿なり。『成實』の中には、『毘曇』に説かざること有り。四大齊等なるに、應當に一の調停の觸を立つべし。論の中には辨ぜず。此を以て前に通するが故に、應に十五なるべし。成實法の中には、觸に定數無し。義を以て之を推すに、三十九有り。一には堅、二には軟、三には輕、四には重、五には強、六には弱、七には冷、八には熱、九には澁、十には滑、十一には強、十二には濯なり。此十二は是れ其外の觸なり。十三には猗樂、身、惱患を離れて、自ら猗適なることを覺するが故に、猗樂と名く。十四には疲極、十五には不疲極、十六には病、十七には老、十八には身利、十九には身鈍、二十には身嬌、二十一には身重、二十二には迷、二十三には悶、二十四には隨膏、二十五には疼、二十六には痺、二十七には頻申、二十八には飢、二十九には渴、三十には飽、三十一には滿、三十二には嗜樂なり。其意む所に便するが故に、嗜樂と云ふ。三十三には不嗜、身便ならざる所を不嗜樂と名く。三十四には情、三十五には欠味、三十六には痛、三十七には痒、三十八には急、坐禪の人の得る所の急觸の如し。三十九には緩なり。此後に列ぬる所の二十七種は、是れ其内の觸なり。此諸の觸の中、前

【次に等】次に法入を明す。

【四】以下、第四に十二入を義に隨つて分別す、中に六あり、先づ一に假實分別。

の三十四は是れ彼『成實』觸品の中に説く。後の五種は、義に隨つて準置す。此等は皆是れ身の覺する所なるが故に、通じて觸と名く。問うて曰はく、「猶等は是れ心數の法なり。云何が之を説いて觸入と爲すや、釋して言はく、觸入は皆是れ色法なり。心に寄つて別を顯す。若し復廣く論ずれば、觸も亦無量なり。次に法人を辨す。總じては唯一法なり。或は分つて二と爲す。一には有爲、二には無爲なり。或は分つて六と爲す。有爲に三有り。一には色、二には心、三には非色非心なり。毘曇の如きに依らば、善、惡、無作を以て色法と爲し、想、受、行等を以て心法と爲し、自餘の十四不相應行を非色心と爲す。若し『成實』に依らば、過未の五塵、身口の作業、及び四大等の假名の色を以て色法と爲し、意識に前の次第滅の心を以て心法と爲す。若し復通じて論ずれば、一切の六識、前より生ずる義は、悉く是れ心法なり。假名の衆生、善惡の無作を非色心と爲す。無爲にも亦三有り。謂はく、虚空と數滅と及び非數滅となり。此義は前の三無爲章に、具に廣く分別するが如し。相別是の如し。

第四門の中に、義に隨つて分別す。中に於て六有り。一には假實の分別、二には三世の分別、三には三界の分別、四には離合の分別、五には因に就いての分別、六には輩に就いての分別なり。初に假實とは、眼等の五根は外道宣說すらく「是れ定性の有なり」と。毘曇法の中には、彼定性を破し、眼等は因縁より生ず」と宣說す。緣に従ふと説くと雖も、而も體は是れ實にして、虚に非ず、假に非ず。成實法の中には、一向に是れ假なり。

【次に等】二に三
世に就いて十二入
を分類す

諸大を攬つて根を集成するを以ての故に。第六意入は「毘曇」には是れ實なり。成實法の中には、亦是實、亦是假なり、一念生ずるの後、之を名けて實と爲し、三相念を成ずる、之を名けて假と爲す。色等の五塵は、毘曇法の中には、一向に是れ實なり。成實法の中には亦是實亦是假なり。五塵の法止現じ一念にして相續に通ぜざる、之を名けて實と爲す。又復餘塵、餘大を攬つて、假りに以て集成せざるが故に、名けて實と爲す。言ふ所の假とは、釋するに兩義有り。一には因和合、細を攬つて麤を成ず。隣室の色は之を以て細と爲し、多集にして見るべきは之を名けて麤と爲す。二には法和合、苦、無常等同體虚集するが故に、名けて假と爲す。大乘法の中には、亦是實亦是假なり。實の義は前に同じ。假に五種有り。一には因和合、二には法和合にして、此二は前に同じ。三には妄想虚假、色等の諸法は誑想假有にして、虚空華の如し。四には妄想虚假、色等は皆妄心に從つて假集し、夢の所見の如し。五には眞實縁集の假、謂はく、眞諦に依つて色等を縁集す。故に經の中に、「三界は虚妄にして、皆一心の作なり」と説く。論に自ら釋して言はく、「皆心作なりとは、謂はく、眞心の作なり」と。斯五義を具するが故に、假と名くるなり。次に法入を辨す。「毘曇」は唯實なり。成實法の中、相に隨つて以て論すれば、實有り、假有り。過去の五塵、三無爲等は是れ其實法にして、自餘の一切の我、人、衆生、舍宅、軍衆、森林、草木、四大等の法は、悉く是れ假名なり。理に據つて、以て論すれば、一切の諸法、悉く是れ假名なり。四假に攝するが故に、大乘も亦爾り。此一門次に、三世に就いて、諸人を辨

【次に等】三に三界に就いて十二入を分別す。

【次に等】四に根塵離合の義を辨ず

定す。「毘曇」の如きに依らば、十二入法は並に三世に通ず。若し「成實」に依らば、六根、五塵は局つて唯現在の「一刹那」の項なり。過未に通ぜず。過未に在る者は法人に攝せらるるが故に。法人の一種は三世に該通す。法は寛なるを以ての故に。大乘法の中には、文に定判無し。多くは「毘曇」に同じ。此二門。次に、三界に就いて、諸人を分別す。香味の二塵は、小乘法の中には、唯欲界に在つて、上界には則ち無し。上界には其段食の性無きが故に、大乘法の中には、諸佛菩薩の眞實の報果は三界に屬せず。餘は則ち前の如し。眼等の五根、色、聲、觸塵は、小乘法の中には、定んで欲、色に在り。大乘法の中には、若し佛菩薩の眞實の報果は三界に屬せず。餘は三界に通ず。大乘は「無色界の中に猶色有り」と宣説するが故に。意入、法入は、若し無漏なれば、三界に屬せず。餘は三界に通ず。此三門次に、根塵離合の義を辨ず。外道の宣説すらく「六根、六塵合して知を生ず」と。根塵は處を異にす。云何が合することを得ん。彼説かく「眼根は其神光有り、去つて前塵に到るが故に、能く色を見る。餘の四根は光の塵に至る無く、神我の力を以て塵の根に至るを感ず。是故に合して知る、意味の一種は神我を將ゐて去り、往いて前境に到るが故に、能く法を知ることを。」『成實論』の中には、廣く此義を破す。眼光若し去らば、應に中間羅細の物を見るべし。又若し光去らば、火を見るに應に燒かるべく、水を見るに應に濕ふべし。又若し光去らば、遙に遠色を覩るに應當に遅く見るべし。遠を見るに遅ならざるは、明かに知んぬ、去らざることを。又光若し去らば、遙に遠色を見るに應に疑を生ずべからず。

又若し光去らば、水精中の物、淵中の魚石は、眼悉く之を見る。云何が到ることを得ん。又若し色を見るに合して見るとならば、現に見るに物を以て眼中に置くに、自ら了せざる所なり。明かに知んぬ、合せざることを。若し我に由ると言はば、餘の四塵をして來つて根に至らしむるは、是中の但陰のみなり。何の處にか我有つて、説いて能く感ずと爲す。若し根に光無ければ、神我の力將る去ること能はず。摩亦光無ければ、神我の力焉んぞ能く來らしめん。又聲、味等は質體を離れず。縦ひ神我有るとも、何んが能く彼をして質を離れて來らしめん。問うて曰はく、「若し聲、質を離れざれば、彼此隔絶す。云何が聞くべき。」釋して言はく、「世間の見聞は法爾なり。色遠しと雖も、眼能く之を見るが如し。聲も亦是の如し。何ぞ怪むべきに足らん。若し神我は意を將りて去ると言はば、是中に我無し。誰か意を將りて去らん。又意若し去らば、身の中に心無し。塵に死人と名くべし。人を死と名けず。明かに知んぬ、去らざることを。又意若し去らば、他方の物見聞せざる處なり。具に應に之を知るべし。知らざるを以ての故に、明かに知んぬ、去らざることを。所破是の如し。『正義は云何。』『成實法の中、眼根の一種は離して知を生ず。鼻、舌及び身は、合して知を生ず。耳根の一種は、亦是は離、亦是は合なり。耳鳴の聲は合して聞くことを得、自餘の外聲は離して聞くことを得。意は色法に非ず、到不到無く、離に非ず、合に非ず。若し『雜心』に依らば、眼、耳の二根は、離して知を生ず。耳鳴を聞くと雖も、亦是は離して聞く。鼻、舌及び身は、『成實』と同じ。意根の一種は、亦是は離、亦是は合なり。故に彼偈

【次に等】五に四の義に就いて十二入を分別す。

【次に等】六に報の義に就いて十二入を分別す。

【成實】 第四。

に言はく、「二境は近受せず。遠近の境界は一なり。餘は一向に近受なり」と。二境近せずとは、謂ゆる、眼、耳なり。遠近の境一なりとは、謂ゆる、意俱なり。餘は一向に近なりとは、謂はく、鼻舌身なり。此四門次に、因の義に就いて、諸入を分別す。十二入の中、眼等の五根、香、味、觸等は是れ記法にして、一向に因に非ず。色、聲の二塵は、諸論の説不同なり。成實法の中には、一向に因に非ず。彼五塵には身觸の質無しと説く。是故に因に非ず。毘曇法の中には、因と非因と有り。身口業の中、善惡の質は一向に是れ因、餘は因に非ず。意根、法塵は因と非因とに通ず。意根の中、善惡俱なる者は之を説いて因と爲し、餘は因に非ず。法塵の中、諸の業煩惱及び此相應共有の法は之を判じて因と爲し、餘は因に非ず。此五門次に、報の義に就いて、諸入を分別す。眼等の五根は、成實の如きに依らば、一向に是れ報にして、毘曇法の中には、報と非報と有り。過の因より生ずる者は、之を説いて報と爲し、長養の根及び修習の修習に依つて起す者は、説いて非報と爲す。意入の一種は、報、非報に通ず。色等の五塵は、成實には唯報なり。毘曇法の中には、聲入の一種は一向に報に非ず。何が故に是の如くなる。彼論に宣説すらく、「色報は無間にして、聲報は有間なり」と。是故に報に非ず。又復色報は因に酬いて、已に定んで心に隨つて轉ぜず。聲は則ち酬らず。大小は心に隨ひ、輕重は意に任ず。是故に報に非ず。問うて曰はく、「若し聲は報に非ずと言はば、經の中に宣説す、鐘、鈴等を施して好音聲を得」と。云何が報に非ざる。論に自ら釋して言はく、「鐘、鈴を施すに出つて、好

【四】以下、第五に十二人を五陰に別して分別す。

四大を得て、咽喉に在つて聲を發すること微妙なり」と。其所依に従ふが故に、説いて報と爲す。聲體は報に非ず。餘の四塵は報、非報に通ず。報根と俱なる者は、之を説いて報と爲す。餘の者は報に非ず。「問うて曰はく、外の色、香、味、觸等は、是れ其依果なり。云何が報に非ざる。」論に自ら釋して言はく、「善惡の業風、諸の衆生を吹いて、好惡の處に往かしむ。而も所往の處は、業に由つて生ぜず。是故に報に非ず」と。大乘法の中には、色等の五塵は報、非報に通ず。過の因より生ずるは、一向に是れ報にして、變化の所爲及び餘の一切の方便を現じて起すは、皆悉く報に非ず。法人の中には、報と非報とに通ず。善惡等の法と三無爲等を、説いて非報と爲す。餘は是れ報なり。其別是の如し。

第五門の中に、陰に對して分別す。陰は謂はく、五陰なり。一の色陰を分つて、以て十人及び一の少分と爲す。五根、五塵は、是れ其十人なり。少分と言ふは、異因の如きに依らば、法入の中、善惡の無作は是れ其色陰なり。若し『成實』に依らば、法人の中、過未の五塵、及び四大等の假名の色は是れ其色陰なり。故に少分と言ふ。餘の四陰の中、毘曇の如きに依らば、分つて識陰を取り、以て意入と爲す。想、受及び行は法人に攝屬す。若し『成實』に依らば、義に隨つて通論す。一切の四心就く後を生ずる義は、悉く是れ意入にして、一切の心識前より生ずる義は、悉く法人に屬す。若し五識を簡ばば、五識は前の次第滅の心は、是れ其法人にして、餘は皆意入なり。皆是れ前名の意根の攝なるが故に。若し常に彼別に意識と名くるに對すれば、行末の心の意識を生ずる者は、是れ其意

【二六】以下、第六に十二入を十八界に對して分別す。

入にして、餘は皆法入なり。
第六門の中に、界に對して分別す。此十二入を十八界に對す。云何が分別する。毘曇の如きに依らば、五根、六塵は十八界の中、即ち十一と爲す。意入の中、六識を分出して、前に通じて、合して十八界の義と爲す。若し「成實」に依らば、五根、五塵は十八界の中、即ち十一と爲す。法入の中、六識を聞分して、前に通じて、合して十八界の義と爲す。彼宗には、六識は法入の攝なるが故に。十二入の義略して辨すること是の如し。

十八界の義に十一門の分別あり。
學等の分別八。三斷の分別九。三對の分別十。識縁の不同十一。

名を釋す一。三聚の分別二。内外の分別三。三性の分別四。地に就いての分別五。有爲無爲の分別六。有漏無漏の分別七。

【二七】苦報義第十二段に十八界の義を明す中、十一門の分別あり、先づ第一に釋名。

第一に、名を釋す。眼等の六根と色等の六塵と及與び六識と、是れ其十八なり。能生を根と曰ふ。能く識を生ずるが故に。能空を塵と名く。心を空汚するが故に。然るに此色等は當法に名を立つれば、六境界と名く。而も塵と言ふは、偏に染心に對して、以て名を彰すなり。良に以れば、淨心は多く理を緣じて生ず。染は事に依つて起るが故に、偏に染に對して以て塵と名くるなり。能了を識と曰ふ。諸塵を了するが故に。此十八は、經に名けて界と爲す。亦は名けて性と爲す。界別を界と名け、性別を性と名く。諸法の性別なるが故に、名けて界と爲す。此一門
次に、三聚に就いて、諸界を分別す。三聚と言ふは、謂ゆる、色、心、非色非心なり。

【二八】以下、第二に三聚に就いて十八界を分別す。

【色の中等】先づ色法に就いて。

十八界の中、五根、五塵は一向に是れ色、意根、六識は一向に是れ心なり。法界の中には、備に三聚を含む。『毘曇』の如きに依らば、善、惡、無作を以て色法と爲し、想、受、行等を以て心法と爲し、自餘の十四不相應行及び三無爲を非色心と爲す。成實法の中には、過未の五塵、四大等の色を以て色法と爲し、五識已前の次第滅の心は是れ其心法にして、假名の衆生、善惡無作、三無爲等を非色心と爲す。三聚は是の如く、色の中別して、三門を以て分別す。一には四大に就いて諸色を分別す。『成實』の如きに依らば、色、香、味、觸は是れ四大の因にして、能く四大を成じ、大いに成ぜられず。聲塵の一種は是れ四大の果にして、四大に依つて生じ、大を攬つて成ぜず。眼等の五根は、四大に成ぜらる。法界の中の色は義則ち不定なり。若し過未の五塵の色法を論ずれば、前の五塵に同じく大いに成ぜられず。過未の五根は、前の五根に同じく四大に成ぜらる。餘の外の假色は四大の成ぜらるるに非ず。四大相は望めて相生有ることを得て、相成の理無し。毘曇法の中には、眼等の五根、色、聲、香、味及び法塵色は、皆四大の造なり。觸界は不定なり。輕等の七種は是れ四大の造なり。堅、濕、煖、動は四大の觸にして、四大の造に非ず。問うて曰はく、『當に一種の四大具に諸色を造すべしと爲んや。當に別に造すべしと爲んや。二者同じか。』らず。有人宣説すらく、「一種の四大具に諸色を造す」と。有人復言はく、「聚まる者は同じく造し、異なる者は別に造す」と。『雜心』の存する所は、四大別に造す。都て共する理無し。二には對に就いて分別す。色に三種有り。一には可見有對、二には不可見有對、三には不

【次に等】次に心法を明す。

可見無對なり。色界の一種は可見有對たり。眼の所行と爲すを、名けて可見と爲す。其對斷色根の所對と爲すが故に、有對と名く、聲、香、味、觸は、是れ不可見有對なり。眼の所行に非ざるを、不可見と名く。有對は前に同し。眼等の五根及び無作色は、是れ不可見無對なり。眼の所行に非ざるが故に、不可見なり。意の所緣と爲して對斷色根の所對と爲さざるが故に、無對と名く。三には受に約して分別す。若は色法有つて破壞逼迫して能く覺心を生ずるは、之を名けて受と爲し、覺心を生ぜざるを名けて不受と爲す。雜心に説くが如し。眼等の五根、若は現在に能く覺心を生ずる、之を名けて受と爲し。若は過未に在つて覺心を生ぜざるを、名けて不受と爲す。色、香、味、觸の現在に在つて俱を離れざるは、之を名けて受と爲す。餘は不受なり。聲塵及與び法塵の中の色は一向に不受なり。覺を生ぜざるが故に。色法是の如し。次に心法を辨す。中に於て、覺觀に約就して分別す。『毘曇』の如きに依らば、五識の中、定んで覺觀有り。意根、意識及與び法界は、義別に三種有り。初禪已還は定んで覺觀有り。中間禪地は覺無く、觀有り。二禪已上は定んで覺觀無し。同うて曰はく、『五識は何んが是の如くならざる。』釋して言はく、『五識は唯欲界と初禪の中に在つて有り。上地には則ち無し。是故に五識は唯覺觀に在り。若し『成實』に依らば、五識の中、定んで覺觀無し。五識の中には思惟無きを以ての故に。意根、意識及び心法界は、總は『毘曇』に同じく、細は則ち同じからず。彼宗に宣説すらく、覺觀の二心は遍く三界に通ず」と。是れ心の縝細の相なるを以ての故に。三界の中に就いて、欲界

【次に等】次に非色非心法を辨ず。【地持】第六。

【九】以下、第三に内外に就いて十八界を分別す。

【三】以下、第四に三性に就いて十八界を分別す。

地の心は定んで覺觀有り。色、無色界は、禪の方便には有るも、定體には則ち無し。其寂なるを以ての故に。心法是の如し。次に非色非心の法を辨ず。中に於て、有無に約就して分別す。若し空理に對すれば、一切の法界は斯を名けて有と爲す。故に「地持」に云はく、「有爲無爲は之を名けて有と爲し、我我所無きを無所有と名く」と。相に隨つて分別せば、三無爲の法は是れ其非色非心の無法なり。有は則ち不定なり。毘曇法の中には、十四不相應行を宣説して、以て非色非心の有法と爲し、「成實」には、假名の衆生、善惡の無作を宣説して、以て非色非心の有法と爲す。此二門

次に、内外に就いて、諸界を分別す。中に於て、若し三分に就いて之を論ぜば、六根は是れ内、六塵は是れ外にして、六識を中と爲す。兩分もて之を論ぜば、根塵は上の如く、六識は不定なり。毘曇法の中には、之を攝して内と爲す。故に彼論に言はく、「内界を十二と説く」と。「成實」は兩らず。彼宗にては、六識は法入の所攝なり。是れ則ち六識は之を攝して外に在り。此三門

次に、三性に就いて、諸界を分別す。善、惡、無記は、是れ其三性なり。「成實」の如きに依らば、五根、五塵及與び五識は、一向に無記なり。意根、意識及與び法界は、三性に該通す。毘曇法の中には、眼等の五根、香、味、觸塵は、一向に無記なり。餘は三性に通す。故に彼論に言はく、「無記は、謂はく八種にして、餘は則ち善、不善なり」と。意根、意識及與び法界は、善惡知るべし。「何者か是れ其色聲五識の善惡の義なる。」「彼宗の如き

に依らば、善心の禮拜、讚歎等の事は、是れ善の色聲にして、惡心の身口の二業を發動するは、是れ惡の色聲なり。五識地の中、善の境界を緣じて五識を生ずる、之を判じて善と爲す。若し可貪、可瞋等の境を緣じて五識を生ずれば、判じて不善と爲す。問うて曰はく、『何が故に、毘曇法の中には、色聲は三性に該通す』と宣説し、成實法の中には、唯無記と説くや。』釋して言はく、『毘曇』にては、身口の二業は是れ色聲の性なり。故に三性に通す。成實法の中には、一切の善惡は皆假の中に在り。實の中には則ち無し。然るに彼論の中、五塵は唯實にして假名に通ぜず。故に善惡無し。』問うて曰はく、『何が故に、善と惡とは唯假の中に在つて、實法に通ぜざるや。』釋して言はく、『彼宗の相續の中には方に損益有り。一念には無きが故に。』又問はく、『五識は、毘曇法の中には、三性に通すと説く。何が故に、』成實』には唯無記と説くや。』釋して言はく、『毘曇』は假の義を立てず。善惡は皆實の中に在りと宣説す。是故に一念の五識の中に、善惡有ることを得。』成實』にては、善惡は假の中に在り。五識は唯實なり。故に善惡無し。又復『毘曇』には、心法同時なり。五識の心邊に善惡の數有り。王を以て數に従ふが故に、善惡と説く。成實法の中には、心は獨にして並せず。五識の心起つて直に五塵を了す。更に餘の義無きが故に、善惡無し。』問うて曰はく、『若し成實法の中に、五識無記にして善惡無からしむれば、五識の心は應に妙行に非ざるべし。』釋して言はく、『彼宗の五識の心の體は、實に妙行に非ず。五識の心の後、行の中に過無きを、方に妙行と名く。大乘の所説は、凡夫二乘は、』毘

【三】以下、第五に自地他地に就いて十八界を分別す。

「臺」と同じ。諸佛、菩薩の實報の境界なり。根識は唯善なり。塵は三性に通ず。此四門次に、自地、他地に就いて分別す。自地と言ふは、身、欲界に在らば、自地の中に於て、根、塵及び識一切具足す。身、初禪に在らば、自地の中に於て、六根具足す。塵は但四有り。色、聲、觸、法なり。彼には段食無し。故に香、味無し。識も亦四有り。鼻、舌識を除く。香、味無きが故に。身、二禪乃至四禪に在らば、自地の中に於て、六根、四塵は初禪と同じく、識は則ち不定なり。毘曇法の中には、但意識のみ有り。餘識は皆無し。若し餘識無ければ、云何が色を見、聲を聞き、觸を覺する等の事を得るや。彼論に眞説すらく、「二禪已上は初禪の識を借るが故に、色を見、聲を聞き、觸を覺することを得」と。「成實」に彼を説くに、初禪と同じ。當地に具に眼、耳、身、意の四種の識有るが故に、身四空に在るは、義則ち不定なり。小乘法の中には、但意根、意識、法界有り。大乘には、彼根、塵及び識を説く。四禪と同じ。大乘には、彼に猶色有りと説くが故に。自地是の如し。他地と言ふは、鼻、舌、身根及び彼根の識は、唯當地に起つて他地に通ぜず。眼、耳、意根及び此根の識は、身下地に在り。土地の中に於て、所有の處に隨つて皆悉く起すことを得。六塵の中香、味及び觸は、唯自地の根識の爲に了せられ、他地に通ぜず。玄に知ること無きが故に。色界と聲界とは、小乘法の中には、四禪已還は身何れの處に隨つても、他地の中に於て皆具聞を得、無色界に通ぜず。大乘の所説は、色界已還は小乗と同じ。無色界の中には、同有り、異有り。彼凡夫二乗の人を説かば、無色界に在つて、他地の中に於て

所有の色、聲皆見聞せず。心微劣なるが故に、此は小乘に同じ。菩薩彼に在らば、他地の中に於て、一切の色聲皆見聞することを得。心自在なるが故に、根明利なるが故に、此れ小乘に異なる。法界は不定なり。毘曇の如きに依らば、有漏の法界は、四禪已還は身何れの處に隨つても、他地の中に於て、皆縁知を得る。無色に生在するは、則ち是の如くならず。唯自地及び土地の法を縁じて、下地を縁ぜず。故に彼論に言はく、「無色は下地の有漏を縁ぜず」と。無漏の法界は、則ち是の如くならず。他地の中に於ては、身何れの處に隨つても皆縁知することを得。上下を簡ばす。若し「成實」に依らば、一切の他地の有漏、無漏は、三界の中に於て、身何れの處に隨つても皆縁知することを得。然も彼論の中に、「無色界は下地有漏の法を縁ぜず」と雖も、心通暢せざること筋羽を焼くが如し。是れ縁せざるには非ず」と説く。大乘法の中は、「成實」と同じ。問うて曰はく、「人有つて身欲界に在つて、初禪の眼を用て自地の色及び他地の色を見る。所生の眼識は何れの地の攝する所ぞ。釋して言はく、『所生は初禪地の攝なり。眼に依つて生ずるが故に。』又問はく、人有つて身、欲界及び初禪地に在つて、二禪の眼を用ひ、乃至彼四禪地の眼を用て、自地の色及び他地の色を見る。所生の眼識は何れの地の攝する所ぞ。二毘曇の如きに依らば、皆初禪の攝なり。彼宗の中、二禪已上は皆眼識無し。初禪の識を借つて諸色を了するが故に。言ふ所の借るとは、二禪已上は所有の眼識、初禪の識と麤細相似す。是故に借ると言ふ。彼より來らざるを、説いて借ると爲すなり。人有つて身、二禪已上に生じて、自地の眼及び他

【三】以下、第六に有爲無爲に就いて十八界を分別す

【三】以下、第七に有漏無漏に就いて十八界を分別す

地の眼を用て、自地の色及び他地の色を見る。所生の眼識當に知るべし。亦是れ初禪の所攝なり。上に類して知るべし。若し『成實』に依らば、一切の眼識は眼處に隨つて説く。下識を借らず。大乘法の中には、文に定判無し。多くは『成實』に同じ。識を借ること無きが故に。眼識既に然り。耳識同じく兩り。若し身識を論ずれば、初禪已還は即ち當地に説く。二禪已上は、所覺の觸必ず當地に在り。所生の識も亦初禪の攝なり。此五門

次に、有爲無爲に就いて分別す。小乘法の中、前の十七は一向に有漏なり。法界は有爲、無爲に該通す。色法、心法、非色心法は、是れ其有爲なり。虚空數滅及び非數滅は、是れ其無爲なり。大乘法の中、諸佛菩薩の眞實の根識は、體は則ち無爲なり。用は有爲を現す。六塵の中、三無爲法は一向に無爲なり。自餘の一切は、佛菩薩の實法に就いて説かば、是れ其無爲なり。餘は有爲なり。此六門

次に、有漏無漏に就いて分別す。毘曇法の中、五根、五塵及及び五識は一向に有漏なり。漏より生ずるが故に。漏に依住するが故に。意根、意識及及び法界は漏、無漏に通ず。成實法の中には、若し漏を斷ずるが故に、名けて無漏と爲すは、『毘曇』に同じ。若し漏を生ぜざるを無漏と名くれば、凡夫の諸界は一向に有漏、無學の諸界は一向に無漏なり。學人は不定なり。已斷結の處は一切無漏にして、未斷結の處は一切有漏なり。大乘法の中、諸佛菩薩の實報の根識は、體は則ち無漏なり。用現は有漏なり。六塵の中、漏、無漏に通ず。色等の五塵は、佛菩薩の實報に就いて説かば、是れ其無漏なり。餘は是れ有漏なり。

【三五】以下、第八に學無學等に就いて十八界を分別す。

【三五】以下、第九に見斷等の三斷に就いて十八界を分別す。

法塵の中、數滅無爲は一向に無漏にして、餘は五塵の如し。此七門

【四十五】

次に、學等に就いて、諸界を分別す。法に三種有り。一には是れ學法、謂はく、三乘の人無漏の因なり。二には無學法、謂はく、三乘の人無漏の果なり。三には非學及び非無學、

謂はく、餘の一切の有漏の諸法及び三無爲なり。學等是の如し。小乘法の中、意根、意識

及及び法界は、義三種に通ず。無漏の因及び學等見は、之を説いて學と爲す。學人汎爾に

無漏を遊觀して、結を斷ぜざる者を學等見と名け、無漏の極果及び彼無學等見智の者を、

説いて無學と爲す。何者か是れ其無漏の極果なる。『謂ゆる、盡智及び無生智なり。』何

者か是れ其無學等見なる。『謂はく、無學の人無漏を遊觀するなり。自餘の意根、意識、

法界を説いて、非學及び非無學と爲す。餘の十五界は、一向に非學及び非無學なり。大乘

の辨する所は、凡夫二乘の十八界の法は、小乘と同じ。諸佛菩薩の十八界の法は、皆三種

に通ず。一切の菩薩の實報の境界、根、塵及び識を、悉く名けて學と爲す。『地持』に説

くが如し。種性の菩薩は六入殊勝、無始法爾なり。及び先より來善を修して得る所なり。

是の如きの一切は、是れ學の六根なり。此に依つて生ずる心は、是れ學の六識なり。實報

所得の淨土の境界、及び三昧に依つて現する所の境界は、是れ學の六塵なり。一切如來の

實報の境界、根、塵及び識は、是れ其無學なり。餘は非學及び非無學なり。此八門

次に、三斷に就いて、諸界を分別す。三斷と言ふは、一には是れ見斷二には是れ修斷、

三には是れ無斷なり。見斷斷の法を名けて見斷と爲し、修斷斷の法を名けて修斷と爲し、

【三六】以下、第十八界を分別す。

自餘の無漏無爲法等を名けて無斷と爲す。「毘曇」の如きに依らば、五根、五塵、及及び五識の此十五界は、唯修道斷なり。自餘の三界は、亦是見諦斷、亦是修道斷、亦是是れ無斷なり。見惑と俱なる者を説いて見斷と爲し、修惑と俱なる者を説いて修道斷と爲し、餘は無斷と名く。若し「成實」に依らば、五根、五塵、及及び五識は、見諦斷及び修道斷に通じ、無斷に通ぜず。見惑を斷ずるが故に、彼をして三塗の五根、五塵、五識をして生ぜざらしむるを、判じて見斷と爲す。修惑を斷ずるが故に、彼をして人天の五根、五塵、五識をして起さざらしむるを、判じて修道斷と爲す。故に彼論に言はく、「見斷の法とは、謂はく、示相我慢及び彼所起の諸餘の法なり。修道の法とは、不示相我慢及び彼所起の諸餘の法なり。見諦の惑體は是れ示相慢なり。所起の業報は是れ其餘法なり。修道の惑體は不示相慢なり。所起の業報は是れ其餘法なり」と。彼「成實」の中、因を斷ずれば果喪ふ。斯を數減と名く。是故に見修の二種の惑果は、其根本に従つて、説いて見斷及び修道斷と爲す。意根、意識、及及び法界は、「毘曇」に同じ。大乘法の中には、十八界の法皆三種に通ず。初地に除く所の一切の生死十八界の法は、斯を見斷と名く。二地已上は一切除く所の十八界の法は、是れ其修斷なり。諸佛菩薩の實報所成の根識は無斷なり。寧ろ三種に通ず。此九門

次に、三對に就いて、諸界を分別す。三對と言ふは、「雜心」に説くが如し。一には境界有對、二には障礙有對、三には緣有對なり。境界有對とは、一切の色根及び心法能く外の境界に於て囑對分了するを、境有對と名く。此門の中に於て、六根、六識及び心法界は、

【七】以下、第十一に諸識に約して縁の不同を辨ず。

是れ其有對なり。色等の五塵及び法界の中の非心の法は、是れ其無對なり。非情なるを以ての故に。障有對とは、色根、色塵共に相礙對し、障隔して通ぜざるを、障有對と名く。此門の中に於て、十界は有對なり。謂ゆる、眼、耳、鼻、舌、身根、色等の五塵なり。餘の七心界及び心法界は、一向に無對なり。是れ色色相對礙するに非ざるが故に。問うて曰はく、若し五根、五塵をして是れ障礙ならしむれば、眼等の根處は、應に色、香、味等有ることを得べからず。『若し有ることを得ば、便ち障礙に非ず。論に言はく、「各極微聚に住するが故に、猶障礙と名く」と。』縁有對とは、心心法等境に對して能く縁するを、縁有對と名く。此門の中に於て、七界の少分は是れ其有對なり。謂はく、七心界は法界の少分なり。餘は無對なり。無縁を以ての故に。竟る。此十門

次に、諸識に約して、縁の不同を明す。『雜心』に説くが如し、「色界は二識識なり。乃至觸も亦然り。諸餘の十三界は、一向に意識縁す」と。此に乃ち宣説すらく、「色等の五塵は、當分に彼五識の所縁と爲る。意識は通じて一切の法を縁するが故に、亦之を縁することを得。自餘の六根と六識と法塵とは、五識は了せず。唯意識のみ縁す」と。成實法の中には、文に定判無し。人釋同じからず。有人釋して言はく、「毘曇」と同じ」と。有人復言はく、「六根、六識及及び法塵は、「毘曇」と同じく、唯意識のみ縁す」と。色等の五塵は唯五識縁するも、意識は縁せず。若し意識縁すれば、盲應に色を見るべく、聾應に聲を聞くべく、觸れざるの物應に堅軟を知るべし。是の如き一切なり。盲聾等は見聞せざるを以ての故

に、意縁せざることを明けし。『大智論』の中は、此後の釋に同じ。實に據つて之を論ずれば、意識は通じて一切の五塵を縁す。但分了せざるのみ。『何が故に知ることを得る。』『人現在に十方の一切の色、聲、香、味、觸等を縁するが如し。明かに知んぬ、通じて縁すること。了せざる所以は、色香味等は意の正境に非ず。是故に了せず。』若し通じて縁することを得ば、龍樹は何が故に「意識は五塵を知らず」と宣說するや。『釋して言はく、『龍樹の知らずと云ふは、五識の之を知ること顯了なる如くならざるが故に、知らずと言ふ。全く縁せざるには非ず。』十八界の義之を略して陳云ふ。

二に二十五有の義。

二十五有は『涅槃經』に出づ。因に従つて果有るが故に、名けて有と爲す。有の別同じからず。二十五と爲す。『何者か是なる。』『經の中に説くが如し。欲界に十四有り。謂ゆる、地獄、畜生、餓鬼及與び修羅を、即ち以て四と爲す。四天下の人を復以て四と爲す。前に通じて八と爲す。欲界の六天を、復以て六と爲す。前に通じて十四なり。色界に七有り。前に通じて、合して二十一有と爲す。彼四禪地を、即ち以て四と爲す。中間梵王を以て第五と爲し、無想天處を以て第六と爲し、一切淨居を合して第七と爲す。無色に四有り。謂はく、四空處なり。前に通じて、合して二十五と爲すなり。問うて曰はく、『何が故に四天下の人を分つて四種と爲し、五淨居等は之を合して一と爲すや。』釋して言はく、『離合各

【三八】 苦報義第十
三段に二十五有の
義を釋す。
【海鏡經】 第十四

宜き所に隨ふ。今一門に據つて且く分つことは是の如し。』二十五有之を辨ずること麤爾り。

四十居止の義

【九】 苦報義第十
四段に四十居止の
義を明す。

居止と言ふは、三界の衆生の居住する所の處を、名けて居止と爲す。止處同じからず。分つて四十と爲す。中に於て、欲界に二十處有り。八大地獄を、即ち以て八と爲し、畜生、餓鬼を復以て二と爲す。前に通じて十と爲す。四天下の人并に六欲天を、復以て十と爲す。前に通じて二十なり。色界地の中に共十六有り。初禪に二有り。謂はく、梵身天及び梵輔天なり。初禪地の中に大梵王有り。何が故に説かざる。『梵輔天と同じく一處に在り。故に別に論ぜず。二禪に三有り。謂はく、少光天、無量光天及び光音天なり。前に通じて五と爲す。三禪に三有り。謂はく、少淨天、無量淨天、及び遍淨天なり。前に通じて八と爲す。四禪地の中、當分を三と爲す。謂ゆる、福愛と福生と廣果となり。前に通じて十一なり。及び五那含を前に通じて十六なり。無想は彼廣果と一處なり。故に別説せず。此十六を以て前に通じて、合して三十六處と爲す。無色に四天有り。前に通じて四十なり。若し色界に就いて、大梵及び無想天を別に分たば、是れ則ち居止にして、四十二有り。居止是の如し。

大乘義章 卷第九

遠法師撰す

淨法聚の第四に一百三十一門有り。淨法聚の因法の中、一百十三門有り。此卷九門有り。一には發菩提心の義。二には廻向の義。三には金剛三昧の義。四には斷結の義。五には滅盡定の義。六には一乘の義。七には二種莊嚴の義。八には二種種性の義。九には證教二行の義。

發菩提心の義に三門分別あり。一に、名を釋し體を辨す。二に、位に就いての分別。三、因起の次。

【一】是より淨法聚を明すに百三十一門あり。【二】今第一段に發菩提心の義を明す。【三】第一に釋名辨體。【四】始めに名義。【五】【體相は等】次に體相を辨す。

【一】に、名を釋し、其體相を辨す。發菩提心とは、菩提は胡語にして、此に翻じて道と名く。果徳圓通するが故に、菩提と曰ふ。大菩提に於て、意を起して越求するを、發菩提心と名く。然るに、此發心を経に亦願と名く。大菩提は來つて已に屬せしむるを要すが故に、名けて願と爲す。名義是の如し。【二】體相は云何。【三】義に隨つて不同なり。略して三種有り。一には相發、二には息相發、三には眞發なり。相發と言ふは、行者深く生死の過、涅槃の福利を見て生死を棄捨し、涅槃に趣向す。相に隨つて厭求するを、相發心と名く。息相と言ふは、行者深く諸法の平等を悟つて其生死の本性寂滅なり、涅槃も亦如なりと知る。生死寂なるが故に、相として厭ふべき無く、涅槃如なるが故に、相として求むべき無し。前相に返背して心を正道に歸するが故に、名けて發と爲す。良に以れば、取相は正道に違背するが故に、捨相を名けて以て發と爲すなり。蓋し乃ち外を廢して以て其内に歸する

【經】 維摩經。

【二】 以下、第二に四起の次第を明す。先づ相發に就いて明す。

が故に、名けて發と爲す。亦離相平等の心始めて起るを發と名くべし。故に經に説いて言はく、「諸發を滅して發さざる、是れ發菩提心なり」と。滅發と言ふは、諸相の發を滅すなり。不發と言ふは、相發を起さざるなり。是れ發心とは、是れ無相の發、無相の心起るを名けて發と爲すなり。眞發と言ふは、菩提の眞性は山來已體なり。妄想心を覆うて在れども而も覺せざるは、之を外に在りと謂ふ。外に向つて推求し、後妄想を息めて自實を契窮し、菩提の性は山來已體なりと知つて、異に越求すること無し。菩提の性は是れ已體なりと知るが故に、菩提は即ち心なり。異求無きが故に、心は即ち菩提なり。彼異求を捨てて心を自實に歸するが故に、發心と名く。良に以れば、外に求めて正道に違背す。是故に彼を捨てて心を自實に歸するを、説いて發心と爲す。此れ亦外を廢して以て其内に歸するが故に、名けて發と爲す。亦眞證菩提の心始めて起るを發と名くべし。體相是の如し。此一門

次に、因起の次第の義を明す。先づ相發に就いて、以て因起を明す。彼相發の心は何に因つて生ずるや。「大悲に因つて生ず。」「悲は何に因つて生ずるや。」「信慧に由依す。」「信慧は何に因る。」「正法を聞くに由る。」「聞法は何に因る。」「善友に近くに由る。」是故に菩薩は先づ善友に近く。友に近くに由るが故に、正法を聞くことを得。何等の法をか聞く。「一謂はく、生死は大苦にして涅槃は至樂なりと聞く。聞くに因つて信を生じて、生死は苦にして涅槃は大樂なりと信す。聞に因つて慧を生じて、生死は苦にして涅槃は大樂なりと信す。信慧に由るが故に、便ち慈悲を起す。生死は是れ大苦なりと信知するが故に、衆生

【次に等】次に息相に就いて因起を明す。

【次に等】次に眞發について因起の次第を明す。

の未出を念す。故に大悲を起す。涅槃は是れ至樂なりと信知するが故に、衆生の未得を念す。故に大慈を起す。慈悲に由るが故に、菩提心を起し、衆生の苦に於て未だ出でざるを悲念して濟拔を爲さんと欲す。自我出でずんば、他を化して生死を出でしむるに由無し。是故に發心して生死を出でんと願じ、衆生の未だ涅槃を得ざるを慈念して、授與爲んと欲す。自我得ずんば、他を化して涅槃を得しむるに由無し。是故に發心して涅槃を得んと願す。故に慈悲に因つて菩提心を起す。次に息相に就いて、以て因起を明す。息相の發心は是れ修慧の攝なり。彼は何に依つて生ずる。一思は何に因つて生ずる。一聞慧は何に因る。一正法を聞くに由る。一聞法は何に因る。一善友に近く由る。是故に菩薩は先づ善友に近く。友に近くに由るが故に、正法を聞くことを得。一何等の法をか聞く。一謂はく、生死涅槃法空なりと聞く。一大白平等の如し。一既に是を聞き已つて、便ち生死の本性は寂滅、涅槃も亦如なりと知り、聞慧を成就す。聞に依つて思を起し、生死涅槃法空なりと思惟す。思に依つて修を起し、諸法の空を觀す。法空を見るが故に、彼相求を捨す。心を安んじて道の如くするを、息相發と名く。息相是の如し。次に眞發の因起の次第を明す。眞發は即ち是れ證行の所攝なり。彼は何に由つて生ずる。一修慧に由る。一修は何に因つて生ずる。一思は何に因つて發す。一思は何に依つて起る。一聞慧に依る。一聞は何に由つて生ずる。一正法を聞くに由る。一聞法は何に由る。一善友に近く由る。是故に菩薩は先づ善友に近く。友に近くに由るが故に、正法を聞くことを得。

【三】以下、第三に位に就いて論ず

『何等の法をか聞く。』『眞實如來藏性は是れ己が自體なりと聞知す。』『勝鬘經』『楞伽經』等の如し。既に是を聞き已つて、便ち聞慧を成ず。聞に因つて思を起し、眞實如來藏性は是れ己が自體なりと思量す。思に因つて修を起し、彼實を觀察す。彼に因つて妄を捨して便ち自實を證す。實を證するを以ての故に、眞發心と名く。因起是の如し。此二門次に、位に就いて此三發心を論ず。義に隨つて通じて論ずれば、始終を統ぶ。位に約して以て分たば、差降無きに非ず。位は要す三有り。廣く開けば六と爲す。要す三ありと言ふは、馬鳴の論に説くが如し。一には信發心の位にして、種性に在り。此れ即ち是前の相發の心なり。二には解發心の位にして、解行に在り。此れ即ち是前の息相發なり。三には證發の位にして、地上に在り。此れ猶是前の眞發の心なり。廣くは六と言ふは、始め外凡より終り法雲に至るを、攝して以て六と爲す。一には外凡、想に隨つて趣求するを、名けて相發と爲す。二には十倍の位の中の眞信已に成ず。信を以て趣順するを、名けて信發と爲す。三には習種の位の中の眞解成就す。解を以て趣順するを、名けて解發と爲す。四には性種の位の中に眞行成就す。行を以て趣向するを、名けて行發と爲す。五には解行の位の中に如觀の道立す。心を觀じて趣順するを、名けて觀發と爲す。六は道發と名く。六には初地已上に證行成就す。心を證して趣順するを、名けて證發と爲す。發心の義之を略して爾云ふ。

【四】淨法聚を明
す中、第二段に廻
向の義を明すに三
門の分別あり、第
一に釋名辨相。

廻向の義に三門分別あり。名を釋し相を辨ず一。之を修するの所爲二。餘
行に約對して因異を辨定し、寛狹を辨ず三。

第一に、名を釋し、其體相を辨ず。廻向と言ふは、己が善法を廻して越向する所有るが
故に、廻向と名く。廻向は不同なり。一門に三を説く。一には菩提廻向、二には衆生廻向、
三には實際廻向なり。菩提廻向とは、是れ其一切智心を越求す。己が所修の一切の善法を
廻して、菩提一切の種徳を越求するを、菩提廻向と名く。衆生廻向とは、是れ其深く衆生
を念ずるの心もて、衆生を念ずるが故に、己が所修の一切の善法を廻して、以て他に與へ
んと願するを、衆生廻向と名く。問うて曰はく、『佛法は自作して他人に報を受くること有
ること無く、他も亦他作して自己に果を受くること無し。菩薩は何ぞ須く己が善法を廻
して、他人に施與すべき。設令之を與ふるも、他人云何が此善利を得ん。』釋して言はく、
『佛法は自業して他人に果を受くること無く、亦他業して自己に報を受くること無しと雖
も、彼此互に相助縁すること無きに非ず。相助くるを以ての故に、己が善を以て廻して彼
に施すことを得。廻向を以ての故に、未來世に於て常に能く捨せず、衆生を利益して助
て善を修せしむ、故に須く廻向すべし。又復廻向は、即ち是れ己が家の能化の因なり。
廻向の方の故に、未來世の中に衆生を見る者敬順して法を受く。即ち是れ己が家の能化
の果なり。良に以れば、佛法は自作自受の故に、須く廻向して以て己が家の能化の因
を成すべし。未來世に己が家の能化の果を成就し、能く物を益するに堪へしめん。三に實
際廻向とは、是れ厭有爲求實の心なり。有爲を滅して實際を越求せんが爲に、己が善根を

【五】以下、第二に廻向を修習する所爲を明す。初に菩提廻向に就いて

【何を以て等】次に衆生廻向に就いて

以て廻して平等如實法性を求むるを、實際廻向と名く。此一門

次に、廻向を修習する所爲を明す。「何が故に菩提廻向を修習するや。」所爲に三有り。

一には爲去、二には爲任、三には爲増廣善根なり。爲去と言ふは、一切の凡夫は心性有を

樂しむ。若し廻向せざれば、所修の善法三界に堅住して出離することを得ず。廻向を以て

の故に、所修の善をして諸有を出離せしむ。故に廻向を修す。爲任と言ふは、一切の有爲

は無常磨滅なり。若し廻向せざれば、所修の善根三有に報を受け、受報已に滅して常住す

ることを得ず。廻向を以ての故に、所修の善をして、未來際を盡して常住不滅ならしむ。

故に經の中に説かく、「海龍王の一滴の雨を注ぎ、此雨をして劫を經るも滅せざらしめんと

欲するが如し。若し平地を經れば、得べき由無く、之を大海に降らしめば劫を經るも盡き

ず」と。廻向も是の如し。菩提を求むるが故に、所修の善をして、常住にして盡きざらし

む。増廣と言ふは、有の爲の修善は局狭にして多からず。佛の爲の修善は廣多無量なり。

故に廻向を修す。是義云何。「菩提の果徳は廣大無邊なり。一善根を用て廻して彼を求む

るが故に、大菩提一の徳の邊に於て、皆善生すること有り。一善の廻向増廣既に闡り。

一切の善根廻向は例して然り。是故に經の中に「廻向は以て大利と爲す」と宣説す。是を

三義と爲す。故に、須く菩提廻向を修習すべし。何を以ての故に衆生廻向を修習するや。」

「所爲に亦三あり。一には爲去、二には爲任、三には爲増廣善根なり。爲去と言ふは、一

切衆生は心に自樂を樂ふ。若し此衆生廻向を修せざれば、樂を得れども便ち住して物に隨

【何が故に等】次
に實際廻向に就いて。

【六〇】以下第三に
餘行に對して其同
異寛狭の義を辨ず
先に同異に就いて

ふこと能はず。苦の攝けするに在り。廻向を以ての故に樂を得れども住せず。常に能く物に隨つて衆生を化益す。爲住と言ふは、若し此衆生廻向を修せざれば、寂を得て即ち滅し、世に住して衆生を饒益することを肯せず。廻向を以ての故に、常に世間に在つて衆生を饒益す。爲増廣とは、自善は狭小なり。曠益は善多し。諸善をして物に隨つて廣多ならしめんが爲の故に、須く修習すべし。『是義云何。』一善を修して用いて一切衆生に廻向するに、衆生無邊にして此一善をして増廣無邊ならしむるが如し。一善の廻向増廣既に爾り。一切の善根増廣も例して然なり。是を三義と爲す。是故に衆生廻向を修習す。何が故に實際廻向を修習するや。『所爲に亦三あり。一には爲去、二には爲住、三には爲増廣善根なり。爲去と言ふは、一切衆生の心性取著す。若し此實際廻向を修せざれば、所修の善根は繋著有るに隨つて捨離すること能はず。廻向を以ての故に、所修の善をして相を捨し出離せしむ。故に須く修習すべし。爲住と言ふは、情相の法性自ら浮危なり。之に依つて善を起すとも、磨滅して住せず。要す理と合して方に固安を得。故に經に説いて言はく、「法常なるを以ての故に、諸佛も亦常なり」と。諸善をして理の常住に合せしめんが爲の故に、須く修習すべし。爲増廣とは、相に隨つて善を修するは、局狭にして多ならず。行は理と冥すれば、方に乃ち廣大にして、理無邊なるが如し。是故に菩薩は所修の諸善をして理の如く廣大ならしめんが爲に、是故に修習す。所爲是の如し。此二門

次に、餘行に對して共同異寛狭の義を辨ず。先に同異を辨ず。問うて曰はく、『願心も亦

【次に等】次に寛狭に就いて。

菩提を願ひ、衆生を利せんと願ひ、實際を證せんと願ふ。三の廻向と何の差別か有る。『釋して言はく、『此二は同有り、異有り。所願修所向の三義殊らざるが故に、説いて同と爲す。言ふ所の異とは、眞爾に怖求する、之を名けて願と爲す。善を挾んで彼に趣くを、説いて廻向と爲す。』次に寛狭を辨ず。問うて曰はく、『廻向遍く衆善を廻し、精進の心通じて諸行を策す。何者の寛と爲すや。』釋して言はく、『此二並に通へんと雖も、廻向恆に寛く、精進恆に狭し。』何が故に是の如くなる。』『精進は但未生の諸善を策するが故に、名けて狭と爲し、廻向は通じて已起、未起の一切の善法を廻するが故に、名けて寛と爲す。』問うて曰はく、『此寛廻向の邊に隨つて精進有りや否や。』答へて言はく、『亦有り。』問はく、『此精進と廻向とは俱なり。何んが寛ならずとや爲ん。』答へて曰はく、『精進は復彼寛廻向と俱なりと雖も、而も彼廻向は通じて三世の一切の善法を廻するが故に、寛と名くるを得。精進は但未生の廻向を策して、所廻向の已起の善法を策せざるが故に、説いて狭と爲す。』問うて曰はく、『若し精進の心は但未生を策して、已生一切の善を策せずと言ふや。』釋勤の中に已生の善法を方便して廣からしむるに、云何が説いて已生を策せずと言ふや。』釋して言はく、『彼已生の善法を説いて増廣ならしむとは、已生の善の流類の未來に在るの者をして續起躋添して、前をして増廣ならしむ。已生の善體を策修すと謂ふには非ず。』已惡を策斷する義も亦同じく然り。廻向の義は行に隨つて論を異にす。廣く別すれば宛め難し。今一門に據つて之を辨ずること且く爾り。

【七】淨法聚第三段に金剛三昧の義を明す中五門の分別あり、第一に釋名。
【涅槃經】 北本第二十四。

金剛三昧の義に五門分別あり。名を釋す一。體性二。開合して相を辨ず三。位に就いての分別四。

第一に、名を釋す。金剛三昧は『涅槃經』に出づ。金剛と言ふは、喻を借つて徳に名く。世間の金剛に十四義有り。一には能破の義、經の中に説くが如し。譬へば金剛所擬の處の破壊せざることを無きが如し。謂はく、一切の沙礫、瓦石及び諸の鬼毒を壞す。三昧も是の如く、能く一切の煩惱、業苦及び諸の外道、魔怨等の事を破す。二には清淨の義、世の金剛の體に瑕穢無きが如し。三昧も是の如く、體性清淨にして諸の垢穢無し。三には體堅の義、世の金剛の自體堅固にして、物能く組するに非ざるが如し。三昧も是の如く、一切の煩惱、業苦、外道、魔怨の爲に、能く阻壞せられず。四には最勝の義、經の中に説くが如し。譬へば金剛は諸寶の中の勝なるが如し。金剛三昧も亦復是の如く、諸の三昧の中最も殊勝と爲す。五には難測の義、經の中に説くが如し。譬へば金剛は一切の世人能く平價すること無きが如し。金剛三昧も亦復是の如く、一切の衆生、諸天、世人能く平價すること無し。六には難得の義、世の金剛は貧窮の人の得ること能はざる所なるが如し。金剛三昧も亦復是の如く、世間の衆生の得ること能はざる所なり。七には勢力の義、轉輪王の金剛の輪寶は飛行自在にして、大勢力有るが如し。三昧も亦復是の如く、不思議六神通力を具す。故に經の中に説かく、「菩薩は是金剛三昧に住すれば、身を反すること佛の如く、十方恆河沙の刹に遍滿す。又一念の頃に能く十方恆河沙界に至る」と。是の如き等な

【經】北本涅槃經 第二十四。

【三昧】サマーデーイ(Samadhi)

り。八には能照の義、世の金剛の光明清淨にして、能く照す所有るが如し。金剛三昧も亦復是の如く、能く智光を放つて法界を照窮す。故に經に説いて言はく、「菩薩は是金剛定の目を得れば、一切皆見ること明了にして無障なり」と。九には不定の義、經の中に説くが如し。譬へば金剛を若し日中に置かんに、色則ち定らざるが如し。金剛三昧も亦復是の如く、此定力を以て、能く十方に於て種種の身を現じて定相無し。十には主の義、轉輪王の金剛輪寶を聚寶の主と爲し、一切の諸寶悉く皆隨從するが如く、亦輪王は諸の一切の小主の爲に隨從せらるるが如し。金剛三昧も亦復是の如く、諸行の主爲れば、一切の諸行を悉く皆隨從す。十一には能集の義、世の金剛若し得有らば、一切の寶物自然に聚集するが如し。金剛三昧も亦復是の如く、若し得有らば一切の種徳自然にして集る。十二には能益の義、世の金剛能く貧人を益するが如し。金剛三昧も亦復是の如く、能く衆生を益す。十三には莊嚴の義、世の金剛能く身首を嚴るが如し。金剛三昧も亦復是の如く、能く行者の法身の首を嚴る。十四には無分別の義、世の金剛、衆徳を具すと雖も而も分別無きが如し。金剛三昧も亦復是の如く、所作行りと雖も而も分別無し。故に經に説いて言はく、「菩薩、是金剛三昧に住すれば、衆生を見ると雖も衆生の想無く、諸法を見ると雖も而も法の想無し。所斷有りと雖も而も斷想無く、所作行りと雖も而も作想無し」と。菩薩の行徳は衆義を具すること、世の金剛の如し。是故に喩に就いて、名けて金剛といふ。三昧と言ふは、外國の語にして、此には正定と云ふ。心體寂靜にして邪亂を離るるが故に、

【八】以下、第二に金剛三昧の體性に就いて。初に心に就いて分別す。

三昧と曰ふ。名義是の如し。此一門

次に、體性を辨す。中に於て二有り。一には心法に就いて分別し、二には心體に就いて分別す。心法と言ふは、謂ゆる、一切の諸心數法なり。今此三昧は、諸の心法の中に慧を用て體と爲す。理を觀じて結を斷ずるは、唯慧の能なるが故に。『是れ何等の慧なるや。』
『小乘法の中には四諦の慧、緣覺法の中には十二緣の慧、大乘法の中には了達法界の如實の慧なり。體性是の如し。若し眷屬を論すれば、曠く法界の一切の種徳を備ふ。問うて曰はく、『若し此體是れ慧ならば、何が故に經の中に説いて三昧と爲すや。』釋に四義有り。一には、若し此體は心數法の更に名を相受く。四念處の體の如く、實に是れ慧にして、名けて念と爲す。此も亦是の如し。二には件に従つて稱す。是金剛の慧は定と共に相隨ふが故に、伴の目に從つて説いて三昧と爲す。良に以れば、散慧は成辦する所無く、定に即するの慧は能ふ所有るに堪ふるが故に、此金剛は伴從つて名くるなり。三には能に就いて名と爲す。是金剛の慧は能く諸行をして正定不動ならしむるが故に、功能に從つて、名けて三昧と曰ふ。四には義に隨つて稱を受く。是金剛の慧體は多義を含む。中に於て正定安固不動の義を含有するが故に、三昧と曰ふ。『心法是の如し。次に心體に就いて、其體性を言ふ。心に別して三有り。一には事識、謂ゆる、六識緣事の心なり。二には妄識、亦是業識と名け、亦是現識と名く。謂ゆる、第七虛妄の心なり。三には眞識、謂ゆる、第八如來藏心なり。小乗の金剛は彼分別事識を用て體と爲す。事識の中に於て第六意識の分別觀解は、能

【次に等】次に心體に就いて體性を言ふ。

く四住を斷じて四住煩惱の爲に壞せられず。故に金剛と曰ふ。大乘法の中には、金剛に二有り。一には緣治金剛、二には眞證なり。緣治金剛は妄識を體と爲す。妄識の中に於て、觀空の解能く闇障を除く。闇惑の爲に破壞せられざるが故に、金剛と曰ふ。眞證の金剛は眞識を體と爲す。眞識の心は本性清淨なり。空の義隱覆して遂に垢染と成る。妄染を息除すれば心淨照明なり。照明の淨慧は法の本如を證して、一法として妄想を起すべきを見ず。妄を起さざるが故に能く闇惑を除き、惑障の爲に破壞せられず。故に金剛と名く。是金剛の體は是れ眞なるを以ての故に。故に經の中に説いて、以て佛性、智印三昧、首楞嚴等と爲す。體性はの如し。此二門

【九】以下、第三に其相を辨ず。先づ毘曇の説を擧ぐ。中に二、一に唯非想地の中の修道無礙を分取するに就いて。

次に、其相を辨ず。先に『毘曇』の開合に就いて相を辨ず。毘曇法の中には、義に兩門を別つ。一には唯非想地の中の修道無礙を分取して、以て金剛と爲す。第二には非想地の中の見修の兩治を通つして、以て金剛と爲す。先に初の義に就いて、開合して相を辨ず。之を總すれば唯一の修道無礙なり。或は分つて二と爲す。一には法智、二には比智なり。法智と言ふは、謂はく、欲界の中の滅道の法智なり。此れ能く非想の修惑を治す。是故に之を説いて、金剛と爲すなり。『何が故に唯滅道の法智のみを取つて、苦集を取らざる。』釋して言はく、『欲界の滅道の二境は非想所受の境界よりも細なり。細を觀じて麤を離る。是故に彼欲界の滅道を觀じて、能く非想修道の結を除く。欲界の苦集は非想より麤なり。麤の境界を觀じて、細を離すること能はず。是故に苦集の法智を取つて金剛と爲さざるな

【次に等】二に非
想地中の見修の兩
治を通取するに就
いて。

り。『比智と言ふは、謂ゆる、苦集滅道の比智なり。此比智の中に非想對治の無礙を分取して、金剛と爲すなり。或は十三を分つ。滅道の法智を即ち以て二と爲し、苦集及び道の三比を三と爲す。前に通じて五と説かしむ。滅比に八有り。謂はく、初禪乃至非想の八地の中の滅を觀するを、合して八と爲すなり。此を以て前に通じ、合して十三と爲す。問うて曰はく、『道比に何んが八を分たずして、唯滅比を分つや。』釋して言はく、『上界の八地の道は是れ有爲法なり。互に相因起するが故に、合して之を觀じて一の道比と爲す。上八地の滅は是れ無爲法なり、其所滅に隨つて分別各異にして相因起せざるが故に、別して之を觀ず。』或は復開分して五十二と爲す。『雜心』に説くが如し。前の十三智は但諦理を觀ず。一一の智の中に皆四行をもて觀ず。是故に離分して五十二有り。『何者か四行なる。』『前の四諦章の中に廣く釋するが如し。苦の下に四有り。謂はく、苦と無常と空と無我となり。乃至道の下に道と如と跡と乘とあり。是れ其四なり。或は八十を分つ。『雜心』に説くが如し。此八十の根本は二十なり。『何者か是なる。』『即ち向前の十三智の中に就いて、道比智を聞き、之を以て八と爲す。謂はく、上界の八地の道を觀するが故に。此を以て餘に通じて、合して二十有り。此二十智に各四行をもて觀ず。故に八十有り。一の義是の如し。次に非想の見修の兩治に就いて、開合して相を辨ず。之を總すれば、唯一の非想對治なり。或は分つて二と爲す。一には非想地の見道の對治、二には非想地の修道の對治なり。或は分つて三と爲す。一には比忍、二には法智、三には比智なり。初の一の對治は非

想の見惑にして、後の二の對治は非想の修惑なり。或は十三を分つ。『雜心』に説くが如し。非想地の中の見惑の對治に四比忍有り。修惑の對治に九無礙有り。是故に通じて、合して十三有るなり。或は復開分して、四十五と爲す。『何者か是なる。』『非想地の中の見道の對治に四比忍有り、修道の對治に四十一有り。前に通じて、合して四十五と爲すなり。』
 『何者か是れ其修道の中の四十一なるや。』『滅道の法智を即ちもつて二と爲し、苦集及び道の三種の比智を前に通じて五と爲す。滅比智の中に三十六有り。前に通じて、合して四十一と爲すなり。』『何者か是れ其滅比智の中の三十六種なる。』『別して上界八地の滅を觀するに、其八智有り。謂はく、初禪乃至非想の對治の滅を觀す。二二合觀するに其七智有り。三三合觀するに其六智有り。四四合觀するに其五智有り。五五合觀するに其四智有り。六六合觀するに其三智有り。七七合觀するに其二智有り。八地合觀するに其一智有り。八より一至るまでを通じて、合して三十六有るなり。或は復分つて、一千四百九十二種の金剛三昧と爲す。『雜心』に説くが如し。『何者か是なる。』『次前の四十五の金剛の中、初の四比忍に各四行觀あり。即ち十六と爲す。此十六の名數一定して、更に開分せず。後の四十一の修道の對治に各四行觀あり。即ち一百六十四種有り。然るに此一百六十四種の一一に、皆非想地の中の九品の修惑を治すれば、各分つて九と爲す。便ち一千四百七十六數有り。前の見道の十六比忍に通じて、合して一千四百九十二有るなり。問うて曰はく、『何が故に見諦道の中の十六比忍は九品を作さずして、獨り修道の中に各九品と爲る

【次に等】次に成
實論の所説を擧ぐ

や。一釋して言はく、『上界の一切の見惑は通じて相斷治す。一品の治を以て九品の惑を治す。是故に九品を別に分つことを作さず。修惑は別に隨つて九品もて斷治す。是故に道の九品を治し、別に此千四百九十二種を分つ。未來禪より乃ち四禪に至る、皆具に起することを得。空處は唯四百六十八を起す。何者か是なる。一前の四十五の金剛の中に於て、唯十三種の智を起すことを得。謂はく、苦集道の三種の比智なり。滅比智の中の離合に十有り。別して無色四地の滅を觀するに、其四智有り。二合觀するに其三智有り。三合觀するに其二智有り。四地合觀するに復一智有り。是故に滅智の離合に十有り。前の三比に通じて、合して十三と爲す。一一に皆四種の行觀を作す。五十二有り。一一に皆非想地の中の九品の修惑を治するに、九無礙と爲す。便ち四百六十八有るなり。何が故に見道の四忍を起さざる。一彼宗には、無色に見諦無きが故に。二何が故に、滅道の法智を起さざる。三無色は下地の有漏に緣ぜざるが故に。亦下地の對治を緣ぜず。四何が故に四禪の中の滅を緣するを滅比智と爲さざる。一亦無色は下地の有漏の法を緣ぜざるを以ての故に、彼漏の對治の滅を緣ぜず。二問うて曰はく、無色は下地の無漏の道を緣することを得るや不や。一釋して言はく、得有り、不得の義有り。下地の道の中に下地を治すれば、無色は緣ぜず。自地及び上地を治すれば、無色は之を緣す。空處是の如し。識無所有の次第漸滅は、之に准じて知るべし。毘曇是の如し。次に『成實』に就いて、閉合して相を辨ず。成實法の中には、文に定判無し。義に隨つて以て論ず。閉合不定なり。之を總すれば、唯

【大乘法の等】次に大乘法の所説を擧ぐ。

【地持】 第三。

一の空觀の無漏なり。或は分つて九と爲す。謂はく、非想地の九品の無礙なり。別に隨つて廣く品數を分たば無量なり。無量の心を以て煩惱を斷するが故に。大乘法の中には、開合不定なり。之を總すれば唯一なり。謂はく、如實智なり。或は分つて二と爲す。一には一切智、二には一切種智なり。一切空なりと知るを一切智と名け、一切種事相の差別を知るを一切種と名く。或は分つて三と爲す。『地持』に説くが如し。一には清淨智、謂はく、眞諦の慧なり。二には一切智、謂はく、世諦の慧なり。三には無礙智、世諦の中に於て之を知ることを自在なるを無礙智と名く。又更に三を分つ。一には世諦の智、二には第一義智、三には一實智なり。或は分つて四と爲す。一には世諦智、世の事相を知る。二には第一義智、諸法の空なるを知る。三には一實智、非有無を知る。四には法界智、謂はく、眞實如來藏の中の法界門を知る。別しては門に隨つて辨を異にす。曠く別たば窮め難し。開合是の如し。此三門

【二〇】以下、第四に位に就いて金剛の義を明す。

次に、位に就いて金剛の義を論ず。通行り、別有り。小乘法の中には、通別に五有り。一には聖を簡んで凡と異にす。見道已上無漏の聖慧能く難壞を破するを、通じて金剛と名く。二には修を簡んで見と異にす。唯修道對治の無礙を取つて、以て金剛と爲す。餘は皆非なり。三には上を簡んで下と異にす。『雜心』に説くが如し。唯非想地の見修無礙のみ是れ其金剛にして、餘は悉く非なり。四には勝を簡んで劣と異にす。『雜心』に説くが如し。唯非想地の修道の無礙を以て金剛と爲す。餘は皆非なり。五には終を簡んで始と異にす。

【地經】第十二。

【地持】第八建立

【二】以下、第五に金剛の有惑無惑を辨ず。先づ毘曇の説。

唯非想地の修道治の中の末後の一治のみ是れ其金剛にして、餘は皆非なり。此窮終を以て破障畢竟す。故に偏に之を説く。大乘法の中には、通別に五有り。一には信を簡んで謗に異にす。十信已上信心成就して永く謗法を離するを、同じく金剛と曰ふ。二には住を簡んで退と異にす。習種已上解行成就して堅固にして壞し難きを、齊く金剛と名く。三には出世に簡んで世間と異にす。初地已上の證眞無漏、能く惑妄を破して破壊すべからざるを悉く金剛と名く。四には上を簡んで下と異にす。第十地の中の一切の智能を、皆金剛と名く。故に『地經』の中の十地の菩薩は、初入地の時に離垢三昧を得と。離垢三昧は猶是れ金剛破障の義なり。五には終を簡んで始と異にす。其れ唯最後窮終の一念を以て金剛と爲す。故に『地持』に云はく、「最後身、菩提樹下に於て、衆相離垢障三昧を得るを金剛三昧の所攝と名く」と。斯を以て准驗するに、局つて窮終に在り。位分是の如し。此四門

次に、金剛の有惑無惑を明す。中に於て、且く窮終に就いて以て論ず。『毘曇』の如きに依らば、金剛心の中に、亦是惑有ることを得、亦是惑無きことを得。無漏の中には、煩惱行ぜざるが故に惑無しと言ひ、所斷の惑得唯心邊に在るが故に惑有りと云ふ。問うて曰はく、「若し無漏の心邊に猶惑得有りと言はば、應に斷と言ふべからず。若し當に斷と言ふべければ、應に得有るべからず。云何が説いて、所斷惑得猶心邊に在りと言ふや。」釋して言はく、「金剛は是れ其心法にして、所斷の惑得は是れ非色心なり。良に以れば、非心の得は心と並ぶ。是故に彼金剛心の邊に於て、惑得有ることを得。是金剛心は得と俱なりと雖

【成實法の等】次に成實法の所説。

【大乘法の等】次に大乘法の所説。中に三、一に異説を序す。

【經】勝鬘經。

【次に等】二に其非を辨ず。

も、而も今の惑得更に後を牽かざるが故に、名けて斷と爲す。所斷の惑得は是れ無常の法なり。金剛心と同時に謝往して、後に更に續くこと無し。續くこと無きを以ての故に、復彼過未の煩惱の來つて已に屬せしむることを得ざるを、解脱を得と名く。成實法の中には、亦は有、亦は無なり。彼宗の金剛は、必ず相續に在り。實に一念の中に斷結無きが故に、彼續の中に於て、始起の時理を見ること未だ明かならず。細闇猶在れば惑有りと云ふことを得。終成の時理を見ること分明なり。執取皆盡くれば、惑無しと言ふことを得。又復毘曇法の中の所斷の惑得と治と同處なるに同じからず。故に惑無しと言ふ。問うて曰はく、

『終成に若し惑無ければ、無學に何の別がある。』釋して言はく、『金剛は是れ増進の智なれば、力勵して理を觀じ、力勵して惑無し。無學智は、是れ順舊智なれば、容預に理を觀じ、容預に惑無し。斯異り有るなり。』大乘法の中には、人説不同なり。先に異説を序し、次に其非を辨じ、後に正義を顯す。異説と言ふは、昔より來相傳に常に二論有り。一説には、定んで有り。此れ云何が知る。『金剛心とは、是れ其學に收む。若し全く惑無くんば、應に無學と名くべし。又經の中に、無明住地の佛菩薩の斷を説く。若し金剛の中に全く惑無くんば、佛何の所斷あらん。又人一向に惑無しと宣説す。』此れ云何が知る。『金剛心とは、治惑の明解なり。解惑並せざれば、云何が惑有らん。又若し惑有らば、此惑は須く斷すべく、應に金剛の後に更に金剛を立つべし。更に立てざるが故に、明かに知んぬ、惑無きことを。異説此の如し。次に其非を辨ず。先に定有を破す。若し定んで惑有らば、

是金剛心は則ち斷ずること能はず。若し斷ずること能はざれば、金剛と名けず、無礙と名けざらん。金剛と名くることを得。無礙と名くることを得れば、定んで知る、能く斷ずることを。能く斷ずるを以ての故に、有と言ふことを得ず。若し能く斷ずと言ひ、復有と言はば、燈能く闇を破す。是れ燈の中に應當に其所破の闇有るべし。彼有ることを得ず。此も亦應に然るべし。又復若し金剛心の中に無明地有つて、佛をして斷ぜしむと言はば、應に佛智を名けて以て金剛と爲すべく、應に佛智を名けて無礙道と爲すべし。而るに彼佛智は金剛と名けず。無礙に非ざるが故に、應に説いて金剛心の中に無明を留殘し、佛をして正しく斷ぜしむと言ふべからず。又若し佛智無礙に正しく斷ずれば、便ち經と違す。『大品』に説くが如し。無礙道の中には名けて菩薩と爲し、解脫道の中には之を名けて佛と爲す。云何が佛を無礙斷と爲すと言はん。又若し佛智を無礙道と作し、正しく無明を斷ずれば、小乘法の中には應に盡智を用て無礙道と爲し、非想の惑を斷ずべし。彼既に然らず。此も亦爾らざらん。次に定無を破す。若し定んで惑無くんば、應に無學と名くべし。無學に非ざるが故に、應に全く無なるべからず。又若し金剛一向に惑無くんば、所見の理應に佛と齊しかるべく、所成の智能く應に佛と等しかるべし。『地經』に説くが如し。十地の菩薩一切界に遍滿して稻麻葦の如くならんも、如來の智に比すれば、百千萬倍乃至算數も畢竟じて及ばず。定んで知る、金剛の惑障未だ盡きざることを。又復諸佛を常と爲す所以は、惑盡くるに由るが故なり。理を證すること窮むるが故なり。若し金剛心一向に惑無くんば、

【次に等】 三に正理を顯す。

理を見ること應に窮まるべし。惑盡き理窮まらば、何ぞ常ならずと爲さん。非を辨ずること是の如し。次に正義を顯す。金剛心の中に、亦是惑有ることを得、亦是惑無きことを得。『是義云何。』『無明に二有り。一には異相、無明、諸法の中に於て緣じて了せず。相明解に返するが故に、異相と曰ふ。二には自性無明、即ち彼緣、對治金剛の相を照す。明照すと雖も、性は是れ闇惑なるを、性無明と名く。是二分ち難し。宜く喩を以て顯すべし。異相無明の所緣不了なるは闇中に視るが如く、自性無明は夢中に見るが如し。了する所有りと雖も、性は是昏闇なり。惑相是の如し。金剛心の中の異相無明は一切盡くるが故に、惑無しと言ふことを得。自性無明は猶未だ盡きざるが故に、惑有りと言ふことを得。惑無きを以ての故に、佛の境界に於て照見す。悉く知る、佛と別無きことを。是故に經の中に説いて等覺と爲す。問うて曰はく、『若し等しければ、云何が佛菩薩の異を分つことを得ん。』釋して言はく、『金剛は力勵して闇を除き、佛心は容豫なり。又金剛心は緣照して惑無く、佛心は緣無し。斯異有るなり。』問うて曰はく、『若し金剛は惑無しと言はば、何が故に經に「無明は佛斷す」と説くや。』釋して言はく、『彼には解脫に證除するを説き、無礙に關せず。又金剛は猶惑有るを以ての故に、學分の所收なり。又金剛心の中の所有の惑は、體是れ妄識攀緣の心なり。心を緣じて未だ息まず。情と法とは別にして心と融じて法の如く廣大なること能はず。是故に十地の徳は佛より劣る。佛に至つて之を捨し、唯眞心のみ有り。眞心は緣を離して彼此を簡ぶこと無し。故に能く心を融し、法の如く廣大なり。』

【經】 仁王經。

又眞心の中に、法界恆沙の佛法を統含す。法に隨つて心を論ずれば廣く法界を統ぶ。一門の中にして佛心無きこと無し。是故に佛徳廣大無量にして十地に超踰す。故に『地經』に云はく、「十地の菩薩十方一切の世界に遍滿して稻麻葦の如きも、佛の功徳に比すれば畢竟及ばず」と。良に此に在り。又金剛の中の所有の惑は、體是れ無常生滅の法なり。故に未だ佛徳の常住不動なるに同じからず。』問うて曰はく、「惑有らば誰の所斷ぞ。』釋して言はく、「金剛は無礙に正しく斷じて種智の心起り、解脫に證除す。』問うて曰はく、「金剛と惑とは同體なり。安んぞ能く正しく斷ぜん。若し能く正しく斷ぜば、應に同體なるべし。』釋して言はく、「異相無明を斷除し、明起れば闇滅し、解生すれば惑喪す。兩ながら相應ぜず。同體なることを得ず。性無明を斷ずれば、解惑同體にして、而も相斷することを得。』是義云何。』斷に二種有り。一に金剛の唯眞にして妄相無きを觀察するを以ての故に、能く自體をして更に後を牽かさらしむ。其れ爲因牽後の義を斷するが故に、名けて斷と爲す。二には金剛の眞を緣する力を以ての故に、後の同類をして起つて前に赴かさらしむ。其れ爲果酬因の義を斷するが故に、名けて斷と爲す。』問はく、「偏に闇惑の義邊を斷すと爲すや。亦は金剛能治の義を斷するや。』釋に通別有り。別して之を分たば、唯闇惑無智の義を斷す。闇體盡くるが故に、明も亦隨つて滅す。燈油盡くれば、明も亦隨つて滅するが如し。通じて之を語らば、解惑俱に盡く。良に以れば、金剛は觀眞の大明かなるが故に、無明を滅す。觀眞寂滅にして無分別なるが故に、能く緣治を息む。故に經の中に説かく、「現

に「是菩提は諸縁を離れざるが故に、菩提道の中に一切の義を具す」と。其所觀に隨つて各離する所有り。是故に金剛は解惑俱に斷す。』問うて曰はく、『解惑は俱に是れ無常なり。自然に滅謝す。何んが金剛觀眞の斷を假らんや。』釋して言はく、『此れ無常にして自滅すと雖も、力能く後を牽き、相續して斷ぜず。故に金剛を須て截つて續せざらしむ。』問うて曰はく、『解惑の二は俱に滅謝す。誰か種智と作る。』釋して言はく、『菩薩金剛心の中は唯妄智に非ず、亦眞徳有り。妄滅盡すと雖も、眞徳は猶存す。眞明獨曜を説いて種智と爲す。』問うて曰はく、『金剛の義に眞偽を含むや、爲當眞妄共に煩惱を斷するや、單安除惑するや。』釋に兩義有り。一には因を簡んで果と異にす。單安能く除く。緣治を因と爲し、眞を果と爲すが故に。金剛の中には眞徳未だ顯れざるを以ての故に、斷を説かず。二には眞に就いて通じて論ずれば、眞妄共に斷す。妄智は眞を緣するが故に、能く惑を滅す。眞相漸く顯るるが故に、能く障を除く。』金剛心の義粗述ぶること是の如し。

【二】淨法聚第四段に斷結の義を明す中、九門の分別あり。第一に釋名に釋名。次に二、一に釋名。次に二、一に釋名。次に二、一に釋名。

【二】淨法聚第四段に斷結の義を明す中、九門の分別あり。第一に釋名に釋名。次に二、一に釋名。次に二、一に釋名。

【二】淨法聚第四段に斷結の義を明す中、九門の分別あり。第一に釋名に釋名。次に二、一に釋名。次に二、一に釋名。

【二】淨法聚第四段に斷結の義を明す中、九門の分別あり。第一に釋名に釋名。次に二、一に釋名。次に二、一に釋名。

【二】淨法聚第四段に斷結の義を明す中、九門の分別あり。第一に釋名に釋名。次に二、一に釋名。次に二、一に釋名。

斷結の義に九門分別あり。一。名を釋し相を辨ず。二。治道の差別。三。緣境の總別。四。漸頓。五。假實。六。品數の多少。七。上下の義。八。依禪地。九。位に就いての分別。十。諱に就いての分別。

初門の中に就いて、先に其名を釋し、後に其相を辨ず。斷結と言ふは、煩惱の闇惑生死を結集する、之を名けて結と爲す。又復煩惱衆生を結縛するを亦名けて結と爲し、解生じ結盡くる之を目けて斷と爲す。宗別不同なり。斷を説くも亦異なり。先づ『毘曇』に依つ

【二】淨法聚第四段に斷結の義を明す中、九門の分別あり。第一に釋名に釋名。次に二、一に釋名。次に二、一に釋名。

【次に等】次に成
實の所説を擧ぐ。

て分別解釋すれば、中に於て先に所斷の結を明し、後に治斷を明す。結に二種有り。一に
は現起、二には成就得なり。緣に對して現行する貪瞋癡等を、名けて起惑と爲す。是惑起
し已つて、過去に謝入する種類は、當に未來に生在すべし。其中間に於て一の非色非心の
惑得有り。心の邊に在つて彼過去未來の惑を得して行人に繫屬するを、成就得と名く。此
得連持すること、纏の物を繫するが如し。是故に世人説いて得繩と爲す。惑相是の如し。
次に治斷を辨ず。治道に四有り。一には方便道、學觀未だ成ぜず。二には無礙道、觀心始
めて熟す。三には解脫道、舊に順じて純ら熟す。四には勝進道、修を發して上進す。四が
中の初の一は現起を遮伏し、後の三は得を斷ず。初の無礙道は正しく惑得を斷ず。此斷と
言ふは、得と同時にして後を生ぜざらしむるが故に、名けて斷と爲す。惑得をして道と俱
ならざらしむる、之を名けて斷と爲すに非ず。彼無礙道と得とは、同時に過去に謝往す。
解脫道起つて、彼惑得の盡くる處の無爲を誇す。第三の勝進に遠く前の得をして、畢竟起
らざらしめ、前の無爲を持し、之をして失はざらしむ。有漏無漏の斷結齊く爾なり。次に
『成實』に就いて、以て治斷を辨ず。中に於て、亦先に所斷の結を明し、後に治斷を明す。
成實法の中には、惑にも亦二有り。一には現起二には成就なり。現起煩惱は『毘曇』と同
く、成就の得は『毘曇』と異なり。『成實』には、別に非色非心の得法有りと説かず。但假
人、過去の煩惱の因果を成就するを説いて、名けて成就と爲し、亦名けて得と爲す。惑相
是の如し。次に治斷を辨ず。先づ八禪を修して某現起を伏す。初禪を修して欲界の結を伏

し、第二禪を修して初禪の結を伏し、兼て欲界を伏し、乃至非想地定を修習して無所有を伏し、兼て下地を伏し、後に理觀を修して其所得を斷ずるが如し。總分すれば麤爾なり。中に於て細論すれば、理觀の中に伏有り、永有り。是義云何。『聖道に三有り。一には方便道、諦理を學觀して而も未だ見ること能はず。二には無礙道、觀察して正に見る。見の中に増進す。三には解脫道、見の中舊に順ず。三が中の初の一と前の禪定とは同く現起を伏し、後の二は永く所得の煩惱を斷ず。無礙に正しく斷じ、解脫に證除す。無礙は増明なり。故に能く正しく斷じ、解脫は舊に順ず。故に但證除す。』斷相は云何。『煩惱の因は起つて過去に在り、所生の惑果は成就して當來なり。道中に起つて、彼因果を隔し、過去の者をして果と爲ること能はざらしむ、未來の者をして果と爲すこと能はざらしむ。故に名けて斷と爲す。實に據つて之を論すれば正しく後惑を遮し、其をして生ぜざらしむ。之を名けて斷と爲す。但未來の惑起らざるの時、過去の惑をして因の義成せざらしむるを、義をもて因を斷ずと説く。現に過因有つて斷すべしと謂ふには非ず。若し現に過去の因力有つて、斷除すべしと説かば、是れ則ち過去に復過去有らん。云何が過去に復過去有らん。過去の煩惱起し已つて謝往す。是一の過去なり。生後の力流れ來つて今に至る。道の爲に斷滅せらる。是二の過去なり。此二の過去は『成實』に已に破す。明に知んぬ、現に因力の斷すべきもの無きことを。問うて曰はく、『若し現に因力無からしめば、誰か後惑を牽きて未來に生ずることを得ん。』釋して言はく、『過去所起の惑因は、當に起すべきの時招

【次に等】次に大乘の所説を擧ぐ。

感じ已竟つて然して後に謝往す。未來の惑は遠く彼力に由る。所以に生ずることを得。現に力有つて、後を牽きて起さしむるに非ず。』問うて曰はく、『過去所起の惑因は、一道に能く斷するや、多道に共に治するや。』釋して言はく、『多道なり。』何が故に是の如くなる。過去の一惑は能く未來の多品の惑果を生ず。多品の果の中に麤細中有り。聖道の初起は、先づ未來多品の惑を斷す。麤惑斷する時、過去の惑をして麤惑の邊を生じ、因の義を成ぜざらしむ。麤因斷すと雖も、中細惑は因の義猶在り。後道の起る時方に能く斷じ盡す。故に多道に藉る。』次に大乘に就いて、以て斷相を辨す。亦先に惑を明し、後に治斷を辨す。惑に二種有り。一には四住、二には無明なり。諸愛及び見は是れ其四住にして、癡闇無知は是れ其無明なり。四住の中に麤有り、細有り。麤とは縁に對して作意して現に生じ、細とは彼無明と同體にして任性成就す。無明の中に麤有り、細有り。麤とは是れ其異相無明にして、細とは是れ其自性無明なり。諸法の中に於て、緣じて了せず。相明解に返するを名けて異相と爲す。七識の心體は性是れ癡闇なり。設ひ諸法に於て緣照すること分別なるも、猶闇惑と名け、性無明と名く。人夢中に知る所有りと雖も、性は是れ昏睡なるが如し。亦樂受の性は是れ行苦なるが如し。惑相是の如し。次に治斷を辨す。四住を斷する中、麤起の者は『成實』と同じ。微細の者は無明を滅せんと要すれば、四住隨つて亡す。其の中の治斷は無明に説くが如し。無明を斷する中、異相無明の治斷に二有り。一には地前出入の觀心に就いて、以て治斷を明し、二には地上相續の觀心に就いて、以て治斷を明す。

『地前は如何。』先禪定を修して以て治因と爲し、後に無漏を修して正治と爲す。正治に三有り。一には方便道、何の法に隨ふも、觀じて未だ見ず。二には無礙道、觀じて始めて見る。三には解脫道、見て舊に應ず。初の方便道は無明を制伏して、後を障せざらしむ。良に以れば、無明先に成じて心に在り、制伏して其をして生ぜざらしむべからず。故に但制伏して後を障せざらしむ。無礙には正しく斷ず。其れ猶世間の明生じて闇滅するがごとし。解脫には證除す。地前は是の如し。地上は云何。『初地已上の無漏の觀解運運に相續し、念念の中に障を斷ぜざること無し。彼相續明解の中に於て、義に隨つて分別すれば、其當分に除く所の無明に望めて、説いて無礙と爲す。即ち此無礙を其前念に斷ずる所の無明に望めて、累外にして生ずるを、説いて解脫と爲す。其後念に滅する所の無明に望めて、能く遮伏すること有つて後を障せざらしめ、其後解をして相續して生ずることを得しむるを、即ち方便と名く。是の如きの一切なり。此異相を斷ずるは緣照の無礙なり、緣照の解脫なり。性無明を斷ずるは前の總相緣觀の解を用いて以て治因と爲し、後に眞觀を修して以て正治と爲す。治別に三有り。一には方便道、眞に妄無しと觀じて、未だ見ること能はず。二には無礙道、眞に妄無しと見て、未だ妄を捨せず。三には解脫道、眞に妄無しと見て、能く妄を捨す。此三の中に於て、初の方便道は漸く體虚と覺すれば、名けて伏斷と爲す。第二の無礙は正に能く永く斷ず。良に以れば、無礙に正しく唯眞にして妄想無しと見るが故に、能く自體をして更に後を牽かず、後は前を起さざらしむ。故に能く正斷す。自體の

【三】以下、第二に其治道の差別を明す中に四、一に有漏無漏に就いて

性無明を斷ずるを以ての故に、治も亦隨つて亡ず。油盡くるが故に、明も亦隨つて滅するが如し。第三の解脫は累外に證除す。法の本は如、體に妄無しと證するが故に。此門の中に於て緣照は無礙、眞證は解脫なり。治斷是の如し。

第二に其治道の差別を明す。中に於て四有り。一には有漏無漏に就いて分別し、二には見修を分別し、三には忍智を分別し、四には法比を分別す。漏無漏とは、『毘婆沙』の如きに依らば、治道に二有り。一には有漏道、謂はく、世の八禪は攀上厭下、六行斷結す。『何者か六行なる。』『下地を觀察して苦蠱障と爲し、上地を觀察して止妙出と爲し、合して六と爲すなり。欲界を觀じて蠱苦障と爲し、下結を厭斷し、初禪地を觀じて止妙出と爲し、上靜を愉求し、此六行を以て欲界の結を斷するが如し。乃至無所有處を觀察して苦蠱障と爲し、非想地を觀じて止妙出と爲し、無所有の結を斷す。悲想の一地は上攀すべき無ければ等智斷ぜず。然るに此六行は多人合して説く。人別に之を論ずれば、下三の中に於て、隨つて一行を觀ず。上に於ても亦然なり。具に六を觀ぜず。二には無漏道、謂ゆる、四諦十六行觀なり。此理觀を以て諸の煩惱を斷す。『何者か十六なる。』『苦を觀するに四有り。謂はく、苦と無常と空と無我となり。集を觀するに四有り。因、集、有、緣なり。滅を觀するに四有り。滅、止、妙、離なり。道を觀するに四有り。道、如、迹、乘なり。此義は前の四諦の中に釋するが如し。然るに此十六は多人合して説く。人別に之を論ずれば、一の諦の下に行に隨つて一行を觀ず。成實法の中には、有漏は唯伏して永く斷すること能

【彼論】 成實論第

【次に等】 二に見修に就いて治道を分別す。

はす。故に彼論に言はく、「世俗道の中には結を斷すること無し」と。故に見諦道の中には、名けて三果を行する者と爲すことを得ず。其永斷を論ずれば、要す無漏に在り。大乘法の中に、五住性結の煩惱を斷除するは、要す是れ無漏なり。此れ理に迷ふを以て、理を見て斷するが故に。事の無知を斷するは、或は是れ無漏なり。五明を言學して事の無知を斷す。是れ其有漏なり。無明地を斷じて、彼事中の無知をして生ぜざらしむ。必ず是れ無漏なり。此一門次に、見修に就いて治道を分別す。「毘曇」の如きに依らば、三界の煩惱を攝して三分と爲す。始め欲界より無所有に至る見諦煩惱を第一分と爲し、非想地の中の見諦煩惱を第二分と爲し、三界の修惑を第三分と爲す。此三界の中の非想の見惑は唯見解斷、三界の修惑は唯修道斷、無所有の下の見諦の煩惱は治斷不定なり。若は凡夫の斷は修道を用て斷す。世俗の八禪は修道の攝なるが故に。若は聖人の斷は見解を用て斷す。問うて曰はく、「凡夫は既に見解無し。云何が能く見諦の惑を斷することを得る。」釋して言はく、「凡夫は見解無しと雖も、而も八禪を用て總じて下過を厭ひ、見修を分たす。是故に彼三空已還の修道の惑を斷する時、見惑隨つて滅す。」問うて曰はく、「凡夫、三空の下の修道の惑を斷する時、見隨つて滅すれば、聖、三界の見惑を斷するの時、修道の煩惱何ぞ隨つて去らずして、須く別に修道の解を用て斷すべきや。」釋して言はく、「凡夫の斷惑に分齊有ること無し。總して相厭離す。是故に通斷す。」云何が總じて厭する。「總じて下地の一切の有漏を觀じて苦等と爲すが故に。聖人の斷惑は必ず分齊有り。理を見るの時、理迷を除

【次に等】三に忍
智に就いて治道を
分別す。

くと雖も、染事猶在るが故に、須く別して斷すべし。成實法の中には、一切の見惑は唯見道斷にして、一切の修惑は唯修道斷なり。大乘法の中も『成實』と同じ。雜に對治せず。此二門次に、忍智に就いて、治道を分別す。慧心法に安んずる、之を名けて忍と爲し境に於て決斷する、之を説いて智と爲す。『毘曇』の如きに依らば、見諦の惑を斷ずるには忍を無礙と爲し、智を解脫と爲す。修道の惑を斷ずるには智を無礙と爲し、智を解脫と爲す。何が故に見惑は忍を無礙と爲し、智と名くすることを得ざるや。釋して言はく、『見解理に安んずるを忍と名く。所斷の惑得猶心と俱なり。心と俱なる得の中其疑の得有つて、疑を帶して決せざるが故に、智と名けず。』何が故に見惑は智を解脫と爲すや。疑の得已に捨して、心決了するが故に。』何が故に修惑は智を無礙と爲し、智を解脫と爲すや。疑は唯見を障へて、修道を障へず。修道治の邊は、一向に疑無し。故に皆智と名く。何が故に疑惑は唯見諦を障へて修道を障へざる。釋して言はく、疑は是れ迷理の煩惱なり。故に唯見を障へて事に迷はず。故に修道を障へず。問うて曰はく、『若し疑は迷理の故に唯見を障ふと言はば、聖人の修道も亦諦理を觀ん。何が故に障へざる。』釋して言はく、『聖人は見諦道の中に理を見ること分明にして、已に疑得を捨す。修道門の中に、重ねて理を觀ずと雖も、縁に了せざること無し。是故に疑結の爲に障へられず。』問うて曰はく、『若し疑事に迷はざれば修を障へずと言はば、現見の有人は事に迷うて疑を生ず。夜机を見、是机を疑うて是を人等と爲すが如し。云何が説いて事を縁じて生ぜずと言はん。』釋して言

【次に等】四に法比に就いて治道を分別す。

はく、『此疑は是れ法に染せざれば、道を障ふること能はず。是故に論ぜず。』問うて曰はく、『聖人修道の心邊は一向に疑無ければ、無礙、解脫を俱に名けて智と爲す。義は則ち爾るべし。凡夫所起の八禪の修道も亦疑得を斷ず。得と心とは俱なり。何が故に無礙を名けて智と爲すことを得るや。』釋して言はく、『凡夫所修の八禪は疑得を斷ずと雖も、事を緣じて結を斷ず。事は麤にして了易ければ、之を緣する心決す。故に智と名くることを得。』何等の事をか緣する。』謂はく、下地の一切の有漏を觀じて苦蠱等と爲す。問うて曰はく、『聖人下を觀じて苦と爲すを、理を緣すと名くることを得ば、凡も亦苦を緣ず。何が故に事と名くるや。』釋して言はく、『聖人は彼念念微細の行苦を觀ず。行苦の理通するが故に、理と名くることを得。凡夫は但生老病死愛別離等の八苦の事惱を觀するが故に、事を緣すと名く。』問うて曰はく、『事を緣じて安んそ能く彼迷理の疑を斷ずるや。』釋して言はく、『理を觀すること明白ならずと雖も、彼疑得を斷ず。而して下疑を觀じて苦蠱等と爲すが故に、能く厭斷す。』毘曇『是の如し。成實法の中には、一切の治道を通じて名けて忍と爲し、通じて名けて智と爲す。心法に安んずるを以ての故に、通じて忍と名け、決斷無著なるが故に、通じて智と名く。大乘法の中には、忍智も亦通ず。五忍に説くが如し。始を該ねて終に至る。二諦の智等は初及び後に通ず。義に隨つて具に分たば、義の異無きに非ず。始觀を忍と名け、終成を智と曰ふ。此三門。次に、法比に就いて治道を分別す。法智と言ふは、亦現智と名く。論の中に説くが如し。初めて法を知るが故に、名けて法智

と爲し、現法を知るが故に、亦現智と名く。比智と言ふは、正しく之を知る時亦法を知れども、法智に別せん爲に初に從つて目と爲すが故に、比智と曰ふ。要す現智に依つて、比度して知るが故に。此二は後の十智章の中に、具に廣く分別するが如し。『治斷は如何。』『毘曇法の中には、見道已前は學觀未だ成ぜず。但伏して未だ永斷せず。苦忍已上は法比の觀成じて方に能く永斷す。』欲界の見惑は、法忍は無礙、法智は解脫なり。『何が故に比忍を用て治と爲さざる。』『境界別なるが故に。』又復比忍は法智に依つて生ず。法智生ずる時、欲界の見惑已に斷滅するが故に、比忍に至らず。上界の見惑は、比忍は無礙、比智は解脫なり。何が故に法忍を用て治と爲さざる。』『境界別なるが故に、下の諦を見ると雖も、上に於て猶迷ふ。是故に治せず。』欲界の修惑は、法智は無礙、法智は解脫なり。何が故に比智を用て治と爲さざる。』『比智生ずる時、欲界の修惑已に斷滅するが故に。』上界の修惑は、滅道法智及び四比智を以て無礙と爲し、亦即ち此を用て解脫と爲す。何が故に苦集法智を用て上と爲さざる。』『對治は偏に滅道の二種の法智を用てす。此義前の金剛心中に、已に具に解釋するが如し。欲界の滅道は上境よりも細なり。細を觀じて麤を捨す。故に能く之を治す。欲界の苦集は上境よりも麤なり。設使之を觀ずとも、上惑を除かず。』問うて曰はく、『若し欲界の滅道は上境よりも細にして、上の修惑を治すと言はば、何が故に上界の見惑を治せざる。』釋して言はく、『修惑は事を緣じて生ず、細を觀じて麤を厭ひ、便ち能く之を捨す。故に欲界の滅道の二諦を觀じて上の修惑を除く。上界の見惑は觀

論理に迷ふ。要す彼諦を見て、方に能く之を捨す。是故に上の見惑を除くこと能はず。』
 『毘曇』是の如し。成實法の中には、若し伏惑を論ずれば、比智も亦能くす。若し永斷を
 論ずれば、要す唯理現智なり。其現智理を見ること明かなるを以ての故に。大乘法の中に
 は、迷理の惑を斷ずるは、現智能く斷じ、比智能く伏す。迷事の惑を斷ずるは、現比俱に
 斷ず。治道是の如し。

【二四】以下、第三に其緣境の總別を明す。

第三に、其緣境の總別を明す。境は、謂はく、四諦なり。毘曇法の中には、諦を觀するに二有り。一には總、二には別なり。總念處の中には、總じて四諦を觀じ空無我と爲す。之を名けて總と爲す。燼頂已上には、別して四諦を觀す。之を目けて別と爲す。中に於て、總觀は但伏して斷ぜず。見明かならざるが故に。別の中には、始習は伏して未だ斷ぜず。苦忍已上は觀成じて能く斷ず。成實法の中にも亦總別有り。燼頂忍の中には、別にして總ならず。世第一より上は總じて別ならず。世第一法は總じて四諦の名用虚假を觀す。無相已上には總じて諦空を觀す。中に於て、若し世俗の八禪に對すれば、總別俱に斷ず。故に『成實』に言はく、『燼等より來漸く煩惱を斷じ、滅を見て乃ち盡す』と。謂はく、無相の中に、理の滅を見るが故に。若し理觀に就いて義に隨つて之を分たば別觀は但伏す。總觀の中、世第一法には總觀未だ成ぜざれば、但伏して未だ永斷せず。無相已上には相觀成就して、方に能く永斷す。問うて曰はく、『何が故に毘曇法の中には、總は伏し別は斷ずるに、成實法の中には、別は伏し總は斷ずるや。』釋して言はく、『兩宗患を立つること各

【成實】 同論第三

【五】以下、第四に頓漸を分別す。

異なり。毘曇法の中には、闇を患の本と爲す。故に經に説いて言はく、「我昔汝が與に四諦を見ず。是故に久く生死の苦海に流る」と。良に以れば闇惑を患の本と爲すが故に、總觀未だ明らかならざれば、但能く惑を伏す。別觀は分明なり。故に能く永斷す。成實法の中には、取を患の本と爲す。別觀の時は取相未だ泯せず。故に但惑を伏す。總觀は相を泯するが故に、能く永斷す。大乘法の中にも亦總別有り。法平等に入らば總じて諦空を觀ず。隨つて差別有れば別して諦有を觀ず。總別の二觀俱に煩惱を斷す。著有の患は空に迷ふの闇なり。總觀は之を除く。著空の患は事に迷ふの無知なり。別觀は之を遣る。總別是の如し。

(二五) 第四門の中に、頓漸を分別す。毘曇法の中には、見諦の惑を斷するに、聖諦は是れ漸にして、品數は是れ頓なり。四諦の下の惑次第に之を除く、之を名けて漸と爲す。一一の諦の下に九品の惑は一治に頓に斷す。之を名けて頓と爲す。良に以れば、見惑は心に迷へば除くこと易し。是故に一治に能く九品を破す。故に論に説いて折石の方便と爲す。修道の惑を斷するは、諦理に望むるに、漸に非ず、頓に非ず。惑の品數に於ては、名けて漸と爲すことを得。一諦を緣するに隨つて、即ち能く之を斷す。具に四を觀せず。是故に説いて頓漸と爲すべからず。始め欲界より乃ち非想に至つて、一一の地の中の九品の煩惱を、品品別に斷するが故に、名けて漸と爲す。良に以れば、修惑は事に染して生じ、纏綿として捨て難し。所以に漸く除く。是故に論の中に説かく、「修惑を斷するは藕絲を絶つが如

し」と。成實法の中には、見諦の惑を斷ずるを、諦に望めて頓と爲し、品數を漸と爲す。總じて四諦を觀じ、迷諦の惑を斷ずるが故に、名けて頓と爲す。其麤細に隨つて品數別に斷するが故に、名けて漸と爲す。修道の惑を斷ずるは總じて諸空を觀じて亦能く斷除す。此れ則ち是れ頓なり。別觀も亦斷すること漸に非ず頓に非ず。一諦を緣するが故に、惑の品數に望むれば、唯漸にして頓ならず。大乘法の中には、迷理の惑を斷ずるは、諦に望めて頓と爲し、品數を漸と爲す。總じて法空を觀じ、彼迷惑を斷ず。是故に諦に於て、之を名けて頓と爲し、麤細漸く除くが故に、品數に於て之を名けて漸と爲す。迷事の惑を斷ずるは、境に於て漸と爲す。品數も亦漸なり。漸く諸法を學して次第に斷除す。是故に境に於て、之を名けて漸と爲す。麤細漸く斷ず。故に品數に於ても亦名けて漸と爲す。頓漸是の如し。

【二六】以下、第五に斷の假實を明す。

第五門の中に、斷の假實を明す。毘曇法の中には、實法に斷有り。假の中には論ぜず。聖道には念念に能く結を斷ずるが故に、實の中には斷有り。彼宗の中には別の假法無し。故に假は斷ぜず。實は斷ずるを以ての故に。見道の八忍は、各別して一念に見諦の惑を斷ず。修道の中には、九無礙道各別に一念に修道の惑を斷ず。若し「成實」に依らば、假の中に斷有るも、實の中には斷無し。故に彼「成實」の假名品に云はく、「諸の斷得の事は皆是れ假名なり」と。良に以れば一念は理を見ること明かならず。故に實には斷ぜず。相續して乃ち明かなり。故に假に斷有り。大乘法の中には、始め之を修する時相續して能

【地經】 第九。

【地論】 第二。

【二七】以下、第六下の義を明す。先づ多少に就いて。

【成實】 同第十二

く斷ず、一念には理を見ること明了ならざるが故に。終成の時は一念に能く斷じ、相續して乃ち盡す。其念念に理を見ること明かなるを以ての故に、一念に能く斷ず。故に彼「地經」の七地の中に「菩薩は念念に一切の助菩提の法を具足す」と説く。俱なる所の法は皆能く障を治す。是故に一念に能く所斷有り。障窮め難きを以て、相續して乃ち盡す。故に「地論」に説かく、「唯初斷に非ず、亦中後に非ず。前中後の取方に能く斷盡す」と。假實是の如し。

第六に、其品數の多少上下の義を明す。先に多少を辨す。毘曇法の中には、見諦の惑を斷ずるに八無礙有り。謂はく、四法忍及び四比忍、各別に一念なり。若し解脫に通ずれば、十六心有り。修道の惑を斷ずるに、其八十一品の無礙有り。品別に一念なり。欲界の惑を斷ずるに、九無礙有り。乃至非想に皆九品有り。故に八十一品の無礙有り。若し解脫に通ずれば、便ち一百六十二心有り。見修合説して其一百七十八品有り。成實法の中に、見諦の惑を斷ずるに、總相すれば一品、別すれば則ち無量なり。止八忍、八解脫等にあらす。修道の惑を斷ずるに、地地の中には總相に羅分すれば九無礙、九解脫道有り。細分すれば無量なり。故に彼「成實」の斷過品に云はく、「無量心を以て諸の煩惱を斷ずるは、八に非ず、九に非ず」と。八に非ずと言ふは、「毘曇」に唯八忍を用て見諦の惑を斷ずるに同じからず。九に非ずと言ふは、「毘曇」に地地の中に九無礙を用て修道の惑を斷ずるに同じからず。大乘法の中には亦無量心あり。諸の煩惱を斷ず。止八九にあらす。始め

【次に等】 二に上
下を論ず。

種性より終り金剛に至つて、念念の中に比は皆結を斷するが故に。品數是の如し。次に上
下を論ず。惑衆多なりと雖も、要は三品と爲す。謂はく、下中上なり。義釋不定なり。過
に就いて以て分たば、麤惑を上と爲す。過重なるを以ての故に。細惑を下と爲す。過微な
るを以ての故に。兩盈の間を説いて、以て中と爲す。力に就いて以て分たば、麤惑は力微
にして浮塵にして遣り易きを、説いて以て下と爲す。細惑は力强なり。制斷すべきこと難
きを、説いて以て上と爲す。故に『勝鬘』に云はく、「無明住地は其力最上なり」と。中は
前の釋と同じ。解に亦三有り。謂はく、下中上なり。麤解を下と名け、細解を上と稱し、
兩盈の間を説いて以て中と爲す。解を以て惑に對すれば、上下不定なり。初門の三品の惑
に對向すれば、下解は上惑を對治し、中は中惑を對治し、上品の解は下惑を對治すと言ふ
ことを得。此一義は『地持』に説くが如し。故に彼文に云はく、「解行の菩薩下忍を行ず
る時、諸過相増す。中忍の時は中、上忍の時は下なり」と。若し後門の三品の惑に對すれ
ば、下解は還つて下惑を治し、中品は中を治し、上解は上を治すと云ふことを得。諸佛の
勝解は能く無明最大の惑を治するが故に。品數是の如し。

【地持】 同第七。

【八】 以下、第七
に釋に依つて分別

第七門の中に、禪に依つて分別す。毘曇法の中には、見諦の惑を斷するは六地の禪に依
る。未來、中間、根本四禪は是れ六地なり。次第の人は未來禪に依り、超越の人は六地禪
に、中は隨つて何の地にも依る。問うて曰はく、「何が故に唯六地禪能く見惑を斷じて四無
色に非ざる。」釋して言はく、「前の六は心分麤強にして、能く下地の有漏の法を緣じて苦

【成實】 同第十五

【成實】 同第十二

【成實】 同第十五

【龍樹の等】 大智論第二十六。

結を斷じて下地を斷ぜず。成實法の中には、一輪の惑を斷ずるは、並に四禪及び三無色に依り、并に欲界の電光三昧に依る。二云何が四禪及び三無色に依ると知ることを得る。『成實』に説いて七依處を離れて、更に欲界の如電三昧有つて、所依と爲す」と言ふが故に。問うて曰はく、『毘曇』は何が故に電光に依ると説かざる。『毘曇』の所説は、「欲界地の中に此定無きが故に」又問はく、『成實』は何が故に未來中間に依らざる。釋して言はく、『成實』は一同に初禪地を離れて、別に未來有りと説かず。是故に依らず。然るに彼論の中にも亦説かく、「梵王能く中間に至る」と。當應に相從つて初禪に攝屬すべし。故に別して論ぜず。『何の義を以ての故に、非想に依らざる。』非想は心微にして無漏を發して煩惱を斷ぜざるが故に。問うて曰はく、『成實』に宣説すらく、「非想の無漏の心は後に滅盡定に入る」と。云何が説いて、無漏を發さずと言ふや。釋して言はく、『以有り。先づ下地に依つて無漏觀を發し、非想地の苦無常等を觀じて非想の惑を斷じ、然して後に彼非想の定心を用て、向の所觀の苦無常等を緣するを、名けて無漏と爲す。實には現觀斷結の無漏無し。大乘法の中には、一輪の惑を斷ずるに多く四禪に依る。第四禪の功力強きを以ての故に。是故に如來成道の時、第四禪に依る。理實に通じて論ずれば、欲界定乃至非想に依つて、皆能く結を斷ず。』問うて曰はく、『欲界は亂地にして定無し。云何が説いて欲界定に依ると言ふや。』釋して言はく、『大乘には欲界に定有り。故に龍樹の言はく、「欲界に定

【二九】以下、第八に位に就いて分別す。

有り。佛常に之に依る」と。此と欲界の電光とは何の別かある。『當應に電光は是れ彼定の相なるべし。』聲聞は暫く名けて電光と爲すことを得。又問はく、『非想は無漏を發さず。云何が説いて、乃至非想と言ふや。』釋して言はく、『聲聞は非想定に依つて無漏を發さず。菩薩は發すことを得。故に龍樹の言はく、『云何が菩薩は非想處定なる。實相と相應する、是を菩薩の非想處定と爲す』と。實相と俱なるが故に、名けて無漏と爲す。實相と俱なるが故に、能く煩惱を斷ず。禪に依ることは是の如し。

第八門の中に、位に就いて分別す。毘曇法の中には、一切の煩惱を攝して四分と爲す。非想の見惑を以て一分と爲し、非想の修惑を第二分と爲し、無所有の下の見諦の惑を第三分と爲し、無所有の下の修道の惑を第四分と爲す。中に於て初分は唯見道斷、第二分は唯是れ那含金剛心斷、第三分は或は凡夫斷或は是れ聖人の見道中に斷ず。第四分は或は凡夫斷或は是れ聖人の斯陀行より去る修道の所斷なり。成實法の中には、見諦の惑を斷ず。位分不定なり。若し無相空慧の所斷を論ずれば、要す見道に在り。若し離相見空の所斷に通ずれば、燋等已上は皆見惑を斷ず。故に彼論に言はく、『燋等より來漸く煩惱を斷じ、滅を見て乃ち盡す』と。若し習觀想解の除く所に通ずれば、聞思より上は皆見惑を斷ず。故に彼論に言はく、『多聞の因縁、思惟の因縁は假名の心を滅す。燋等の見滅すれば、實法の心滅す。因和合の中に定相を取立するを、假名の心と名け、法和合の中に定相を取立するを、實法の心と名く。是二は前の假名の義の中に、具に廣く分別するが如し。問うて曰

【地持】第七。

はく、「聞等は見諦の解に非ず。云何が能く見諦の惑を斷ずることを得る。」
 「彼は是れ見道の方便なり。故に所斷の煩惱を通じて見惑と名く。修道の煩惱は斯陀行より去つて次第に斷除す。大乘法の中には、見諦煩惱の斷處不定なり。若し眞見解脫の證斷を論ずれば、要す初地に在り。故に「地論」に言はく、「諸の見縛とは、先づ初地見道の時在りて斷ず」と。若し緣見無礙の所除を論ずれば、解行の終心にも亦能く之を斷ず。故に「地持」に言はく、「先づ解行住に「諸の見縛を斷ず」と。若し復通じて論ずれば、十信已上に皆見惑を斷ず。彼は是れ見道の方便なるが故に。修道の煩惱の斷處不定なり。大位以て分たば、二地已上漸次に斷除す。若し復通じて論ずれば、初地の中满心に去にも亦皆能く斷ず。故に「地持」の中には、初地の满心を修慧行と名く。位分是の如し。

【三】以下、第九に心識に約就す。

第九に、心識に約就するに三有り。一には事識、謂はく、六識心なり。二には妄識、謂はく、七識心なり。三には眞識なり。此三廣く釋すれば八識章の如し。「治斷は如何。」
 「事識の中には、因果を隔絶す。之を名けて斷と爲す。心體を滅せず。妄識の中には、始は則ち解生じ闇滅するを斷と名け、終は則ち妄心盡滅するを斷と爲す。妄心本無法なりと知るを以ての故に。眞識の中には、妄を融するを斷と名く。心體を滅せず。良に以れば、眞心は妄成の結を絶ち、之を窮むれば則ち實にして更に除く所無し。故に心を滅せず。事識の中の斷は、刀をもて繩を截つて隔絶するが如きのみ。妄識の中の斷は、火もて繩を燒くが如く、體に通じて皆盡く。眞識の中の斷は、繩の結を解くが如く、更に除く所無し。結

を斷ずるの義之を辨じて爾云ふ。

滅盡定の義に九門分別あり。名を釋し體を辨ず一。出入の相二。時節の分齊三。界に就いての分別七。第八解脫に對して其分別四。地に就いての分別五。有漏無漏の分別六。人に就いての

【三】淨法聚第五段に滅盡定の義を明すに九門の分別あり、先づ第一に釋名辨體、中初めに釋名。

【地持論】 第十五

【地持】 第一。

第一門の中に、先に其名を釋し、後に體性を辨ず。名別不同なり。乃ち四種有り。一に無心定と名け、二には斷受定と名け、三には滅受想定と名け、四には滅盡定と名く。通じて釋すれば是れ一なり。中に於て別して分たば、差異無きに非ず。無心定とは、偏に心王に對して以て其名を彰す。意識盡謝するが故に無心といひ、有心の分別散動を離るるを無心定と名く。斷受定とは、『地持論』の中に斷受樂と名く。此は受數に對して以て其名を彰す。五受皆亡するが故に斷受といひ、受の散動を離るるを斷受定と名く。良に以れば、諸苦皆受の中に在り、故に此受を斷ずるを斷受樂と名く。故に『地持』に言はく、「有ゆる受に隨ふは是れ眞實の苦なり。定に住して受滅するを斷受樂と名く」と。滅受想定とは、偏に受想の二陰に對して名を彰す。想絶し受亡するを滅受想定と名く。滅盡定とは、通じて一切の心心數の法に對して以て名を彰すなり。心及び心法一切俱に亡するを、名けて滅盡といふ。又復三界の緣心都て盡くるを、亦滅盡と名く。初禪の中の如き、欲の惡を滅すと雖も覺觀猶在り。乃至非想は下過を滅すと雖も、自地の心在り。是義を以ての故に、滅盡と名けず。此定の中に至つて、一切斯に亡するが故に、滅盡といふ。定は、前に釋するが如

【體性は等】次に體性を辨ず。

し。名字是の如し。體性は云何。『論者不同にして、所説各異なり。所説佛陀提婆の所説の如きは、心法を體と爲す。』彼人何が故に是の如きの説を作すや。『滅定に入る者も猶衆生と名く。若し全く無心ならば衆生と名けず。是れ衆生なるが故に、明かに知んぬ、心有ることを。體は是心なりと雖も、麤想を絶離するが故に滅盡と云ふ。』毘曇の所説は、非色心の法を滅定の體と爲す。『是義云何。』彼論に宣説すらく、「心慮を絶去すれば、一の非色非心の法を得、身中に在つて須らく心慮を補ふべきが故に、非色非心を説いて體と爲す」と。問うて曰はく、「是中に心慮を滅去すれば、心に滅を得るや不や。』釋して言はく、「滅せず。』何が故に滅せざる。』能滅、所滅は地法に同じきが故に。欲界は善く欲惡を滅すと雖も、彼得を滅せざるが如し。此も亦是の如し。』問うて曰はく、「若し此能滅、所滅は地法に同じきが故に得を滅せざれば、善根を斷ずる時、欲界の惡を以て欲界の善を斷ず。何が故に得を斷ずるや。』釋して言はく、「闍提は善根を斷ずる時、具に方便、無疑、解脱の三道を以て善を斷ず。極めて善に違するが故に、通じて其得を斷ず。滅定は唯方便を以て心を滅するが故に、得を捨せず。』毘曇是の如し。』成實に宣説すらく、「心識の盡くる處の數滅無爲を滅定の體と爲す」と。』問うて曰はく、「若し心識の盡くる處を説いて滅定の體と爲さば、是滅定の中には便ち心識無く、應に衆生に非ざるべし。』又若し無心ならば、草木と何の別かある。』成實に釋して言はく、「心の得在るが故に、猶有心と名く。有心なるを以ての故に、衆生と名く。草木と同じからず」と。』何者か心の得な

【成實】同第十六

【二三】以下、第二に滅盡定に入するの相を辨ず。先づ毘曇の所説を舉

る。『滅定に入らば、過去、未來世の心を成就す。故に心の得と名く。』『毘曇』の別して非色非心の得を立つるに同じからず。大乘法の中には、名を尋ねて義を取り、心識盡くる處を滅定の體と爲す。實を以て具に論ずれば、滅盡定の中にも亦心あることを得、亦心無きことを得。無心と言ふは、聲聞の滅定は六識の心無く、菩薩の滅定は全く六識無し。分に妄識有り。諸佛の滅定は六七至全く無し。有心と言ふは、聲聞、菩薩の滅定の中に、猶本識有り。眞妄和合を本識と爲すが故に、佛の滅定の中に猶真心有り。『若し心識有らば、云何が滅盡ならん。』『麤心を滅するが故なり。體性は是の如し。此一門』
次に、滅盡定に出入するの相を辨ず、先づ『毘曇』に就いて以て出入を辨ず。『入時は云何。』『彼論の中に依らば、先づ八禪を得て極めて純熟せしめ、次に八禪に於て六種入定して其心を調練す。故に經に説いて言はく、『滅定に入らんと欲すれば、必ず先づ心を調せよ』と。』何者か六種なる。『一には順入、初禪より入つて次第に上昇し、乃ち非想に至る。二には逆入、非想より入つて次第に下り、轉た初禪に至つて出づ。三には逆順入、初禪より入つて第二禪に至る。却つて初禪に入り次第に上昇して第三禪に至る。却つて第二禪に入り次第に上昇して第四禪に至る。是の如く却つて入り、而して復上昇して乃ち非想に至る。四には順超、初禪より入つて第二禪を超えて第三禪に入り、第四禪を超えて空處に入る。是の如く上超して乃ち非想に至る。問うて曰はく、『何が故に唯一地を超ゆるや。』『聲聞の超禪は一を過ぎざるが故に。』五には逆超、非想定より無所有を超えて識處

に入り、空處を超えて第四禪に入り、第三禪を超えて二禪の中に入り、初禪を超えて欲界の心を起す。六には逆順超、初禪地より超えて三禪に入り、却つて二禪に入り、超えて四禪に入り、却つて三禪に入り、超えて空處に入る。是の如く却つて入り、而して復上超して乃ち非想に至る。然るに此六種は皆有漏の根本定の中に就いて、轉次に相入し、無漏に入らず、方便に由らず。問うて曰はく、『上入して非想地に至り、即ち定を出でて散心に入ることを得るや不や。』釋して言はく、『得ず。』何が故に得ざる。』『若し彼より出でて欲界の散亂の心に赴くに、便ち八地を超ゆ。聲聞の禪定は是の如きの義無し。人の極上善心の後に重惡を起さざるが如し。彼も亦是の如し。問うて曰はく、『若し非想定に至つて、即ち出でて散心を起すことを得ずと言はば、向前の六が中の第三、第六は非想定に至つて、云何が出づることを得ん。』釋して言はく、『彼還つて次第に下入して初禪に至り、或は二禪に至る。然して後に定を出でて欲界の心を起す。』若し爾らば便ち八種の調心有り。何んが六と言ふことを得る。』『彼逆入の者は第二門に同じ。逆の次第に收むるが故に、合して六と説く。調心是の如し。是の如く六種の調心已に竟つて、次に要期を起して心意滅することを作し、又復要期して其時當に出づべし。是念を作し已つて、方に滅定に入る。先づ初禪の根本定の中に入りて欲界の心を滅し、次に二禪に入りて初禪の心を滅す。乃至轉じて非想定の中に入りて無所有の心、非想の心を滅す。後に本要期心を以て、心數の法忽然として滅す。』問うて曰はく、『有人一世の中に數、滅定に入る。當に一一に別して六種

【次に等】次に成實の所説に依つて出入を辨ず。

を須つて定に入り心を調すべしと爲すや。當に一調能く多く定に入るべしと爲すや。『彼宗には、如來は一調已後能く多く入定す。聲聞の人は別に隨つて調を須ふ。入時は如し。出時は云何。滅定の中に在らば、時に隨つて多少なり。木要期して出でんと欲するの時に至つて、木要期して出でんと欲するの力を以て心心數の法忽然として生ず。』毘曇『是の如し。次に『成實』に就いて以て出入を辨ず。成實法の中には、滅定に趣入するに二の次第有り。一種の次第は先づ八禪を得、次に聖道を修して欲界の中の修道の煩惱を斷じ、上非想に至つて非想地の結或は盡不盡なり。此惑を斷じ已つて、次に要期を起し、心意滅することを作す。并に要期を起して其時に當に出づべし。此要期を生じて後、然して後に心を滅す。先づ初禪の根本定の中に入つて欲界の心を滅し、乃至轉じて非想定の中に入り無所有の心を滅し、非想の心の後に本願力を以て、一切の心想忽然として滅す。問うていはく、『成實』は八禪を得已つて、別して無漏を修して修道の惑を斷じ、然る後に心を滅す。毘曇法の中には、何んが是の如くならざる。釋して言はく、『毘曇』には、禪定に結を斷じ、八禪を得る時、無所有の下の煩惱已に盡きて、須らく更に無漏を修すべからず。結を斷じて然る後に心を滅す。設ひ無漏を修すとも、但非想一地の煩惱を斷ずるが故に、『成實』と異なる。』此『成實』の中の一種の次第なり。第二の次第は、先づ電光に依つて聖道を修習し、欲界の中の修道の煩惱を斷じ乃ち非想に至る。次に八禪を修し八禪を得已つて、次に要期を起して心意滅することを作す。并に要期を起して其時當に出づべし。然し

【成實】 同第十五

【成實】 同第十六

て後に心を滅し、初禪より入つて乃ち滅定に至る。』問うて曰はく、『毘曇』も亦是の如く、先づ修惑を斷じて、後に禪を得ることを得るや不や。』釋して言はく、『毘曇法の中に未來禪に依つて無漏の觀を發し、三界の修道の惑を斷除する時、即ち八禪を得るに同じからず。同じく治修するが故に、八禪を得と雖も現前すること能はず。更に方便を起して、修して乃ち現前す。』問うて曰はく、『向に毘曇法の中には、滅定に入らんと欲するには先づ六種を作し、入定して心を調すると説く。成實法の中も亦是の如くなりや不や。』釋して言はく、『須らく但八禪を得れば則ち能く心を滅すべからず。』『何が故に是の如くなる。』『彼論に宣説すらく、此禪を得已つて、別して無漏を用つて、諸の煩惱を斷ず』と。無漏は心を調ふ。是故に假らず。故に彼『成實』六三昧品に云はく、八禪を得已つて即ち能く心を滅し、六種を假らず』と。問うて曰はく、『滅盡定に入らんと欲する時、作意識と爲すや、不作業と爲すや。』『成實』に兩釋あり。一義の釋に云はく、『作業して心を滅す、是心方に滅す。若し作業せざれば、更に餘法を緣じて、心を滅すと名けず』と。良に以れば、行者は煩惱を斷じてより來、恆常に心を制す。心を制するを以ての故に、滅せんと欲すれば即ち滅す。故に彼『成實』に經説を引いて言はく、『滅定に入らんと欲すれば、必ず先づ心を調す』と。第二の釋に云はく、『滅意を作さずして而も心自ら滅す。人眠る時念せずして而も現するが如し。常修を以ての故に』と。入時是の如し。出は『毘曇』と同じ。』問うて曰はく、『出時の前には意根無し。定後の心識は何に依りて生ずることを得るや。』釋

【成實】 同第十六

【次に等】 次に大乗に就いて出入を辨ず。

して言はく、『定前の最後の心を意根と爲すが故に、後に心に生ずることを得。』問うて曰はく、『前の心は滅謝して已に久し。何んが能く後を生ずるを、説いて意根と爲すや。』『成實』に釋して言はく、『因の義成するが故に、滅すと雖も後を生ず。業滅すと雖も能く後果を生ずるが如し』と。『成實』是の如し。次に大乘に就いて以て出入を辨ず。大乘法の中には、義別して四有り。一には修始に據る。『毘婆』と同じく、先づ八禪を得て六種心を調し、要期方便して後に乃ち出入す。二には修終に據る。『成實』に相同じく、直に八禪を得、要期方便して即ち能く出入す。六種を假つて、入定して心を調せず。三には修純に據る。始め欲界より乃ち非想に至る。何の地に隨ふとも、心に入らんと欲すれば即ち入り、出でんと欲すれば即ち出づ。先の要期方便を作すことを假らず。又復須らく初禪より入るべからず。乃至滅定は次第に心を滅す。四には徳成に據る。時として入らざる無し。常寂を以ての故に。時として出でざる無し。常用を以ての故に。故に經に説いて言はく、『滅定を起さずして而も威儀を現するを、宴坐と爲すなり』と。』問うて曰はく、『菩薩は何の因縁の故に、獨り能く常に入り、復能く常に出づるや。』釋して言はく、『菩薩は畢竟一切の心相を取らざるが故に、能く常に入り、滅相を取らざるが故に、能く常に出づ。又復菩薩は善く法界差別の法門に入る。法界門の中に、其寂靜滅心の法門有り。菩薩は之に住して、畢竟して捨せず。故に常に心を滅す。復分別不滅心門有り。菩薩は之に住して時として暫く捨せざる無し。故に常に不滅なり。』出入の定相之を辨ずること巖爾なり。此二門竟る。

【二】以下、第三に滅定の時節分齊を辨ず。

次に、滅定の時節分齊を辨ず。毘曇法の中には、欲界の衆生所入の滅定の時能く久しと雖も、而も久しからずして入る。中に於て極遠は七日を過ぎず。若し七日を過ぐれば、定を出でて即ち死す。『何が故に是の如くなる。』『欲界の衆生は段食をもて身を養ふ。段食の勢は七日を過ぎず。故に七日を過ぐれば、定を出でて即ち死す。上界の衆生は段食を離るるが故に、滅定に入る者は、能く多時を経。多時を経ると雖も、彼輩の分齊を過ぐることを得ず。過ぎて出づれば即ち死す。成實法の中には、毘曇家の欲界の衆生は段食をもて身を養ひ、七日に出を須ふるを破す。彼説は一切滅定に入る者は正しく持身を受け、縦ひ多劫を遷て出づるとも亦死せず。中に於て、或は出でて死する者有り。本命根盡きなんの時而も滅定に入るを以てなり。是故に出づる時、即便ち命終す。定に在ること多時なるに由るが故に死するにはあらず。大乘法の中には、諸佛菩薩所入の滅定の時は、限齊無し。問うて曰はく、『經に説かく、「摩訶迦葉、鷲足山に在りて彌勒の出を得つ。山より起つて、彌勒を禮観して、十八變を現じ、然して後に身を滅す」と。彼の今山に在るは、般涅槃とや爲ん、滅定に入るとや爲ん。』』釋に兩義有り。若し『成實』に依らば、彼は滅定に入る。正しく持身を受くるが故に、後に能く出でて佛を禮し化を現す。若し『毘曇』に依らば、彼は涅槃に入る。是れ滅定に非ず。若し是れ滅定ならば、出でて即ち身壞せん。何んぞ能く佛に詣つて禮事供養し、廣く神化を現ぜん。又復『阿育王經』に宣説するが如きに依らば、迦葉涅槃せんと欲する時、往いて世王に辭して云はく、「涅槃に入らん」と。定んで知

【三四】以下、第四に三界に就いて分別す。中に三、一に得處を明す。

んぬ、所入は是れ滅定に非ざることを。又復世尊『付法藏』の中に説かく、「佛の滅後に迦葉法を持して二十年を經、摩訶迦葉般涅槃の後、阿難法を持すること復二十年なり」と。是の如く次第す。故に知んぬ、彼今般涅槃に入ること。」問うて曰はく、「若し彼涅槃に入らば、後時に何んが能く佛に詣つて禮觀し、廣く神變を現するや。」釋して言はく、「彼は是れ留化神力なるが故に、能く是の如くす。佛世尊の般涅槃の時の如く、摩訶摩耶佛の所に來至すれば、佛爲に起坐したまふ。亦舍利、目犍連等の如く、火を化して身を燒く。此等は皆是れ留化の力なり。」時分是の如し。此三門

次に、界に就いて論ず。界は、謂はく、三界なり。中に於て、別して三門を以て分別す。一には得處を明し、二には入處を明し、三には成處を明す。得處と言ふは、修得の所を名けて得處と爲す。小乘法の中には、最初の修得は要す欲地に在つて、上二界に非ず。説に藉つて起すが故に。欲界地の中には、佛有つて滅心の法を宣説するが故に修起を得、上二界の中には、佛の宣説無きが故に修起せず。問うて曰はく、「上界には佛の説法無くして諸禪を修することを得。何んが修することを得ずして滅定を起すと爲すや。」釋して言はく、「凡夫は過去より已來、曾て諸禪を得。是れ凡夫は常に所得の法を以ての故に、上に修起す。凡夫は本來滅定を得ず。凡夫の常に得る法に非ざるを以ての故に、上に修起せず。若し退して重修すれば、上界も亦得。」問うて曰はく、「上界修得の時、已得を得とや爲ん、未得を得とや爲ん。」釋して言はく、「斯れ乃ち未得を得、已得を得すに非ず。」何が故に

【入處と等】二に入處に就いて辨ず

【成處と等】三に成處に就いて辨ず

【三五】以下、第五に地に就いて論ず。中に三、一に定體を明す。

是の如くなる。』彼は非心の法にして冥に三世に通じて成ずることを得ざるが故に。人の戒を得るは、念念の中に皆未得を得るが如し。彼も亦是の如し。大乘法の中には、始は聲聞に同じく欲界に修得す。終は則ち酬らず。三界皆一切處を得。滅心の法門は常に現前するが故に。』入處と言ふは、身の所在に隨つて能く中に入るに堪ふるを、名けて入處と爲す。小乘法の中には、欲、色の兩界は能く現に非無色界に入るに堪ふ。』何が故に是の如くなる。』滅定に入らば心慮を斷絶す。欲色界の中には、心を滅するも色在り、命根猶存す。故に現に四空無色に入ることを得。復心慮を絶し命根立たず、故に入らざるなり。大乘法の中には諸佛菩薩は身に隨つて、何れの處にも皆能く現に入る。問うて曰はく、『無色は心を滅すれば即ち死す。云何が大乘には一切處入なる。』釋して言はく、『大乘には無色界に猶形有りと説くが故に、心を滅すと雖も、命根猶存す。又大乘の中には、真心有つて常にして滅せずと説く。無色界の中には、滅定に入る時心慮を息むと雖も、心體猶存す。故に命終せず。成處と言ふは、身の所在に隨ひ、成就して失はざるを、名けて成處と爲す。修得已後は三界の中に於て、身に隨つて何處にても皆成就することを得。』毘曇の如きに依らば、滅定は是れ其非想の法なるが故に、三界皆成す。成實、大乘に宣説すらく、『滅定は不繫の法なるが故に、三界皆成す』と。處別是の如し。此四門竟る。

次に、地に就いて論ず。地は、謂はく、欲界乃至非想なり。此諸地に就いて以て滅定を明す。先に定體を明し、次に入心を論じ、後に出心を辨ず。滅定の體は宗別各異なり。

【次に等】二に入心に就いて。

【次に等】三に出心に就いて。

【六】以下、第六に有漏無漏に就いて分別す。中に三、一に定體に就いて辨ず。

毘曇法の中に宣説すらく、「滅定は是れ非心非心有爲の法なるが故に、非想に繫屬す。非想定と同じく一果を招く」と。「成實」には、説いて無爲法と爲すが故に、三界に屬せず。大乘法の中には、義は則ち不定なり。若し六識、七識の心滅を説いて、滅定の體と爲す。是れ無爲なるが故に、三界に屬せず。若し第八眞心の體寂なるを説いて滅定の體と爲す。亦三界に非ず。若し、第七妄識の心寂なるを説いて、滅定の體と爲さば、三界に繫屬す。總相に繫屬して諸地に別たす。次に入心を論ず。聲聞の滅定は非想心の入なり。餘心は羸強にして滅すべきこと難きが故に。菩薩法の中には、始は聲聞と同じく、成ずれば則ち不同なり。云何が不同なる。『始め欲界より乃ち非想に至つて、一切地心皆能く入るが故に。次に出心を論ず。毘曇法の中には、或は非想出、或は無所有出なり。次第正受は非想心に出で、超越正受は無所有に出づ。聲聞は禪を超越すること一を過ぎず。故に餘地は出でず。問うて曰はく、『滅定は非想地の攝なり。滅定より無所有の心を起し、是次第に應ず。何の義を以ての故に、説いて超越と爲すや。』釋して言はく、『地に就かば應に超越に非ざるべし。論家は九の次第に約就して説く。中間は非想定を隔つるが故に。成實法の中には文證無しと雖も、義を以て之を推すに『毘曇』と同じ。『毘曇』の所立は彼非にあらざるが故に。大乘法の中には、諸佛菩薩は禪に於て自在なり。一切地心皆悉く出づることを得。地別是の如し。此五門

次に、有漏無漏に就いて分別す。先に定體を論じ、次に入心を辨じ、後に出心を明す。

【次に等】二に入心に就いて。

【次に等】三に出心を明す。

滅定の體は詮論に不同なり。毘曇法の中には、一向に有漏なり。體は是非想、有漏の法なるが故に。成實法の中には、一向に無漏なり。體は是れ數滅、無爲の法なるが故に。大乘法の中には、總相に之を論ず。體は是れ無漏なるが故に。『地持』の中には、説いて聖住と爲す。中に於て分別すれば、亦有漏無漏の義有り。若は六識、七識の心滅を説いて、滅定の體と爲すは、一向に無漏なり。若は第八眞識の體寂なるを説いて、滅定の體と爲すも亦是れ無漏なり。若し第七安識の心寂なるを説いて滅定の體と爲すは、無漏に相似すれども、性は是れ有漏なり。次に入心を論ず。毘曇法の中には、入心は有漏なり。非想より入るが故に。『成實』の入心は一向に無漏なり。問うて曰はく、『滅定は非想心の入なり。』『成實』の論家には、無漏は唯四禪三空欲界の電光に依り、非想に依らず。云何が説いて入心無漏と言ふや。釋して言はく、『成實』には、非想地の中にも亦無漏有り。『何の無漏か有る。』『謂はく、順背遊觀の無漏有り。』『何ぞか是なるや。』『先づ下禪に依つて無漏の觀を發し、非想地の苦、無常等を觀じて非想の結を斷じ、然して後に彼非想地の心を用て非想地の苦、無常等を觀するを、非想地の遊觀無漏と名く。此無漏に依つて滅盡定に入るなり。大乘法の中には、有漏、無漏皆悉く入ることを得。次に出心を明す。毘曇法の中には、出定の心、或は是れ有漏、或は是れ無漏なり。非想心の出は一向に有漏にして、無所有處は或は漏、無漏なり。無所有の中には、具に有漏、無漏の心有るが故に。成實法の中には、出は唯無漏なり。云何が知ることを得る。』『彼『成實』滅定品の中の如きは『毘曇』を破し

【七】以下、第七に人に就いて論ず。

【八】以下、第八に經中の第八解脱に對して同異を辨ず。

て云はく、「有人宣説すらく、入心は有漏なり。出心は或は漏或は是れ無漏なり」と。是義云何。答へて曰はく、「漏に非ず。其行者滅定に入らんと欲すれば、先づ一切有漏の行を破し已つて、然して後に中に入るを以ての故に、入は無漏なり。出は泥洹を緣するが故に、出は無漏なり」と。大乘法の中には、諸佛菩薩は有漏、無漏皆悉く出づることを得。此六門

次に、人に就いて論ず。總相に之を論ずれば、唯是れ三乘賢聖の所得なり。別相に之を論ずれば、小乗の人は唯那含、羅漢人の得有り。彼那含、羅漢人の中に就かば、論説不同なり。「毘婆沙」の中には、十人之を得。謂はく、非想地の九品の惑の中、一品を斷じてより乃ち九品至るを、即ち九人と爲し、非想地の中の具縛を一と爲し、十人と爲さしむ。此十人の中、始め具縛より乃至八品の惑を斷除する來は、是れ阿那含なり。第九品を斷ずるは、是れ阿羅漢なり。成實法の中には、非想到に具縛有ること無し。能く得ることは、要す分に斷除して、方に乃ち得一分に幾品を斷すと云ふや。論の中には辨ぜず。有人釋して言はく、「非想地の九品の惑の中に於て、前の八品を斷じて唯一品のみ在り。心の勞慮患るが故に、滅定に入る。或は此の如くなるべし。或は一二三四品等を斷ずるも亦能く心を滅す。之を斷じて未だ盡きざるは、是れ阿那含、盡くるは是れ羅漢なり。大乘法の中に、種性已上に一切皆得。若し復通じて論ずれば、十信已上にも亦漸く之を得。此七門次に、經の中の第八解脱に對して、以て同異を辨ず。毘婆沙の中には、正く滅定を用て

第八解脫と爲し、成實法の中には、滅定と彼第八解脫とは一向に別體なり。第八解脫は偏に果の中に在り、滅盡定は因及び果に通ず。故に『成實』に言はく、「滅盡定は學人も亦得、第八解脫は唯無學のみ得」と。又彼論に言はく、「滅盡定は心心の法を滅し、第八解脫は諸の煩惱を滅す」と。彼論に復言はく、「滅盡定は想受等を滅し、第八解脫は無明愛を滅す」と。故に知んぬ、全く別なることを。大乘の所説と『毘曇』とは同じ。故に『大品經』六度攝品の中に宣説すらく、「菩薩の第八解脫は滅定を體と爲す。涅槃も亦爾なり」と。此八門

【元】以下、第九に釋文。

【彼論】 成實論第十六。

次に、其文を釋す。經の中に説くが如し、「一切の非想非非想處を過ぎ、想受、身を滅して證を作すを滅盡定と名く」と。非想非非想を過ぐと言ふは、論釋不同なり。『毘曇』に釋して云はく、「過とは到に名く。非想地に到つて即ち能く心を滅するが故に、名けて過と爲す。要す非想の煩惱を斷じ、超出するを過と名くと謂ふには非ず。『成實』に釋して云はく、「超出を過と名く」と。故に彼論に言はく、「學人は能く非想地の中の一切の行空を見て、非想の結を斷ず。之を名けて過と爲す」と。但斷じて未だ盡きず。生ぜざること能はざるが故に、學人と名く。是始めて到る之を説いて過と爲すには非ず。大乘法の中には、文に定判無し。唯義をもて之を判ずれば、『毘曇』と同じ。菩薩は未だ非想の惑を斷ぜずと雖も、分に隨つて亦滅盡定を得るが故に。想受滅とは、『毘曇』の如きに依らば、現實には通じて一切の心法を滅す。但想及び受の二數強きが故に、偏に説いて之を滅す。此れ云何

が強き。』論の中に説くが如し。煩惱法の中には、受は愛の根と爲し、想は見の本と爲す。
 淨法の中には、受は諸禪を修し、想は無色を修す。故に説いて強と爲す。『成實』には之を
 非す。『若し想受の二數強きを説くが故に、偏に滅と言はば、心王最も強し。何が故に經の
 中には心の滅を説かざる。又復想受は皆心王に依る。何んが心を説かざる。』若し釋通せ
 んと欲し、主に就いて言はば、應に心の滅を云ふべし。但彼滅定は八禪心を滅す。八禪定
 の中には、受は諸禪を修し、想は無色を修す。故に想受到對して、以て滅を彰すなり。『成
 實』の所立は、滅盡定の中に一切の心を滅し、一切の法を滅するを、通じて名けて受と爲
 す。受到二種有り。一には想受、二には慧受なり。有爲の想受を緣じて滅するを明すなり。受を
 緣の心を名けて慧受と爲す。滅想と言ふは、有爲の想受を緣じて滅するを明すなり。受を
 隱し想に在るが故に、滅想と云ふ。滅受と言ふは、無爲の慧受を緣じて滅するを明すなり。
 慧を隱し受を彰すが故に、滅受と説く。問うて曰はく、『心滅は通じて空有を攝す。何んが
 通に就いて心滅を説かざるや。』『空有の二心の滅を彰さんが爲の故に。餘の經論の中は、
 多く『毘曇』と同じ。身作證とは、是中の無心は唯色身のみ有り。定と身と合するを、身
 作證と名く。故に『成實』に、八解脱等と言ふ。皆是れ身證なり。何が故に獨り滅定の身
 證を説くや。』答へて曰はく、『是中に更に心有ること無し。唯身のみ有るが故に。』滅定是の
 如し。

【三〇】淨法聚第六段に二門の分別あり、先づ第一に釋

一乘の義に二門分別あり。體相を辨ず二。

第一門の中に、其名義を釋す。言ふ所の乘とは、人に對するの名なり。行能く人を運ん

で、人の所乘と爲るが故に、名けて乘と爲す。言ふ所の一とは、釋に四義有り。一には別

を簡ぶを一と名け、二には別を破するを一と名け、三には別を會するを一と名け、四には

別無きを一と名く。別を簡ぶと言ふは、實に據つて以て論ずれば、唯一の大乗なり。化に

隨つて三を分ち、彼三を簡別す。是故に一と言ふ。別を破すと言ふは、佛衆生に隨つて假

に三乘を施し、衆生聞き已つて執して定實と爲す。佛爲に其所執の假三を破す。是故に一

と言ふ。故に經に説いて言はく、「十方の佛土は唯一佛乘にして、二も無く、三も無し」と。

又經に亦言はく、「唯此一のみ實にして、餘の二は眞に非ず」と。二も無しと言ふは、一大

乘の外に、別に聲聞、緣覺の二乘無きなり。三も無しと言ふは、一大乗の外に、別に聲

聞、緣覺の二乘無く、并に化に隨つて施す所の大乘無きなり。問うて曰はく、「直に三も無

しと説くの時に二も無きこと已に竟んぬ。何んが別に二も無く、三も無しと説くを須ふる。」

釋して言はく、「聲聞緣覺 乘とは、是れ大乘家の對なり。然も大いに二有り。一には實大、

二には權大なり。聲聞緣覺は、直に是れ彼實大家の對に非ず。當に知るべし、亦是れ權大

家の對なりと。二も無しと言ふは、實大家所對の二無きなり。三も無しと言ふは、權大家

所對の二乘無く、并に權大無きが故に、三も無しと言ふ。」何者か實大なる。「華嚴」等の

所説の如き是なり。彼に説く菩薩は實に一切十三住の中の無漏の眞徳を修し、妄想を息除

【經】 勝鬘經。

【法華經】 同經藥
草喻口品。

して性成佛を證するが故に、名けて實と爲す。何者が權大なる。彼三乘別教の中の所説の如き是なり。彼に説く菩薩は三阿僧祇に但有漏の六波羅蜜を修し、諸地無漏の眞徳を習はずして三僧祇に度る。次に百劫に於て相好の業を修し、最後の身に於て世の八禪を修し、厭離して煩惱を斷ぜし後に四諦を觀じ、道樹に成佛す。言、實に稱はざるが故に、權大と名く。斯權大を破し、并に餘の小を破す。是故に一と言ふ。別を會すと言ふは、總じて唯一大なり。佛衆生に隨つて、一を分つて三と爲す。今還つて三を攝し、以て一人に歸す。因に異趣無く、果に別從無し。是故に一と言ふ。故に經に説いて言はく、「大威儀を説いて以て木叉、毘尼法等と爲す。木叉毘尼は即ち大乘の學なり」と。又經に復言はく、「聲聞緣覺乘は、即ち是れ大乘なり」と。「法華」に亦云はく、「汝等の所行は、是れ菩薩道なり」と。良に以れば、根本に二法無きが故なり。問うて曰はく、「向前に三を破して一を辨ず。今復何が故に三を會して一と爲すや。」釋して言はく、「情に對して其別取を破す。故に、破三を説く。情を廢して法に就かば一の外に三無し。是故に別を會すれば、即ち是れ一なり。」問うて曰はく、「乘とは人の所行なり。三乘の人別なれば人に隨つて乘を説く。乘は應に定んで別なるべし。云何が一と爲す。」釋して言はく、「此れ理一なるを以ての故に爾なり。故に經の中に三乘を説くこと異なりと雖も、同じく一佛性なり。其れ猶諸牛の色種種なりと雖も、乳色に別無きがごとし。三乘も是の如く、佛性に別無し。性に別無きが故に、之を證すること未だ圓ならざるも唯一の佛因にして、之を證すること圓極なれば

【經】 涅槃經第九

唯一の佛果なり。是故に實に就かば、唯一大乘なり。故に經に説いて言はく、「世に若し佛無くば、二乗は二の涅槃を證すること無きに非ず」と。一切世界は唯一佛乘なり。更に餘無きが故に別の二乗は二の涅槃を得ること無し。別を會することは是の如し。別無しと言ふは、實に就いて乘を論ずれば、由來別無し。三の別會すべく破すべきこと有るに非ず。猶し虚空平等にして二無きが如し。是故に一と言ふ。問うて曰はく、「一乘は行を以て體と爲す。行は別して千殊なり。云何が乘一なる。」釋して言はく、「法門に其二種有り。一には別相門、二には共相門なり。若し別相に就かば、乘に無量有り。今は共相に就く。是故に一と言ふ。其れ猶衆木の共に一車を成ずるがごとし。此も亦是の如し。然るに此一乘は、經論の中にも亦大乘と名く。解に兩義有り。一には人に隨つて解釋す。諸佛菩薩は是れ其大人なり。大人の所乘なるが故に大乘と曰ふ。二には當法に辨釋す。備に攝すること寛廣なり。是故に大と名く。」名義是の如し。問うて曰はく、「乘の義と道の義と何んが別なる。」總相に之を釋すれば、能道を道と名け、能運を乘と名く。中に於て別分すれば、乃ち三種有り。一には行法相對に就いて異を辨す。乘とは是れ行、道とは是れ法なり。行は能く人を運ぶが故に、説いて乘と爲し、法は行履の爲に能く行心を通ずるが故に、説いて道と爲す。然るに乘に就かば、中に法有ること無きに非ず。今は道法に對して、唯説いて行と爲す。道にも亦行有り。彼乘行に對して、偏に説いて法と爲す。二には行に就く。中に義に隨つて異を分つ。一切の行徳の能道を道と名け、能運を乘と名く。又復諸行の體

【三】二に一乘の體を辨ず。中に五に乘法分別。

通ずるを道と名け、用通ずるを乗と各く。云何が體通ずるや。『行に障無きが故に。』云何が用通ずるや。『能く人を運ぶが故に。』三には法に就く。中に義に隨つて異を分つ。能通を道と名け、能運を乗と名く。又復諸法の體通ずるを道と名け、用通ずるを乗と名く。問うて言はく、『乘の義と門の義とは何の別かある。』『總相に之を分たば、通入を門と名け、能運を乗と名く。中に於て分別するに、亦三種有り。一には行法に就いて相對して異を辨ず。門は唯法に就く。行人に通ずるが故に。乘は唯行に就く。能く人を運ぶが故に。二には行に就き、中に義に隨つて異を分つ。一切諸行の門別を門と名け、能運を乗と名く。又復諸行の通入を門と名け、運通を乗と名く。三には法に就き、中に義に隨つて異を分つ。一切諸法の門別を門と名け、運通を乗と名く。又復諸法の通入を門と名け、運通を乗と名く。』問うて曰はく、『道の義と門の義とは何の別かある。』釋して言はく、『體は一にして、義に隨つて名異なり。通入を門と名け、通到を道と名く。此一門次に、乘の體を辨ず。中に於て、略して五門を以て分別す。一には乘法分別なり。乘に二種有り。一には乘法、二には乘行なり。法に三種有り。一には教法、謂ゆる、三藏、十二部經なり。二には理法、謂ゆる、佛性なり。中に於て分別するに、二諦一實の緣起法界は是其理なり。三には行法、六度等の儀なり。乘行と言ふは、要は唯三種なり。一には聞、二には思、三には是れ行修なり。教に依つて聞を生じ、理に依つて思を成じ、行法に依つて行修を集起す。問うて曰はく、『經に聞思修の證を説く。今此行の中には、何んが』

【二には等】 二に
行斷分別。

【三には等】 三に
自利利他分別。

【四には等】 四に
證教の分別。
【五には等】 五に
因果分別。

證を説かざる。一に修に攝入するが故に。二には行斷分別なり。行徳衆しと雖も、三種を出づること無し。一には智、二には福、三には是れ報なり。波若は是れ智、五度は是れ福なり。又復波若は一向に是れ智、施戒及び忍は一向に是れ福にして、精進と禪とは、亦是れ福なり。壽等の八種は是れ其報なり。此三種の中、智に依つて福を起し、福に依つて報を起す。故に一地持に言はく、「若は報と報因と及及び報果とは、皆福に依つて起り、福は智に依つて起る。此三は果に至つて轉じて波若、解脫、法身と名く。智を波若と爲し、福を解脫と爲し、報を法身と爲す」と。行徳是の如し。斷徳と言ふは、要は唯三種なり。一には煩惱斷、五住の結亡す、此れ前の智慧の斷滅する所なり。二には業斷、分段、變易の二種の因亡す。此れ前の福徳の遠離する所なり。三には苦斷、分段、變易の二種の報盡く。此れ前の淨報の出離する所なり。此三種の中に、煩惱を斷するが故に、諸業生ぜず。業生ぜざるが故に、苦報起らず。苦起らざるが故に、大涅槃を得。斯行斷を以て一乗の體と爲す。三には自利利他の二行の分別なり。自行に二有り。一には有爲を厭うて過行を起離し、二には仰智を求めて善行を起集す。利他にも亦二あり。一には大悲方便、抜いて苦を出でしむ。二には大慈方便、化して樂を得しむ。斯兩行を以て一乗の體と爲す。自行の乘は果に至つて便ち住し、化他の行、乘は畢竟無盡なり。所化の衆生は盡すべからざるが故に。四には證教の分別なり。無始の法性顯れて今徳を成ずるを、名けて證行と爲す。教に依つて方便の行徳を修起するを、名けて教行と爲す。此兩行は、始及び終を該ぬ。五には

因果の分別なり。因果多なりと雖も、滅道を出づること無く、果無量なりと雖も、菩提涅槃の徳を出でず。問うて曰はく、「因行、人を運んで果に至るを名けて乗と爲すべし。果徳は窮満して更に進趣無し。云何が乗と名くる乎？」釋に三義有り。一には因に乗じて果に至る。果は仍ち名に因るが故に、説いて乗と爲す。二には果に至つて、去處無しと雖も、是果徳運去すること能はざるに非ず。劫盡の火更に所焼無けれども、火能はざるに非ざるが如し。此も亦是の如し。其能運を以ての故に、説いて乗と爲す。三には果の中に至つて、自行竟ると雖も、化他未だ息まず。大涅槃に乗じ、周旋して齊く一切衆生を度するが故に、乗と名くることを得。『乘の體は別に隨つて、以て具に論じ難し。略して斯五を擧ぐれば、行として攝せざる無し。一乘是の如し。』

【三】淨法聚第七段に二種莊嚴の義を明すに四門の分別あり、先づ第一

二種莊嚴の義に四門分別あり。名を釋す一。位に就いての分別二。二種の莊嚴とは、一には福德莊嚴、亦是功徳と名く。二には智慧莊嚴なり。福德と言ふは、善能く資潤して行人を福利す。故に名けて福と爲す。福利は是れ其善行が家の徳なり。清冷等は是れ水家の徳なるが如し。功徳と言ふは、功は、謂はく、功能は善く資潤福利の功有るが故に、名けて功と爲す。此功は是れ其善行が家の徳なり。名けて功徳と爲す。智慧と言ふは、照見を智と名け、解了を慧と稱す。此二各別なり。世諦を知るとは、之を名けて智と爲し、第一義を照すを説いて、以て慧と爲す。通じては則ち義齊し。此福と智

【地持】 第四。

【三】以下、第二に體性を辨ず。中に三、一行に就いて分別す。

とを、經の中に、或は復名けて莊嚴と爲し、或は復之を説いて菩提具と爲し、或は助道と名け、或は律儀と稱す。莊嚴と言ふは、『涅槃』に説くが如し。分別するに四有り。一には能く人を嚴り、二には能く心を嚴り、第三には果を嚴り、第四には諸行共に相莊嚴す。故に莊嚴と言ふ。能く佛因と爲すを、亦是菩提具と名け、菩提に資順するを、助道の法と名く。律儀と言ふは、『地持』に説くが如し。内調を律と名く。行眞則に合するが故に律儀と曰ふ。亦可調の法は、之を名けて律と爲す。行戒律に合するが故に律儀と曰ふ。能く行人を嚴るが故に莊嚴と曰ふ。名義是の如し。此一門

次に、體性を辨ず。中に於て、別して三門を以て分別す。一には行に就いて分別し、二には體性を分別し、三には體用を分別す。行に就くと云ふは、行は、謂はく、六度なり。此六種を攝して以て福智と爲す。『相狀は如何。』『經論不同なり。乃ち四の別有り。一には『優婆塞經』に依るに、施、戒、精進を以て福分と爲し、忍、禪、波若を以て智分と爲す。』何が故に是の如くなる。『施之與び戒は事の修行に隨つて行人を資助し、福利の義顯るるが故に、説いて福と爲し、照見すること能はざるが故に、智と名けず。精進は能く諸行を遍策すと雖も、而も彼精進の性は是れ發動なり。事の修行に隨ひ精進の相顯るが故に、戒施に従つて之を攝するを福と爲す。餘の三種の中、波若は正しく是れ照見の性なり。故に説いて智と爲す。即ち彼波若の法に安んずるを忍と名く。忍の體は是れ慧なり。故に智の中に攝す。五忍等の如し。然るに忍の中に就いて、義別に三有り。一には不他饑益忍。損

を加ふるも能く受く。二には安苦忍。苦に逢ふも堪耐す。三には法思惟忍。法に於て能く安んず。此三種の中、前の二は慧に非ず、後の一は是れ慧なり。彼經に偏に法思惟忍を説いて忍度と爲す。故に智の中に攝入す。即ち彼波若の縁に住するを定と名く。定體は是れ慧なり。故に智の中に攝す。然るに定の中に就いて、義別に二有り。一には事定、意を繫けて縁に住す。二には理定、慧心動ぜず。彼經には、偏に理定を説いて禪と爲す。是故に禪度を智の中に攝入す。二には『相續解脫』及び『地持論』に依り、施戒及び忍を同じく福分と爲す。波若は智分なり。精進と禪とは、亦是福亦是智なり。施戒及び忍は但能く資潤するが故に、説いて福と爲す。體は慧の性に非ず。照見すること能はざるが故に、智と名けず。波若は慧の性なるが故に、説いて智と爲す。前の門を簡別するが故に、福と名けず。精進と禪那とは、體性は是れ福なり。其所生に従ふが故に、二種を分つ。福と之與び智となり。故に『地持』に説かく、「精進に依るが故に、施戒、四無量等を修行す、是れ其福分なり。故に『地持』に説かく、「精進に依るが故に、施戒、四無量等を修行す、是れ其福分なり。禪に依つて四無量等を修習す、是れ其福分なり。聞思修を起す、是れ其智分なり。禪に依つて四無量等を修行す、是れ其福分なり」と。問うて曰はく、「向に精進に依るが故に施戒、四無量等を修行して、以て福分と爲すと説く。何が故に禪に依つて唯無量のみを修するを、以て福分と爲すや。」釋して言はく、「精進は諸行を遍策す。是故に通じて施戒等の善を起すを、以て福分と爲す。施戒の散善は禪に依つて生ぜず。是故に唯四無量等を起すを、以て福分と爲す。」又問はく、「精進の聞思修を起すを、通じて智分と爲す。何が故に禪に

【大品】 大智論第七十五。

【涅槃經】 北本第二十七。

依つて唯修慧巧便の觀を起すを、以て智分と爲すや。『正しく精進を以て諸行を遍策す。是故に通じて聞思修等を起すを以て智分と爲す。聞思の二慧は、乃ち是れ禪因にして、是れ禪果に非ず。是故に禪に依つて唯修慧を起すを以て智分と爲す。』三には『大品』等の經に依らば、前の五度は是れ其福分なり。體は慧性照明の法に非ざるが故に。故に彼經の中に、之を説いて盲と爲す。波若は是れ智體なり。是れ慧性照明の法なるが故に。是故に論の中に、之を説いて眼と爲す。四には『涅槃經』に依り、前の五度及び事中の波若を、同じく福分と爲す。其れ實義を見ることが能はざるを以ての故に。照理の波若は、之を説いて智と爲す。實義を見るが故に。故に彼經に言はく、『福莊嚴とは、檀波羅蜜より乃ち波若に至る。般若波羅蜜に非ず。慧莊嚴とは、是れ波羅蜜なり』と。『何者か波若は波若波羅蜜に非ざる、何者か波若は是れ波羅蜜なる。』一彼に六度を説く。各二種有り。一には布施乃至波若は波羅蜜に非ず。二には布施乃至波若は是れ波羅蜜なり。事の修行に隨つて、實義に到らず。是れ自性清淨の度に非ざるが故に、波羅蜜に非ず。理に合して成ずとは、是れ其自性清淨の度なるが故に、是れ波羅蜜なり。中に於て、前の五は體、慧の性に非ず、一向に福と爲す。波若の中に就いて、分取波若は波羅蜜に非ず、前の五を助成すれば、亦判じて福と爲す。分取波若は是れ波羅蜜にして智慧と爲すなり。上來に、第一には行に就いて分別し、次に體德に就いて以て福智を分つ。眞心を體と爲し、緣に従つて諸行を修生するを德と爲す。心體本淨なれども、緣に従つて染を説く。後に妄染を息め、眞心始

【次には等】 二に體德に就いて福智を分つ。

【次に等】三に體用に就いて分別す

【涅槃】北本第二十七。

めて淨し。眞心始めて淨くして、内に法界を照す。之を説いて智と爲す。縁に従つて方便の行徳を修正すれば、資順の義強く、通じて説いて福と爲す。體徳是の如し。行體衆しと雖も、證教を出づること無し。無始の法性顯れて今徳を成ずるは、是れ證行なり。方便修生するは、是れ教行なり。教行は修起して資順の義強く、通じて説いて福と爲す。證行は體明にして、法界を照究す。之を説いて智と爲す。體徳是の如し。次に體用に就いて聞いて二種を分つ。體は、謂はく、證如涅槃の行、用は、謂はく、隨緣世間の行なり。用は世間に隨ひ、世福の善に同じ。之を説いて福と爲す。體は則ち合如にして、第一義を照す。之を説いて智と爲す。世行の中に隨つて智有ること無きに非ず。隠れて彰れざるなり。合如行の中には、福有ること無きに非ず。隠れて説かざるなり。故に『涅槃』に云はく、「福莊嚴とは、有爲有漏なり。果報有るを以て有礙有りて常に非ず。是れ凡夫の法なり。慧莊嚴とは、無爲無漏なり。果報有ること無く、無礙常住なり。是れ賢聖の法なり」と。是凡法とは、諸佛菩薩常に世間に在つて凡行に同じきなり。凡に同じきを以ての故に、無爲有漏にして礙有り常に非ず。是聖法とは、諸佛菩薩、世間を捨離せる合如の行なり。如に合するを以ての故に、無爲無漏にして無礙常住なり。此二は即ち是れ『地經』の中の、常と無常との二種の愛果なり。福徳は是れ彼無常の愛果にして、智は是れ常果なり。然るに此二種の性は相離れず。故に經の中に説かく、「無常は常と共にして常は無常と共に」と。二種の莊嚴の體性は是の如し。此二門

【四】以下、第三に位に就いて分別す。

【涅槃】 北本第二十七。

【五】以下、第四に人に就いて分別す。

次に、位に就いて論ず。位別に二有り。一には世間出世間の相對分別なり。地前は世間地上は出世なり。然るに福と智とは、義に通別有り。通じて之を論ずれば、並に世間及與び出世に通ず。言ふ所の別とは、『法鼓經』に説くが如し。地前の行を名けて福徳と爲し、地上の所行を説いて智慧と爲す。良に以れば、地前は相に在つて修行し、事に隨つて猶潤するが故に説いて福と爲し、深法性に於て未だ能く證見せざるが故に、智と名けず。初地已上は深法性に於て證見分明なるが故に、名けて智と爲し、前門を簡別するが故に、福と名けず。二には眼見聞見に約して分別す。『涅槃』に説かく、「初に九地に至つて佛性を聞見し、未だ能く眼見せず。因つて名けて福と爲す。十地は佛の若く、同じく能く眼見す。之を説いて智と爲す」と。位別是の如し。此三門(三三三)

次に、人に就いて論ず。人は、謂はく、凡夫、聲聞、緣覺、菩薩、及び佛なり。此人に約就して以て福智を辨するに、略して二門有り。一には理に對して分別す。凡夫の所行は事に隨つて資潤す。之を説いて福と爲す。未だ能く理を見ざるが故に、智と名けず。三乗の所行は理を見て成ずるが故に、通じて智と名け、前門を簡別するが故に、福と名けず。二には實に對して分別す。實は、謂はく、不空如來藏性なり。凡夫二乗は實に於て未だ見ず。一切の所行を、通じて名けて福と爲す。諸佛菩薩は實性を見ざるが故に、一切の所行を通じて名けて智と爲す。凡夫二乗は智慧無きに非ず。隠れて彰れざるなり。諸佛菩薩は福徳無きに非ず。隠れて説かざるなり。二種の莊嚴略して辨すること是の如し。

【三六】淨法聚第八段に二種性の義を明す。一に門の分別あり。一に行位に約就して先後を辨ず。

【三七】以下、第二に位に就いて分別す。中に四、一に釋名。

二種性の義に三門分別あり。行位相對して其先後を定む一。位に就いての分別二。行に就いての分別三。

第一門の中に、行位に約就して先後を辨定す。二種性とは、一には習種性、二には性種性なり。此二種性若し位に據つて分たば、習種は前に在り、性種は後に在り。若し行に就いて論ずれば、性習同時なり。同時なるを以ての故に、前後不定なり。體に依つて用を起さば、先に性種を明して後に習種を明す。用を尋ねて體を取らば、先に習種を明して後に性種を明す。彼證道、教道と相似せり。位に就いて以て論ずれば、教道は前に在り、證道は後に在り。世間の行を教道と爲すが故に、所以に前に在り。地上の行を證道と爲すが故に、所以に後に在り。行に據つて之を論ずれば、證教同時なり。同時なるを以ての故に、先後不定なり。體に依つて用を取らば、先に證、後に教なり。用を尋ねて體を取らば、先に教、後に證なり。先後是の如し。

第二門の中に、位に就いて分別す。種性を辨ぜんが爲に、通じて解行十地に對して以て論ず。中に於て、義別に其四門有り。一には其名を釋し、二には解に約して以て分ち、三には行に就いて別を顯し、四には解行を通じて以て其異を彰す。名字は如何。一、種性と云ふは、亦是十住と名く。若し十住と言はば、當分に名と爲す。解觀成就して退せざるを住と名く。若し習種を言はば、後に對して稱を立つ。前の觀解に依つて後の性種所成の行徳を習ふ。修すれども而も未だ成ぜざるは、之を説いて習と爲す。後の佛果に望めて能く

生ずるを種と曰ふ。第二には性種、亦是十行と名く。若し十行と言はば、當分に以て名く。備に法界の一切の行性を具するが故に、名けて行と爲す。性種と言ふは、前に對し後に望めて以て其名を立つ。前の習種の中に修する所の行徳は、此位の中に至つて成就して壞せざるが故に、名けて性と爲す。後の佛果に望めて能く生ずるを種と曰ふ。解行の位の名に四の別有り。一には解行と名け、二には發心と名け、三には總行と名け、四には道種と名く。解行と言ふは、出世の道に對して以て名を立つるなり。出世の道に於て解して行ずるが故に、名けて解行と爲す。發心と言ふは、果に對して以て名く。大菩提に於て、意を起して趣求するが故に、發心と名く。亦出世の心を發すべきが故に、發心と名く。廻向と言ふは、亦是れ果に對して以て其名を立つ。己が善法を廻して菩提に趣向するが故に、廻向と名く。道種と言ふは、當分後に望めて以て其名を立つ。當分の中に、如觀の道立するが故に、名けて道と爲す。後の佛果に望めて能く生ずるを種と曰ふ。十地の位にも亦四の有名あり。一には十地と名け、二には行方便と名け、三には菩提分と名け、四には聖種と名く。十地と言ふは、當分に以て名く。行徳成就の住處を地と名け、亦後に望めて能く生ずるを地と名くべし。行方便とは、當分に以て名く。善く諸度を起すを、行方便と名く。菩提分とは、當分に名と爲す。出世の道を名けて菩提と曰ひ、道行の差別を菩提分と名く。亦此く言ふべし、果に對して以て名くと。佛果の道を名けて菩提と曰ふ。地上の所行彼が與に因と爲るを菩提分と名く。聖種と言ふは、當分後に望めて以て其名を立つ。

【次に等】二に觀
解に就いて其位を
分別す。

當分の中に、正に會するを聖と名け、後に望めて能く生ずるが故に、説いて種と爲す。名
字是の如し。此一門つぎ次に、觀條に就いて以て其位を分つ。解別に四有り。一には知教法、
諸の教門の若は權若は實を知るなり。二には知義法、諸の義門を知ること、若は通若
は別なり。三には知理法、相空寂なるを知る。四には知實法、一切法を知る。皆佛性眞心
より起る所の體は、則ち是れ眞なり。通じては則ち位位俱に解なり。此四は中に於て別し
て分たば、習種の位の中に偏に教法を解す。故に「華嚴」に云はく、「十住の菩薩は所聞の
法に隨つて、即ち自ら聞解し、他に由つて悟らず」と。性種の位の中に、詮を尋ねて旨に
達すれば義法を解知す。解行の位の中に、相を破して寂に歸すれば理法を解知す。初地已
上に實を悟つて本を窺むれば實法を解知す。解に此別有るが故に、四位を分つ。又更に分
別すれば、習種の位の中に詮を尋ねて法を取らば世諦の義を知る。性種の位の中に詮を捨
して理を求むれば第一義を知る。解行の位の中に無有を破離して中道に趣入すれば一實の
義を知る。初地已上に實は緣に隨ふと悟らば緣起の無盡法界を了知す。解に此別有るが故
に、四位を分つ。第一には生死涅槃、染淨法相を解知し、第二には無相空の理を解知し、
第三には非有非無一實の義を解知し、第四には如來藏中の眞實法界緣起の門を解知す。解
別是の如し。理實に通じて論ずれば、一一の位の中に皆此を具す。別に隨つて之を論ずれ
ば、習種の位の中の觀行の初起は、染淨差別の法相を解知し、性種の位の中の觀解は、
轉勝りて相を捨し寂に趣きて、無相第一義諦を解知し、解行の位の中の觀解は、轉相を除

【次に等】三に諸行に約して其位を別つ。

【次に等】四に解行に就いて四位を分つ。

【華嚴】第八十住

【華嚴】第十一十行品。

破し、畢竟して非有非無の法を解知し、初地已上の觀解は、畢竟して眞實緣起の法界を解知す。解に斯異有るが故に、四位を分つ。此二門次に、諸行に約して以て其位を別つ。行に二階有り。一には行種、二には行徳なり。此二の中に、各始終有り。行種の中に就かば、習種は始習性種は終成なり。行徳の中、解行は始習十地は終成なり。行に此別有るが故に、四位を分つ。此三門次に、解行に就いて以て四位を分つ。中に於て二有り。一には解行參論、二には解行併説なり。參論と言ふは、此四位の中を分つて兩對と爲す。前の二の一對は先解後行、後の二の一對は先解後行なり。一相狀は如何。『習種の位の中に、教解を成就す。故に『華嚴』に云はく、『十住の菩薩は所聞の法に隨つて、即ち自ら聞解し、他によつて悟らず』と。性種の位の中には、隨つて教行を起す。故に『華嚴』の中に、説いて十行と爲す。初對是の如し。第二對の中、初の解行住は理解を修習す。是故に經の中に説いて解行と爲す。解を行と爲すが故に。又『地經』の中に彼解行を説いて、觀分明を爲す。觀は猶解なればなり。初地已上に理行を成就す。故に論に名けて行方便持と爲す。此に據つて以て論ずれば、習種の解行觀成就して、性種十地の行徳成するなり。併説と言ふは、聞思修證の四種の中、聞思は是れ解、修證は是れ行なり。習種の位の中には、教に依つて解を生じ、聞慧を成就す。性種の位の中には、義に依つて解を生じ、思慧を成就す。解行の位の中には、教に依つて行を起し、修慧を成就す。初地已上には、理に依つて行を成じ、實證を成就す。解行相對の分別是の如し。上來の四門を合して第二と爲す。

【三八】以下、第三
行に就いて分別
す。中に四、一に
釋名。

【論】 地持論第一

【次に等】 二に體
相を辨す。

【經】 北本涅槃經
第二十七。

位に就いて分別せり。

第三門の中に、行に就いて分別す。然るに行に就く中、義別に四有り。一には其名を釋し、二には體相を辨じ、三には眞妄作滅の義を明し、四には時に約して異を辨す。一名字は如何。一性種性とは、體に從つて名と爲す。無始の法性は之を説いて性と爲す。此法性本妄の爲に隱る。之を説いて染と爲す。修の對治に隨つて染を離れて始めて顯るるを、説いて以て淨と爲す。始顯の淨徳能く果の本と爲る、之を以て種と爲す。此れ乃ち性を顯して以て種を成するが故に、名けて性種と爲す。種の義壞せざるが故に復性と名く。故に論に説いて言はく、「性種性とは、無始法爾なり」と。習種性とは、因に從つて名と爲す。方便の行徳は本無今有なり。習に從つて生ずるが故に、名けて習と爲す。習は行徳を成じ能く眞果を生ずるが故に、習種性と名く。義は前に同じ。故に論に説いて言はく、「若し先來に從はば、修善の所得を習種性と名く」と。名義是の如し。此一門つて、體相を辨す。此二種の性は同じく眞識を用て、之を以て體と爲す。眞識の中、義別に三有り。謂はく、體、相、用なり。體は、謂はく、平等如實法性なり。古今常堪にして非隱非顯、非因非果なり。故に經に説いて言はく、「非因非果を、名けて佛性と爲す」と。此れ之體なり。其相を諸れば、眞實緣起集成の心事なり。一切恆沙の佛法眞實覺知の心を集成す。此心を妄に隱す義を説いて染と爲し、纏を出で垢を離るる義を説いて淨と爲す。淨の中の始は能く果の本と爲り、後果を生ずるが故に、説いて性種と爲す。其用を諸れば、眞

【次に等】三に眞妄作滅の義を辨ず

【經】勝鬘經。

識は染に在つて妄と和合して生死を起作し、淨に在つて治に隨つて行徳を集起す。行徳初めて立つて能く後果を生ずるを、説いて習種と爲す。體相麤爾なり。此二門次に、眞妄作滅の義を辨ず。中に於て、先に眞妄兩心に作不作有るを明し、後に眞妄に滅不滅有るを明す。問うて曰はく、「眞妄二心の中、何の心か能く習種の行徳を作し、何の心か作さざる。」釋して言はく、「唯眞のみなれば則ち作の義無く、單に唯妄想も亦作の理無し。眞妄相依つて、方に作の義有り。」是義云何。「若し唯眞實にして妄無ければ、眞は即ち平等なり。故に修作無し。若し唯妄想にして眞無ければ、妄の法は化化自滅して、體既に立たず。衆作有り。故に經に説いて言はく、「若し藏識無ければ、じ法は住せず。苦を厭ひ涅槃を樂求することを得ず。妄、眞に依るに由つて、眞は妄に隨つて轉ず。故に修作有り」と。問うて曰はく、「妄心は何の縁ありてか能く作す。」釋して言はく、「妄心に三の因縁有り。所以に能く作す。一には現在善友の縁力を以ての所以に能く作す。謂はく、諸の衆生は現在世に於て、佛菩薩、善友の教化に由るが故に、妄心の中に能く種性一切の行徳を修す。二には過去の善行の因力を以ての所以に能く作す。謂はく、諸の衆生は其過去に曾て衆善を習ひ、現心を薰發するが故に、妄心の中に能く衆行を修す。三には所縁の眞力を以ての故に作す。謂はく、彼所依の如來藏の中に、一切の功徳法性を具足し、妄心を薰發するが故に、妄心の中に諸善を發生す。」問うて曰はく、「眞心は何の縁ありてか能く作す。」釋して言はく、「眞心も亦三縁を以ての所以に能く作す。一には現在善友の縁力を以ての所以に

【次に等】四に時に約して異を辨ず

能く作す。謂はく、諸の衆生は現在世に於て、佛菩薩、善友の教化に由るが故に、眞心の中に諸行を生ず。二には妄修の薰力を以ての故に作す。謂はく、諸の衆生は妄想心の中に衆善を修集し、彼善は心を薰するが故に、眞心の中に諸の善法を起す。三には自體の薰力を以ての故に作す。『是義云何。』眞心の體は、是れ如來藏なり。如來藏の中に、一切恆沙の法性を具足し、彼法は心を薰するが故に、眞心の中に諸善を發生す。若し心體の中に一切恆沙の法性を具せざれば、功力を加ふと雖も、善生すべからず。作善是の如し。次に眞妄に滅、不滅有ることを辨ず。眞妄別して論すれば、妄想の縁修は一向に盡滅す。眞修は滅せず。何が故に是の如くなる。『妄想の法は、相有るも體無し。之を窺むれば則ち盡く。所以に盡滅するなり。故に『楞伽』に云はく、『妄想爾炎の智、彼滅するは我涅槃なり』と。眞實の法相隱るるも性質なり。之を研すれば則ち明かなり。明かに眞性を顯すを、説いて行徳と爲す。所以に滅せず。義に隨つて具に論すれば、眞妄に皆滅不滅の義有り。『是義如何。』妄法の體は虚にして、終に灰謝に歸す。所以に盡滅す。妄眞を薰するに藉る。眞實の行徳は妄の薰に由つて起るが故に、不滅と言ふ。妄盡くるの時、眞は妄に隨つて息す。復更に起らざるが故に、眞滅と言ふ。眞體常に存するが故に、不滅と云ふ。作滅の義之を辨ずること麤爾なり。此三門次に第四門に、時に約して異を辨ず。此二種の性、外凡に在る時は、但佛性と名け、行徳と名けず。佛性に二有り。一には法佛性、二には報佛性なり。法佛性とは、是れ性種の因なり。報佛性とは、是れ習種の因なり。二性何

の別がある。一、法佛性とは、本有の法體にして、彼果時と體に増減無きも、唯隱顯有れば淨穢を異と爲す。報佛性とは、本無の法體にして、但方便可生の義有り。此二は前の佛性章の中に具に廣く分別するが如し。是二佛性、性地に依至するを、二種性と名く。法佛の性は、轉じて性種と名く。報佛の性の所生の行徳を、名けて習種と爲す。是二の種性、解行の中に至るを、得方便及び清淨向と名く。彼習種性、解行の中に至るを得方便と名け、彼性種性、解行の中に至るを清淨向と名く。彼得方便及び清淨向を、初地上に至つて轉じて二道と名く。彼得方便は轉じて教道と名け、彼清淨向は轉じて證道と名く。教道果に至るを轉じて報佛、方便菩提、方便涅槃と名け、證道果に至るを轉じて法佛、性淨菩提、性淨涅槃と名く。此等は復時に隨つて改變すと雖も、其義殊ならず。二種種性之を辨すること繼爾なり。

證教の兩行の義に三門分別あり。名を釋す一。相を辨ず二。可說不可說の義を料簡す三。

【九】淨法聚第九段に證教兩行の義を明すに三門の分別あり。先づ第一に釋名。

【地經論】 第一。

第一に、名を釋す。證教の兩行は『地經論』に出づ。言ふ所の證とは、乃ち是れ知得の別名なり。實に平等を觀じて如に契するを證と名く。言ふ所の教とは、義別に七有り。一には方便の行徳、教に依つて修起し、其所依に従ふが故に、教行と名く。二には差別の行、教を以て行を辨ずべく、詮目に従ふが故に、教行と名く。三には諸佛所說の教法を知り、其所知に従ふが故に、教行と名く。四には說法の智行、能く言說を起し、世間を教被

【四】以下、第二に體相を辨ず、義別に九あり。一に修成相對。

【二には等】二に位に就いて分別す

【三には等】三に眞妄の分別。

するが故に、教行と名く。五には平等の證行、言に約して異を分ち、異は教別に從ふが故に教行と名く。六には行能く眞義を顯すを説いて教と爲し、因分の行の如きを名けて説大と爲す。七には上徳下被の義を、名けて教と爲す。『楞伽』に云ふが如く、法報の説等なり。然るに此二行、教に藉つて以て彰る、應に通じて教と名くべし。行成じ法に合するを、應に通じて證と名くべし。別の兩行の爲に隱顯異名なり。實に平等を觀すれば證法の義顯なるが故に、偏に證と名け、方便の行徳は題を證し、及び易きが故に獨り教と名く。此證と教と集起するを行と名く。名義是の如し。此一門

次に、體相を辨ず。義別に九有り。一には修成の相對、以て證教を分つ。一切の地前に方便を造修するを、名けて教行と爲す。此始修は言に依つて起るを以ての故に。一切地の中に成ずる所の徳を、名けて證行と爲す。此成徳は法性を證するを以ての故に。此二は猶是れ『地經』の中のごとく、最初の所行に佛法を成就する證なり。地經論に釋して言はく、「最初の所行は是れ阿含行なり。成就佛法とは是れ證行なり」と。此れ之謂ひなり。又此教とは、是れ彼説大因分の行なり。是中證とは、是れ彼義大果分の行なり。二には位に就いて分別す。地前の所修を、名けて教行と爲す。世間の行は言に依つて起るが故に。初地已上は一切の諸徳同じく證行と爲す。行熟して言を捨し、法性を證するが故に。此二は猶是れ『地經』の中に、衆の二淨を嘆するが如し。彼は地前の聞思修等を説いて阿含淨と爲す。猶此教行の如し。十地の行徳は同じく證淨と爲す、猶此證行の如し。三

【四には等】四に直に妄修に就いて分別す。

【五には等】五に眞中に相實相對す

【六には等】六に眞の中に就いて分別す。

には眞妄の分別、一切の妄修は此を教行と名け、一切の眞修は齊證行と爲す。故に『地論』に言はく、「聞思修及び散生の識智は、是れ則ち可説なり。可説なるを以ての故に、之を名けて教と爲す。眞智は爾らず。文字を離るるが故に。文字を離るるを以ての故に、説いて證と爲す」と。四には直に妄修に就いて、義に隨つて分別す。妄修に二有り。一には事に隨つて造修する福德の行なり。二には理に依つて成ずる所の智慧の行なり。福は事に依り言を以て彰し易きが故に、説いて教と爲し、慧は理に依つて成じ理を照すこと分明なるが故に言つて證と爲す。問うて曰はく、「妄修は眞を會すること能はず。云何が證と名く。釋して言はく、「妄修は體會せずと雖も、縁の中に相應するが故に、證と名くることを得。」五には眞の中に就いて相實相對す。因分の中に彼出世の眞證を得、無相を説いて教行と爲す。彼相は教行の中に現するが故に。相を尋ね實を得るを、説いて證行と爲す。此二は猶是れ『地經』の中の、増上の妙法と光明の法門となり。彼増上の法は是れ此證行にして、彼光明法は是れ此教行なり。光明と言ふは、論に自ら釋して言はく、「此大乘法は一切の餘の法門を顯照するが故に」と。謂はく、世間修行心中に顯るなり。六には眞の中に就いて體徳を分別す。無始の法性顯れて今徳を成ずるは、是れ其體なり。縁に従つて方便の行を修起するは、是れ其徳なり。體は證行の爲に始めて淨智を顯し、自體の徳を證するが故に、教行と爲す。方便の行徳は本言教の修習に依つて生ずるが故に。此二は猶是れ『地經』の中の、金莊嚴具所況の法是なり。金體清淨は證行に喩へ、環玊等

【七には等】七に眞の中に就いて體用を分別す。

【八には等】八に眞體に就いて詮に約し實に就いて分別す。

【九には等】九に眞の中に自分勝進を相對分別す。

【地經】 第二。

の相は教行に喩ふ。七には眞の中に就いて體用を分別す。次前の證教を、同じく説いて體と爲す。此體上に依つて教智外に彰るるを、説いて以て用と爲し、體を證行と爲す。法性を證するが故に、用を教行と爲す。正しく說法の智は世を照明するが故に。此二は猶是れ『地經』の中の、摩尼珠光所況の法是なり。珠體清淨は證行に喩へ、光明外照は教行に喩ふ。故に『地論』に言はく、「證智の法明は摩尼寶の中に阿舍光を放つ」と。八には眞體に就いて詮に約し、實に就き義に隨つて分別す。平等の證體を説いて證行と爲す。即ち此證體は言に約して十を分ち、説いて教道と爲す。此二は猶是れ『地經』の中の、虚空の鳥跡、虚空の盡處の所況の法是なり。平等虚空は證行に喩ふ。故に『地論』に言はく、「鳥跡の住處を句字身の住處と名く。菩薩地の證智の所攝なり」と。空中の鳥跡風盡の處は教行に喩ふ。故に論に説いて言はく、「中に於て此言説有らざるに非ず。十地の差別は言に約して十を分つが故に、詮目に從つて、名けて言説と爲す」と。九には眞の中に就いて自分勝進を相對分別す。自分所成の一切の行徳は、若は體若は用、斯を證行と爲す。自ら此法に於て、已に證得するが故に。勝進の中に上佛教を受くるを、名けて教行と爲す。此二は猶是れ『地經』の中に、金剛藏の證と阿舍との二力を嘆するがごとし。並に是れ彼の中に宣説して、妙無垢の智、無量の義辨、演説の美言、眞實の相應は、同じく證力と爲す。猶此れ證行なり。佛の教法に於て堅淨の慧を念するを、阿舍力と爲す。猶此れ教行なり」と。體相是の如し。此二門 竟る。

【四】以下、第三に證教を辨するに可宣説不可説の義あり且く初對の中修成門の義別に三、一に證教二行の相對に就いて。

【次に等】二に唯證に就いて。

【地經】 第二。

次に、證教を辨するに可宣説不可説の義有り。中に於て、且く初對に就いて之を論ず。餘類は知るべし。然るに初對に就かば、修成門の中、義別に三有り。一には證教二行の相對に就いて、以て可説不可説の義を辨じ、二には唯證に就き、三には唯教に就く。證教の相對は之を辨すること云何。『教行は説くべく、證行は論じ直し。蓋し乃ち其修證の時、に就いて語らば、始修の時未だ名相を出でず。行外に猶名相の得べき有り。之を用て顯修す。是故に説くべし。得證の時諸法の如を證す。證外に更に名相の得べき無し。復何を用てか、實證を表就せんを知る。是故に、證行は一向に不説なり。良に以れば、可説は偏に教に在り。故に『地經』に説いて言はく、「但一分を説く」と。一分と言ふは、謂ゆる、因分なり。此を始修教道の行と名け、因分と爲すなり。其修行不可説なるを以ての故に『地經』に説いて言はく、「十地は是の如く、説聞すべからず」と。證教二行の相對是の如し。次に唯證に就いて、以て可説不可説の義を辨す。然るに證は教に望むれば、一向に説き直し。中に於て別して論ずれば、亦可説不可説の義有り。『義相は云何。』『分別するに五有り。第一には總相を玄標するを以て、名けて可説と爲すべし。故に『地經』の中に、五偈を宣説して義大を顯示す。又復經の中に、之を説いて證と爲す。即ち相指して以て人に示すべからざるを不可説と名く。故に『地經』に云はく、「言説及ばず」と。此義彼空中所有の鳥跡風盡等の處の如し。玄談を以て名けて可説と爲すべし。即ち相指して以て人に示すべからざるを不可説と名く。第二には相を拂ひ顯示するを以て、名けて可説と

【次に等】三に唯
教に就いて。

爲すべし。相論すべからざるを不可説と名く。『何が故に是の如くなる。』證は名相を離るれば、説聞すべからず。今還道證も説聞すべからず。言彼法に當るを、名けて説證と爲す。故に金剛藏彰地の説き難きを、義大を顯すと名く。若し證法を言はば、可説可聞なり。言彼法に乖けば、則ち説と名けず。第三には況詮顯示を以て、名けて可説と爲すべし。故に『地經』の中に、彼因分所修の行を用て、果分離相眞徳を況顯するを、喻相應と名く。喻は猶況のごときなり。直に詮して彼法を顯示すべからざるを、不可説と名く。第四には、自體の眞法を以て互に相顯示するを、名けて可説と爲すべし。中に於て、或は因果の相顯るる有り。故に『地經』の中に、彼佛法を擧げて、用て地法を顯す。或は復體用互に相顯示す。『地經』に説くが如し。彼經の中の金莊嚴具の所況の法は用を以て體を顯し、摩尼光等の所況の法は、體を以て用を顯す。或は復行法互に相顯示す。故に『地經』の中に、彼眞智を用て地法を顯示す。是等は皆是れ自體の眞法互に相顯現するを、名けて可説と爲す。彼情相を用て眞を顯すべからざるを、不可説と名く。第五には情實相望めて、以て説く。情に據つて實に望むれば、情外に實有り。以て談論すべきを、名けて可説と爲す。實に就いて情に望むれば、實外に情無し。知んぬ、復何の施名をか用ひん。實を説くが故に不可説なり。證の中の可説不可説の義の差別是の如し。次に教行に就いて以て可説不可説の義を辨ず。教の中義に隨はば、亦可説不可説の義有り、教行の中には、義に眞偽を含む。偽修の陳ぶべきを名けて可説と爲し、眞修の顯し難きを不可説と名く。

【地經】 第二。

故に『地經』の中に、彼因分親修の徳を彰して云はく、「言説き難きは白心に知るなり」と。證教の兩行之を辨じて爾云ふ。

大乗義章 卷第十

遠法師撰す

淨法聚因法中、此卷に十二門あり。

三歸の義。三學の義。三聚戒の義。三種律儀の義。止觀捨の義。三慧の義。三種般若の義。三智の義。三量智の義。

同相三道の義。別相三道の義。三種住の義。

三歸の義に三門の分別あり。釋名一。所歸二。

【一】淨法聚第十段に三歸の義を明すに、三門の分別あり。先づ第一に釋名

【二】以下、第二に別して所歸の三寶の境界を明す。中に三一に釋名

第一に名を釋す。三歸と言ふは、歸投依伏するが故に歸依と曰ふ。歸投の相は、子の父に歸するが如し。依伏の義は、民の王に依るが如く、性の勇に依るが如し。歸依不同なり。境に隨つて三を説く。謂ゆる歸佛、歸法、歸僧なり。佛に依つて師と爲す。故に歸佛と曰ふ。法に憑つて藥と爲す。故に歸法と稱す。僧に依つて友と爲す。故に歸僧と名く。問うて曰はく、「何が故に、偏に此三に歸する。」此三種は畢竟歸處なるを以て、能く衆生をして生死を出離し、涅槃を得しむるが故に。「名義是の如し。」
第二門の中に、別して所歸の三寶の境界を明す。三寶の義は中三門に分別す。一には其名を釋す。二には體相を辨す。三には次第を明す。先づ其名を釋す。言ふ所の佛とは、外國の正音には、名けて佛陀と爲す。此には覺者と云ふ。覺行成する人なるが故に覺者と名く。又人覺を有すれば、亦覺者と名く。覺に兩義有り。一には覺察を覺と名く。二には

【地持論】 第三。

【達摩】 ダルマ

【成實】 第三。

【僧伽】 サンガ

【寶性論】 第二。

覺悟を覺と名く。覺察と言ふは、煩惱障に對す。煩惱侵害の事等は賊の如し。唯聖のみ覺知して、其が爲に害せられず。其れ猶世人の賊有りと覺知すれば、賊能く爲す無きがごとし。彼も亦是の如し。故に名けて覺と爲す。覺悟と言ふは、知障に對す。無明昏寢の事等は睡の如し。唯聖のみ獨り悟りて覆障せられず。睡の寤むるを得るが如し。故に名けて覺と爲す。所對の無明に其二種有り。一には迷理の無明。彼を對除するが故に法の實性を覺す。故に名けて覺と爲す。二には迷事の無明。彼を對除するが故に、一切の善惡無記三聚の法を覺知す。故に名けて覺と爲す。『地持論』の中、此義に同じ。言ふ所の法とは、外國の正音には、名けて達摩と爲し、亦曇無と名く。本是れ一音、之を傳ふる別なるのみ。此には翻じて法と名く。法の義不同なり。汎く釋するに二有り。一には自體を法と名く。『成實』に説くが如くんば、謂ゆる一切の善惡無記三聚の法等なり。二には軌則を法と名く。行儀を辨彰して、能く心の軌と爲る。故に名けて法と爲す。今三寶の中に論ずる所の法とは、軌則を法と名く。言ふ所の僧とは、外國の正音には名けて僧伽と曰ふ。此方には翻譯して和合衆と名く。行徳乖かざる、之を名けて和と爲す。和する者一に非ず。之を目けて衆と爲す。『此之三種、何が故に寶と名くる。』世間の瓊瑤は人の珍とする所なり。此之三種、世に尊重せらるること世の珍奇の如し。是故に喩に就いて、之を説いて寶と爲す。『寶性論』の中に、釋に六義有りて、之を喩ふるに寶の如し。一に希有の義、世の寶物は貧窮の人の得る能はざる所なるが如し。三寶も是の如し。薄福の衆生は、百千萬世にも値遇する

【次に等】二に體相を辨ずるに三義あり。初めに別相を明す。此中三寶の一つに就いて明す中、初に四、一に佛寶の體性を辨ず

【毘曇法】 俱舍論 第十四。

こと能はず。故に名けて寶と爲す。二に離垢の義、世の眞寶の體に瑕穢無きが如し。三寶も是の如く諸漏を絶離す。故に名けて寶と爲す。三に勢力の義は、世の珍寶は貧を除き毒を去るに、大勢力有るが如し。三寶も是の如し。不可思議の六神通力を具す。故に説いて寶と爲す。四に莊嚴の義、世の珍寶能く身首を嚴り、身をして殊好ならしむるが如し。三寶も是の如し。能く行人を嚴りて、法身を清淨にす。故に説いて寶と爲す。五に最勝の義、世の寶璧、諸物の中に勝れたるが如し。三寶も是の如し。一切の世の中に、最も殊勝と爲す。故に名けて寶と爲す。六に不改の義、世の眞金の燒打磨等も變改すること能はざるが如し。三寶も是の如し。世間の八法の爲に改められず。故に名けて寶と爲す。名義是の如し。此一門つぎ次に體相を辨ず。中に於て、略して三義を以て之を辨ず。一に別相を明し、二に一體を明し、三に住持を明す。初に別相とは、經の中に亦階梯の三寶と名く。三寶の寶相異なり。故に別相と稱す。化の階降に隨つて、佛は上、法は中、僧を最下と爲す。故に階梯と曰ふ。此階梯の中、先に佛寶を明す。佛寶の中に四門の分別有り。一には具體相を定め、二には閉合して相を辨じ、三には佛徳を明し、四には修成を論す。體相如何。經論不同にして、所説各異なり。毘曇法の中に宣説すらく、「如來の五陰の實徳を佛寶の體と爲し、假人を説いて以て佛法と爲さす」と。「何が故に是の如くなる。」彼宗の中には、五陰の外に別の假人無し。但陰の上に就いて、假に人の名を施す。貧賤の人の富貴を名とするが如し。彼も亦是の如し。人無きを以ての故に、假人を説いて以て佛寶と爲さす。五

【次に等】二に開合して相を辨ず。

【地論】 第三。

陰の中に就いて、唯方便修成の善陰を取つて、以て佛法と爲す。報無記の者は、是れ佛法に非ず。無記法は重んずべきに非ざるを以ての故に、修成の徳の中、無漏の功徳は是れ其佛寶なり。有漏は則ち非なり。有漏の功徳は重んずべきに非ざるが故に。是故に彼宗は、諸佛如來の相好の形、種智の徳は斯れ佛寶に非ざれども、相從して佛と説く。亦傷くること無きを得。成實法の中には、唯假人を説いて以て佛寶と爲す。五陰の實徳は、彼宗の中に於ては法寶の所收なり。故に佛寶に非ず。『何が故に彼宗には、唯假人を説いて以て佛寶と爲す。』彼宗に説かく、『假名の行人有り。師匠と爲りて益すること要す假の中に在り』と。故に假人を説いて以て佛寶と爲す。大乘法の中には、佛寶門に攝す。假人の實徳、悉く是れ佛法なり。體性是の如し。次に開合して相を辨ず。開合不定なり。總じて唯一佛なり。或は分ちて二と爲す。二に兩門有り。一には生身と法身と二種を開分す。父母所生の相好の形は是れ其生身、方便修起の戒定慧等の五分の功徳を、名けて法身と爲す。二には眞と應と二を分つ。或は分つて三と爲す。三に兩門有り。一には法と報と應と三種を開分す。『地論』に説くが如し。二には化、應及び眞に三種を開分す。『金光明』の三身品に説くが如し。或は分つて四と爲す。四に兩門有り。一には眞を聞き應を合して、以て四種を論す。『是義云何。』『楞伽』に説くが如し。『一には應化佛、二には功徳佛、三には智慧佛、四には如如佛なり』と。四の中、初の一は猶上の應身の如し。中の二は報身。報は福智に隨ふ。故に二種を分つ。後の一は法身なり。二には眞應並に開いて、以て四種を論す。『是

【涅槃】 第十一
大衆所問品。

【次に等】 三に佛
徳を明す。

【次に等】 四に修
成を明す。
【大智度】 第四。

義云何。『眞の中に二行り。謂はく、法と報なり。應の中に亦二有り。謂はく、應と化なり。王宮の所生は修成の佛を示す。之を名けて應と爲す。此應身に依つて餘の化佛を起す。』涅槃に説くが如し。釋迦如來、無量の佛を化して、諸の大衆の所奉の供を受くる等なり。或は分ちて十と爲す。『華嚴』に説くが如し。廣すれば則ち無量なり。此等は後の三佛章の中に、具に廣く分別するが如し。辨相是の如し。次に佛徳を明す。佛徳衆しと雖も、要は只二種なり。一には菩提行徳、二には涅槃斷徳なり。行徳不同なり。一門に三を説く。謂ゆる般若、解脱、法身なり。般若に依りて解脱を起し、解脱に依りて法身を成ず。此三同時にして、義、先後を別つ。涅槃斷徳も亦三種有り。一には煩惱斷、二には業斷、三には苦報斷なり。先に煩惱を斷ず。煩惱を斷ずるが故に業結生ぜず。業生ぜざるが故に苦報隨つて已む。前の般若に由るが故に煩惱を斷ず。前の解脱に由るが故に能く業を離る。前の法身に由るが故に能く苦を滅す。佛徳是の如し。次に修成を辨す。『大智論』の中に明す。迦梅延子の所説に、修成に略して四階有り。第一に、先づ三阿僧祇に於て、有漏の六波羅蜜を修習して無漏を習せず、諸結を斷せず。其無漏道を修せざるを以ての故に、則ち習種、性種、解行、乃至法雲の聖位の差別無し。第二に三阿僧祇を度し、次に百劫に於て相好の業を修す。是中、亦未だ無漏を修習して諸の結縛を斷せず。第三分の中、最後身に於て世の八禪を修す。有漏道を以て上に攀し下を厭うて、欲界より無所有に至る一切の煩惱を斷除す。初禪を修習して欲界の結を斷じ、第二禪を修して初禪の結を斷じ、乃至非想

【戒實】第十二斷
結品の所説。

地定を修習して無所有の結を斷す。非想の一地は、上の攀すべき無ければ等智に除かず。
 第四分の中に諦觀を修習し、四諦十六聖行を觀察して、非想地の見、修の兩惑を斷す。
 十六心有つて見惑を斷除す。謂はく、見道の中の八忍、八智なり。十八心有りて修惑を斷
 除す。謂はく、非想地の九無礙道、九解脫道なり。通合して具に三十四心有り。前の三十
 三心は因中の無漏にして、佛寶の體に非ず。第三十四は果中の無漏にして、是れ佛寶の體
 なり。毘曇宗の中は此義に在依す。戒實は前と大同少異なり。言ふ所の同とは、四分の所
 修、前と相似す。言ふ所の異とは、三分中の所修の八福、但能く結を伏して永斷するこ
 と能はず。第四分中の所修の聖道は、總じて諦空を觀じ、通じて三界の見修の兩惑を斷す。
 前の宗に別して諦行を觀じ、局りて非想を斷するに同じからず。又復成實は多心、結を斷
 ず。局りて三十四心に在らず。大乘法の中には、行修に階多し。略して十五有り。一には、
 外凡善趣位の中に於て淨信を修習す。第二には、次に習種位の中に於て正解を修習す。第
 三には、次に性種位の中に於て諸行を修起す。第四には、次に解行位の中に於て如觀を修
 學す。第五には、次に歡喜地の中に於て諸の大願を發す。第六には、次に離垢地の中に
 於て淨戒を修習す。第七には、次に明地の中に於て淨定を修治す。第八には、次に炎地
 の中に於て道品觀を修す。第九には、次に難勝地の中に於て諦觀を修習す。第十には、次
 に現前地の中に於て十二緣を觀す。第十一には、遠行地の中に一切の善提の分法を修習す。
 第十二には、不動地の中に淨佛土を修す。第十三には、善慧地の中に一切の説法智行を修

【次に等】 別相三寶の中、次に法寶を明す。中に五、一に教法。

【理法といふ等】 二に理法。

【地經】 第八。

【助道法とは等】 三に助道法。

習す。第十四には、法雲地の中に一切殊勝智行を修習す。第十五には、十地窮終に金剛定を起し、微障を斷絶して佛の境界に入る。當に知るべし、此一の位の中に於て、皆具に法界の行徳を修習することを。其説相に隨つて且く分つことは是の如し。佛寶門竟る。次に法寶を辨す。中に於て、義別略して五種有り。一には教法、二には理法、三には助道法、四には涅槃法、五には化用法なり。教法と言ふは、謂ゆる三藏、十二部なり。是義、前の教法聚の中に具に廣く分別するが如し。理法と言ふは、毘曇法の中に宣説すらく、「四諦、十六聖行をば以て寶と爲す」と。十六聖行は、四諦章に具に廣く分別するが如し。成實法の中に宣説すらく、「四諦の名用假有を世諦の理と爲す。無性の空を眞諦の理と爲す」と。大乘の所論、義別して三有り。一には相に就いて理を明し、二には相實相對し、三には唯實に就く。相に就くと言ふは、彼妄情所起の法の中に就いて、以て道理を辨す。離相の有を世諦の理と爲し、無性の空、無相の空を眞諦の理と爲す。言ふ所の相實相對して辨すとは、彼妄情所起の相を以て眞實如來藏性に對して、以て道理を辨す。性相の法の相有體無を世諦の理と爲し、如來藏性の相寂體有を眞諦の理と爲す。此義、彼「地經」の中に説くが如し、「十二縁の法は、相有體無と觀するを世諦觀と名け、眞心を觀察するを第一義觀と名く」と。實に就くと言ふは、直に眞實如來藏の中に就いて、作用の法門を世諦の理と爲し、寂滅如門を眞諦の理と爲す。理法是の如し。助道法とは、謂ゆる三十七道品の法なり。毘曇法の中に、釋に兩義有り。一には壞縁、二には不壞縁なり。壞縁と言ふは、三

【涅槃法とは等】
四に涅槃法を明す

寶の境界の差別を分たす。故に壞縁と名く。此門の中に於て、一切三乘の無漏の功德、悉く皆是れ其助道の法寶なり。不壞縁とは、三寶の境界各別に建立するを、不壞縁と名く。此門の中に於て、唯菩薩無漏の功德、及び緣覺の人の因果の無漏を取つて、助道法と爲し、自餘の聲聞無漏の功德を、判じて僧寶と爲し、如來の無漏を判じて佛寶と爲す。是故に説いて助道法と爲さず。問うて曰はく、「助道は道諦の所收なり。前の理法の中に、已に道諦を説く。何んが更に助道法を説くを須ひん。」釋して言はく、「道の中に理有り、事有り。通じては是れ理、別しては是れ事なり。戒、定、智慧、三十七品は行數に差別すれば、是れ其事道なり。道、如、跡、乘の四義に寛通すれば、是れ其理道なり。前の理法の中に明す所の道諦は、是れ其理道なり。今此に論ずる所の助道法は、其事道なり。事理不同なるが故に。復之を明す。成實法の中に假人を宣説して佛僧と爲すが故に、一切三乘の無漏の功德は、悉く是れ助法なり。大乘にも亦説かく、「一切三乘の無漏の功德を助道法と爲す」と。涅槃法とは、毘曇には、唯煩惱業思盡滅の處の數滅無爲を説いて涅槃法と爲す。問うて曰はく、「涅槃は、體は是れ滅諦。前の理法の中に滅を説き竟る。何んが勞はしく更に涅槃法寶を説くや。」釋して言はく、「滅の中に亦理事有り。別を名けて事と爲し、通を名けて理と爲す。所除の煩惱業等の品數の上下に約對して、以て其滅を論ず。滅の則ち階降優劣等しからざるを名けて事滅と爲し、盡、止、妙、出の四義寛通するは、是れ其理滅なり。前の理法の中に論ずる所の滅諦は、是れ其理滅、今の涅槃法は、是れ其事滅なり。事理不同な

【化用法とは等】
 五に化用法。
 【經】維摩經。
 【次に等】別體三
 實の中に僧寶を明
 すに三門の別あり
 一には體性を定む

り。故に復須く論すべし。成實法の中には、煩惱業苦盡無の處を同じく涅槃と爲す。大乘法の中には、涅槃に二有り。一には數滅無爲を涅槃法と爲す。二には善に萬德圓寂有るを以て涅槃法と爲す。化用法とは、經の中に説くが如し。「非道を行じて佛道に到達す」と。是の如き法なり。法實是の如し。次に僧寶を辨す。中に於て三門有り。一には體性を定め、二には僧德を明し、三には閉合して相を辨す。「體性如何」「毘曇法の中、僧に二種有り、一に應供僧は、上諸佛を盡し、下極めて凡夫の沙彌に至るまで、通じて皆是れ僧なり。是故に檀越、僧次に人を請じて上下を簡ばざれば、皆悉く供僧の福を得。二に三歸僧は、唯分所を局る。聲聞の人の中の四果四向をば、以て僧寶と爲す。凡夫の比丘は德の歸すべき無し。是を以て取らず。緣覺は出世して和合衆無ければ、僧を成ぜざるが故に、所以に論ぜず。彼論の中、住聖の菩薩は單一にして侶無く、只僧を成ぜず。所以に説かず。佛は是れ佛寶。亦僧に非ざるが故に、所以に論ぜず。又聲聞の中には、唯五陰實法の功徳を取りて僧寶の體と爲し、假人を説いて以て僧寶と爲さず。彼宗は、陰の外に別して人無きが故に。又實德の中、無漏の功徳は是れ其僧寶、有漏は則ち非なり。有漏の功徳は重んずべからざるが故に。成實法の中には、僧に亦二有り。一に應供僧、前と相似す。二に三歸僧、大況前に同じ。唯聲聞を取りて餘衆を取らず。言ふ所の異とは、聲聞の人の中、四果四向假名の行人を僧寶の體と爲し、實德を取らず。供を受け福を生ずるは唯假人なるが故に。大乘法の中には、通じて之を論すれば、三乘の聖衆は皆是れ僧寶なり。大を簡んで小に異

【次に等】二に僧の徳を辨す。

【地持論】第一。

【次に等】二に僧相を辨す。
【聖業】第六四依品。

すれば、唯菩薩を取る。中に於て彼僧の門を以て統攝すれば、假人實徳、悉く是れ僧實なり。僧實の體性、之を辨すること麤爾り。次に僧の徳を辨す。徳に二種有り。一には行、二には斷なり。行徳衆しと雖も、要は唯三種なり。一には福、二には智、三には淨報なり。施戒忍辱は是れ其福分、般若は智分、精進と禪とは、亦是福、亦是智なり。精進に依るが故に、施戒忍、四無量等を修するは是れ其福分、聞、思、修を起すは是れ其智分、禪に依つて四無量等を修習するは是れ其福分、陰界入、巧便觀等を修するは是れ其智分、菩薩八種の勝報を成就するは是れ其報なり。此等具に辨すること『地持論』の如し。行徳是の如し。斷徳にも亦三有り。謂ゆる煩惱、業苦を斷するなり。前の智に由るが故に、能く煩惱を斷す。前の福に由るが故に、能く諸業を絶つ。前の淨報に由るが故に、能く諸の苦を離る。僧徳是の如し。次に其相を辨す。中に於て、開合廣略不定なり。總じては唯一僧なり。或は分つて二と爲す。二に三門有り。一には位に就いて二を分つ。『涅槃』に説くが如し。一に假名の僧は見道の前に在り。未だ僧徳有らず、假に僧の名を與ふるを假名僧と名く。二に眞實僧は、位分、見諦已上に在り。内に實徳有るを眞實僧と名く。二には境に約して二を分つ。謂はく、事理和僧及び理和僧なり。隨有の行同じきを事理和僧と名け、證理の行同じきを理和僧と名く。三には法に隨つて二を分つ。謂はく、羯磨僧及び法輪僧なり。法別不同なり。汎く三種有り。一に出家衆法は、謂ゆる百一羯磨の事なり。出家比丘四人已上同じく此法を崇むれば、出家衆法と名く。二に出家行法は、謂ゆる四依なり。唯出家

の者共に之を行ずる所なれば、出家行法と名く。何等をか四と爲す。『謂ゆる比丘は盡形
 乞食し、糞掃衣を著し、樹下に於て坐し、病有れば陳棄藥を服す。是を四依と爲す。』問うて
 曰はく、『比丘受くる所の禁戒は、亦是れ出家同行の法なり。何が故に、出家行法と名けず
 して、偏に四依を名けて出家行法と爲す。』釋して言はく、『戒は是れ比丘の正體なり。故
 に廢して論ぜず。四依は乃ち是れ比丘の所行なり。是を以て偏に諍く。三に道俗通法は、
 謂ゆる坐禪、學問、觀空、斷結、是の如く一切の道俗同じく行ずるを、名けて通法と爲す。
 三の中、前の二は是れ其僧法なり。之を約して僧を辨す。彼出家衆法の中に於て、四人已
 上同一界内に許崇して乖かざるを羯磨僧と名く。彼出家行法の中に於て、十方同じく違ひ
 和して乖かざるを法輪僧と名く。有人説いて言はく、『四諦の理は是れ其法輪、會諦の解は
 是れ法輪僧』と。然るに彼四諦は乃ち是れ道俗通行の法輪にして、是れ出家僧行の法輪に
 非ず。若し四諦は是れ僧法輪なりと言はば、調達僧を破するに、相似の語を説いて應に五
 諦と説くべし。何の義を以ての故に。五邪を宣説するや。五邪を説くを以て相似と爲るが
 故に。明に知る、四諦の理を用て僧法輪と爲さざることを。又復若し會諦の解を以て法
 輪僧と爲さば、在家の中の三果の聖人は皆諦理を會す。應に名けて僧と爲すべし。彼僧に
 非ざるが故に、明に知る、會諦の解を以て法輪僧と爲さざることを。此を以て之を推す
 に、但出家をして凡聖を問ふこと無く、同じく四依に違つて、情に乖異無からしむる、斯
 を皆名けて法輪僧と爲す。法輪と無漏と、同異分ち難し。今此に、具に四句を以て之を辨

【大智論】
六。

第三十

す。「何等を四と爲す。」一には法輪僧にして無漏に非ず。謂はく、出家の凡夫なり。同じく四依に違ふ。故に法輪と名く。未だ聖徳有らざるが故に無漏に非ず。二には是れ無漏にして法輪僧に非ず。謂はく、在家の聖人なり。内に聖徳を具す。故に無漏と名く。四依を行ぜず。故に法輪に非ず。三には亦是れ法輪、亦是れ無漏なり。謂はく、出家の聖人なり。四依を遵行す。故に是れ法輪なり。内に聖徳を具す。故に是れ無漏なり。四には法輪に非ず、亦無漏に非ず。謂はく、在家の凡夫なり。四依を行ぜず。故に法輪に非ず。具せず。故に無漏に非ず。此を以て之を推せば、法輪と無漏との同異知るべし。唯無漏の聖人を將つて法輪僧と爲すことを得ず。上來の三門は、僧を分つて二と爲し、或は説いて三と爲す。中に於て亦三門の差別有り。一には位に就いて三を分つ。一に假名僧の位は外凡に在り。未だ僧徳有らずして、假に僧名を與ふるを假名僧と名く。二に清淨僧の位は内凡に在り。三に眞實僧の位は見道已上に在り。内に眞徳を具するを眞實僧と名く。二には行に就いて三を分つ。「涅槃」に説くが如し。一は破戒雜僧は、身に戒を持し過を愼みて犯さずと雖も、破戒の者と共に同じく止住して布薩説戒す。二に愚癡僧は、身に戒を持すと雖も、己が弟子毀犯する所有るを見ては、教へて悔除せしむ。他に犯有るを見ては、默して舉せず。三に清淨僧は、身自ら戒を持し、他に犯有るを見ては、能く教へて悔除せしむ。三には大小に三を分つ。謂ゆる聲聞、緣覺、菩薩なり。故に經に説いて言はく、「僧とは、謂はく、三乘の衆なり」と。或は分つて四と爲す。「大智論」に説くが如し。一に啞羊

【成實】 第一。

【一義は等】 三寶を分別する中、二に一體三寶を辨ず

僧、愚癡の比丘は善惡持犯の輕重を識らず、所犯の罪に隨つて悔除することを知らざるこ
と、猶し啞羊の死に至りて聲無きがごときを啞羊僧と名く。二に無羞僧は、善惡持犯の輕
重を知ると雖も、内に羞恥無し。故に毀犯を爲す。三に有羞僧は、善惡持犯の輕重を識知
して、内に羞耻を懷き過を愼みて犯ぜず。四に眞實僧は、内に聖徳を具す」と。或は分ち
て五と爲す。『律毘婆沙』に説くが如し。一には群僧、前の四中の啞羊と相似す。二には無
慚僧、前の四中の無羞と相似す。三には別衆僧、身犯さずと雖も、布薩説戒に和せず。
四には清淨僧、前の四中の有羞と相似す。五には實僧、前の四中の眞實と相似す」と。
若し復廣く分たば、僧に無量有り。『毘曇』中の如きは、十四賢聖を説き、『成實』には、
二十七賢を宣説し、大乘には四十一賢を宣説す。謂はく、十行、十住、十廻向、十地、合
して四十と爲し、一の等覺を加へて四十一と爲す。若し十信に通ずれば、五十一有り。此
等は後の賢聖章の中に、具に廣く分別するが如し。別相の三寶、之を辨ずること變難爾り。
『一體は如何。』中に於て分別するに、略して三義有り。一には事に就いて論ず。佛體の上
に就いて、義に隨つて三を分つ。覺照の義邊を説いて佛寶と爲す。即ち彼佛徳に可軌の義
有るを、説いて法寶と爲す。違淨過盡くるを説いて僧寶と爲す。此三、義別なれども、徳
體殊ならず。故に一體と名く。二此一義は、毘曇、成實、大乘法の中に、齊く具に之有り。
偏に大にのみならず。二には破相の空理に就いて以て論ず。三寶は事別なれども、體空殊
ならず。故に一體と名け、亦同體と名く。此義は、唯大乘、成實在在り。毘曇の中には無

【涅槃】 第八如來性を出。

【涅槃】 第八。

【涅槃】 第八。

【經】 南本涅槃經第二十三。

【經】 涅槃經第十三。

【住持は等】 次に三寶の體相を辨ずる中、三に住持三寶を明す。

し。彼宗は法體空を説かざるが故に。三には實に就いて一を論ず。三寶別なりと雖も、皆實性を用て體と爲さずといふこと莫し。中に於て一を辨ずれば、法に隨つて不定なり。若し『涅槃』開出の三寶に就かば、三寶の一大涅槃に即するを名けて一體と爲す。故に『涅槃』に云はく、「我三事即ち涅槃なることを示す」と。若し性に就いて以て三寶を辨ずれば、三寶即ち性なるを名けて一體と爲す。故に『涅槃』に云はく、「是の如きの三歸は、即ち是れ我性なり」と。若し眞諦に就いて以て三寶を分たば、三寶即ち眞なるを名けて一體と爲す。故に『涅槃』に云はく、「若し能く觀すれば、三寶常住にして眞諦に同じし」我性と佛性と、無二無別なり」と。若し常義に就いて以て三寶を辨ずれば、三寶即ち常なるを名けて一體と爲す。故に經に説いて言はく、「我曾て佛法僧に差別相有りと説かず。唯常恆にして變易有ること無く、差別無しと説くのみ」と。若し不二法門に就いて以て三を辨ずれば、三即ち不二なるを名けて一體と爲す。故に經に説いて言はく、「佛即ち是れ法、法即ち是れ僧なり。此三寶は、皆無爲の相なり。虚空と等し。一切の法も亦爾なり」と。斯れ乃ち一切法界門の中、何れの法に隨ひ就いても、一を辨ずること皆爾り。一體三寶、之を辨ずること既に然り。諸法一體の類、皆此に像ふ。此一義は、周りて大乘に在り。小乗の中には一體三寶無し。之を辨ずること略して爾り。住持は云何。『小乘法の中には、泥龜木像を住持の俣と爲し、綿素竹帛を住持の法と爲し、凡夫の比丘を住持の僧と爲す。大乘法の中には、住持に二有り。一には化用住持、二には寶徳住持なり。化用と言ふは、諸佛如來大

【次に等】次に所歸の三寶の境界を明す中、三に三寶次第の義を明す。中に三、先づ起化の次第。
【二には等】次に化益の次第。

【三には等】次に修成の次第。

悲の作用、法界に充滿して、八相成道するを住持の佛と爲し、化に隨うて説く所の一切の言教流布して、世に益するを住持の法と爲し、法化に依つて成ずる三乘の諸衆を、住持の僧と爲す。又復諸佛涅槃を得と雖も、畢竟して菩薩の所行を捨せず、常に能く示して、菩薩、聲聞、緣覺等の事を爲すを、此を亦名けて住持の僧と爲す。化用是の如し。實徳は云何。二諸佛如來の法身常住なるを住持の佛と爲し、法性常恆を住持の法と爲し、諸佛如來の僧行波せざるを住持の僧と爲す。住持の三寶、之を辨ずること嚴爾り。此二門つぎに三寶の次第の義を明す。次第の不同、略して三義有り。一に起化の次第は、先に佛寶を明し、次に法、後に僧なり。佛を化の本と爲す。故に先に之を明す。佛に由つて説を起す。故に次に法を明す。法に依つて化して、三乘の諸衆を成ず。故に後に僧を明す。二に化益の次第は、亦先に佛を明し、次に法、後に僧なり。先に佛寶を明して、人を化して信を生ぜしめ、次に法寶を明して、人を化して解を生ぜしめ、後に僧寶を明して、人を化して行を起さしむ。供養して福行を起さしむるが故に。又人をして、之を學して行はしめんと欲するが故に。三に修成の次第は、或は先に法を明し、次に僧、後に佛なり。或は先に僧を明し、次に法、後に佛なり。中に於て若し行儀を以て法と爲さば、先に法寶を明す。法に依りて僧寶の行徳を集起するが故に、次に僧を明す。僧行成就して便ち成佛を得るが故に、後に佛を明す。若し理性に就いて以て法寶と爲さば、則ち先に僧を明す。僧行成就して便ち法性を證す。故に次に法を明す。法を證すること窮滿して、便ち成佛を得。故に後に佛

【三】第三に別して能歸を明す。中に二、一に歸相を明す。

【次に等】二に歸意を辨す。

【涅槃】第五四相品

を明す。所歸是の如し。

第三門の中に、別して能歸を明す。中に於て三有り。一には歸相を明し、二には歸意を

辨す。歸相に三有り。一には異相歸依、彼外相の佛法僧の中に於て、歸心憑伏するを異相

歸依と名く。二には自德歸依、己が當來の三寶の功徳に於て、心を起して歸趣するを自德

歸依と名く。三に自實歸依は、『涅槃』に説くが如し。三歸の眞性は、是れ己が自實なり。

彼異を捨てて自實の三寶の眞性に歸趣するを求むるを、自實歸依と名く。歸相是の如し。

此一門。次に歸意を辨す。異相歸依の所爲に三有り。一には離の爲の故に歸す。生死の惡不

竟る。次に歸意を辨す。善を離れんが爲の故に。故に『涅槃』に云はく、「一切衆生、生死の惡獵師を怖畏するが故

に三歸依を求む」と。『勝鬘』にも亦云はく、「聲聞、辟支、怖畏を以ての故に如來に依ると

二には得の爲の故に歸す。樂の果及び善法を得んが爲の故に。三には益の爲の故に歸す。

三寶に依りて衆生を利せんが爲の故に。自德歸依の所爲に亦三有り。一には離の爲の故に

歸す。生死の惡不善を離れんが爲の故に。二には得の爲の故に歸す。出世の涅槃の道を得

んが爲の故に。三には益の爲の故に歸す。當果を求め、衆生を利せんが爲の故に。自實歸

依の所爲に亦三有り。一には離の爲の故に歸す。自性如實の法を證せんが爲の故に。三に

は益の爲の故に歸す。自實を證し、衆生を化せんが爲の故に。三歸の義、厥趣き盡闌り。

三學の義に五門の分別あり。名を釋し轉を定む一。相を辨す二。依に就いて分別す三。攝相四。對治五。

【四】淨法聚第十一段に三學の義を明すに五門の分別あり。一に釋名定體。

【五】以下、第二に三學の相を辨ず

【成實】第十五。

【龍樹は等】大智度論第二十六。

第一に名を釋す。三學と言ふは、一には増戒學。二には増定學。亦増意と名け、亦増心と名く。三には増慧學なり。防禁を戒と名け、澄靜を定と曰ふ。定神内に靜なるが故に復意と名け、亦名けて心と爲す。觀達を慧と稱す。此三の中に於て、進習を學と稱し、學進むを増と名く。名義此の如し。問うて曰はく、『是中、何者か學の體なる。』釋して言はく、『能學は心を以て體と爲す。若し所學を論すれば、戒、定、慧の三行を用て體と爲す。』問うて曰はく、『三學は局りて因に在りと爲すや。當に果に通ずべしと爲すや。』釋して言はく、『學は局りて唯因に在り。果徳窮滿して學心停息す。是故に、經の中に説いて無學と爲す。若し所學を論すれば、因及び果に通ず。』問うて曰はく、『果中に名けて無學と爲す。云何が學行、果に通ずることを得る。』釋して言はく、『果中の戒、定、慧等は、學に由りて成するが故に、亦名けて學と爲す。』此一門

次に其相を辨ず。戒學に三有り。一には律儀戒、二には攝善戒、三には攝生戒なり。此義、後の三聚戒の中に、具に廣く分別するが如し。定學も亦三。一に有覺有觀は、謂はく、欲界定乃至初禪なり。問うて曰はく、『欲界に云何が定有る。』釋して言はく、『毘曇には定有りと説かず。大乘、成實には之有りと言説す。』成實に、如電三昧を宣説して欲界定と爲す。龍樹は、欲界の禪定に、佛常に之に住すと宣説す。電光の暫く現するが如きにはあらざるのみ。二に無覺有觀は、謂はく、中間禪なり。初禪の上二禪定の下に於て、覺を除きて觀在るを、名けて中間と爲す。三に無覺無觀は、謂はく、二禪の上乃至非想なり。此

【六】以下、第三に位に就いて三學を明す。

義、後の八禪章の中に、具に廣く分別するが如し。慧學に三有り。謂はく、聞、思、修なり。此義、下の三慧章の中に、具に廣く分別するが如し。此二門

次に位に就いて論ず。三學の行は、遍く始終に通ず。位の眞分に隨つて差異無きに非ず。『異相如何。』『小乘法の中には、義別に二有り。一義の分別は、五停心觀、總別念處は、未

だ定求を得ず、戒品を修習す。燻等の四心は、已に定求を得、定品を修習す。見諦已上は慧品を修習す。第二の義は、始内凡從り漸く戒行を學し、初果に至る時、戒行成就す。

聖戒を得て壞すべからざるを以ての故に。斯陀行の者、漸く定品を學し、那含果に至つて定行成就す。那含金剛は、漸く慧品を學し盡智、無生智を究竟する時、慧行成就す。大

乘法の中に、亦兩義有り。一義の分別は、淨行賢首は戒品を修習し、種性解行は定品を修習し、初地已上は同じく慧品を修す。第二の義は、始世間從り漸く戒行を學し、離垢地

に至つて戒行成就す。故に『地持』の中に、離垢地を説いて増上戒住と爲し、三地の方便もて漸く定品を學し、三地に住する時、定行成就す。故に『地持』の中には、三地を

宣説して増上意住と爲す。『相續解脫』には説いて定淨と爲す。四地已上に漸く慧品を學し、第十地に至りて慧行成就す。故に『彼相續解脫經』の中に、四地上を説いて以て慧淨

と爲す。位分是の如し。此三門

次に攝相を辨ず。中に於て四有り。第一に五分法身に約對して共に相收攝す。二に六波羅蜜に約して共に相收攝す。三に七淨に對して共に相收攝す。四に八正に約して共に相收

【地持】 第七。

【七】以下、第四に攝相を辨ず。中に四、一に五分法身に約對す。

【次に等】二に六
度に約對す。
【地持】第八。

攝す。五分身とは、謂ゆる戒身、定身、慧身、解脫身、解脫知見身、是れ其五なり。此五種の中に、戒身は是れ戒、定身は是れ定、慧及び知見は是れ其慧學なり。解脫の一身は諸論不同なり。若し『成實』に依らば、體は是れ慧學なり。彼宗には、解脫の體は是れ慧なるが故に。若し『毘曇』に依らば、是れ解脫數なり。是れ慧の性に非ず。三學に收めず。相從うて論ずることを爲さば、定、慧に攝入す。多く定、慧と相隨逐するが故に。次に六度に約して共に相收攝す。『地持』の如きに依らば、前の四度は是れ其戒學なり。故に彼論に言はく、「衆具、自性、眷屬、無盡は、是れ其戒學なり。施を戒の因と爲す。故に衆具と名く。戒度は正しく是れ戒學の體なり。故に自性と名く。忍行は戒を助くれば名けて眷屬と爲す。精進に由るが故に。持戒不斷なり。故に無盡と名く。禪は是れ定學、般若は慧學なり」と。問うて曰はく、「精進は通じて諸行を策す。何が故に偏に攝して戒の中に在る。」釋して言はく、「實には通ず。今は三義を以て偏に攝して戒に在り。一には戒學初に在り。故に戒の中に攝す。二には戒學の中に行度を攝すること多し。廣多の行は、精進に由りて成ずるが故に戒の中に入る。」「云何が廣多なる。」「戒の中に、具に三聚の法を有するが故に。又復具に施戒忍を攝するが故に。三には戒學は散心の修行なるを以て、未だ法と合せず。成じ難く、敗し易し。必ず精進を須つて、佐助して方に立す。故に戒中に攝す。若し『相續解脫經』の中に依らば、前の三は戒學、禪は是れ定學、般若は慧學なり。精進の行は通じて三學を策す。問うて曰はく、「何が故に五分身の中には、慧に多身を分ち、六度の中

【次に等】 三に七淨に約す。

【次に等】 四に八正に約す。

【龍樹の等】 大智論第三。

には、戒に多度を分つや。一釋して言はく、「諸行、閉合不同なり。各一義に隨ふ。或時は戒を開す。六度等の如し。或は復定を開す。自ら未だ見ざる所なるも、道理應に有るべし。或は復慧を開す。五分身及び七淨等の如し。或時は俱に開す。八正等の如し。或は復俱に合す。三學等の如し。法門不同なり。寧んぞ一類すべけんや。次に七淨に約して共に相收攝す。何者か七淨なる。」一には戒淨、二には定淨、三には見淨、四には度疑淨、五には道非道淨、六には行淨、七には行斷智淨なり。此義、後の七淨章の中に具に廣く分別するが如し。此七の中に於て、初の一是戒學、第二は定學、後の五は慧學なり。次に八正に約して、共に相收攝す。八正と言ふは、謂ゆる正語、正業、正命、正念、正定、正思惟、正見、正精進なり。此八の中に於て、正語、正業、正命は是れ其戒學、正念、正定は是れ其定學、正思惟、正見は是れ其慧學、精進の一種は通じて三學を策す。問うて曰はく、「戒の中の正語、正業、正命に何の別がある。」釋に三義有り。一に瞋癡を離れて起す所の口業を、名けて正語と爲し、瞋癡を離れて起す所の身業を名けて正業と爲し、貪を離れて起す所の身口の二業を、名けて正命と爲す。第二義は、貪瞋癡を離れて起す所の口業を、名けて正語と爲し、貪瞋癡を離れて起す所の身業を、名けて正業と爲し、四邪命を離るるを、名けて正命と爲す。四邪と言ふは、龍樹の説くが如し。一に下口食は、謂ゆる種殖し、湯藥を和合して、治生販賣して自ら活命す。二に仰口食は、謂ゆる日月星宿變現等の事を占相して、以て活命を求む。三に方口食は、謂ゆる豪勢貴勝に誇ひ

【龍樹の等】 大智論第九。

【八】以下、第五に對治を辨ず。

媚び、使命を通じ致し、巧言もて利を求めて以て自ら活命す。四に維口食は、謂ゆる種種の咒術、卜算、吉凶、諸の妓藝等を習學して、以て自ら養活す。是の如き等を離るるを、名けて正命と爲す。第三の義は、龍樹の説くが如し。無漏の慧を以て口の四過を離るるを、名けて正語と爲し、此聖慧を用て身の三惡を離るるを、名けて正業と爲し、五邪命を離るるを、名けて正命と爲す。五邪と言ふは、一には利養の爲に、詐りて奇特異人の相を現す。二には自ら功德を説く。三には吉凶を占相して、人の爲に宣説す。四には高聲に其威嚴を現じて、人をして畏敬せしめ、以て其利を取る。五には自ら己が所得の利養を説いて、以て人心を動す。五の中の前の一は、是れ其身邪、後の四は口邪、此五邪を離るるを、名けて正命と爲す。問うて曰はく、「定中の正念、正定は、何の差別か有る。」釋して言はく、「此二は始終を異と爲す。定を求むる方便、心を守りて縁に住するを、名けて正念と爲し、終に成じて動かざるを、説いて正定と爲す。」又問はく、「慧の中の正思、正見は、何の差別か有る。」釋して言はく、「此亦始終を異と爲す。始心分別するを正思惟と名け、終成して徹するを、説いて正見と爲す。攝相是の如し。此四門

(八つぎ) 次に對治を辨ず。中に於て三有り。一には業煩惱使性に約して治を辨ず。或は業非を防ぎ、定は起惑を除き、慧は使性を斷ず。二には五蓋に對して治を辨ず。「成實」に説くが如し。「貪瞋の二蓋は能く惡業を發し、戒品を障へ、戒能く之を治す。掉、悔は定を障ふ。定能く之を治す。掉、睡、眠は慧を障へ、慧能く之を治す。疑は通じて三品を障へ、三學通

じて治す。三に六弊に對して、以て對治を辨す。慳貪、破戒、瞋恚、癡意は、能く戒を障へ、戒能く之を治す。亂意は定を障へ、定能く之を治す。愚癡は慧を障へ、慧能く之を治す。三學の義、辨すること略爾り。

三聚戒に七門の分別あり。名を釋す。二。相を辨す。三。制立四。

【九】淨法聚第十
二に三聚戒に七門の分別あり。先づ第一に釋名。

【論】 十地論第四

第一に名を釋す。三聚戒とは、謂はく、律儀戒、攝善法戒、攝衆生戒なり。律儀戒とは、亦一に離戒と名け、亦正受戒と名く。律儀と言ふは、制惡の法を説いて、名けて律と爲す。行は律儀に依る。故に律儀と號す。又復内調するを、亦名けて律と爲し、外眞則に應ずるを、之を口けて儀と爲し、防禁を戒と名く。即ち此律儀、殺等の過を離る。故に離戒と名く。正に是れ所受の離過の行なり。是故に亦正受戒と名く。攝善法とは、顯益を善と名け、要期して善を納るるが故に攝と名け、不攝の過を離るるを攝善法と名く。攝衆生とは、論の中に亦利衆生戒と名く。衆多の生死を名けて衆生と曰ひ、要期して攝化するが故に攝と名け、不攝の過を離るるを攝衆生戒と名く。道を以て物を益す。是故に亦利衆生戒と名く。此三積聚するが故に三聚と云ふ。名義是の如し。

【二】以下、第二に三聚戒の體を辨す。中に五あり。一に受持分別。

第二門の中に、具體を辨す。中に於て五有り。一には受持分別、二には作無作分別、三には止作分別、四には自利利他二行分別、五には色心等三聚分別なり。受持と言ふは、戒行衆しと雖も、要は唯受持なり。始心法を納る、之を名けて受と爲し、法に順じて防護す

【地持】 第四。
【次に等】 二に作
無作に就いて分別
す。中に二、初に
受行に就いての分
別。

るを、説いて以て持と爲す。受は則ち法に對し、要期して成ず。持は則ち縁に對し、防護して成ず。此受と持とは種を以て分別し、之を開して四と爲す。言ふ所の四とは、受の中に二有り。一には他従り正しく受く。二には善淨心に受く。持の中に亦二有り。一には専ら精護して持つ。二には犯じ已りて能く悔ゆ。故に「地持」の中に、此四徳を説いて自性戒と爲す。此一門。次に有作無作に就いて分別す。先に受行に就いて作無作を明し、後に持行に就いて作無作を明す。受行は云何。」「受の中の作は、況く二種有り。一には因中の作、求戒の方便、師を禮し戒を乞ふ。是の如き等なり。二には果中の作、謂ゆる最後の利那頃と法と相應する身等の止業なり。因中の作は、是れ作戒の因にして、作戒の體に非ず。果中の作は、是れ作戒の體なり。作戒是の如し。次に無作を辨ず。毘曇に准依すれば、受中の無作に略して三分有り。一に因時無作は、謂はく、前因中の有作の善邊に無作隨つて生ず。二に果中の無作は、謂はく、彼最後一刹那頃の有作の善邊に無作隨つて生ず。中に即ち二種の無作有り。同時に俱起す。一には作俱の無作。二には要期の無作なり。彼作戒に隨つて無作の善生するを、名けて作俱と爲し、前の要期に由つて無作の法生するを、名けて要期と爲す。問うて曰はく、「此二同じく一時に在り。何が故に、偏に名けて一を作俱と爲す。」釋して言はく、「作俱は親しく作従り生ず。故に作俱と名く。要期無作は、前の方便要期の力に由りて起る。是義の爲の故に、作俱と名けず。此は是れ第二果の時の無作なり。三に果後の無作は、作戒の後に於て無作續生するを、名けて果後と爲す。此三時

【彼論】 成實論第七。

【次に等】 次に持戒に就いて作無作の義を明す。

の中、因時の無作は一向に是れ無作戒の體に非ず。果時、果後は是有り、非有り。作俱は則ち非なり。要期は則ち是なり。成實に准依するに、亦三分有り。一には因時、二には果時、三には果後なり。因時、果後は前と相似す。果時の無作は、大況前に同じ。言ふ所の異とは、毘曇法の中には、作俱、要期の二種竝生す。此宗には、果時には唯作俱のみ有り。要期は未だ有らず。未だ有らざるが故に、唯作俱と名く。此れ云何が知る。『成實』に説くが如し。彼論に問うて曰はく、何んが齎して當に無作と名くべきと。論に自釋して言はく、第二念の頃を名けて無作と爲すと。彼は作戒を名けて以て初念と爲す。故に無作を名けて第二念と爲す。此三時の中、因及び果時は、一向に是れ無作戒の體に非ず。果後所發の要期無作は、是れ無作の戒なり。大乘戒の中に、亦三分有り。一には因時、二には果時、三には果後なり。因及び果後は小乘と同じ。果時の無作は、文に定判無し。或は毘曇に同じく、或は成實に同じ。此三時の中、因時の無作は無作戒に非ず。果時は不定なり。若し果時に單に作俱有りと言はば、無作戒に非ず。若し果時に二種竝生すと説かば、是れ則ち要期の無作を分取して無作戒と爲すなり。作俱は則ち非なり。果後も亦爾り。作俱は則ち非なり。要期は則ち是なり。受戒是の如し。次に持戒に就いて作無作の義を明す。釋に四有り。一には行業に就いて作無作を明す。緣に對して防護するを名けて作持と爲し、作に依つて則ち無作の善生すること有るを、無作持と名く。二には行修の始終に據つて分別す。學戒の始は、作意防護するを名けて作持と爲し、修心純熟して任運に過を離れ、作

【涅槃】第三十六
迦葉菩薩品。

【次に等】三に止
作に就いて分別す

【次に等】四に自
利利他に就いて分
別す。

意を假らざるを無作持と名く。杖の輪を轉するが如し。杖と相應するを名けて作轉と爲し、杖を去りて自動するを無作轉と名く。此も亦是の如し。三には行位に就いて作無作を明す。一切の凡夫、習戒未だ成ぜざるを通じて作持と名け、一切の賢聖、戒行成就するを無作持と名く。故に『涅槃』に云はく、「戒不具の者、是人は但作戒有つて無作戒無し。謂はく、凡夫の人は但方便始作の戒のみ有りて、其終成無作の戒無し」と。四には境界に約して作無作を明す。凡從り佛に至りて、事に隨つて過を離るるを作持と名け、實を證して過を捨つるを無作持と名く。作無作の義、之を辨ずること難爾り。此二門つて。次に止作の一門に就いて三聚を分別す。別して論ずれば、律儀は是れ止なり。諸惡を止むるが故に。餘の二は是れ作なり。諸善を作すが故に。通じて論ずれば、一の中に皆止作有り。律儀戒の中に殺等を防禁するを、之を名けて止と爲し、慈心、安穩心等を修習して殺果を對治し、施を修して盜を治し、不淨觀を修して邪行を對治す。是の如き一切、之を名けて作と爲す。攝善戒の中、其懈怠を離れ善の過を攝せざる、之を名けて止と爲し、六度を修行する、之を説いて作と爲す。攝生戒の中、其獨善を離れ生過を化せざる、之を名けて止と爲し、四攝を修行して衆生を饒益する、之を説いて作と爲す。良に三聚皆惡を止むるを以ての故に、經に三聚を説いて、通じて律儀と爲す。皆善を作すが故に、經の中に説いて、善く諸善を集むと爲す。此三門つて。次に自利利他に就いて分別す。行門に二有り。一には分相門、三聚戒の中、前の二は自利、後の一は利他、二には助成門、三俱に自利、三俱に利他なり。自ら三

【次に等】五に色心非色心等の三聚に就いて分別す。

聚を修して涅槃の因と爲る。故に通じて自利なり。此三聚を修して菩提を得んが爲に衆生を利益す。故に皆利他なり。此四門つぎ次に色心非色心等の三聚に就いて分別す。薩婆多に依らば、作無作戒は一切是れ色なり。是身口は色業の性なるを以ての故に。『相狀如何。』謂はく、『受戒の時、最後の一念の身口の調善は、是れ其作色なり。此作色は、眼の所行と爲す。眼見の身口に悪を作さざるが故に、口の止業は耳聞すべからず。聲無きを以ての故に。此作の邊に於て、無作の善生ずるを無作色と名く。此無作は是れ其色業なるを以て、色法従り生じて色過を防禁す。故に説いて色と爲す。故に『雜心』に云はく、『作色を以ての故に、無作も亦色なり。其樹動けば、影亦隨つて動くが如し』と。此無作色を意の所行と爲す。故に論に説いて言はく、『不可見無對色と爲す』と。曇無德に依らば、作戒は唯色なり。亦身口は色業の性なるを以ての故に。然れども此宗の中には、是は假名の色。意の所行爲り、眼識の見に非ず。正義の如し。『有人説いて言はく、『曇無德に依らば、作戒は是れ其色心の自性なり』と。若し作戒は是れ色心の性なりと言はば、何の依據する所ぞ。又若し作戒は是れ色心の性ならば、聲聞應に十善道戒を受くべし。何の故に唯七律儀戒を受くる。』

『聲聞、唯七律儀を受く。故に心性に非ざる事を明す。又若し作戒は是れ色心の性ならば、比丘の二百五十戒の中に、應に一戒の獨り心過を防ぐ有りて、一戒の獨り心を防ぐ有ると無かるべし。故に明けし、心性に非ざることを。』問うて曰はく、『若し聲聞の戒法は心過を防がずと言はば、何が故に、律に汝何の心をか以てすと云ふ。』釋して言はく、『彼は

【涅槃】 第三十一

身口を成ずるの心を遮す。制戒獨り心過を防ぐと謂ふには非ず。是の如きの義を以て、當に知るべし、作戒は一向に心に非ず、無作戒は彼宗に於ては非色非心なり。形礙に非ざるを以ての所以に非色なり。又慮知に非ず、所以に非心なり。大乘法の中には、作戒は是れ其色心の自性なり。大乘の中には、作戒は是れ其色心の性なりと言はば、人有りて、彼受戒の時に、『若し大乘法の中には、作戒は是れ其色心の性なりと言はば、人有りて、彼受戒の時に於て、最後の一念心惣異縁せば、是人云何が作戒を具することを得ん。』釋して言はく、『是人心に異縁すと雖も、前の方便要期の力に由るが故に、身口意の上に離惡の義成ずるを、説いて作戒と爲す。故に具足することを得。無作戒は大乘の中に於て、是れ色心の法にして色心の事に非ず。無作戒は三業の自性なるを以て、三業従り生じて三業を防ぐ。故に説いて色心と爲す。是心、色心なるが故に曇無德に異なる。故に『涅槃』に云はく、『我諸の弟子我意を解せず、唱へて言はく、『如來、無作戒は定んで色心に非ずと説く』と。彼無作戒は復是れ其色心の法を防ぐと雖も、是れ其色心の事にあらず。是故に説いて非色非心と爲す。非色心の故に薩婆多に異なる。故に『涅槃』に云はく、『我諸の弟子、我意を解せず。唱へて言はく、如來、無作戒は一向に是れ色と説く』と。』是義云何。』薩婆多の中に説かく、無作戒性は四大造なり。體は是れ障礙なるが故に欲色界には有り、無色には則ち無し。大乘法の中に説かく、無作戒は眞に是れ制法なり。結界處の所有の界法の如し。是れ制法なるが故に大造と爲さず。大造に非ざるが故に、定んで障礙するに非ず。定んで礙せざるが故

【涅槃】 第三十一

に、身四空に生ずるも亦常に成就す。是を以て不同なり。小乗の中には情見未だ融せず。或は是色心の法を説くを聞くこと有らば、便即ち之を取りて以て色の事と爲す。或は色心の事に非ずと説くを聞くこと有らば、便即ち取りて非色心の法と爲す。故に諍論を成す。大乘は通じて取る。所以に諍に非ず。體性はの如し。

【二】以下、第三に閉合して三聚戒の相を辨ずるに、先づ初に律儀戒に就いて。

【地持】第四。

第三に閉合以て其相を辨ず。先に律儀に就いて閉合して相を辨ず。律儀戒の中に、閉合不定なり。之を總ずれば唯一なり。謂はく、三聚の中の一の律儀戒なり。或は分つて二と爲す。『地持』に説くが如し。一には在家戒、二には出家戒なり、或は分つて三と爲す。一には別解脱戒、二には禪戒、三には無漏戒なり。別解脱戒とは、戒は是れ正しく解脱に順ずるの木なり。故に解脱と名く。又業鞫を免るるを、亦解脱と名く。此解脱は、定道の二種の心と俱ならず。故に稱して別と爲す。禪戒と言ふは、經論に、亦定共戒と名く。人有り、意に謂へらく、「定心過無きを名けて定戒と爲す」と。此事然らず。蓋し乃ち世俗禪定の心邊に戒法隨つて生ずるを、名けて禪戒と爲す。『阿毘曇』に依らば、四根本禪、未來、中間、六地禪の邊に戒法隨つて生ずるを、以て禪戒と爲す。『成實論』に依らば、八禪心邊及び彼欲界の電光定邊に、戒と法と隨つて生ずるを、以て禪戒と爲す。無漏戒とは、經論に亦道共戒と名く。人有り、意に謂へらく、「道心過無きを即ち道戒と名く」と。此亦然らず。蓋し乃ち出世無漏の道邊に戒法隨つて生ずるを、無漏戒と名く。毘曇法の中に、色界禪に依つて起す所の道邊に、戒法隨つて生ずるを説いて道戒と爲す。成實、大乘には、

【阿毘曇】第六業品。

【成實】 同第九善律義品。

【成實】 同第七無作品。

三界の道邊に戒法隨つて生ずるを、悉く道戒と名く。又『成實』の中に、更に三種を説く。前と少しく異なる。何等をか三と爲す。一には別解脱戒、二には禪戒、三には定戒なり。別解脱戒は前と相似せり。欲界の電光、及び色界定、此等の心邊に生ずる所の有漏、及び無漏戒を、通じて禪戒と名け、無色定邊に生ずる所の有漏、及び無漏戒を、通じて定戒と名く。毘曇の如きに依らば、戒は是れ色の故に、四空に之無し。『成實』には、無作は色心に非ざるが故に、四空定邊に亦戒有ることを得。或は分つて四と爲す。一には別解脱戒、二には禪戒、三には道戒、四には斷律儀戒なり。別解脱戒の義は上に釋するが如し。『餘の三は云何。』一四根本禪及び中間禪所生の禪戒は、一切皆是れ禪戒の所收なり。未來禪に依りて生ずる所の禪戒には是有り、非有り。二是非如何。』未來淨禪は唯欲界を治す。彼治に二有り。一には無礙道、二には解脱道なり。解脱道邊所生の禪戒は、是れ四種の中の禪戒の所收なり。無礙道邊所生の禪戒は是れ斷律儀にして、禪戒の攝に非ざるなり。此れ親しく欲界の不善を斷ずるを以ての故に、斷の名を與ふ。又四禪及び中間禪に依りて生ずる所の聖戒は、一切皆是れ道戒の所收なり。未來禪に依りて生ずる所の聖戒は、是有り、非有り。『是非如何。』未來禪に依りて生ずる所の聖道は、能く三界九地の中の諸業煩惱を治す。其地別に隨つて、各無礙解脱の道有り。此九地の解脱道邊に於て生ずる所の聖戒は、一切皆是れ道戒の所收なり。無礙道邊所生の聖戒の義は、則ち不定なり。初禪乃至非想を治する無礙道邊所生の聖戒に依らば、是れ道戒の收なり。欲界を對治する無礙道邊に

【式又摩那】シク
 シヤマーナー(Sin
 gamin)學法女と
 譯す、沙彌尼より
 比丘尼に至る二年
 間持戒し、四根本
 六法、行法を修學
 するものをいふ。
 【優婆塞】ウパー
 サカ(Uparika)清
 信士と譯す。佛道
 子。に入れる在家の男

生ずる所の聖戒は、是れ斷律儀にして、道戒の攝に非ず。此れ觀く欲惡不善を斷ずるを以ての故に、斷の名を與ふ。』問うて曰はく、『欲界に其不善有り。能治の道邊に戒の生ずること有るべし。上二界の中には、其不善無し。能治の道邊に、云何が戒有らん。』釋して言はく、『上界には不善無しと雖も、而も彼對治は、欲界の惡に於て對治を持つ有り。遠く對治を分つが故に、戒有ることを得。或は分ちて五と爲す。謂はく、五支戒なり。』『涅槃』に説くが如し。一には是れ根本業清淨戒、謂はく、根本不善の業體を離る。二には前後眷屬餘清淨戒、謂はく、業道の前後の方便を離る。三には、離諸惡覺清淨戒、謂はく、八種の惡覺煩惱を離る。八覺は、前の煩惱聚の中に、具に廣く分別するが如し。四には護持正念念清淨戒、謂はく、六念を修して戒行を助成す。六念と言ふは、佛、法、僧、戒、施、及び天を念す。五には廻向阿耨多羅三藐三菩提戒、謂はく、戒行を以て正しく佛道に向ふ。或は分つて六と爲す。謂ゆる五戒、八戒、十戒、式又摩那、比丘、及び尼、合して六と爲す。或は分つて七と爲す。謂はく、七衆戒。七衆と言ふは、在家に二有り。謂はく、優婆塞、優婆夷なり。出家に五有り。比丘、比丘尼、式又摩那、沙彌、沙彌尼、合して七と爲す。或は分つて十と爲す。謂はく、十善戒。或は復宣説す。二百五十戒等と。廣すれば無量なり。律儀是の如し。次に攝善に就いて開合して相を辨ず。此亦不定なり。總ずれば唯一善なり。或は分つて二と爲す。唯福と智となり。或は分つて三と爲す。謂はく、聞、思、修なり。或は分つて四と爲す。聞、思、修、證なり。或は分つて五と爲す。『地經』に

【優婆夷】 ウパーシカー (Upāsikā) 清信女と譯す、佛道に入りし女子。
 【沙彌】 シユラマネーラ (Sāmanera) 勤策男と譯す、惡を止めて慈悲の行を修する出家の男子にして、修行未熟にして十戒を持つ。
 【沙彌尼】 シユラナーリーカ (Sāmaṇerikā) 女性の沙彌。
 【次に就いて】 二に攝善戒に就いて。
 【地經】 第四十二雜阿含經。
 【地持】 第四。衆生戒に就いて。
 【次に等】 次に攝衆生戒に就いて。
 【地持】 第四戒品。

と説くが如し。「凡夫、二乘、菩薩、及び佛の五品の善法を即ち五と爲す」と。或は分つて六と爲す。謂はく、六波羅蜜なり、又『地持』の中に、身口意の善に思聞修を加へて、亦六と爲すなり。或は分つて十と爲す。謂はく、十善道なり。廣すれば則ち無量なり。攝善はの如し。次に攝生に就いて開合して相を辨ず。之を總すれば唯一なり。或は分つて二と爲す。一には離惡攝、二には修善攝。或は分つて三と爲す。謂はく、身口意に衆生を攝取す。或は分つて四と爲す。謂はく、四攝法もて衆生を攝化す。或は分つて五と爲す。五品の善法もて衆生を饒益す。或は分つて六と爲す。『勝鬘』に説くが如し。六波羅蜜もて衆生を攝取す」と。或は分つて十と爲す。謂はく、十善法もて衆生を饒益す。或は十一を分つ。『地持』に説くが如し。彼四攝を分つて十一と爲す。『何者か是なる。』『布施に四有り。一には財施、二には法施、三には無畏施、四には報恩施なり。愛語に一有り。前に通じて五と爲す。利行に四有り。一に無徳の善人は、方便もて隨順せしむ。二に有徳の善人は、稱揚讚悦す。三に易調の惡人は、過に隨つて治罰す。四に難調の惡人は、神力もて降伏す。此を以て前に通じて、合して九と爲す。同時に二有り。一には苦事の中に同ず。二には樂事の中に同ず。此を以て前に通じ、合して十一と爲す。廣すれば則ち無量なり。辨相是の如し。

(二) 三 以下、第四に三聚戒を制立す。中に於て、略して五義を以て之を制す。一には起因不同なるが故に三聚を立つ。起因と言ふは、一には有爲の心を厭うて律儀戒を起し、二には善提心を求めて攝善戒を起し、三には衆生心を念じて攝生戒を起す。二には依法不同なるが故。

依法不同の故。

【三には等】次に離過不同の故。

【四には等】次に功能不同の故。

【五には等】次に品分不同の故。

【地持論】第四。

【三】以下、第五に其大小不同を明す。中に五、一に起因不同。

に三聚を立つ。言ふ所の法とは、一には離惡の法、依つて律儀を成ず。二には集善の法、依つて攝善を成ず。三には化生の法、依つて攝生を成ず。三には離過不同なるが故に三聚を立つ。離過と言ふは、初の律儀戒は殺等の過を離る。二に攝善戒は不攝善の過を離る。三に攝衆生戒は衆生を成就す」と。此不同を以ての故に三聚を分つ。五には品分不同なるが故に三聚を分つ。律儀は最下なり。能く惡を離るれども、未だ善を修せざるを以ての故に。攝善を次と爲す。前の惡を離るるに依つて能く善を修するが故に。故に『地持論』に言はく、「攝善法戒は律儀に於て上と爲す」と。攝生を勝と爲す。前の自善に依りて能く他を利するが故に。故に地論に言はく、「利衆生成は、攝善に於て上と爲す」と。此五義を以ての故に三聚を立つ。

第五に其大小不同を明す。中に於て五有り。一には起因不同、二には有無不同、三には寬狹不同、四には長短不同、五には受捨不同なり。起因と言ふは、菩薩の戒法は三種の心より起る。一には有爲心を厭ふ。二には佛智心を求む。三には衆生心を念ふ。中に於て別して分たば、有爲を厭ふが爲の故に律儀を受く。佛智を求むる爲の故に攝善を受く。衆生を念するが爲の故に攝生を受く。通じては則ち、三聚一一に皆三種の心従り起る。有爲を厭ふが爲に、必ず須く惡を離るべし。故に律儀を受く。佛智を求むるが爲には、惡を離

【次に等】二に有無不同の義を辨ず

【三學俱に等】以下「三學俱に修す息滅を存すと雖も」の十四字衍文か

れて方に成ず。故に律儀を受く。衆生を化せんと欲せば、惡を離れて方に能くす。故に律儀を受く。又有爲を厭ふには、善に非ざれば治せず。故に攝善を須ふ。佛智を求むる爲には、善に非ざれば成ぜず。故に攝善を須ふ。衆生を念ずる爲には、善に非ずんば救はれず。故に攝善を須ふ。又有爲を厭ふには、獨善去らず。故に攝生を須ふ。佛智を求むる爲には、獨善到らず。故に攝善を須ふ。衆生を念ぜんが爲には、必ず要期を須ふ。法を以て攝取す。故に攝生を受く。菩薩是の如し。聲聞は唯有爲心を厭ふ従りして律儀を起す。是故に同じからず。此一門。次に有無不同の義を辨ず。大乘法の中には、猶三聚を具す。小乘法の中に、單に律儀を受けて餘の二聚無し。何の義を以ての故に、攝善戒無き。『有人釋して言はく、「小乗の人は意に息滅を存す。故に律儀を受く。心に起作すること無し。故に攝善無し」と。若し爾らば、小乗三學の中には、但應に戒を修して定慧を習はざるべし。彼は息滅を存し、三學俱に修す。息滅を存すと雖も、三學俱に修す。息滅を存すと雖も、何ぞ攝善を妨げん。斯妨げ有るを以て、更に異釋を爲す。夫れ制戒たる、流類均齊なり。故に律儀を制す。』云何が均齊なる。』利鈍を問ふこと莫く、同じく皆五篇の諸過を遠離す。聖果を得るが故に、攝善等しからず。是故に攝善法戒を制せず。』云何が等しからざる。』彼小乗の中には、作善無量なり。一人具に諸善を修して、方に聖果を得るもの有ること無し。故に等しからずと曰ふ。八禪等の如き、一二を修するに隨つて亦聖果を得、亦修するを要せず。』問はく、『何が故に離惡は均齊にして、集善は等しからざる。』惡は離れ易く、善

【次に等】三に寛
狭を辨ず。

は成じ難きを以ての故に。』問はく、『縱使ひ攝善をして等しからざらしめ、攝善戒を制せしむるも、竟に何の過有らん。』釋して言はく、『得ず。若し小乗の中には、攝善戒を制するも、人有りて具に善法を修すること能はずんば、便ち是れ犯戒なり。云何が聖を得ん。又齊等からずんば、云何が制と名けん。是義の爲の故に攝善戒無し。』問うて曰はく、『若し小乘法の中に攝善戒無しと言はば、亦應に小乘に止犯作持の義有ること無かるべし。』釋して言はく、『小乘に攝善戒を制せずと雖も、全く修せざるに非ず。故に止犯作持の義有り。作持有りと雖も量分して爲す、齊く修することを制するに非ず。是故に攝善戒を制すと名けず。又小乗の中に設ひ作持有れども、之を助くる作にして攝善戒に非ず。』問うて曰はく、『若し小乗の作善は是れ止を助くるの法にして、三聚戒の中に攝善無しと言はば、三學の中、亦應に定慧の兩學を立てざるべし。』釋して言はく、『三學は義に隨つて分別す。制法に非ず。故に齊等うすることを得ず。是義の爲の故に、有と説くに過無し。』何の義を以ての故に、攝善戒無き。』彼は獨り度するに在り。他を兼ねざるが故に。』有無是の如し。此二門次に寛狭を辨ず。小乗の律儀は但身口を防ぎ、心過を遮せず。之を名けて狭と爲す。大乘の律儀は通じて三業を防ぐ。之を日けて寛と爲す。云何が知るを得る。』小乗の律儀は、但身口を防ぎ心過を遮せず。彼小乗の中には、但身口の七善律儀を説いて、之を以て戒と爲す。十善を説いて以て戒と爲さざるが故に。故に『成實』に言はく、『戒は身口を防ぎ、定慧は心を防ぐ』と。』云何が知ることを得る。大乘の戒は通じて三業を防ぐこ

【地經】 第四。

【次に等】 四に長短不同の義を辨ず

【地持】 第四。

【次に等】 五に受捨不同の義を辨ず先づ受戒に就いて中に二、一には初受に就いて

とを。』『地經』の中に、十善道を説いて律儀と爲すが如きの故に。』問うて曰はく、『何が故に小乘法の中には單に身口を防ぎ、大乘法の中には通じて三業を防ぐや。』釋して言はく、『小乗は一身に果を求め道を習ふこと久しからざれば、心過裁し難し、戒の能く制するには非ず。要す定慧を修めて、方に心過を除く。故に戒は心を防がず。大乘法の中には、多身に果を求め、道を習ふこと長久なれば、意の非を裁するに堪ふ。故に戒は心を防ぐ。』此三門。次に長短不同の義を辨ず。小乗の戒は止一形に在り。異世に通ぜず。之を名けて短と爲す。菩薩の戒法は、一び受得し已りて、若し菩提の心を退失せず及び増上して煩惱を起して犯するにあらざれば、盡未來際畢竟して失せず。之を名けて長と爲す。故に『地持』に云はく、『菩薩、身を捨して律儀戒を失すること有ること無し』と。『何が故に是の如くなる。』『聲聞は一形に果を期せんと欲するが爲に、受戒の時自誓要期して盡形壽と言ふ。一形已來は、是れ彼要期分齊の限なり。故に戒を失せず。一形已後は、復是れ彼要期の限にあらす。所以に戒を失す。菩薩、多身に果を求めんと欲するが爲に、受戒の時、自ら誓うて盡未來際を要期す。盡未來際は是れ彼要期分齊の限なり。故に戒を失せず。此四門。次に受捨不同の義を辨ず。先に受戒に就いて、以て不同を明す。受の中に二有り。一には初受に就いて以て不同を明し、二には重受に就いて以て不同を明す。初受云何。』『小乘法の中には、得戒に二有り。一には自得、二には從他得なり。自得に三有り。一には自然得、二には上法得、三には自誓得なり。自然と言ふは、謂はく、佛一人、最後身に於て初て出家

する時、自然に別解脱戒を得得す。師に従はずして受くるが故に自然と曰ふ。上法と言ふは、或は沙彌及與び俗人有りて、道を修して無學の聖果を證得す。是の如き増上法を證得する時、出家の具足禁戒を發得す。其所依に從つて上法得と名く。自誓と言ふは、大迦葉の如きは、佛の出世を聞いて自誓要期す。佛は我師爲り、我は弟子爲り」と。此言下に於て具足を發すことを得るを、名けて自誓と爲す。從地得の中、差別に四有り。一に善來は、諸の衆生の上品利根なる有りて、佛に善來、我法の中に於て快く梵行を修め、苦の源を盡すを得ん」と命ずるに、即ち具戒を發す。二に三語は、謂ゆる一切の沙彌、俗人、佛初出の諸の比丘等、師教へて三遍して三寶に歸依せしむるに及びて、即便ち戒を得。三に八敬は、大愛道比丘尼等、諸の比丘僧遙に敬儀を宣べ、其をして奉行せしむるに、彼聞いて頂受し、即ち具足を發すが如し。四に羯磨得、僧數具足し和作法して、與へて具戒を受けしむるに、五人十人二十人等有り。大乘法の中に、亦二種有り。一に從他受は、唯一師に對し、多人を藉らす。力強きに因るが故に。二に善淨心受は、如法人の從うて受くべき時無くんば、佛像の前に於て、自受して得す。此は即ち是れ其自誓得なり。問うて曰はく、「大乘に、何が故に自然得戒を説かざる。」釋して言はく、「大乘には佛、過を去りて菩薩爲りし時、先に已に別解脱戒を成就すと説き、最後身に非ずして、初出家の時、方に始めて得するが故に。」「何が故に上法得戒を説かざる。」「義自然に同じ。佛先に成就して、最後身に上法を證する時、方に戒を得するに非ざるが故に。」「何が故に善來得戒を説

【次に等】二には重受に就いて。

【地持】第四。

【地持】第四。

【次に等】次に捨戒に就いて不同を明す。

かざる。』大乘の戒は廣し。具に三聚無盡の法を緣じ、要期領納して、方に始めて得戒す。直に善來と稱するに、攝戒具せざるが故に、鬪いて論ぜず。』何が故に三語得戒を説かざる。』『義善來に同じ。』何が故に八敬得戒を説かざる。』『菩薩は尊勝にして、尼衆の常に他を敬するが如きにあらざるが故に。』何が故に羯磨得戒を説かざる。』『菩薩は受戒に、唯一師に従つて多人を藉らず、和合作法の與ふることを假らず。故に亦菩薩他に從つて受くべき者は、即ち是れ菩薩の羯磨もて受く。初受是の如し。次に重受に就いて、以て不同を明す。』地持に説くが如し。小乘法の中には、重禁を犯じ已り、緣に遇うて戒を捨てて、後若し重ねて受するも戒を得せず。邊罪難の故に。菩薩は闍らず。重禁を犯じ已りて菩薩戒を捨し、後若し重受すれば、還復戒を得。』何が故に是の如くなる。』『菩薩法の中に二緣有り。故に重受得戒す。一に多身に果を求むれば、微善も亦去る。所以に得戒す。故に地持の中に、若し善心有らば、牛乳を搗る頃も亦戒を受くることを得』と。二に菩提心は是れ廣大の意にして、能く重罪を滅す。是を以て戒を得。小乘法の中に二種の義有り。重受することを得ず。一に現世に果を求むれば、純善方に得ず。若し曾て重を犯すれば、障難深く極まる。是が爲に得せず。二に小乗の心は劣にして重罪を滅せず。故に戒を得ず。次に捨戒に就いて以て不同を明す。聲聞法の中の別解脱戒に四種の捨有り。一には不用道捨、二には命終捨、三には斷善根捨、謂はく、邪見の人、大邪見を起して善根を斷する時、律儀戒を失す。四には二形生捨、謂ゆる、男女の二形生する時律儀戒を失す。菩薩法の中

【地持】 第四戒品

の別解脱戒に二種の捨有り。『地持』に説くが如し。一には菩提心を退すれば、本を壞するが故に捨す。二には増上の煩惱、波羅夷を犯すれば、過重きが故に捨す。此は聲聞の斷善根捨に同じ。何が故に、菩薩に不用道捨無き。釋して言はく、『聲聞は形俱の法を受く。是故に不用道は、出家の戒を失す。菩薩は通じて七衆の法を受く。故に不用道を捨せず。』何が故に、菩薩に命終捨無き。『此は前に釋するが如し。聲聞の受戒は一形を要期す。故に命終して捨す。菩薩は盡未來際を要期す。故に戒を失せず。』何が故に菩薩は、二形生ずる時禁戒を失せざる。』釋して言はく、『聲聞は別して七衆隨形の法を受く。故に二形生ずる時、七衆分たず。是を以て戒を失す。菩薩は通じて一切の戒法を受け、形別に隨はず。故に戒を失せず。』何が故に、菩薩、心を退すれば戒を失し、聲聞は爾らざる。』釋して言はく、『菩薩は行業細微にして、受捨持犯、多く心本に隨ふ。是故に菩提心を退失する時、菩薩戒を失す。小乘法の中には、行業浮麤にして、受捨持犯、多く皆相に約して心本に隨はず。是故に心を退するも、禁戒を失せず。』問うて曰はく、『若し小乘法の中の受者は相に約すれば、眞爾に心を退すれども戒を失せずと言はば、善根を斷する時、内心の邪見、何が故に戒を失す。』釋して言はく、『邪見は極めて正法に違し、能く善根を滅す。是故に戒を失す。出世の心を退すれども、世の善を壞せず。是故に類せず。』何が故に菩薩は、増上煩惱、波羅夷を犯すれば菩薩戒を失し、聲聞は爾らざる。』釋して言はく、『大乘は多く心に隨つて制す。故に上煩惱、波羅夷を犯すれば菩薩戒を失す。小乘法の中には、相に

【四】以下、第六に大小一異を辨ず

【地持】 第四。

【五】以下、第七に三聚の總別を明す。

約して制して、心に隨はず。故に輕重の煩惱、波羅夷を犯するに、齊く戒を失せず。一不同是の如し。

第六に大小一異を明す。大乘の律儀と小乗の戒とは、一と爲さんや、異と爲さんや。是義不定なり。大に據りて小を攝すれば、是れ一と爲ふことを得。是れ一なるを以ての故に、小乗の所受、即ち大乘の戒なり。故に『勝鬘』に大乘の威儀を説いて、毘尼と出家の受具と爲す。『地持』にも亦云はく、『菩薩の律儀は即ち七衆の戒なり』と。小に據りて大に望むれば、小の外に大有り。是れ異と言ふことを得。是れ異なるを以ての故に、『地持』に説いて言はく、『聲聞の波羅提木叉戒を菩薩戒に比すれば、百千萬分も其一に及ばず』と。『問うて曰はく、『若し菩薩の律儀は、即ち是れ小乗の戒なり』と言はば、人有つて、俗に在りて菩薩の三聚戒を受得し竟り、然る後出家して、更に須く別に出家の戒を受くべきや不や。』有人釋して言はく、『更に受くるを須ひず。菩薩戒の中に、已に通じて得るが故に』と。此義然らず。菩薩戒の中に、復通じて七衆の法を攝すと雖も、一形の中に、並に七衆の戒を持すべからず。形の所在に隨つて、要す。須く別に受くべし。人の復總じて出道を求むと雖も、何の地に入りて、別に須く心を起すべきやに隨つて、方便して趣求するが如し。此も亦是の如し。

第七に三聚の總別を明す。總別不定なり。離惡を宗と爲さば、律儀の一戒は、亦是總亦是別、餘は唯別なり。三聚を統收して一の律儀と爲す。之を名けて總と爲す。故に『地

持』に云はく、「一切の三聚は皆律儀の攝なり。同く惡を離るるが故に」と。中に於て、攝善、攝生を分出して、餘の二收めざるは、還復律儀戒の中に攝在す。之を名けて別と爲す。若し攝善に就いて、之を以て宗と爲さば、則ち攝善戒は、亦是總亦是別なり。餘の二は別して三聚を統收して、皆善ならざること莫し。故に名けて總と爲す。中に於て別分して、餘の二の外は還つて復攝善戒の中に攝在す。之を名けて別と爲す。若し化生に就いて、行を以て宗と爲さば、是れ則ち攝生は、亦是總亦是別、餘の二は唯別なり。菩薩の三聚を修習する行徳は皆利物の爲なり。故に攝生と名く。之を以て總と爲す。中に於て別分して、餘の二の外は、還つて復攝生戒の中に攝在す。之を名けて別と爲す。當に知るべし。大乘は一切の行徳、總別相望類して皆同じ。三聚戒の義、厥趣略すること爾り。

三種律儀の義に八門の分別あり。名を釋す一。相を辨す二。所防の同異三。界に就いて分別す分別す七。得捨四。趣に就いて分別す五。形に就いて分別す六。人に就いて分別す八。

第一に名を釋す。無作の善を説いて律儀と爲す。言ふ所の律とは、法の別稱なり。惡を調ふるの法、之を名けて律と爲す。行は律戒に依る。故に律儀と號す。又復内を調ふるを亦名けて律と爲し、外に眞則に應ず。故に律儀と曰ふ。律儀不同なり。一門に三を説く。『三の名是れ何ん。』一には別解脱律儀、二には禪律儀、三には無漏律儀なり。別解脱とは、戒は是れ正しく解脱に順ふの本なり。故に解脱と名く。又復戒體、業羈を免絶すれば、

〔六〕淨法衆第十
三段に三種律儀を
明すに八門の分別
あり。第一に釋名

【二七】以下、第二に辨相、初に別解脫律儀に就いて。

【禪戒の等】次に禪律儀に就いて。

亦解脫と名く。定道二種の心と俱ならず。故に稱して別と爲す。禪律儀とは、經の中に亦定共戒と名く。上界の靜心、思惟修起する、之を名けて禪と爲す。禪に依りて防惡の法を發得するを禪律儀と名く。禪心亂れず、之を口けて定と爲す。戒と定と合するを定共戒と名く。無漏律儀は、經の中に亦道共戒と名く。聖慧、垢を離るるを、名けて無漏と爲す。此に依りて防惡の法を發得するを、無漏律儀と名く。亦戒體離垢清淨なるべきを名けて無漏と爲す。此は道と合す。故に復經の中に道共戒と名く。名義是の如し。此一門。

次に其相を辨す。別解脫の中、開合不定なり。之を總すれば、唯一なり。或は分つて二と爲す。一には在家戒、二には出家戒なり。或は分つて三と爲す。一には五戒、二には八戒、三には出家戒なり。或は分つて四と爲す。前の三の上に於て、菩薩戒を加ふ。或は分つて五と爲す。謂ゆる五戒、八戒、十戒、具戒、及び菩薩戒なり。或は分つて六と爲す。謂はく、五戒、八戒、十戒、比丘戒、尼戒、及び菩薩戒なり。或は分つて七と爲す。謂はく、七支戒なり。又七衆の所受も、亦七に分つことを得。七衆と言ふは、在家に二有り。謂はく、優婆塞、及び優婆夷なり。出家に五有り。比丘及び尼、式父摩那、沙彌、及び沙彌尼なり、或は分つて八と爲す。前の七の上に於て、菩薩戒を加ふ。或は分つて十と爲す。謂はく、十善戒なり。廣すれば則ち無量なり。禪戒の中に、亦開合不定なり。之を總すれば一と爲り、或は分つて二と爲る。一には禪律儀、二には斷律儀なり。未來禪に依り、世俗の道を以て欲界の結を斷する、九無礙の邊に生ずる所の戒を斷律儀と名け、餘の禪定邊

【成實】 第九。

【無漏戒の等】 次に無漏律儀に就いて。

に生ずる所の戒を禪律儀と名く。或は分つて三と爲す。一には覺觀俱、謂はく、未來禪及び初禪地所生の戒、二には無覺有觀俱、謂はく、中間禪所生の戒、三には無覺無觀俱、謂はく、二禪上所生の戒なり。或は分つて四と爲す。謂はく、四禪の中に所生の戒なり。或は分つて六と爲す。謂はく、未來、中間、根本四禪所生の戒なり。若し「成實」に依らば、禪戒に九有り。謂はく、八禪及び欲界の電光に依つて生ずる所の戒なり。廣すれば則ち無邊なり。無漏戒の中、亦閑入息不定なり。これを總ずれば唯一なり。或は分つて二と爲す。一には無漏律儀、二には斷律儀なり。未來禪に依つて無漏道を發して、欲界の結を斷ずる九無礙の邊に生ずる所の戒を、斷律儀と名け、餘の無漏邊所生の戒を、無漏律儀と名く。又常無常も亦二を分つことを得。緣照無漏所生の戒を無常と曰ひ、諸佛菩薩の眞無漏邊に生ずる所の戒を、これを名けて常と爲す。或は分つて三と爲す。謂はく、三乘の人の無漏の聖戒なり。或は分つて四と爲す。諸佛、菩薩、聲聞、緣覺無漏の戒なり。或は分つて六と爲す。謂はく、三乘の人の因果の戒なり。或は分つて九と爲す。謂はく、三乘の人別に見修無學道の戒有り。或は分つて十と爲す。謂はく、十善戒なり。廣すれば亦無量なり。相を辨ずること是の如し。此二門

【八】 以下、所防同異の義を辨ず、中に於て三、一に遮性分別。

次に所防同異の義を辨ず。中に於て三有り。一には遮性分別は、毘曇の如きに依らば、別解脱戒は性惡を防禁し、及び罪を遮離す。性惡と言ふは、謂ゆる身口七の不善業なり。遮罪と言ふは、謂ゆる飲酒、殺草木等なり。禪無漏戒は、唯性惡を離れ、遮罪を防がず。

【成實】第九、七善律儀品。

【二には等】次に根本方便分別。

【三には等】次に時に約して分別す

七。【成實】第九、第七。

所受の威儀の法に非ざるを以ての故に、若し『成實』に依らば、三種の律儀、同く遮性を防ぐ。二には根本方便分別、殺、盜等の罪を名けて根本と爲し、猪羊等を養ふを名けて方便と爲す。毘曇の如きに依らば、別解脱戒は、通じて根本方便の惡を防ぐ。禪無漏戒は、唯根本を防ぐ。成實法の中には、三種の律儀、齊、根本方便の罪を防ぐ。三に時に約して分別す。時とは、謂はく三世なり。毘曇法の中には、別解脱戒は唯現在を防ぎ、過去に通ぜず。禪戒は心に隨つて寛く三世に通じ、三世俱に防ぐ。現起の者は、現惡を防離し、過去未來性成就の者は、過木の惡を防ぐ。無漏戒の中に最初に得る者は、唯現在未來の惡を防ぎ、過去に通ぜず。彼現在の者は現惡を防離し、寛く成就に通ず。未來に在る者は未來の惡を防ぐ。本未大有らず、過去世の中に成就せざるを以ての故に、過去を防がず。經生の聖人の無漏律儀は、通じて三世を防ぎ、現起の者は現惡を防ぎ、過去未來性成就の者は過木を防ぐ。若し『成實』に依らば、三種の律儀の體は皆現在にして、寛く過木に通ずるの義を説かず。體は現在なりと雖も、而も能く通じて三世の惡を防ぐ。問うて曰はく、『何が故に毘曇法の中には、現在の戒は唯現惡を防ぎ、成實法の中には、現在の戒通じて三世を防ぐ』釋して言はく、『毘曇は性相の中に求む。故に世の別に隨つて以て所防を論ず。成實の立義は務めて寛通に就く。故に現戒を説き、通じて三世を防ぐ。』『通相云何。』『現戒起る時現惡生ぜざるを現惡を防ぐと名け。現惡滅するが故に、過去の惡をして因の義を成せしめざるを過去を防ぐと名け、現惡滅するが故に、更に因と作りて、牽いて後惡を生

【二九】以下、第四に三界に就いて明す。先づ別解脱戒に就いて、中に四一に身處。

せしめざるを未來を防ぐと名く。過木に體有りて防ぐべしと謂ふには非ず。所防の同異、之を辨ずること論雨り。此三門

次に界に就いて論ず。界とは、謂はく、三界なり。此處に約就して、三律儀の通局の義を明す。中に於て、先に別解脱戒を明す。別解脱の中に、分別して四門有り。一には身處、

二には心處、三には成就處、四には戒體處なり。身處と言ふは、三界の中に就いて受戒の身を明す。故に身處と曰ふ。小乘法の中には、別解脱戒は欲界の身に受く。上二界に非ず。』

『何が故に是の如くなる。』『別解脱戒は現愚を防禦す。上界には愚無し。是故に受けず。』『若し爾らば、上界も亦應に彼神無漏戒無かるべし。』釋して言はく、『上界の定道律儀は、

欲界の惡に於て、持對治、違分對治有り。所以に有ることを得。別解脱戒は、身の在處に隨つて現を防ぎ過を遮す。是故に類せず。大乘法の中には、別解脱戒は顯小乘に同じ。理を以て細論すれば、色界の衆生も亦應に受くることを得べし。』何が故に是の如くなる。』

『色界の天有り、菩薩の法を聞いて菩提心を發し、自誓要期して、盡未來際に永く諸惡を斷ずるに、無作隨つて生ずるが故に之を受くることを得。』地經に説くが如し。』色界に在り

と雖も、光音天等も亦經を聞くことを得。』是の如き等なり。』問うて曰はく、『何が故に爾らざる。』釋して言はく、『小乘は形俱法を受く。彼は形惡無し。所以に受けず。菩薩

は通じて、盡未來際に一切の戒法を受く。故に之を受くることを得。』問うて曰はく、『無

色は何が故に受けざる。』釋して言はく、『以有り。若し是れ凡夫の無色界に生ずるは、心

【心處と等】二に心處に就いて。

【地持】第四。

【成處と等】三に成處に就いて。

【戒體處と等】四に戒體處に就いて。

志微細にして要期成ぜず。故に戒を發せず。若し是れ菩薩無色界に生ずるは、先に已に別解脱戒を成就す。故に新に發せず。心處と言ふは、三界に約就して受戒の心を明す。故に心處と曰ふ。小乘法の中には受心不定なり。若し所求に就いて以て受心を別たば、人天を求むるが爲にして戒を受くる者は、是れ欲界の心、出道を求むるが爲にして戒を受くる者は、是れ出世の心なり。若し定散に就いて受心を分別せば、是れ欲界の攝、散心に受くるが故に。大乘の受心の義も亦不定なり。若し所求に就いて以て受心を別たば、是れ出世の攝なり。故に「地持」に云はく、「菩薩の律儀は第一眞實心從り起る」と。菩提の心を名けて眞實と爲す。若し定散に就いて受心を分別せば、是れ欲界の攝なり。散心に受くるが故に。若し復通じて論すれば、乃至色界の聞思の善心も亦之を受くることを得。大乘は、色界は聞思を具するが故に。成處と言ふは、身の所在に隨つて成就して失せざるを、名けて成處と爲す。小乘法の中には、別解脱戒は唯欲界に成す。此形俱の法、死する時捨するが故に。菩薩の戒法は三界に成就す。一び受得し已りて、乃ち菩提に至るまで、身の所在に隨つて常に成就するが故に。戒體處とは、小乘法の中には、戒體不定なり。果に對して之を論ずれば、或は欲界の攝、或は出世の攝なり。人天を求むるが爲にして戒を受くる者は、是れ欲界の攝、解脱を求むるが爲にして戒を受くる者は、是れ出世の攝なり。若し定散に就いて戒體を分別すれば、唯欲界の攝なり。此れ欲界の散善の業なるを以ての故に。大乘法の中には、別解脱戒の義亦不定なり。果に對して之を論ずれば、是れ出世の攝。菩提の

【次に等】次に禪戒を論ずるに四あり。一に身處。

【心處と等】二に心處。

【成實】第十五。

【龍樹の等】大智論第二十六。

【成處と等】三に成處。

因なるが故に。若し定散に就いて戒體を分別すれば、是れ欲界の攝。是れ欲界散善の業なるを以ての故に。若し微通じて之を論ずれば、色界地の中に、聞思の善心よりして受得する者は、是れ色界の攝なり。別解脫戒、之を辨ずること蓋爾り。次に禪戒を論ず。中に於て亦四有り。一には身處を明し、二には心處を明し、三には成就處、四に戒體處なり。身處と言ふは、毘曇には、禪戒は欲色の身に生ず。無色界に非ず。戒は是れ色法なり。色處に生ずるが故に。成實、大乘には、三界の身に生ず。何が故に是の如くなる。『成實宗の中には、戒は是れ非色非心の法なるが故に、無色に生ずることを得。大乘の無色は色心有るが故に、無色に生ずることを得。心處と言ふは、毘曇は、禪戒は一向に唯色界の心從り起る。餘の二界に非ず。彼宗には、欲界は一向に禪無し。故に禪戒無し。戒は是れ色法なり。是故に無色の心より發せず。若し尊者瞿沙の所説に依らば、欲色の心より發す。彼は欲界に禪定有りと説く。故に成實、大乘には、三界の心に發す。』何が故に是の如くなる。『若し『成實』に依らば、欲界に其如電三昧有り。故に禪戒を發す。戒は是れ非色非心の法なるが故に、亦之を發することを得。大乘に宣説すらく、『欲界地の中に無量の定有るが故に』と。龍樹言はく、『佛は常に欲界定の中に住すれば無不定と名く』と。聲聞は暫く得れば、説いて電光と爲す。彼定心の邊に禪戒を發することを得。無色心の邊に義の在ること知るべし。』成處と言ふは、毘曇に、禪戒は欲色に成就す。無色界に非ず。有漏の法は、下に在りて上を成す。上に生ずる時、必ず下を失するが故に。成實、大乘には、三界に皆成

【戒體處と等】 四に戒體處。

【次に等】 次に道戒に就いて辨ずるに奉四。一に身處【心處と等】 二に心處。

【成處と等】 三に成處。【戒體處と等】 四に戒體處。

【三】 以下、第五に五趣に約して三律儀の通局を辨ず。先づ別解脱戒に就いて。【成實論第九】 成實論

【次に等】 次に禪戒及び無漏戒を辨ず。

す。彼は禪戒は三界の法と説くが故に。又彼宗の中には、有漏の善法、上に生ずるの時、下を失せざるが故に。戒體處とは、毘曇には、禪戒は唯色界の攝、瞿沙の所説は、欲色界の攝、成實、大乘には、皆三界の攝なり。三界地に依りて禪心生ずるが故に。禪戒是の如し。次に道戒を論ず。中に於て亦四有り。一には身處を明し、二には心處を明し、三は成就處、四には戒體處なり。身處と言ふは、毘曇には、「道戒は欲色の身に生ず」と。成實、大乘には、「三界の身に生ず。禪戒と同じ」と。心處と言ふは、三界の攝に非ず。若し禪本に隨はば禪戒に同じ。成處と言ふは、三界に皆成ず。無漏は上に生じて下を失せざるが故に。戒體處とは、性は三界を出づ。若し禪本に隨はば、心處に説くが如し。界別是の如し。四此門竟

次に趣に就いて論ず。趣とは、謂はく、五趣なり。此處に約就して、三律儀の通局の義を明す。中に於て先に解脱戒を明す。毘曇法中には、別解脱戒は人天の身に生じ、人天に成就す。餘趣は難し。身に生ぜず、成ぜず。成實法の中には、出家の戒は局りて人道に在り、在家の戒は、人天鬼畜の四趣の中に生じて、四趣に成就す。大乘成法は、人天鬼畜の四趣の中に生じて、五趣皆成ず。一び受得し已りて、常に成就するが故に。次に禪戒及び無漏戒を論ず。毘曇、成實は人天の身に生じ、人天に成就す。『長阿含』の天品の中に依らば、鬼子母天も亦聖道を得。道は必ず禪に依る。若し彼義に従はば、人天及び鬼の三趣の中に生じ、三趣の中に成ず。大乘法の中には、菩薩遍く五趣の中に在りて、皆生じ皆成ず。

「此れ云何が知る。」『華嚴經』の如きには、「諸の龍鬼等、各法門に於て自在を得」と。
 『提謂經』の中に、「諸の龍鬼等、法を聞いて悟道す」と。『方等經』の中に、「地獄の衆生、
 佛の光明に遇うて諸佛の所を尋ね、法を聞いて悟道す」と。故に知る、五趣皆成す」と。
 問うて曰はく、「地獄鬼畜、聖道を得と言はば、云何が難と名けん。」釋して言はく、「此等
 は佛の強縁に由りて、方に能く悟道す。佛を離れては能はず。故に名けて難と爲す。」越別
 是の如し。此五門
 竟る。

【三】以下、第六に男女等の形に就いて明す。

【成實】 第九。

次に形に就いて論ず。形とは、謂はく、男女及び無根等なり。毘曇法の中には、別解脱戒は唯男女一形の中に在りて生ず。餘は希望して具足せざるが故に律儀を發せず。成ずれば則ち爾らず。二形の人を除いて、餘は皆成就す。若し『成實』に依らば、出家の戒は毘曇と同じ。在家の戒は、二形の人を除き、自餘の一切皆生じ皆成す。大乘の戒は二形を簡ばず、一切の身中に皆生じ皆成す。所受通するが故に。次に禪戒及び無漏戒を論ず。小乘法の中には、欲界に在る者は男女の身に生じ、一切形の中、皆成就するを得。經云論の中に、曾て二形の人等有りて此戒を捨つることを説かざるが故に。上界に在る者は、男女の身能く生じ能く成ずるに非ず。菩薩の人は、一切形の中に、皆生じ皆成す。形別是の如し。此六門
 竟る。

【三】以下、第七に人に就いて論ず。

次に人に就いて論ず。人に邪正有り。外道を邪と名け、内道を正と名く。毘曇の如きに依らば、別解脱戒は佛弟子受く。外道の得に非ず。成實法の中には、外道も亦得す。故に

九。【彼論】 成實論第

【三】以下、第八に得捨成就の義を明す。初に其得を

【次に等】二に捨に就いて。

彼論に、「外道も亦深心を以て惡を離る」と言ふ。故に戒を受得す。禪律儀は、内外俱に得す。外道も亦八禪定を修するが故に。無漏律儀は唯佛弟子のみにして、外道の得に非ず。彼は邪見に住して八正無きが故に。人別是の如し。此七門

次に得捨成就の義を論ず。先に其得を論じ、次に其捨を明し、後に成就を辨す。言ふ所の得とは、先に無く今起る、之を名けて得と爲す。別解脱戒は、唯一び受得して更に餘の義無し。受の中の差別は、三聚の中に具に廣く分別するが如し。禪律儀とは、毘曇の如きに依らば、二種の得有り。一には斷得、下過を斷する時上の禪戒を得す。二には生得、上從り退し來つて下地に生ずる時下の禪戒を得。成實、大乘には、唯斷得有りて生得を説かず。彼は上に生じて下を失はずと説かず。故に退して下に生ずる時を新得と名けず。無漏律儀は、毘曇法の中に三種の得有り。一には斷得、下の過を斷する時、上の道戒を得。二には轉根得、轉根の時、鈍根の戒を捨して利根の戒を得るが故に。三には退得、聖果を證する時、彼因中の無漏の戒を捨し、後果を退する時、還本戒を得す。成實、大乘には、唯一の斷得、餘は皆論ぜず。彼は轉根及び得果の時、舊法増明にして、前の法を捨して、別に得有るに非ずと説くが故に。得相是の如し。次に捨の義を論ず。先に有りて今失ふ。之を名けて捨と爲す。小乘法の中には、別解脱戒に四種の捨有り。一には不用道捨、二には命終捨、三には斷善捨、四には二形生捨、謂ゆる男女の二形生ずる時律儀戒を失す。有人宣説すらく、「初業罪を犯すれば、亦禁戒を失す」と。是事然らず。此は但戒を汙す。名

【地持】第四十一

けて捨と爲さず。諸の經論の中、皆此説に同じ。菩薩の律儀に二種の捨有り。『地持』に説くが如し。一には菩提心を退す。二には増上の煩惱、波羅夷を犯す」と。不同の所以は、三聚章中に具に廣く分別す。禪律儀戒に二種の捨有り。一には退捨。下過を退起すれば上の禪戒を失す。二には上に生ずる時捨す。有漏は上に生ずれば、則ち下を失するが故に。成實、大乘には、唯退捨有り。彼は上に生じて下を失はずと説くが故に。無漏律儀は、毘曇法の中には三種の捨有り。一には退捨、聖道を退する時、無漏戒を失す。二には轉根捨、轉根の時鈍根の戒を捨す。三には得果捨、聖果を得る時彼因中無漏の戒を捨す。成實法の中には、三捨悉く無し。唯無餘涅槃に入る時捨す。大乘法の中、緣治と俱なる者は、實を證する時捨す。眞證と俱なる者は、畢竟じて捨無し。三種の律儀、之を辨ずること羅爾り。

止觀捨の義に八門の分別あり。名を釋す。體を定む。相を辨ず。制立。修起の次第。五。位に就いて分別す。人に就いて分別す。

【三四】淨法聚第十四段に止觀捨の義を明すに八門の分別あり。第一に釋名。【經】北本涅槃經第三十一師子吼菩薩品。

第一に名を釋す。止觀捨とは、經中に亦定慧及捨と名く。此れ乃ち修中の差別なり。修の義不同なり。一門に三を説く。止とは、外國には奢摩他と名け、此には翻じて止と名く。心を守りて緣に作し、散動を離る。故に名けて止と爲す。心を止めて亂さず。故に復定と名く。觀とは、外國に毘婆舍那と名け、此には翻じて觀と名く。法に於て推求し簡擇する

【奢摩他】 シヤマ
タ (Samatha)

【毘婆舍那】 ギバ
シヤナー (Vipassana)

【憂畢又】 ウベ
クシヤー (Upekkhā)

【三五】 以下、第二
に止觀捨の體を明
す。初に毘曇の所
説。

【若し成實に等】
次に成實論の所説

を觀と名く。觀達を慧と稱す。捨とは、外國には憂畢又と名け、此には翻じて捨と名く。行、心平、等にして偏習を捨離す。故に名けて捨と爲す。此一門

次に體性を辨す。唯毘曇に依りて義釋するに二有り。一に同時の心法に就いて以て論ずれば、止とは正しく定數を用て體と爲す。觀とは或は觀數を用て體と爲し、或は復彼慧數を用て體と爲す。伺求の觀は觀數を體と爲し、照法の觀は慧數を體と爲す。捨とは或は捨數を用て體と爲し、或は定慧の二數を用て體と爲す。捨過の捨は捨數を體と爲す。定慧平等にして偏習を捨離す。之を名けて捨と爲し、還つて即ち彼定慧を用て體と爲す。二に前後

修の義に就いて分別すれば、止とは正しく定行を用て體と爲し、定數を主と爲して、諸の心心法相從つて縁に住するを、通じ名けて止と爲す。觀とは或は觀行を用て體と爲し、觀數を主と爲して、諸の心心法相隨つて伺求するを、通じ名けて觀と爲す。或は復彼慧行を用て體と爲し、慧數を主と爲して、諸の心心法相隨つて境を照すを、通じ名けて觀と爲す。捨とは或は捨行を用て體と爲し、捨數を主と爲して、諸の心心法相隨つて過を

捨するを、通じ名けて捨と爲す。或は定慧の二行を用て體と爲し、定慧の兩數を以て正主と爲して、諸の心心法此定慧に隨ふを、通じ名けて捨と爲す。若し成實に依つて義釋せば亦二有り。一には同體同時法の中に就いて、義に隨つて分別す。一心體の中に、住の義を止と名け、照の義を觀と名け、調停を捨といふ。毘曇の諸數別體に同じからず。二には

前後修の義に就いて分別す。作意縁に住するを、之を名けて止と爲し、作止境を照すを、

【大乘法の等】次に大乘法中の所説【事識】六識のこと。妄識は第七、眞識は第八識なり

説いて名けて觀と爲し、作意の相を捨するを、方に名けて捨と爲す。通じて皆是れ心なり。別の主伴無し。大乘法の中には義別三有り。一には事識の中の修、二には妄識の中の修、三には眞識の中の修なり。事識の中の修は毘曇と同じ。心數別なるが故に。妄識の中の修は、龜は毘曇と同じく、細は成實と同じ。此れ云何が知る。『馬鳴の説くが如くんば、第七識の中に龜細六重有り。根本四重は心數別無し。故に成實と同じ。最後の兩重は心と數と別なり。心と共に相應す。故に毘曇と同じ。眞識の中の修の義、別して三有り。一には同時同體の法の中に就いて、義に隨つて別分す。寂の義を止と名け、照の義を觀と稱し、離相を捨と名く。二には同時同體の法の中に就いて異門相接す。止の義を門と爲して、諸行之に隨ふを、通じ名けて止と爲す。觀の義を門と爲して、諸行之に隨ふを、齊く名けて觀と爲す。捨の義を門と爲して、諸德之に隨ふを、俱に名けて捨と爲す。三には修の義の前後に約して別分す。始め心、法に住して妄を離るるを止と名け、正見を觀と名け、終に證して相を捨す。故に説いて捨と爲す。體性是の如し。此を以て餘に類するに、諸行齊く然り。此二門

【三六】以下、第三に其相を辨ずるに、二門あり、一に通じて諸行の閉合に就いて辨ず。

【地持】菩提品。

次に其相を辨ず。中に於て兩門有り。一には通じて、諸行の閉合に就いて相を辨ず。二には別して、諸行の閉合に就いて相を辨ず。初に通じて諸行の閉合に就いて辨ずとは、此三行の閉合不定なり。之を總すれば唯一なり。謂はく、聞、思、修の三行の中の修行の所收なり。或は分つて二と爲す。謂はく、止と觀となり。『地持』に説くが如し。『一切の法に

【地持】 第三方便
性品

【次に等】 辨相中
に別して諸行の開
合に就いて辨ず。
先づ止行に就いて
【涅槃】 師子吼苦
薩品第四

於て安相を起さざるを、之を名けて止と爲し、第一義の離言の自性を知り、及び世諦の無量處の法を知るを、説いて以て觀と爲す」と、或は分つて三と爲す。謂はく、止、觀、捨なり。此三の猶前は止觀の所攝なり。止、觀、別修するを、分つて前の二と爲し、止、觀、雙修するを、合して後の一と爲す。故に三種有り。或は分つて四と爲す。『地持』に説くが如し、一には修止、二には修觀、三には修習止觀、四には樂住止觀なり。此四は猶前の止、觀、及び捨の三行の所攝なり。捨の中に二を分つ。初を修習と爲し、終を樂住と爲し。更に別の行無し。言ふ所の止とは、事に於て、義に於て、心を繋けて安住し、一切の虚偽、輕躁、及び諸の憶想を遠離する、之を名けて止と爲す。事とは、謂はく、世諦、義とは、謂はく、眞諦なり。輕躁を離るとは、事中の輕亂の心を息除するなり。憶想を離るとは、理外の分別の想を遠離するなり。言ふ所の觀とは、事に於て、義に於て、憶念選擇する、之を名けて觀と爲す。修止觀とは、前の止觀に於て、常に修し、頓に修す。樂止觀とは、前の止觀に於て、久く修するを以ての故に方便を勤めず、熾然として動ぜず。義に隨つて廣く分たば、修は乃ち無量なり。通じて諸行の開合に就くこと是の如し。次に諸行の別相に就いて相を辨ず。先に止行の開合に就いて相を辨ず。『涅槃』に説くが如し。總じては唯一定なり。或は分ちて二と爲す。一には世間八禪の事定、二には出世合理の靜なり。或は分つて三と爲す。謂はく、上、中、下なり。下とは、謂はく、凡夫の八禪の事定、中とは、謂はく、二乘合理の靜、上とは、謂ゆる諸佛、菩薩の離妄の眞定なり。或は分つて四と爲

す。一には退分、二には住分、三には勝進分、四には決定分なり。此決定分を「涅槃」に
 は、名けて能作大益と爲す。義は下に解するが如し。或は分つて五と爲す。謂ゆる凡夫、
 聲聞、緣覺、菩薩、及び佛の所得の三昧なり。又「涅槃」の中に、更に五種を分つ。一に
 は無食三昧は謂ゆる初禪に彼搗食を離る。故に無食と曰ふ。二には無過三昧、亦是れ初禪
 に彼欲惡を離る。故に無過と名く。三には身意清淨一心三昧、謂はく、第二禪に六識の中
 の覺觀の過を離るるを、身意淨と名く。内淨一處なり。故に一心と曰ふ。四には因果俱樂、
 謂はく、第三禪なり。彼は樂勝るが故に。五には常念三昧、謂はく、四禪乃至非想、彼は
 三災を免れ四受を絶ち、出入の息を離れて定心不動なり。故に常念と曰ふ。或は分つて六
 と爲す。謂はく、五停心及び觀生滅なり。五停は下の如し。或は分つて七と爲す。謂は
 く、須陀洹所得の三昧、斯陀、那含、羅漢、辟支、菩薩、及び佛所得の三昧なり。或は分
 つて八と爲す。前の七の上に於て、凡の所得を加ふ。又八解脫、八禪定等、亦八を分つこ
 とを得。並に下に釋するが如し。亦九を分つことを得。謂はく、九次第定なり。根本八禪
 及び滅盡定、轉相趣入するを九次第と名く。或は分つて十と爲す。謂はく一切入なり。亦
 下に釋するが如し。廣すれば則ち無量なり。次に慧行に就いて、開合して相を辨ず。總じ
 ては唯一の慧なり。或は分つて二と爲す。一には是れ世間、世俗等の智、二には是れ出世、
 謂はく、無漏智なり。亦三を分つことを得。一に般若は、此には翻じて慧と名く。二に毘
 婆舍那は、此には翻じて觀と名く。三に闍那は、此には翻じて智と名く。此三何んが異なる。

【次に等】 次に慧
 行に就いて
 【般若】 プラツユ
 ニヤー (Prāṇa)
 【闍那】 シユニヤ
 ーナ (Jhama)

【捨の中等】次に捨行について。

「經の中に兩釋有り。一には人に約して以て分つ。般若と言ふは、一切衆生なり。一切の凡夫同じく慧數有り。故に般若と名く。毘婆舍那とは、一切の聖人なり、此を聲聞、緣覺と名け聖と爲す。彼能く苦、無常等を觀察す。故に名けて觀と爲す。闍那と言ふは、諸佛、菩薩なり。彼一切の諸法の差別を知る。故に名けて智と爲す。二には境別に隨ふ。般若と言ふは、是れ別想觀なり。別して世諦を知る。毘婆舍那は是れ總相觀なり。總じて眞諦を知る。闍那と言ふは、是れ破相觀なり。有無知一實諦を破離す。亦四を分つことを得。謂はく、四無礙、四諦觀なり。亦五を分つことを得。謂はく、法住智、泥洹智、願智、無諍智、邊際智等なり。廣くは下に釋するが如し。又復五種無量の智も、亦是れ五種なり。亦下に釋するが如し。亦六を分つことを得。謂はく、生死の無常、苦、空、無我、不淨、涅槃の寂滅を知る。亦七を分つことを得。謂ゆる知法、知義、知時、知足、知自、知衆、知尊卑なり。亦下に釋するが如し。或は分つて八と爲す。生死の法の無常と苦、無我、不淨を知り、涅槃法の常、樂、我、淨を知る。亦九を分つことを得。前の八種及び第一義を知る。亦十を分つことを得。謂ゆる十智及び如實知なり。亦下に釋するが如し。廣すれば則ち無量なり。捨の中に二有り。一には定慧變修して偏習を離る。之を名けて捨と爲す。義は前の二の如し。更に別の行無し。二には空に住して相を捨す。之を名けて捨と爲す。義は則ち不定なり。總じては唯一の捨なり。或は分つて二と爲す。一に生空觀は、人に於て

平等なり。二に法空觀は、法に於て平等なり。或は分つて三と爲す。謂はく、三空觀なり。或は分つて四と爲す。謂はく、四空觀なり。有法空、無法空、自法空、他法空、是れ其四なり。廣くは上に釋するが如し。或は分つて五と爲す。謂はく、空、無相、無願、無作、及び無起觀なり。『無量壽經』の中に説く所の如し。空理の中に於て、相として取るべき無きを、名けて無相と爲し、願樂の心無きを、願として無願と爲し、果として爲すべき無きを、名けて無作と爲し、因として起すべき無し、故に無起と曰ふ。或は分つて七と爲す。謂はく、七空觀なり。亦上に釋するが如し。或は十一を分ち十一空を觀す。『涅槃』に説くが如し。或は十八を分つ。『大品』に説くが如し。廣すれば則ち無量なり。相を辨ずることは是の如し。此三門竟る。

【三七】 以下、第四に制立を辨ず。

【涅槃】 第二十九師子吼品之五。

【經】 同前。

【涅槃】 同前。

次に制立を辨ず。何の義を以ての故に、此三行を立て、増せず減ぜざる。一に解するに八義有り。一には行性不同なり。定數は是れ止、慧數は是れ觀、捨數を捨と爲す。二には行相不同なり。住緣は是れ止、知法は是れ觀、調停は是れ捨なり。三には功能不同なり。止能く亂を息め、觀能く惑を斷じ、捨能く治を遣る。四には修の時不同なり。『涅槃』に説くが如し。心慢ならば止を修せよ。煩惱増強、戒律羸損し、諸根調せず、善に於て疑悔有らば、則ち宜く觀を修すべし。定慧不等ならば、則ち須く捨を修すべし」と。又經に宣説すらく、「定慧平等ならば、則ち宜く捨を修すべし」と。五には行門不同なり。『涅槃』に説くが如し。彼空三昧、之を名けて止と爲す。心空に住するを以て分別を離るるが故に。

【涅槃】 第二十八

【涅槃】 同前。

【二八】以下、第五に修起次第の義を明すに略して四あり。一に制發捨

無願三昧、之を説いて觀と爲す。慧、生死を觀じて能く斷捨するが故に。無相三昧を説いて捨行と爲す。入涅槃を證し、衆相を捨するが故に。六には根境に依る不同は多門なり。後の如し。今此に且く一相に依りて之を論ずれば、事に依りて止を修す。世の八禪の如し。事中に住するが故に。法に依りて觀を修す。諸法の苦無常等を觀察するを名けて觀と爲すが故に。理に依りて捨を修す。空平等を證し、衆相を捨するが故に。七には人に隨ふ不同は多門なり。後の如し。今此に且く一相に依りて之を辨ずれば、『涅槃』に説くが如し。『聲聞、緣覺は定多く慧少し。菩薩の人は慧多く定少し。諸佛、如來は定、慧平等なり。之を説いて捨と爲す』と。八には所爲不同なり。『涅槃』に説くが如し。『三義の爲の故に、所以に止を修す。一には煩惱を離れんが爲に、禪に依りて結を伏す。二には大智を莊嚴せんとして、禪に依りて慧を發す。三には自在を得んが爲に、禪に依りて通を發す。三義の爲の故に、所以に觀を修す。一には生死の果報の過を觀ぜんが爲の故に、慧に依りて苦を滅す。二には善法を増さんが爲に、慧に依りて業を離る。三には煩惱を破せんが爲に、慧に依りて惑を除く。三義の爲の故に、所以に捨を修す。一には定慧を調せんが爲に、其をして平等ならしむ。二には空を證せんが爲に、有相を捨離す。三には中道を得んが爲の故に、有無を離る』と。制立是の如し。此四門

次に修起の次第の義を明す。中に於て、次第に略して四階有り。一には制發捨、二には止舉捨、三には止觀捨、四には定慧捨なり。此四門、通じて釋すれば、是れ一なり。中に

【止舉とは等】 二
に止舉捨。

【止觀捨とは等】 三
に止觀捨。

於て別して分たば、前の兩階は行修の方便、後の二は修成得法相應なり。前の方便の中に始有り、終有り。得法も亦爾り。故に四階有り。制發捨とは方便の始、昏覺を對治す。昏は謂はく昏睡、覺は謂はく八種の惡覺煩惱なり。八覺と言ふは、謂ゆる欲覺、恚、害、親里、國土、不死、族姓、輕侮なり。若し惡覺有らば則便ち之を制し、心を制して數息門等に任す。昏ならば則ち之を發して、身の無常を念す。三惡道は苦なり。佛法滅せんと欲す。此を以て心を觀ちて昏昏を去らしむ。昏覺俱に離れ修心中を得。是時を捨と名く。止舉とは方便の終、沈掉を對治す。沈は謂はく沈沒、掉は謂はく掉動なり。心志濁潤するを、之を名けて沈と爲す。心數異緣するを、説いて以て掉と爲す。掉は則ち止を修し、心を鼻端、眉間、足指に止む。隨つて何れの處にも在り。沈なれば則ち舉を修し、身の無常、苦、無我等を念す。沈掉俱に離れ、修心中を得。是時を捨と名く。止觀捨とは、得法の始、所治に三有り。一には愛見に對して以て修治を明す。四住の煩惱を分つて愛見と爲す。初の一は是れ見、後の三は是れ愛なり。此門の中に於て止を修して愛を治す。謂ゆる世俗の八禪の方便、觀を修して見を治す。謂ゆる出世無漏の方便なり。止觀雙修して偏習を離る。是時を捨と名く。二には癡愛に對して、以て修治を明す。五住煩惱を分つて癡愛と爲す。無明を癡と名け、餘の四を愛と名く。此門の中に於て、止を修して愛を治し、觀を修して癡を治し、癡愛俱に離れ、止觀雙修す。是時を捨と名く。三には癡妄に對して、以て修治を辨す。直に無明住地の中に就いて、闇有り、妄有り。諸法を迷覆する、之を名けて闇と爲

【地持】 第二眞實
義品

【地持】 第六菩提
品

【定慧捨等】 次四
に定慧捨。

【二九】 第六に境界
に約して三行を分
別するに分つて三
あり、一には三法
相對。

し、妄まうに所取しよしゆ有るを、説といて以もつて妄まうと爲なす。『地持』に説とくが如ごとし。『是こゝの如ごとく實じつの如ごとく凡愚ぼんご知らざるは、是こゝれ其その闇あんなり。八妄想はちまうそうを起おこすは、是こゝれ其その妄まうなり』と。此この門もんの中なかに於おて、止とを修しゆして妄まうを治ちす。『地持』の中なかの如ごときは、『佛ぶつ爲ために大迦旃延だいかせんえんを誦とりて説とく、地等ちとうの一切いっさいの法想ほふさうに依よらずして禪定ぜんぢやうを修しゆす』と。馬鳴ばめいの論ろんの中なかも、亦また此この説とに同おなじ。一切いっさいの想さうを離はなるるを、名なづけて止とを修しゆすと爲なす。觀くわんを修しゆして癡闇ちあんの心しんを對治たいぢす。故ゆゑに『地持』に云いはく、『一切いっさいの法ほふに於おて妄想まうさうを起おこさざる、之これを名なづけて止とと爲なす。離言りごんの性じやうを知しり、及び無量むりやうの世諦せたいの方便ほうべんを知しるを、之これを名なづけて觀くわんと爲なす。雙修すわうしゆして偏習へんしゆを離はなる、是こゝの時ときを捨すと名なづく』と。定慧捨ぢやうゑしやとは、得法とくほふの終しゆう、更さらに別治べつぢ無く、前まへの止觀しくわん所除しよじゆの煩惱ぼんご究竟くわうぢやうして盡つくる處ところに於おて、成なずる所ところの行徳ぎやうとくを定ぢやう慧捨ゑしやと爲なす。修起しゆき是こゝの如ごとし。此この五門ごもん。

次に境界きやうがいに約やくして三行さんぎやうを分別ぶんべつす。中なかに於おて義別ぎべつすれば、略りやくして三階さんがい有り。一いには三法さんほふ相對たいして、以もつて三行さんぎやうを辨べんす。二にには兩行りやうぎやう相對たいして、以もつて三行さんぎやうを辨べんす。三さんには一法いっほふに歷就りやくじゆして、以もつて三行さんぎやうを辨べんす。初はつに三法相對さんほふたいの中なかに就じゆいて、別べつして二門にもん有り。第一だいいちには事法じほふ及び理りに約就やくじゆして、以もつて三行さんぎやうを分わかつ。事じとは、謂いはゆる陰界いんがい、入等にちとうなり。之これに依よりて止とを修しゆす。世よの八禪はちぜんの如ごとし。法ほふとは、謂いはゆる苦く、無常むじやう等とうなり。之これに依よりて觀くわんを修しゆす。理りとは、謂いはゆる第一だいいち義空ぎくうなり。之これに依よりて修捨しゆしやし、衆相しゆさうを捨離しやりす。二にには三諦さんたいに約やくして、以もつて三行さんぎやうを分わかつ。三諦さんたいと言ことふは、一いには是こゝれ世諦せたい、謂いはく、法有相ほふぎやう、二にには第一だいいち義諦ぎたい、謂いはく、法無相ほふむぎやう、三さんには一實諦いっじつたい、謂いはく、法非有非無ほふひぎやうひむの相さうなり。此この三門さんもんの中なかに、修起しゆき不定ふぢやうなり。事じ從じより理りに入い

【次に等】二に兩行相對。

【地持】第六。

【次に等】三に一法に就いて辨ず。

【次に等】第七に位に就いて論ず。

るは、世に依つて止を修す。世の八禪の如し。眞に依つて觀を修し、諸法の空を觀ず。寂
 從り用を起すは、眞に依つて止を修す。分別を離るるが故に。世に依つて觀を修す。諸法
 を觀するが故に。一實諦に依つて捨行を修習す。有無を捨するが故に。故に『地持』の中
 に、事に隨つて取る者を平等觀と名け、如に隨つて取る者を平等心と名く。等は猶止の
 如し。有無を捨離するを第一捨と名く。上來三境に約就して行を辨ず。次に二境に約す。
 二境と言ふは、一には世諦法、二には眞諦法なり。通じて之を論ずれば、此二の中に於て
 妄想を起さざるを、通じて名けて止と爲し、二諦を照見するを、俱に名けて觀と爲す。故に
 『地持』の中に、「妄想を起さざるを説いて、名けて止と爲し、二諦を了知するを、同じく觀
 と名く」と。止觀雙修調停なるを捨と名く。中に於て別して分たば、起行各異なり。若
 し觀入に就かば、世に依つて止を修し、眞に依つて觀を修す。若し起用を論ずれば、眞に
 依つて止を修し、世に依つて觀を修す。止觀雙修調停を捨と名く。次に一法に就いて以て
 三行を辨ず。何れの法、何れの事の中に隨つても、攝止安住するを、即ち名けて止と爲し、
 照察するを觀と名く。止觀調停を、之を名けて捨と爲す。境に約することは是の如し。此門
 次に位に就いて論ず。位に別して五有り。一には外凡の位、二には内凡の位、三には見
 道の位、四には修道の位、五には無學の位なり。通じて之を論ずれば、一一の位の中に皆
 三行を具す。中に於て別して分たば、進退に三有り。一義の分別は、外凡の位の中に世の
 八禪を修す。之を名けて止と爲す。内凡の位の中に觀諦の理を學す。之を名けて觀と爲す。

【三】第八に人に就いて論ず。

見道已上に理の平等を證するを、同じく名けて捨と爲す。第二の義は、内凡の中に、心を諦理に安じて未だ見ること能はず。之を説いて止と爲す。故に見諦の前を名けて定淨と爲す。見道の位の中に始めて諦理を見る。之を名けて觀と爲す。修道已去定慧調停なるを説いて、名けて捨と爲す。第三の義とは、見道已前と同じく名けて止と爲し、見修の二道、理を照すを觀と名く。無學位の中に涅槃の果を得、十相を捨離す。故に名けて捨と爲す。位別是の如し。此七門 竟る。

【三】淨法聚第十
五段に三慧の義を
明すに五門の分別
あり。第一に釋名。

次に人に就いて論ず。人に五種有り。一には是れ凡夫、二には是れ聲聞、三には是れ緣覺、四には是れ菩薩、五には是れ如來なり。通じて之を論ずれば、人人皆止、觀及び捨を具す。中に於て別して分たば、略して三義有り。一には凡夫の人は世の八禪を修し、但上行有り。聲聞、緣覺は、四諦、十二緣等を觀察し、其觀行有り。菩薩二乘は同じく法性を證し、其捨行有り。二に凡夫に止有り。義、前に釋するが如し。菩薩二乘は同じく法性を觀じ、其觀行有り。佛は涅槃を證し、其捨行有り。三に凡夫を除きて、直賢聖を論ず。聲聞の寂に住するを止と名け、菩薩、差別の法界を了知す。之を名けて觀と爲す。佛、涅槃を得、其捨行有り。止觀捨の義、之を辨すること粗爾り。

【三】三慧の義に五門分別あり。名を釋す一。體を辨ず二。位に就いて分別す三。第一に名を釋す。三慧と言ふは、經の中に、或時は聞、思、修と名け、或は復説いて聞、

思、修、慧と爲す。通じて釋すれば是れ一なり。中に於て別して分たば、義に寛狭有り。若し當に直に聞、思、修と言ふべくんば、其義は則ち寛にして一切に通ず。一切に通ずる中に始て行法を受くるを、通じ説いて聞と爲す。所聞の法に於て分別簡擇するを、通じ名けて思と爲す。法に依りて正しく行するを、通じ説いて修と爲す。若し當に説いて聞、思、修慧と爲すべくんば、其義は則ち狭くして、局りて般若に在り。餘行に通ぜず。般若の中に就いて、教を受くるを聞と名け、聞に依りて解を生ずるを名けて聞慧と爲す。義を簡ぶを思と名け、思に従りて解を得るを、名けて思慧と爲す。進習を修と名け、修に従りて智を得るを、名けて修慧と爲す、名義是の如し。此一門

【三三】 第二に體性を明す。

次に體性を辨す。三慧皆慧數を用て體と爲す。慧は法に依りて成ず。法に三種有り。一には教、二には義、三には行法なり。三藏の言教は是れ其教法、三諦の理は是れ其義法、三乘の行儀は是れ其行法なり。中に於て別して分たば、教に依りて聞を起し、義に依りて思に入り、行に依りて修を起す。通じて之を論すれば、一の法に依りて、皆三慧を具す。教法の中に於て、初めて受くるを聞と名け、是非を簡擇するを説いて以て思と爲し、聞持陀羅尼行を成就するを、説いて以て修と爲す。義法の中に於て其三種有り。一には世諦、二には第一義諦、三には實諦なり。通じて之を論すれば、此三諦に於て、初受を聞と名け、簡擇を思と名け、正智を成就するを、説いて以て修と爲す。相に隨つて別して分たば、世諦に依りて聞慧を成就す。世法は言教の及ぶことを爲す可きが故に。第一義に依りて思慧

【三】第三に位に就いて論ず。

を成就す。理は言外に出で、正智もて思量して方に能く及ぶが故に。一實諦に依りて修慧を成就す。一實は精微にして、正證修行して方に能く見るが故に。行法の中に於て、初受を聞と名け、簡擇を思と稱し、造行を修と曰ふ。又復前の三をば、教に隨つて修行するを、通じ名けて聞と爲し、言を捨て證に趣くを、説いて以て思と爲し、證を得て相應するを、之を説いて修と爲す。又復證相、初より來心を現するを、義説して聞と爲す。蓋し乃ち是れ其不聞の聞なり。正く得るを思と名け、得已りて上進するを説いて、名けて修と爲す。體性是の如し。此二門

次に位に就いて論ず。通ずれば則ち位位一切皆具す。中に於て別して分たば、差異無きに非ず。『異相如何』。『毘曇』に准依するに、外凡の位の中、初めて師の教を受くるを説いて聞慧と爲す。五停心觀、總別念處は、想心の觀行未だ禪定修慧の法を得ざるが故に、判じて思慧と爲す。煖等已上は定に依りて修行すれば、判じて修慧と爲す。又更に分別すれば、五停心觀は教に依るの始なれば、判じて聞慧と爲す。總別念處は教に背くこと已に遠く、觀心轉た強なれば、判じて思慧と爲す。煖等已上は定に依り修行すれば、判じて修慧と爲す。成實法の中には、念處已前に初めて師の教を受け、聞くに隨つて解を得れば、判じて聞慧と爲す。念處の位の中には、能く自心に分別簡擇するに堪へたるを、説いて思慧と爲し、煖等已上は現に空理を見れば、説いて修慧と爲す。』問うて曰はく、『成實の三慧、是の如し。此三慧の中に、何れの法を解知する。』『有人釋して言はく、『聞慧地の中には陰

【華嚴】 十佳品。

【地持】 第七。

を以て生を分ち、衆生空を得。思慧地の中には別して五陰の壞の無常を觀じ、前の生空を成じ、兼ねて法空に趣く。煖等已上は總じて五陰の行苦の無常を觀じ、諸法の空を得」と。蓋し是れ人語にして、經論に關せず。若し當に聞慧は但生空を解すべくんば、法空寂の聞、竟に何れの處にか在る。若し當に思慧は法を壞して、以て衆生空を成すべくんば、法空寂の思、復何れの處にか在る。若し修慧地は唯法空を解せば、生空寂の修、復何れの處にか在る。二空の理は皆初の聞に藉り、次に思、後に修して、方に能く悟入す。而るに生空は但聞慧有りて修慧無く、空は修有りて聞思無しと言はば、豈謬妄に非ずや。當に知るべし、聞慧は具に二空を聞き、思慧地の中には具に二空を見、修慧地の中には具に二空を見て、偏取するを得ざることを。大乘法の中の位分不定なり。始に據りて言を爲さば、習種の中に教に依りて悟解すれば、聞慧を成就す。故に『華嚴』の中に宣說すらく、「十住は所聞の法に隨つて、即ち自ら聞解す」と。性種位の中には詮を捨て義を得れば、思慧を成就す。解行已上には、出道を修習して修慧を成就す。次に勝を以て論ずれば、種性地の中には、出世道に於ては、但聞知す可く、未だ思量する能はざれば、同じく聞慧と爲す。解行位の中には能く出道を觀ずれば、判じて思慧と爲す。初地已上には正行漸く増せば、判じて修慧と爲す。次に上を以て論ずれば、習種性種は直爾り。出世の種子を成就し、未だ方便して出道に趣入する能はざれば、三慧俱に無し。解行位の中には能く方便を起して出道に趣入し、出世の法に於て能く聞し能く思して、聞、思慧を具す。故に『地持』の中

【三五】次に第四に三界に就いて論ず【雑心】第九、十。

【成實】第二十三慧品。【論】成實論第七覺觀品。又大智論第十七亦之に同じ【彼】成實論第二十。

に説かく、「解行地に聞慧、思慧、思惟を具足す」と。初地已上に正行を發起するを、説いて修慧と爲す。極上以て論ずれば、一切地前に教行を成就するを、同く聞慧と爲す。初地の中に始めて觀じて如に入るを、判じて思惟と爲す。二地已上に證心轉た増するを、判じて修慧と爲す。位別是の如し。此三門竟る。

次に界に就いて論ず。界とは、謂はく、欲、色、無色界等なり。『雑心』の中に説かく、「聞慧は周りて欲、色兩界に在りて、無色に通ぜず。無色は無形にして聽受すること能はず。是故に聞無し。思慧は周りて欲界地の中に在りて、上界には則ち無し」と。『何が故に是の如くなる。』『上界の報は靜なり。思量を斂すれば、則ち禪定修慧と相應す。故に思慧無し。』問うて曰はく、『上界に若し思慧無くんば、應に覺觀無かるべし。』釋して言はく、『上界所々の覺觀は、修慧の所攝なり。故に定有ることを得。修慧は周りて色、無色界に在りて、欲地に通ぜず。一切の禪定は修慧の攝なるが故に、上界に修有り。欲界に定無し。故に修慧無し。』瞿沙の所説は、「聞、思は前に同じ。修慧の一種は遍く三界に通ず」と。彼は欲界に禪定有りと言くが故に。成實所立の聞慧は上の如し。思慧は不定なり。隨教の思は周りて欲、色に在り、推義の思は遍く三界に通ず。『此れ云何が知る。』論に覺觀を解して、龜思を覺と名け、細思を觀と名く。彼は「覺觀は三界に皆有り」と説く。明に知る、遍く通ずることを。修は三界に通ず。彼に「欲界に電光定有り」と説く。明けし、修は下に通ずること。大乘は三慧並に三界に通ず。何が故に是の如くなる。』菩薩は無色界の中に

【大品】 大智論第二十

【三】 第五に人に就いて論ず。

【三】 淨法聚第十 六段に三種般若の義を明す。先づ初に文字般若を明す

在りと雖も、能く佛所に來りて正法を聽受し、又陀羅尼を聞持するを得。故に具に一切の諸佛の教法を受く。是故に聞通ず。菩薩、常に思す。是故に思通ず。『大品』に宣説す、「欲界に定有り」と。是故に修通ず。『通別是の如し。』此四門

次に人に就いて論ず。人とは、謂はく、聲聞、緣覺、菩薩なり。通じて之を論ずれば、人人皆具す。中に於て別して分たば、聲聞の人は、教を聞いて悟道して聞慧を成就す。是故に、當相に説いて緣覺と爲す。緣覺は深く十二緣の義を思して、思慧を成就す。是故に當相に説いて緣覺と爲す。緣とは是れ義なり。覺とは謂はく思なり。菩薩は善く俱利の道を修し、修慧を成就す。是故に、當相に説いて菩薩と爲す。菩薩、此には翻じて道衆生と名く。自利利他の道を修するを以ての故に。三慧是の如し。

三種般若の義

三種の般若は『大智論』に出づ。般若と言ふは是れ外國の語、此には翻じて慧と名く。

法に於て觀達す、之を目けて慧と爲す。慧の義不同なり。一門に三を説く。『三の名はれ何ぞ。』一には文字般若、二には觀照般若、三には實相般若なり。此三種の中に、觀照の一

種は是れ般若の體、文字實相は是れ般若の法、法、體合して説くが故に三種有り。文字と

言ふは、謂ゆる「般若波羅蜜經」は此れ般若に非ず。能く般若を詮す。故に般若と名く。

『涅槃經』の如きは能く涅槃を詮す。故に涅槃と爲す。此も亦是の如し。又此文字能く般若

を明す。先づ初に文字般若を明す

【觀照と等】次に觀照般若を明す。

【龍樹の等】大智論第三十一。

を生ずるを、亦般若と名く。食は命を生ずれば、食を説いて命と爲すが如し。觀照と言ふは、慧心鑒達を名けて觀照と爲す。即ち此觀照は體是れ般若なれば、觀照般若と名く。眼は是れ目なれば、名けて眼目と爲すが如し。中に於て具に辨ずれば、開合不定なり。總じては唯一智なり。或は分つて二と爲す。二に多門有り。一には境に約して二を分つ。謂はく、世諦智、第一義智なり。世諦智とは、一切種と名く。世法の中に於て種別の智なるが故に、第一義智を一切智と名く。一切の諸法の如を知るを以ての故に。二には眞妄分別す。六七識中の緣照分別は、是れ其眞智なり。第八識中の體照の慧は、是れ其眞智なり。『是義云何。』如來藏の中の恒沙の佛法は、心事を集成す。是心性は淨くとも、而も客塵煩惱の爲に染せられて、不淨に相似たり。後に妄染を息めて、淨相始めて顯る。淨識を顯し普く法界を照すを、説いて眞智と爲す。三には大小二を分つ。方便の觀解は緣に彼此を別にして、想を滅して普く一切を照すこと能はず。之を名けて小と爲す。故に龍樹云はく、『十八空觀を小智慧と名く』と。滅觀般若は其緣想を絶して、普く一切の法界を照す。之を名けて大と爲す。故に龍樹言はく、『般若波羅蜜は、是れ大智慧なり』と。或は分つて三と爲す。三に多門有り。一には入を觀じて三を分つ。謂はく、聞、思、修。二には境に約して三を分つ。謂はく、世諦智、第一義智、及び實諦智なり。三には義に隨つて三を分つ。謂はく、清淨智、一切智、無礙智なり。義は後に釋するが如し。四には人に隨つて三を分つ。一に一切智は二乘の所得、二に道種智は菩薩の所得、三に一切種智は如來の所得なり。

亦後に釋するが如し。五に識に隨つて三を分つ。一には事識の中の分別の智、二には妄識
 の中の分別の智、三には眞識の中の分別の智なり。或は分つて四と爲す。謂はく、聞、思、
 修、證なり。或は分つて五と爲す。一には聞、二には思、三には修、四には報生識智、變
 易の聖人、報無漏の心生じて便ち法を見るを、報生智と名く。此四は是れ妄なり。五には
 是れ證智、謂はく、眞識の中の無分別の慧なり。或は十一を分つ。謂ゆる十智及び如實智
 なり。此義、後の十一智の中に、具に廣く分別するが如し。廣すれば則ち無量なり。問う
 て曰はく、『此觀照般若の體性云何。』龍樹の辨するが如くんば、人説不同なり。凡そ六
 種有り。第一家の説には、唯有漏の慧のみ是れ般若の體なり。『何が故に是の如くなる。』
 『小乗の中の如き、佛、道樹の下にして方に煩惱を斷ず。斯自り已前の所修の智慧を皆般若
 と名く。故に知る有漏なりと。』第二家の説には、無漏の聖慧は是れ般若の體なり。有漏は
 則ち非なり。見理の心を般若と名く。故に此説の如きは、小乘法の中に、佛最後身に修す
 る所の無漏は、方に便ち是れ般若なり。已前は悉く非なり。第三家の説には、初發心從
 り道樹に坐するに至るまで、修する所の智慧は、有漏及與び無漏を問ふこと莫く、悉く
 是れ般若なり。佛に至りては、轉じて薩波若智と名く。此説の如きは、般若は因に在りて
 果に通ぜず。第四家の説には、菩薩所修の一切の智慧をば、通じて有漏と名け、通じて無
 漏と名く。悉く是れ般若なり。論に自ら釋して言はく、『涅槃を觀じて佛道を行するを以
 ての故に、通じて無漏と名け、未だ結を斷じ盡さざるを、通じて有漏と名く』と。第五家

【實相と等】次に
實相般若を明す。

【地持】第二。

【涅槃】聖行品。

の説には、「菩薩慧の中に、無漏無爲は親見す可からざれば、無體の常智是れ般若の體なり。無常の緣智は一切悉く非なり」と。第六家の説には、「般若の體は取得す可からず。有に非ず、無に非ず、常に非ず、無常に非ず、空に非ず、實に非ず、陰界入に非ず。非有非無、無生無滅、無取無捨なり。猶火炎の嘗て觸る可からず、觸るれば則ち人を燒くが如し。般若も是の如し。取執す可からず。取れば皆破遺す。向前に取る所は、一切悉く非なり」と。問うて曰はく、「此門と前の第五と、何の差別か有る。」釋して言はく、「向前の第五門は、緣に従ひ方便して、修して生ずる眞智を般若の體と爲す。此は無始の佛性眞心、緣に従つて修顯するを説く。證を得て通じて望めば、從來の體の外畢竟して無緣なり。緣既に有にあらずれば、眞も亦對亡し。絶對眞心を説いて菩薩の般若の正體と爲す。餘は悉く非なり。」問うて曰はく、「此六、何者をか是と爲す。」一「論に兩判有り。一に言はく、皆是なり。諸の比丘の各彼此中間の義を説くが如き、佛の言はく、「皆是なり」と。此も亦是の如し。一に言はく、「第六に説く所の者是なり。前の五は皆般若の正體に非ず。故に説いて非と爲す」と。觀照是の如し。實相と言ふは、前の觀照所知の境界、諸法の實體、之を名けて實と爲す。實の體狀、之を目けて相と爲す。「何者か是なるや。」「閉合不定なり。總じて一實と爲し、或は分つて二と爲す。「地持」に説くが如し。一に事の法性は世諦の實なり。二に實の法性は眞諦の實なり」と。或は分つて三と爲す。「涅槃」に説くが如し。一に世諦、二には第一義諦、三には一實諦」と。或は分つて四と爲す。一に事實、陰界入等

【地持】 第二眞實 後品。

なり。二に法實、苦無常等なり。三には理實、空無我の義なり。四には性實、佛性眞法なり。又「地持」に四眞實の義を説く。亦是れ四眞實なり。一には世間所知、二には學所知、三には煩惱障淨、所行處法、四には智障淨、所行法なり。上に廣く辨ずるが如し。此諸法の中、通じて之を論ずれば、皆是れ實相なり。中に於て別して分たば、唯第一義を實相と名くるのみ。此實相は體般若に非ず。能く般若を生ず。故に般若と名く。色香等は體是れ欲に非ず。能く欲心を生ずれば、説いて五欲と爲すが如し。』問うて曰はく、『聖智は直實を知るのみに非ず。亦虛妄を知る。何が故に、所知を唯實相と名くるや。』釋して言はく、『聖人は如法にして知り、實を知り虚を知る。皆前の法に稱ふ。故に通じて實と名く。又實を知る時本妄無しと達す。故に唯實と言ふ。』問うて曰はく、『觀照即ち是れ般若にして、此三種俱に般若と名く。何が故に通じて觀照と名くることを得ざる。』釋して言はく、『亦得。但彼論の中に、般若を辨ぜんが爲に、文字、觀照、實相に之を別つ。是故に一種を偏に觀照と名く。若し復彼觀照門の中に就いて、以て其義を辨ずれば、亦説いて三種の觀と爲すことを得。一には文字觀照、二には般若觀照、三には實相觀照なり。義既に均齊し。偏に取ることを得ず。』三種般若、之を辨ずること略して爾り。

【三八】 淨法樂第十 七段に三智の義を辨ずるに兩門の分別あり、第一に辨相。

三智の義に兩門の分別有り。相を辨ず一。人に第一に相を辨ず。三智と言ふは、一には道種智、二には一切智、三には一切種智なり。

此三種は、『大智論』に出づ。道種智とは、一切の道に於て種別して知るを、道種智と名く。又一切の化衆生の道を知れば、道種智と名く。所知云何。一彼論の中に増數廣く辨するが如し。或は一道と説く。謂ゆる涅槃に趣向するの道なり。或は分つて二と爲す。二に多門有り。謂はく、善と惡と、世及び出世、有漏と無漏、見と修、有學と無學、無礙と解脱、向果と得果となり、是の如く量なり。具に辨す可からず。或は分つて三と爲す。三に亦多門有り。謂はく、三惡道及び三善道、人、天、涅槃、三乘の道、戒、定、智慧、見、修、無學、止觀及び捨、是の如く無量なり。或は分つて四と爲す。四に多門有り。謂ゆる凡夫、三乘の道、聲聞、緣覺、菩薩、佛道、四念、四懃、四如意等、是の如く無量なり。或は分つて五と爲す。五に亦多門有り。謂ゆる五趣、五度の觀門、凡夫、二乘、菩薩、佛道、是の如く無量なり。或は六或は七、乃至八萬四千の道法有り。是の如き等の道法の差別を知るを道種智と名く。一彼一切智は一切種智と何の差別有る。一を通じて釋せば是れ一なり。中に於て別して分たば、凡そ六種有り。一には總別分別、總相に法を知るを一切智と名け、別相に法を知るを一切種と名く。苦諦を知るが如きは是れ一切智なり。是苦を分別するに無量の種有るを一切種と名く。是の如き一切なり。二には通別分別、苦、無常、空無我等の諸法の通相を知るを、一切智と名け、五明等の諸法の別相を知るを一切種智と名く。三には空有分別、諸法の空を知るを一切智と名け、其種種の世諦の諸法を知るを一切種と名く。四には廣略分別、略して諸法を知るを一切智と名け、廣く諸法を知るを一

一切種智と名く。分段の因果對法を知るが如きを一切智と名け、分段變易の因果對治、一切皆知るを一切種智と名く。亦有人の如きは、一世界の事を知るを一切智と名け、一切世界中の事を知るを一切種智と名く。是の如きの一切なり。五には大小分別、小乘の知を一切智と名け、大乘の智を一切種と名く。六には因果分別、因中の智を一切智と名け、果中の智を一切種と名く。『問うて曰はく、『向前の道種智の中に、知法已に盡く。何んが別して一切智、及び一切種智を説くことを須ふる。』釋して言はく、『向前の道種智とは、直に道法を知る。自餘の一切の五明處等、空無我等、第一義法は彼所知に非ず。是を以て更に明す。』此一門

【三九】 第二に人に就いて論ず。中に四、一に人に隨つて別して分つ。【論】 大智論第廿七。

【二には等】 二に勝を簡んで劣に異にす。

【三には等】 三に大を簡んで小に異にす。

次に人に就いて論ず。人とは、謂はく、聲聞、菩薩、及び佛なり。約して此人に就いて義を別するに四有り。一には人に隨つて別して分つ。論の中に説くが如し。聲聞の人には一切智有り。能く總相に諸法を知るを以ての故に。又復聲聞は但能く通相に諸法を知りて、別に知ること能はず。又復能く略して諸法を知りて、廣く知ること能はず。是故に彼には一切智有りと説く。菩薩の人には道種智有り。能く一切の差別の道法を知りて、能く衆生を化するが故に。諸佛には其一切種智有り。能く別相に廣く法を知るを以ての故に。二には勝を簡びて劣に異にす。此門の中に於ては、下は上を兼ねず、上は下を兼ねることを得。此義を以ての故に、聲聞は唯一一切智有ることを得て、餘の二種無し。菩薩の人は道種智有りて一切智を兼ね、一切種無し。諸佛如來は三智を具足す。三には大を簡びて小に異にす。

【四には等】四に實に就いて通じて論ず。

【四〇】淨法聚第十八段に三量智の義を明すに三門の分別あり、第一に釋名。【地持】第三力種性品。【成實論】第九八種品。【現量と等】初に現量。

佛菩薩は大、聲聞は是れ小なり。小の中には、單に直一切智有り。大の中は爾らず。佛と菩薩とは、兼ねて三智を具す。四には實に就いて通じて論ず。聲聞の人は小分して三を具し、菩薩は漸く勝れ、諸佛は並に極む。三智是の如し。

三量智の義に三門の分別有り。名義を釋す一。相を辨ず二。位に就いて分別す三。

第一に名を釋す。三量の義は『相續解脫經』の中に出づ。慧心、法を取るに、各分限有り。故に名けて量と爲す。量別不同なり。一門に三を説く。一には是れ現量、二には是れ比量、三には是れ教量なり。『地持』『成實』にも亦此相有り。『地持』に説いて言はく、「現智、比智、及び師に従つて同じしく聞く」と。『成實論』に言はく、「見聞及び比は、猶此三のごとし」と。現量と言ふは、現に諸法を知るを、名けて現量と爲す。又現法を知るを、亦名けて現と爲す。中に於て分別すれば、其二種有り。一には事を知り、二には理を知る。事を知ると言ふは、隨つて何の時何の處の法の中に在りても、比度に因らず、他言を藉らずして能く知る者を、同じく現量と名く。事相は麤近にして、隨つて何の時何の處の中に在りても、能く現に知るが故に。理を知ると言ふは、毘曇法の中には、處に就いて分別す。欲界の法を知る、之を名けて現と爲す。何の義を以ての故に欲界の法を知るを、偏に名けて現と爲す。『毘婆沙』に云はく、「正決定を得ることは必ず欲界に在り。要す先に欲界の苦等を見て、後に上界を見る」と。良に欲界の法は、麤にして見易きを以ての故に先づ

【地持】第四。次に
比量。

之を見る。先に見て分了す。故に偏に現と名く。上界は爾らず。故に上界を知るを、名けて現と爲さず。又復行は、欲界の苦に於て二の現見有り。一には離欲現見。離欲の道を以て現に照知するが故に。二には自身現見。欲界の苦は、身現に覺するが故に。上界の苦に於ては但一種有り。離欲現見なり。身現に在らず、覺知せざるが故に。兩擔の物の如し。一は則ち自擔、二は人をして擔せしむ。自の所擔に於ては、二の現見有り。一には是物を知り、二には輕重を知る。欲界の苦を知るは、其狀此に似たり。他の所擔に於ては、但一種の物を知る現見有りて、輕重を知らず。上界も是の如し。欲界は其二現なるを以ての故に、偏に名けて現と爲す。上界は唯一なり。故に現と名けず。成實法の中には、時に約して分別す。彼現に二有り。一には修始に據る。見諦已前の現在の中の時に、假にして無性なりと觀す。之を名けて現と爲す。二には修成に據る。見諦已上の三世法の中に、現に空理を見るを、同じく名けて現と爲す。大乘には、通じて時處に就いて分別す。義釋に四有り。一には修始に據る。唯欲界の現在法の中に於て、諸法の如を見るを名けて現量と爲す。欲界の現法は觀察し易きが故に。二には修成。或は欲界に於て三世の如を見、或は三界に於て現在の如を見るを、同じく現量と名く。三には修成。自分の中に於て、現に三世の一切の法の如を見るを、悉く現量と名く。四には修成に據る。菩提に到る時、現に三世の一切の諸法を見るを、皆現量と名け、自分他分の別を簡ばす。故に『地持』に言はく、「諸佛如來、一切の法に於て現見覺す」と。現量是の如し。比量と言ふは、譬へば度して法

【數量と等】
教量。

次に

を知る、之を名けて比と爲す。中に於て分別するに、亦二種有り。一には事を知り、二には理を知る。事を知ると言ふは、隨つて何の時、何の處の法の中に在りても、比度して知るを、悉く比量と名く。理を知ると言ふは、毘曇法の中には、處に約して分別す。上二界の四諦の理を知るを、名けて比量と爲す。成實法の中には、時に約して分別す。見諦已前過未の法の中に、假無性と觀するを名けて比量と爲す。大乘には、通じて時處に就いて分別す。義釋に三有り。一には修次に據る。彼欲界現在の法の如を以て、他界他世の法の如に比知するを、名けて比量と爲す。二には修次に據る。或は欲界の三世の法の如を以て上二界を比し、或は三界の現在の法の如を以て過未を比知するを、名けて比量と爲す。三には修次に據る。自分の中の所知の、三界、三世の法の如を以て、他分の中の未所見の處、三界、三世の一切法の如を比するを、名けて比量と爲す。何の義を以ての故に修息を説かざるとならば、菩提に到る時、復比すること無きが故に。然るに此比量は、經の中に亦譬喩量と名く。通じて釋すれば是れ一なり。中に於て分別すれば、同類相比するを名けて比量と爲し、異類相比するを譬喩量と名く。教量と言ふは、法玄絶して自力知らざること有れば、教に藉つて以て通ずるを名けて教量と爲す。中に於て分別すれば、亦二種有り。一には事を知り、二には理を知る。世諦の中に於て、教に藉つて知る者を名けて事を知ると名く。二には諦の理の中に、教に藉つて知る者を名けて、理を知ると爲す。此教量を、法の中に亦信言量と名く。通じて釋すれば是れ一なり。中に於て分別すれば、法の自分に隣

り、言に藉つて入る者を信言量と名く。法大にして玄絶し、教に依つて知る者を名けて教量と爲す。有人此に就いて量を分ちて四と爲す。現量を一と爲し、比量を二と爲し、教量を三と爲し、信量を四と爲す。此も亦傷くること無し。但し經論に非ず。名義是の如し。

此一門

【四】第二に其相を辨ず。先づ比量を辨ず。

次に其相を辨ず。現量は知る可し。比量に三有り。一には同類相比す。相似の法、此を以て餘に比す。『百論』の中の如き、義別に三有り。一に殘の如しとは、人の海中に一滴の水を取りて之を嘗め、鹹きことを知るときは、則ち餘の者も一切皆鹹きことを知るが如し。亦有人の一法の中に於て、苦、無常、空、無我等を見て、餘も皆爾りと知るが如し。是の如きの一切なり。二に本の如しとは、人の先に會て火を見るに煙有り。後に餘の煙を見て、必ず火有りと知るが如し。亦有人の會て諸法無常を見るに、故に苦なり。後に法の苦を見て、必ず無常なりと知るが如し。是の如きの一切なり。三に共に相比知すとは、人の東從り西に至るを見るに行動有り。天上の日の東從り西に至るに類して、當に亦動くを知るべきが如し。亦有人の色の生滅を見るに、色の性は無常なり。後其餘の想、愛、行等を見るに生滅有り。故に性も亦無常なりとするが如し。是の如きの一切なり。此三をば合して同類比と爲す。二には劣を以て勝に比す。國に金無ければ、鎗を以て之に比するが如し。亦經の中に、世の虚空、不生、不滅を以て佛性に比況するが如し。是の如きの一切なり。三には勝を以て劣に比す。國に鎗無ければ、金を將て之に比するが如し。亦經の中に大涅

【經】南本涅槃經第十八梵行品。

【次に等】次に教
量の相を辨ず。

【三】第三に位に
就いて分つ。中に
二、一に始を開し
て終を合す。

繁（あ）の非有非無を以て王（あ）の殺罪（あ）に譬（あ）ふるが如し。是（あ）の如（あ）きの一切（あ）なり。此（あ）後の兩門（あ）は、通（あ）じて
釋（あ）すれば、亦是（あ）れ共に相（あ）比（あ）す。少分（あ）同じきが故（あ）に。比量（あ）是（あ）の如（あ）し。次に教量（あ）を辨（あ）ず。義別
に三有（あ）り。一に異時（あ）の法（あ）は教（あ）に藉（あ）つて以て知るとは、過未（あ）の法（あ）は現見（あ）せざるが故（あ）に、説（あ）に
因（あ）つて方（あ）に知るが如し。二に異處（あ）の法（あ）は教（あ）に藉（あ）つて知るとは、他方（あ）の事は現見（あ）せざるが故（あ）に、
に、説（あ）に因（あ）つて乃ち知るが如し。三に同時同處（あ）の法（あ）は教（あ）に藉（あ）つて以て知るとは、身中（あ）の如
來（あ）の性等（あ）を説（あ）くが如し。教量（あ）是（あ）の如し。此（あ）教量中（あ）の所知不定（あ）なり。或は深勝（あ）の法（あ）、教（あ）に藉
つて方（あ）に知るとは、彼佛性（あ）、涅槃（あ）の道等（あ）の如し。或は中間（あ）の法（あ）、教（あ）に藉（あ）つて方（あ）に知るとは、
苦（あ）、集等（あ）の如し。或は曩淺（あ）の法（あ）、教（あ）に藉（あ）つて方（あ）に知るとは、世間（あ）の中（あ）の難識（あ）の事等（あ）の如し。
此二門

次に位（あ）に就（あ）いて別（あ）つ。位（あ）とは、謂（あ）はく、習種（あ）、性種（あ）、解行（あ）、十地（あ）、佛地（あ）なり。此位（あ）の中
に於て義（あ）を辨（あ）ずるに三有（あ）り。一には始（あ）を開（あ）して終（あ）を合（あ）す。習種（あ）を一（あ）と爲（あ）し、性種（あ）を二（あ）と爲（あ）
し、解行（あ）已上（あ）を合（あ）して第三（あ）と爲（あ）す。同じく如（あ）を觀（あ）ずるが故（あ）に。此門（あ）の中（あ）に於て、或は三位
を以て其（あ）に一法（あ）に望（あ）めて、以て三量（あ）を辨（あ）ず。謂（あ）ゆる解行已上（あ）所觀（あ）の法（あ）に望（あ）むるなり。習性
を彼（あ）に望（あ）めては、是れ其教量（あ）なり。彼（あ）に在（あ）りては玄絶（あ）す。教（あ）に藉（あ）つて知るが故（あ）に。性種（あ）を
彼（あ）に望（あ）めては、是れ其比量（あ）なり。位分相隣（あ）りて比知（あ）す可（あ）きが故（あ）に。解行已上（あ）を自（あ）の所得（あ）に
望（あ）めては、是れ其現量（あ）なり。現（あ）に證知（あ）するが故（あ）に。或は一位（あ）を以て別（あ）して三法（あ）に望（あ）め、以
て三量（あ）を辨（あ）ず。習種（あ）を還（あ）つて自（あ）の所證（あ）の法（あ）に望（あ）めては、是れ其現量（あ）なり。現（あ）に證知（あ）するが

【二には等】二に中間を開して初後を合す。
【地持】第一種性品。

【三には等】三に始を合して終を開す。

故に、性種地所證の法に望めては、是れ其比量なり。位分相隣りて比知す可きが故に。解行上所證の法に望めては、是れ其教量なり。法玄絶するが故に。向前の門の中には、教は浅く現は深し。此門の中に於ては、現は浅く教は深し。或は三位を以て、別して三法に望む。向前の三位自ら所得に望めては、皆是れ現量なり。是れ則ち現量は是れ深淺に通ず。二には中間を開して以て初後を合す。『地持』に説くが如し。習種、性種、之を合して一と爲す。種子同じきが故に。解行を二と爲し、初地已上を合して第三と爲す。同じく如を證するが故に。此門の中に於て、亦三位共に一法に望むことを得。初地上所證の法に望めては、性種の位の中には是れ其教量、解行は比量、地上は現量なり。亦一位別して三法に望むことを得。亦三位別して三法に望むことを得。上に類して知る可し。三には始を合して終を開す。種性、解行、之を合して一と爲す。信地同じきが故に。十地を二と爲し、佛地を三と爲す。此門の中に於て、亦三位共に一法に望むことを得。佛の所證に望むれば、地前を教と名く。相去ること玄絶し、教を信じて知るが故に。地上を比と名く。自の所得を以て上佛に比するが故に。佛地を現と名く。現に性を證するが故に。亦一位別して三法に望むことを得。地前還つて地前の法に望めては、是れ其現量なり。地上の法に望めては、是れ其比量なり。佛の所得に望めては、是れ其教量なり。玄絶するを以ての故に。亦三位別して三法に望むことを得。皆是れ現量なり。同じく現に見るが故に。三量是の如し。

【四三】淨法聚第十
九段に同相三義の
義を明すに兩門の
分別あり、第一に
釋名。
【地經論】第十。

同相三道の義に兩門分別有り。名を釋す一。
第一に名を釋す。同相三道は、

「地經論」に出づ。『名字是れ何ぞ。』一には是れ證道、二には是れ助道、三には不住道なり。證道と言ふは、證は是れ知得契會の義なり。心實性に冥して分別を亡じ平等に契會す。之を名けて證と爲す。助道と言ふは、助は是れ扶佐資順の義なり。諸度等の行、迭に相扶佐して菩提に資順す。故に助と名く。不住と言ふは、是れ離著の義なり。巧慧變遊し、行じて、偏在すること無し。故に不住と曰ふ。此三、通じて論すれば、皆法に依つて成ずるをもて、俱に應に證と名くべし。同く能く果を資くるをもて、並に應に助と名くべし。凡に超え聖に異なるをもて、齊く不住と名く。三門を別たんが爲に、隱顯名を異にす。等く三門を別たば、顯に隨つて受くるを證と目くるは、心體に據る。心は淨照にして、明かに得法の義顯なり。故に偏に證と名く。所證の如の中、果として資く可き無し。故に助と名けず。染淨相泯して、不住の義隱なり。故に不住と名けず。助は是れ行修資順の義強し。故に偏に助と名く。果の求む可きを見て、證如の義隱なり。故に證と名けず。有に背いて出を求むるは、不住の義微なり。故に不住と名けず。不住は巧慧離著の義顯なり。故に偏に不住と名く。染淨俱に遊びて、證如の義隱なり。故に證と名けず。染淨變隨して、偏に出を求めず。専ら果に向ふに非ず。故に助と名けず。此三種、淨地に通じて有り。之を名けて同と爲す。同行の體狀、之を名けて相と爲す。蓋

【地論】 第九。

是れ體相にして標相に非ず。同行虚通、之を日けて通と爲す。『問うて曰はく、『此三を
 名けて同相と爲し、見修無功を名けて別相と爲す。此證助等、別相有りや不や。見修等の
 中に同相有りや不や。』釋して言はく、『亦有り。』『何者か是なる。』『地經』の中の如き、
 三地已還を名けて世間と爲し、未だ法を證すること能はず、所修の諸行遠く出世を責くる
 を、判じて助道と爲す。第四地の中に初めて出世に入り、内に法を證すること、明なるを、
 判じて證道と爲す。五地已上に出世間を得て、後に能く世に隨ふを不住道と名く。故に『地
 經』の中に、五地已上に、方に始めて不住道勝を宣説す。此即ち是れ其證等の別相なり。
 菩薩見解は、地として有らざること無し。行修も亦然り。無功用の義も亦始終を該ぬ。故
 に『地論』に言はく、『初地従り來、分に隨つて行ずる所、功用を捨つ。故に染行と名けず』
 と。此即ち是れ其見等の同相なり。『若し爾らば俱に齊し。何が故に、證等を偏に同相と名
 け、見修無功を偏に別相と名くる。』釋して曰はく、『此言隱顯なるが故に爾り。』『等く隱
 顯ならば、何が故に證等を偏に同相と名くる。』『此れ成徳に據る。通じて義有ること顯な
 り。故に偏に同と名く。』『何が故に見等を偏に別と名くとならば、此れ修相に據る。解従
 り修を起し、修熟して功を捨す。階別相の顯なるが故に偏に別と名く。』何が故に證等は偏
 に成徳に據り、何が故に見等は偏に是れ修相なる。』釋して言はく、『同相三道の中には證
 行を主と爲し、助と不住とは證に依りて説く。故に是れ成徳なり。別相の三の中には見道
 を主と爲し、見従り修を起す。修は前の見に過ぐ。修の心久く純にして、方に無功を成す。』

【四】第二に體相、異相を擧ぐる中、初に證道の體に就いて。

【助道の體を明す】次に

【不住の體】三に不住道の體に就いて。

無功は修に過ぐ。漸次に相起るが故に説いて修と爲す。修相は階漸なり故に別相と名く。成徳は同時なり。故に同相と名く。一名義是の如し。此一門。

次に體相を辨ず。通じて説かば、皆眞心を用て體と爲す。中に於て別して分たば、差異無きに非ず。異相如何。證道の體とは是れ眞識の心なり。是心體の中に、一切の恆沙の佛法を具足す。謂ゆる法界、常樂我淨、智慧、三昧、解脫等の法なり。心を將て法を攝すれば、一心を出づること無し。法に隨つて心を分たば、心に法界微塵等の別心有り。彼法に於て同體照明にして、淨うして闇障無し。性は常淨と雖も、而も妄染の爲に、不淨に相似たり。後に對治を修して業累を息除すれば、本隠れたる淨心顯れて令徳を成ず。始めて淨徳を顯すは、其心性の内に法界を照らすが如し。故に説いて證と爲す。蓋し乃ち無分別の證にして、緣照に非ず。助道の體とは、謂ゆる有作六波羅蜜なり。是義云何。一向に對治を修して之を顯證する時、備に法界の一切の諸行を修し、行、眞心に熏するが故に、心中の眞徳をして集起せしむるを、説いて助道と爲す。不住の體とは、略して三種有り。一には觀解に就いて以て不住を明し、二には行修に據り、三には果徳に就く。觀解と言ふは、菩薩の觀法は、有に非ず無に非ず。非有と見るが故に有の邊に著せず、非無と見るが故に無の邊に著せず。有に於て、無に於て偏に住著せず。故に不住と名く。行修と言ふは、義別に三有り。一には證助相對して、以て不住を明す。證行は寂滅、助行は起作す。助けて常に證すれども、偏に作に住せず、證して常に助すれども、偏に寂に住せず。寂作俱

に遊びて偏に住著せず。故に不住と名く。二には偏に證に就て、以て不住を明す。實を證すれば、平等にして法として住す可き無し。故に不住と名く。故に『地論』の中に、如行道を名けて不住道と爲す。三には助に就いて以て不住を明す。中に於て三有り。一には自利利他の二行に分別す。菩薩は善く自利の行を修する故に凡夫に住せず、利他を修するが故に二乘に住せず。故に不住と名く。二には自行の福智に就て以て明す。福は有に隨つて生じ、智は無に依つて成ず。福を修するを以ての故に無に住せず、智を修するを以ての故に有に著せず。故に不住と名く。三には應に諸行に就いて、以て不住を明すべし。一の施の中の如き、施者、受者、財物、及與び果報を見ざれば有に著せず。常に三事に依つて布施を行すれば、無に住せず。故に不住と名く。施の如き、既に然り。諸行も齊く爾り。此後の三門を助の中の不住の義と爲す。前には證、助に就いて以て不住を明し、次には偏に證に就き、後には偏に助に就く。合して第二の行修不住と爲す。第三門の中に、果徳に就いて不住を明すと云ふは、謂はく、諸佛如來、大涅槃を得れども世間を捨てず。涅槃を得るが故に、生死有爲の法の中に住せず。世を捨てざるが故に、寂滅無爲の法の中に住せず。故に不住と名く。同相の三道、之を辨ずること隣爾り。

【四九】淨法聚第二
十段に別相三道の
義を明すに三門の
分別あり、先づ第
一に釋名。
【地經論】第十。

別相の三道は『地經論』に出づ。亦名けて位別の三道と爲すことを得。『名字是れ何ぞ』

別相三道の義に三門分別有り。相を辨ず三。位を定む二。

【四六】第二に位分を定む。

「一には見、二には修、三には無功用なり。初に見と言ふは、慧心推求して明白なるを見と名く。進習を修と名く。修心久く純に、任運に上昇して縁務を息むるを無功用と名く。此三種、諸地に不同なり。之を名けて別と爲す。別行の體狀、之を目けて相と爲す。即ち此三行虚通するを道と名く。此三分れて異なり。是故に亦位別の三道と名く。」名字是の如し。此一門（頁六）竟る。

【地論】第五。

次に位分を定む。實に據り通じて論ずれば、一切の位の中に、皆此三を具す。相に隨つて別して分たば、局りて出世に在り。出世に二有り。一には初地已上を名けて出世と爲し、二には地の相に隨つて、四地已上を方に出世と名く。初門の中に就いて大位開分すれば、初地は見道なり。故に『地論』に言はく、「諸の見縛は初地の中に於て、見道の時に斷ず」と。二地已上乃至七地は、是れ共修道、八地已上は無功用と名く。實を以て細に分たば見地に二種有り。一に縁見は解行の終心に在り。故に『地持』に言はく、「諸の見縛は解行の時斷ず」と。二に證見は初地の始心に在り。修道も亦二。一に習修は初地の滿心に在り。故

【地持】第七。

に『地持』の中に初地を宣説して、もつて淨心及び初修慧行と爲す。二に正修は二地已上に在り。無功用の中にも亦二種有り。一に習無功用は七地の中に在り。故に『地經』の中に宣説す。「七地に無功用を修す」と。二に成無功用は八地已上なり。無生忍と其義相似たり。

【地持】同前。

始めて無生を習することは七地の中に在り。無生を成ずることは八地上に在り。初門是の如し。第二門の中に大位開分すれば、第四地の中に初めて出世に入るを、名けて見道と爲

【仁王】受持品。
【地經】論第六、
五地等下は同論第
八、八地等下は同
第十。

【四七】第三に其相
を辨ず。

【地持】第七。

す。故に「仁王」中に、第四地を須陀洹と爲す。又「地經」に云はく、「身見を首と爲す。我人、衆生、陰、界、諸入、我慢の所起出沒等の事は、第四地の中に皆悉く遠離す。」五地已上を判じて修道と爲す。「八地已上を無功用と名く」と。實を以て細に分たば、見に二種有り。一には習見。三地の終心に在りて、一切の法は不生不滅因縁にして有と觀す。二には成見。四地の中に在りて、正く諸法の不生不滅を見る。修にも亦二行り。一には習修。四地の終心在りて、方便の中に發勤精進す。二には正修。五地上に在り。無功用の中の二種は上の如し。然れども經論の中に、地位、開合、進退、一に非ず。或は前を開して後を合し、或は後を開して前を合し、或は中間を開して以て前後を合す。今一門に據りて、且く此三を分つ。位別是の如し。此二門

（四七）次に其相を辨ず。見に二種有り。一には習見、謂はく、解行の中の學、如理を觀す。二には成見、謂はく、初地の中に眞觀現前す。成の中に二有り。一には自分、始めて初地に入りて、自の所證の無我法の中に於て、證照分明なり。二には勝進、謂はく、初地の中に、二地上の行修得失に於て善觀分明なること、初地の中、果に發趣する等の如し。修道も亦二あり。一には習修、謂はく、初地の中に諸の大願を發して、戒等を修行す。二には正修、謂はく、二地上に戒等を修行す。正の中に二有り。一には漸次修、二には頓修。漸修と言ふは、謂はく、二地上乃至六地に五行勝進す。五行と言ふは、「地持」に説くが如くんば、二地に戒を修し、三地に定を習し、四、五、六地に智慧を修習す。慧に三種

【論】 地持第九。

有り。一に道品相應の慧は四地の所修、二に二諦相應の慧は五地の所修、三に緣起相應の慧は六地の所學なり。此を以て前に通じて、合して五行と爲す。此五漸生するを漸次修と名く。頓修と言ふは、謂はく、第七地に、念念の中に於て、頓に一切菩提の分法を起す。無功用品中にも二種有り。一に習無功用品は、七地の中に在り。故に論に説いて言はく、「七地に無功用品を修習す」と。二に成就熟は、八地上に在り。成の中にも二種有り。一には自分、謂はく、八地の中に報行成熟す。二には勝進、謂はく、八地上法流水の中に諸佛勸發して、自然に無上菩提に趣向す。是勝進の中に、諸行備に起す。今地相に隨つて、略して三種を分つ。一には八地中に、淨土に化生して身業を成就す。二には九地中に、辨才、物を益して口業を成就す。三には十地の中に、深智業を得て意業を成就す。別相三道、之を辨ずること麤爾り。

【六八】 淨法聚第廿一段に三種住の義を明すに、二門の分別あり、第一に釋名。
【地持論】 第三。
【大智論】 第三。

三種住の義に兩門分別有り。名を釋す一。相を辨ず二。
三種住の義は、『地持論』に出づ。『大智論』の中に、亦具に分別す。依處を住と名く。住の義不同なり。一門に三を説く。『三の名是れ何ぞ。』一には是れ聖住、二には是れ梵住、三には是れ天住なり。聖住と言ふは、會正の解、之を名けて聖と爲す。聖は人の依爲り。故に聖住と名く。亦可。聖とは是れ其聖人なり。聖の所依處を名けて聖住と爲す。梵住と言ふは、淨行を梵と名く。梵は人の依爲れば名けて梵住と爲す。亦聖人欲を離るるを梵と

【咒】 第二に其相を辨ず。

名け、梵の所居の處を名けて梵住と爲す。天住と言ふは、八禪は天の法なり。故に名けて天と爲す。天は人の依爲れば名けて天住と爲すも亦可。聖人は是れ其淨天なり。天の所居の處を名けて天住と爲す。問うて曰はく、何が故に、人住、鬼畜住等と説かざる。釋して言はく、通じて説かば、理亦傷くること無し。勝れたるに非ざるを以ての故に、是中に論ぜず。名義是の如し。此一門。

【大智論】 第三。

次に其相を辨ず。問合不定なり。之を總すれば一と爲す。謂はく、七無上の中の一の住無上なり。或は分つて二と爲す。一には是れ世間、二には是れ出世なり。梵住、天住は是れ其世間、聖住の一種は是れ其出世なり。或は分つて三と爲す。三の名向の如し。中に於て辨釋すれば、略して三義有り。一には果に就いて分別す。『大智論』に説くが如くんば、欲界の六天を名けて天住と爲し、色、無色天を名けて梵住と爲す。欲を離るるを以ての故に。涅槃聖法を名けて聖住と爲す。二には因に就いて分別す。亦『大智論』に説くが如くんば、布施、持戒、禮拜等の善を名けて天住と爲す。能く欲界六天の果を得るが故に。四禪、四空、四無量等を名けて梵住と爲す。能く上界梵世の果を得るが故に。此色、無色を通じて、名けて梵と爲す。三三昧等を名けて聖住と爲す。三には行に就いて分別す。『地持』に説くが如くんば、八禪地定を名けて天住と爲す。其所依なるが故に。四無量心を名けて梵住と爲す。此四行を以て、一切の生に於て、過を離れて淨なるが故に。彼三三昧滅盡正受を名けて聖住と爲す。唯是れ聖人の依止する所なるが故に。此後の三住を涅槃に名けて

【地持】 第三。

【大智論】 第三。

【地持】 第三。

三行窟宅と爲す。猶是れ住所の義なり。或は分つて四と爲す。大智論に説くが如くんば、前の三の上に於て、一住を加へて、合して四と爲す。彼論に説くが如くんば、『首楞嚴』等の無量の三昧、及び佛の十力、四無所畏、不共法等、一切の佛法を通じて佛住と名く。或は十六を分つ。彼天住の中に八禪定有り。即ち以て八と爲す。梵の中に其四無量心有り。前に通じて十二なり。聖住に四有り。謂はく、三三昧と滅盡正受となり。前に通じて十六なり。『地持』に説くが如くんば、此十六の中に、四無上住に如來多く住す。天住の中には第四禪に住す。以下の三禪は、慧多く定少し。上の四空は、定多く慧少し。定慧均からず、用、心に稱はざるが故に多く住せず。唯第四禪は定慧均等にして、作用、心に稱ふ。是を以て多く住す。是故に如來、最初成道及び般涅槃に、皆四禪に依る。梵住の中には、多く大悲に住す。如來は常に有苦の衆生を念じ、大悲能く拔す。是故に多く住す。聖住の中には、多く空三昧門及び滅盡正受に住す。空三昧は離相の中に勝れ、滅盡正受は寂止極れり。是故に多く住す。義に隨つて廣く住を分たば無量なり。今一門に據りて且く三種を論す。三住是の如し。

大乘義章卷第十

大乘義章 卷第十一

遠法師撰

淨法聚四法の中、此卷に十九門有り。一には煖等の四心の義。二には人四依の義。三には法
淨法聚四行の義。七には四修定の義。八には四不壞淨の義。九には四堅の義。十には四種道の義。六
十一には四種善法の義。十二には四種味の義。十三には四德處の義。十四には四種求知の義。十五に
は四陀羅尼の義。十六には四無量の義。十七には四無礙
の義。十八には菩薩四無畏の義。十九には四攝の義。

一に煖等の四心は、中に於て曲には六門の分別有り。一には其名を釋す。二には體性を定む。五
には長短の分別。六に
は界に就いての分別。

【一】淨法聚第廿
二段に煖等の四心
の義を明すに六門
の分別あり、一に
釋名。

第一に、名を釋す。煖、頂及び忍并に世第一法は、是れ其名なり。言ふ所の煖とは、喻
に就いて名と爲す。無漏は火の如し。此諸の善根の學を理觀と爲す。彼火相を得る、之
を名けて煖と爲す。言ふ所の頂とは、亦喻に就いて名く。世の山の峯は之を謂つて頂と爲
すが如し。此善は是れ煖の上に在るが爲の故に、名けて頂と爲す。問うて曰はく、「煖等の
四品の善根次第の法を一にせば、頂は最極に非ず。何が故に頂と名くる。」釋して言はく、
「善根に動、不動有り。前の二は是れ動なり。退すべきを以ての故に。後の二は不動なり。
退すべからざるが故に。頂とは、是れ其動中の極なること、世の山峯分流の處の如し。故

に名けて頂と爲す。』問うて曰はく、『何ぞ不動の極を説いて、名けて頂と爲さざる。』『彼所受は其第一の名なるが故に。』問うて曰はく、『大小の徳位相並ぶ。龍樹の説くが如くんば、菩薩の初地は之を名けて頂と爲し、解行の終心を名けて頂墮と爲す。彼を將つて上に類するに、應に苦忍より去つて、方に名けて頂と爲すべし。今何が故に世間の善根を説いて、以て頂と爲すや。』釋して言はく、『頂の義は上下局まること無し。一切の所行分に隨つて前に過ぎたるを、皆頂と名くることを得。局ること無きを以ての故に。大小相類するに、大乘の世間にも亦頂の義有り、小乗の出世にも亦頂の義有り。俱に有るを以ての故に。彼龍樹の論は且く出世不退の位に就いて、説いて名けて頂と爲す。小乗には、彼世間善の中に就いて、退の窮まるを頂と名く。言ふ所の忍とは、當相を名と爲す。慧心法に安んずるが故に、名けて忍と爲す。通じて論すれば、四種俱に皆是れ忍なり。但此は是れ其不動の始め、安住の義顯なり。故に偏に忍と名く。世第一とは、顯勝の目なり。世間の中に於て、此善最上なるが故に、第一と云ふ。然るに此四種は『毘婆沙』の中には、名別に四有り。一には達分と名け、二には觀諦と名け、三には修治と名け、四には善根と名く。彼論に釋するが如し。達分と言ふは、出世の聖慧諦理を觀徹する、之を名けて達と爲す。此四善根は是れ彼性分なるが故に、達分と名く。觀諦と言ふは、念處以前に未だ諦理を觀ぜず。此煖等より上に、無常等の十六行法を以て四諦を觀察するが故に、觀諦と名く。修治と言ふは、聖道及び聖道の果を求むるが爲に身器を修治すること、世の農夫の子實を求む

【二】第二に四善根の體性を辨ず。中に二、一に心法の分別。

【二には等】次に有漏無漏に就いて分別す。

【三】第三に相を辨ずるに四門の別あり、一に境の不同に約す。

るが爲に淨田を修治するが如し。故に修治と曰ふ。善根と言ふは、聖道は是れ善、涅槃は善果にして、煖等の四種は是れ彼初基なるが故に、善根と名く。又此四種の調順を善と名け、能く聖道を生ずるが故に根と名く。名義是の如し。

【三】第二門の中に、具體性を辨ず。中に於て二有り。一には心法の分別なり。【毘曇】の如きに依らば、此四善根は慧に由るを體と名く。觀察する所に於て、四聖諦の慧なり。若し眷屬を論ずれば、則ち五陰の性なり。此慧相應して受數を受と爲し、想數を想と爲し、心王を識と爲し、餘數を行と爲し、定共の戒を以て色陰と爲す。若し【成實】に依らば、此四も亦是れ智慧の自性なり。前後の眷屬は唯行陰の攝なり。若し遠縁を説かば、亦五陰の性なり。二には有漏無漏に就いて分別す。【毘曇】の如きに依らば、一向に有漏なり。但能く結を伏して永く斷ぜざるが故に。又是れ聖慧の方便道なるが故に。成實法の中には、此四善根現に空理を見る。性は是れ無漏なり。相を雜ふるを以ての故に、亦有漏と名く。體性は是の如し。

【三】第三に、相を辨ず。中に於て四有り。一には境の不同に約す。二には觀心に別有り。三には生解等しからず。四には治障に異有り。境に約すと云ふは、【毘婆沙】に説くが如し。五陰の苦無常等を觀察する、之を名けて煖と爲す。三寶の功德を觀する、之を名けて頂と爲す。四眞諦を觀する、之を名けて忍と爲す。唯身の苦を觀するを、世第一の法と名く。理實には、此四同じく四諦を觀す。四別を分たんが爲に、且く言ふことを爲すのみ。此一門

【觀の別等】 二に
觀心の別。

觀の別と言ふは、此四種、同じく四諦を觀するに、觀心差降なり。故に四の別有り。是義云何。『毘曇』の如きに依らば、苦集滅道の界行を分別するに、三十二有り。界は、謂はく、三界なり。行とは、謂ゆる、苦無常等の十六聖行なり。欲界地の中に、十六行有り。上界も亦然り。上下通じて説くに、三十二有り。一一の行に於て、正しく能く觀察す、之を説いて煖と爲す。之を觀すること未だ明かならざるを、煖方便と名け、觀心分明なるを、煖成就と名く。煖法是の如し。一一の行に於て、心觀來去して以て漸く之を略して一心觀に至る、之を名けて頂と爲す。一心觀の前を名けて方便と爲し、一心觀の後を名けて成就と爲す。此頂心中、後漸く略すと雖も、四諦及び十六行に望めて、猶具觀と名け、名けて略と爲さず。然るに此成ずる處、各一心觀と後の忍の中の初觀と相似す。増上忍の第一法に似たるが如し。問うて曰はく、『善根は漸多を應に好しとすべし。何が故に略を須ふる。』釋して言はく、『始觀は多心重縁して、猶明了ならず。觀心後に純にして少縁なれば、即ち見る。是を以て之を滅す。頂法是の如し。次に忍法を辨す。彼上下三十二行に於ける、各の一心觀より、乃至彼欲界の苦の下の一に行に於て觀する來、之を説いて忍と爲す。此忍の中に就いて、具に三十二番の觀行有り。初め第一番に、一一の行の各の一心觀に於て、先に欲界の苦の下の一に行を觀じ、次に上の苦を觀じ、後に欲界の集の下の一に行を觀じ、次に上界の集乃至道を觀す。類して亦同じく然り。各四行觀なり。次に第二番に上界道の下、一行を略去して餘の者を觀察す。次に第三番に上界の道の下、二行を

【毘婆沙】 第四。

略去して餘の者を觀察す。是の如く漸去して、乃至最後に唯欲界の苦の下の一行を觀す。或は苦無常、或は空無我なり。初より乃至唯欲界の苦の下の二行を觀するを、忍方便と名け、唯一行を觀するを、忍成就と名く。向きの頂の中には、直に觀心を略し、今此忍の中には、心境俱に略す。問うて曰はく、『諦法は多觀應に好かるべし。何が故に略を須ふる。』

『毘婆沙』に云はく、『譬へば富人他の土に適かんと欲するに、財物廣多にして持去ること能はざるが故に、財を以て錢に易へ、猶錢多きを嫌ひ、轉以て金に易へ、猶金多きを患へば、金を以て轉多價の寶珠を買つて地土を持去るが如し。行者も是の如し。世間より出世の道に入らんと欲するに、先づ有漏の多相續の心を捨し、上忍を起す。唯一行を緣すれば、聖道に入ること易し』と。是以に之を略す。忍法是の如し。次に第一を辯ず。壇上忍の後に重ねて一心を起し、欲界の苦を緣す。唯一行を緣するを、世第一の法と名く。一心なるを以ての故に、更に方便成就の別無し。『毘婆沙』是の如し。『成實論』の中には直に云はく、『行者は無常の行を以て、五陰を觀察して泥洹の智を生ず。下を名けて煖と爲し、中を名けて頂を爲し、上を名けて忍と爲し、上上を名けて世第一法と爲す』と。四種の觀相の差別を明さず。今且く義をもて釋すれば、初煖の法の中には、先づ無常行を以て現在の果報の五陰は、皆定性無しと觀察す。此を以て比智するに、過末も亦然なり。次に現の集も亦但生滅して自性有ること無しと觀す。過末も亦然なり。次に現の滅は託待して立し、定性有ること無しと觀す。過末も亦然なり。後に現の道は無常生滅して、自性有る

【成實論】 第二、
四法目。

【生解の等】三に生解不等を明す。

【次に等】四に治障の異を明す。

【四】以下、第四に其開合の廣略を辨ず。
【毘婆沙】第四。

こと無しと觀ず。過未齊く兩なり。第二に頂の中に、先づ苦諦は因縁虛假にして、自性有ること無しと觀ず。此を以て比知するに、過未同じく然なり。集滅道の觀は、類して亦同じく兩なり。向前の觀は始なれば、苦無常生滅の法數を以て、分に法體を壞す。今の觀は轉勝して其因縁虛假の理を以て、法の無性を明す。第三に忍の中には、初に先づ總じて三世の諸法は虛假無性なりと觀ず。集滅道の觀は、類して亦同じく兩なり。向前の觀は始なれば、三世の別觀にして、今の觀は轉勝して三世の總觀なり。世第一の中には、總じて三世の四諦虛假なりと觀ず。此總觀は無相の中の總見法空の與の方便なるを以ての故に。觀の別是の如し。此二門生解の別とは、『毘婆沙』に説くが如し。煖の初は諦を緣じて能く下明を生じ、頂は中明を生じ、忍は上明を生ず。此身の中には、諦を緣ずること明なるを以ての故に、世第一法を生ず。此三門次に治障を明す。『毘婆沙』に説くが如し。煖の初は諦を緣じて能く上愚を止め、頂は中愚を止め、忍は下愚を止む。身中の是の如きの愚を止るを以ての故に、世第一法を生ず。顯相是の如し。此四門

(四)に、其開合の廣略を明す。此四善根は之を總すれば、唯一の遠分善根なり。或は分つて二と爲す。『毘婆沙』に説くが如し。一には動善根、二には不動なり。前の二は是れ動なり。退すべきを以ての故に。又復欲界の善を雜起するが故に。後の二は不動なり。退すべからざるが故に。又欲界の善を雜起せざるが故に。或は分つて三と爲す。『毘婆沙』に説くが如し。謂はく、不中上なり。煖を名けて下と爲し、頂を名けて中と爲し、忍及び第

一を説いて、以て上分と爲す。或は分つて四と爲す。煖を名けて下と爲し、頂を名けて中と爲し、忍を名けて上と爲し、世第一の法を名けて上上と爲す。或は九種を分つ。『毘婆娑』に説くが如し。煖法に三有り。謂ゆる、下下、下中、下上なり。頂法に三有り。謂ゆる、中下、中中、中上なり。忍法に二有り。謂はく、上下、上中なり。世第一法に其一種有り。謂ゆる、上上なり。又彼論の中に、更に一説有り。煖法に二有り。謂ゆる、下下及び與び下中なり。頂法に三有り。謂ゆる、下上、中下、中中なり。忍法に三有り。謂ゆる、中上、上下、上中なり。世第一法に其一種有り。謂ゆる上上なり。或は分つて十と爲す。前の三に各上中下の別有り。世第一の中には、其れ唯一品なり。前に通じて十なり。煖中の三とは、彼四諦三十二行を修するに、始の觀未だ見ず。之を名けて下と爲す。味見を中と爲し、明見を上と爲す。頂中の三とは、彼諸行多心觀の中に於て、初の略一の觀は之を名けて下と爲し、略二已後及び彼三十二行に至る各三心觀は、之を説いて中と爲し、各二心觀を説いて、以て上と爲す。忍中の三とは、初め三十二行の中に於て、各一心觀を之を名けて下と爲す。故に『毘婆娑』に云はく、「欲界の苦の行を觀するより、上界の道の行に至る三十二心は、是を下忍と名く」と。三十二行の中に於ける略一已後、乃至彼欲界の苦の下に於て、唯二行を觀する、是を中忍と名く。此中忍の中、極多は其三十一心有り。極少は二心有り。欲界の苦の下には唯一行を緣ず、是を上忍と名く。故に『毘婆娑』に云はく、「復一心を以て欲界の苦を觀するを、上忍と名くるなり」と。世第一の中には、唯一

【五】以下、第五に長短分別す。【毘婆沙】第四。

【六】以下、第六に三界に就いて分別す。【達摩多羅】ダルマトラータ(Dharmatrata)法救のこと。

心有り。更に多品無し。或は十八を分つ。瞿沙の説の如し。前の二善根は、之を名けて動と爲す。此動の中に就いて、品別に九有り。始め下下より乃ち上上に至る。此九品の中、煨に三品有り。頂中に六有り。後の二善根を名けて不動と爲す。此不動の中にも亦九品有り。始め下下より乃ち上上に至る。此九品の中、忍に八品有り。世第一の法は、唯一の上なり。前後合して説くが故に、十八有り。義に隨つて細分すれば、乃ち無量有り。開合是の如し。

第五門の中に、長短分別す。『毘婆沙』に説くが如し。煨頂の善根は一向に相續す。忍法の中には、或は是れ相續、或は是れ一念なり。中下の二忍は多念相續す。上品の忍は局つて唯一念なり。世第一の法も局つて唯一念なり。若し『成實』に依らば、煨等の四種は並に皆相續す。一念の心は具に四の眞諦を觀すること能はざるが故に。長短是の如し。

第六門の中に、界に就いて分別す。界は、謂はく、三界なり。論者不同にして、所説各異なり。若し尊者達摩多羅に依らば、煨等の善根は唯色界の攝なり。色界の中に遍緣の智有つて、能く上下の四聖諦を觀するを以ての故に、色界の善の中に動不動有り。動中の下なる者を説いて、名けて煨と爲し、上を名けて頂と爲す。不動の中の下を説いて、名けて忍と爲し、上を第一と名く。『何の義を以ての故に欲界の攝に非ざる。』『彼宗には欲界は一向に定無し。之に依つて修習して起すことを得ざるが故に。』何の義を以ての故に無色の攝に非ざる。『無色界の中には、遍緣の智無くして下の四聖諦を觀すること能はざるが故に、

【僧祇部】 大衆部のこと。

彼心微弱なり。是故に遍せず。尊者瞿沙の説は、此娑等は是れ其欲界及び色界の攝なり。無色界に非ず。彼説は欲界にも亦禪定有り。依つて修起すべきが故に、欲界の攝なり。色界は知るべし。欲界の攝なる者を、之を名けて動と爲し、動中の下なる者を説いて、名けて煖と爲し、上を名けて頂と爲す。色界の攝なる者を、名けて不動と爲し、不動の中の下を説いて、名けて忍と爲し、上を第一と名く。何の義を以ての故に、無色の攝に非ざる。』

『此は前に釋するが如し。僧祇部は是れ三界の攝なりと説く。彼の説は欲界に其禪定有り。之に依つて修起す。故に欲界の攝なり。色界は知るべし。無色の上は能く具に四攝を觀す。故に無色の攝なり。是の如く、説く者は無色定に依つて、上見道に入る。成實論家は此後の説に同じ。煖等の四心之を略して爾云ふ。』

【七】 淨法聚第二十三段に人四依の義を明すに五門の分別あり。第一に釋名。

【業經】 南本第六。

人四依の義に五門分別あり。名義を釋す一。開合して相を辨ず二。侍佛の多少三。得義の多少四。所化の差別五。

人四依の義は、『涅槃經』に出づ。來世の惡伎之を稱して依と爲す。依の義不同なり。一。門に四を説く。四の名は是れ何ん。『人有つて世に出でて煩惱性を具するは、是れ其第一なり。須陀、斯陀は是れ其第二、阿那含の人は是れ其第三、阿羅漢の人は是れ其第四なり。人有つて世に出でて煩惱を具するとは、謂ゆる、地前の種性解行内凡の人なり。如來の滅後に現化在る時を名けて出世と爲し、初地上の所離の二輪に於て、未だ剪除すること能はざるを具煩惱と名く。問うて曰はく、『何んが知る、此れ地前なることを。』經に自ら

【七方便】 三賢四善根。

【地持】 第一。

【涅槃】 同四依品

【須陀洹】 スローターバンナ (Srotāpanna)

【斯陀含】 サクリダーカーミン (Sakṛdagāmin)

説いて言はく、「是を凡夫と名く。第八人に非ず」と。明けし、地前に在ることを。」「何者か第八は、之に對して非と説くや。」「毘婆沙」に依らば、須陀洹を名けてもて第八と爲す。見道の前の七方便に對するが故に。故に彼論の中に問うて言はく、「何者か是れ第八人なる。謂ゆる、信堅及與び法堅なり。鈍根の人見諦道に入るを、名けて信堅と爲し、利根の人見諦道に入るを、名けて法堅と爲す」と。問うて曰はく、「地持」には、種性の人は一障清淨と説く。何が故に「涅槃」には具煩惱と説くや。」「所望不同なるが故に、説に異有り。」「地持」は聲聞緣覺に約對して、種性の菩薩五住齊斷するが故に、清淨と名く。」「涅槃」は初地已上の所斷の二輪に約對して、地前の未斷を具煩惱と名く。問うて曰はく、「是中依の徳を辨ぜんが爲に、應に無惱と説くべし。何が故に具を説くや。」「後に別せんが爲の故に。須陀洹とは、此翻に三有り。一には修習無漏と名け、二には逆生死流と名け、三には無債と名く。聖解漸く進むを修無漏と名け、三塗の苦報違して順ぜざるを逆生死と名け、拒んで受けざるが故に無債と云ふ。」「位は何れの處にか在る。」「分別に三有り。一には守果、初地の終心在り。二には攝因、初地の始心より已去通じて須陀と名く。三には進向、上二地を盡すを、通じて須陀と名く。斯陀含とは、此に住薄と名く。能く修惑を薄するを、斯陀含と名く。小乘の中の如きは、偏に欲界九品の修惑に於て、能く六品を薄す。大乘法の中には、通じて三界の一切の修惑に於て、齊く能く之を薄す。」「地經」に説くが如し。」「位は何れの處にか在る。」「分別に三有り。一には守果、第三地に在り。故に經の中に

【經】 涅槃經四依

【阿那含】 アナーガマン (Anāgāmin)

【經】 涅槃經四相

宣説すらく、「三地に一切の欲縛、色無色縛及び無明縛は、皆悉く微盡す」と。能薄を以ての故に、斯陀含と名く。二には攝囚、二地已上を通じて斯陀と名く。三には進向、上七地を盡すを、通じて斯陀と名く。那含果未だ成就せざるを以ての故に。何が故に、須陀斯陀の人を合して一依と爲すや。「釋に三義有り。一には得義同じきが故に、之を合して一と爲す。經の中に説くが如し、「一切の義に於て、十六分の中十二分を得」と。十六分の義は、後に當に更に論すべし。二には功用同じきが故に、合して一依と爲す。始め初地より乃至七地の所修の諸行は、功用同じきが故に。三には化用同じきが故に、合して一依と爲す。始め初地より乃至七地に至るまでは所化の生に隨つて、作意して攝取し、自然無分別に化すること能はず。是故に之を合す。問うて曰はく、「若し爾らば八地已上は同じく無功用なり。何が故に合せざる。」得義別なるが故に。又復地位の間合不定なり。各一宜に據る。定んで責むべからず。經に説かく、「此人は未だ第二、第三の住處を得ず」と。四果の中に於て、須陀洹の人は未だ第二の斯陀の住處を得ず。斯陀含の人は未だ第三の那含の住處を得ず。阿那含とは、此に不還と名く。小乘法の中には、更に欲界に還來して身を受けざるを、阿那含と名く。又二十五有の中に於て、所過の處に隨つて、重ねて生を受けざれば、阿那含と名く。大乘法の中には、釋に兩義有り。一には重ねて愛を起さず、煩惱を拂ふが故に、不還と名く。二には重ねて欲界地の中の分段の殘報を受けざるが故に、不還と曰ふ。故に經に説いて言はく、「更に重ねて肉身、蟲身、不淨の身を受けざれば、阿那

【大品】 大智論第五十。

【阿羅漢】 アラハツト (Arhat)

【涅槃】 第六、四依品

舍と名く」と。設ひ更に生を受くるも、但是れ應化なり。位は何れの處にか在る。『分別三有り。一には守果、第八地に在り。八地の中に愛佛の心斷するを以ての故に、那含と名く。又七地は欲界の人天に還つて、分段の殘習猶するが故に、未だ盡きず。故に『大品』の中に宣説すらく、「七地は猶肉身有り。八地已上畢竟して永く離るるを、阿那含と名く」と。二には攝因、七地已上を同じく那含と名く。願忍を修習して那含に向ふが故に。三には進向、上九地を盡すを、同じく那含と名く。阿羅漢果未だ成せざるを以ての故に、判じて前に屬するなり。若し四依を分たば、此三の中に於て、守果、進向を説いて那含と爲し、攝因の一種を判じて斯陀に屬す。阿羅漢とは、此に不生と名け、亦無著と名く。小乘法の中には、三界の地に於て復身を受けされば、名けて不生と爲し、大乘法の中には、三界分段の殘報皆盡くるが故に、無生と曰ふ。設使之を受くれども、但是れ應化なり。六妙行を具して六塵に染せざるが故に、無著と云ふ。實を以て之を論ずれば、佛は是れ羅漢なり。此第四依は學の中究竟して高美なること佛に同じ。是故に之を説いて羅漢と爲すなり。『位は何れの處にか在る。』『分別三有り。一には守果、第九地に在り。故に『涅槃』に言はく、「阿羅漢とは、第十地に住す」と。二には攝因、九地已上を同じく羅漢と名く。三には進向、上金剛を盡すを、同じく羅漢と名く。若し四依を分たば、此三の中に於て守果、進向は、是れ阿羅漢なり。攝因の一種は判じて那含に屬す。問うて曰はく、「何が故に第二依の中に須陀洹の因は之を攝して、後に從つて第二依と爲し、此後の二依は因を分ち前に屬

【八】以下、第二に開合して相を辨ず。

するや。釋して言はく、「向前の第二依の中、須陀洹の因と須陀の果とは、同じく是れ出世なり。得の義相似す。是故に後に從つて第二依と爲す。後の二依の中、那含の因と前の斯陀とは、同じく此れ功用なり。得の義相似す。故に判じて前に屬す。類せざること斯に在り。此四種の人能く世間を越すること樂如來の如く、寧くして差別無し。問うて曰はく、「此人何れの時にか依と爲る。」釋して言はく、「實に依らば、時として爲さざること無し。今は化相に隨ひ、佛滅後に在つて正法を弘通し、依と爲すなり。」此一門。

次に第二門に、開合して相を辨ず。開合は不定なり。總じては一の依と爲す。或は分つて二と爲す。一には凡、二には聖なり。地前を凡と名け、地上を聖と名く。或は分つて三と爲す。此三の中に就いて、或は前を開し後を合す。種性を一と爲し、解行を二と爲し、地上を三と爲す。或は後を開し前を合す。地前を一と爲し、初地の見道を以て第二と爲し、二地已上の修道を三と爲す。又復地上の功用、無功用も亦二を分つことを得。或は離して四と爲す。此四の中に就いて、或は前を開し後を合す。習種を一と爲し、性種を二と爲し、解行を三と爲し、地上を四と爲す。或は後を開し前を合す。地前を一と爲し、見道を二と爲し、修道を三と爲し、無功を四と爲す。又向に説くが如く、地前を一と爲し、須陀、斯陀を以て第二と爲し、那含は第三、羅漢は第四なり。此も亦後を開して、以て前を合するなり。或は前後俱に開す。種性を一と爲し、解行を二と爲し、出世間の中の見道を三と爲す。

【地持】 第八地品

【地持】 第八。

し、修道を四と爲す。又出世の中の功用を三と爲し、無功を四と爲す。亦是れ俱闡なり。或は分つて五と爲す。此五の中に就いて、或は前を合し後を闡す。五忍に説くが如く、地前を一と爲し、初、二、三地の信忍を二と爲し、四、五、六地の順忍を三と爲し、七八、九地の無生を四と爲し、十地の寂忍を以て第五と爲す。或は前後俱に闡す。習種を一と爲し、性種を二と爲し、解行を三と爲し、初地の見道を以て第四と爲し、二地已上の修道を五と爲す。又復地前の種性を一と爲し、解行を二と爲し、見道を三と爲し、修道を四と爲し、無功を五と爲す。此五も亦是れ前後俱闡なり。或は分つて六と爲す。『地持』に説くが如く、種性を一と爲し、解行を二と爲し、淨心を三と爲し、二地已上乃至七地の行跡を四と爲し、八地、九地の決定を五と爲し、十地の畢竟を以て第六と爲す。『涅槃』の中に、六住の諸菩薩と爲す」と言ふが如きは、謂はく、此六なり。或は分つて七と爲す。『地持』に説くが如く、前の六の中に於て、決定地を闡して、之を以て二と爲し、即ち七地と爲す。彼論の八地を決定地と名け、九地を名けて決定行地と爲す。或は分つて八と爲す。前の七の中に就いて、習種性種各別に一と爲す。即ち是れ八なり。或は分つて九と爲す。地前を一と爲し、出世間の中の四、五、六地を合して正見と爲し、餘を各一と爲し、通じて九と爲すなり。或は分つて十と爲す。前の九の中に就いて、種性解行を分つて二種と爲す。即ち是れ十なり。或は十一を分つ。地前を一と爲し、十地を十と爲す。或は十二を分つ。地前の種性解行を二と爲し、十地を十と爲す。或は十三を分つ。習種を一と爲し、性

種を二と爲し、解行を三と爲し、十地を十と爲す。或は四十を分つ。謂ゆる、十住、十行、十廻向、及興び十地なり。若し等覺を分たば、四十一有り。廣は則ち無量なり。此等の開合は、各且く是れ一宜なり。今は一門に據つて、且く分つて四と爲す。開合是の如し。此二門竟る。

【九】以下、第三に四依の侍佛の多少を辨ず。【涅槃】南本第六四依品。

【二〇】以下、第四に四依の得義の多少を辨ず。

次に第三門に、四依の侍佛の多少を辨明す。『涅槃』に説くが如く、第一依の人は、五恆河沙佛の所に於て發心し、能く禁戒を持し、善く文義を解し、能く他の爲に説く。惡世の中に於て、正法を謗らざるが故に、依と爲るに堪へたり。第二依の人は、六恆河沙佛の所に於て發心し、具に衆善を修し、能く正法を持し、他の爲に説く。惡世の中に於て、正法を謗らざるが故に、能く十方に於て、周旋往返して衆生を濟度し、惡世の中に於て、建て、廣く他の爲に説く。能く十方に於て、周旋往返して衆生を濟度し、惡世の中に於て、正法を謗らざる。第四依の人は、八恆河沙佛の所に於て發心し、諸の煩惱を斷じ、重擔を捨し、己利を速得し、所作已に辨じ、佛道を成ぜんと欲して即ち能く現成し、人の所樂に隨つて悉く能く化を現じ、自在智を得て、廣く他の爲に説く。此三門(二〇)次に第四門に、四依の得義の多少を辨明す。『涅槃』に説くが如く、一切の諸義統て之を攝して十六分と爲す。一慈を説くが如き、十六分と爲す。是の如き等なり。此十六の中、第一依の人は八分の義を得、第二依は餘の八分の中復人四分を得。前に通じて十二なり。第三依の人は餘の四分の中復兩分を得。前に通じて十四なり。第四依の人は具に十六を得。

【經】 十地論第三

實に據つて之を論ずれば、第四依の人は餘の二分の中、但一分を得。前に通じて十五なり。諸佛は方に十六分の義を得。第四依は位、佛境に隣り、高美なること佛に同じきを以ての故に、具に十六分を得と説くなり。又第四依は佛所得の第十六分に於て、未だ窮證せずといへど、觀解相應するが故に、具に得と説く。問うて曰はく、「四依の初は劣後は勝なり。何が故に得義は、初は多にして後は少なる。」釋して言はく、「總義は浮淺にして知り易し。故に初は多を得、細義は精し難し。故に後は少を得、又復總義は証に隨つて相別なれば、少を多分と爲す。細義は實を説くに階降相微なれば、多を少分と爲す。分數少なりと雖も、其義實に廣し。」問うて曰はく、「若し總義知り易ければ初の處に多を得、細義精し難ければ後に少を得と言はば、何が故に經に「初地の菩薩は百三昧を得、二地は千を得、乃至十地は十不可説百千萬億那由他佛世界微塵數三昧、佛土廣數三昧を得」と言ふや。」釋して言はく、「義を辨ずるに、混く兩門有り。一には攝義從詮門の中に就いて、得の多少を明し、二には捨詮實門の中に就いて、得の多少を明す。詮門の中に從つて細分するに四有り。一には一証に約し、始終別論す。初は多義を得、後の時は少を得。從詮の義は具に文の中に顯る。初に聞成就を得るの時、文に依つて具に解するが故に、初は多を持得し、後には重思を設けて委密するのみにして、多の異見無きが故に、後に少を得。故に「涅槃一の中に、初依の菩薩は八分の義を得、第二依の人は更に四分を得、乃至第四は但兩分を得と。二には一証に約して、終を以て始を攝す。初の時は少を得、後の時は多を得。故に「涅槃一の

【二】以下、第五に四依所化の差別を明す。

【涅槃】南本第六四依品。

中に、初依は但八分の義を得、乃至第四は十六分を得と。三には多證に約して、始終別論す。初は少義を得、聞教少きが故に。終には多義を得、聞教多きが故に。故に第十地は能く諸佛の雲雨の說法を受け、其所聞に依つて亦多義を知る。四には多證に約して、終を以て始を攝す。初の時は少を得、後の時には多を得。義の在ること知るべし。其捨詮證實門の中に就いて細分するに二有り。一には始終別論す。初の時は少を得、教に對して心多かりを見ること味きが故に。終の時に多を得、能く詮を捨し、理を見ること明なるを以ての故に。二には終を以て始を攝す。初は少にして後が多なり。義の在ること知るべし。地經の所説は、是れ其捨詮證實の義なり。故に後に多を得。不同斯に在り。此四門（二一）次に第五門に、四依所化の差別を辨明す。三乘の人は是れ其所化なり。聲聞の人の中の所化に二有り。一には化して小に入らしむ。阿羅漢を除いて、餘は皆之を化す。彼阿羅漢は得果満足して、化を假らざるが故に。二には化して大に入らしむ。一切皆化す。乃至羅漢も亦四依に憑つて大乘に入るが故に。緣覺の人の中の所化にも亦二あり。一には化して大乘に入らしむ。緣覺の果を除いて餘は、皆之を化す。二には化して大に入らしむ。一切皆化す。大乘の人の中の所化に六有り。『涅槃』に説くが如し。一には初發心は外凡地に在つて最初に發意し、第二には已に熙連河沙の佛の所に於て發心し、法を聞いて初に謗らず。第三には已に一恆河沙の佛の所に於て發心し、法を聞き愛樂して謗らざること前に同じ。第四には已に二恆河沙の佛の所に於て發心し、法を聞いて受持す。餘德は上の如し。第五

には已に三恆河沙の佛の所に於て發心し、所聞の法に隨つて能く他の爲に説く。餘德は前の如し。第六には已に四恆河沙の佛の所に於て發心し、能く深義を解して、十六分の中已に一分を得。餘德は上の如し。六の中の初の一は善趣に隣入し、後の五は善趣の位の中に在り。四依是の如し。

【二三】淨法聚第二十四段に法四依の義を明すに五門の分別あり。第一に釋名。

法四依の義に五門分別あり。相を釋す一。相を辨ず二。次第三。四無礙に對して共に相收攝す四。人依に約對して可依不可依の義を辨明す五。
第一に、名を釋す。法を行之託と爲す。之を名けて依と爲す。依別不同なり。一門に四を説く。四名とは是れ何ぞ。一には依法不依人、二には法依義不依語、三には依了義經不依不了義經、四には依智不依識なり。依法と言ふは、法に兩義有り。一には軌則を法と名け、二には自體を法と名く。故に論に釋して言はく、「法は自體に名く」と。法に憑つて行を起すが故に、名けて依と爲す。不依人とは、宰用を人と名く。不依に二有り。一には自ら未だ法を見ざれば、邪僞乖法の人に依らざるを、不依人と名く。正見の人に依らずと謂ふには非ず。二には自ら已に法を見れば、一切言に依らず。依義とは、義に四種有り。一には所以を義と名け、二には義用を義と名け、三には義利を義と名け、四には徳義を義と名く。依は前の釋に同じ。不依語とは、詮談を語と曰ふ。不依に二有り。一には義を求むるの始は、顛倒乖義の語に依らず。如法の言に依らずと謂ふには非ず。二には義を得れば、詮を捨して一切依らず。依了經とは、法を顯するの詮を了義經と名く。之に憑つて實

【三】以下、第二に其相を辨ずるに就いて。
【涅槃】南本第六四依品。

【涅槃】同前。
【依義の等】次に依義の不同を明す

【地經】論第十一

【地持】第三無上菩提品。
【地持】第三力種性品。

【依了義等】次に依了義不依不了義經に就いて分別す

に趣くが故に、名けて依と爲す。不依不了經とは、邪を彰すの言を不了義と名く。棄てて從はざるが故に、不依と曰ふ。依智と言ふは、法を解して決する、之を名けて智と爲す。之に憑つて法を取るが故に、名けて依と爲す。不依識とは、關心の分別之を名けて識と爲す。捨てて從はざるが故に、不依と曰ふ。名義是の如し。此一刊

次に、其相を辨ず。依法の不同を、差別するに五有り。一には教法を法と名け、二には世諦の自體を法と名け、三には眞諦の自體を法と名く。故に『涅槃』に言はく、「法とは、謂はく、法性常恆にして不變なり」と。四には因行の自體、之を名けて法と爲す。又復因の中の起行の軌を、亦名けて法と爲す。謂ゆる、三十七道品等なり。五には果徳の自體、之を名けて法と爲す。故に『涅槃』に言はく、「法とは、謂ゆる、大般涅槃なり」と。依義

の不同に、亦五種有り。一には教法に對して、二諦を義と名く。二諦は並に是れ教下の所以なるが故に、名けて義と爲す。二には世諦の法に對して、眞諦を義と名く。眞諦は是れ彼世法の所以なるが故に、名けて義と爲す。三には眞諦の法に對して、世諦を義と名く。世諦は是れ彼眞が家の義用なるが故に、名けて義と爲す。又復世諦は眞諦を顯す所以なれば、亦名けて義と爲す。故に『地經』の中に、世の無常を知り無我の法を顯すを、義無礙と名く。四には因行人を利する、之を名けて義と爲す。故に『地持』の中に、彼善法を名

けて義饒益と爲す。五には果徳を義と名く。故に『地持』の中に、得菩提を名けて、もつて得義と爲す。依了義經不依不了義經とは、分別に二有り。一には大小の相對に就いて分別

【地持】 第六菩提品。

【依智等】 四に依智不依識について分別す。

【地持】 第六菩提品。

【涅槃】 北本第六如來性品、南本第六四依品。

す。或は小乘を了と名け、大乘は不了なり。小乘は曇顯なるが故に名けて了と爲し、大乘は秘密なるが故に不了と名く。或は大乘を了と名け、小乘は不了なり。大乘は實を顯せば、之を名けて了と爲し、小乘は實を覆へば、名けて不了と爲す。二には愚智の相對に約して分別す。正智法を取るは、大小皆了なり。法の淺深に隨つて、當に分了すべきが故に。愚心法を取るは、大小の所說一切不了なり。淺深相望めて互に相違するが故に。此一門は、『地持』に説くが如し。故に彼論に云はく、「如來の説に於て深信清淨にして、此法律に於て破壞すべからざるを了義經と名け、如來の説に於て不決定を作し、法律壞すべきを、名けて不了と爲す」と。言ふ所の依智不依識とは、分別に四有り。一には解惑を分別す。聞思修等の三慧の解心は、之を名けて智と爲し、惑心の分別を説いて、以て識と爲す。二には解心の明昧に就いて分別す。三慧の中、修慧の深明は、之を名けて智と爲し、聞思の闇昧を説いて、以て識と爲す。此一門は、『地持』に説くが如し。故に彼論に言はく、「修慧の智を用ひ、聞思を以て諸法の義を識るにあらざるを、名けて依智不依識と爲すなり」と。三には大小を分別す。大乘の三慧は法の實相を知れば、悉く名けて智と爲し、小乘の三慧は法の實を見ざれば、齊く名けて識と爲す。此一門は、『涅槃』に説くが如し。故に彼經に云はく、「若し如來は即ち是れ法身なりと知らば、是の如きの智慧は應に依止すべき所なり。聲聞は如來の功德を知らず。是の如きの識には、應に依止すべからず」と。四には眞妄を分別す。大乘の中に就いて、眞證を智と名く。實義を見るが故に。妄修の三慧は、

【地論】 第二。

悉く名けて識と爲す。此一門は、『地論』に説くが如し。故に彼論の中に宣説すらく、「地の實は唯智の境界なり。聞思修報生の識智は、彼境界に非ず。不同なるを以ての故に」と。體相是の如し。此二門

【四】 第三に其次第を辨ず、中に五、一に觀入の次第【戒實】 第二四法品。

第三門の中に、其次第を辨ず。經論不同にして、凡て五種有り。一には觀入の次第、成實に説くが如く、第一は法に依り、第二は義の經に依り、第三は義に依り、第四は智に依る。此等は其聞思修等に據つて、以て觀入を辨ず。四の中の初の二は是れ其教法にして、依つて聞慧を成ず。但聞の中に就いて、初は先づ人を簡去して、以て其法を取り、後に法の中に就いて、不了を簡去して其了義を取る。始終思なりと雖も、同じく聞慧を成ず。

【第二には等】 二に依體起用の次第【涅槃】 南本第六四依品。

第三に義に依るとは、是れ其理法にして、依つて思慧を成ず。聞に依つて思を起すが故に。次に之を明す。第四に智に依るとは、是れ其行法にして、依つて修慧を成ず。上人の智慧下の做習と爲るを、説いて行法と爲す。思に依つて修を起すが故に後に之を説く。第二に體に依つて用を起す次第、『涅槃』に説くが如し。第一に法に依るとは、謂はく、大涅槃なり。涅槃は果の體なり。是故に先に明す。第二に義に依るとは、謂ゆる、法身解脱般若なり。此は是れ果徳なり。體に依つて徳有るが故に、次に之を辨ず。第三に智に依るとは、謂ゆる、如來の一切種智なり。此は是れ果用なり。徳に依つて用を起す。是故に次に説く。第四に了義の經に依るとは、謂はく、佛所説の大乗經典は、智に依つて説を起す。是故に後に論ず。第三には果に據つて因を尋ぬる次第、『涅槃』に説くが如し。第一に義に

【第三には等】 三に據果尋因の次第【涅槃】 南本第六四依品。

【第四には等】四
に據深尋淺の次第

【第五には等】五
に攝法起修の次第
【地持】第六菩提
品。

依るとは、謂ゆる、法身解脱般若なり。第二に法に依るとは、謂ゆる、法性常恆にして不變なり。第三に智に依るとは、謂ゆる、僧は是れ常無爲にして不變なり。八種の不淨の物を畜へず。第四に了義の經に依るとは、謂ゆる、一切の大乘經典なり。此四の中に就いて、前の二は是れ果、後の二は是れ因なり。前の果の中に就いて、義は是れ果體なり。是れ故に先づ明す。果は法に依つて成するが故に、次に法を明す。後の因の中に就いて、智は是れ因體なり。是れ故に先づ明す。因は法に依つて成するが故に、次に其了義の經を明す。又義は是れ果、果は是れ所求なり。是れ故に先づ明す。果は理に依つて成するが故に、次に法を明す。此二は一對なり。向前の果徳は因に由つて起るが故に、次に智を明す。向前の理法は教に藉つて顯るが故に、後に其了義の經を明す。第四には深に據つて淺を尋ぬる次第、『維摩』に説くが如し。第一には義に依る。義は是れ理法なり。第二には智に依る。智は是れ理行なり。第三には了義の經に依る。經は是れ前の理法を顯すの詮なり。第四には法に依る。法は是れ前の智行を成するの軌なり。理は是れ所詮なるが故に、先に義を明す。義に依つて慧を成するが故に、次に智を明す、所求の義は詮に由るが故に顯る。故に次の第三に了義の經を明す。所成の智は法に依つて起るが故に、次の第四に其依法を明す。第五には法を攝し修を起すの次第、『地持』に説くが如し。第一には義に依る。義とは是れ理なり。第二には法に依る。法とは是れ教なり。第三に了義の經に依る。正く解して法を取るを、名けて了義と爲す。第四には智に依る。修慧義に違する、之を名けて智と爲す。

四の中の前の二は攝法の次第、後の兩種は起修の次第なり。攝法の中に就いて、義は能く行を成す。正しく是れ所求なるが故に、先に義を明す。義は教に由つて顯るが故に、次に法を明す。後の起修の中、義に隨つて相別分せば、初の了義經は前の教法に依つて聞思の解を起す。解法違ふこと無き、之を名けて了と爲す。故に論に釋して言はく、「深く佛説を信するを了義經と名く」と。後に智に依るとは、前の理義に依つて修慧の行を起す。故に論に釋して言はく、「修慧を用て智を名けて智に依ると爲す」と。通じて之を論ずれば、了義經とは、前の法義に依つて聞思の解を起す。智に依ると言ふは、前の法義に依つて修慧の行を起す。次第是の如し。此三門

【二五】第四に、四無礙に對して共に相收攝す。

次に第四門に、四無礙に對して、共に相收攝す。相に隨つて之を分たば、初に法に依るとは、是れ法無礙なり。第二に義に依るとは、是れ義無礙、第三に了義經に依るとは、是れ辭無礙なり。第四に智に依るとは、善く物心に達して説を起すこと自在なれば、樂説無礙と爲す。實を以て之を論ずれば、初に法に依るとは、是れ法無礙方便の道なり。第二に義に依るとは、是れ義無礙方便の道、第三に了義經に依るとは、是れ辭無礙樂説無礙方便の道、第四に智に依るとは、是れ其四種無礙の正體なり。故に「地持」の中に、第四に智に依るを、名けて修慧と爲す。修慧の中に就いて、四無礙を聞す。法の章句に於て、修慧謬らざるを、法無礙と名け、諸法の相に於て、修慧謬らざるを、義無礙と名け、法の名に於て、修慧謬らざるを、辭名無礙と名け、世俗の種種の名字に隨順して、修慧謬らざる

【地持】 第六菩提品。

【六】第五に人依に約對して可依不
可依の義を明す。
【涅槃】第六。

【七】淨法聚第廿
五段に四聖種の義
を明すに兩門の分
別あり。第一に辨
相。

を、樂説無礙と名く。此四門

第五門の中に、人依に約對して、可依不可依の義を辨明す。人依に四有り。上に説く所の如く、人法相從すれば、二俱に可依なり。人は即ち法なるが故に。依法の者も亦必ず人に依る。故に『涅槃』に云はく、「上の四人の如く、應當に依止すべし。法は即ち人なるが故に、依人の者も亦必ず法に依る」と。人法別して分たば、互に可依不可依の義有り。肉眼有る者は、人を可依と爲し、法は不可依なり。人能く教誨して、善惡を道ふことを樂むが故に、人は可依なり。法相辨じ難きが故に、法は依り回し。故に『涅槃』に云はく、「我肉眼の諸衆生等の爲に、人の四依を説く。終に慧眼有る者の爲にせず」と。慧眼有る者は、法を可依と爲し、人は不可依なり。慧眼有れば正しく法を見るを以ての故に。法は親く行を成ずるが故に、法は可依なり。人は是れ疎遠にして、親く行を成ぜざるが故に、人は依り回し。法四依の義、之を辨ずること略して爾なり。

四聖種の義に兩門分別あり。相を辨ず一。人に就いての分別二。

第一に、相を辨ず。四聖種とは、亦四依と名く。乞食等の法能く聖道を生ず。聖の與に種と爲るが故に、聖種と名く。起行の所憑なるが故に、復依と名く。依別不同なり。一門に四を説く。『四の名是れ何ぞ。』一には盡形乞食、二には盡形壽著黃掃衣、三には盡形壽樹下常坐、四には有病服陳棄藥なり。比丘の四種の惡欲を破せんが爲の故に、此四を

【初の等】先づ常
乞食に就いて明す
一に三門の分別あり
一に乞儀を明す。

説く。一には比丘、食の爲の惡欲を破して乞食を受け、二には比丘の衣服の惡欲を破して糞掃衣を受け、三には比丘の房舍臥具の惡欲を破して樹下坐を受け、四には比丘の湯藥の惡欲を破して陳棄藥を受く。初の乞食の中に、三門の分別あり。一には乞儀を明し、二には所爲を明し、三には食法を明す。乞儀と言ふは、十三種有り。一には正形に住して乞ふ。自ら安に禪らず、上人の法を得て乞食を行す。二には正威儀にして乞ふ。應器を執持し、進止安詳、被服齊整として乞食を行す。戒經に説くが如し。三には正命に住して乞ふ。終に詭曲せず。威儀を執持して、異相を現せず。己が善を禪らずして、乞食を行す。是の如きの一切なり。四には正見に住して乞ふ。乞食を取つて以て眞道と爲さず。若し乞食を取して眞道と爲さば、是れ戒取の攝なり。五には法に依つて乞ふ。非法の飲食は罪過を生ずる者、終に乞求せず。六には時に依つて乞ふ。要す中前に在つて餘時を得ず。故に「毘尼」の中に、迦留陀夷夜乞食を行じて、世の讒嫌を生ず。如來之を制す。七には處に依つて乞ふ。若し學處僧有らば、先づ爲に學家羯磨を作し、又惡人僧有らば、先づ爲に覆鉢羯磨を作す。乞に従ふことを得ず。八には次に依つて乞ふ。亦等乞と名く。貧富を簡ばずして、次等に等く乞ふ。命難梵行の難處有るを除く。又他人己が乞食に因つて罪過を生ずるを觀れば、終に乞に従はず。九に貪心を離れて乞ふ。乞求する所に於て、美饌を念せず。時に及んで早く得。又所乞に於て受求以て限り、分を過ぐることを得ず。十には取著を離れて乞ふ。『維摩』に説くが如し。乞食の時に於て、色を見ること盲の如く、聲を聞く

【次に等】二に所爲を明す。

こと響の如く、香を臭ぐこと風の如し。所食の味に於て、心に分別無く、觸を受くること證の如く、法を知ること幻の如し。十一には瞋惱を離れて乞ふ。「地持」に説くが如し。若し麤澁を得ば、留難時ならず。或は打罵を加ふるとも、瞋惱を生ぜず。方に破の所に於て、隣愆の心を起す。十二には麤曠ならずして乞ふ。軟言をもて食を乞ひ、終に麤曠ならず。亦強ひて乞はず。十三には慢心を離れて乞ふ。乞食の時に於て、若は貧賤を見て輕想を起さず、又亦時ならずして食を乞はば、慢を生ず。故に「遺教」に云はく、「當に自ら頭を摩し、已に飾好を捨て壞色の衣を著し、應器を執持して、以て乞ひて自活すべし。自ら見ることは是の如し。若し憍慢を起さば、當に自ら之を滅すべし。憍慢を増長するは、尙世俗白衣の所宜に非ず。何に況んや出家入道の人、解脫の爲の故に、自ら其身を降して乞を行するをや」と。此十三の中、初の四は一分にして、四正に住して乞ひ、次の四は一分にして、依の義に住して乞ひ、後の五は一分にして、煩惱を捨て乞ふ。乞の義是の如し。次に所爲を明す。所爲に二有り。一には自己の爲にして、身を資して道を行す。二には衆生の爲にして、施して福を得しむ。凡夫の乞食は但自己の爲にして、設ひ他の爲にする有れども、少にして言ふに足らず。聲聞緣覺は多く自己の爲にし、少しく他人の爲にす。菩薩の人の中には始行の者有つて、多く自身の爲にし、少しく他人の爲にす。次行の者は多く他人の爲にし、少しく自身の爲にす。上行の流は唯衆生の爲にす。法身の菩薩は假の所無きが故に。佛も亦是の如し。然るに佛は他の爲にすること二十事有り。「轉女身經」に説

くが如し。一には相好の身を示現して、物をして覘見せしめ、菩提心を發さしめんが爲なり。二には衆生をして佛身を覘見せしめ、盲者には色を見しめ、聾者には聲を聞かしめ、瞶者には能く言はしむ。是の如きの一切なり。三には乞食の故に、現に諸天龍鬼神等の所奉の供養を受け、人をして覘見せしめて菩提心を起さしむ。四には尊位を捨て、出家乞食して物の慢高を息め、菩提心を發さしむ。五には大徳諸天人等をして、佛の慈心物を懸んで乞食するを見て、佛を學して之を爲さしむ。六には衆生有つて如來を見んと欲すれども、懈怠を以ての故に、往いて佛を見ること能はず。其心を知つて現に乞食を行じ、彼をして覘見せしむ。七には衆生をして佛を見、法を聞いて愚癡を遠離し、漸く出世涅槃の因を増さしむ。八には衆生有つて牢獄に繋閉せられ、或は楚毒を受け、佛を見るに因るが故に、即ち解脱を得て菩提心を發す。故に乞食を行す。九には女人有つて佛を供養せんと欲すれども、而も父母親戚の爲に護せられて、奉獻すること能はず。佛之を受けんが爲の故に、乞食を行す。十には如來の鉢は四王の奉る所、佛持して食を乞ふ。若し衆生有つて少しく布施せんと欲すれば、少物即ち滿つ。多く施さんと欲する者は多物滿たず。欲休すれば乃ち滿つ。人をして覘見せしめ、菩提心を發さしむるが故に、乞食を行す。十一には如來の鉢中に成する所の食を一切の僧に施すに、終に増減無く、人をして覘見せしめ、菩提心を發さしむ。十二には如來の鉢の中には、百千種の食味を成す。味各別にして、和雜を發すること、猶別器の如く、人をして覘見せしめ、菩提心を發さしむ。十三には佛心は一

【次に等】 三に食法を辨ず。

合の體にして、其内容ならざることを實の金剛の如く、生熟にして大小の便利を藏するこ
と無し。食有ることを現すと雖も、而も入る者無く、釋梵等をして觀見し發心せしむ。十
四には人有つて佛に施す。若は多、若は小、若は麤、若は妙、福皆盡くること無く、乃ち
涅槃に至る。佛、是が爲の故に、現に乞食を行す。十五には如來常に定んで現に乞食を行
じ、人をして觀見せしめ、菩提心を發さしむ。十六には如來若し常に乞食を行ぜざれば、
人有つて之を學し、便ち常に飢餓癯瘦して力無く、過人の智慧を修得すること能はざるが
故に乞食を行す。十七には如來善く四聖種を攝するが故に、現に乞食を行す。十八には佛
若し乞はざれば、未來に不信の諸の長者等、比丘の乞ふを見て、便ち是言を作さん、「汝が
家の世尊は乞食を行ぜず。汝何が故に乞ふや」と。是言を破せんが爲の故に、乞食を行す。
十九には諸の豪貴有つて、佛に隨つて出家して乞食を取づるが故に、佛乞食を行じて、
彼をして之を學せしめ、羞恥を生ぜざらしむ。二十には如來根熟の衆生を度せんが爲に、
處處に隨逐するが故に、乞食を行す。所爲是の如し。次に食法を辨ず。所乞を得るに隨ひ、
自らの所食に於て、三分して一を留む。餘す所は淨處に著して衆生に施與す。食せんと欲
する所に隨つて、上諸佛に奉り、次に賢聖に獻じ、下衆生に施し、然る後に之を食す。
故に「維摩」に言はく、「一切及び衆の賢聖を供養し、然して後に食すべし」と。然も所
食に於て常に貪想を壞すべし。藥を瘠に塗り、飢世に子を食するが如し。味著を生ぜず、
復應に厭を生ずべし。是食の爲の故に、多く苦惱を致す。願くは法身を得て此食の過を離

【糞掃衣とは等】次に糞掃衣を明す。

【樹下坐等】三に樹下坐、四に服障棄藥を明す。

【二八】第二に人に就いて論ず。

れんと。食し已つて道を念じ、施主の恩を報ずべし。食法是の如し。糞掃衣とは、外國の法に死人の衣、火燒き鼠齧す、是の如き等の衣は、之を巷野に棄つ。事糞掃に同じければ、糞掃衣と名く。問うて曰はく、「何が故に飲食は乞ふを須ひ、衣は糞掃を受くる。」釋して言はく、「飲食は乞求して得易く、修道を妨ぐることに無きが故に、乞食を行じ、衣は乞ひて得難ければ、修道を妨げんことを懼る。是を以て乞はず。又外國の法に、糞掃の衣は求覓するに得易く、修道を妨ぐることに無きが故に、糞掃衣を受くるも、食は是の如くならず。是故に乞ふを須ふ。」樹下坐とは、樹能く陰覆し、事半舍に同じければ、造作を須ひず。事を省いて道を修す。是を以て之に依る。陳棄藥とは、謂ゆる、大便是病を除くこと得易く、修道を妨ぐることに無きが故に、病有るは之を服す。相を辨ずることは是の如し。此一門二八に、人に就いて論ず。此四は乃ち是れ出家の人の中、上行の所依なり。在家は積聚して此法を行ぜず。出家の人の中、義別に三有り。一には小を簡んで大に異にす。此中は唯是れ凡夫二乗の依憑する所にして、佛菩薩に非ず。何が故に是の如くなる。『凡夫、二乗は心行微劣なれば、此四に依仗して方に能く過を離る。諸佛菩薩は、法は如幻なりと知つて、常に五欲に處して、而も能く染せず、此の如きを假らず。故に『轉女身經』に云はく、「貧人の病には苦澁等の賤價の藥を服して、病苦を差やすことを得るが如し」と。聲聞も是の如し。四聖種頭陀の法を行じて、方に能く過を離る。帝王の病は上味の藥を服し、藥心に適するに仗つて所患除くことを得るが如し。菩薩も是の如し。五欲に在りと雖も、其

【六】淨法衆第廿六段に四親近行の義を明す。
【釋義】第二十六師子吼品。

種種の巧方便の行を以て衆患無きことを得れば、四依を假らず。二には因を簡んで果に異にす。此四は唯是れ凡夫、二乘、菩薩の所行なり。出家の菩薩も亦此四に依る。諸の過を離るるが故に。故に『地經』の中に宣說すらく、「菩薩は少欲頭陀等を修習するなり」と。此四法を以て聖種と名くるが故に、局つて唯因に在り。諸佛如來は、聖果已に滿じて此四を假らず。三には實に就いて通じて論ず。凡より佛に至るまで、皆此四を行す。故に『轉女身經』に云はく、「如來は善く四聖種を攝すなり」と。四聖種の義、之を略して爾云ふ。

四親近行の義。

四親行とは、『涅槃』に説くが如し。蓋し乃ち人を驗し、友を簡んで行するなり。人に附いて檢練するを、親近行と名く。近行不同なるも、略して四種有り。一には共住、二には久處、三には智慧、四には觀察なり。四が中の前之二は其身行を驗し、後の二は心を驗す。身心の中に、各難知易覺の別有り。故に四種有り。故に經に説いて言はく、「菴羅果の生熟分ち難きが如く、人も亦是の如く、善惡別ち難し。或は外相善くして内に誠實無く、或は内賢良にして外麤鄙を現じ、或は俱に相轉る。是の如き等の人は、遠く屬すれば明め難く、近く鑿すれば曉め易し。故に須く親近して之が得失を驗すべし。驗法は云何。」
「人有つて意に徳を訪ね、女に憑らんと欲するに、乍他人の善有つて依るべきを聞くと、未だ専ら信すべからず。直須く共に住して其虚實を檢すべし。若し別ち易き者は、

共に住して即ち知り、若し識り難き者は、加ふるに久處を以てして、乃ち美惡を知る。此は前に身を驗す。内心の善惡は、以て自ら觀難く、須く智慧を以て觀察して之を驗すべし。心は曉め難しと雖も、言に准じて意を度るに、事も亦知るべし。唯如來の三藏の教法に依つて言を驗し、意を取るを、名けて智慧と爲す。言、行を扶くる者は、此驗に即ち足り、言、行に乖く者は、加ふるに觀察を以てし聖教に依らず。直道理を以て其得失を測るを、名けて觀察と爲す。四親の義、略して辨ずること是の如し。

轉業四行の義。

【三】淨法聚第二十七段に轉業四行の義を明す中差別に八、先づ第一門【涅槃】第二十九師子吼品。

【聖慧……爲す】この十六字行か。【第二門の等】二に第二門。

轉業四行は、『涅槃』に説くが如し、『何等をか四と爲す。』『謂ゆる、身戒心慧を修習す。中』に於て差別するに、乃ち八門有り。一一の門の中、皆初には過を辨じ、後には翻じて徳を顯す。第一門の中に、五情を攝せざるを、不修身と名け、七支の淨戒を受持すること能はざるを、不修戒と名け、善く心を調せざるを、不修心と名け、聖行を修せざるを、不修慧と名く。聖慧を諦觀するを、名けて聖行と爲す。此に翻するを、身戒心慧を修すと名く。第二門の中には、清淨の戒體を具足すること能はざるを、不修身と名け、八種不淨の物を受畜するを、不修戒と名け、止擧捨の相を修習すること能はざるを、不修心と名け、梵行を修せざるを、不修慧と名く。四無量心を、名けて梵行と爲す。此を修すること知らざるを、不修慧と名く。又大無量は、慧を用て體と爲す。故に彼を修せざるを、不

【第三門の等】 次

修慧と名く。此に翻するを、身戒心慧を修すと名く。第三門の中には、身の身相、身數を觀すること能はず、色の色相、色數を觀すること能はず、非身色の中に身色の想を生じ、貧著して捨せざるを、不修身と名く。身根を身と名け、長短、大小、好惡等の根を名けて身相と爲し、眼耳鼻等を名けて身數と爲し、想受等の如きを名けて心數と爲し、色塵を色と名け、方圓、大小、好惡等の相を名けて色相と爲し、香味觸等を名けて色數と爲す。是の如きの一切なり。下戒、邊戒、自戒を受持するを、不修戒と名く。聲聞凡夫の戒を受持するを名けて下戒と爲し、身を苦めて度を求むるを名けて邊戒と爲し、自らの爲に他を捨するを名けて自戒と爲す。若は心散亂して自境を守らざるを、不修心と名く。自の境界とは、謂はく、四念處なり。他の境界とは、謂はく、五欲なり。惡業の中に於て善く心を護らざるを、不修慧と名く。此に翻するを、身戒心慧を修すと名く。第四門の中には、身の無常滅壞を觀すること能はず。愛著して捨せざるを、不修身と名く。此を無檀と名く。尸羅を具せざるを、不修戒と名け、禪那を具せざるを、不修心と名け、般若を具せざるを、不修慧と名く。此に翻するを、身戒心慧を修すると名く。第五門の中には、我我所に著して身常恆なりと謂ふを、不修身と名く。我我所に著するは是れ其身見にして、身常恆なりと謂ふは是れ其邊見なり。十惡業を作るを、不修戒と名け、十惡の中に於て心を修すること能はざるを、不修心と名け、善惡等の法を分別すること能はざるを、不修慧と名く。此に翻するを、身戒心慧を修すると名く。第六門の中には、我見を斷ぜざるを、不修身と名

【第四門の等】 次

【第五門の等】 次

【第六門の等】 次

【第七門の等】 次

【第八門の等】 次

け、戒取を斷ぜざるを、不修戒と名け、貧瞋を斷ぜざるを、不修心と名け、愚癡を斷ぜざるを、不修慧と名く。此に翻するを、身戒心慧を修すると名く。第七門の中には、身は猶怨賊の如く、常に須く將護すべく、護らざれば人を害することを觀すること能はざるを、不修身と名け、戒は是れ善梯搯の根本なり、道首なりと觀すること能はざるを、不修戒と名け、心は輕躁動轉して、捉へ難く調べ難く、一切の惡の本なりと難すること能はざるを、不修心と名け、智慧に大勢力有りと觀ぜざるを、不修慧と名く。此に翻するを、身戒心慧を修すると名く。第八門の中には、妄想もて一切の身相を分別するを、不修身と名け、戒相を分別するを、不修戒と名け、心相を分別するを、不修心と名け、慧相を分別するを、不修慧と名く。此に翻するを、身戒心慧を修すると名く。此に翻するを、善く修せざる者は輕轉じて重ならしむ。轉業の行略して辨ずること是の如し。

四修定の義。

四修定の義は『成實論』四修定品に、具に廣く分別するが如し。『四の名は是れ何ぞ。』

『一には現法樂、二には知見の爲にし、三には慧分別の爲にし、四には漏盡の爲にす。』現法樂とは『毘曇』の如きに依らば、初禪の善法を現法樂と名く。初禪の中に創めて欲樂に背くを以ての故に、偏に説いて現法樂と爲すなり。成實法の中には、二禪已上乃至非想を

【三】淨法聚第二十
八段に四修定の義を明す。
【成實論】第十四
【毘曇】六卷毘曇
第四。雜心論第八
【成實法】同論第
二。

【地持】

第五。

【成實】

同第十四十六。

【成實】

論第二。

現法樂と名く。初禪の中には、其覺觀散動の心有るを以ての故に、現樂と説かず。問うて曰はく、『二禪も亦喜動有り。何が故に之を説くや。』『論に言はく、『一禪には先づ覺觀を滅して、心を攝すること深きが故に、所以に説く』と。若し『地持』に依らば、一切の禪定通じて現樂と名く。』問うて曰はく、『亦後世の樂有り。何が故に偏に現法樂と説くや。』『成實』に釋して言はく、『近を以ての故に説く』と。現樂は近に在つて知り易く見易きが故に、偏に之を説く。又現の五欲の樂を破せんが爲の故に、現法樂と説く。又佛後身の樂を讚せざるが故に、偏に現樂と説く。又復世人、出家者は現に樂無しと謂ふが故に、佛現樂を説く。』問うて曰はく、『四修定は皆是れ現樂なり。何が故に、偏に初を説いて現樂と爲すや。』『四門を別たんが爲に、初に就いて言ふのみ。』知見の爲にすとは、『毘曇』の如きに依らば、生死を觀する慧を、名けて知見と爲す。成實法の中には、八除入、十一切入等を修する、之を名けて知と爲し、五神通等を説いて、以て見と爲す。推求成するが故に。慧分別とは、『毘曇』の如きに依らば、聞思修を得るを、慧分別と名く。成實法の中には、五陰の空を觀するを、慧分別と名け、聞思に通ぜず。漏盡の爲にすとは、有論師の説には、第四禪の九無礙道に依つて羅漢果を得るを、名けて漏盡と爲す。第四禪は漏を盡すこと勝れたるを以ての故に。毘曇法の中には、六地禪及び三無色に依つて羅漢果を得るを、名けて漏盡と爲す。成實法の中には、一切の聖人の假名を破壊して泥洹果を證するを、名けて漏盡と爲す。四修定の義、之を辨すること漏雨り。

【二】淨法衆第廿九段に四不壞淨の辨別あり。第一に

【成實】論第二法衆品。

四不壞淨の義に兩門分別あり。相を辨ず一。處に就いての分別二。

第一には、相を辨ず。「成實」の如きに依らば、四不壞淨は亦名けて四不壞信と爲すことを得。信心精純にして疑濁を離るるが故に、名けて淨と爲す。淨信堅固にして傾動すべからざるを、稱して不壞と曰ふ。是信不同なれば、一門に四を説く。「四の名は是れ何ぞ。」一には佛不壞淨、二には法不壞淨、三には僧不壞淨、四には戒不壞淨なり。「佛不壞」とは、佛所得の眞實法の中に於て、自ら小分を證して、仰いで佛徳に類して其殊勝を知るを、佛不壞淨と名く。故に「成實」に言はく、「自ら眞智を得、佛に於て決定して、佛は一切衆生の中の尊と知るを、佛不壞淨と名く」と。法不壞とは、自ら眞法を證して、法に於て決定するを、法不壞と名く。又眞智を得て、此眞智は殊勝微妙なりと信するを、亦信法と名く。故に「成實」に言はく、「此眞智を信するを、即ち信法と名く」と。僧不壞とは、自ら眞智を得て餘の聖衆に類し、一切の衆の中に於て勝れたるを知るを、僧不壞と名く。故に「成實」に言はく、「眞智を得る者は、一切衆の中に最も第一と爲すと信するを、信僧と名くるなり」と。戒不壞とは、「成實」に釋するが如く、聖所愛の戒を得て深心に惡を離し、是戒に因つて能く三寶を信じ、戒の大力を信することを知るを、戒不壞と名く。問うて曰はく、「三學常に相隨逐す。何の義を以ての故に、偏に信戒を説いて信定及與び信慧を説かざる。」釋して言はく、「實には通ず。初に就いて論を爲さば、偏に信戒と言ふ。又復三

【經心】 第八。

學隱顯して之を論ずれば、見諦道の中に三塗の惡を治して戒行成就し、修道の中に人天の愛を斷じて定行成就し、無學道の中に永く無明を絶ちて慧行成就す。此三道の中に、始に就いて信を彰す。是故に四が中に偏に信戒を言ふ。此四種は皆是れ信なるを以ての故に、通じて心淨と名く。若し「毘曇」に依らば、此四正しく不壞淨と名くることを得て説いて四を不壞信と爲すことを得ず。何が故に是の如くなる。『彼宗の所立には、前の三は是れ信、後の一は是れ戒にして、是れ信に非ざるが故に。唯彼義に依らば、信戒精純なる、之を名けて淨と爲し、是二牢固なるを、稱して不壞と曰ふ。此二の中に於て、信を開して戒を合す。故に四種有り。佛不壞とは、自ら道を見るが故に、佛所得の盡無生智に於て深信決定するを、佛不壞淨と名く。法不壞とは、四の眞諦に於て證見決定するを、法不壞と名く。四諦の中に就いて、苦集滅に於ては一切皆信するを、法不壞淨と名く。佛及び僧の無漏の功德を深くし、餘の菩薩及び緣覺の人の無漏の功德を信するを、法不壞淨と名く。僧不壞とは、自ら見道の故に、彼聲聞の四果、四向無漏の功德に於て證見決定するを、僧不壞淨と名く。戒不壞とは、出世の上、人聖戒を成就す。此聖戒を名けて、戒不壞淨と爲す。問うて曰はく、『云何が知る。』『毘曇』の中には、前の三は是れ信にして後の一は是れ戒なりと。『雜心』に釋して言はく、「前の三は心淨なるが故に、是れ信なりと知る。第四の一種を四大淨と名く。明かに知んぬ、是戒なることを。彼宗には、戒法は四大の所造なり」と。是故に戒淨を四大淨と名く。大乘の所説は、多く「毘曇」に

【三】以下、第二に處に就いて論ず。

同じ。又四信を説いて不壞淨と爲し、亦傷無きことを得。此一門

次に、處に就いて論ず。若し四諦を説かば、義は上下に通ず。若し當に四不壞淨宣説すべくんば、局つて出世に在り。「毘曇」の如きに依らば、苦法忍より滅比智に至るまでは、其れ唯二不壞淨を成就す。謂はく、法不壞及び戒不壞なり。苦集滅に於て證信決定するを、法不壞と名け、此忍智の邊所成の聖戒を、戒不壞淨と名く。道法忍より道比智に至るまでは、四種を具することを得。彼宗には、佛僧は是れ道諦の攝なるが故に。見道の時、佛及び僧の無漏の功德に於て深信決定するを、即ち信佛及與び信僧と名け、餘の菩薩、緣覺の無漏を信するを、名けて信法と爲す。此忍智の邊所成の聖戒を、戒不壞淨と名く。修道已上は常に知るべし、亦具することを。若し「成實」に依らば、無相位の中理に於て決定するを、信法と名くることを得。餘の三は義有り。良に是中の心と異緣無きを以ての故に、隠して論ぜず。須陀果より去つて、方に佛等に於て心を起して決定するを、名けて信佛乃至信戒と爲す。大乘には、初地始心より已去一切皆具す。大乘の中には、心普く緣するを以ての故に、四不壞淨之を辨すること疊爾り。

四堅の義

【四】淨法乘第三十段に四堅の義を明す。【成實】第二、四法品。

四堅の義は、「成實」に説くが如し。牢固として壊せざる、之を稱して堅と爲す。堅別不同なり。一門に四を説く。「四名とは是れ何ん。」一には説堅、二には定堅、三には見堅、

四には解脱堅なり。説堅と言ふは、論の中に釋するが如く、有爲は無常苦空、涅槃は寂滅なりと宣説する、此言決定して破壊すべからざるを、名けて説堅と爲す。此正知に於ては聞慧の滿と名く。定堅と言ふは、論の中に釋するが如く、説に因つて定を得るを、名けて定堅と爲す。是定成就するを思慧の滿と名く。見堅と言ふは、論に言はく、「定に依つて有爲の法は無常苦等と觀するを、名けて見堅と爲す」と。是見成就するを修慧の滿と名く。解脱見とは、論の中に釋するが如く、三慧果を得るを、解脱堅と名く。見諦の上の無漏の聖徳を名けて、解脱と爲すなり。此れ即ち是證なり。問うて曰はく、「何が故に戒堅を説かざる。」「道理應に論すべし。初行を以ての故に、略して辨ぜず。又此れ聞思修證一の次第の行を明さんが爲の故に、戒を説かず。四堅是の如し。

【二五】淨法樂第三
十一段に四種道の
義を明す。

四種道の義。雜心八。第
二法樂品。

四種道の義は、『阿含經』に出づ。『毘曇』『成實』には、具に廣く分別す。『名字』は是れ何ん。『一』には苦難行道、二には苦易行道、三には樂難行道、四には樂易行道なり。此四種は、論釋不同なり。『毘曇』の如きに依らば、人に利鈍有り。定に根本方便の別有り。人は定に依るを以ての故に、四種を分つ。『是義云何。』『彼の中に釋するが如し。利根の人の所行を易と名く。成就し易きが故に。鈍根の人の所行を難と名く。成就し難きが故に。定中の四禪は、是れ其根本なり。根本は支を具して作用自在なるを、名けて樂道と爲す。未來

【成實】論第二法藥品。

中間は是れ其方便なり。方便の定の中には、支因具せざれば、用不自在なるを、名けて苦道と爲す。鈍人方便の定に依るを、苦難行と名け、利人方便の定に依るを、苦易行と名け、鈍人四根本禪に依るを、樂難行と名け、利人四根本禪に依るを、樂易行と名く。成實法の中には、難易は上の如く、苦樂は定慧に約就して以て説く。彼守の中には、定を名けて苦と爲す。照由の中に於て不自在なるが故に。慧を名けて樂と爲す。照用の中に於て自在を得るが故に。鈍人定を得るを苦難行と名け、利人定を得るを苦易行と名け、鈍人慧を得るを樂難行と名け、利人慧を得るを樂易行と名く。四道是の如し。

四種善法の義、第二四法品。

【云】淨法聚第三十一段に四種善法の義を明す。成實論第二、四法品。

四種の善法とは、一には是れ退分、二には是れ住分、三には勝進分、成實論の中には、名けて増分と爲す。四には決定分、成實論の中には、名けて達分と爲す。成實の如きに依らば、此四は通じて一切の善法を攝す。彼論に釋するが如く、禪定を離れて施戒等を修するを、名けて退分と爲し、諸禪を修習するを、名けて住分と爲し、見道已前に聞思修を起すを、名けて増分と爲し、見諦已上の無漏の聖道を、名けて達分と爲す。毘曇法の中には、此四は唯淨禪に就いて以て説く。釋に兩義有り。一義の釋に云はく、「下品の淨定は喜んで下地の煩惱の爲に敗る。退すべきを以ての故に、名けて退分と爲す。是れ已退に非ず。中品の淨定は堅く自地を守つて、下地の煩惱の爲に退せられず。名けて住分と

【三七】淨法聚第三
 上三段に四種味の
 義を明す。
 【涅槃】 北本第二十
 六。
 【成實論】 第二法
 聚の
 【地持】 第一自他
 利品の

爲す。上品の淨定は微く能く自地の過を厭伏し、上定を起求すれば、勝進分と名く。上上の淨定は能く法は苦無常等と學觀して聖道を生ずれば、決定分と名く」と。第二の義は、下品の淨定は喜んで自地の煩惱の爲に陵せらるれば、名けて退分と爲す。彼欲界の下品の善心は、喜んで欲界の惡心の爲に雜せらるるが如く、彼も亦是の如し。此退分の禪は自地の煩惱の爲に雜せらると雖も、而も定を失はず。地法に因るが故に。中品の淨定は堅く善心を守つて、自地の煩惱の爲に雜せられざれば、名けて住分と爲す。上品の淨定は能く自地の煩惱の過を呵して、深心に厭背すれば、勝進分と名く。上上の淨定は能く聖道を生ずれば、決定分と名く。問うて曰はく、「此四は局つて淨定に在りや。散善にも亦有りや。」釋して言はく、「亦有り。欲界の中の下品の散善、多く欲界の不善の爲に雜せらるるが如きは、即ち退分と名け、堅く善心を守つて惡の爲に雜せざるは、即ち是れ住分なり。漸く散善を習うて轉精純ならしむるを、勝進分と名け、出世を求むる心に聞思の慧を起し、諸の善行を修して遠く聖道を生ずるを、決定分と名く。四善是の如し。

四種味の義 第二法聚 品第一

四種味とは、『涅槃』に説くが如し。『成實論』の中にも亦具に分別す。『地持』には、説いて四無罪樂と爲す。神耳道法は、之を名けて味と爲す。善く心に適するを以て、無罪樂と

名く。樂と味とは名別なれども、其義殊ならず。『名字は是れ何ん。』一には出家味、二には離欲味、三には寂滅味、四には道味なり。『成實論』の中には、正智味と名く。信家非家出家學道解脫種種在家の難に、離欲戒を受けて戒の愛味を得るを、出家味と名く。『地持』には、此を説いて出家樂と爲す。欲惡不善の法を離れて、有覺有觀、離生喜樂して初禪の行を得るを、離欲味と名く。『地持』には、此を説いて遠離樂と爲す。二禪已上乃至滅定の覺觀喜樂色想等滅するを、寂滅味と名く。『地持』には、此を説いて寂滅樂と爲す。無漏の聖道永く煩惱を斷ずるを、名けて道味と爲す。道は是れ正智なり。故に『成實』の中には、正智味と名く。『地持』には、此を説いて菩提樂と爲す。四が中の初の一は是れ其戒學、中の二は定學、後の一は慧學なり。四味是の如し。

四德處の義に三門分別あり。相を辨ず一。四家に約對し分別す。

【二六】淨法聚第三十四段に四德處の義を明すに三門の分別あり。第一に辨相。

【成實】論第二、四法品。

第一には、相を辨ず。四德處の義は、『成實』に説くが如し。徳成する分齊を、名けて德處と爲す。處別不同なり。一門に四を説く。『四名とは是れ何ん。』一には慧德處、二には實德處、三には捨德處、四には寂滅德處なり。論の中に釋するが如し。法を聞いて慧を生ずるを、慧德處と名く。前の慧に依るが故に、眞諦の空を見るを、實德處と名く。實は猶諦のごときなり。此も亦是れ慧なり。前の門に別せんが爲に、境に從つて稱を立つ。故に實處と名く。諦空を見るが故に、煩惱を捨離するを、捨德處と名く。前の實德處も亦煩惱

【元】以下、第二に四家に對して名を會して分別す。【十地論】第九。

【三】以下、第三に位に就いて分別す。

を捨す。此捨德處も亦諦實を見る。前の門に別せんが爲に、隠顯名を異にす。煩惱を捨するが故に、心に寂滅を得るを、寂滅德處と名く。煩惱を離れ苦心滅するを以ての故に。論釋是の如し。此一門

次に、四家に對して名を會し分別す。此四德處は、『十地論』の中には、名けて四家と爲す。聖の所依處は、之を名けて家と爲す。家と德處とは、眼目の異なり。『名字は是れ何ん。』一には般若家、猶前の第一の慧德處のごときなり。二には諦家、猶前の第二の實德處のごときなり。三には捨煩惱家、猶前の第三の捨德處のごときなり。四には苦清淨家、猶前の第四の寂滅德處のごとし。名變改すと雖も、其義は殊らず。此二門
次に第三門に、位に就いて分別す。此四行實には並に上下に通ず。中に於て分別するに、差異無きに非ず。『異相は如何。』一初の慧德處は見道の前に在り。見道の前に聞法に依つて聞思修を起すを以ての故に、慧を説いて亦即ち名けて般若家と爲すなり。實德處とは、見道の中に在り。見道の中には初めて諦理を見て境に従つて稱を立つるを以ての故に、實處と名け、亦諦家と名く。捨德處とは修道の中に在り。重ねて諦理を緣じ、正しく能く貪瞋等の過を斷除するを、捨德處と名け、亦即ち名けて捨煩惱家と爲す。寂滅處とは、無學道に在り。無學の聖智は永く生死を盡すが故に、寂滅と云ひ、亦即ち名けて苦清淨家と爲す。大小齊く然なり。四德處の義之を略して爾云ふ。

【三】淨法聚第三十五段に四種求知の義を明すに兩門の分別あり。一に辨相。【持論】第二眞實義品。

四種求知の義に兩門分別あり。相を辨す一。安に對して顯治す二。

第一に、相を辨す。四種の求知は、地持論に出づ。始觀推尋は、之を謂つて求と爲す。終に悟實を成ずるを、如實知と名く。求知不同にして、一門に四を説く。四求と言ふは、論の中に説くが如く、一には隨名求、二には隨事求、三には自性施設求、四には差別施設求なり。四が中の前の二は、名事別觀し、後の二は合觀す。故に彼論に言はく、「彼名と事とは、若は離相觀し、若は合相觀す」と。別を名事と爲し、合を自性差別施設と爲す。名求と言ふは、菩薩、彼名字の分齊に隨つて、觀じて以て實を求むるが故に、名求と曰ふ。事求と言ふは、色等の事に隨つて、觀じて以て實を求むるを、隨事求と名く。後の二の合の中、施設と言ふは、事に依つて名を施し、名に依つて事を施す。名事相施するが故に施設と曰ふ。「云何が名に依つて彼事を施設する。」名を廢して法を求むれば、法は幻化の如く、有に非ず、無に非ず。一定の相の以て自ら別つべき無し。名を將て法を攝すれば、法は名に隨つて、轉じて方に種種諸法の相立すること有り。相立は名に由るが故に、施設と曰ふ。又名字に依つて諸事を造作す。瓶の名に依つて瓶の事を造作し、車乘の名に依つて車乘の事を造るが如し。是の如く一切も亦是れ名に依つて事を施設するなり。此施設の中に、體有り、相有り。體を自性と名け、相を差別と名く。彼自性施設の法の中に於て、觀じて以て實を求むるを、自性施設求と名く。差別施設の法の中に於て、觀じて以て實を求むるを、差別施設求と名く。四求是の如し。四知と言ふは、論の中に説くが如く、一には

隨名求如實知、二には隨事求如實知、三には隨自性施設求如實知、四には隨差別施設求如實知なり。理實に通じて論ずれば、菩薩は彼一一の門の中に於て、皆悉く具に一切種の義を知る。相に隨つて分別すれば、第一門の中には、但世諦を知る。法の名字は世に隨つて立すと知るが故に。第二門の中には、第一義を知る。名を離れて事を求むれば、事體寂滅して言説を離るるが故に。第三門の中には、一實諦を知る。法の體性は有無に非ずと知るが故に。第四門の中には、緣起差別の法界を了知す。諸義同一の體性にして互に相成すと知るを以ての故に。論に言はく、「隨名如實知とは、前の所求の諸法の名字に隨つて、中に於て正しく知る。彼名は事の爲の故に立て、想の爲、見の爲、流布の爲に、若し名を立てざれば、能く色等の事を知る者有ること無しと知る。是を隨名如實知と爲すなり」と。隨事求如實知と言ふは、前の所求の色等の諸事に隨ふ。中に於て正しく彼事寂滅して言を離れ、言を離れて事を求むれば、事常に寂なりと知るが故に。自性施設如實知とは、前の所求の名事の體性に隨つて中に於て正しく知る。此名事の體は有無に非ず。猶幻化影響夢等の如しと「是義テ何。」菩薩は深く諸法は幻の如しと知る。幻化の有は、有なるも定有に非ず。定有に非ざるが故に、無法を有と爲す。無を有と爲すが故に、無の外に別に性として得べきもの有ること無し。幻化の無は、無なるも定無に非ず。定無に非ざるが故に、彼幻化の有法を説いて無と爲す。有を無と爲すが故に、有の外に別に性として得べきもの有ること無し。還つて即ち彼幻化の有無を説いて、非有無と爲す。有無の外に別に非有非無の得べ

【論】 地持論第二

【三】 以下、第二に八妄に對して其對治を明す。

きもの無し。還つて即ち此非有非無を説いて、以て有無と爲す。非有無の外に、別に有無の自性とて得べきもの無し。進退推求するに一の別の性無きを、一實觀と名く。此理淵極なるが故に、論に説いて甚深義處と爲す。差別施設如實知とは、前の所求の差別の相に隨つて、中に於て正しく論義同一性にして、互に相集成して種種の差別有ることを知る。諸義は同一の體なりと知るを以ての故に、論の中には、之を説いて不二觀と爲す。互に相集成して種種別なるが故に、論の中に説いて、有色、無色、有性、無性、可見、不可見等の無量の差別と爲す。有色と言ふは、世諦は有色なり。無色と言ふは、眞諦は無色無し。有性と言ふは、眞諦は有性なり。無性と言ふは、世諦は無性無し。言ふ所の可見不可見とは、若し色に對して論すれば、世諦は見るべく、眞諦は見匡し。若し性に對して論すれば、眞諦は見るべく、世諦は見匡し。是の如き等の無量種の法を知るを、隨差別如實知と名くるなり。相を辨ずること是の如し。此一門

次に、八妄に對して、其對治を明す。八妄の義は、前の煩惱の中に、已に廣く分別す。一には自性妄想、諸法の體を取す。二には差別妄想、諸法差別の相有りを取す。三には攝受積聚妄想、諸法和合の業用有りを取す。四には我妄想、前の攝受積聚法の中に於て、内有り、外有り。彼内法の中に、取して我人を立つ。五には爲我所妄想、前の積聚外法の中に於て、取して我所と爲す。六には念妄想、前の所取の我所の法の中に於て、順情可念の事有りを取す。七には不念妄想、前の所取の我所の法の中に於て、違情不可念の事有り

と取す。八には俱相違妄想、前の所收の我所の法の中に於て、中容非違順の事有り」と取す。八妄是の如し。此八妄想は四求、四智能く對治を爲す。治に通別有り。通して之を論ずれば、八種の妄想所取の法の中に、皆名事有り。別して其名を求むるを、隨名求と名け、別して其事を成ずるを、隨事求と名く。名事の合觀を、説いて後の二と爲す。其體性を求むるを、自性求と名け、其相別を求むるを、差別求と名く。通治是の如し。相に隨つて分別すれば、八妄想の中には、偏に前の二に對す。前の二妄の中の所取の法は、名事を出るこゝと無し。名事別して觀するを、説いて前の二と爲し、名事合して觀するを、説いて後の二と爲す。自性施設は彼自性妄想の所取を觀じ、差別施設は彼差別妄想の所取を觀す。此二は是れ本なり。但此二を破すれば餘の六は皆隨ふ。故に別治無し。經に破竹の喩を説く。況や斯に在り。四求既に然り。四知も同じく爾なり。四種求知之を略すること然るなり。

四陀羅尼に七門分別あり。名を釋す一。修德二。聞思修證の四義に約しての分別三。三昧に約對して其同異を辨ず四。位に就いての分別五。大小有無六。因を明す七。

第一に、名を釋す。四陀羅尼は、『地持論』に出づ。陀羅尼とは、是れ中國の語なり。此には翻じて持と名く。法を念じて失はざるが故に、名けて持と爲す。持別不同なり。一門に四を説く。四名とは是れ何ん。一には法陀羅尼、二には義陀羅尼、三には呪術陀羅尼、四には忍陀羅尼なり。教法を法と名け、佛の教法に於て、聞持して忘れざるを、法陀羅尼と名く。聞いて忘れざるが故に、經の中に、亦は聞陀羅尼と名く。二諦を義と名け、諸法

【三】 淨法聚第三十六段に四陀羅尼を明すに七門の分別あり。第一に釋名。
 【地持論】 第六書提品。
 【陀羅尼】 ダーラニー (Dhāraṇī)

の義に於て、總持して忘れざるを、義陀羅尼と名く。菩薩は禪に依つて能く呪術を起し、衆の爲に患を除く。第一神驗を呪術陀羅尼と名く。菩薩は禪に依つて、備に多用を起す。用に隨つて別して論ずれば、即ち無量の陀羅尼門有り。良に以れば、呪術傳益の義多きが故に、偏に之を論ず。法の實相に於て安住するを、忍と名け、忍の法を失はざるを、忍陀羅尼と名く。忍行成ずる時、能く法界陀羅尼門に入つて、法界陀羅尼の徳を顯發す。九地に説くが如し。『地持は木に就いて且く忍を説くなり。名義是の如し。此一門』

【四】以下、第二に陀羅尼の修得を論ず。一に法陀羅尼に就いて。【龍樹の等】大智論第二十八。

次に、修得を辨ず。『法陀羅尼は、之を得ること云何。』釋に六種有り。一には先世の業因縁に由つて得る。故に龍樹の言はく、「人有つて先世の業因縁の故に、受生して忘れず」と。先世の何の業か此聞持を得る。『或は願力に因り、或は曾て修習する聞持の力の所以に之を得る。二には現在の神呪力に因つて得。故に龍樹の言はく、「或は復人有つて、神呪力に因るが故に不忘を得」と。三には業力に因る。人有つて嚴業して便ち不忘を得。諸仙等の如し。四には現在修習の力に因つて得。龍樹の説くが如し。先に一門の所知の法の中に於て、一心に憶念して、心をして増長せしむ。次に復餘の相似の法の中に於て、心を繫けて專念し、復一切所聞の事の中に於て、心を専らにして憶念し、皆忘れざらしむ。是を初學と爲す。初學成就し、三たび聞いて能く持す。心根轉た利なれば、二たび聞いて能く持す。究竟じて成ずる時は、一たび聞いて能く持す。成に優劣有り。下なる者は、彼小法の中に於て、一たび聞いて能く持し、中なる者は、彼次多の法の中に於て、一たび聞いて

【第二に等】 次二に義陀羅尼に就いて。

【第三に等】 次三に呪術陀羅尼に就いて。

【第四に等】 次四に忍陀羅尼に就いて。

【地持】 論第六。

【五】 以下、第三に聞思修證に約して分別す。

【六】 以下、第四に三昧に對して其異同と辨ず。

能く持し、上なる者は、能く廣多の法の中に於て、一たび聞いて能く持す。五には禪定に因つて得。龍樹の説くが如し。人有つて、禪に依つて其不忘を得。解脫力の故に、能く一切の言説の中に於て、乃至一句も亦忘せず。六には實慧に因る。深く法界陀羅尼門に入るが故に、能く忘れず。聞持是の如し。第二に義持得にも亦六有り。聞持と同じ。唯義の中に於て修學するを異と爲す。第三に呪術得に三種有り。一には現在修習の力を以ての故に、能く呪術を爲す。二には禪定に依つて、能く呪術を爲す。三には實智を以て深く法界呪術の法門に入つて、能く呪術を爲す。第四に忍持得に二種有り。一には先世の久習力に由つて得。謂はく、諸菩薩久修力の故に生ず。便ち能く一切の法の中に於て、取せず、捨せず。二には現在修習の力に由つて得。「之を修すること云何。」「地持」に説くが如し。精進して惰せず。託處寂靜にして、身遊行せず。口默少言にして種食を離へず。常に一坐食にして少睡多覺なり。如來所説の法を思量して、有無に非すと知る。其所知を以て諸法に類通して、皆悉く善く解す。修得是の如し。此二門

(三五三) 次に、聞思修證に約して分別す。四が中の初の一は、是れ其聞慧なり。教法を持するが故に。第二の義持は、是れ其思慧なり。第三の呪術は、禪に依つて起す。本を撰して本に従はば、是れ其修慧なり。一切の禪定は修慧の撰なるが故に。第四の忍持は、是れ其證行なり。心を證して理に住するを、説いて忍と爲すが故に。此三門

(三五四) 次に、三昧に對して、其同異を辨ず。諸行同體にして、互に相集成す。緣集相攝すれば、

【龍樹の等】 大智
論第二十八。

【三】以下、第五
に位に就いて論
ず。

【地持】 第六。

是れ同と言ふことを得。相に隨つて別して分たば、差異無きに非ず。異に五種有り。一には心法に不同を分つ。三昧は多く定數を用て體と爲し、陀羅尼門は念數を主と爲す。又言はく、是れ慧なり。二には心に約して異を辨ず。龍樹の説くが如し。一切の三昧は唯心と相應す。諸の陀羅尼は、或は心相應、或は不相應なり。作意して念持するを、心相應と名け、瞋等を起すと雖も、所持を忘れざるを、不相應と名く。相應は體に據り、不相應と名ふは、其勢力を辨ず。留化の通心滅盡すと雖も、而も化用有るが如し。三には始終に異を分つ。龍樹の説くが如し。始修の時を名けて三昧と爲し、久習成就を陀羅尼と名く。其れ猶習欲不改の時を説いて、名けて性と爲すがごとし。此も亦是の如し。四には本末に異を分つ。龍樹の説くが如し。三昧は是れ本なり。三昧と彼實相と和合して功德を出生するを、陀羅尼と名く。其れ猶瓦瓶の火の爲に燒け已つて、方に水を持するに堪ふるがごとし。功德も是の如し。實相より出でて、方に能く持するに堪へたり。五には失不失の異なり。龍樹の説くがごとし。三昧は身を轉じて退失有るべく、陀羅尼は身を轉じて失ならず。是れ増上成就の行なるを以ての故に。此四門。

次に、位に就いて論ず。『地持』に説くが如し。法、義、呪術は、初僧祇を度して淨心地に入る。成就する所の者は、必定して動ぜず。最勝最妙なり。中間の所得は、或は願力に因る。或は禪定力は不定不住なり。忍陀羅尼は、起は解行に在り、成は地上に在り。若し復通じて論ずれば、種性已上も亦能く之を起す。住分是の如し。此五門竟る。

【二六】以下、第六に大小有無の義を明す。

【三元】以下、第七に其因を辨す。【地持】第六。

次に、大小有無の義を明す。通じて之を論ずれば、小乗も亦得。阿難等の如き、聞持第一なり。中に於て別して分たば、唯大乘に在り。小乗の中には無し。何が故に是の如くなる。龍樹の言ふが如く、小家に金無きは問を爲すに足らざるが如し。聲聞小人に大功徳無きこと、何ぞ怪しむべきに足らん。又彼論に言はく、「聲聞は但戒定慧等を求めて生死を出離す。一切の諸の大功徳を求めず。是に爲つて陀羅尼門を修せず」と。故に彼論に復言はく、「聲聞の人は唯自度を求めて、法を持して衆生に授與せんと欲せず。是に爲つて諸の陀羅尼を修せず。又聲聞の人は唯早滅を求めて、久しく留つて佛法を住持せんと欲せず。是に爲つて陀羅尼を修せざるなり」と。問うて曰はく、「若し小乗に無しと言はば、經に『阿難は聞持第一なり』と説く。云何が無しと言ふや。」釋して言はく、「阿難は聲聞の中に於て、聞持有りと説く。若し菩薩に望むれば少きが故に、無と名く。河の少水を名けて無水と爲すが如く、食の少鹽を名けて無鹽と爲すが如し。所得少きが故に、之を名けて無と爲す。小乗の中に『摩訶拘絺羅は四無礙第一なり』と説くが如し。『涅槃經』の如きは、『聲聞の人は一向に得ず』と説く。此も亦彼に同じ。又阿難等は聲聞を現すと雖も、實には是れ菩薩なるが故に、聞持有り。龍樹の無と行ふは、實の聲聞に據る。所以に過無し。『有無是の如し。此六門

【三九】次に、其因を辨す。【地持】に説くが如し。四功德を具して、乃ち能く之を得。一には愛欲を習はず。二には彼勝を嫉まず。三には一切の所求等く施して悔すること無し。四には

【摩德勒果】 マー ト、カリー (Mārka) 論載のこと。

【四】 淨法聚第三十七段に四無量の義を明すに八門の分別あり。第一に釋名別性、初に釋名。

【別性】 等 次に別性を明す。中に異いて四、一に心體に就いて分別す。

法を樂ひ、菩薩藏及び摩德勒伽を樂ふ。前の二は離過にして、後の二は攝善なり。中に就いて、等施無悔は功德因に攝す。五度は皆是れ功德因に攝す。初に就いて施と云ふ。樂法は是れ共智慧因に攝す。聞思修等は、皆是れ慧因なり。初に就いて、以て擧げて樂法と云ふ。四陀羅尼之を略して兩云ふ。

四無量の義に八門分別あり。名を釋し性を辨ず一。開合制立二。次第三。三縁の分別四。體用の第一門の中に、先に其名を釋し、後に其性を辨す。四無量とは、化物の心なり。化心不

同なり。一門に四を説く。謂はく、慈、悲、喜、捨なり。愛憐を慈と名け、憫愴を悲と名け、慶悅を喜と名け、亡懷を捨と稱す。心に存著無きが故に、亡懷と曰ふ。經の中には、

此を名けて以て無量と爲す。亦四等と云ふ。無量の諸の衆生を緣じて起るが故に無量と名け、等しく一切を緣するが故に四等と名く。名義是の如し。體性は如何。『中』に於て、略

して四義を以て分別す。一には心體に就いて分別し、二には心法に就いて分別し、三には有漏無漏に就いて分別し、四には常無常を分別す。心體と言ふは、心に三種有り。一には

事識、謂はく、六識心なり。二には妄識、謂はく、七識心なり。三には眞識なり。凡夫二乘所修の無量の事識を體と爲す。事識の中に就いて、意識を體と爲す。菩薩の始修は事識

を體と爲す。次に修轉深きは、妄識を體と爲す。生は唯妄なりと見、妄の爲に纏せらるる

を念じて憐愍の心を起し、究竟して終に成ずるは、眞識を體と爲す。眞を體と爲すが故に、

【次に等】二に心法に就いて。

【雑心】第七。

無相無緣は虚空界に等し。此一門に就いて、其體性を辨ず。法とは、謂はく、一切の想受行等の諸の心法なり。『毘曇』の如きに依らば、慈悲の二行は是れ無瞋の性なり。喜は是れ其喜受の自性、捨は是れ其無貪の善性なり。嫉貪を對治す。故に『雑心』に言はく、「捨は嫉貪を治す」と。此に嫉と言ふは、父母親戚、共に相憐愛等續して、斷ぜざる、之を説いて嫉と爲す。世俗の中に、多日の連風を名けて嫉風と曰ひ、多時の連雨を説いて嫉雨と爲すが如し。此も亦是の如し。親情斷ぜざる、之を説いて嫉と爲す。世人の姦逸を嫉と名くるに同じからず。親の偏愛する所に斷ぜざるを以ての故に、之を捨治す。問うて曰はく、「捨心通じて一切の貪瞋癡等を捨す。何が故に偏に説いて無貪性と爲すや。」釋して言はく、「修する時最後には、親に於て貪著を捨離す。故に終成就に就いて、説いて無貪と爲す。理實には通じて貪瞋癡等を捨す。成實法の中には、四無量心は慧を用て體と爲す。故に彼論に言はく、「四無量心の體性は是れ慧なり」と。蓋し乃ち其根本に従つて言ふことを爲す。慧に由つて、四種の生異を分別して四等を行するが故に、名けて慧と爲す。又慧は怨親等の別を分別して四等を行するが故に、名けて慧と爲す。大乘法の中には、四無量心に大有り、小有り。眞行は是れ大、妄修は是れ小なり。小は『毘曇』に同じ。故に『涅槃經』の中に、「慈と悲とは同く無瞋の性なり」と説く。大無量心は、體皆是れ慧なり。故に『地論』の中に説いて、大慈大悲を智慧と爲す。『雑心』にも亦云はく、「大悲は是れ慧なり」と。慧に由つて實を證す。法門の力自然に能く一切衆生を益するを、説いて慈等と爲す。

【成實法】論第十五、四無量定品

【雜心】第十四梵

【地論】第三。第七。

【次に等】三に漏無漏に就いて分別す。

【毘曇法】雜心論第七。

【經】涅槃經。

【次に等】四に有常無常に就いて分別

【經】涅槃經。

是故に本に就いて、説いて智慧と爲す。用隨つて之を論ずれば、小と相似す。若し諸行同體にして相成すと云はば、一一の門の中に、備に法界の一切の行徳を具す。此二門に有漏無漏に就いて分別す。毘曇法の中には、四無量心は一向に有漏なり。衆生縁の故に成實法の中には、義釋不定なり。若し空を觀じて漏を斷するが故に、名けて無漏と爲すと云はば、四無量心齊く是れ有漏なり。此れ空を觀じて漏を斷する心に非ざるが故に。若し所行漏を生ぜざるが故に、無漏と名くと云はば、四無量心は漏無漏に通ず。凡夫の所行は一向に有漏なり。取性の心の中に此行を修するが故に。學人の所起は、或は漏無漏なり。未だ結を斷ぜざる處を、名けて有漏と爲す。斷する處は無漏なり。無學の所起は一向に無漏なり。名用心の中に此行を起すが故に。大乘法の中には、隱顯互に論ず。小無量心は一向に有漏にして、大無量心は一向に無漏なり。眞を證して成するが故に。義に隨つて通じて論ずれば、大小皆漏無漏の義有り。小無量の中の衆生縁とは、是れ其有漏にして、法縁無縁は是れ其無漏なり。大無量の中の衆生縁とは、世に隨つて轉するを以て漏に相似するが故に、之を名けて漏と爲す。經の中に、「功德莊嚴は有爲有漏」と説くと、其義相似す。法縁、無縁は、徳體寂滅なり。説いて無漏と爲す。此三門に次に有常無常に就いて分別す。小無量心は一向に無常にして、大無量心は一向に是れ常なり。大の中の義もて分たば、世に隨つて變するを用て、名けて無常と爲す。經の中に、「功德莊嚴は有常非常」と説くと、其義相似す。徳體變ぜざる、之を名けて常と爲す。故に經の中に説かく、「慈は即ち佛性、常

【四二】以下、第二に其開合制立を明す。先に開合を辨ず。

【地持】第六。

【地持】第六。

樂我淨なり」と。悲喜捨の心も、類して亦同く爾り。

第二に、其開合制立を明す。先に開合を辨じ、後に制立を明す。開合不定なり。之を總ずれば一と爲す。『地持』に説くが如し。一切無量を名けて大悲と爲し、此を成就する者を哀愍菩薩と名く。四無量の如きは、俱に能く苦を抜く。故に通じて悲と名く。蓋し乃ち且く一門に據つて言ふのみ。若し慈門を以て統攝すれば、諸行も亦皆慈を成す。喜捨も亦爾り。諸行同體にして互に相成するが故に、或は分つて二と爲す。二に兩門有り。一には對治に二を説く。慈と悲とは見行を對治す。見行の者は瞋悲多きを以ての故に。喜と捨とは愛行を對治す。愛行の者は嫉妬多きを以ての故に。二には化益に二を分つ。『地持』に説くが如し。前の三無量を樂想攝と名け、後の一の捨行を安想攝と名く。通じては即ち義齊し。隱顯互に彰すが故に、此判を爲す。等く是れ隱顯す。『何が故に前の三を偏に樂想と名け、捨を安想と名くるや。』釋して言はく、『慈心は能く物に樂を與へ、悲喜は佐助す。故に前の三種を通じて樂想と名く。』云何が佐助する。『悲は物の苦を抜いて其樂障を遣り、喜は嫉妬を離れて能く勝樂を與ふ。故に佐助と曰ふ。』後の一の捨心は怨を去り親を離れ、齊く善法を與へて危怖を離れしむ。故に安想と曰ふ。又復前の三は是れ其有行なり。有行の事益情に適するを、樂と名く。捨は是れ空行なり。空理の教授は、永く危怖を絶つ。故に安想と曰ふ。或は分つて三と爲す。三は上に辨ずるが如し。慈悲の二行は、是れ無瞋の性なり。之を合して一と爲す。喜を以て二と爲し、捨を以て三と爲す。或は分つて四と爲す。謂は

【地經】 第四。

【次に等】二に制立を辨ず。釋に七義ある中、一に體性の不同。

く、慈、悲、喜、捨なり。無瞋の性の中に、重を離るるを慈と名け、瞋を除くを悲と曰ふ。故に四を分つなり。或は分つて五と爲す。『地持論』に説くが如く、謂ゆる、五種の淨心説法なり。一には慈心、怨に於て瞋らず。二には安心、惡に於て善を欲す。三には哀愍心、苦に於て拔を欲す。四には不自讚毀他、瞋を除いて善を行す。五には不著名利、食を離れて捨を行す。五の中の初の一は是れ慈無量、次の二は是れ悲、次の一は是れ喜、後の一は是れ捨なり。『地論』の中も亦此説に同じ。或は分つて六と爲す。『地經』に説くが如し。一には慈、二には安にして、此れ前に釋するが如し。三には憐愍心、貧に於て憶念す。四には樂心、苦に於て益をせんと欲す。五には利潤心、樂に於て放逸にして、善に任せしめんと欲す。六には攝儀益心、善に於て懈退し、堅住ならしめんと欲す。此六は猶是れ慈悲の差別なり。慈樂の二心は是れ慈無量にして、餘は皆是れ悲なり。或は分つて八と爲す。『地經』に説くが如し。一には安隱心、二には樂心、三には慈心にして、此れ前の釋に同じ。四には悲心、苦に於て拔かんと欲す。五には憐愍心、樂放逸の者は其當苦を感れむ。六には利潤心、外道の衆生を正に任せしめんと欲す。七には守護心、同法の衆生を守つて退せざらしむ。八には我心、大乘の中に於て已に發願する者之を見て己が如くす。此八も亦是れ慈悲の差別なり。樂心、慈心、守護、我心は慈の中の差別にして、餘は皆是れ悲行の差別なり。義に隨つて廣く分たば、數別窮め難し。今は一門に據つて且く四種を論ず。開合是の如し。此一門次に制立を辨ず。何の義を以ての故に、四無量を不增不減と説く。『釋』に七

【涅槃】 第十四梵
行は也。【維摩】 觀衆生品

【功能の等】 次二
に功能の不同。
【對境の等】 次三
に對境の不同。

【對患の等】 次四
に對患の別。
【涅槃】 第十四。

義有り。一には體性同じからず。二には功能に異有り。三は緣境に別有り。四には治患等
しからず。五には行時に殊り有り。六には得果に異有り。七には相資義別なり。體性の別
とは、愛念は是れ慈、哀傷は是れ悲、慶悅は是れ喜、等心は是れ捨なり。捨行不同なり。
汎く釋するに七有り。一には心平等、之を名けて捨と爲す。二には怨親を捨するが故に、
名けて捨と爲す。三には一切の貪瞋癡等を捨す。之に因つて捨と爲す。三には一切の貪瞋
癡等を捨す。之に因つて捨と爲す。四には衆生を捨放するが故に、名けて捨と爲す。五に
は空平等を得て衆相を捨離す。之を稱して捨と爲す。六には自ら己が樂を捨て衆生に施
與す。之を名けて捨と爲す。【涅槃】に説くが如し。七には衆生を化して怖求を捨離するが
故に、名けて捨と爲す。【維摩】に説くが如し。故に彼經に云はく、「福祐する所有るとも、
怖望する所無きを、名けて捨と爲すなり」と。今初門の中に、心等しきを捨と曰ふ。此一門
功能の別とは、慈は能く樂を與へ、悲は能く苦を抜き、喜は能く物を慶ばしめ、捨は能く
齊く怨親等を益するが故に。竟る。此二門對境の別とは、慈心は多く無樂の衆生を緣じ、悲心は
多く有苦の衆生を緣じ、喜心は多く得樂の衆生を緣じ、捨は究竟解脫の衆生を緣す。彼究竟
竟じて解脫を得るを以ての故に、心即ち捨捨す。又捨は多く怨親及び中の三品の衆生を緣
す。此等を捨するが故に、斯境別なるを以ての故に、四種を分つ。故に【涅槃】に云はく、
「器若し慈有らば、即ち悲喜捨の心有ることを得ず」と。餘も亦是の如し。故に四種を立つ。
此二門對患の別とは、【涅槃】に説くが如し。慈は貪欲を息め、悲は瞋恚を止む。經の中に

【行時の等】次五
に「行時の別」。

【得果の等】次六
に「得果の別」。

亦云はく、「悲は喜覺を止め、喜は嫉妬を除く」と。經の中にも亦云はく、「喜は不樂を除く。嫉妬を以ての故に、他の利を得るを見て、心に喜樂せず。故に喜は之を治す。捨は一
切の貪患疑等を除く」と。問うて曰はく、「前には慈を無瞋の性と説く。今云何が慈は貪欲
を思むと説くや。」釋して言はく、「違せず。若し五欲を貪すれば、資財を惜むに由り、便ち
衆生を瞋つて樂を興ふること能はず。貪を思むるに由るが故に、他に於て瞋らず、能く其
樂を興ふ。是故に慈心の性は不瞋なりと雖も、能く貪欲を思む。」此四門（此四門、行時の別とは、涅
槃一に説くが如し。行を以て分別するが故に、應に四を立つべし。何者か行別なる。慈
を修するの時、餘を修することを得ず。餘の時亦爾り。是を行別と爲す。是別を以ての
故に、四種を建立す。此五門、得果の別とは、經の中に説くが如し。慈を修すれば極めて遠
く、遍淨處に生ず。遍淨は是れ其第三禪天なり。悲を修すれば極めて遠く、空處に生ず。
喜を修すれば極めて遠く、識處に生ず。捨を修すれば極めて遠く、無所有に生ず。此義解
し難し。若し「毘曇」に依らば、喜無量心は初二禪に在り。之を修すれば極めて遠く、二
禪の報を得。餘の三無量は遍く四禪に在り。之を修すれば、齊く四禪の果を得。「成實」、
大乘には、四無量心は具に八禪に依る。之を修すれば、齊く八禪の報を得。「如來何が故に、
慈心を修すれば極めて遍淨に生じ、乃至捨を修すれば無所有に生ずと説くや。」「毘曇」に
釋して云はく、此は無量に非ず。是れ八禪定なり。世尊は無量の名を假作して説く。「何が
故に假して説くや。」「慈は物に樂を興へ、還つて樂果を得。遍淨天の中には、樂報最勝な

ること慈果に相順す。故に彼因を説いて慈無量と爲す。悲は物の苦を抜き、無量の報を得。空處地の中には、色惱礙を離れて悲果に相順す。故に彼因を説いて悲無量と爲す。喜心は物を慶ばしめて、多喜の報を得。識處地の中には、外空の縁を捨して多識、意に適ひ、喜果に相順す。故に彼因を喜無量と爲す。捨心は平等にして寂靜の報を得。無所有處は多識を縁することを捨し、内心寂靜にして捨果に相順す。故に彼無所有の因を説いて捨無量と爲す。理實には是に非ず。『成實』に釋して云はく、「四無量心は理實には、具に八禪の果を得」と。佛隱顯して説く。故に慈を修すれば、遍淨に生ずる等と言ふ」と。何の義か隱顯なる。「慈は多く樂を與ふるが故に、佛偏に遍淨に生ずと説く。遍淨の中には、樂増上なるを以ての故に。悲は多く苦を抜くが故に、佛遍に空處に生ずと説く。空處の中には、色惱を離るるを以ての故に。喜は多く物を慶ばしむるが故に、佛偏に識處に生ずと説く。識處の中には、無邊の識を縁じて多く意に適ふを以ての故に。捨心は寂靜なるが故に、佛偏に無所有に生ずと説く。無所有は多縁を捨するを以ての故に。此れ隱顯なりと雖も、然も其所説は實に是れ無量なり。龍樹釋して云はく、「佛は不思議にして、衆生に隨應するが故に、是の如く説く」と。慈無量は多く物樂を與ふるを以て、遍淨を求むるに易し。悲は多く苦を抜けば、空處を求むるに易し。喜は多く物を慶ばしめば、識處を求むるに易し。捨は怨親を亡し、無所有を求むるに易し。佛易に隨ふが故に、是の如く偏に説く。又復論に言はく、「慈は樂を與へんと願すれば、多く遍淨に生じ、慈は惱を除かん

【相資の等】 次七
に相資の別。

と願ずれば、多く空處に生じ、喜は衆生一切法の中に心に自在を得んと願ずれば、多く處に生じ、捨は人をして苦樂等を捨せしめんと欲すれば、多く無所有處に生ずることを得、佛多に隨ふが故に、是の如く偏に説く。斯果別なるを以ての故に、四種を立つ。此六門相資の別とは、四行相資し、相順じて闕き難きが故に、四種を立つ。云何が相資す。一先づ慈悲に就いて相資助することを明さば、慈は樂を與へんと欲すれども、悲の苦を抜くこと無ければ、與樂成せず。悲の苦を抜くに由つて、與樂方に熟す。故に悲は慈を資く。悲は苦を抜かんと欲すれども、慈の樂を與ふること無ければ、苦終に去らず。慈の樂を與ふるに由つて、苦方に離るべし。故に慈は悲を資く。次に慈悲を用て、喜に共にして相資く。慈は樂を與へんと欲し、悲は苦を抜かんと欲すれども、喜の嫉を除くこと無ければ、與拔成せず。喜の嫉を除くに由つて、與拔方に熟す。故に喜心を用て慈悲を資成す。喜は物を慶ばしめんと欲すれども、若し慈悲の拔苦與樂無ければ、即ち慶ばしむる所無し。慈の樂を與へ悲の物の苦を抜くに由つて、方に隨つて慶喜す。故に慈悲を用て喜心を助成す。次に前の三を以て、捨に共にして相助く。慈の樂を與へんと欲し、悲の苦を抜かんと欲し、喜の物を慶ばしめんと欲すれども、若し捨心無ければ、怨親を簡別して普く利すること能はず。捨の礙を除くに由つて、方に能く齊く與へ、俱に抜き、等しく慶ぶ。故に捨心を用て前の三を資成す。捨は等しく利せんと欲すれども、若し前の三の與樂、拔苦、慶物、隨喜無ければ、何の等しき所をか知らん。前の三に由るが故に、之に就いて等と説く。故に前の

【涅槃】 第十四。

【四】以下、第三に四無量の次第を明す中に二、一に修の難易によつて辨ず。

【次に等】二に化益の始終に就いて辨ず。【維摩】菩提品善徳長者章。

三を將て捨行を資成す。又復前の三は是れ其有行、捨は是れ空行なり。若し空捨無くんば、有は愛見を成ず。故に捨心を用て前の三を資成す。若し有行無くんば、空は涕洟を成ず。故に前の三を以て空捨を資成す。此四行を以て相資し相順す。故に須らく齊く立つべし。故に、『涅槃』に云はく、「作偈相對するが故に、四を分つなり」と。制立是の如し。

第三門の中に、其次第を明す。次第に二有り。一には修の難易に據つて、以て次第を辨じ、二には化益の始終を以て次第を論ず。難易は如何。『慈は佛樂を緣じて、玄かに人に與へんと欲す。世益は爲し易し。故に先づ之を修す。悲は今の苦を抜く。交益は作し難し。故に慈の後に在り。次に悲心を修す。苦を悲むことは生じ易く、樂を愛することは發し難し。故に悲の後に在り。次に喜心を修す。此れ云何が知らん。一人其怨家の受苦を見て、亦悲心を起すが如し。故に知んぬ、「悲は易し」と。得樂を觀觀して、未だ必ずしも喜を生ぜず。故に知んぬ、喜は難しと。偏益は爲し易く、等利は作し難し。故に後に捨を修す。又復前の三は、其れ是有行なり。有行は生じ易し。故に先づ修得す。捨は是れ空行なり。空行は發し難し。故に後に之を爲す。修人は是の如し。此一門つ。次に化益を辨ず。【維摩】に説くが如し。謂はく、菩提を以て慈心を起す。衆生を救ふを以て大悲心を起す。正法を持するを以て喜心を起す。智慧を攝するを以て捨心を行す。此は一人の化益の始終に對して、以て次第を論ず。始め佛樂を緣じて、玄かに人に與へんと欲す。故に先づ慈を修す。所益の衆生は苦の中に交在す。理須らく救拔すべし。故に次に悲を行す。所化の衆生は教に依

大智

【龍樹の釋】
論第二十。

つて法を愛く。未だ得脱せずと雖も、脱を去ること遙かならず。故に隨つて喜を生ず。彼人法に依つて智慧を修成すれば、心即ち放捨す。須らく愛すべからざるが故に。譬へば父母の子を養うて、長大して心即ち放捨するが如し。此も亦是の如し。問うて曰はく、此捨は衆生を益することを捨す。何ぞ利他を成ぜん。釋に四義有り。一には龍樹の釋に依らば、前の三無量は樂を與へ、苦を抜き、物を慶ばしめんと欲すと雖も、而も未だ得ること能はず。故に須らく捨を修し、前の三種の所念の衆生を捨すべし。自ら善法を修し、大菩提を攝して彼を饒益するが故に、利他と名く。二には衆生有つて、菩薩之を化し少智慧を得るとも、未だ究竟すること能はず。菩薩之を捨して更に勝善を修し、大菩提を攝して究竟して饒益するが故に、利他と名く。三には究竟して衆生を捨するが爲の故に、慈は勸めて樂を與へ、悲は勸めて苦を抜き、喜は勸めて之を慶ばしめ、前の三を進策するが故に、利他と名く。四には前の所化を捨して、更に餘人を益するが故に、利他と名く。次第是の如し。

【四三】以下、第四に其三縁の分別を明す今三縁を辨ずるに三の別あり先づ涅槃に依るを明す。
【涅槃論】第五。
【涅槃論】第十四。

第四門の中に、其三縁の分別を明す。三縁と言ふは、一には衆生縁、二には是れ法縁、三には是れ無縁なり。『地經論』の中には、衆生念、法念、無念と名く。縁念一なり。此三縁を辨ずるに、略して三の別有り。一には『涅槃論』に依らば、直に化益に就いて三種を聞分す。此門の中に於て、諸の衆生を縁じて具樂を與へんと欲するを、衆生縁と名け、諸の衆生所須の物を縁するを、法縁と名け、如來を縁する者を、名けて無縁と曰ふ。前の二

【二には等】次二に地論所説による【地論】第五。

【三には等】次三に涅槃、地持等による。中に四義を分ち、一に辨相。【涅槃】第十四。【地持】第六。

を簡ぶが故に。故に彼經に言はく、「慈とは、多くは貧窮の衆生を縁ず。如來大師は永く貧窮を離れて第一の樂を受く。若し衆生を縁ずれば、即ち佛を縁ぜず。法も亦是の如し。是故に佛を縁するを、名けて無縁と曰ふ」と。此れ生を縁じて樂を與へんと欲する時佛を縁ぜず、法を縁じて衆生に與へんと欲するの時も亦佛を縁ぜざることを明す。前の二縁の中には、並に佛を縁ぜず。前の二を簡別するが故に、無縁と曰ふ。全く縁ぜざるには非ず。既に縁ぜざるには非ず。何の義をか之を縁する。佛の樂を將て衆生に與へんと欲するが故に。若し佛の樂を將て衆生に與へんと欲すれば、便ち是れ法縁なり。何が故に無と言ふや。佛は是れ人にして、是れ法に非ざるを以ての故に。若し佛は是れ人ならば、即ち衆生縁なり。何の義をか無と言ふ。所化の諸の衆生を別たんが爲の故に。慈の如く既に然り。悲等も亦爾なり。二には「地論」に依らば、前の二は化益、後の一は觀入なり。三種を開分す。此門の中に於て、生を縁じて樂を與ふるを、衆生縁と名け、化生の法を縁するを、名けて法縁と曰ひ、諸法空を觀するを、説いて無縁と爲す。慈行是の如し。悲等も亦然なり。三には「涅槃」に「地持論」等に依らば、初の一は化益、後の二は觀入なり。三種を離分す。此門の中に於て、四義を分別す。一には其相を辨じ、二には人に約して分定し、三には通別を論じ、四には大小に具不具あることを明す。相を辨ずと言ふは、諸の衆生を縁じて其樂を與へんと欲し、父母、妻子、眷屬を縁する如きを、衆生縁と名く。諸の衆生を縁するは、但是れ五陰生滅の法數にして、無我無人なるを、名けて法縁と爲

【維摩】 觀衆生品

【次に等】二に人に約して分定す。
【地持】第六。

【次に等】三に其通局を明す。

す。問うて曰はく、「法縁、我人衆生等の相を見ずんば、云何が慈を行ずる。」一釋に兩義有り。一には無我を見るに由つて、諸の衆生妄りに我人の爲に纏縛せらるるを念す。深く哀愍すべし。所以に慈を生ず。二には生の爲に斯の如きの法を説かんとを念す。是れ即ち眞の利樂なり。故に慈を行すと名く。五陰の空を觀するを、名けて無縁と曰ふ。問うて曰はく、「無縁は云何が慈を行ずる。」一還兩義有り。一には法空を見るに由つて、諸の衆生の妄りに虚法の爲に纏縛せらるるを念す。所以に慈を生ず。二には生の爲に斯の如きの法を説かんと念す。故に慈を行すと名く。故に「維摩」に言はく、「自ら我當に衆生の爲に斯の如きの法を説くべし」と念す。是れ即ち名けて眞實の慈と爲すなり。第一義の樂は衆生を利するが故に」と。問うて曰はく、「彼此皆我人無し。誰か自念を起して衆生の爲に説く。」釋して言はく、「一經に幻化は眞ならずと説く。所以に無と名く。幻人無きにあらず。故に經に説いて言はく、「譬へば幻士の、幻人の爲に説くが如し。當に是意を建てて爲に法を説くべし」と。故に自念して其が爲に説くことを得るなり。慈の如き既に然り。悲等も同く然なり。此一門に約して分定す。【地持】に説くが如し。衆生縁とは、外道と共になり。外道も亦世俗の淨禪に依つて四無量を修す。彼衆生を縁じて其樂を與へんと欲す。故に衆生縁は彼と共になるなり。法縁無量は二乘と共になり。二乘も亦五陰の法數我人無しと見る。故に無縁無量は聲聞辟支佛と共にならず。二乘は法の性相畢竟空なりと見ること能はざるが故に。此一門に慈等に就いて、其通局を辨す。通じて之を論ずれば、四無量

【次に等】四に大
小に具不具あるを
明す。

の中に皆三縁有り。諸の衆生を縁じて樂を興へ、苦を抜き、慶喜し、等益するは、是れ衆生縁なり。但五陰を縁じて四等を行ずるは、是れ其法縁なり。陰の法無しと知つて四等を行ずるは、是れ其無縁なり。義に随つて分別するに、前の三無量は、是れ其有行なり。唯衆生縁なるが故に。後の一は空行なり。唯法縁及與び無縁有り。此説の如きは、前の三種の中の法縁無縁は、通じて攝して捨つと爲す。有相を捨つるが故に。捨の中の生縁は、攝して前の三に屬す。與樂の中は等く攝して慈門に屬し、拔苦の中は等く攝して悲門に屬し、慶物の中は等く攝して喜門に屬す。其れ猶六度のごとし、通じて即ち六の中に、並に空有を含む。別しては即ち前の五度は唯是れ有行、後の一は空行なり。無量は此に似たり。此三門次に大小に具不具有ることを明す。無量に二有り。一には小、二には大なり。六識、七識の分別縁修する、之を名けて小と爲し、第八識の中の無量等く益する、之を名けて大と爲す。分別心は彼此を縁別するを以て、自然に等く一切を益すること能はず。故に名けて小と爲す。眞心は平等にして彼此を簡ぶこと無し。自然に等く益するが故に、稱して大と爲す。大小相對するに、義別に三有り。一には凡を簡んで聖に異にす。小無量心は凡夫の所修にして、唯衆生縁なり。大無量とは、賢聖の所習にして、人相及び法相を破離するが故に、唯法縁及與び無縁有り。二には小を簡んで大いに異にす。凡夫二乗を同じく名けて小と爲し、菩薩及び佛は、之を説いて大と爲す。小無量心は小人の所修にして、唯生縁及與び法縁有り。大無量心は大人の所習にして、唯無縁有り。佛菩薩は法空を見るを以ての

【大智論】 第三十

【涅槃】 第十四梵行品

【四】以下、第五に體用の別を明す中、先づ一に體用の分別を明す【雜摩】觀衆生品

故に、三には實に就いて、通じて論ず。大小の無量に、並び三縁を具す。小無量の中の分別の心は、諸の衆生を緣じて利益を爲さんと欲す。是れ衆生縁なり。衆生は但是れ五陰なりと觀察するは、是れ其法縁なり。陰空寂なりと觀するを、名けて無縁と爲す。此無縁を前に望むれば、是れ大なり。後の眞行に對すれば、猶名けて小と爲す。故に『大智論』に、十八空觀を小慧門と名け、眞證般若を大慧門と名く。此も亦同く爾なり。大無量の中に心の分別無くして、而も能く普く一切衆生を益するを、衆生縁と名く。故に『涅槃』の中の慈は衆生を益して而も言ふ。我時に實に彼に往かずと。慈善根の力は、諸の衆生をして、是の如きの事を見せしむ。此は即ち是れ其大無量の中の衆生縁なり。衆生を益すと雖も、而も愛見無し。故に『涅槃』に云はく、「譬へば母牛の行いて水草を求むるが如し。愛念を以ての故に、若は是不足なるも、忽然として還歸る。諸佛世尊は是の如くならざるなり」と。又佛菩薩は取捨の心亡じて、而も能く過く一切法界を照すを、名けて法縁と爲す。神知永絶して、而も能く常に一切法如を照すを、名けて無縁と爲す。三縁是の如し。

（四四）第五門の中には、義別に二あり。一には體用の分別、二には主伴の分別なり。體用と言ふは、初の一の慈行は是れ其德體、後の三は徳用なり。『雜摩』に説くが如し。慈は是れ體なるが故に、一の慈門の中に法界の一切の行徳を統含す。故に彼經に言はく、「寂滅の慈を行す。所生無きが故に。不熱の慈を行す。煩惱無きが故に。等の慈を行す。三世を等くするが故に。乃至六度の慈を修行す」等と。良に眞實如來藏の中の恆沙の佛法は同一の體性

【次に等】二に主
伴を論ず。
【龍樹の言ふ】大
智論第二十。

【四五】以下、第六
に其修得の相を明
すに三あり。一に
衆生縁に就いて明
す。中に二、先づ
離欲得。

にして、互に相成するを以ての故に、之に依つて徳を成ず。徳は只是の如く、一の中に皆一切を備ふ。是以に慈の中に、法界の一切の行徳を具することを得。後の三は用なるが故に、人に随つて化益す。故に彼經に言はく、「何をか謂つて悲と爲す。菩薩の功徳は皆一切衆生に與へて之を共にす。何をか謂つて喜と爲す。饑益する所有れば、歡喜して悔すること無し。何をか謂つて捨と爲す。福祐する所有るも、稀望する所無し」と。此等は皆是れ人に對する用なり。一相是の如し。理實には四行齋く體と爲すことを得、並に用と爲すことを得。互に相依るが故に。此一門 次に主伴を論ず。龍樹の言ふが如し。慈は王の如く爲し、餘の三は隨從すること民の王に隨ふが如し。慈心は正しく是れ興樂の意なり。故に説いて主と爲す。悲の拔苦無ければ、興樂成せず。故に悲は慈に隨ふ。喜の嫉を除くこと無ければ、興樂勝れず。故に喜は慈に隨ふ。捨の礙を除くこと無ければ、興樂等しからず。故に捨は慈に隨ふ。蓋し乃ち只一門に據つて論を爲すなり。理實には四行皆主と爲すことを得、齊く伴と爲すことを得。互に相隨ふが故に。

第六には、其修得の相を明す。中に於て、先づ衆生縁に就いて説き、次には法縁に就き、後には無縁に就く。衆生縁の慈得に二種有り。一には離欲得、二には是れ修得なり。離欲得とは、衆生は本來曾て諸禪に依つて無量を修得し、後に還つて退失して下の煩惱を起す。後に禪定を修して下の欲を離する時、本失ふ所の者の今還つて之を得るを、離欲得と名く。離欲得なりと雖も、而も現前せず。要す方便を假る。譬へば人有り、財、他方に在つて復

【毘婆沙論】 第八

【毘婆沙論】 第十四

【地持論】 第六。

【次に等】 次に修得を明す。

【成實】 第十五、四無量定品。

己おのれに屬ぞくすと雖いへども、現げんに用もちふることを得えず、要まず方便ほうべんを須もちふるが如ごとし、「方便ほうべんは如何いかにん。」一先づ觀かん心しんを以もつて衆しゆじゆ生じやうを分ぶん定ぢやうして、以もつて七しち品ひんと爲なす。觀かんの中に三さんを分わかつ。上じやう中ちゆう下げの別べつなり。怨えんの中ちゆうも亦また爾になり。前まへに通つうじて六ろくと爲なす。中ちゆう人を一いちと爲なす。合がつして七しちと爲なすなり。良まことに以もつれば、中ちゆう人にんは多た階かいの異い無し。故ゆゑに合あして一いちと爲なす。「毘婆沙論びはさろん」及び「涅槃經ねはんぎやう」も同じく此この判はんを爲なす。人ひとの境きやうを分わかつて、以もつて九く品ひんと爲なすと言いふは、當ま應さに謬いつなるのみ。彼かの「涅槃經ねはん」等は、怨えん觀かんの中に就ついて所しよ化けを分ぶん定ぢやうす。「地持論ぢぢろん」の中には、苦く樂らく等に就ついて所しよ化けを分ぶん定ぢやうす。彼かの苦く樂らく等は猶なほ怨えん觀かんの中ちゆうのごとし。己おのれを損そんするを苦くと名なくるは、猶なほ是このれ其その怨えんのごとし。己おのれを益やくするを樂らくと名なくるは、猶なほ是このれ其その觀かんのごとし。境きやう別べつ既に然しかなり。次に起おこ修しゆに對たいす。「成實じやうじつ」の如ごときに依よらば、慈じ悲ひ喜きを修しゆす。始はじめに上じやうの觀かんを緣えんじ、終すゑに上じやうの怨えんを緣えんす。上じやうの觀かんは益やくし易やすく、上じやうの怨えんの所ところは利りを與あたへ難がたきが故ゆゑに。彼かの宗しゆ所しよ説せつの慈じ悲ひ及及び喜き究きゆう竟じやうじて成じやうずる時ときを、即すなはち名なけて捨すてと爲なす。「先まづ別べつして修しゆ習じゆする相さう狀じやうは如何いかにん。」一慈じ心しんを修しゆする如ごとき、品ひん別べつに七しち有り。其その第一だいいち品ひんは先まづ上じやう觀かんを緣えんじて、上じやう樂らくを與あたへんと欲ほつす。次に中ちゆう觀かんを緣えんじて、中ちゆう樂らくを與あたへんと欲ほつす。後のちに下げ觀かんを緣えんじて、下げ樂らくを與あたへんと欲ほつす。其その第二だいに品ひんは是このれ中ちゆう觀かんを緣えんじて、齊ひらく上じやう觀かんに等ひとしく上じやう樂らくを與あたふるに同ひとじく、次に下げ觀かんを緣えんじて、中ちゆう樂らくを與あたへんと欲ほつす。後のちに中ちゆう人にんを緣えんじて、下げ樂らくを與あたへんと欲ほつす。是このの如ごとく次第しだいでして乃すなはち第七だいにに至いたり、彼かの上じやう怨えんを緣えんじて、齊ひらく上じやう觀かんに同ひとしじく、等ひとしく上じやう樂らくを與あたふ。心しん調てうし難がたきを以もつて、七しち品ひんに修しゆ習じゆして、方まに能よく齊ひらく益やくす。七しちが中ちゆうの前まへの六むは慈じの方便ほうべんを修しゆし、第七だいにの

一品は慈行成就す。前の六の方便を、直に名けて慈と爲す。第七の一品は、亦是慈亦是捨なり。與樂を慈と名け、平等を捨と名く。慈を以て捨に對して、之を修すること既に然り。悲喜を捨に對して、之を修することも亦爾なり。唯拔苦、慶物有るを異と爲す。若し「毘曇」「毘婆婆」等に依らば、慈悲喜を修すること「成實」と同じ。然るに彼宗の中には、第七品に至つて唯慈悲喜行成就と名く。名けて捨と爲さず。此觀想は是れ申容亡懷の心に非ざるを以ての故に。第七品は是れ捨に非ざるを以ての故に、別に須らく修習すべし。「彼法は云何。」「中に於て、亦七品の差別有り。其第一品は先づ中人を緣じて捨心を修す。中品の人の所には先づ憎愛無く、捨を行すること易きが故に。其第二品は下品の怨を緣じて齊く中人に同じく、其第三品は中品の怨を緣じて亦中人に同じく、其第四品は上品の怨を緣じて亦中人に同じく、其第五品は下品の親を緣じて齊く中人に同じく、乃至第七は上品の親を緣じて齊く中人に同じ。此七品の中の前の六は方便、後の一は捨の成ずるなり。良に最後の上觀の處に成ずるを以ての故に、捨心を説いて無貪の性と爲す。問うて曰はく、「何が故に先づ三怨を捨し、却つて三親を捨するや。」「怨相は除き易く、親は捨し難きが故に。」問うて曰はく、「慈等は衆生を愛憐して能く利益を爲す。修習を須ふべし。捨心亡懷は深く益すること能はず。何を用て修するや。」釋して言はく、「捨無くんば、彼慈悲喜は復等く益すと雖も、多くは先づ親を益し、後に方に怨に及ぶ。是患を除かんが爲の故に、須らく捨を修すべし。又若し捨無くんば、慈悲及び喜は、親を益する心は易く、怨を利す

【地持】 第六。

【次に等】 三に法縁を辨ずるに、義の淺深に隨つて七重の別あること知るべし。

【次に等】 三に無縁を辨ずるに四あり。亦知るべし。

る心は難し。故に須らく捨を修すべし。又若し捨無くんば、彼慈悲喜は便ち愛見を成ず。故に須らく捨を修すべし。『毘曇』是の如し。大乘法の中も多く『毘曇』に同じ。故に『地持』の中には、慈悲喜の外に別に捨心を修す。衆生縁の行修得是の如し。次に法縁を辨ず。義の淺深に隨つて、略して七重有り。一には衆生の體は是れ五陰事相の法にして、我無くん無しと觀ず。二には衆生の體は是れ五陰生滅の法なるが故に、我無くん無しと觀ず。三には衆生の體は是れ五陰因縁の假法にして土木城の但因縁を假るが如く、我無くん無しと觀ず。四には衆生の體は是れ五陰妄相の法にして婁闍婆城の誑相有るに似たるが如く、我無くん無しと觀ず。五には衆生妄に法有りと想ひ、夢の所見の如く我無くん無しと觀ず。六には衆生の體は是れ眞實集用の五陰にして、夢の所見は皆恨心の作なるが如く、波は水の作なるが如く、亦人有つて繩を見て蛇と爲すも、蛇は是れ繩の作なるが如く、五陰も是の如く我無くん無しと觀ず。七には衆生の體は是れ眞實如來藏性の緣起法界にして、我無くん無しと觀ず。是の如く觀察するを、法縁を修すと名く。次に無縁を辨ず。中に於て四有り。一には五陰は假有性無にして土木城の如く、緣假無性なりと觀ず。二には五陰は妄相本無にして婁闍婆城の如く、遠く觀れば有に似たるも、近く觀れば本無なり、直に無性のみ非ず、亦城相も無しと觀ず。三には五陰は情有理無にして夢の所見の如く、但妄心より出でて心の外に法無しと觀ず。四には五陰は眞法の所集にして、其本性を窺むれば體は是れ眞如、古今常堪にして不起不滅なりと觀ず。是の如く觀察するを、無縁を修すと名

【四六】以下、第七に處に就いて分別するに四あり。一に所依處に就く。

【雜心論】 第七。

【彼論】 成實論第十五。

く。修得是の如し。

第七門の中に、處に就いて分別す。中に於て四有り。一には所依處、二には所緣處、三には修起處、四には成就處なり。所依處とは、四無量心は禪定に依つて起す。論說不同なり。『毘婆娑』の中に、有一論師説かく、「四無量は唯四禪、中間禪に依つて起す。餘は皆依らず」と。復有論師の説かく、「四無量は四禪、未來、中間、六地禪に依つて起す。四無色に非ず。所依の中に就いて、初禪二禪には悲無量無し。悲と喜とは違す。彼處に喜有り。是故に悲無し。未來中間三禪二禪には喜無量無し。彼處の地法には喜受無きが故に。慈捨の二行は六地に俱に起す」と。此前の兩家は『雜心論』の中に、擧束して對破す。『雜心論』の所立にも亦無量は六地禪に依ると説く。慈喜及び捨は、前に列する所の第二家と同じ。悲行に異有り。彼説に悲行は衆生の心を念ず。喜は是れ其衆生心を慶びしむ。兩ながら相返せざるが故に、初二禪も亦悲を起すことを得。『何が故に無色定に依ると説かざる。』『彼宗の無量は欲界の生の縁ず。無色は下の有漏を縁ぜざるが故に。是を以て依らず。成實法の中には、四無量心は具に八禪に依る。故に彼論に言はく、「は無量心は三界に皆有り」と。問うて曰はく、「喜心は初二禪に在り。三禪已上は云何が有ることを得ん。』『成實』に釋して言はく、「我喜は是れ喜根の性と説かず。但生を利せんが爲に、心清を得て濁らざるを、説いて名けて喜と爲す」と。故に上に之有り。』問うて曰はく、「云何が四空に依つて亦無量を起すと知る。』『成實』に釋して言はく、「經に説かく、「悲を修すれば空處

【地論】 第五。

【次に等】 二に所縁處に就く。

【彼論】 成實論第十五。

【次に等】 三に所起處に就く。

に生じ、喜は識處に生ず。捨を修すれば無所有處に生ず」と。明に知んぬ、通じて依ることを」と。問うて曰はく、「經の中には、「無量は非想に生ず」と説かず。「非想は無に應ず」と。釋して言はく、「彼有微なるが故に説かず。大乘の所論は凡夫、二乘及び小菩薩所修の無量は、「毘曇」と同じ。佛、大菩薩の四無量心は、具に八禪に依る。」問うて曰はく、「地論」には、「慈心等は欲色界の中に正習の果を受く」と説く。無色界に非ず。云何が説いて、諸佛、菩薩は具に八禪に依ると言ふや。」釋して言はく、「彼は世間の相に依つて説く。所以に過無し。」云何が知ることを得る。」「無色定の如し。經の中に説くが如く、悲心を修習して空處に生じ、乃至捨を修して無所有に生ず。餘心を説かず。」「成實」には、此を取つて「阿毘曇」の道理に應ぜざるに非ず。所依是の如し。此一門に次に縁處を辨ず。無量は衆生を縁じて起す。「毘曇」の如きに依らば、四無量心は唯欲界の衆生に依つて起す。上二界に非ず。欲界の中には苦有り、須らく釋すべきを以ての故に、偏に之を縁ず。上界は苦無し。所以に説かず。成實法の中には、通じて三界を縁ず。故に彼論に言はく、「有論師の説かく「無量は但欲界の衆生を縁ず」と。「是事云何」答へて曰はく、「何爲れか餘の者を縁ぜざらん。佛は慈心普く一切を覆ふと説く。豈獨り欲界のみならんや。又色、無色の諸の衆生等も、亦退没して惡道に墮する等有り。何爲れか縁ぜざらん」と。然るに「成實」の中に、無量は通じて三界を縁ずと説くと雖も、止一二千にして十方を論ぜず。諸佛、菩薩の無量は寬廣にして、衆生界を盡くして悉く皆普く縁ず。此二門次に起處

【雜心】第七。

【次に等】四に所成處に就く。

を明す。身に隨つて修起するを、名けて起處と爲す。「毘曇」の如きに依らば、身は欲界に在つて四無量を起す。上二界に非ず。「何が故に是の如くなる。」「雜心」に釋して言はく、「慈は瞋恚を治し、悲は害覺を止め、喜は嫉妬を除き、捨は貪恚を除く。此れ皆欲界の煩惱の對治なるが故に、欲界に起す。又慈は苦の衆生に樂を與へんと欲す。餘の三は隨つて助く。欲界には苦有るが故に、欲界に起す。上界には苦無し。是故に生ぜず。欲界の中に就いて、三天下の人は能く無量を起す。餘は皆修せず。「何が故に唯人のみにして、餘の四趣にして鬱單越に非ざる。」説に由つて起すが故に。「何が故に唯人のみにして、餘の四趣に非ざる。」人は方便多きが故に、能く修起し、天は苦樂多くして、背て修習せず。三塗の難處は修起すること能はざるが故に、餘趣に非ず。「成實」は、三界皆修起することを得。彼に「問うて曰はく、「有論師は、欲界は現に入ると説く。是事云何」答へて曰はく、「然らず。一切の生處皆能く現に入る」と。彼に復「問うて言はく、「若し上界に在つて亦修起することを得ば、即ち上界に死して還つて上界に生ず。報應に盡くすること無かるべし」と。釋して言はく、「上界は修起することを得と雖も、亦退失有り。故に還つて下に生ず」と。大乘にも亦説かく、「三界俱に起す。菩薩の所在常に修習するが故に」と。此三門つて次に成處を辨す。身に隨つて失せざるを、名けて成處と爲す。「毘曇」の如きに依らば、四無量心は性是れ有漏なり。下に在つて上を成ず。上に生ずれば、下を失す。是義を以ての故に、初禪、未來、中間に依つて修する所の無量は、但未だ退失せず。大梵已還は身に隨つて、何れの

處にしても皆成就することを得。上界に生ずれば失す。二禪に依る者は、二禪已還一切處に成ず。乃至四禪に依つて起る者は、四禪已還一切處に成ず。上に生ずれば即ち失す。成實法の中には、有漏は上に生じて下を失せず。上は下地の法に寄起することを得るが故に。是義を以ての故に、一切禪に依つて修する所の無量は、但未だ退失せず。三界の中に於て、身に隨つて何れの處にしても、皆成就することを得。故に彼一成就無量品に云はく、「一切處に於て一切有るなり」と。大乘も亦爾り。菩薩の修する所は、身に隨つて何れの處にしても、常に成就するが故に。

【四七】以下、第八に無量心の大小不同を明す。

【雜心】第六。

第八門の中に、無量心の大小不同を明す。略して十二有り。一には心體の不同なり。小無量心は、六識、七識之を以て體と爲し、大無量心は、眞識を體と爲す。二には心法の不同なり。小無量中の慈之與び悲は是れ無瞋の性、喜は是れ受の性、捨は貪の性にして、大無量心は是れ智慧の性なり。故に「雜心」に云はく、「大悲は是れ慧なり。一切の無量は皆大悲の攝なるが故に。餘の三種も亦是れ慧の性なり」と。慧を以て證入する法界門中の化益の法門を、説いて慈等と爲す。故に名けて慧と爲す。用に隨つて義分すれば、小と相似す。三には漏無漏の別なり。小無量心は、一向に有漏なり。妄を體と爲すが故に。大無量心は、一向に無漏なり。眞を體と爲すが故に。四には常無常の別なり。小無量心は、一向に無常なり。妄を體と爲すが故に。大は是れ常なり。眞を體と爲すが故に。五には心縁の不同なり。小無量心は、縁に攀じて分別す。大無量心は、心虚空の如くにして、一の

【涅槃】 第十四。

【涅槃】 第十四。

【涅槃】 同前。

【維摩】 勸衆生品

【地持】 第六。

分別無くして、而も能く普く一切衆生を益す。六には行縁の不同なり。『涅槃』に説くが如し。無量に四有り。一には縁にして自在に非ず。普く一切を縁する、之を名けて縁と爲す。自在に其利樂を與ふること能はざるを、非自在と名く。二には自在にして縁に非ず。父母、妻子、眷屬を縁するが如く、興樂無礙なるを、名けて自在と爲す。所益廣からざるを、稱して非縁と曰ふ。三には縁に非ず、亦自在に非ず。聲聞等の如く、小境界を縁す。故に非縁と名く。樂を與ふること能はざるを、不自在と名く。『若し小境を縁すれば、即ち無量に非ず。何が故に、經に「無量心にして非縁に有り」と言ふや。』釋して言はく、「此は是れ無量の中の分なれば、亦無量と名く。一比丘も僧中の分なるが故に、亦名けて僧と爲すが如し。四には亦是縁亦は自在なり。普く一切を縁する、之を名けて縁と爲す。益を與ふること無礙なるを、稱して自在と曰ふ。四が中の前の三は是れ小無量にして、後の一は是れ大なり。七には依法の不同なり。小無量心は世法に依つて成じ、大無量心は眞諦に依つて成ず。故に『涅槃』に云はく、「世諦の慈を捨して、第一義の慈を得」と。第一義の慈は、即ち是れ佛性なり。故に『涅槃』に云はく、「慈は即ち佛性、菩提、涅槃、常樂淨等なり」と。八には成徳の不同なり。小無量心は一行、一縁なり。大無量心は徳體闡通して、一の門の中に、曠く法界の一切の行徳を備ふ。『維摩』に説くが如し。九には起行の不同なり。小無量心は、小善を出生し、大無量心は、能く一切の功徳善根を生ず。故に『涅槃』の中に説く、「慈は能く一切の諸行を生ず」と。『地持』も亦爾り。十には功能の不同なり。

【雜心】 第七。

【涅槃】 第十四。

【雜心】 第七。

【四】 淨法聚第三十八段に四無礙の義を明すに七門の分別あり。第一に

「雜心」に説くが如し。小無量心は能く縁すれども、度すること能はず。大無量心は能く縁じ、能く度す。又小無量は能く小苦小惡の衆生を度し、大無量心は能く大苦大惡の衆生を度す。十一には位分の不同なり。小無量心は、位、世間に在り。大無量心は、位、出世に在り。謂ゆる、無量初地已上なり。故に「涅槃」に云はく、「世無量に因つて出世の無量を得」と。是故に出世を大無量と名く。十二には在人の不同なり。「雜心」に説くが如し。小無量心は二乗と共し、大無量心は聲聞、辟支佛と共せず。四無量心之を辨すること麤爾り。

四無礙の義に七門分別あり。名を釋す一。相を辨ず二。義に隨つて具に論ず三。相對して辨ず四。

第一に、名を釋す。四無礙とは、起説の智なり。説の智不同にして、一門に四を説く。

「四名とは是れ何んか。」一には法無礙、二には義無礙、三には辭無礙、四には樂説無礙なり。

言ふ所の法とは、汎く釋するに二有り。一には軌則を法と名け、二には自體を法と名く。法を知つて滯すること無きを、法無礙と名く。義無礙とは、汎く釋するに四有り。一

には所以を義と名け、二には義用を義と名け、三には義利を義と名け、四には徳義を義と

名く。義を知つて滯すること無きを、義無礙と名く。法を辨するの言は、之を日して辭と

爲す。辭に於て自在なるを、辭無礙と名く。語、物の情に稱ふを、名けて樂説と爲す。樂

に於て自在なるを、樂説無礙と名く。此四を經の中には亦四辨と名く。若し別して之を分

【四七】以下、第二に四無礙の相を辨ず。

【地經】論第十一

たば、無礙は是れ智、辨は是れ口業なり。智は諸法に於て知ること滯礙無きが故に、無礙と名く。言辭辨了の故に、稱して辨と爲す。通じては即ち心口俱に無礙と名く。齊く稱して辨と爲す。智は諸法に於て知ること滯礙無きが故に、無礙と名く。知法辨了す。故に復辨と名く。口の諸法に於て説くこと障礙無きを、名けて無礙と爲す。言辭辨了す、故に復辨と稱す。名義是の如し。」此一門

次に、其相を辨す。此四種の中、相に隨つて別分するに、前の二は是れ智、後の二は是れ説なり。智が中に本を窮むれば、唯一の知法なり。知法の中に就いて上深を窮むるが故に、別して義を分つ。説の中に本を窮むれば、其れ唯一の辭なり。辭の中の善巧なるが故に、復業を分つ。通じて之を論すれば、四俱に是れ智なり。智の所照は、四俱に是れ法なり。智に依つて言を起さば、四俱に是れ説なり。故に「地經」に言はく、「四無礙智は言辭説を起す」と。今は先づ法に就いて、其四種を辨す。餘類は知るべし。法の不同を辨するに、略して四門有り。一には教法を法と爲し、二には諦を義と爲す。此法義隨方の言音に依つて、辨宜の儀は之を用つて辭と爲す。辭の中の差別能く物情に應ずるを、名けて樂説と爲す。二には世諦を法と爲し、眞諦を義と爲す。世諦の中に於て、色等の諸法に各自體有るが故に、名けて法と爲す。又復世諦眞を顯すの軌も、亦名けて法と爲す。眞諦の理は深き所以有るが故に、號して義と爲す。一切の教法は、之を名けて辭と爲し、隨方の言音辨宜するの儀を、名けて樂説と爲す。三には眞諦を法と爲し、世諦を義と爲す。眞諦は是

【地經】 論第十一

れ其諸法の自體なるが故に、名けて法と爲し、世諦は是れ其眞を顯すの所以なるが故に、説いて義と爲す。又復義用を亦名けて義と爲す。辭業は上の如し。四には歷法の分別なり。一一の法の中に、皆四種を具す。『地經』に説くが如し。一の色の中の如き、總相に色を論ずる、之を名けて法と爲し、色中の差別は、之を目けて義と爲し、隨方證儀は、之を稱して辭と爲し、辭中の差別は、即ち樂説と名く。是の如きの一切なり。上來に辨ずる所は、通じては皆是れ法なり。法に依つて正知すれば、悉く皆是れ智なり。此に依つて言を起さば、四俱に是れ説なり。相を辨ずること顯爾り。此二門

【五】 以下、第三に各別に具の義を明す初に法無礙。【地經】 論第十一

次に、門に隨つて、別して具の義之を論ず。法無礙の中に、具に五種有り。一には教法を知るを、法無礙と名く。故に『地經』の中には、修多羅を知るを、法無礙と名く。是の如きの一切なり。二には世諦を知るを、法無礙と名く。故に『地經』の中には、色等の法を知るを、法無礙と名く。三には第一義を知るを、法無礙と名く。故に『地經』の中には、法無性を知るを、法無礙と名く。是の如きの一切なり。四には因行を知るを、法無礙と名く。故に『地經』の中には、菩薩行を知るを、法無礙と名く。五には果徳を知るを、法無礙と名く。故に『地經』の中には、佛の法身を知るを、法無礙と名く。是の如きの一切なり。義無礙の中の具にも亦五有り。一には教を知る中に所以を解釋するを、義無礙と名く。故に『地經』の中には、解釋の相を知るを、義無礙と名く。二には世諦を知るを、義無礙と名く。故に『地經』の中には、法の生滅を知るを、義無礙と名く。三には第一義を知る

【義無礙の等】 二に義無礙に就いて

【地經】 論第十一

【辭無礙の等】三
【辭無礙に就いて
【華嚴經】第五。

【樂說無礙の等】四
【樂說無礙に就いて。

【五】以下、第四
に諸法に就いて相
對して異を辨ず。
先づ法義相對する
に略して十四あり、
次に就いて知る
べし。

を、義無礙と名く。故に『地經』の中には、如實の境を知るを、義無礙と名く。四には因
行を知るを、義無礙と名く。故に『地經』の中には、善く十地の義の差別の相を知るを、
義無礙と名く。五には果徳を知るを、義無礙と名く。故に『地經』の中には、佛の色身の
時の事相等を知るを、義無礙と名く。辭無礙の中の具の義に五有り。一には名の無盡を知
つて起説自在なるを、辭無礙と名く。『云何が無盡なる。』『華嚴經』名號品に説くが如し。
四諦の名字は一世界の中に四十億那由他の別有り。一切世界の差別例して然なり。如來の
名字は一世界の中に百億萬有り。一切世界の差別類して爾なり。此を以て餘を類するに、
諸法の名字は齊く應に無盡なるべし。二には一切の衆生語言三昧を解知するを得て、隨つ
て何の言を以ても起説自在なるを、辭無礙と名く。三には無礙法蠱聲の相を得て、起説自
在なるを、辭無礙と名く。四には聞持一切の教を持つことを得て、起説自在なるを、辭
無礙と名く。五には義持一切の義を持つことを得て、起説自在なるを、辭無礙と名く。
樂說無礙の差別に五有り。一には義の不同を知つて、情に稱へて樂説し、二には教の不同
を知つて、情に稱へて樂説し、三には諸法の名字の不同を知つて、情に稱へて樂説し、四
には方言の不同を知つて、情に稱へて樂説し、五には無礙法蠱の聞音を以て、情に稱へて
樂説す。具の義是の如し。此三門
次に、諸法に就いて、相對して異を辨ず。法義相對するに、略して十四有り。一には能
詮、所詮に就いて異を分つ。一切の教を知るを、法無礙と名け、諸法の義を知るを、義無

【地持】 第六。

【地經】 論第十一

【地經】 論第十一
下同じ。
【地經】 論第十一
下同じ。

礙と名く。故に『地持』に云はく、「法の章句に於て、修慧謬らざるを、法無礙と名け、法相謬らざるを、義無礙と名く」と。二には能説、所説に就いて異を分つ。『地經』に説くが如し。力無畏、不共佛法、大悲智行、轉法輪の徳を知るを、法無礙と名け、所説の法を知るを、義無礙と名く。三には教中の總別に就いて異を分つ。『地經』に説くが如し。總じて如來所轉の法輪を知るを、法無礙と名け、佛所説の八萬四千の音聲の差別を知るを、義無礙と名く。四には教中の本末に就いて異を分つ。『地經』に説くが如し。修多羅を知るを、法無礙と名け、解釋の相を知るを、義無礙と名く。五には二諦の觀入に就いて異を分つ。『地經』に説くが如し。世諦の中の色等の諸法を知るを、法無礙と名け、眞諦の中の如實智の境を知るを、義無礙と名く。六には二諦の淺深に就いて異を分つ。亦名けて體用、異を分つと爲すことを得。眞諦を體と名け、世諦を用と名く。『地經』に説くが如し。法の無性を知るを、法無礙と名け、法の生滅を知るを、義無礙と名く。七には諸法の總別に就いて異を分つ。『地經』に説くが如し。總じて一切の諸法の自相を知るを、法無礙と名け、法の差別を知るを、義無礙と名く。八には諸法に就いて、時に約して異を分つ。『地經』に説くが如し。現在の法を知るを、法無礙と名け、過未の法を知るを、義無礙と名く。過未の法を以て今の所以を顯すが故に、説いて義と爲す。九には諸法の別智に就いて異を分つ。『地經』に説くが如し。法智の法を知るを、法無礙と名け、比智の法を知るを、義無礙と名く。十には諸乘の權實に就いて異を分つ。『地經』に説くが如し。實の一乘を知るを、法無礙と

【涅槃經】第十五
梵行品之二。

【地經】 論第十一

【地經】 論第十一

【辭樂の等】次に
辭樂の相對に就いて分つに略して七種あり。

【地經】 論第十一

名け、權説の三を知るを、義無礙と名く。『涅槃經』の中には、三乘の別を知るを、法無礙と名け、實の一乗を知るを、義無礙と名く。十一には通じて諸乘の淺深に就いて異を分つ。三乘の人第一義智を知るを、法無礙と名け、三乘の人世諦の智を知るを、義無礙と名く。故に『地經』に説かく、「第一義の無我慢相を知るを、法無礙と名け、世諦の中の無我慢相を知るを、義無礙と名く」と。三乘の上人の證理の慧を、第一義の無我慢相と名け、陰界等を知るを、世諦の中の無我慢相と名く」と。十二には偏に大乘の因の中の實相に就いて異を分つ。諸地の實を知るを、法無礙と名け、諸地の相を知るを、義無礙と名く。故に『地經』に説かく、「菩薩行を知るを法無礙と名け、十地の義の差別の相を説くを知るを義無礙と名く。十三には偏に大乘の果中の體德に就いて異を分つ。涅槃の體を知るを、法無礙と名け、佛の法身、解脱、般若の三徳の差別を知るを、義無礙と名く。故に『涅槃』に云はく、「法は、謂ゆる、大般涅槃なり。義は、謂はく、法身解脱般若なり」と。十四には偏に大乘の果中の體用に就いて異を分つ。『地經』に説くが如し。佛の法身を知るを、法無礙と名け、佛の色身の時の事相等を知るを、義無礙と名く。法義相對せり。實には無量有り。且く斯を論ずるのみ。辭樂の相對に就いて異を分つに、略して七種有り。一には同體義分す。言を以て理を顯す、之を名けて辭と爲し、辭の中の差別人の好む所に隨ふを、即ち樂説と名く。『地經論』の中には、多く此門に依る。二には總別異を分つ。總説を辭と名け、別説を樂と名く。故に『地經』に言はく、「次第して聞ぜざるを、名けて樂説と爲す」と。

【地經】論第十一

【涅槃】南本第三十二。地經論第十一

【五】以下、第五に大小有無の義を明す。

【涅槃】第十五梵行品之二。

三には多一に異を分つ。一名法を顯す、之を名けて辭と爲し、多名法を顯は、人の異業に隨ふを、名けて樂説と爲す。故に『地經』に言はく、「假名の法に於て假名を以て説く、之を名けて辭と爲す。前の名を壞せず。假名に異にして説くを、名けて樂説と爲す」と。四には微妙異を分つ。惡の衆生に於て麁言呵謔を、唯辭と名くることを得。妙言説法を人をして愛好せしむるを、方に樂説と名く、五には所隨異を分つ。『地經』に説くが如し。音に隨つて異説する、之を名けて辭と爲し、心に隨つて異説するを、名けて樂説と爲す。六には自他異を分つ。諸佛菩薩の隨自意語、之を名けて辭と爲し、隨他意語、之を説いて樂と爲す。是二種の語は『涅槃』に説くが如し。七には法に約して異を分つ。亦名けて智に約して異を分つと爲すことを得。『地經』に説くが如し。世諦に依つて正見に法を説く、之を名けて辭と爲し、第一義に依つて不倒に法を説くを、名けて樂説と爲す。此れ教授觀入して時に據つて語す。亦眞諦を宣説するを辭と名け、世を説くを樂と稱することを得。辭樂の異理亦無量なり。且く斯を説くのみ。此四門

(五)次に、大小有無の義を明す。通じて之を論すれば、大小皆有り。小乘法の中には、唯是れ利根の阿羅漢のみ得。餘の者は皆無し。大乘法の中には、種性已上一切皆具す。若し復通じて論すれば、十信の菩薩も亦分に之を得。隱顯別して論すれば、大には有り、小には無し。故に『涅槃』に云はく、「聲聞緣覺は四無礙無し」と。問うて曰はく、「經に説かく、摩訶拘絺羅は四無礙第一なり」と。今云何が小乗の中には無しと言ふや。『釋』に兩義有り。

【經】 涅槃經。

【涅槃】 第十五。

一には多少の分別なり。小乗の所得は少きが故に無と名く。河に水少きを、名けて無水と爲すが如し。此も亦是の如し。故に經に説いて言はく、「聲聞の人或は一を得る有り、或は復二を得。若し具に得れば、是處有ること無し。具せざるを以ての故に、其無を宣説す。大は具に得るが故に、無礙有り」と説く」と。二には取捨の分別なり。小乗の人は、法に於て取著して、自然に等く諸法を照すること能はざるが故に、無礙無し。諸佛菩薩は心に取著無く、自然に等く一切の諸法を照すが故に、無礙有り。故に「涅槃」に云はく、「取著有る者は、即ち無礙無し。取著無ければ、乃ち無礙有り」と。問うて曰はく、「通に就いて大小齊く得と宣説して、應に好るべし。何ぞ須らく別に就いて、小は得ずと言ふべき。」釋して言はく、「四無礙智は是れ上の功德なることを顯さんが爲なり。小乗の人の中には、之を得る者少し。設ひ得る者有りともし、具せず、勝ならず。是故に別に就いて、其れ得ずと道ふ。」問うて曰はく、「無礙は別に就かば唯大にして、小に在らずんば、戒定慧等も亦是の如くなりや不ぞ。」釋して言はく、「齊く類するに、理も亦傷くること無し。但戒定等は是れ通行門なれば、凡聖大小咸く皆之を得。四無礙智は是れ上行門なれば、上人に方に有り。是故に設ひ通ずれども、唯小乘利根の羅漢に通ず。勝を彰し劣を隠すは、唯大乘に在り。」問うて曰はく、「無礙は是れ上の功德なれば聲聞に通ずることを得ん。力無畏等は何ぞ是の如くならざる。」釋して言はく、「力等は是れ上上門なるが故に、小乗の人は一向に得ず。然るに徳の階降の相は一准に非ず。或は功德有り。唯佛にのみ之有り。」地持」に説くが如し。

【五】以下、第六に大小不同の義を明す。中に六、一に體性の不同。

【龍樹の説く】大智論第二十五。

【地持】論第三。【何者か等】二に依地の不同。

【龍樹の説く】大智論第二十五。

謂はく、諸習を斷じ、及び佛の一切種の妙智等なり。或は功徳有り。佛菩薩に有り。餘の者には皆無し。謂はく、首楞嚴定及び不思議解脱門等なり。或は功徳有り。唯佛、菩薩、利の羅漢にのみ有り。餘人には皆無し。謂はく、四無礙、無諍、願智、邊際智等なり。或は功徳有り。唯佛、菩薩、聲聞、緣覺の四人に之有り。謂はく、三明等なり。或は功徳有り。唯佛、菩薩、聲聞、緣覺、那含の人にのみ有り。謂はく、滅盡定なり。或は功徳有り。唯是れ三乘の賢聖に之有り。謂はく、三無漏根なり。或は功徳有り。凡聖皆行ず。謂はく、戒定等なり。徳門不同にして、一類すべきに非ず。相並ぶことを得ず。此五門

次に、大小不同の義を明す。不同に六有り。一には體性の不同、二には依地の不同、三には緣境の不同、四には緣心の不同、五には開化の不同、六には起説の不同なり。體の不同とは、小乘の無礙十智を體と爲す。十智と言ふは、謂はく、四諦智、法智、比智、盡智、無生智、等智及び他心智なり。龍樹の説くが如し。辭法無礙は、唯等智の性なり。名を緣するを以ての故に。樂説無礙に九智の性を具す。一の滅智を除く。滅智は無を緣じて、衆生の根欲性等を緣ぜず。樂に隨つて説くが故に。義無礙とは、十智の性を具す。十智の所緣は、皆是義なるが故に。大乘法の中には、皆是れ一の如實智にあらすといふこと莫し。

【何者か如實なる】『地持』に釋するが如し。謂はく、清淨智、一切智、無礙智は、是れ如實の智なり。何者か是れ其依地の不同なる。『地』は、謂はく、九地なり。欲界の八禪は、是れ其九なり。龍樹の説くが如し。小乘法の中には、義及び樂説は九地に在り。九地の所

【雜心】 第六。

【何者か等】 三に
緣境不同。

【何者か等】 四に
緣心不同。

【何者か等】 五に
開化不同。
【地經】 論第十一

知は皆是れ義なるが故に、義無礙智は九地に在り。九地の心に依つて諸の衆生の根欲性等を緣じ、他の爲に説くが故に、樂説無礙も亦九地に在り。問うて曰はく、「若し四空定に依つて衆生の根欲性等を緣じ、樂説を起すことを得と言はば、彼に依つて他心通を起すことを得るや不や。」釋して言はく、「得ず。論に、五通は四禪に在つて餘定に在らずと説くが故に、四空に依つて、衆生の根欲性等を緣じて樂説を起すと雖も、明見すること能はず。故に他心通無し。法辭無礙は名を緣じて起すか故に、唯欲界及び初禪地に在り。『雜心』の所説は、欲界及び四禪地に在り。大乘法の中には、諸佛菩薩は起用自在にして、四無礙慧齊く九地に依る。何者か是れ其緣境の不同なる。『聲聞の人は但小乗の十二部經を緣するを、法無礙と名け、陰、界、入、四眞諦等を緣するを、義無礙と名く。陰等を知ると雖も、總相麤知つて深細なること能はず。小乗の法を説くを、辭無礙と名け、小乗の法を説いて小乗の心に應ずるを、樂説無礙と名く。諸佛菩薩は一切の法を知るを、法無礙と名け、一切の義を知るを、義無礙と名け、一切の法を説くを、辭無礙と名け、一切の法を説いて一切の心に應ずるを、樂説無礙と名く。此等は前の第三門の中に、具に廣く分別するが如し。『何者か是れ其緣心の不同なる。』『聲聞の人は、法義等に於て分別攀緣するを、名けて無礙と爲す。諸佛菩薩は深く實性を證し、妄想を捨離す。無念無緣にして能く普く一切法界を照すを、名けて無礙と爲す。何者か是れ其開化の不同なる。』『地經』に説くが如し。菩薩は或は一音を以て法を説き、衆生をして解せしむれば、即ち解了を得。一音と言ふは、或

【何者か等】 六に起説不同。

【地經】 論第十一

【五四】 以下、第七に四無礙を十力等に對し、其本末次第の義を明す。

は方言に隨ひ、或は法別に隨つて、以て一を論ずるなり。或は種種音もて説いて、一切の大衆生をして解せしむれば、即ち解了す。種種と言ふは、或は方言に隨ひ、或は法異に隨つて、種種を彰すなり。或は放光して説き、生をして解了せしむれば、即ち解了を得。或は一切の風鈴樹等を以て法音を宣説し、人をして解了せしむれば、即ち解了を得。何者か是れ其起説の不同なる。二、不同に六有り。一には音聲の不同、諸佛菩薩は法盡聲有つて心に分別無く、自然に普く諸の衆生の心に應じて爲に法を説く。聲聞は能はず。二には方言の不同、諸佛菩薩は衆の語言三昧を解することを得、能く一切の差別に隨つて爲に説く。聲聞は能はず。三には名字の不同、諸佛菩薩は名無盡を知つて、一一の法の中に無量の名を説く。聲聞は能はず。四には現議の不同、諸佛菩薩は或は口言を以て現に法を説き、或は自身の諸の毛孔の中に於て現に法を説き、或は但光を放つて現に法を説き、或は一切の風鈴樹等に依つて現に法を説く。聲聞は能はず。五には所説の不同、【地經】に説くが如し。十方の一一の微塵の中に、各無量の不可說界塵數の法門有り。諸佛菩薩は能く具に宣説す。聲聞は能はず。六には廣狹の不同、諸佛菩薩は身、法界に充て、一時に等しく説く。聲聞は能はず。此六合して起説の不同と爲す。大小不同の差別是の如し。此六門。

次に、無礙を以て力無畏に對し、其本末次第の義を彰す。德實同體にして、前後有ること無きも、相の起用に隨ひ、本末の次第の義無きに非ず。本末に二有り。一には十力を本と爲す。十力に依るが故に、四無礙を起し、衆の爲に法を説く。力無畏に依つて、諸の外

【龍樹の等】 大智
論第二十五。

【五五】 淨法聚第三
十九段に菩薩四無
畏の義を明す。【大智論】 第二十
五、第五。

道を破し、四無畏を説く。十力に依るが故に、一切智漏盡無畏を起す。四無礙に依つて能く法を説くが故に、後の二種を起す。能説彰道及び盡苦無畏なり。二には十力を本と爲す。十力に依るが故に、四無畏を起す。力有るを以ての故に、他に於て怯れず。四無畏に依つて、四無礙を起す。畏れざるを以ての故に、能く他の爲に説く。故に龍樹の言はく、「十力に依るが故に、四無所畏を説く。四無畏を以て十力を莊嚴し、四無畏に依つて四無礙を説き、四無礙を以て無畏を莊嚴す」と。四無礙の義略して辨ずること疊兩り。

菩薩四無畏の義。

菩薩の無畏は、『大智論』に説くが如く、化心怯れざるを、名けて無畏と爲す。無畏不同にして、一門に四を説く。四名とは是れ何ん。一には總持不忘說法無畏、二には盡知法藥及び知衆生根欲性心說法無畏、三には善能問答說法無畏、四には能斷物疑說法無畏なり。總持と言ふは、略して二種有り。一には聞持能く教法を持し、二には義持能く衆義を持す。此二種を以て名義を忘れず。故に畏る所無し。知法藥及び根性と云ふは、藥に二種有り。一には世間法、二には出世法なり。世法に三有り。一には欲界法、二には色界法、三には無色界法なり。出世にも亦三有り。一には聲聞乘法、二には緣覺乘法、三には大乘法なり。知る所の根性は、法に准じて知るべし。此に於て具に了するが故に、畏る所無し。能問答とは、一切の異見皆能く摧破し、一切の正法悉く能く諮請するを、名けて

能問と爲し、無量の衆生一時に問難し、一一の衆生無量の問を爲すに、菩薩一時に悉く能く酬對するを、名けて能答と爲す。此能有るを以ての故に、無畏を得。能斷疑とは、善く說義を解し、巧に物心を聞くを、能斷疑と名く。此能有るを以ての故に、無畏を得。四が中の初の一は陀羅尼に依つて法を説き、畏れ無し。後の三は智に依つて法を説き、畏れ無し。菩薩の無畏とを辨すること略して兩なり。

四攝の義に五門分別あり。名を釋す一。體を辨ず二。六度に約對して共に相收攝す三。位に就いての分別四。次第五。

【五六】淨法聚第四十段に四攝の義を明すに五門の分別あり。一に釋名

第一に、名を釋す。四攝と言ふは、化他の行なり。化行不同にして、一門に四を説く。

「四名とは是れ何ん」一には布施攝、二には愛語攝、三には利行攝、四には同利攝なり。

布施と言ふは、己が財事を以て、分つて他に布與す。之を名けて布と爲し、己を轍して人を惠む、之を口けて施と爲す。其布施に因つて、物を緣じて道に従はしむるを、布施攝と名く。問うて曰はく、「此れ檀度と何の別かある。」釋して言はく、「體は一なり。心に隨つて異を分つ。『異相は如何。』直爾に財を與ふるを、説いて檀度と爲す。施に因つて道を授くるを、布施攝と名く。此を『地持』の中には、隨攝方便と名く。彼愛語を説いて、以て正攝と爲す。布施は彼に順するが故に、隨攝と名く。愛語攝とは、美辭翫すべく、他をして愛樂せしむるを、名けて愛語と爲す。其愛言に因つて、物を緣じて道に従はしむるを、愛語攝と名く。此を『地持』の中には、攝方便と名く。此愛語を以て正しく善法を授くるを

【地持】第三方便種性品、下同じ。

【地持】 第三。

攝方便と名く。利行攝とは、經の中に亦利益攝と名くるなり。物を勧めて修を起さしむるを、名けて利行と爲す。道を以て彼を潤すが故に利益と云ふ。利に因つて物を縁するを、利行攝と名く。此を『地持』の中には、度方便と名く。勧めて可行情を修せしめ、生死を度離するが故に、名けて度と爲す。同利攝とは、名字不定なり。或は同事と名け、或は同行と云ひ、或は同利と稱す。通じて釋すれば、是れ一なり。中に於て別して分たば、同事は最下なり。菩薩化を爲すに、先に衆生の苦樂等の事を同するを、名けて同事と爲す。同行は次と爲す。菩薩化を爲すに、亦衆生と同じく諸善を修するを、名けて同行と爲す。同利は最上なり。物を化して徳を成じ、菩薩に示同するを、名けて同利と爲す。同に依つて物を縁するを、同利攝と名く。此を『地持』の中には、隨順方便と名く。巧に衆生の聞修の所行に隨ふが故に、隨順と名く。名義是の如し。此一門

【五七】以下、第二に轉相を辨す。異に就いて明す中、先づ布施攝。

【愛語攝の等】二に、愛語攝の體性

次に、體相を辨す。此四本を窮むれば、皆巧慧を用て體と爲さずといふこと莫し。別に隨つて之を論ずれば、差異無きに非ず。『異相は如何。』『布施攝の中の差別に四有り。一には財施、二には法施、三には無畏施、四には報恩施なり。菩薩思願の無貪と俱に身口業を起し、所施の物を捨して貧乏を濟慧するを、名けて財施と爲す。法を以て授與するを、名けて法施と爲し、厄難を濟拔するを、無畏施と名け、菩薩先に曾て他の恩恵を受け、今還つて其財法無畏を以て彼恩を酬報するを、報恩施と名く。此四種を用て、布施攝と爲す。』愛語攝の中に其語體を論ずれば、口の四邊を離れて衆生と語す、是れ愛語の體なり。故に

【地持】 第五。

集善行同、二には離惡行同なり。同利に二有り。一には自分徳同、二には勝進行同なり。故に『地持』に言はく、「此義、此善の、若は等、若は勝なるを、衆生に授與すること悉く己に與ふると同じきを、是を同利と名く」と。此諸行を用て、同利の體と爲す。問うて曰はく、「利行人を勸めて行を起さしむ。同行の中にも亦勸めて行を起さしむ。何の差別か有る。」釋して言はく、「直爾に他を勸めて修を起さしむるを、利行攝と名け、自作して他を勸むるを、名けて同行と爲す。一體相是の如し。此二門

【六】 以下、第三に六度に對して相收攝す。【地持論】 第二。

【地持】 第三。

次に、六度に對して、共に相收攝す。經論同じからず。『地持論』の中には、初の檀度に就いて布施攝を説き、中の四種に就いて同利攝を説く。己が所行を以て、他を勸めて修せしむるが故に。般若の中には、四攝を具足す。慧方便を以て、諸行を起すが故に。『阿差末經』に依らば、布施攝の中に一切の諸度を具して無極なり。布施の中に、具に財法無畏施有るを以ての故に、財施に檀を攝し、無畏施の中に戒を攝し、忍を攝す。此不害不惱他なるを以ての故に、法施に餘の精進、禪、慧を攝す。布施攝の中に此三義を具す。故に諸度を攝す。愛語攝の中に、戒を攝し忍を攝す。良に愛語は口の四過を離するを以て、戒分の所收なり。故に戒度を攝す。愛語を以ての故に、毀せず、罵せず。故に忍度を攝す。利行攝の中に、精進度を攝す。彼利行は衆生を教化するを以ての故に、精進を攝す。同利攝の中に、禪を攝し慧を攝す。所成の定慧、人と同じきが故に。又更に別して分たば、布施に檀を攝す。『地持』に説くが如し。餘の三は向の『阿差末經』に説くが如し。此三門 竟る。

【五九】以下、四位に就いて論ず。
【地經】論第三等

次に、位に就いて論ず。理實には、四攝遍く諸位に通ず。義に隨つて目く分たば、差異無きに非ず。『異相は如何。』『經經の説不同なり。』『地經』の中の如きは、菩薩初地に布施、愛語の二攝増上し、第二地の中に愛語増上し、第三地の中に利行増上し、第四地の中に同利増上し、五地已上には四攝齊等なり。何が故に初地に布施、愛語の二攝増上するや。『釋して言はく、』初地は檀を行じて他を利す。彼能く財を施すが故に、施増上す。彼法施を修するが故に、愛語増上す。』何が故に二地に愛語増上するや。』彼地は戒を持し、口の四過を離る。是れ愛語攝なるが故に、二地の中に愛語増上す。』何が故に三地に利行増上するや。』彼衆生に於て十種の救度の行を修習するが故に、三地の中に利行増上す。』何が故に四地に同利増上するや。』彼四地の中に衆生を捨せず、道品を修行するが故に、四地の中に同利増上す。』阿耨末經に依らば、布施は初地の中に在り、愛語は二地已上に在り、利行は八地已上に在り、同利は第十地の中に在り。故に彼經に言はく、『布施攝とは初發心と名け、愛語攝とは、已修行と名け、利行攝とは不退轉と名け、同利攝とは、一生補處と名く』と。初地の中に菩提心起るを、初發心と名け、彼地は檀勝るが故に、布施攝彼地の中に在り。二地已上に起す所の修道を、已修行と名く。初に持戒を修して口の四過を離るを、説いて愛語と爲す。故に愛語攝は彼地の中に在り。八地已上の法流水の中に佛に趣くこと無間なるを、不退轉と名く。第八地の中に、淨土生を化す。第九地の中辨才物を益するを、説いて利行と爲す。故に利行攝は彼地の中に在り、第十地の中の果を去ること遙なら

【六】以下、第五に因起次第の義を明す。略して三門修入の次第。

【地持】 第五。

【二には等】 二に起用の次第。

【地持】 論第五。

ざるを、一生補處と名く。彼地の所得は上如來に同じきを、名けて同利と爲す。又十地の中に、一切の生と善根の藏同じきを、亦同利と名く。故に同利攝は彼地の中に在り、位別是の如し。此四門

次に、因起次第の義を明す。徳は實に同時なり。人に隨つて別して化すれば、亦次第無し。今は且く修入、起用、化益一人に約就して、以て次第を論ず。中に於て、略して三門を以て分別す。一には修入の次第なり。施は外慳を除く。其行爲し易きが故に、先づ施を行す。愛語攝は口の因過を離る。戒分所攝の行なるが故に、次に作し難し。故に布施の後に愛語を修することを明す。利行攝とは、是れ集善の行なり。離惡は成し易く、集善は就き難し。故に愛語の後に利行を修することを明す。前の利行に因つて功徳を成就すること、他の上地の諸の菩薩と同じ。故に利行の彼に其同利を明す。故に「地持」に云はく、「菩薩の同利有り」と。是の如き同利は、他に示さず。己が所成の徳は、他の上地の諸の菩薩と同じきを有同利と名く。己が徳彼を化すと顯示することを須ひざるを、不示他と名く。二には起用の次第なり。先づ同事を明す。菩薩は尊高にして、衆生は卑下なり。彼我殊淳するは、攝化するに由無し。菩薩は化を爲すに、徳を迂して彼に従ひ、現に彼と同じきを、名けて同事と爲す。故に先に之を明す。故に「地持」に言はく、「菩薩に不同利示同利有り」と。菩薩の實徳彼と同じからざるを、不同利と名け、現化彼に同じきを、示同利と名く。此門の中に於ては、先後不定なり。「何が故に是の如くなる。」「所化の人に、貧有り、惡有

【三には等】 三に攝益の次第。

【地持】 第五。

り。若し貧人に對すれば、先づ布施を行じて其貧苦を濟ひ、次に愛語を行じて、之に授くるに法を以てし、後に利行を明して、物を勸めて修を起す。若し惡人に對すれば、先づ愛語を行じて、化して惡を捨せしめ、次に布施を行じて、隨順資養し、後に利行を以て、勸めて修を起さしむ。『地持』の中には、多くは後の義に従つて、以て次第を論ず。三には攝益の次第なり。此は一人に就いて、以て攝受益を論ず。其中の次第は初門と同じく、先づ布施を以て其身を攝取し、次に愛語を以て、其心を攝取して信解を生ぜしめ、次に利行を以て、之を化して行を起さしむ。其利行に因つて、彼を化して徳を成ずること、菩薩と同じきが故に次の第四に其同利を明す。故に『地持』に言はく、菩薩に同利示同利有り」と。菩薩化を爲すに、先づ彼人と同じく所行を修するを、有同利と名く。彼所化とは、同じく修して徳を成じ、示すこと菩薩に同じきを、示同利と名く。四攝の義之を辨ずること麤爾り。

大乘義章卷第十一

大乘義章 卷第十二

遠法師撰す

淨法聚因法中、此卷に三十一門有り。

五種菩提の義。五種方便の義。五種善法の義。五種の義。五戒の義。五品十善の義。五停心の義。五聖智三昧の義。五智の義。五忍の義。五種救護の義。六波羅蜜の義。六念の義。六種決定の義。六妙行の義。六種善法の義。六和敬の義。六修定の義。六三昧の義。六攝の義。七善律儀の義。七淨の義。七財の義。七種大乘の義。七地の義。八戒齊の義。

五願の義

【一】淨法聚第四十一段に五願の義を明す。【地持論】第六菩提品。

五願の義は『地持論』に出づ。求義を願と名く。願別不同なり。一門に五を説く。『五の名是れ何ん。』一には發心願、二には生願、三には境界願、四には平等願、五には大願なり。五の中の初の一は是れ自利の願、後の四は利他なり。發願心とは、菩薩自ら爲に菩提心を發し、大菩提を求むるを發心願と名く。後の利他の中、生願と言ふは、利他の身を求め、衆生の爲の故に、未來世に善趣に隨つて生じ、道を以て物を益せんと願するを、名けて生願と爲す。問うて曰はく、『何が故に惡趣を願はざる。』釋して言はく、『願心に其二種有り。一には拔苦の爲に惡道に生ぜんと願し、二には授善の爲に善趣に生ぜんと願す。善趣の衆生、道を受くるに堪ふるが故に。』境界願とは利他の智を求め、未來世に五

【論】 地持論第六

種無量の智を成就して、正しく五種無量の境界を知らんと願するを、境界願と名く。五無量とは、一には衆生境無量、二には世界無量、三には法界無量、四には調伏界無量、五には調伏界方便界無量なり。此義後の五無量の中に、具に廣く分別するが如し。平等願とは、利他の行を求め、未來世に、一切菩薩の四攝の行、平等成就せんと願するを平等願と名く。大願と言ふは、正しく利他を求め、未來世に衆生に於て、四攝の法を以て平等利益せんと願するを、名けて大願と爲す。故に論に釋して言はく、「大願とは即ち平等願なり」と。前の等行を以て、廣く人を利するが故に。五願是の如し。

【二】 淨法聚第四十二段に四戒の義を明すに五門の分別あり。第一に列名解釋料簡廢立。

五戒の義に五門の分別有り。名を列ねて解釋し廢立を料簡す一。遮性分別二。得に分別、具有五戒と言ふは、謂ゆる、不殺、不盜、不婬、不妄、不飲酒、是れ其五戒なり。此五能く防ぐが故に名けて戒と爲す。前の三は身を防ぎ、次の一は口を妨ぎ、後の一種は通じて身口を防ぐ。前の四を護るが故に。問うて曰はく、「身の中、打縛等の事は、並に是れ不善なり。何ぞ離を説かざる。」釋して言はく、「打縛は是れ殺の眷屬なり。但離を言はば、則ち已に具に攝す。故に別に論ぜず。又此過輕けれども世人持し難し。故に離を説かず。」問うて曰はく、「離殺、離盜の中に離邪を言はず。離婬の中に偏に離邪を言ふや。」釋して言はく、「殺盜は唯邪にして正無し。有らば皆須く離るべし。是故に須く邪を以て之を別すべからず。婬は則ち爾らず。正有り、邪有り。自妻を正と爲し、他を侵すを邪と爲す。」

【成實】 論第九、
五戒品。

【龍樹等】 大智論
第十三。

【雜心】 第十。

【論】 成實論第九

正姪を簡ばんが爲の故に不邪と説く。』問うて曰はく、『何が故に餘の戒法の中には、姪有れば皆離し、五戒の中には、偏に邪淫を離る。』釋して言はく、『五戒は在家の者に被る。在家の人は自妻斷じ難し。故に偏に邪を離る。又『成實』に言はく、『若し自妻を姪しては地獄に墮せず』と。是故に之を簡びて、偏に離邪と言ふ。問うて曰はく、『八戒も亦在家に被る。何の義を以ての故に、姪有りて皆離し、邪を離ると説かざる。』釋して言はく、『八戒は是れ在家の人、出家の法を持す。故に出家の者に似たり。姪有らば皆離す。又復八戒は、時短くして持し易く、姪有らば皆離す。五戒は盡形の時久く持し難し。故に偏に邪を離る持し難きを以ての故に。乃至在家の初果、聖人も亦離ること能はず。』問うて曰はく、『口の過に乃ち四種有り。何の義を以ての故に、偏に妄語を離れて、餘の三を離れざる。』

『龍樹釋して言はく、『妄語重きが故に、偏に説いて之を離ること。又復妄語は故作の心より起る。餘は則ち不定なり。或は故作有り、或は故作に非ず。又復妄語は餘の口過を攝す。兩舌等の罪、法に應ぜざるが故に、皆妄語と名く。若し離妄を説かば、餘は皆隨ふが故に、別して論ぜず。又兩舌等は在家持し難し。故に離を説かず。故に『雜心』に言はく、『出家の人、尙離るる能はず。況や在家の者をや』と。』問うて言はく、『飲酒は衆生を惱ます。何が故に離るべき。』論に言はく、『飲酒は是れ放逸門にして、多く罪過を生ず、是故に離るべし』と。』問うて曰はく、『一切の歌舞等の事、何ぞ離を説かざる。』『過微なるを以ての故に。又在家の者、常に持し難きが故に、所以に説かず。』此一門

【三】以下、第二に遮性を辨ず。

次に遮性を辨ず。五の中、前の四は性罪を遠離し、後の一戒は遮性を防禦す。前の性罪を離るるは是れ其戒體、後の遮性を離るるは是れ戒助の法なり。又前の戒體は是れ其所護、後の一の助法は是れ其能護なり。所護は某の如く、能護の者は蘭牆の如し。論説是の如し。此二門

【四】以下、第三に得戒を辨ずるに明す。具あるを

次に得戒を辨ず。分有り、具有り。有人説いて言はく、「五戒の法は、具受は乃ち得す」と。有人宣説すらく、「具せざるも亦得す」と。若し「毘曇」に依らば、具受は乃ち得す。分受は得せず。問うて曰はく、「若し具受得すと云はば、是義然らず。經の中に説くが如くんば、優婆塞の義、差別して五有り。一には一分、二には小分、三には多分、四には是足、五には斷淫なり。若し具受得ならば、云何が一分等の異有るを得ん。」毘曇に釋して言はく、「此れ持の中に據りて一分、小多分等と宣説す。受の事には關せず。五戒の中に於て具受得し竟りて、若し一戒に於ては、名けて一分と爲し、若し二戒を持すれば、名けて小分と爲し、若し三四を持すれば、名けて多分と爲し、若し具持する者を具足と爲す。若し自妻に於ても亦姪せざる者をば、名けて斷姪と爲す」と。若し「成實」に依らば、分受も亦得。其分齊を量りて、一一乃至具足を受く。故に彼論に言はく、「受の多小に隨うて皆得。極に據りて五と説く。分得を以ての故に經の中に一分多分、乃至斷姪と宣説す」と。大智論の中は「成實」の説に同じ。此三門

【毘曇】 雜心論第十。

【成實】 第九。

【大智論】 第十三

【五】 以下、第四に時分を辨ず。中に二、一に要期に約して辨ず。

次に時分を辨ず。中に於て二有り。一には要期に約して以て時分を辨ず。二には法に約

【法に約す等】二に法に約して辨ず

【成實法】論第八
正行日也。

【六】以下、第五に人趣形報に就いて分別す。

【成實法】論第九

【成實法】論第八

【成實論】論第九

して時を辨ず。要期に約して時分を辨ずと言ふは、要期に三有り。一には要期、一口夜を盡す。謂ゆる八戒なり。二には要期、一形を盡す。謂ゆる五戒、出家戒等なり。三には要期、未來際を盡す。謂はく、菩薩戒なり。法に約すと言ふは、毘曇に説くが如くんば、佛法有る時は、戒を受くれば則ち得、時として得ざる無し。戒は必ず佛法に依りて受くるを以ての故に。若し先づ受得すれば、佛法滅すと雖も、成就して失はず。成實法の中には、乃至法滅の人、十歳の時戒を受くるも亦得。問うて曰はく、「爾時、既に佛法無し。何に依りてか受得せん。」釋して曰はく、「爾時、人の授くる無しと雖も、但自ら要期して誓を結し惡を斷ずれば、亦能く之を得。此四門

(六)次に人、趣、形、報に就いて分別す。趣とは謂はく、五趣なり。『毘曇』の如きに依らば、五戒は唯人天の中に在りて受く。餘の趣に在らず。成實法の中には、人天鬼畜、一切皆得す。趣別是の如し。人に就くと言ふは、『毘曇』の如きに依らば、佛弟子等此戒を受くることを得。外道は得ず。成實法の中には、外道も亦得。『阿含經』の中に宣説すらく、「外道八戒を受くることを得」と。當に知るべし。五戒も亦應に受くることを得べし。『涅槃經』に説かく、「外道持戒の者を供養するに、無盡の報を得」と。明けし、亦受くるを得ることを。人別是の如し。形に就くと言ふは、『毘曇』の如きに依らば、男女受くることを得。餘は皆得ず。成實の如きに依らば、律儀品の中に、「黃門、無根、不能界等は皆之を得。男女に局らず」と。五戒の義、略して辨ずることは是の如し。

【七】淨法聚第四十三段に五品の十善義を明すに四門に分別あり。第一に【地經論】第四。

五品の十善に四門の分別あり。一には名を釋す。二には開合して相を辨ず。三には人位に約就して其通局を辨ず。四には所治の同異。

第一に名を釋す。五品の十善は『地經論』に出づ。順の義を善と名く。順に三種有り。一には順益上昇、之を名けて善と爲す。若し是義に従はば、下三有を極め、人天の善法を齊く名けて善と爲す。二には順理を善と名く。謂はく、無漏の行なり。若し是義に従はば、下二乘を極めて、所修の善法を皆名けて善と爲す。同く理に順するが故に。三には體順を善と名く。謂はく、眞識の中に成する所の行徳なり。相狀如何。『法界眞性』は是れ己が自體なり。體性緣起して行徳を集成す。行は性に異らず。還つて本體に即し、如に即して乖かざるを、稱して體順と曰ふ。若し是義に従はば、唯佛菩薩が體證の眞行は、是れ其善なり。良に所對の惡に三有を以ての故に、善に此三を分つ。三惡と言ふは、一には違損を惡と名く。若し是義に従はば、唯三塗の因、及び人天の中の別報の苦業は、是れ其惡なり。此に翻對するが故に初の善を宣說す。二には達理を惡と名く。取性の心に造る所の諸業、皆法理に違するを同く名けて惡と爲す。若し是義に従はば、上凡夫を極めて、有漏の善業を猶名けて惡と爲す。此に翻對するが故に、第二の善を説く。三には體違を惡と名く。一切の安心所起の諸業、眞體に違背するを、同く名けて惡と爲す。若し是義に従はば、上三乘に至りて、緣照の無漏を齊く名けて惡と爲す。妄心起るが故に、此に翻對するが故に、第三善を説く。名義是の如し。此一門竟る。

【八】以下、第二に開合不定を明す

【九】以下、第三に人位に約して其通局を辨す。

【今先づ等】善に二種ある中に善法について通局を辨するに四の別あり、知るべし。

次に第二門に、開合不定なり。總じては唯一善なり。凡を簡びて聖に異し、之を分つて二と爲す。聖は大小を分ち、凡に通じて三と説く。小の中に聲聞、緣覺を開分すれば、二種の善異なり。餘に通じて四と説く。大の中に其佛と菩薩とを離すれば、兩種の差別なり。餘に通じて五と説く。凡の中に別して分たば、人天の善異なり。餘に通じて六と説く。廣すれば無量なり。今一門に據りて、且く五種を論ず。開合是の如し。此二門

次に人位に約して其通局を辨す。人に五階有り。謂ゆる凡夫、聲聞、緣覺、菩薩、及び佛なり。『通局如何。』善に二種有り。一には善法、二には善行なり。『此二何んが別なる。』

『別に四種有り。』第一の義とは、法は理事に通じ、行は唯事に在り。第二の義とは、法は有情及與非情に通じ、行は唯有情に在り。第三の義とは、法は善惡、及與無記に通じ、行は唯是れ善なり。第四の義とは、法は自他に通じ、行は唯別に局る。『法云何が通ずる。』

『他人の所行、己が法と爲すことを得、己が所行、他の法と爲すことを得。』『行云何が別なる。』『己が行、説いて他の行と爲すことを得ず。他の行、説いて己が行と爲すことを得ず。』

斯れ差異有るが故に兩門を分つ。『今先づ法に就いて其通局を辨す。義別四有り。一には人に隨つて別分す。凡夫の善法は唯凡に就いて説く。乃至佛の善は唯佛に就いて説く。相として通理無し。二には勝を簡びて劣を異す。此門の中に於て、下は上を兼ねず、上は下を兼

ぬることを得。是義を以ての故に、凡夫は最劣なり。唯凡善有りて餘の四種無し。聲聞は次に勝る。其聲聞、凡夫の善法有りて、餘の三種無し。緣覺は轉た勝る。具に緣覺、聲聞、

【次に等】二に善行に就いて通局を辨ずるに三の別あり、知るべし。

【二】以下、第三に所治同異の義を明す。初に同。

【言ふ所の等】次に異に就いて。

凡夫の三種の善法有りて、餘の二種無し。菩薩は四を具し、其佛の善無し。如來は一切の善法を具足す。三には大を簡びて小に異す。凡夫、二乗は是れ其小なるが故に、下は上を兼ねず、上は下を兼ぬることを得。備には向に辨するが如し。菩薩及び佛は是れ其大なるが故に、並に皆一切の善法を具足す。精羅を異と爲す。並に具するを以ての故に、二地菩薩は五十の善を攝善戒と爲す。四には實に就いて通論す。凡夫、菩薩、及び佛、一切皆五品の善法を具す。此れ眞實如來藏の中の十善法門に就いて、以て具を論ず。凡夫の心中に、即ち法界の一切の善法を具す。今未だ現れずと雖も、法實に有り。二乗も亦然り。菩薩は小く見、佛に至りて圓に見る。良に法界増減無きを以ての故に、一切皆具す。法の通局、之を辨ずること露明り。次に善行に就いて以て通局を論ず。中に於て三有り。一には人に隨つて別分す。二には勝を簡んで劣に異す。三には大を簡んで小に異す。前の法の中、初の三と相似す。行は唯事に在りて法に同じからず。故に闕いて、第四の凡聖皆具すること無し。通局是の如し。此三門

(二)に所治同異の義を明す。五品の十善所治の障の義、同異有り。言ふ所の同とは、皆十不善業を離れずといふこと莫し。『所治既に同じ。何に緣りてか五品の善別なりと分つことを得る。』釋して言はく、『之を離るるに、遠有り、近有り。故に分つて五品の善別と爲すことを得。凡夫の十善は之を離ること最も近し。乃至佛善は之を去ること最も遠し。言ふ所の異とは、凡夫の十善は正しく業道を離る。餘の四種は業の根本を離る。五仕の煩惱は

凡夫の三種の善法有りて、餘の二種無し。菩薩は四を具し、其佛の善無し。如來は一切の善法を具足す。三には大を簡びて小に異す。凡夫、二乗は是れ其小なるが故に、下は上を兼ねず、上は下を兼ぬることを得。備には向に辨するが如し。菩薩及び佛は是れ其大なるが故に、並に皆一切の善法を具足す。精羅を異と爲す。並に具するを以ての故に、二地菩薩は五十の善を攝善戒と爲す。四には實に就いて通論す。凡夫、菩薩、及び佛、一切皆五品の善法を具す。此れ眞實如來藏の中の十善法門に就いて、以て具を論ず。凡夫の心中に、即ち法界の一切の善法を具す。今未だ現れずと雖も、法實に有り。二乗も亦然り。菩薩は小く見、佛に至りて圓に見る。良に法界増減無きを以ての故に、一切皆具す。法の通局、之を辨ずること露明り。次に善行に就いて以て通局を論ず。中に於て三有り。一には人に隨つて別分す。二には勝を簡んで劣に異す。三には大を簡んで小に異す。前の法の中、初の三と相似す。行は唯事に在りて法に同じからず。故に闕いて、第四の凡聖皆具すること無し。通局是の如し。此三門

【二】淨法聚第四十四段に五停心の義を明すに四門の分別あり、先づ第一に釋名相中先づ釋名に就いて。

【相狀等】次に辨相、一に不淨觀の相狀を明す。中に二、初に他身を觀ず。【大智論】第二十

是業の根本なり。聲聞、緣覺、同く四住を治す。聲聞は解劣にして、法を見ること蠱昧なり。所治精からず。緣覺は智勝りて、理を見ること深明なり。所斷精く盡す。菩薩及び佛は、同く無明を滅す。菩薩の智は淺くして、之を離ること未だ窮まらず。佛智は圓極にして之を斷すること畢竟す。此差別有るが故に五品を分つ。五品の十善、之を辨すること略して兩り。

五停心の義に四門の分別有り。一には名を釋し相を辨ず。二には治患の不同。初門の中に就いて、先づ其名を釋し、後に其相を辨ず。『名字是れ何ぞ。』一には不淨觀、二には慈悲觀、三には因緣觀、四には界分別觀、五には安那般那觀なり。此五、經の中に五度門と名く。亦停心と曰ふ。度門と言ふは、度は是れ出離至到の義なり。此五觀を修し、能く貪等の五種の煩惱を出でて涅槃の處に到る。故に名けて度と爲す。又煩惱を斷じ生死を度離するを、亦名けて度と爲す。通じて人に趣入す。之に因りて門と爲す。停心と言ふは、停は是れ息止安住の義なり。貪等を息離し、意を制して不淨等の法に住す。故に停心と曰ふ。『名字是の如し。』相狀云何。『不淨觀の中に、略して二種有り。一には他身を厭ひ、他の不淨を觀ず。二には自身を厭ひ、自の不淨を觀ず。他身を觀する中には其九相有り。一には死相、二には脹相、三には青瘀相、四には膿爛相、五には壞相、六には血塗相、七には虫噉相、八には骨鎖相、九には離壞相なり。』大智論の中には、一の燒相を加へ一

【自身を等】次に自身を觀ず。

【大智論】第十九

【結臍】耳中の垢

【大智論】第四十八。

【臍】背の肉壞れしなり。

の死相を少く。此義後の九相章の中に、具に廣く分別するが如し。自身を觀する中に五の不淨有り。『大智論』に説くが如くんば、一には種子不淨、是身は過去の結業を種と爲す。現には父母の精血を以て種と爲す。二には住處不淨、母胎の中に在りては、生藏の下、熟藏の上の兩界の間に已體を安置す。三には自性不淨、是身に具に九孔有りて、常に流る。眼より眵涙を出し、耳より結臍を出し、鼻中より涕を出し、口より延吐を出し、大小便道より屎尿を流出す。四には自體不淨、是身は具に三十六物有りて、共に合成する所なり。

『大智論』に説くが如くんば、一には髮、二には毛、三には爪、四には指、五には皮、六には肉、七には骨、八には髓、九には筋、十には脈、十一には脾、十二には腎、十三には心、十四には肝、十五には肺、十六には大腸、十七には小腸、十八には胃、十九には胞、二十には屎、二十一には尿、二十二には垢、二十三には汗、二十四には淚、二十五には結臍、二十六には漢、二十七には唾、二十八には膿、二十九には血、三十には黃陰、三十一には白陰、三十二には肪、三十三には腠、三十四には腦、三十五には膜、三十六には精なり。

此門の中に於て、要は唯二種なり。一には皮等觀、二には皮肉を除去して白骨觀を爲す。骨觀に三有り。『毘婆沙』に説くが如くんば、一には始業、自身を觀察して、頭より足に至るまで、皮肉を除去して其骨相を作す。二には已に習行して彼骨鎖を觀じ、以て漸く寬廣にして大地に周滿す。又彼骨を觀じて展轉相對し、大風の飄搏すれば反つて雪聚と爲る。此骨相を修して極めて純熟せしめ、心想を作さずして任運に現前す。三には思惟し已り

【慈悲觀等】下二に慈悲觀の相狀を明す。

【因緣觀等】下三に因緣觀の相狀を明す。

【六卷毘曇修多羅品】

【單業經】南本涅槃第三十三【數息觀等】下四に數息觀の相狀を明す。

て彼骨鎖を度して、以て漸く之を略して還つて自身に至り、其所緣に於て清靜寂靜に唯一色を觀す。此は是れ第四の自體不淨なり。五には終竟不淨、此身死し已りて、埋むれば則ち土と成り、虫噉へば糞と成り、火燒すれば灰と成り、究畢して推求するに一の淨相なきを、終竟不淨と名く。慈悲觀とは、普く衆生を緣じて、其與樂拔苦の想を作すを慈悲觀と名く。中に於て廣く七品の修習有り。前の四無量章の中に具に廣く分別するが如し。因緣觀とは、彼生死の十二因緣に於て分別觀察す。是觀不同なり。略して二種有り。一には順、二には逆、逆順不同なり。略して兩門有り。一に前後分別は、前従り後に向つて、次第に觀察するを名けて順觀と爲し、後従り前に向つて次第に之を推すを、名けて逆觀と爲す。二に空有分別は、有觀を順と名く。法相に順するが故に。空觀を逆と名く。諸法を逆するが故に。五度門の中の因緣觀とは、初門に就いて説く。界分別とは、毘曇の如きに依らば、六界觀を爲すを界分別と名く。六界と言ふは、一に地、二に水、三に火、四に風、五に空、六に識なり。論の中に釋するが如くんば、地は水界の爲に潤ふが故に相離れば水は地界の爲に持せられて流散せず。火は熟成するが故に淤壞せず。風は動飄するが故に增長する事を得。空界を以ての故に食等出入す。識界合するが故に造作する所有り。此六差別して我人無きが故に。若し涅槃經に依らば、十八界を觀するを界分別と名く。十八界の義は、上に廣く釋するが如し。此に於て分別して、我人無しと知る。數息觀とは、自の氣息を觀じ、心を繫けて之を數へ、失妄失せしむる無きを數息觀と名く。中に於て

【論】 雜心論第八

【論】 成實論第十八出入息品
【三】 以下、第二に五度治患の不同について明す。

【雜心】 第七。

分別するに、略して四種有り。一には増數、一を以て二と爲す。二には減數、二を以て一と爲す。三には亂數、出に入想を作し、入に出想を作す。四には等數、一を以て一と爲す。心散亂なる者は前の三數を爲し、心不亂の者は後の一數を爲す。之を數ふること、幾に至るも、極めて十を過ぎず。彼十の中に於て滿たずして心に忘るれば、還一從り起す。若し心亂れざれば、十に至りて便ち廻る。何が故に唯十にして不増不減なる。一論に自ら釋して言はく、「心散を畏る。故に十を過ぐることを得ず。心聚を懼る。故に十を減ずることを得ず。」出入の息の中の數、何ぞ十と爲す。是義不定なり。内氣増する者は偏に出息を數ふ。内氣小なる者は偏に入息を數ふ。氣息調へる者は入出俱に數ふ。『雜心』に説くが如くんば、五出五、合して十と爲す。『出入の息、先づ何者をか數ふる。』論の中に説くが如くんば、先に入息を數へ、後に出息を數ふ。良に生ずる時、入息前に在るを以て故に先に入を數ふ。命終の時、出息後に在り。故に後に出を數ふ。『相狀露雨り。此一門』

次に五度治患の不同を明す。經の中に説くが如くんば、多貪の衆生には教へて不淨を觀ぜしむ。貪に五種有り。對治各異なり。『何者か五貪なる。』一に色貪は、男女相愛す。不淨觀を以て對治と爲す。二に親戚貪は、亦姪貪と名く。眷屬相憐むを親戚貪と名く。觀聞相愛し尋續して斷ぜざるを、名けて姪貪と爲す。多日の雨を名けて姪雨と爲し、多日の風を名けて姪風と曰ふが如し、此も亦是の如し。世人の恣逸を姪と名くるに同じからず。此之姪貪は捨無量心を對治と爲す。故に『雜心』に云はく、「捨無量心は姪貪を對治す」と。

【多瞋の等】 二に瞋に就いて。

【涅槃】 第十四梵行品。

三に財食は、身財を吝惜す。檀度を治と爲す。四に名聞食は、善稱譽を求む。身空を治と爲す。五に善法食は、善法に愛著す。法空を治と爲す。今此に偏に色食の對治を説いて初度門と爲す。此過重くして、受生の根本なるを以ての故に、偏に之を説く。色食に二有り。一には自身を愛す。五不淨を觀するを對治と爲す。二には他身を愛す。九相を治と爲す。他身を愛する中に四種の欲有り。一には威儀欲、二には形色欲、三には處所欲、四には細觸欲なり。威儀欲は、死相を治と爲す。第二の形色は、青淤、膿爛、血塗を治と爲す。處所欲は、服壞、虫食、分散を治と爲す。細觸欲は、骨鎖を治と爲す。問うて曰はく、「九相能く貪欲を治す。彼十相と、對治何の別か有る。」釋して言はく、「九相は但能く遮伏す。十相は能く滅す。九相の能く伏するは、賊を縛するに如似せり。十相の能く滅するは、賊を殺すに如似せり。差別是の如し。十相の義は、後に當に別して論すべし。一多瞋の衆生には慈悲觀を教ふ。慈、悲の二心の治に通別有り。通じては則ち俱に一切の瞋悲を治す。別しては則ち各異なり。『涅槃』の中の如きは、六門に之を別つ。第一の義は、瞋に二種有り。一には能く命を奪ふ。二には能く鞭打す。斷命の瞋は盡にして捨し易し。慈を修して能く治す。鞭打の忿は輕くして離し難し。悲を修して方に治す。第二の義は、瞋に二種有り。一には衆生を瞋る。二には非衆生を瞋る。衆生を瞋る者は應に生ずべき處に起る。性容に輕薄なるべし。除き易く遣り易し。慈を修して能く治す。非衆生を瞋る者は、應に生ずべからざる處に起る。性必ず深厚なり。離も難く除し難し。悲を修して方に離す。非生を瞋

【愚癡多き等】下に
三に愚癡に就いて
明す。

る者は、衆生の處に於ても灼然として亦瞋る。故に深厚と曰ふ。第三の義は、瞋に二種有り。一には有因縁、二には無因縁なり。縁有つて生ずる瞋は、應に生ずべき處に起る。性に浮薄なるべし。除し易く捨し易し。慈を修して能く治す。縁無くして生ずる者は、性必ず深厚なり。除し難く斷じ難し。悲を修して方に治す。縁無くして生ずる者は、癡有るも亦瞋る。故に深厚と曰ふ。第四の義は、瞋に二種有り。一に過去の久因縁を緣じて生ず。二には現在の近因縁を緣じて生ず。過去久縁を緣じて生ずる者は、境を去ること玄かに遠し。瞋容に輕薄なるべし。除し易く捨し易し。慈を修して能く治す。現を緣じて生ずる者は、近境心に逼る。忿惱必ず深し。裁ち難く忍び難し。悲を修して方に治す。第五の義は、瞋に二種有り。一には聖人を瞋り、二には凡夫を瞋る。聖人を瞋る者は敬すべき處に起る。除し易く捨し易し。慈を修して能く治す。凡夫を瞋る者は憎むべき處に起る。忍び難く捨て難し。悲を修して方に治す。第六の義は瞋に三品有り。上、中、及び下なり。上瞋は息め易し。慈を修して能く治す。中瞋は次に難し。悲を修して方に治す。下瞋は斷じ難し。慈を修して方に離す。慈悲は治せず。愚癡多き者には、教へて因縁を觀ぜしむ。癡に四種有り。一には世事に迷ふ。五明を治と爲す。二には世俗の因果の法に迷ふ。十二緣觀を對治と爲す。三には二諦有無の理に迷ふ。二諦觀を以て對治と爲す。四には眞實如來藏性に迷ふ。實證を治と爲す。今第二を説いて因縁觀と爲す。問うて曰はく、「經に説かく一聲聞は鈍根、教へて四諦を觀ぜしむ。緣覺は利根、教へて因縁を觀ぜしむ」と。今云何が愚癡

【著我多き等】下
四に著我多の者に
ついて。
【毘曇】四卷毘曇
第四、雜心論第五
等。
【涅槃經】南本第
三十三。
【百覺多き等】下
五に思覺多き者に
就いて。

【三】以下、第三
に三善に就いて五
度を分別す。

の衆生には、教へて因縁を觀ぜしむと言ふ。『龍樹釋して言はく、「此愚癡とは、牛羊の全く所知無きが如きには非ず」と。蓋し乃ち外道邪見、利根にして正因果に迷ふ。故に説いて癡と爲す。利根を以ての故に、能く因縁を觀ず。然るに因縁の中に、患を治すること一に非ず。今一門に據りて、且く癡を治すと云ふ。著我多き者には分別界を教ふ。『毘曇』の如きに據らば、六界分別に我人無きことを明す。『涅槃經』の中に、十八界觀に我人無きことを明す。是身に唯六根、六塵、及び識のみ有り。故に所治の我、或は一、二、三、乃至六十種の差別有り。無我章の中に、已に廣く分別す。思覺多き者には、教へて數息せしむ。覺に八種有り。謂ゆる欲覺、瞋、憍、親里、國土、不死、族姓、輕侮なり。此義、前の八覺章の中に、具に廣く分別するが如し。問うて曰はく、「人有つて諸患等分ならば、何を以て治と爲す。』成實法の中には、十六特勝能く對治を爲す。『觀佛三昧經』の中の如きに依らば、觀佛三昧能く對治を爲す。毘曇法の中の義、亦此に同じ。佛の相好は、是れ三毒の境界に非ざるを以ての故に闌り。問うて曰はく、「何が故に諸煩惱の中、偏に貪、瞋、癡、我、及與覺觀を對治するをば、以て度門と爲し、諸結を説かざる。此れ凡夫の多く起す所なるを以ての故に。又貪瞋癡は、是れ三毒の根、我は一切諸根の根本爲り。覺觀は道を妨ぐ。故に偏に治す。此を以て度門と爲す。餘は是の如くならず。所以に説かず。又餘の煩惱は、皆是れ觀に收むるが故に、唯五を説くのみ。此二門」

次に三善に就いて五度を分別す。三善と言ふは、謂ゆる無貪、無瞋、無癡の三善根なり。

【四】以下、第四に地に就いて論ず

五度の觀の中、不淨觀門は是れ無食の性、慈悲觀門は是れ無瞋の性、餘の三觀門は是れ無癡の性なり。若し眷屬を論ずれば、即ち五陰の性なり。定共の無作は是れ即ち色陰。受數を受と爲し、想數を想と爲し、心王を識と爲し、餘を行陰と爲す。此三門

次に地に就いて論ず。地とは、謂はく、欲界、未來、中間、及び八禪地なり。此諸地に約して五度を分別す。初の不淨觀は、是れ其欲界、未來、中間、初禪、二禪の五地の所攝なり。欲界地の聞、思、慧の心に依つて作すは、即ち欲界の攝、未來等の彼慧心に依つて作すは、即ち彼禪の攝なり。問うて曰はく、『何が故に、三禪以上に此觀を起さざる。』釋して言はく、『欲界に二種の欲有り。一には身欲、二には心欲なり。五識地の中に其身欲有り。意識地の中に其心欲有り。故に欲界從り禪、中間に至りて不淨觀を修し、彼欲を實治す。初禪地の中にも亦二欲有り。眼、耳、及び身の三識地の中に其身欲有り。意識地の中に其心欲有り。故に二禪に依つて不淨觀を修し、彼欲を對治す。二禪以上は單に心欲有つて、身欲有ること無し。故に三禪上に此觀を修せず。又三禪の中には、樂は自樂を樂ふ。四禪以上は其心寂靜なり。此不淨の事を觀することを樂はず。故に三禪には此觀を爲さず。設令修習するも、小なるが故に論ぜず。慈悲觀とは『毘曇』の如きに依らば、欲界、四禪、未來、中間の七地の所攝、成實法の中には、一切地の攝、大乘法の中には、羈是毘曇に同く、細は『成實』に同じ。因縁、界人の二種の度門は一切地の攝、安般念は五地の所攝なり。謂ゆる欲界、未來、中間、及び彼二禪、三禪地が家の方便道の攝は、五地の攝な

【成實法】 第十五

【二五】淨法聚第四十五に五聖支定の義を明す。
【成實】論第十五五聖枝三昧品。

りと雖も、多くは欲界の聞、思、慧の心を用ひて作す。問うて曰はく、『初禪、二禪、三禪、根本定の中、何の義を以ての故に此觀を爲さざる。』釋して言はく、『數息は禪定を求めんが爲なり、彼根本定は定心已に成ず。是故に爲さず。』又問はく、『何が故に、四禪以上に此觀を爲さざる。』『彼地は已に出入息を離るるが故に。』五停心の義、大況曇雨り。

五聖支定の義

(一) 成實に説くが如くんば、定の能く聖を生じ、聖の與に因と作るを聖支定と名く。聖支の不同、一門に五を説く。『五の名是れ何ん。』一には是れ喜定、二には是れ樂定、三には清淨、心定、四には明相定、五には觀相定なり。初禪、二禪を喜定と名け、三禪を樂定と名く。第四禪の中、三災を免れ、四愛を絶ち出入の息を減すれば清淨、心定と名く。此三は、猶是れ世俗の四禪のごとし。此三種に依つて理解を發生するを、明と名け、觀と名く。始め五陰の苦、無常等を觀するを、之を名けて明と爲す。五陰の空を觀するを、説いて以て觀と爲す。』問うて曰はく、『何が故に世俗は、定中に唯四禪を説いて、以て聖支と爲す。』『聖を生ずること強きが故に。』又問はく、『此五位何れの處にか在る。』釋して言はく、『前の三位は外凡に在り。後の二種は聞思已去なり。一義に釋して云はく、『聞思位の中、方便を解習する、之を名けて明と爲す。修慧位の中、現に二空を見るを、説いて以て觀と爲す。』と。第二に釋して云はく、『四現忍心を同く名けて明と爲し、無明已去を齊く稱して觀と爲す。』

す。小を以て大に類するに、大にも亦應に有るべし。大の中、前の三は亦外凡に在り。明は種性に在り。觀は解行に在り。亦明は種性、解行に在り、觀は地上に在るべし。五聖支定、略して辨すること是の如し。

五聖智三昧の義

【二六】淨法樂第四十六段に五聖智三昧の義を明す。成實論第十五

五聖智三昧は、成實論の五聖智品に説くが如し。名字是れ何ぞ。『一には聖清淨三昧、二には非凡所近智者所讚三昧、三には寂滅妙離三昧、四には現樂後樂三昧、五には一心出入三昧なり。聖清淨とは、行者見諦道に在る時修する所の禪定なり。若し煩惱を起さば、則ち智慧を以て彼煩惱を改め、定をして清淨ならしむるを聖清淨と名く。非凡所近智所讚とは、行者能く世俗の假名を破し、無相の位に入りて得る所の聖定を、非凡近所讚と名く。寂滅離とは、論に自ら釋して言はく、諸の煩惱を薄んじ、貪等をして滅せしむるを、名けて寂滅と爲すと。此は斯陀含所得の定なり。始に欲界微細煩惱を盡すを、名けて妙離と爲す。此は阿那含所得の定なり。現樂後樂とは、在現世に於て煩惱を證するを、名けて現樂と爲す。未來世の中に泥洹果を得ることを名けて後樂と爲す。此は十二界の一切の煩惱對治の定なり。一心出入とは、論に自ら釋して言はく、行者常に無相心を行するが故に、名けて一心出入三昧と爲すと。此一は無學の位の中に在り。小に准じて大を類するに、大にも亦具に有り。解行已前を聖清淨と名け、歡喜地の中を非凡近智所讚

と名け、二地已上第八地に至るを寂滅妙離と名け、九地、十地を現樂後樂と名け、佛地を名けて一心出入と爲す。問うて曰はく、『何が故に此五種を説く。』『成實』に釋して言はく、『佛明すらく、「定中に但心を繋ぐるのみに非ず。亦聖智有り」と。是故に之を説くと。』五聖智三味の相別顯爾り。

五智の義に六門の分別有り。一には相を辨ず。二には體を定む。三には漏無漏分別。四には位に就いて分別す。五には人に就いて分別す。六には處に就いて分別す。

【二七】淨法聚第四十七段に五智の義を釋するに六門の分別あり、第一に辨相、初に法住泥洹の二智を釋する中に六。一に有爲無爲に就いて分別す。

五智と言ふは、一には法住智、二には泥洹智、三には無諍智、四には願智、五には邊際智なり。法住と泥洹とは、境に従つて名と爲す。『相狀如何。』『汎く釋するに六有り。一には有爲無爲に就いて分別す。苦、集、道の有爲の法を知りて、法相存立するを法住智と名く。滅諦無爲の法を觀察するを泥洹智と名く。泥洹は胡語なり。彼涅槃と原是れ一名なり。之を傳ふるに音異なり。二に生死の増損に望めて分別す。集は苦を生じて生死を増長すと觀するを法住智と名く。道は滅に趣いて生死を減損すと觀するを泥洹智と名く。又諸法の無常、苦、空を觀じて涅槃に趣向す。是も亦名けて泥洹智と爲す。故に論に説いて言はく、『生死を増長するを法住智と名け、生死を減損するを泥洹智と名く。』三には空有分別す。世諦を知るを法住智と名け、眞諦の空を了するを泥洹智と名く。四には有法の増損に望めて分別し、有法は因縁に従つて集すと觀察するを法住智と名く。法は無常、苦、無我等と

【泥洹】ニルヴァナ(Nirvāna)【二に等】下二に生死の増損に望めて分別す。【論】成實論第二十五智品。【三には等】下三に空有分別。【四には等】四に

有法の増損に望めて分別す。
【五には等】 五に事理分別。
【六には等】 六に眞諦について分別す。

【無諍智と等】 次に無諍智の相狀を明す。

【願智と等】 次に願智の相狀。

【邊際智と等】 次に邊際智の相狀。

觀じて、空理に趣入するを泥洹智と名く。五には事理分別す。眞實如來藏の中の法性常住を了知するを法住智と名く。故に經に宣說すらく、「眞諦の法をば以て法界法住と爲し、其事の滅、無爲の法を知るを泥洹智と名く」と。六には直に眞諦に就いて、義に隨つて分別す。第一義法性常住を知るを法住智と名け、一苦の滅を知るを泥洹智と名く。此六種の中、宗に隨うて別して分つ。初の兩門は是れ毘曇法、中間の兩門は是れ成實法、後の兩門は是れ大乘法なり。深を以て淺を攝すれば、初の兩門は是れ毘曇法、後の四門は是れ成實法、六門は俱に是れ大乘の法なり。初二是の如し。無諍智とは能に就いて名と爲す。此智を得る時物と競せざるを無諍智と名く。「此義云何。」一聖人常に衆生の心に達し、煩惱を起さしむるを恐れ、凡の爲作する所、物の情を類察し、其心欲の能く巧慧を以て善く之に隨隨するを知りて、無諍智と名く。願智と言ふは、方便に従つて名と爲す。聖人捷疾に智を修得するが故に、一切の法に於て願に隨つて知らんと欲すれば、能く之を知るを名けて願智と爲す。邊際智とは、境に従つて名と爲す。身報窮る處を名けて邊際と爲す。聖人自在智を修得するが故に、此邊際に於て、俯促して心に隨ふを邊際智と名く。問うて曰はく、「此智延ぶる所の報、誰をか果因と爲す。」釋して言はく、「延ぶる所の因異ならず。直に邊際任持力を以ての故に、此身報をして相續して壞せざらしむ。報壞せざるが故に酬因盡ること無し。仙樂の命を延べて死せざるが如し。不死を以ての故に酬因斷ぜず。此も亦是の如し。」問うて曰はく、「所延は邊際智に由る。邊際彼に望めて集と説く。得可きや。」釋

【二〇】以下、第二に五智の體性を辨

【龍樹の等】大智論第八十四。

して言はく、「得ず。夫れ集と言ふは、能生を義と爲す。修は但能治、果を生ずること能はず。故に是れ集因に非ず。譬へば、好器に水を盛りて漏れざるが如し。是れ即ち器従り生ずと謂ふには非ず。彼も亦是の如し。」此一門

次に體性を辨す。此五皆慧數を用て體と爲す。中に於て別して分たば、法住と泥洹とは、小乗の中には、一切智を智體と名く。小乗の人は、總じて能く一切の法を知るが故に。大乘法の中には、或は一切智、或は一切種なり。是義云何。大乘法の中には、世諦を知る者を一切種と名け、眞諦を知る者を一切智と名く。彼法住、泥洹智の中に於て、差別一に非ず。是が爲にして不定なり。若し世諦に就かば、有爲法を知るを名けて法住と爲す。無爲法を知るを名けて泥洹と爲す。是れ即ち二種、皆種智を用て體と爲さずといふこと莫し。問うて曰はく、「何が故に二乗此を知るを一切智と名け、如來此を知るを一切種と名くる。」釋して言はく、「二乗は但能く總相に一切法を知る。故に一切智と名く。如來は中に於て種別して知る。故に一切種と名く。故に龍樹云はく、「聲聞、緣覺は一切智有り。諸佛如來は一切種有り」と。若し實諦に就かば、理の常住を知るを法住智と名け、理の寂滅を知るを泥洹智と名く。二種皆一切智を用て體と爲す。若し世法を知るを法住智と名け、眞諦の空を知るを泥洹智と名けば、是れ則ち法住は種智を體と爲し、泥洹智は一切智を體と爲す。若し眞諦の常住を了知するを法住智と爲し、世諦の事滅無爲を了知するを泥洹智と爲すと説かば、是れ則ち法住は一切智を體と爲し、泥洹は種智を體と爲す。第三に無諍は巧智を體

と爲す。善く巧に業生の心に隨順するが故に。第四に願智は無礙智を體と爲す。法種を知ること捷疾にして、障礙無きが故に。第五に邊際は、自在智を體と爲す。脩促、心に隨つて自在を得るが故に。此二門

【二】以下、第三に有漏無漏に就いて分別す。【成實法】論第十

次に、有漏無漏に就いて分別す。法住、泥洹は、毘曇法の中には漏無漏に通ず。等智觀は是れ其有漏、聖智觀は是れ其無漏なり。成實法の中には、泥洹は無漏、法住は不定なり。見道の前に在るを説いて有漏と爲す。見道の上には、義に剛毅有り。一切の聖人は名用の心起るに漏を生ぜざるが故に、名けて無漏と爲す。是れ現に空を觀じて漏を斷ずるの行に非ざるが故に、名けて有漏と爲す。大乘法の中には、義別に二有り。一には境に約して分別す。此二の中に於て、世諦を知るは是れ其有漏、眞諦を知るは是れ其無漏なり。二には心に就いて分別す。心の中に三有り。一には等智觀、二俱に有漏なり。二には緣照無漏智觀、亦漏無漏なり。緣修障を治するを名けて無漏と爲し、性は是れ妄想分別心の法なれば名けて有漏と爲す。三には眞智觀、一向に無漏なり。後の三智は、毘曇法の中には一向に有漏なり。等智の攝なるが故に成實法の中に、亦漏無漏なり。無學の聖人は名用の心起るに漏を生ぜず。故に名けて無漏と爲す。是れ空を觀じて漏を斷ずるの行に非ず。故に名けて有漏と爲す。大乘法の中には、義別に二有り。一には境に約して分別す。此三は世諦の法を知るが故に、一向に有漏なり。二には心に約して分別す。心に眞妄有り。相を分つて之を論ずれば、妄心の所起は一向に有漏なり。性は是れ妄想煩惱の法なるが故に。眞

【三〇〇】以下、第四に位に就いて論ず

【三〇二】以下、第五に人に就いて論ず

心の所起は一向に無漏なり。體は妄想煩惱の法に非ざるが故に。義に隨つて通じて論ずれば、妄心の所起も亦漏無漏なり。「成實」と同じ。名用の心起るが故に無漏と名け、是れ空を觀じて漏を斷ずるの行に非ざるが故に、名けて有漏と爲す。眞心の所起は亦漏無漏なり。體妄想を出づるを名けて無漏と爲し、作用世に隨ふを名けて有漏と爲す。有漏無漏、之を辨ずること麤爾り。此三門

次に、位に就いて論ず。位分に五有り。一には外凡、二には内凡、三には見道、四には修道、五には無學道なり。小乘法の中には、法住、泥洹は初位の中に無く、後の四に之有り。後の三智は第五位の中に有り。前の四には之無し。是れ増上勝功德なるを以ての故に。大乘法の中には、邊際智を除く餘の四種は初位の中に無く、後の四に之有り。邊際の一智は位分不定なり。小を將て大に類すれば、局つて地上に在り。學窮まる處を論ずれば、第十地に在り。後身の菩薩は生死の邊に於て自在を得るが故に。實を以て通じて論ずれば、種性已上に皆悉く之を得。生死の中には纖細無量なり。何の邊に在るに隨つても、皆自在なるが故に。此四門

次に人に就いて論ず。人は調はく、凡夫、聲聞、緣覺、菩薩、如來なり。凡夫の人は五智皆無し。緣覺の人の中には、但法住及び泥洹智有つて餘の三種無し。後の三智は教に依つて修起するを以て、緣覺は出世するとも教の依るべき無し。是故に之無し。聲聞、菩薩如來は齊く具す。聲聞の中には、法住、泥洹一切皆有り。後の三智は増上利根の羅漢に之

有り。餘の者には皆無し。此れ増上勝功德なるを以ての故に。利根の者は願智を得るを以ての故に、能く三千大千世界に於て神變自在なり。乃至無色の諸の衆生の心をも、亦能く之を知る。此五門

【三】以下、第五に處に就いて論ず中に三、一に身處を明す。

【論】 雜心論第六

【心處と等】 二に心處を明す。

【境處と等】 次三に境處を明す。

【論】 雜心論第六

次に處に就いて論ず。處の中に三有り。一には身處、二には心處、三には境處なり。身處と言ふは、法住、泥洹は三界の身の中に皆修起することを得、餘の三種は聲聞の人の中には唯欲界に在つて、三天下の人能く修起することを得。瞽單處を除く。説に依つて起すが故に。故に論に説いて三方依と爲すなり。菩薩は爾らず。一切處に於て皆修起することを得。心處と言ふは、法住、泥洹は欲界心より乃ち非想に至つて、皆修起することを得。問うて曰はく、「欲界の何の心にか修起する。」「毘曇」の如きに依らば、欲界地の中の聞慧、思慧二種の心に起す。成實、大乘には、欲界地の中の三慧の心に起す。彼欲界に禪定有りと説くが故に。後の三智は、小乘法の中には第四禪に依る。勝功德なるが故に、諸佛菩薩は露小乘に同じ。實を以て通じて論ずれば、一切地の心に皆修起することを得。心自在なるが故に境處と言ふは、法住、泥洹及與ず願智は、三界の法を用て以て境界と爲す。無靜智は唯欲界の中の未生の惱心を以て境界と爲す。彼欲界の未生の惱心を觀じて、護つて願智を起さざらしむること、唯欲界地の中に在り。故に論に説いて言はく、「欲界の未生の惱心を縁するなり」と。邊際智とは、小乘法の中には、唯欲界の身報を以て境と爲す。邊際は唯欲界に在つて修するが故に。諸佛菩薩は一切處の身報を以て境と爲す。一切身の中に皆

自在なるが故に。五智慧の如し。

五忍の義に兩門分別あり。一には名義を釋す。二には位に就いて分別す。

【三】淨法樂第四十八段に五忍の義を明すに兩門の分別あり。第一に釋名。仁王經】教化品

五忍の義は『仁王經』に出づ。慧心法に安んずる、之を名けて忍と爲す。忍行不同なれば、一門に五を説く。五の名は是れ何ん。『一には伏忍、二には信忍、三には順忍、四には無生忍、五には寂滅忍なり。伏忍と言ふは、能に就いて名と爲す。始め觀解を得うて能く煩惱を伏す。故に伏忍と名く。信忍と言ふは、伴に従つて稱を立つ。忍の體は是れ慧なり。信と相隨ふが故に、伴に従つて説いて稱して信忍と爲す。』是義云何。『信に兩種有り。一に證信、前に伏してより後觀心轉に深くして、分に法性を證す。所證の法に於て證信清淨なり。故に信忍と名く。二には玄信、己が所得を以て仰いで上法に類し、信解して疑はず。故に信忍と曰ふ。順忍と言ふは、能に就いて名と爲す。前の信に依つて己に更に勝慧を修して無生に趣順す。能く上に順するを以ての故に順忍と名く。無生忍とは、境に従つて名と爲す。理寂にして起らざるを稱して無生と曰ひ、慧、此理に安んずるを無生忍と名く。亦名けて遺相を目と爲すと爲すことを得。此忍を得る時生相を捨離す。故に無生と曰ふ。寂滅忍とは、境に従つて名と爲す。一切の法界常寂不動なるを名けて寂滅と爲し、慧もて此法に安んずるを寂滅忍と名く。亦名けて當相を目と爲すと爲すことを得。緣を捨して心體の寂滅を分別するを寂滅忍と名く。問うて曰はく、『寂滅、無生、無我及び空平等

【三四】以下、第二に位についで論ず先づ一に伏忍に就いて。

【地持】第一種性
【地持】第六、四依品。

【地持】第七。

は何の差別有りや。『通じて釋せば是れ一なり。是故に諸地齊く此義を得。中に於て別して分たば、差異無きに非ず。』『異相は如何。』『法の虚假を觀じて其定性を遣るは、是れ無我の義なり。此理最も淺し。相を破して如に入るを空平等と名く。此理次に深し。實を證して相を離るれば、由來起らざるを、名けて無生と爲す。此理轉深し。法界皆寂なるを名けて寂滅と爲す。無生の唯實に無相なるに同じからず。此理最も勝る。同じからざるを以ての故に、諸地の中にも亦差異を得。異は後に論ずるが如し。名義是の如し。此一門

次に、位に就いて論ず。第一の伏忍は、通じては則ち過く一切の地前に在り。諸地の前に於て、始めて觀じて未だ斷せず。斯を名けて伏と爲す。別しては、則ち唯種性解行に在り。此れ世間未だ聖位に入らずして永斷すること能はざるを以ての故に、偏に伏と名く。

問うて曰はく、『地持』に宣説すらく、『種性二障は清淨なり』と。永く伏せざるに似たり。彼次に復説かく、『解行の菩薩は其種種の煩惱の上纏有り』と。『涅槃』にも亦云はく、『地前の菩薩は煩惱性を具す。名けて凡夫と爲すと。具に在つて伏に非ず永に非ざるが如し。』『仁王』に伏と説く。求に非ず具に在るに非ざるに似たり。其義云何。釋して言は

く、『煩惱の纏細一に非ず。中に於て纏なる者は、種性地の時已に伏し已に斷ず。』『地持』は此に據つて、説いて二障と爲す。中品の者は地前に始めて伏し、未だ永斷すること能はず。『仁王』は此に據つて、説いて伏忍と爲す。微細の者は地前の菩薩未だ伏せず未だ斷せず。『地持』に説く所の『解行の菩薩は其種の煩惱上纏有り』とは、此に據つて言を爲す。『涅槃』

【第二の等】 次二に信忍に就いて。
【仁王】 上菩薩教化品。
【十地論第一】

に云ふ所の煩惱性を具する義に兩兼有り。若し中品に望むれば、伏して未だ斷ぜざるも、亦名けて具と爲す。若し細品に望むれば、未だ伏せず未だ斷ぜざるも、亦具と名くることを得。若し復細論すれば、煩惱無量なり。或は煩惱有り、十倍の中に伏し、種性の時斷する有り。或は煩惱有り、種性の時伏し、解行の中に斷する有り。或は煩惱有り、解行の中に伏し、初地の時斷する有り。或は煩惱有り、初地の時伏し、二地の中に斷する有り。是の如く次第に乃ち佛地に至る。若し復細論すれば、初發心より乃ち佛地に至る念念の中に、前に伏し後に斷す。此義有るを以て聖說沈浮にして種種不同なり。今は一義に據つて且く地前を説いて、以て伏と爲すのみ。是伏に三有り。謂はく、下中上なり。下は習種に在り、中は性種に在り、上は解行に在り。第二の信忍は通じては亦遍く在り。道品の中に説く所の信の如し。別しては唯初、二、三地に在り。「仁王」に説くが如し。信の中の下品は初地に在り、中は二地に在り、上は三地に在り。問うて曰はく、「論に證信の兩地を説く。信は地前に在り。故に論に説いて言はく、「願善決定して已に初地に入る。信地の攝に非ず」と。今信忍を説く。何が故に初二三地に在るや。」釋して言はく、「信とは是れ其始の相を世間の中に説く。世と出世と相對して二有り。一には地前地上を相對して分別す。地前世間を説いて信地と爲し、地上出世を判じて證地と爲す。二には地上に就いて相に隨つて以て分つ。初二三地は是れ其世間なり。説いて信忍と爲す。四地已上は是れ出世なり。故に更に異名を與へ、名けて願忍、無生忍等と爲す。」問うて曰はく、「若し信は是れ始の相世間

【地持】 第七佳品

【第三の等】 次三に順忍に就いて。

【無生忍と等】 下に無生忍について。
【龍樹の等】 大智論第四十八。

に説くと言はば、四不壞信は應に世間に在るべし。何が故に彼出世に就いて説くや。釋して言はく、「不壞は是れ其證信なるが故に、出世に就いて證處に之を論ず。玄信に同じからず。出世に在るが故に、或は地前に對して初地の出世を、不壞淨と名く。故に『地持』に云はく、「初地の菩薩不壞淨を得て歡喜心に生ず」と。或は復彼三地已還の世間の行に對して、四地の出世を不壞淨と名く。故に『地持』に云はく、「四地の菩薩は不壞淨の首なり。修多羅の如し」と。「第三の順忍は通じては亦遍く在り。別しては唯四、五、六地に在り。彼『仁王』及び『地經』に説くが如し。此三地は相を破して寂に趣くを以て無生に順入す。故に説いて順と爲す。順に三品有り。下は四地に在つて道品觀と爲し、中は五地に在つて四諦觀と爲し、上は六地に在つて十法平等及び因緣觀なり。無生忍とは通じては亦遍く在り。別しては則ち不定なり。龍樹の説くが如く、「初地已上にも亦無生を得」と。若し『仁王』及與び『地經』に依らば、無生は七、八、九地に在り。下は七地に在つて始めて無生を習ひ、中は八地に在つて無生を成就し、上は九地に在つて無生忍滿す。問うて曰はく、「前より來何の義を以ての故に、無生と名けずして此に至つて方に論ずる。」釋するに四義有り。一には行に就いて以て論ず。前の六地の中の差別の修道に、諸行漸く起る。初地に願を起し、二地に戒を起し、三地に定を起し、四地に道品の慧を修起し、五地に諸相應の慧修を起し、六地に緣起の慧を修習す。此諸行分分に新に生ずるを以ての故に無生に非ず。七地已上は念念に頓に一切の佛法を起して、別行として新に之を起す者有ること無

【寂滅忍とは等】
五に寂滅忍に就いて。

きが故に、無生と名く。二には修に據つて以て解す。初より六地に至つて功用の修道修心未だ熟せず。故に名けて生と爲す。第七地の中に無功用を修し、八地已上に無功用を成す。修心純ら熟すが故に無生と曰ふ。三には有無の二法に約して以て解す。前の六地の中には有無の二行前後に互に起つて、雙び修すること能はず。互に起るを以ての故に、之を名けて生と爲す。七地已上は寂用變べて修し、無有間起するが故に無生と名く。四には一相如理に就いて以て釋す。初地已上に法の虚假を觀じて定性を破遺するを、無我を得と名く。四地已上に相を破して如に入る。未だ實を證して自體無相なること能はず。故に無生に非ず。七地已上に實を證して相を離れ、法の本寂を知る。由來不起なるが故に無生と名く。寂滅忍とは、通じては亦遍く在り。別しては唯十地已上に在り。中に於て、唯上下の二品有り。『仁王』に説くが如し。下は十地に在り、上は如來に在り。故に經に説いて言はく、『下忍の中の行を名けて菩薩と爲し、上忍の中の行は之を名けて佛と爲す』と。問うて曰はく、『此忍は九地已前に、何が故に得ざる。』『彼一相寂滅無分別の法を趣求すれども、未だ法界皆寂を了達すること能はざるを以ての故に、此を得ず。』問うて曰はく、『何が故に三地の中には地前の分多く地上を一と爲すに、此五忍の中には地前を一と爲し、地上の分多きや。』釋して言はく、『地位は開合不定なり。或は前を開し後を合する有り。彼三持、三決定等の如し。或は後を開し前を合す。五忍等の如し。或は前後俱に開す。五方便及び六地等の如し。或は前後俱に合す。彼證信二種の地等の如し。門別各異にして、寧ぞ一類

にすべけん。』五忍の義は大況巖爾り。

五種菩提の義。

【五】淨法聚第四十九段に五種菩提の義を明す。先づ釋名。【大品經】大智論第五十三。

五種菩提の義は『大品經』無生品に説くが如し。彼經には直に五種菩提と云ひ、名字を列せず。論に二の釋有り。一には聲聞、緣覺、大乘の三種の菩提及與び順忍、無生法忍を以て、合して説いて五と爲す。第二には直に大乘の中に就いて、義に隨つて五を分つ。『五の名は是れ何ん。』一には發心菩提、二には伏心菩提、三には明心菩提、四には出到菩提、五には無上菩提なり。發心と言ふは、論に云はく、『無量の生死に在つて菩提心を發し、菩提を求む。因中に果を説く。是故に名けて發心菩提と爲す』と。伏心と言ふは、論に言はく、『菩薩は諸の煩惱を斷じ、其心を降伏し、諸の波羅蜜を行するを、伏心菩提と名く』と。明心菩提とは、論に言はく、『菩薩は三世の法の本末總別を觀じて、法の實相を得ること畢竟清淨なり。謂ゆる、般若波羅蜜の相なり。明心菩提と名く』と。出到と言ふは、論に言はく、『菩薩は般若の中に於て、方便力を得て般若に著せず。一切の煩惱を滅して無生忍を得、三界を出離して薩婆者に到るを、出到菩提と名く』と。無上と言ふは、論に言はく、『道場にして煩惱の習を斷じ阿耨菩提を得るを、名けて無上と爲す』と。問うて曰はく、『此五位は何の處に分つや。』文に定判無し。義釋するに三有り。一義の分別とは、發心の菩提は種性の前、善趣位の中に在り。此れ無量の生死に在つて菩提を求むるを以て

【此五位は等】下五位の分別を辨ず

の故に。伏心は種性、解行に在り。此位の中に伏忍を攝するを以ての故に。明心菩提は初地乃至六地に在り。此諸地に無我智を得て、諸法を破するを以ての故に。出到は七地已上乃至十地に在り。七地上に情相を出離して、無生忍に到るを以ての故に、出到と名く。又七地上に方便智を得て有無に著せず、能く三界を出でて菩提に到るが故に、名けて出到と爲す。彼論に説くが如き、方便力を得て般若に著せざるは、猶七地上の十方便の慧の空に於て著せざるがごとく、無生忍を得るは猶七地上の無生法忍のごとし。無上菩提は佛果に在り。第二の義とは、發心菩提は地前に在り。此れ發心して出道を求むるを以ての故に。伏心は初、二、三地に在り。此三地に世間行を修して、煩惱を伏するを以ての故に。明は四地、五地、六地に在り。此三地に同じく慧明を修して、無生に順するを以ての故に。後の二は上の如し。第三の義とは、發心菩提は還つて地前に在り。伏心は初地已上乃至五地に在り。論に言はく、「伏心は諸の煩惱を斷じ、諸の波羅蜜を行す」と。此五地の中に施、戒、忍、精進及び禪の五度の行を修するが故に。明菩提は第六地に在り。論に言はく、「明とは、謂はく、般若の相なり」と。般若は第六地に在るが故に。後の二は前に同じ。此五種の中前の四は是れ因、後の一は是れ果なり。問うて曰はく、「前の四は通じて皆是れ因ならば、何が故に論文に、偏に發心を因中説果と言ふや。」釋して言はく、「彼無上菩提に望むれば、前の四は皆是れ因中説果なり。分に隨つて之を論すれば、伏心已上は分に菩提を證す。是故に因中説果と名けず。初發心は一向に未だ證せず。是故に名けて因中説果と爲

【法華經】 分別功德品。

【涅槃】 北本第二十一。

【義】 淨法樂第五十段に五種方便の義を明す。
【地持】 論第六功德品。

す。「云何が知ることを得る。伏心已上は分に菩提なることを證すると。」釋して言はく、「**有り。**」【法華論】に「法華經」を釋するが如し。言ふ所の八生乃至一生に菩提を得とは、謂はく、初地の證智なり。故に知んぬ、地上にも亦菩提を證することを。又「涅槃」に説かく、「須陀洹の人は八萬劫に到る。乃至辟支は十千劫に到る。謂はく、性地の阿耨菩提に到るなり」と。種性上にも亦菩提を證すること明けし。同證を以ての故に、論家に因中説果と名けず。五種菩提之を攝すること、**攝爾なり。**

五種の方便義

五種方便は「地持」に説くが如し。巧修の上順するを、名けて方便と爲す。方便不同なれば、一門に五を説く。「五の名は是れ何ん。」一には隨護方便、二には無罪方便、三には思惟方便、四には淨心方便、五には決定方便なり。五が中の前の二は是れ種性位、次の一は解行位に在り、次の一は初地已上乃至七地に在り、後の一は八、九、十地に在り。隨護と言ふは、種性位の中の集善の行なり。行に福智有り。智慧の行は法に隨つて防護し、福徳の行は人に隨つて防護す。謂はく、福を修する時自ら護し他を護す。故に隨護と曰ふ。無罪と言ふは、種性位の中の離過の行なり。行修して過を離るるが故に、無罪と曰ふ。思惟と言ふは、論に自ら釋して言はく、「謂はく、解行地なり」と。解行の中に思量し出道するを以ての故に、思惟と曰ふ。淨心と言ふは、論に自ら釋して言はく、「淨心地より具行地

【七】淨法聚第五
十一段に五種善法の義を明す。

【八】淨法聚第五
十二段に五行の義を明すに三門の分別あり。第一に釋名。【涅槃經】第十一
聖行品。

に至る」と。此れ出世間の證心清淨なり。故に淨心と言ふ。決心と言ふは、謂はく、決定地、決定行地、及び畢竟地なり。決定地とは是れ第八地、決定行とは是れ第九地、畢竟地とは第十地なり。此三は法流水の中に在つて、決定して無上菩提に趣向す。故に決定と言ふ。五種の方便之を略して爾云ふ。

五種善法の義。

五種の善法とは、謂はく、信、戒、施、多聞、智慧なり。始めて三寶に於て清淨心を得る、之を名けて修と爲す。信に依つて行を起し、行初めて過を離る。故に次に戒を明す。既に惡を離れ已つて、次に善行を修す。善に福智有り。福行は爲すこと易きが故に、次に施を明す。既に福を修し已つて、次に宜く智を起すべし。智は聞法に由る。故に次に聞を明す。聞に依つて慧を起す。故に次いで第五に其智慧を明す。五善是の如し。

五行の義に三門分別あり。

一には名を釋す。二には體を攝す。五行の義は、一涅槃經に出づ。名字は是れ何ん。一には是れ聖行、二には是れ梵行、三には是れ天行、四には是れ病行、五には嬰兒行なり。聖行と言ふは、人に就いて名と爲す。經の中に釋するが如し。諸佛菩薩は是れ其聖人なり。聖人の行を名けて聖行と爲す。又此も亦當相を名と爲すことを得。正に會するを聖と名く。此行は正に會するが故に

【經】 涅槃經第二

【二九】以下、第二に體相を辨ず。

聖行と名く。問うて曰はく、『五行は皆聖人の行なり。何が故に獨り此のみを偏に聖行と名くるや。』釋して言はく、『諸行の名に通別有り。通じては則ち一切皆是れ聖行なり。中に於て別して分たば、初の一を聖と名け、餘の者は義に隨つて更に異名を與ふ。良に此行は正しく聖人自行の體なるを以ての故に偏に聖と名く。梵行と言ふは、當相を名と爲す。梵を名けて淨と爲す。利他の行能く一切不善の對治を爲し、過を離れて清淨なり。故に名けて梵と爲す。亦此行は果に從つて名と爲すべし。初禪已上に欲の果報を離る、之を名けて梵と爲す。四無量等は能く梵果を生ず。故に梵行と名く。又復涅槃を亦梵果と名く。此行能く得れば、説いて梵行と爲す。天行と言ふは、當相を名と爲す。一切の禪定を名けて天住と爲し、天住の行を名けて天行と爲す。亦此行は果に從つて稱を立つべし。初禪已上の淨天の果報は、之を名けて天と爲す。禪は彼因と爲れば、名けて天行と爲す。又禪能く大般涅槃、第一義天を得れば、亦天行と名く。病行と言ふは、所治に從つて名と爲す。罪業は是れ病なり。治病の行なるが故に、病行と名く。嬰兒行とは、二種有り。一には自利、二には利他なり。若し自利を論ずれば、喻に從つて名と爲す。行、分別を離れて彼嬰兒の辨了する所無きが如きを、嬰兒行と名く。若し利他を論ずれば、所化に從つて名と爲す。經の中に説くが如し。凡夫、二乘、始行の菩薩は嬰兒の如し。此嬰兒を化するを（二九）に名く。名義是の如し。此一門

次に、體相を辨ず。聖行の體とは、經に説くに三有り。一には戒、二には定、三には

【經】 四。 涅槃經第十

【釋】 五。 涅槃經第十

智慧なり。此三は上の三學章の中に、具に廣く分別するが如し。梵行の體とは、經に依るに二有り。一には七善法化他の德、二には四無量化他の心なり。三何者か七善なる。一經の中に説くが如し。一には知法、二には知義、三には知時、四には知足、五には知自、六には知衆、七には知尊卑なり。七が中の前の五は是れ自利の行、後の二は利他なり。二行具足して方に物を益するに堪へたり。是を以て之を明す。知法と言ふは、佛所説の十二部經を知る。知義と言ふは、經に説く所の一切の法義を知る。知時と言ふは、起行の時を知る。是の如きの時寂靜を修するに任へ、是の如きの時の中に施戒を修するに任へたりと知る。是の如きの時に捨心を修するに任へ、是の如きの中に施戒を修するに任へたりと知る。是の如きは一切なり。知足と言ふは、是れ節量の行なり。飲食、湯藥、衆具に於て、受求眼を以てすることを知る。故に知足と曰ふ。自知と言ふは、前に修する所の自行の功德に於て成就すること有る者は、實に之を知る。故に自知と曰ふ。故に經に説いて言はく、「菩薩は自ら我に是の如きの信戒施等有りと知る」と。知衆と言ふは、善く利利、婆羅門等の種種の衆別を知つて、應ずる如く教化す。知尊卑とは、彼所化の行に優劣の量有るを知つて、宜く勸導すべし。七善是の如し。四無量心は上に廣く辨するが如し。有人更に説かく、「知見覺等を以て梵行と爲す」と。經を案じて以て四無量心を求むるに、知見覺の心及び六念等も、亦是れ第四の捨の中の所收なり。應に別分すべからず。天行の體とは、謂はく、八禪定なり。此義は後の八禪章の中に、具に廣く分別するが如し。此前の三行は猶「地持」

【三】以下、第三に位に就いて論ず

【三】淨法聚第五十三段に五生の義を明す。第八生品

の中には、三住の所攝なり。初の聖行は是れ彼聖住、第二の梵行は是れ彼梵住、第三の天行は是れ彼天住なり。前の三は善を攝し、後の二は過を離る。前の法を熾治するを名けて病行と爲し、後の過を起さざるを嬰兒行と名く。又嬰兒を化して過を起さざらしむるも、亦名けて嬰兒行と爲すことを得るなり。體相是の如し。此二門

次に、位に就いて論ず。此五は通じては則ち遍く諸地に在り。相に隨つて別分すれば、修は地前に在り、成は地上に在り。此れ云何が知る。一經の中に説くが如し。定行成する時は堪忍地に住し、慧行成する時は不動地に住し、慈行成する時は極愛一子の地に住し、捨行成する時は空平等地に住す。所成皆初地已上に在り。明かに知んぬ、修處は地前に在ることを。五行是の如し。

五生の義

五生の義は、『地持論』に出づ。受報は物に隨ふ。故に、名けて生と爲す。生別不同にして、一門に五を説く。『五の名は是れ何ん。』一には息苦生、二には隨類生、三には勝生、四には増上生、五には最後生なり。此五は通じて論ずれば、皆諸地に遍す。相に隨つて別して分たば、前の三は地前、後の二は地上なり。息苦生とは、菩薩の願力自在力の故に三界に受生し、所生の處に隨つて能く物の惱を除くを、息苦生と名く。所息の苦に略して二種有り。一には現苦を息む。謂はく、三劫の時及び餘の時に於て能く物の苦を息む。二に

【地持】 第一自他
利品

は當苦を息む。邪見の衆生、天神に奉事し、及び諸の悪行を教へて遠離し、當苦を受け
さらしむ。隨類生とは、菩薩の願力自在力の故に物と同生し、教へて惡を離し之を化して
善に住せしむるを、隨類生と名く。勝生と言ふは、菩薩自ら功德善業を以て、人天の中
に於て八勝生を受く。八報と言ふは、『地持』に説くが如し。謂はく、壽具足、色具足等
なり。増上生とは、初地已上十王等の報を、報上生と名く。最後生とは、菩薩學窮し
て刹利、婆羅門の家に受生し、阿耨菩提を得て一切の佛事を作すを、最後生と名く。問う
て曰はく、『此五は二種の生の中、是れ分段とや爲ん、是れ變易とや爲ん。』釋して言はく、
『此五地前に在る者は、亦是れ應化、亦是れ分段なり。菩薩の願力自在力の故に、物に
隨つて受を現す。故に是れ應化なり。所生の處に隨つて、即ち有漏の結業と相應す。故に
是れ分段なり。受くる所は是れ其六道の身なるが故に、是れ變易に非ず。故に地上に在る
者は、惡道の身は唯是れ應化なり。惡業盡くるが故に、是れ分段に非ず。善道の身は亦是
れ應化なり。應化は前の如し。亦是れ分段なり。地上の菩薩は有漏の殘氣未だ盡きず。所
生の處に隨つて之と相應するが故に、是受くる所も亦是れ六道の身なり。故に是れ變易に
非ず。此義は前の二生死の中に、具に廣く分別するが如し。五生是の如し。』

【三】 淨法聚第五
十四段に五無量の
義を明すに五門の
分別あり。第一に
釋名。

五無量の義に五門分別あり。一には名を釋す。二には相を辨ず。三には次第。四には十盡に約
對して共に相收攝す。五には二十無量に對して共に相收攝す。
五無量とは、是れ化他の智なり。『名字は是れ何ん。』一には衆生界無量、二には世界無

量、三には法界無量、四には調伏界無量、五には調伏方便界無量なり。善く所化の衆生の差別を知るを衆生無量と名け、善く衆生の住處の不同を知るを世界無量と名け、諸の衆生の心所起の善惡等の法を知つて、之を用て教化するを法界無量と名け、諸の衆生の根性の差別を知るを調伏無量と名く。然も此れ直調伏心を知るのみに非ず、亦不調を知る。調を以て主と爲すが故に偏に言ふのみ。度生の法を知るを調伏方便と名く。度生の法の中の行修善巧を、名けて方便と爲す。此を用て人に授けて、調して行を起さしむるを調伏方便と名く。又復他の起行をして善巧ならしむるも、亦方便と名く。問うて曰はく、『彼四無量心を名けて無量と爲すが如く、今此五種も亦無量と名く。無量の言當に境に在るべしとや爲ん、心に就いて説くとや爲ん。』釋して言はく、『偏に心を廢して境を論ぜず。四境、五境は俱に是れ無量なり。境に約して心を論ず。四無量心、五無量智は皆是れ無量なり。』名義是の如し。此一門

【三】以下、第二に五無量の相を辨ず。

【地持】第六功德

【地持】第六。

次に其相を辨ず。『地持』に説くが如し。六十一種の衆生を衆生無量と名く。『何者か是れ其六十一種なる。』『文に定判無し。有人釋して言はく、『調伏界の中に、人の不同に就いて五十五有り。加ふるに六道を以てし、六十一と爲す』と。或は此の如くなるべし。要略すれば是の如し。若し心に隨つて別たば、形類不同なり。地處の差異なり。以て限算し難し。故に『地持』に言はく、『意地身に隨つて則ち無量有り』と。十方世界の國土の不同に無量の種有り。娑婆等の如きを世界無量と名く。善要無記の三性の法を一一分別すれば、各

【地持】第六。

【三】第三に五種次第の義を明す。【地持】論第六。

【五】第四に十盡に對して共に相收攝す。【地經】論第三。

【三六】第五に二十種無量に對して相收攝す。【地經】論第九。

無邊有り。法界無量と名く。調伏界とは、『地持』に説くが如し。一より十に至つて五十五有り。廣くすれば亦無邊なり。調伏方便は、『地持論』の成就品に説くが如し。二十七種の方便は一一に各九品の分別有り。無量種となす。此二門(三四つぎ)

次に、五種次第の義を明す。『地持』に説くが如し。菩薩の方便は衆生を化せんが爲なり。是故に先に衆生を化せんが爲なり。是故に先に衆生無量を説く。所化の衆生は住處を得べし。是故に次に第二の無量を説く。何の法を用てか化する。是故に次に第三の無量を説く。何の心に依つてか化する。是故に次に第四の無量を説く。化は何の法にか住する。是故に次に第五の無量を説く。此三門(三五つぎ)

次に十盡に對して共に相收攝す。十盡の義は、『地經』に説くが如し。一には衆生界盡、二には世界盡、三には虚空盡、四には法界盡、五には佛出世界盡、六には涅槃界盡、七には如來智界盡、八には心緣界盡、九には佛境界智入界盡、十には世間轉法輪智轉界盡なり。此十は皆悉く該攝窮極す。故に名けて盡となす。衆生無量は衆生盡に攝し、世界無量は世界盡、虚空界盡に攝し、法界無量は法界盡に攝し、調伏無量は心緣界盡に攝し、調伏方便は佛出世界、涅槃界、如來知界、佛境界智入界盡に攝し、五種無量は共に第十世轉法輪智轉界盡に攝す。彼を以て總收す。此四門(三七つぎ)

次に『地經』の二十種無量に對して共に相收攝す。『何者か二十なる。』『彼經に説くが如し。一には無量衆生界、二には佛無量化業、三には無量世界、四には他無量淨土、五には

無量法界、六には佛無量智、七には無量劫、八には佛無量通達三世世界、九には無量隨信化、十には無量根、十一には無量隨根說、十二には無量心行、十三には佛無量心行、十四には佛無量說對治、十五には無量聲聞乘法、十六には佛無量說聲聞乘、十七には無量辟支佛乘法、十八には佛無量知辟支佛乘、十九には無量大乘法、二十には佛無量種說大乘なり。此二十の中初の二の一對は是れ衆生無量、次の二の一對は是れ世界無量、次の四の兩對は是れ法界無量、次の六の三對は是れ調伏無量、後の六の三對は是れ其調伏方便無量なり。五無量の義之を辨すること粗爾り。

五德舉罪の義

【三〇】次淨法聚第五十五段に五德舉罪の義を明す。【地持論】第五。

五德舉罪は律の中に説くが如し。『地持論』の中にも亦具に之を明す。『五の名は是れ何ぞ。一には慈心、瞋志を以てせず。謂はく、他人毀犯する所有るを見て、慈愍の心を以て罪を擧げて識らしめ、瞋志を以て故に其過を揚げず。二には柔軟、麤曠を以てせず。謂はく、罪を擧ぐる時軟言にして聽かんことを求め、然る後に之を擧げ、麤曠にして其をして瞋忿せしむることを得ず。三には利益、損減を以てせず。謂はく、罪を擧ぐる時屏處に私語して其をして覺せしめ、過を捨し善に住せしめ、終に彰揚して衰惱を致さしめず。四には眞實、虚妄を以てせず。謂はく、罪を擧ぐる時要す三根を具す。見聞疑等なり。然して後に罪を擧げ、終に虚妄ならず。五には知時、非時を以てせず。謂はく、罪を擧ぐる

【三八】淨法聚第五
十六段に五種教誡
の義を明す。
【地持論】 第三種
性品

【二九】淨法聚第五
十七段に六波羅蜜
の義を明すに十門
の分別あり、第一
に翻名解釋。
【檀】 ダーナ(一)
【檀】

時先に自己を觀す。其勢力有つて善の伴黨多く、治罰に堪任すれば則ち宜く之を擧ぐべく、
無き時は便ち止む。又前人を觀す。若し勢力無く惡黨相用ふれば、是時宜く擧ぐべく、有
る時は便ち止む。是の如き一切を名けて、時を以てして非時を以てせずと爲す。此五は是
れ其擧罪の行徳なり。故に五徳と名く。五徳是の如し。

五種教誡の義。

五種の教誡は、『地持論』に出づ。教は、謂はく、教示なり。誡は、謂はく、誡約なり。教
誡不同なれば一門に五を説く。『五の名は是れ何ぞ。』一には制と名く。斷惡の法を制す。
二には聽と名く。修善の法を聽す。此二は是れ本なり。後の三は之に隨ふ。三には擧と名
く。前の制聽に於て缺減有る者は如法に之を擧ぐ。此擧と言ふは、是れ其彰擧なり。過を
標して識らしむ。擧に同じからず。四には折伏と名く。前の制聽に於て數數毀犯すれば、
折伏して念を與へ、其をして改悔せしむ。五には歡喜と名く。前の制聽に於て實徳有らば
稱揚讚説し、其をして歡喜せしむ。五種の教誡之を略して云ふこと兩り。

六波羅蜜の義に十門分別す。一には名を翻じて解釋す。二には轉を論ず。三には開合して相を
辨ず。四には通じて諸行の同相に就いて分別す。五には別して諸
行の異相に就いて分別す。六には修の所爲并に是非を論ず。七には六度の相攝、八
には資尋爲因、九には位に就いて異を分ち并に優劣不同を辨ず。十には因起の次第。
第一には、名を釋す。六波羅蜜とは、謂はく、檀波羅蜜乃至般若波羅蜜なり。初に檀と

【尸羅】 シーラ (Sīla)

【瞿提】 クシヤイ
テイ (Kṣānti)
【毘離耶】 ゴール
ヤ (Vihāya)
【禪那】 ドヤーナ
(Dhyāna)

【般若】 プラジュ
ニヤイ (Prajñā)
【波羅蜜】 パーラ
マター (Pāramitā)
【地持】 第八。

言ふは、是れ外國の語なり。此には布施と名く。己が財事を以て分布して他に與ふ、之を名けて布と爲す。己を頼して人を惠む、之を目けて施と爲す。尸羅と言ふは、此方の正翻には名けて清涼と曰ふ。三業の炎、行人を焚燒するに非ざるも事等く熱の如し。戒能く防息す。故に清涼と號く。復戒と言ふは、義に隨つて傍翻す。能く焚を防ぐを以ての故に、復戒と稱す。瞿提と言ふは、此には忍辱と名く。他人毀を加ふ、之を名けて辱と爲し、辱に於て能く安んず、之を目けて忍と爲す。毘離耶とは、此には精進と名く。心を法に練るが故に説いて精と爲し、精心に務めて達するが故に稱して進と爲す。禪那と言ふは、此には思惟修と名け、亦是功德叢林と名く。上界の靜法審觀方に成ずるを思惟修と名け、能く諸徳を生ずるが故に復説いて功德叢林と爲す。般若と言ふは、此方には慧と名く。法に於て觀達するが故に、稱して慧と爲す。此六は何が故に波羅蜜と名くる。『波羅蜜』とは、是れ外國の語なり。此には翻じて度と名け、亦是到彼岸と名く。言ふ所の度とは、『地持』に説くが如し。度に三種有り。一には時度、此六行種性の上の三僧祇を度して、方に始めて成滿す。故に彼『優婆塞經』に説いて言はく、「前の二僧祇に行ずる所の檀等は波羅蜜に非ず。第三僧祇に修行する所の者は是れ波羅蜜なり」と。彼も亦其時度に就いて言を爲す。二には果度、此六は能く大菩提の果を得。三には自性清淨度、此六種を修して能く有相を捨し、法の實性に到る。斯三義を具するが故に、名けて度と爲す。到彼岸とは、波羅は岸、蜜は是れ到なり。釋するに兩義有り。第一には能く生死の此岸を捨して究竟涅槃の彼

【四〇】下第二に六度の體性を論ず。今は色心等の法に約就して其性に論ずるに五種あり、知るべし。

岸に到る。前度の中の果度と相似す。第二には能く生死涅槃有相の此岸を捨して平等無相の彼岸に到る。前度の中の自性清淨度と其義相似す。斯兩義を具するを、到彼岸と名く。(四〇)第二の門の中に、其體性を辨ず。中に於て、色心等の法に約就して以て其性を論ず。義に隨つて進退して、略して五種有り。一には根本に就く。六度は皆心法を以て體と爲す。心を離れて之外に更に更に行徳無し。二には攝修方便に據つて論を爲す。六度は皆色心を以て體と爲す。布施の中の如し。身口に財を捨するは是れ其色性、思願に財を捨するは是れ心の自性なり。第二の戒の中に、身口に過を離するは是れ其色性、内心清淨は是れ心の自性なり。忍の中に、身口意に罵せず、報ぜざるは是れ色の自性、内心の安忍は是れ心の自性なり。精進の中に就いて、身口造修は是れ其色性、内心策勸は是れ心の自性なり。禪定の中に就いて、身口安靜は是れ其色性、内心不亂は是れ心の自性なり。般若の中に就いて、身口に法を求むるは是れ其色性、内心照明は是れ心の自性なり。第三には境に約して以て行體を論ず。前の四種は、事に隨つて造修すれば色心に該通す。後の二は是れ其證法の行なり。局つて唯心に在り。境に住して法を見るは、唯心の能なるが故に。第四には其行相に就いて以て分つ。前の三は是れ其化衆生力なり。化は三業に藉れば色心に該通す。後の三は是れ其護煩惱力なり。局つて唯心に在り。惑を伏し結を斷すれば唯心の能なるが故に。此二力は後に當に更に辨すべし。第五には其業性に就いて分別す。布施、持戒は三業の自性にして色心に該通す。施の中の思願は是れ其意業、身口に捨財するは是れ身口業なり。

戒の中の心淨は是れ其意業、身口清淨は是れ身口業なり。故に此二種は色心に該通す。後の四心法は意業の自性にして、局つて唯心に在り。體性は是の如し。

【四】第三に開合して相を辨ず。

第三門の中に、開合して相を辨ず。開合不定にして、之を約すれば唯一なり。諸行を統攝して唯一の助道なり。或は分つて二と爲す。二に兩門有り。一には行に約して二を分つ。謂はく、自利利他の道なり。彼『相續解脫經』に説くが如し。前の三は是れ其化衆生力なり。化力は即ち是れ利他の行なり。後の三は是れ其護煩惱力なり。護煩惱は即ち是れ自利の行なり。化衆生の中、先に布施を以て衆生を攝取し、次に持戒を以て惱さず、怖れしめず、後に忍辱を以て彼惱害逼迫恐怖に於て、堪忍して攝取す。護煩惱の中、先に精進を以て

【或は等】二に分つ。

煩惱を伏し、善法を修習して煩惱の爲に傾動せられず。次に禪定を以て正に煩惱を伏し、其をして起らざらしめ、後に智慧を以て永く煩惱を斷ず。二には徳に就いて二を分つ。徳に二種有り。一には是れ福徳、二には是れ智慧なり。此二種を辨ずるに經論同じからず。乃ち四の別有り。第一には彼『優婆塞經』に依つて、施、戒、精進を判じて福分と爲す。彼事中の方便の所作なるを以ての故に、説いて福と爲す。忍、禪、般若を判じて慧分と爲す。般若は正しく是れ慧の正體なり。慧心法に安んずる、之を説いて忍と爲す。五忍等の如し。蓋し乃ち是れ其法思解忍なり。安苦他不益忍を取らず。專心に理に住して不動なるを定と名く。是れ事中の住心の定に非ず。此忍定は同じく即ち慧なるを以ての故に、説いて

【地持論】第一。

慧分と爲す。小分を斥取して言を盡すに非ざるのみ。第二には彼『相續解脫』及び『地持

【涅槃經】第二十
五師子吼品。

【彼經】涅槃經第
十九德王品一。

【或は等】下三に
分つ。【地持】第八。

論一に依らず。前の三は是れ福、般若は是れ智、精進と禪とは亦是れ福亦是れ智なり。精進に依るが故に、施戒忍四無量等を修するを、名けて福分と爲し、聞思修陰巧便等を起すを、名けて智分と爲す。又禪定に依つて四無量を修するを、名けて福分と爲し、陰界入巧便觀を修するを、名けて智分と爲す。然るに此れ其功能に就いて、以て分別して福智と爲す。其體性を論ずれば、性は是れ福德なり。第三には彼「大品」等の經に就かば、前の五を福と爲す。慧性に非ざるが故に。般若は是れ智なり。是れ慧性なるが故に。四には「涅槃經」に依らば、前の五及與事中の般若を同じく福分と爲し、理觀の般若を説いて智分と爲す。故に彼經に言はく、「福莊嚴とは、謂はく、檀波羅蜜乃至般若なり。般若波羅蜜に非ず。慧莊嚴とは、是れ般若波羅蜜なり」と。彼經の中に依るに、六度の行に各二種有り。一には事に隨つて修行し、實性に到らず。是れ自性清淨度に非ざるが故に、波羅蜜に非ず。二には理に依つて修行し、法の實性に到る。是れ自性清淨度に非ざるが故に、是れ波羅蜜なり。前の五は事に依り理に依るを問ふこと莫く、同じく名けて福と爲す。般若の中に就いて、事に隨つて修する者は實性を見ず。亦判じて福と爲す。理に依つて成ずる者は實性を見るが故に、説いて智分と爲す。或は分つて三と爲す。謂ゆる、三學なり。前の四は戒學、次の一は定學、後の一は慧學なり。故に「地持」に云はく、「衆具、自性、眷屬、無盡是を戒學と名け、禪を定學と爲し、般若は慧學なり」と。衆具と言ふは、是れ其布施なり、施を戒の因と爲すが故に衆具と曰ふ。自性と言ふは、是れ其戒度なり。戒度は正しく是れ戒學の

【或は等】次衰愍等の五に分つ。【地持】第七菩薩相品。

【或は等】次に六度を分つ。【或は等】次に十度を分つ。

自體なり。故に自性と云ふ。眷屬と言ふは、忍波羅蜜なり。諸縁に堪忍して戒行を助成するが故に眷屬と云ふ。無盡と言ふは、精進を以ての故に持戒息まず。故に無盡と曰ふ。『精進は道策す。何の義を以ての故に、偏に説いて戒と爲すや。』『釋するに三義有り。一には三學の中の戒學は初に在り。初に就いて以て言ふが故に戒の中に攝す。二には戒學の中に備に三聚を具す。行を攝すること寛廣にして、成立すべきこと難し。必ず須く精進佐助して方に成すべし。故に戒の中に攝す。三には戒學は事に隨つて修行し、成じ難く敗し易し。必ず須く精進佐助して方に立すべし。故に戒の中に攝す。或は分つて四と爲す。彼『相續解脫經』に説くが如し。前の三は戒學、禪を定學と爲し、般若は慧學なり。精進は道策すれば、別して一門と爲す。故に四種有り。或は説いて五と爲す。謂はく、衰愍、愛語、勇猛、惠施、説深法義なり。『地持』に説くが如し。衰愍は禪を攝す。衰愍は是れ悲なり。悲は亦是れ禪なり。故に禪定を攝す。愛語は戒及與智慧を攝す。良に愛語は口の四過を離するを以て、戒分の所收なり。是故に戒を攝す。慧に依つて説を起す。是故に慧を攝す。勇猛は忍、進及び慧を攝す。勇猛に由るが故に苦緣動ぜず。故に忍辱を攝す。勇猛に由るが故に善法を策修す。故に精進を攝す。勇猛に由るが故に能く深義に入る。故に般若を攝す。惠施は檀を攝す。説深法義は禪を攝し慧を攝す。禪に依つて説を起す。是故に禪を攝す。智に依つて説を起す。是故に慧を攝す。或は分つて六と爲す。謂ゆる、檀等の六波羅蜜なり。或は復十と説く。謂はく、十波羅蜜なり。前の六が中に就いて、方便、願

力、智等の四波羅蜜を開出するが故に、合して十有り。是故に經の中に、後の四種を説いて前の六の伴と爲す。然るに經論の中には、伴を説くこと同じからず。若し『相續解脫經』の中に依らば、別して其伴を説く。彼には方便は別して前の三に伴ひ、願は精進に伴ひ、力は禪定に伴ひ、智は般若に伴ふと説く。『何が故に方便は偏に前の三に伴ふや。』『前の三種は化衆生力なるを以て、化物巧を須ふ。故に方便は別して前の三に伴ふと爲す。』『何が故に願を以て、別して精進に伴ふや。』『精進は勝求して願の佐助を須ふ。故に偏に之に伴ふ。伴に二種有り。一には前伴、彼經に説くが如し。現在世は煩惱多きを以ての故に、精進に善法を勤修すること能はず。未來世は煩惱微薄にして、善法を勤修せんと願ず。故に前の伴と爲す。二には後伴、精進に依るが故に、能く願心を超して上上勝求す。故に後伴と爲す。』何が故に力を以て、別して禪定に伴ふ。』『定は力用多きが故に、力之に伴ふ。伴に二種有り。一には前伴、彼經に説くが如し。善知識に近いて正法を聽聞し、内に正しく思惟し、劣の怖望を轉じて勝の怖望を得。之を名けて力と爲す。是力を以ての故に、能く禪定を修す。故に前伴と爲す。二には後伴、禪定に依るが故に神通力を起す。故に後伴と爲す。又復禪定は如來十力の種性を發生す。之を名けて力と爲す。此力も亦是れ禪定の後伴なり。何が故に智を以て、別して般若に伴ふや。』『知見の性同じく相伴ふの義親し。故に偏に之に伴ふ。伴に二種有り。一には前伴、世諦の智に由つて、開引して第一義の慧を出生す。故に前伴と爲す。二には後伴、眞諦の智に依つて世智の用を起す。故に後伴と

【或は復等】一下八萬四千の諸度の法門に分つ。

【四】以下、第四相に就いて分別す。初に説いて二とす。對には有作無作相

爲す。若し『地經』及び『地持論』に依らば、通じて前の六に伴ふ。彼には巧智を説いて、以て方便と爲す。方便を以ての故に、能く施等の無量の善法を修す。増進智を求むる、之を名けて願と爲す。是願を以ての故に、其施等をして上上勝進せしむ。堅固の智、魔の爲に動せられず。之を名けて力と爲す。是力を以ての故に、彼施等をして破壊すべからざらしむ。法に於て聞覺する、之を名けて智と爲す。是智を以ての故に、施等の法に於て差別す。示現して衆生を攝化するが故に、後の四種は通じて前の六に伴ふ。或は復分つて、八萬四千の諸度の法門と爲す。『賢劫經』に説くが如し。彼に説かく、「如來の三十二相、八十種好、十力、無畏一切の功德に、三百五十種の門有らしむ。一一の門の中に皆六度の行を以て、修して因と爲す。便ち二千一百度の門有り。此を用て四大及び六衰十種の患に對して、便ち二萬一千度の門有り」と。四大と言ふは、地、水、火、風なり。自身の患なり。六衰と言ふは、謂はく、外の色、聲、香、味、觸、法なり。六塵の患なり。此六大賊は善法を衰耗す。故に名けて衰と爲す。此二萬一千度の門を以て四衆生を化す。故に八萬四千度の門有り。四衆生とは、一には是れ多瞋、二には是れ多貪、三には是れ多癡、四には是れ三毒等分なり。此等の廣略は各一宜に隨ふ。今は一門に據つて且く六種を論ず。

第四門の中に、通じて諸行の同相に就いて分別す。諸行は相似す。故に同相と名く。廣略不定なり。中に於て、増數の次第に之を辨ず。或は説いて二と爲す。二に兩門有り。一には有作無作を相對して二を分つ。檀等の諸行方便修成するを、名けて有作と爲し、無

【二には等】 二に世出世相對。

【或は説いて等】 次に三を説く。

【或は等】 次に四を説く中に三、一に攝修方便もて分つ。

【二には等】 二には修によつて四を分つ。
【地持】 第七。

始の法性、今徳を顯成するを、名けて無作と爲す。是義云何。眞識の心は體是れ一切功德法の性なり。本妄の爲に陰するを、名けて佛性と爲し、行徳と名けず。後に妄想を息めて彼心顯了なるを、説いて檀等と爲す。故に無作と曰ふ。又經の中に説く、「眞如法の中に一切の著を離す、之を名けて檀と爲し、一切の惡無きを即ち名けて戒と爲し、瞋惱有ること無きを即ち名けて忍と爲し、懈惰有ること無きを名けて精進と爲し、動亂を遠離するを説いて禪定と爲し、永く闇障無きを即ち般若と名く」と。此等は一體にして、義に隨つて以て分つ。此義昔は隠れ、今時に始めて顯るを、説いて無作の六波羅蜜と爲す。此波羅蜜は諸聖同體にして、差別有ること無し。眞如法には別體無きを以ての故に。二には世間出世間を相對して二を分つ。事に隨つて修行するを名けて世間と爲し、理に合して成ずるを名けて出世と爲す。又復地前を名けて世間と爲し、地上を出と名く。或は説いて三と爲す。彼「相續解脫經」に説くが如し。一には是れ因相、謂ゆる、大悲なり。悲は能く行を起すが故に、説いて因と爲す。二には果相、謂はく、衆生を攝して未來の報を得。三には能作、大義施等の諸行能く菩提を得。或は説いて四と爲す。四に三門有り。一には攝修方便して以て四種を分つ。彼「相續解脫經」に説くが如し。一には大悲方便、能く施等を起す。二には思惟方便、施等の法を起す。三には常方便、施等の法に於て無間の修習す。四には顯方便、施等の法に於て具足して修習す。一には修に據つて四を論ず。「地持」に説くが如し。一には決定修、施等の法に於て、堅心に修學して縁の爲に動せず。二には專心修、施等の

【三には等】三に能について分つ。

【地持】第二。

【或は等】次に五と説く。中に三、一には攝修方便して五を説く。【地持】第三力種性品。

【二には等】二に離過に五を説く。

【三には等】三に能について五を論ず。

【或は等】次に説いて六を分つ。【攝論】梁論第十

法に於て、專意に修學して餘相を雜へず。三には常修、恆に作して息まず。四には無罪修、修の時に過を離す。三には能に就いて四を説く。『相續解脫』及び『地持』に説くが如し。

一には對治、能く六弊を治す。二には成菩提、具に施等の法を修して能く菩提を得。三には能攝自他、施等を修行して、能く自他をして過恐怖を離れ、勝安樂を得しむ。四には得未來果、施等を修行して、未來世に於て善趣の中に生じて勝福報を受く。或は説いて五と爲す。五に三門有り。一には攝修方便して以て五種を論ず。彼『相續解脫經』に説くが如し。一には先づ當に多く信解を修すべし。『地持』に説くが如し。八解處に於て淨信心を起す。二には聞慧を起す。菩薩藏を聞いて以て方便と爲す。三には菩提心を護す。心は行の本爲り。是故に須く護すべし。四には善知識に近く。行は友に依つて成ず。是故に須く近くべし。五には精勤に修學す。無間の善業なり。五が中に前の四は方便を起修し、後の一は正しく施等の善法を修す。二には離過に五を説く。亦『相續解脫經』に説くが如し。

一には無礙、施等を修行して能く六弊を除く。二には無願、施等を修行して名利を願ぜず。三には無過、施等の法に於て雜染無方便の過を遠離す。四には無妄想、言説に隨つて分別取著せず。五には廻向菩提、施等を以て餘の果報を求めず。唯佛智を求む。三には能に就いて五を説く。亦『相續解脫經』に説くが如し。一には増上樂因能く菩提を得、二には自他を攝取し、三には未來の報を得。或は説いて六と爲す。『攝論』に説くが如し。一には廣大意、一切の生死の爲に、無量無邊阿僧祇劫に六度を修行して足相を生ぜず。二には長時

【或は等】次に説いて七を分つ。

【或は等】次に九を分つ。
【地持】 第三。

【四三】以下、第五に別して諸行の異相について分別する中に四種あり、一に修心の不同。

意、無量無邊阿僧祇劫に六度を修行して其長を患はず。三には隨喜意、諸の衆生を見て淨涅槃を得、菩薩の隨喜彼得る者に過ぎたり。四には恩德意、自己の生に於て恩有るを見ず、唯衆生の己に於て恩有るを見る。彼化を受くるに由つて、我をして諸度の行を成ずることを得しむるが故に。五には大志意、己が所行の一切の善根を用て、廻向して一切の衆生に施與す。六には善好意、前の衆生に施する所の善根を用て、生に代へて無上菩提に廻向す。或は説いて七と爲す。彼『相續解脫經』に説くが如し。一には施等を行じて他の知ることをも求めず。二には諸法に於て諸見に著せず。三には大菩提に於て疑惑して、若は是若は非を生ぜず。四には自讚毀他せず。五には高慢ならず、及び放逸ならず。六には少劣を以て知足の想を生ぜず。七には憍嫉を起さず。或は復九を論ず。『地持』に説くが如し。一には自性は其行體を明す。二には一切其行相を彰す。三には名けて難と爲し、起修殊勝にして爲し難きを能く爲す。四には一切の門行を攝すること寛廣にして諸行同じく入る。五には善人は起行純善なり。六には一切の行起行を具足す。七には憍を除いて行の功能を辨じ、施等を修行して能く煩惱を除く。八には此世他世の安樂は行の利益を彰し、施等を修行して能く自他をして、今世後世に於て樂の果を得しむ。九には清淨に行修して過を離る。此等は具に釋すること『地持論』の如し。若し復廣く分たば、義別無量なり。

第五門の中に、別して諸行の異相に就いて、略して分別す。四種有り。一には修心の不同、二には行相の不同、三には治障の不同、四には得報の不同なり。修心の不同とは、彼

七卷の『金光明』に説くが如し。一に各五心の修習有り。初に五法に依つて檀度を成就す。一には信根を具し、二には慈悲を起し、三には心に異求無く、四には布施を以て等く衆生を攝し、五には一切智を求む。次に五法有つて戒度を成就す。一には三業を淨にし、二には衆生の爲に煩惱因縁を作さず、三には惡道を斷じて諸善の門を開き、四には聲聞、辟支佛地を過ぎ、五には一切の功德、皆願満足す。次に五法有つて忍辱を成就す。一には貪瞋を降伏し、二には身命を惜まず、三には往業を思惟して用て自ら開解し、四には衆生の善根を成就せんが爲に慈悲心を發し、五には甚深の無生法忍を得んが爲なり。次に五法有つて精進を成就す。一には煩惱の爲に共に住せず。二には福德未だ具せざれば安穩を得ず。三には一切の難行に厭心を生ぜず。四には衆生を利せんが爲に大慈を成就す。五には不退地を願す。次に五行有つて禪定を成就す。一には善法に於て攝持して散ぜず。二には生死を解脱す。三には神通を得て衆生を成就せんと願す。四には慈心に法界を洗滌す。淨心の爲の故に。五には衆生の一切の煩惱を斷ぜんが爲なり。次に五法有つて般若を成就す。一には佛菩薩に於て供養して厭くこと無し。求法の爲の故に。二には深法に於て樂聞して厭くこと無し。三には勝智を成就す。四には能く煩惱を斷ず。五には能く五明に達す。此門竟次に成行の不同の義を明す。『相續解脱』及び『地持』に説くが如し。彼に六度を説く。皆三種有り。施の中の三とは、一には是れ財施、二には是れ法施、三には無畏施なり。戒の中の三とは、一には律儀戒、二には攝善戒、三には攝衆生戒なり。此義、上の三聚章の

【次に等】二に成行不同の義を明す【地持】第三。

【次に等】三に治障不同の義を明す

【次に等】四に果報の不同の義を明す

【地持】第八行品

中に、共に廣く分別するが如し。忍の中の三とは、一には他不饒益忍、他の惱を堪忍す。二には安苦忍、能く自ら苦を忍ぶ。三には法思惟解忍、法に住して動ぜず。精進の三とは、一には弘誓精進、大願を發生す。二には攝善精進、自ら善行を修す。三には攝衆生精進、善を以て他を化す。禪中の三とは、一には現法樂住、内心寂靜なり。二には出生功德、謂はく、禪定に依つて神通、四無量等を發生す。三には利益衆生、謂はく、禪定に依つて四攝も物を益す。慧中の三とは、一には覺に隨つて第一義の慧を分別し、二には善く五明及び三聚法の世諦の慧に達し、三には利衆生慧、巧に四攝を以て衆生を饒益す。此二門次に治障の不同の義を明す。施を修して慳を治し、戒は毀禁を治し、忍は瞋恚を治し、精進の心は能く懈怠を治し、禪は麤念を治し、慧は愚癡を治す。前の五は伏斷、後の一は永斷なり。理實には智慧通じて諸過を治す。分相も亦然なり。亦諸過慧の爲に治せらるべき邊を、通じて愚癡と名く。此三門次に果報の不同の義を論ず。『相續解脫』の中の如きに依らば、六度の行は各一果を得。布施を以ての故に大樂を得、持戒を以ての故に善趣の中に生じ、忍辱を以ての故に怨對有ること無く、精進を以ての故に所修の善に隨つて縁の爲に壞せられず、禪定を以ての故に多く善樂を致して梵等の衆生の主と爲り、智慧を以ての故に堪能する所多くして一切の生死の爲に害せられず。若し『地持』に依らば、布施の行、外には大財を得、内には色力、壽命、安樂に無礙難才の五事の果を得。餘の五度は各一果を得。持戒を以ての故に、善趣の中に生じて、壽等奇特なり。忍辱を以て故に善方便を

【四四】以下、第六に修行の所爲並に是非を論ず。先づ所爲を明す。

得、他の侵道を忍んで衆生を惱まさず。精進を以ての故に、其俱生の一切の方便堅固堪能を得。禪定を以ての故に、所生の處に隨つて諸の塵穢を少く。義を知つて通を得。智慧を以ての故に、未來世に於て智慧増廣す。異相是の如し。

第六門の中に、修の所爲を明し、并に是非を論ず。所爲に三有り。一には爲求菩提、二には爲念衆生、三には爲求實際なり。爲求菩提は是れ其大心、爲念衆生は是れ其廣心、爲求實際は是れ其深心なり。其深心の故に、有爲を捨離して凡夫に同じからず。大心、廣心は二乘に同じからず。爲求菩提は彼小心を護り、爲念衆生は彼狹心を護る。通じては則ち六度皆此三の爲なり。『地持經』に説くが如し。菩薩は一切智を求めんが爲の故に、六度を修行すと。是の如き等の比を爲菩提と名く。『維摩』に説くが如し。施を以て慳を攝し、戒は毀禁を攝し、忍は瞋恚を攝し、精進は怠を攝し、禪は麤念を攝し、慧は愚癡を攝すと。『勝鬘經』の中には、衆生を成ぜんが爲に六度を修行す。是の如き等の比を爲衆行と名く。

『大品』に説くが如し。實相を見んが爲に六度を修行す。『涅槃經』に説くが如し。佛性を見んが爲に六度を修行すと。是の如き等の比を爲實際と名く。中に於て別して分たば、前の二門は爲攝衆生、中間の兩門は爲求實際、後の兩門は爲求菩提なり。此等の差別は『維摩經』に説くが如し。故に彼經に言はく、「慳貪を攝するを以て檀波羅蜜を起し、犯戒を化するを以て尸羅波羅蜜を起し、我法無きを以て屠提波羅蜜を起し、身心の相を離るるを以て毘梨耶波羅蜜を起し、菩提の相を以て禪波羅蜜を起し、一切智を以て般若波羅蜜を起す」と。

【是非は等】二に
是非を明す。中に
三、一に時度に約
す。
【優婆塞經】 第二

慳貪を攝するを以て檀波羅蜜を起すと、自ら布施を行じ、兼て他の施を勸む。犯戒を化
するを以て尸羅を起すと、自ら淨戒を持し、兼て他の持を勸む。何が故に此二は偏に衆
生の爲にする。』此は麤にして、修起すべきこと易きを以て、衆生能く作す。故に偏に之
が爲にす。我法無きを以て屬提を起すと、無我は是れ其衆生空の義なり。之に依つて忍
を成ず。又彼の爲の故に忍辱を修行す。身心を離るるを以て毘梨耶を起すと、身心の相
を離るるは是れ其法空なり。依つて精進を成ず。又彼の爲の故に精進を修起す。何が故に
此二は偏に二空に依る。』此二行は修する時苦有るを以て、苦有らば成じ難く、空に依ら
ば就き易きが故に、偏に之に依る。又此二種は空に依つて退を防ぎ、實際に入り易きが故
に、偏に之が爲にす。菩提の相を以て禪那を起すと、菩提は是れ佛の功德の行なり。禪
は能く之を生ず。故に菩提の爲に禪定を修起す。一切智を以て般若を起すと、彼一切智
は是れ佛の慧の行なり。般若は能く生ず。故に彼智の爲に般若を修起す。何が故に此二は
偏に菩提一切智の爲にするや。』諸度の中に於て、禪定最も能く廣徳を出生す。大菩提
に於て能生の力強し。故に偏に之が爲に禪定を修起す。般若は正しく是れ一切智の因なり。
智を生ずること親く強し。故に偏に之が爲に般若を修起す。蓋し乃ち是れ其隱顯門のみ。所
爲是の如し。』是非は如何。』一經に説かく、「此六に波羅蜜、非波羅蜜有り」と。其義云何。』
『分別するに三有り。一には時度に約して以て是非を論ず、一優婆塞經に説くが如し。前
の二阿僧祇に行ずる所は波羅蜜に非ず。時度に非ざるが故に。第三の阿僧祇に行ずる所は、

【二には等】二に果度に約して分別す。

【地持】第七翼品

【涅槃經】第十九

【第三には等】三

【第三には等】三に自性清淨度に約就す。

【六度】以下、第七に六度の相攝を明す。中に二、一に攝同の義に就いて

是れ波羅蜜なり。是れ時度なるが故に。二には果度に約して分別す。涅槃に説くが如し。四心の中に修して能く究竟大涅槃の果に致る、是れ波羅蜜なり。是れ果度なるが故に。此四を具せざるは波羅蜜に非ず。究竟じて大涅槃に致ること能はず。果度に非ざるが故に。『何者か四修なる。』『地持』に説くが如し。一には決定修、修心堅固にして縁の爲に動ぜられず。二には専心修、修意精純にして餘想を雜へず。三には常能修、恆に化して息まず。四には無罪修、煩惱無方便を遠離す。『涅槃經』の如し。初の功德の中に、具に此相有り。第三には自性清淨度に約就して以て是非を論ず。隨事の修行は諸法實性に到ること能はず。是れ自性清淨度に非ざるが故に、波羅蜜に非ず。依實の所成は情相を破捨して法の實性に到る。是れ其自性清淨度なるが故に、是れ波羅蜜なり。是非是の如し。

第七に、其六度の相攝を明す。菩薩の行巧にして、一一の度の中に皆一切を攝す。一切は一を成す。云何が一一に皆一切を攝する。釋するに兩種有り。一には攝同の義、二には攝異の義なり。攝同と言ふは、六度の中に於て所有の捨義を皆攝して檀と爲す。故に彼

『金剛般若論』に云はく、檀の義に六を攝す。資生無畏法なり。此中に一二三を名けて修行」と爲す。資生と言ふは、是れ其財施なり。無畏と言ふは、是れ無畏施なり。言ふ所の法とは、是れ其法施なり。言ふ所の一とは、謂はく、初の檀度なり。是れ資生施なり。言ふ所の二とは、謂はく、戒と忍となり。是れ無畏施なり。言ふ所の三とは、謂はく、後の

の三度なり。是れ其法施なり。六度の中に於て、離過の義有るを悉く攝して戒と爲し、

【攝異と等】二に攝異に就いて。初に檀。【小品】大智論第八十所收。

【云何が等】次に

【云何が等】次に

【云何が等】次に
精進。

安忍の義有るを通じて攝して忍と爲し、策勸の義有るを攝して精進と爲し、不亂の義有るを通じて攝して禪と爲し、離著の義有るを攝して般若と爲す。攝異と言ふは、『小品』に説くが如し。一一の度の中に皆諸度を攝す。『云何が檀の中に餘の五度を攝する。』『施を修行する時、身口意淨にして、佛戒を犯せずして布施を行するを、名けて戒を攝すと爲す。彼受者の瞋恚打罵に於て堪忍して饒益するを、名けて忍を攝すと爲す。諸の衆生に於て常に施して倦まざるを、精進を攝すと名く。施心亂れざるを、禪定を攝すと名く。善趣を分別するを、般若を攝すと名く。又施の中に於て不取不著なるも、亦般若と名く。』云何が戒の中に餘の五度を攝する。』『戒を修行する時殺盜等を離れ、普く一切衆生に安樂を施すを、布施を攝すと名く。堪忍力を以て諸過を爲さざるを、忍辱を攝すと名く。戒を持して息まざるを、精進を攝すと名く。一心に戒を持して離過寂靜なるを、禪定を攝すと名く。分別して善修するを、般若を攝すと名く。又復戒の中に不取不著なるを、亦般若と名く。』云何が忍の中に餘の五度を攝する。』『忍を修行する時衆生を怖れずして彼に安樂を施すを、布施を攝すと名く。又貧苦を忍んで財を以て人を惠むを、亦施を攝すと名く。安忍を以ての故に殺縛等を離るるを、名けて戒を攝すと爲す。堪忍して息まざるを、精進を攝すと名く。忍心亂れたるを、禪定を攝すと名く。分別して善修するを、般若を攝すと名く。又忍の中に於て不取不著なるを、亦般若と名く。』云何が精進に餘の五度を攝する。』『精進を以ての故に善法を勤修し、衆生を饒益するを、布施を攝すと名く。勤めて諸惡を斷するを、

【云何が等】次に

【云何が等】次に

【高六】以下、第八に其資導爲因の義を明すに、先づ資導を辨ず。不同に五あること知るべし。

持戒を攝すと名く。勇猛力を以て諸苦に堪忍するを、忍辱を攝すと名く。堅く精進に住するを、禪定を攝すと名く。分別して善修するを、般若を攝すと名く。又精進に於て取著を遠離するを、亦般若と名く。『云何が禪の中に餘の五度を攝する。』『禪に依つて著を捨し慈悲もて物を益するを、布施を攝すと名く。禪に依つて過を離するを、持戒を攝すと名く。定心縁に住し安忍して動ぜざるを、忍辱を攝すと名く。又禪定に依つて慈悲心を發し、衆生の打罵、侵欺を堪忍して隨順して攝取するを、亦名けて忍と爲す。深禪定に於て求むるに休息無きを、精進を攝すと名く。分別して善修するを、般若を攝すと名く。又復禪の不味不著なるを、亦般若を攝すと名く。』云何が般若に餘の五度を攝する。』『慧を修行する時能く正義を以て衆生に惠施するを、布施を攝すと名く。智慧心を以て過を觀じて爲さざるを、持戒を攝すと名く。諸法の中に於て思惟して動ぜざるを、忍辱を攝すと名く。又智慧を以て他の惱を堪忍するを、亦忍辱を攝すと名く。觀法倦まざるを、精進を攝すと名く。諸法の中に於て妄想を起さざるを、亦禪定を攝すと名く。又智慧に依つて分別して善く一切の三昧を修するを、亦禪を攝すと名く。攝相是の如し。

第八門の中に、其資導爲因の義を明す。先に資導を辨ず。福能く資助し、慧能く導達す。資導の不同に略して五種有り。一には資導の相生は唯未起に望む。已生の福は未起の智を資けて、其をして生ずることを得せしめ、已起の智は未生の福を導いて、其をして起ることを得せしむ。二には資導の相成の義は同時に在り。同時の福は同時の智を資けて、其を

【次に等】二に六度爲因の義を明す中に三、一に六度淺深の分齊を明す

【地經】論第十。

して明淨みやうじやうならしめ、同時どうじの智ちは同時どうじの福ふくを導みびいて、其それをして堅固けんこにして破壞はらすべからざらしむ。三には資導しだうの捨相しつさうも亦同時またどうじに在あり。同時どうじの福ふくは同時どうじの智ちを資すけて、空くうに於おて著ちやくせず、同時どうじの智ちは同時どうじの福ふくを導みびいて、有うに於おて染せんせず。四には資導しだうの得果とくわは其義そのぎ寛通かんつうす。寛通かんつうを以もつての故ゆゑに一福いちふく起おこる時とき、能よく已生いじやう、未生みじやうの智慧ちゐを資すけて菩提ぼだいに近ちかしめ、一智いちち現あらする時とき能よく已生いじやう、未生みじやうの福智ふくちを導みびいて、悉ことごとく果くわに近ちかしむ。良まことに諸行しよぎやう共に一果いつくわを牽ひくを以もつての故ゆゑに、彼福智ふふくち一一いちいちに現あらする時とき一切いっせつを資導しだうす。五ごに行ぎやうの前後ぜんごに隨まつて以もつて資導しだうを説とく。福行ふくぎやうは先まに生なじ、智慧ちゐは後のちに起おこる。先生せんじやうの福ふくを以もつて未生みじやうの智ちを資すけ、其それをして生なずることを得えせしめ、後生のちの智ちを以もつて先起せんきの福ふくを導みびき、生死しじを出だでて涅槃ねはんに趣向すきやうせしむ。資導しだう是こゝの如ごとし。此一門つぎ次に六度爲因ろくどゐんの義ぎを明あす。中なかに於おて、別べつして三門さんもんを以もつて辨釋べんしやくす。一いちには六度ろくどの淺深せんせんの分齊ぶんせいを明あす、二にには果得くわとくの差別しやぶつ不同ふどうを明あす、三さんには六度ろくどを以もつて果くわに對たいして因いんを明あす。分齊ぶんせいと言ことふは、義別ぎべつに三有さんゆうり。一いちには緣修えんしゆの六度ろくど、彼六識はろくしち、七識しちしちの心しんの中に於おて觀くわんを緣えんじて修習しゆじゆす。二にには眞實有作しんじつゆうさくの六度ろくど、前ぜんの緣修えんしゆに依よつて眞心しんしんを動發どうはつして、眞心しんしんの中の諸行しよぎやうをして集起じふしせしむ。此れ即すなはち『地經』の第八地はちだうの中の世出世間有作しじゆつせけんゆうさくの淨勝じやうじやうなり。前ぜんの五ごの功德とくでんを名なけて世間せけんと爲なし、後のちの一いちの智慧ちゐを名なけて出世しじゆつせと爲なす。此れ緣えんに従したがつて生なずるが故ゆゑに有作ゆうさくと曰いふ。三さんには眞實無作しんじつむさくの六度ろくど、眞心しんしんの自體じたいは本是ほんぜれ一切功德法いっせつとくでんぽうの性しやうなり。妄想まうさうの心しんは緣えんに對たいして煩惱ぼんごうを現起げんきせずと雖なも、體たいは是こゝれ一切いっせつの諸煩惱しよぼんごうの性しやうなるが如ごとし。眞心しんしんも是こゝの如ごとく緣えんに對たいして諸徳しよとくを現起げんきせずと雖なも、體たいは是こゝれ一切いっせつの諸功德しよとくでんの性しやうなり。故ゆゑに馬鳴ばめいの言ごんは

【地經】第十。

【次に等】二に果徳の差別不同を明す。

【次に等】三に六度を以て果に對して因を明す。

【涅槃】經第二十。六師子吼品之二十。

く、「本より已來、無量性功德の法を具足す」と。是功德の性、本妄の爲に隠れて不淨に相似たり。後妄染を息めて本隠れたるの性顯れて今徳を成ずるを、名けて無作の六波羅蜜と爲す。此れ即ち「地經」の第八地の中の世出世間無作淨勝なり。分齊是の如し。次に果徳を分つ。果徳に二有り。一には性淨の果、本隠れて今顯る。二には方便の果、本無く今有り。果徳是の如し。次に六度を以て果に對して因を明す。中に於て二有り。一には緣正を分別す。性淨の果に望むれば、無作の六度を以て正因と爲し、餘の二を緣と爲す。方便の果に望むれば、有作の六度を以て正因と爲し、餘の二を緣と爲す。二には生了を分別す。性淨の果に望むれば、生了は不定なり。若し無を辨じて有ならしむるを生と名くと言はば、則ち性淨の果は唯了因の了にして、生因の生に非ず。『涅槃』に説くが如し。本無に非ざるが故に、了因の中に就いて、緣修、有作の二種の六度は異相顯了す。故に了因と名く。無作の六度は自體顯了にして果徳と爲る。故に了因と曰ふ。若し正起を説いて以て生因と爲し、傍に助くるを了と爲さば、則ち性淨の果に二因を具足す。無作の六度を以て生因と爲し、餘の二を了と爲す。方便の果に望むれば、生了は不定なり。若し本有を了するを了と名くと言はば、則ち方便果は唯生因の生にして、了因の了に非ず。本有に非ざるが故に。生因の中に就いて、有作の六度を正因の生と爲し、餘の二の六度を緣因の生と爲す。若し正起を説いて以て生因と爲し、傍に助くるを了と爲さば、則ち方便の果に二因を具足す。『涅槃』に説くが如し。「有作の六度は是れ彼生因、餘の二の六度は是れ彼了

【四七】以下、第九に位についで異を分ち並に優劣を辨す。先に異を分つ【地經】論第三。

【次に等】二に其優劣を辨ず。中に二、一に攝善を分別するに四、一に位に約す。

【地經】論第八。二には等【二には等】二に能に就く。【地持】第六菩薩功德品。

因なり」と。「緣修の六度は是れ了なること解すべし。無作の六度は云何が了と名くる。」「彼法を見るに由つて、菩提智を成す。色の識を生ずるが如し。故に了因と名く。體性顯了にして彼果を成ずるが故に。」

第九門の中に、位に就いて異を分ち、并に優劣を辨す。異を分つと言ふは、六度は位に隨つて異に二種有り。一には別異、【地經】に説くが如し。菩薩初地の檀度増上、乃至六地の般若増上なり。二には通異、彼「相續解脫經」に説くが如し。彼に六度の義を説くに、別して三有り。一には直に名けて波羅蜜と爲し、二には上波羅蜜、三には大波羅蜜なり。地前の菩薩は煩惱亦行じ、善法も亦起す。勝を起すこと能はず。是故に直に波羅蜜と名くることを得。初地已上乃至七地は煩惱を行ぜず、善法のみ獨り起り、分に隨つて平等離染清淨なるを上波羅蜜と名く。八地已上は微細の使性にして、畢竟じて永く滅す。善行深廣なるを、大波羅蜜と名く。隱顯是の如し。通じては則ち義齊し。此一門に優劣を辨す。釋するに二有り。一には攝善を分別し、二には治患を分別す。攝善の中には義別に四有り。一には位に約して分別す。檀は初地に在り。乃至般若第六地に在り。檀は初地に在つて最もも以て劣と爲し、戒は二地に在つて次に以て勝と爲し、是の如く漸く増して、乃至般若第六地に在つて最もも以て上と爲す。此一義は【地經】に説くが如し。二には能に就いて分別す。精進、般若を通じて能く策し、一切の諸行を導く。説いて以て勝と爲す。餘は是の如くならず。説いて以て劣と爲す。此一義は【地持】に説くが如し。彼論に言はく、「六度の中、

【三には等】 次三に主伴分別。【大品】 大智論第八十一。【地論】 第二。【四には等】 四に行相を説く。

【治患の等】 優劣を辨ずる中二に治患の義を明すに、業亦四あり。一に業煩惱に對して辨ず

【二には等】 二に使非使に對して辨ず。

精進、般若は餘の波羅蜜に勝たり」と。四攝の中の愛語を勝と爲し、四無量の中の大悲を勝と爲すが如し。是の如きの一切なり。三には主伴を分別す。慧を行の主と爲し、之を説いて勝と爲す。餘の五は伴助なれば、説いて以て劣と爲す。此一義は『大品』に説くが如し。『地論』にも亦云はく、「智眷屬とは、謂ゆる檀等なり」と。四には行の相を説くに就いて分別を成す。六俱に是れ勝、六俱に是れ劣なり。何が故に是の如くなる。『六度の行は互に相助成す。檀行を主と爲れば、餘の五は助成す。檀行は主なるが故に、説いて以て勝と爲す。餘の五は助なるが故に、之を説いて劣と爲す。乃至般若も類して亦同じく然なり。此一義は『大品經』六度相攝品に説くが如し。攝善の義の中に此四の異有り。治患の義の中にも亦四種有り。一には業煩惱に對して其優劣を辨す。戒は業非を治し、餘は煩惱を治す。業は兼て防ぎ易ければ、能治の行は之を説いて劣と爲す。煩惱は是れ本なり。深細にして遣り難ければ、能治の道を通じて以て勝と爲す。若し爾らば、何が故に戒は施の上に在る。釋して言はく、「上に能く犯戒の煩惱を起す。憚りも治し難きが故に、能治の戒は施の上に在り。是れ破戒は憚りよりも細なるが故に、戒は施の上に在るに非ず。故に信戒等の五種の善の中に、戒は初にして施は後なり。六念も亦爾なり。』二には使非使に對して其優劣を辨す。六が中の忍、慧は使惑を對治す。忍は瞋使を治し、慧は癡使を治し、餘は非使を治す。施は慳垢を治す。是故に非使なり。戒は業非を防ぐ。故に亦非使なり。精進と禪とは煩惱地を治す。故に亦非使なり。使は強にして斷じ難し。忍慧は能く除く。之を説

【三には等】三に伏斷と永斷との分別。
【四には等】四に過に隨つて論ず。

【六】以下、第十に六度因起の次第を明す。
【地持】 第八行品

【地持】 第八。

いて勝と爲す。非使は遣り易ければ、餘の四之を治す。説いて以て劣と爲す。問うて曰はく、『何が故に忍慧の二行は偏に使性を治する。』釋して言はく、『六が中の前の三は是れ其化衆生力、後の三は是れ其護煩惱力なり。化生の中には忍は勝れ餘は劣れり。護煩惱力の中には慧は勝れ餘は劣れり。今は勝處に就いて使惑を除くことを明し、餘は廢して論ぜず。』三には伏永を分別す。前の五は伏斷にして、之を説いて劣と爲し、般若は永斷にして、説いて以て勝と爲す。四には過に隨つて互に論ず。六度に皆勝劣の義有り。慳貪の病に望めては、布施を勝と爲し、餘の者を劣と爲す。破戒の病に對しては、持戒を勝と爲す。乃至愚癡の病を對治するには、般若は最も勝れ、餘の者は劣と爲す。是故に六度に皆勝劣有り。第十に、其因起の次第を明す。『地持』に説くが如し。始に財を願ふして、捨離して出家す。故に先に斷を明す。既に出家し已つて菩薩戒を受け、精持して犯ぜず。故に次に戒を明す。護戒を以ての故に、忍力清淨にして衆生を怖れず。故に次に忍を明す。忍力を以ての故に、能く苦縁に安んじて勤修無間なるは、善法の方便なり。故に次に精進を明す。其精進を以て放逸せざるが故に、善く其心を一にす。故に次に禪を明す。心善く一なるが故に、實知見を得。故に次に慧を明す。問うて曰はく、『精進は諸行を策すと雖も、何んが初に説かずして乃ち第四と爲るや。』釋して言はく、『精進は諸行を策すと雖も、義に隨つて別して分たば、或は前の三に屬し、或は後の二に屬す。故に第四に置く。』云何が前に屬する。』『地持』に説くが如し。前の四は戒學にして、精進は是れ其戒行の所依

【論】 大智論第十

【龍樹等】 大智論第十五。 第五。

なり。故に第四に在り。云何が後に屬する。龍樹の説くが如し。施、戒及び忍は世人能く行じて精進を假らず。故に初に在らず。云何が假らざる。論に言はく、一人の所有の容主の如き、法應に供養すべし。或は種種の因縁を爲して施を行す。乃至畜生も亦施食を知る。是故に布施は精進を假らず。又復世人惡を爲す者は王法罪を治するを見て、願じて過を爲さず。或は惡名を畏れ、或は世間の種種の苦惱を思ひ、罪を避けて作さず。或は性善有つて惡を爲すことを樂まず。精進に由らず。又世人の如き、打罵等に於て或は畏るるを以ての故に、敢て返報せず。或は復力小なれば、報を加ふるに堪へず。或は性和忍にして返報せず。精進を假らず」と。又前の三の中に精進行りと雖も、小なるが故に説かず。禪智は微細にして世間の衆生自ら起すこと能はず。要す精進を假る。故に禪智の前に精進を宣説す。何が故に是の如くなる。禪定は是れ其土地の勝法なり。勤を以て方に現ず。般若は是れ其照理の深行なり。専修して乃ち成ず。故に精進を假る。又禪智の中に勝境界を得て、勤心轉増す。譬へば世人求を掘るには濕を見、火を攢るには烟を見て、求心踰猛なるが如し。彼も亦是の如し。増の故に偏に説く。又復前の三は事に依つて修行し、後の二種は義に依つて成ず。事を捨てて義に入る、勤に非ずんば能くせざるが故に、第四に在り。問うて曰はく、但前の三の福行有つて所願皆得。何んが精進を假つて方に禪智を得る。龍樹釋して言はく、佛道は深難にして、前の三有りと雖も成辦すること能はず。要す精進を假つて方に禪智及び諸の佛法を得」と。故に「地持」に云はく、「世尊は種種に

精進を稱嘆して菩提の因と爲す一と。六度の義之を辨すること巖爾り。

【九】淨法聚第五十八段に六念の義を明すに五門の分別あり、第一に釋名。初に念佛。【涅槃經】南本第十六梵行品。

【念法と等】二に念法。

【念僧と等】三に念僧。

六念の義に五門分別あり。一には名義を釋す。二には開合して相を辨ず。三には別に隨つて廣く釋す。四には次第。五には念の所爲。
第一に、名を釋す。六念の義は「涅槃經」に出づ。境を守るを念と名く。念別不同なれば、一門に六を説く。「六の名は是れ何ぞ。」一には念佛、二には念法、三には念僧、四には念戒、五には念施、六には念天なり。六が中の初の三は其所學を念じ、中間の二種は己が所行を念じ、後の一種は己が所成の涅槃の果を念ず。念佛と言ふは、覺の故に佛と名く。念に四義有り。一には如來に大功徳有つて、是れ諸の衆生の無上の大師なりと緣するを、名けて念佛と爲す。二には佛徳を緣じて己も當に同じかるべしと念するを、名けて念佛と爲す。三には佛徳を緣じて衆生に與へんと欲するを、名けて念佛と爲す。四には妄想を離れて彼如來の實徳と相應するを、名けて念佛と爲す。念法と言ふは、軌則を法と名く。念に四義有り。一には法寶に大功徳有つて、是れ諸の衆生の無上の妙藥なりと緣するを、名けて念法と爲す。二には法寶を緣じて己も當に證すべしと念するを、名けて念法と爲す。三には法寶を念じて衆生に授けんと欲するを、名けて念法と爲す。四には妄想を離れて相應するを、名けて念法と爲す。念僧と言ふは、和の故に僧と名く。念に四義有り。一には僧寶に大功徳有つて、是れ諸の衆生の良厚福田なりと緣するを、名けて念僧と爲す。二には僧徳を緣じて己も當に行すべしと念するを、名けて念僧と爲す。三には僧行を緣じ

【念戒と等】 四に
念戒。

【念施と等】 五に
念施。

て衆生に與へんと欲するを、名けて念僧と爲す。四には妄想を離れて彼眞實の僧行と相應するを、名けて念僧と爲す。念戒と言ふは、防禁を戒と名く。念に四義有り。一には戒行に大勢力有つて、能く衆生の惡不善の法を除くと縁するを、名けて念戒と爲す。二には己が所受を念じて精勤に護持するを、名けて念戒と爲す。三には己が戒善を念じて人を勸めて同じく習せしむるを、名けて念戒と爲す。四には妄想を離れて戒の實性を得、清淨無染なるを、名けて念戒と爲す。念施と言ふは、惠捨を施と名く。念に四義有り。一には施行に大功徳有つて、能く衆生の慳貪の重病を破すると念するを、名けて念施と爲す。二には己が所行を念じて專精に修習するを、名けて念施と爲す。三には施善を以て衆生を攝取せんと念するを、名けて念施と爲す。四には妄想を離れて施の實性を得、繫著する所無きを、名けて念施と爲す。問うて曰はく、「行に六度の別有り。今此には何が故に偏に戒施を念ずる。」釋して言はく、「略なるが故に。此れ行の始なるを以ての故に、偏に之を擧ぐ。」又問はく、「彼六度の中に於ては、先は施後は戒なり。今此には何が故に、先は戒後は施なる。」釋して言はく、「行者に二種の次第有り。一には麤細の次第、施は麤にして爲し易し。是故に先に修す。戒は細にして作し難し。是を以て後に習ふ。二には止作の次第、要す先に惡を止め、然して後に善を作す。衣を染むるに要す先に垢を除き、後に染色を受くるが如し。戒は是れ止行なり。是故に先に明す。施は是れ作行、是を以て後に説く。彼六度の中には、麤細門に依るが故に先に施を明し、此六念の中には、止作門に依るが故に先に

【念天と等】 六に念天。

戒を明す。念天と言ふは、己が家の當來に成ずる所の涅槃寂靜を天と名く。淨光明有つて受くる所自然なるも、亦名けて天と爲す。念に四義有り。一には當來の力、無畏等の一切の種徳に大福利有り縁するを、名けて念天と爲す。二には當果を縁じて必ず成の意を起すを、名けて念天と爲す。三には當果を縁じて衆生に與へんと欲するを、名けて念天と爲す。四には妄想を離れて彼菩薩の境界と相應するを、名けて念天と爲す。名の義是の如し。此一門

【五】 以下、第二に開合辨相。【雜心】 第一。

【大智論】 第二十

【地經】 論第三。

第二門の中に、開合して相を辨ず。開合は不定なり。要に據らば唯三なり。謂ゆる、念佛、念法、念僧なり。故に「雜心」に云はく、「衆生に、佛法僧の念を開かんが爲の故に、斯偈を説く。謂ゆる、敬三寶の偈を説くなり」と。或は分つて六と爲す。上に辨ずる所の如し。或は離して八と爲す。「大智論」に説くが如し。前の六の上に於て更に二種を加ふ。一には念出入息、意を繋けて數息の法門に住す。二には念死、常に死相を修す。或は分つて十と爲す。「大智論」摩訶衍品に説くが如し。前の八の上に於て更に二種を加ふ。一には念滅、彼涅槃の無爲寂靜を念じて、意を起して越求す。二には念身、自ら己身の無常、苦、空、無我、不淨を念じて、厭離を修行す。或は十一を分つ。「地經」に説くが如し。一には念佛、二には念法、三には念僧、四には念菩薩、五には念菩薩行、六には念波羅蜜、七には念十地、八には念不壞力、九には念無畏、十には念不共法、十一には念一切種一切智智なり。此十一は猶是れ六念なり。念佛と念法は六念の中の初二の念と同じく、念僧、

菩薩は是れ六念の中の念僧の所收なり。念菩薩行、念波羅蜜、十地は、是れ六念の中の念戒、念施の二念の所攝なり。六の中略なるが故に、單に戒施を念す。是中廣なるが故に、通じて一切を念す。後の念力等は是れ六念の中の念天の所攝なり。廣くは則ち無量なり。今は一門に據つて且く六種を論ず。問合是の如し。此二門

【五】以下、第三に廣釋、一に念佛【涅槃】第十六。

【念法と等】二に念法。

【大智論】第二十

【念僧と等】三に念僧。

【念戒と等】四に念戒。

【龍樹の等】大智論第二十二。

次に、廣く辨釋す。初に念佛とは、『涅槃』に説くが如し。佛の十種の名稱の功德を念す。謂ゆる、如來、應供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊なり。此十は後の十號章の中に、具に廣く分別するが如し。佛徳は無量なり。今は一門に據つて且く斯十を論ず。此名稱は念を生ずるの義強きを以ての故に、偏に之を念す。念法と言ふは、『大智論』に依らば、法に二種有り。一には教法を念す。謂ゆる、三藏、十二部經なり。二には義法を念す。謂ゆる、無常、無我、涅槃の三種の法印なり。亦三を分つことを得。一には教法を念す。謂はく、三藏等なり。二には理法を念す。謂ゆる、二諦、一實諦等なり。三には行法を念す。謂はく、三學等の起行の儀なり。念僧と言ふは、三乘の衆及び三乘の人所成の行徳を念す。念戒と言ふは、性に就いて二を分つ。龍樹の説くが如し。一には有漏戒を念じ、二には無漏戒を念す。問うてははく、直に無漏を念すれば便ち足る。何んが彼有漏戒を念すことを用ふるや。『龍樹釋』して言はく、『有漏戒に因つて無漏戒を得るが故に、通じて之を念す。人の賊中よりして來ると雖も、還つて能く賊を破すれば、王亦之を賞するが如し。彼も亦是の如し。行に就いて三を分つ。一には律儀

【念施と等】次に
 【念天と等】次に
 【涅槃】第十六梵
 行山。【大智論】第二十

を念じ、二には攝善を念じ、三には攝生を念す。義に隨つて八を分つ。龍樹の説くが如し。一には清淨戒、二には不戒、三には不破戒、四には不穿戒、五には不雜戒、六には自在戒、七には不著戒、八には智者所讚戒なり。清淨戒とは、論に釋して言ふが如し。諸の瑕穢無きを清淨戒と名く。此句通じて五篇清淨を明す。不戒とは、初篇、二篇の重惡を除離するを不戒と名く。不破戒とは、後の三篇を離するを不破戒と名く。又論に釋して言はく、「身の惡を遠離するを不戒と名け、口の過を遠離するを不破戒と名く」と。不穿とは、論に言はく、「善心を涅槃に向けて、煩惱惡覺をして中に入らしめざるを、不穿戒と名く」と。不雜戒とは、正く涅槃の爲にして世報の爲にせざるを、不雜戒と名く。自在戒とは、論に言はく、「戒に隨つて外縁に隨はず、愛結の爲に傷礙せられざるを、自在戒と名く」と。不著戒と言ふは、論に言はく、「戒に於て戒相を取らず、愛著を生ぜざるを、不著戒と名く」と。智所讚とは、持戒清淨にして常に賢聖の爲に稱讚せらるるを、名けて智者所讚戒と爲すなり。念施と言ふは、財、法、無畏施等を行することを念す。念天と言ふは、「涅槃」の如きに依らば、天に三種有り。一には生天、謂はく、四天王乃至非想非非天。二には淨天、謂ゆる、一切の三乘賢聖なり。三には第一義天、謂はく、佛果の徳なり。是三種の中に、菩薩は但第一義天を念す。是れ究竟所求の果なるを以ての故に。【大智論】に依らば、天に四種有り。一には假號天、亦名字天と云ふ。世の人王を名けて天王と爲し、亦天子と云ふが如し。二には生天、謂はく、四天王乃至悲想なり。三には淨天、謂

【五二】第四に六念の次第を明す。大智論第二十二。

【五三】第五に六念の所爲を明す。大智論第二十一。

はく、諸の賢聖なり。四には生淨天、謂はく、三界の中に生を受くる聖人なり。是四種の中に彼生天及び生淨天を念す。此れ未來上勝の果なるを以ての故に。問うて曰はく、『佛弟子衆は應に三寶を念すべし。何の義を以ての故に、彼生天を念する。』此れ自己の善業の果なるを以ての故に。』問うて曰はく、『生天は是れ凡夫の法なり。何が故に之を念する。』人有つて涅槃に入るに堪へざるが故に、彼生天を念じて行を起して趣求す。此三門第四門の中に、其次第を明す。佛は是れ究竟所學の果徳なり。故に先に之を念す。佛は法に由つて成す。故に次に法を念す。法は人に出つて、行じて方に能く果に到る。故に次に僧を念す。前の三寶に依つて、發起修行して先に十惡を離る。故に次に戒を念す。戒は惡を破するを以て、便能く善を生ず。故に次に施を行す。戒に依り、施に依つて、能く涅槃の第一義天を得。故に次に天を念す。又龍樹に依らば、佛は是れ主說法の人なり。故に先に佛を念す。佛に依つて說法有り。故に次に法を念す。佛は佛語に隨つて能く解し能く行す。故に次に僧を念す。僧は戒に由つて成す。故に次に戒を念す。戒を以て惡を破して、便能く施を行す。故に次に施を念す。戒施を以ての故に、二の果報を得。謂ゆる、生天及び生淨天なり。中品の行者は其生天を得、増上の行者は生淨天を得。故に後に天を念す。次第是の如し。此四門

【五三】第五に、其念の所爲を明す。所爲に四有り。一には現在の怖畏を除かんが爲なり。龍樹の説くが如し。或は惡魔有つて、來つて行者を怖れしむ。佛即ち人に教へて六念を修習

【地持】第七。

【五四】淨法聚第五十九段に六種決定の義を明す。【地經論】第一。

せしむ。或は怖畏有り、佛を念じて即ち滅す。諸の天衆と脩羅と闘つて心に怖畏を生じ、若しは帝釋の寶幢を憶念すること有つて、怖畏即ち滅するが如し。或は怖畏有り、法を念じて即ち滅す。天畏るる時、帝釋の左面の天王伊那舍天の寶幢を憶念して即ち滅し、又右面の天王婆樓那天の寶幢を念じて亦滅するが如し。或は怖畏有り、己が所修の施戒の善根及び天の果報を念すれば、亦除滅することを得。二には生死の因果を出離せんが爲の故に、六念を修す。三には佛の一切種徳を求めんが爲の故に、六念を修す。四には一切の衆生を化度せんが爲の故に、六念を修す。六念の義之を辨すること疊兩り。

六種決定の義

六種決定は、『地經論』に出づ。斯れ乃ち出世菩提の心なり。實に即して不退なるを、名けて決定と爲す。此決定は是れ十地の體なるが故に、『地經』の中には、創始めて宗を開き言を標す。菩薩の願善決定して、無雜不可見廣大なること法界の如く、究竟せること虚空の如し。未來際を盡して一切の衆生界を覆護し、能く三世の諸佛の智地に入る。願善衆徳を統納して中に在らざること無しと雖も、衆徳の狀は以て具に論じ難し。今は一門に據つて且く六種を説く。『六の名は是れ何ぞ。』一には觀相善決定、二には眞實善決定、三には勝善決定、四には因善決定、五には大善決定、六には不怯弱善決定なり。六が中の前の五は自分の功德、彼の一是勝進なり。故に『地持』の中には、第六を名けて增長

【樂論】
二十七
北本第

勝分究竟菩提と爲す。自分の中に就いて、初の四は自利、後の一は利他なり。自利の中に就いて、前の二は行體、次の一は行徳、後の一は行能爲因の義なり。體の中、初の一は其觀解相を破して如に入ること、を明し、後の一は其れ實に契ひて相を離るることを彰す。觀相と言ふは、論に自ら釋して言はく、「謂はく、眞如觀は一味の相なり」と。一味と言ふは、喩に従つて名と爲す。大海は復濶廓なりと雖も、鹹同じくして一味なるが如似し。諸法廣しと雖も如性一味なり。此如理を觀じて更に異縁無きを、一味の相と名く。眞實と言ふは、論に自ら釋して言はく、「世の境界に非ず。行眞に契ふを以て、世智の爲に照見せられざるを、世の境に非ずと名く」と。勝善と言ふは、行徳深廣なること法界の如くなるが故に、名けて勝と爲す。因善と言ふは、願善の行能く常果、無常果の因と爲るが故に、因善と云ふ。常果と言ふは、謂はく、大涅槃なり。無常果とは、謂はく、佛菩薩大悲の作用なり。世の生滅に隨ふが故に無常と曰ふ。此二は猶是れ『涅槃經』の中の二種の莊嚴なり。常とは猶彼彼智慧莊嚴なり。故に彼經に言はく、「智慧莊嚴は無礙常住なり」と。無常は是れ彼功德莊嚴なり。故に彼經に言はく、「功德莊嚴は有礙非常なり」と。又「涅槃」に云はく、「諸佛如來は無常にして常と共にあり、常にして無常と共にあり」と。無常にして常と共にあり、是は此れ常果なり。常にして無常と共にあり、是は此れ所說無常の愛果なり。願善は彼に望めて同じく能く出生す。故に名けて因と爲す。大善と言ふは、上來は自利にして此一は利他なり。利他の行は廣きこと衆生界に等し。故に名けて大と爲す。故に經に説いて言はく、

【五五】淨法聚第六
十段に六妙行の義
を明す。

「一切の衆生界を覆護す」と。不怯弱とは、諸佛の智徳菩薩の分に譲して、深に於て能く入り、心に禪退無し。故に不怯と云ふ、故に經に説いて言はく、「能く三世の諸佛の智地に入る」と。六種の決定之を釋して云ふこと爾り。

六妙行の義。

（五五）ろくめうぎやうぎ
六妙行とは、無學の聖人の離過の行なり。經には亦名けて六妙法と爲す。通じて釋すれば、一切の起作を行と名く。行の自體を説いて以て法と爲す。此行と法とは一切不善の過を遠離す。故に稱して妙と爲す。相に隨つて別して分たば、妙行、妙法は差異無きに非ず。「異相は如何。」「行陰の無過を名けて妙行と爲し、餘陰の離法を説いて妙法と爲す。」
「見義云何。」「毘曇」の如きに依らば、識、想、受、行は起ること一時に在り。眼識起る時即ち四陰を具す。眼識は識陰なり。同時の受數を説いて受陰と爲し、同時の想數を説いて想陰と爲し、餘の思欲等を説いて行陰と爲す。乃至意識起る時も亦爾なり。彼六行の中の離過無罪を六妙行と名け、餘の三陰の離過無染を六妙法と名く。大乘も亦爾なり。若し「成實」に依らば、識、想、受、行は起ること先後に在り。眼識の後に具に四心有り。初は識、次は想受、後は行なり。乃至意識の後も亦爾なり。彼六識の後の行の中の無過を六妙行と名く。彼六識の中の識想及び受は性無記なりと雖も、行中の煩惱の漏過を生ぜず。亦煩惱の漏より生ぜざるを、六妙法と名く。六妙行の義、之を辨ずること略爾り。

六種善法の義。

【五六】淨法聚第六十一段に六種善法の義を明す。

【涅槃】南本第三十五橋陣如品。

六種善法は『大智論』に説くが如し。名字は是れ何ぞ。『謂はく、善の五陰及び數滅無爲は是れ其六なり。善の五陰の中に其四種有り。一には生得の善陰、宿習今成す。二には方便の善陰、現在に修起す。三には無漏の善陰、謂はく、三乘の人の縁修の法身なり。四には常住の五陰、謂はく、佛菩薩の眞實の法身なり。故に『涅槃』に云はく、「無常の色を捨して常の色を獲得す。受、想、行、識も亦復是の如し」と。此等は前の五陰章の中に、具に廣く分別するが如し。數滅無爲に略して三種有り。一には煩惱滅、謂はく、五住の一切の煩惱を滅す。二には業滅、謂はく、有漏、無漏の業を滅す。三には苦滅、謂はく、分段、變易の果を滅す。是等は前の三無爲の中に、具に廣く辨釋するが如し。此等は皆大乘に依つて分別す。六善是の如し。

六和敬の義。

【七】淨法聚第六十二段に六和敬の義を明す。

六和敬とは、同止安樂不惱の行なり。起行不乖なる、之を名けて和と爲す。行和するを以ての故に、情相親重なる、これを見て敬と爲す。和敬不同なれば、一門に六を説く。『六の名は是れ何ぞ。』一には身業同、二には口業同、三には意業同、四には同戒、五には同施、六には同見なり。六が中の前の三は身に就いて同を彰はし、後の三種は行に就いて

同を説く。身業同とは、略して二種有り。一には離過同、同じく殺、盜、邪姪等の事を離る。二には作善同、同じく一切の禮拜等の善を爲す。口業同とは、亦二種有り。一には離過同、同じく皆妄語、兩舌、惡口、綺語を遠離す。二には作善同、同じく讚誦、讚詠等の善を爲す。意業同とは、亦二種有り。一には離過同、同じく一切の煩惱業思を離る。二には作善同、同じく信、進、念、定、慧等の一切の善法を修す。同戒と言ふは、略して二種有り。一には受戒同、二には持戒同なり。又更に二を分つ。一には作戒同、二には無作戒同なり。亦三を分つことを得。一には律儀戒同、二には攝善戒同、三には攝衆生戒同なり。同施と言ふは、略して二種有り。一には内施同、自ら己身を捨して尊事を奉給す。二には外施同、餘の資生を捨す。亦三を分つことを得。一には財施同、二には法施同、三には無畏施同なり。同見と言ふは、見は、謂はく見解なり。略して二種有り。一には世諦の中の見解に別無し。二には眞諦の中の見解に別無し。問うて曰はく、『前の三は行として收めざること無し。何の義を以ての故に、復後の三を説くや。』釋して言はく、『前の三は是れ其能作、後の三は所作なり。故に復之を説く。又前の三の中には、行を攝して盡し難し。未だ前の三の所作は是れ何なるかを知らず。故に復之を明す。』問うて曰はく、『所作の行は別して無量なり。何が故に偏に戒施及び見を説く。』其略を以ての故に。六度の中に於て戒施は初に在り、慧見は後に在り。初に就き、後に就いて、以て共同を彰す。中間は知るべし。故に略して論ぜず。』六和敬の義、之を辨すること略兩り。

六修定の義に七門分別あり。一には相を辯ず。二には行義の差別。三には位に就いての分別。四には地に就いての分別。五には界に就いての分別。六には智に就いての分別。七

【五六】淨法聚第六十三段に六修定の義を明すに七門の分別あり。第一に

辨相。第一に、相を辨ず。六修定とは、一には數、二には隨、三には止、四には觀なり。五には名けて還と爲す。『毘婆娑』の中には、之を名けて轉と爲す。六には名けて淨と爲す。初に數と言ふは、覺觀を制せんが爲に念を繋けて息を數ふ、之を名けて數と爲す。數の中に四有り。一には増、二には減、三には亂、四には等なり。五度の中に具に廣く分別するが如し。此數は即ち是れ止が家の方便なり。言ふ所の隨とは、心に異行無く、住すること氣息に隨ひ、長と爲し、短と爲し、近と爲し、遠と爲し、身中に遍すと爲し、一處に在りと爲す。去つて何の處にか至り、何に齊くしてか還る。心隨つて覺知す。之を名けて隨と爲す。此隨は即ち觀が家の方便なり。言ふ所の止とは、己が身分に於て眉間、鼻端、齊輪、足指は、心の宜き所に隨つて、念を繋けて住せしむ。故に名けて止と爲す。言ふ所の觀とは、始め氣息を觀じて己身の中に於て、損と爲し、益と爲し、冷と爲し、煖と爲し、密かに悉く觀察す。然るに此氣息は即ち是れ風大なり。『毘婆娑』に云はく、「風大の爲の故に等しく四大を觀す」と。四大を觀じ已つて、次に四大所造の色を觀す。謂ゆる、色、聲、香、味等なり。一色は何の法に依つてか能く造作有りや。『謂はく、心法に依る。故に次に、受、想、行、識を觀察す。是等を觀察する、之を名けて觀と爲す。』言ふ所の還とは、止行の能

【雜心】 第八。

なり。止行成ずるが故に、欲惡の法に於て若し思覺を起さば、則ち能く之を制して、心を
して還つて出離覺の中に住せしむ。之を名けて還と爲す。故に『雜心』に云はく、「欲覺は
小行にして、出覺は多行なり」と。『毘婆娑』の中には何が故に此を名けて、之を以て轉
と爲すや。『惡覺を轉離して善覺に住するが故に。又善覺の中に下を轉じて上を起すを、亦
名けて轉と爲す。』言ふ所の淨とは、觀の能なり。觀行成ずるが故に、能く諸の惡を滅
す。故に名けて淨と爲す。六の相是の如し。此一門

【五】 第二に止等
の行義の差別を明
す。

次に、止等の行義の差別を明す。『毘婆娑』に説くが如し。數に二事有り。一には出入の
息を數へ、二には能く惡覺を捨す。隨にも亦二有り。一には出入の息に隨ひ、二には能く
惡覺を離る。止にも亦二有り。一には能く心を住して、鼻端、眉間、足指に在く。二には
三昧を捨せず。觀にも亦二有り。一には出入の息の損益等の事を觀ず。上に辨ずる所の如
し。二には能善く心心數の相を取る。轉にも亦二有り。一には能く五陰を知り、二には能
く聖道に入る。淨にも亦二有り。一には能く結を斷じ、二には能く諦に於て知見清淨な
り。行別是の如し。此一門

【六】 第三に位に
就いて論ず。

次に位に就いて論ず。義に隨つて通じて論ずれば、位位に皆有り。中に於て別たば、數、
隨、止、觀は五停心に在り、還は念處より世第一の法に至るまでに在り。故に『毘婆娑』
に云はく、「出入の息を轉じて身念處を起す」と。是の如く次第して、乃至忍を轉じて世第
一の法を起すを、名けて轉と爲すなり。淨とは、見道已上に在り。故に『毘婆娑』に云は

【六二】第四に地に就いて論ず。

【六三】第五に三界に就いて論ず。

【六四】第六に十智に約して論ず。

【六五】第七に受に約して論ず。

【六五】淨法聚第六十四段に六三昧の義を明す。
【成實】第十五。

く、「淨とは、謂ゆる、苦法忍等なり」と。此三門

次に地に就いて論ず。地とは、謂はく、欲界乃至非想なり。『毘婆娑』に依らば、此六は

欲界、未來、中間と二禪、三禪の方便道との攝なり。中に於て別して分たば、數隨の二行

は欲界、未來、中間と二禪、三禪の方便道とに在つて攝し、止、觀、還、淨は一切地の方便道に在つて攝す。諸地に皆止、觀、還、淨の四種の義有るが故に。此四門

次に界に就いて論ず。界とは、謂はく、三界なり。『毘婆娑』に依らば、此六の初起は欲界に在り。後は色界に依つて亦隨つて起すことを得。此五門

次に智に約して論ず。智とは、謂はく、十智なり。此六は唯一の等智の所攝なり。世間修なるが故に。若し當に位に就いて淨を分たば見道已上に在るべければ、是れ則ち淨の中に十智の性を具す。此六門

次に受に約して論ず。受とは、謂はく、苦、樂、憂、喜及び捨なり。此六は唯一の捨根と相應す。是れ根本禪地の攝に非ざるが故に。若し諸禪に就いて義もて説かば、止、觀及

與び還、淨は或は喜と相應し、或は樂と相應し、或は捨と相應す。初二禪に在るは喜受と相應し、三禪の中に在るは樂受と相應す。自餘の一切は捨受と相應す。六種是の如し。

六三昧の義

六三昧の義は『成實』に義するが如し。『名字は是れ何ぞ。』一には一の相修を一相と爲

し、二には、一の相修を種種相と爲し、三には一の相修を一相及び種種相と爲し、四には種種相修を種種相と爲し、五には種種相修を一相と爲し、六には種種相修を種種相及び一相と爲す。『相狀は如何。』論釋不同なり。有る論師の説かく、「第四禪を修するを一相修と名け、五聖支定を修するを種種相修と名く」と。五聖支定とは、廣くは上に辨ずるが如し。一相修を一相と爲すと言ふは、第四禪を修して羅漢果を得と爲す。一相修を種種と爲すと言ふは、第四禪を修して羅漢及び五神通を得と爲す。種種相修を種種と爲すとは、五聖支を修して五通を得と爲す。種種相修を一相と爲すとは、五聖支を修して羅漢を得と爲す。種種相修を種種相及び一相と爲すとは、五聖支を修して五道及び羅漢果を得と爲す。此一義は『成實』には立てず。故に彼非して言はく、「五聖支の中の前の三は、猶是れ世俗の四禪なり。羅漢を得る時、四禪の中に於て隨つて一禪に依る。云何が説いて、五聖支を修して羅漢果を得るを、名けて一相と爲すと言はん。又復明觀の二聖支の中に、親く觀支に依つて羅漢果を得。明支に依らず。故に知んぬ、五聖支を修するを以て一相を以て一相を得と爲さざることを」と。『成實』に立つる所は、定一縁を守れば一相修と名け、慧心法を見て種種差別すれば種種修と名く。一相修を一相と爲すと言ふは、論に言はく、「定に依つて還つて禪定を生ず。初禪より二禪等を生ずるが如し」と。一相修を種種と爲すと言ふは、定に依つて慧を生ず。一相修を一相及び種種と爲すと言ふは、定に依つて定を生じ、及び智慧を生ず。

種種修を種種と爲すと云ふは、慧に依つて慧を生ず。聞の思を生ずるが如く、思の修を生ずるが如し。種種修を一相と爲すと云ふは、慧に依つて定を生ず。種種修を種種相及び一相と爲すと云ふは、慧に依つて能く一切の定慧を生ず。問うて曰はく、「是中の定慧の相生は是れ有漏とや爲ん、是れ無漏とや爲ん。」論に定判無し。義釋するに三有り。一には通に就いて以て論ず。能生、所生の一切の定慧は、悉く有漏及及び無漏に通ず。二には定慧の隠顯に就いて互に論ず。定は唯有漏、慧は唯無漏なり。三には能生、所生の定慧の隠顯に就いて互に論ず。能生の定慧は隠にして一向に有漏、所生の定慧は一向に無漏なり。六三昧の義、之を辨じて云ふこと兩り。

六攝の義

【六六】 淨法聚第六
十五段に六攝の義
を闡す。
【攝持論】 第八攝

六攝の義は『地持論』に出づ。物を縁じて道に従はしむる、之を以て攝と爲す。攝處不同なれば、一門に六を説く。『六の名は是れ何ぞ。』一には頓攝、二には増上攝、三には取攝、四には久攝、五には不久攝、六には後攝なり。六が中の前の三は化事分別す。三が中の初の一は所化の中の頓、第二の一門は能化の身上、第三の一門は化具則備す。後の三種は隨根分別す。初の一は下根、次の一は中根、後の一は上根なり。故に六種有り。頓攝と言ふは、一切の生に於て父母の想を作し、己が力に隨つて能く一切種を以て安樂饒益す。是を頓攝と名く。増上攝とは、菩薩尊きに居りて衆生を攝取するを、増上攝と名く。人願に

【卷七】淨法聚第六
 十六段に七善律儀
 の義を明すに四門
 に辨相、一に不殺
 【論】十地論第四

依らば三有り。一には王と爲つて善く人民を攝し、二には家主と爲つて巧に親屬を益し、三には父と爲つて子に於て等く益し、情に偏黨無し。取攝と言ふは、能く財法を以て衆生を攝取す。久攝と言ふは、軟根の衆生は久く化して乃ち熟す。不久攝とは、中根の衆生は化して淨に近き易し。後攝と言ふは、上根の衆生は現世の中に於て清淨に堪任す。之を化益すること窺まるが故に後攝と名く。問うて曰はく、「此六は四攝の中に於て何の相の所收なる。」釋して言はく、「四攝は六が中に通ず。別して相對せず。」六攝是の如し。

七善律儀の義に四門分別あり。一には相を辨ず。二には開合廣略。三には境に對して分別す。四には支因の具不具。
 無作の善を説いて律儀と爲す。律儀不同なれば、一門に七を説く。謂ゆる、不殺、不盜、不婬、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語なり。不殺と言ふは、論に説くに三有り。一には因離、二には果行離、三には對治離なり。因離に二有り。一には共因、謂はく、貪、瞋、癡の諸業皆悉く此を用て因と爲す。故に名けて共と爲す。二には不共因、謂はく、殺心、畜刀杖等を離る。此れ唯殺の因なるが故に不共と曰ふ。問うて曰はく、「若し殺心を遠離するは是れ因離なりと言はば、何が故に論の中に説いて果離と爲すや。」釋して言はく、「殺心の望む所不定なり。若し貪等に望むれば是れ其果行、若し正殺に望むれば是れ其因行なり。今は後の門に據つて、説いて因離と爲す。」果離と言ふは、正く殺業を離る。對治離とは、謂ゆる、慈心、安穩心等なり。慈は能く樂を與へ、安は能く善を授く。此二種を以て

【不盜と等】 二に不盜。

【不姪と等】 三に不姪。

【不安語とは等】 四に不安語。

能く殺業を治するが故に、對治と名く。不盜と言ふは、亦三種有り。一には因離、二には果行離、三には對治離なり。因離に二有り。一には共因を離る。謂はく、貪、瞋、癡なり。二には不共因を離る。離ゆる、盜心及び無資生なり。故に『地經』の中の資生満足、名けて困難と爲す。満足と言ふは、常に少欲知足の心を修して須欲する所無し。故に満足と云ふ。果行離とは、正く盜業を離る。對治離とは、謂ゆる、布施なり。不姪と言ふは、亦三種有り。一には因離、二には對治離、三には果行離なり。因離に二有り。一には共因を離る。謂はく、貪、瞋、癡なり。問うて曰はく、『論の中に宣說すらく、『邪姪は唯貪心より成ず』と。今云何が貪瞋癡を離るるを因離と爲すと言ふや。』釋して言はく、『終成は其れ唯貪に在り。遠は則ち貪瞋癡より起る。是故に之を離るるを、通じて名けて因離と爲す。』二には不共因を離る。謂ゆる、姪心及び無妻色なり。故に『地經』の中に、自足妻色を名けて因離と爲す。』云何が自足なる。』『現在世に於て梵行に餘有り、心に求欲無きを足妻色と名く。自足を以ての故に、心に怖欲無し。故に姪因を離る。』果行離とは、正く姪業を離る。對治離とは、常に梵行を修す。不淨觀等なり。不安語とは、論釋に二有り。一には對治離、謂ゆる、實語は誑心を對治す。二には果行離、正く妄語を離る。實に據つて具に論ずれば、亦三種有り。一には因離、二には果行離、三には對治離なり。因離に二有り。一には共因を離る。謂はく、貪、瞋、癡なり。二には不共因を離る。謂はく、誑他心なり。果行離とは、正く妄語を離る。對治離とは、常に實語を修す。問うて曰はく、『是中に實に三離を

【地論】 第四。
【不兩舌とは等】
五に不兩舌。

【不惡口とは等】
六に不惡口。

【不綺語とは等】
七に不綺語。

【六八】 第二に閉合
廣略の義を辨ず。

具す。何が故に、論の中には但二を云ふや。』釋して言はく、『口言は發し易くして遠因を藉らざることを彰さんが爲に、是故に貪瞋癡を離るるを、以て因離と爲すと説かず。誑他の心を離るるは、是れ因離なりと雖も、能く誑心を治す。對治の中に説くが故に、別して論ぜず。故に『地論』に云はく、「誑心を對治するは、即ち是れ因離なり」と。』不兩舌とは、亦三種有り。一には因離、二には對治離、三には果行離なり。因離に二有り。一には共因を離る。謂はく、貪瞋癡なり。二には不共因を離る。破壞の心を離る。果行離とは、正く兩舌を離る。對治離とは、利合の語を修す。不惡口とは、亦三種有り。一には因離、二には果行離、三には對治離なり。因離に二有り。一には共因を離る。謂はく、貪瞋癡なり。二には不共因を離る。謂はく、侵惱の心なり。果行離とは、正く惡言を離る。對治離とは、常に濡語を修す。不綺語とは、亦三種有り。一には因離、二には果行離、三には對治離なり。因離に二有り。一には共因を離る。謂はく、貪瞋癡なり。二には不共因を離る。謂はく、綺語の心なり。果行離とは、正く綺語を離る。對治離とは、恆に正語を修す。此一門竟る。

(六八) 次に、閉合廣略の義を辨ず。閉合は不定なり。之を總すれば唯一の善律儀の攝なり。或は分つて二と爲す。一には身業、二には口業なり。前の三は身業、後の四は口業なり。或は離して七と爲す。備に向に辨するが如し。或は復之を分つて二十一と爲す。此七律儀は各上中下品の心より起る。是故に通じて説いて二十一有り。或は復閉合して六十三と

【六】第三に境に對して論ず。

【成實】 第九。

【成實】 第九。

爲す。前の二十一は、各無貪、無瞋、無癡の三善根より起る。是故に通じて説いて六十三有り。問うて曰はく、「三善は常に相隨逐して、未だ曾て相離れず。云何が別分して六十三と爲す。」釋して言はく、「三善の體は同時なりと雖も、用の強弱に隨つて先後無きに非ず。不淨觀は是れ無貪の性、慈悲觀等は還無瞋の性、因緣觀等は是れ無癡の性なるが如し。三善既に別して之を起すの義有り。所生の律儀は何んが別たすとや爲ん。是故に六十三種を分つことを得。」若し凡聖に隨はば、禪地の不同境界の差別に、則ち無量有り。此二門
次に境に對して論ず。此七律儀は普く一切衆生の處に於て起す。若し是の如くならずんば、所受の律儀は便ち増減有らん。問うて曰はく、「律儀は現在の衆生處に於て起すとや爲ん、三世の衆生處に於て起すとや爲ん。」論釋不同なり。若し「成實」に依らば、普く三世の衆生處に於て起す。之を緣じて皆善心を起すことを得るが故に。若し「毘曇」に依らば、唯現在の衆生處に於て起る。良に過去、未來の衆生は殺盜乃至綺語すべからざるを以て、是が爲に之を緣じて律儀を發さず。問うて曰はく、「若し現在の衆生に於て律儀を得ば、現在の衆生死滅の時應に律儀を失すべし。」釋して言はく、「失せず。念念に常に現在の衆生に於て律儀を得るが故に。問うて曰はく、「彼非衆生の所に於て律儀を得るや不や。」釋して言はく、「亦得。故に「成實」に言はく、「非衆生所に善律儀を得」と。問うて曰はく、「直に非衆生數を緣じて善律儀を得るや不や。」釋して言はく、「得ず。故に「成實」に言はく、「要す衆理に因つて善律儀を得」と。何が故に是の如くなる。」衆生所に於て性罪を遠

【七〇】 第四に支因に具不具あるを明す。

【雜心】 第三業品

離し、非衆生所に於て遮罪を遠離す。性を離るるを本と爲す。是故に要す衆生所に於て得直に草等を緣じては律儀を發さず。此三門(七〇)に

次に、支因に具不具有ることを明す。支とは、謂はく、七支なり。始め不殺より乃ち不綺に至る。因とは、謂ゆる、上中下の心なり。問うて曰はく、「七支要す具して乃ち得。不具も亦得るや。」釋して言はく、「不定なり。大比丘戒は要す具して乃ち得、沙彌、俗人は具せざるも亦得。是故に五戒、八戒、十戒は皆七を具せず。」問うて曰はく、「彼上中下品の三種の因の中に於て、具して用て戒を發す。具せざるも亦得るや。」釋して言はく、「不定なり。或は具する有り、上中下の心を用て在家の戒、沙彌の十戒、大比丘戒を受くるを、名けて具因と爲す。或は偏に上品の心を用て三種の戒を受くる有り。或は中、或は下なるを、名けて不具と爲す。此支因に具不具有るを以ての故に。『雜心』の中には、四句の分別あり。『何者か是れ四なる。』一には一切非一切支、謂はく、上中下品の心を以て其五戒、八戒、十戒を受く。三因を具するに依つて一切因と名け、所受は唯殺、盜、邪淫、妄語の過を離るるが故に、一切支に非ず。二には一切支非一切因、人有つて直に上品の心を以て具足戒を受け、或は中、或は下の所受の戒は七支を具足するが故に、一切支と名け、三心を具せざるを非一切因と名く。三には一切因亦一切支、具に上中下品の心を以て、在家の戒、沙彌の十戒、大比丘戒を受く。四には非一切因非一切支、謂はく、下心を以て在家の戒及び沙彌戒を受く。中上も亦爾なり。七善律儀之を略して云ふこと爾り。

【七】淨法聚第六十七段に七淨の義を明すに兩門の分別あり。第一に辨相。

【地經】論第七。

七淨の義に兩門分別あり。一には相を辨ず。二には位に就いて分別す。

行徳無垢、之を名けて淨と爲す。淨の義不同なれば、一門に七を説く。『七の名是れ何ぞ。』

『一には戒淨、二には定淨、亦是心淨と名く。三には見淨、四には度疑淨、五には道非道淨

なり。此前の五淨は大小名同じ。後の二は名別なり。小乗の如きに依らば、六には行淨と

名け、七には行斷智淨と名く。若し大乘に依らば、六には行斷と名け、七には思量菩提分

法上、上淨と名くるなり。此後の二名は『地經』に説くが如し。戒淨と言ふは、行修の始

に戒を持して過を離るるが故に、戒淨と云ふ。戒淨に由るが故に能く淨定を生ずるを、説

いて定淨と名く。定淨を以ての故に、實慧を發生す。生じ已つて能く身見を除くを、名け

て見淨と爲し、能く疑惑を斷ずるを度疑淨と名け、能く戒取を離れて、無漏の慧は是れ其眞

道なり、戒等は道に非すと知るを道非道淨と名く。後の二種の中、若し小乗に依らば、重

ねて諦理を緣じて所行を進習するを、名けて行淨と爲し、行窮つて障を盡すを行斷知淨と

名く。若し大乘に依らば、道に隨つて障を除くを、名けて行斷と爲し、此行斷に依つて佛

境に趣入するを、思菩提上、上淨と名くるなり。七が中の初の二は是れ其戒學、次の二は

定學、後の五は慧學なり。此一門

【七】第二に位に就いて論ず。

次に、位に就いて論ず。行實には齊く通ず。相の隱顯に隨つて階異無きに非ず。『異相は如何。』『小乗の如きに依らば、初の二は見道已前に在り、次の三は見道の中に在り、次の

一は修道、後の一は無學なり。『何が故に見の前に戒を明し、定を明す。』『外凡の麤過は戒に非ざれば防ぜず。故に先に戒を明す。出世の聖道は定に非ざれば生ぜず。故に次に定を明す。』『何が故に次の三は偏に見道に在る。』『見道の中に三結を斷除し、三淨を成就するを以ての故に、偏に中に在り。』『何者か三結なる。』『謂ゆる、身、戒見取及び疑なり。身見を斷するが故に其見淨を得、疑心を斷するが故に度疑淨を得、戒取を斷するが故に道非道淨を得。』問うて曰はく、『聖人見道に入る時十使俱に斷す。云何が説いて但三結を斷すと言ふや。』『涅槃一に釋するが如くんば、此三重きが故に、所以に偏に説く。世人の王來り、王去ると言ふが如し。重きが故に偏に論ず。又十使の中、五見及び疑は唯見諦を障ふ。見道に入る時之を斷すること究竟す。貪瞋癡慢は通じて見修を障ふ。見道に入る時之を斷すると盡さず。五見及び疑は見の中に盡す。故に其斷の名を與ふ。貪瞋癡慢は見に盡さざるが故に、斷の稱を與へず。彼所斷の五見疑の中に就いて、三使は是れ本、三使は是れ隨なり。身見は是れ本、邊見を隨と爲す。戒取は是れ本、見取を隨と爲す。疑心は是れ本、邪見を隨と爲す。三本を除くと説かば、三隨も亦爾なり。故に經論の中には、偏に見道に三結を斷除すと説く。』『何が故に行淨は偏に修道に在る。』『此位の中に重ねて諦理を緣じて、修行に越くを以ての故に。』『何が故に行斷は偏に無學に在る。』『無學道に障を離れ盡すを以ての故に。』大乘法の中には、初の五は前に同じ。後の二は修道位の中に在り。修道の中に就いて、通有り、別有り。通じて之を論ずれば、一切地の中に除障の義有るを悉く行斷と名

け、上求の義有るを皆思量と號す。中に於て別して分たば、始め二地より乃ち七地に至る修道の斷障を、名けて行斷と爲し、八地已上法流水の中、佛境に趣入するを説いて思量上淨と爲すなり。七淨是の如し。

七財の義

七財と言ふは、善は能資の具なり。故に名けて財と爲す。財別不同なれば、一門に七を説く。七の名は是れ何ぞ。一には信、二には戒、三には施、四には聞、五には慧、六には慚、七には愧なり。此義は後の十藏章の中に、具に廣く分別するが如し。七財是の如し。

七種大乘の義

七種大乘は『地持論』に出づ。運通を乘と名く。乘の中加ふること莫し、之を謂つて大と爲す。大乘不同なれば、一門に七を説く。七の名は是れ何ぞ。一には法大、二には心大、三には解大、四には淨心大、五には衆具大、六には時大、七には得大なり。七が中の前の六は因に就いて大を説き、後の一種は果に就いて大を論ず。因の中の初の一は是れ其因法、後の五は因行なり。法大と言ふは、謂ゆる、大乘十二部經方廣の義なり。餘の契經に過ぐるが故に法大と云ふ。問うて曰はく、『法の中の説は理教に通ず。何が故に是中偏に教法を説くや。』釋して言はく、『實には通ず。旨を攝して詮に従ふが故に、別して論ぜ

【七】 淨法樂第六十八段に七財の義を明す。

【四】 淨法樂第六十九段に七種大乘の義を明す。第六。

す。一心大と言ふは、謂はく、無上菩提の心を發す。餘の願に超出するが故に、心大と曰ふ。解大と言ふは、謂はく、菩薩方廣の藏を解す。餘の解に勝過するを、稱して解大と曰ふ。此心と解とは地前に在り。淨心大とは、初地の中に在り。解行住を過ぎて歡喜地に入る。證心樂を離るるを淨心大と名く。衆具大とは、二地乃至七地に在り。功德智慧の衆具を修習して菩提に趣向するを、衆具大と名く。時大と言ふは、八地已上乃至十地に三儂祇を度して衆行を満足するを、名けて時大と爲す。得大と言ふは、謂はく、如來地に菩提の果を得て與に等き者無し。況んや復過上をや。故に得大と爲す。七種大乘、略して辨ずること是の如し。

【七五】淨法樂第七
十段に七地の義を
開すに三門の分別
あり、第一に釋名
【地持論】第八。

七地の義に三門分別あり。一には名を釋す。二には體
第一に、名を釋す。七地の義は「地持論」に出づ。能生を地と曰ふ。地位の開合廣略

は定め難し。今は一門に據つて且く七種を論ず。一には種性地、二には解行地、三には淨心地、四には行跡地、五には決定地、六には決定行地、七には畢竟地なり。種性地とは、得種、性種を同じく種性と名く。行本達立して能く因果を生ずるが故に、名けて種と爲す。種の義壞せざる、之を日けて性と爲す。性を以て地を別つて種性地と名く。解行地とは、前の種性に依つて、方便を起修して出世に趣入す。出世道に於て解して行するが故に、名けて解行と爲す。解を以て地を別つて解行地と名く。淨心地とは、初地の中に在り。解行

【七六】 第二に七地の體を定む。

住を過ぎて歡喜地に入る時、證心垢を離るるを、名けて淨心と爲す。又菩提に於て淨信暢望するを、亦淨心と名く。斯を以て地を別つて淨心地と名く。行跡地とは、二地已上乃至七地に修道を起すを、名けて行跡と爲す。行を以て地を別つて行跡地と名く。決定地とは、第八地の中法流水に在つて、決定して無上菩提に趣向するを、決定地と名く。決定行とは、第九地の中前の決定に依つて上上増進するを、決定行地と名く。畢竟地とは、謂はく、第十地及び如來地なり。第十地の中に囚行窮滿し、如來地の中に果徳圓極す。是義を以ての故に、同じく畢竟と名く。蓋し乃ち且く一門に據つて論を爲すなり。若し餘の門に入らば因果別なり。名義是の如し。此一門

次に、具體を定む。諸地は皆行徳を用て體と爲す。行門の開合廣略は不定なり。總じては唯一行なり。或は分つて二と爲す。一には是れ證行、二には阿含行なり。廣くは上に辨するが如し。又福智に就いて、亦二を分つことを得。或は離して三と爲す。謂はく、證助、不住なり。亦上に辨するが如し。又戒、定、慧も亦三を分つことを得。或は開して四と爲す。聞、思、修、證なり。或は説いて六と爲す。謂はく六波羅蜜なり。或は分つて十と爲す。謂はく、十波羅蜜なり。又復信等も亦十を分つことを得。或は復離して三十七品と爲す。廣くは則ち無量なり。體性是の如し。竟る門

【七七】 第三に七地の相を辨ず。

次に、其相を辨ず。地位の開合廣略は不定なり。要攝すれば唯二なり。一には是れ信地、二には是れ證地なり。地前の菩薩出世道に於て信趣趣向するを、名けて信地と爲し、

【地持論】第七。

初地已上に實を證して相應するを、名けて證地と爲す。或は分つて三と爲す。『地持』に説くが如し。一には種性持、種性地に在り。二には發心持、解行地に在り。三には行方便持、初地上に在り。或は離して四と爲す。一には方便道、地前に在り。二には見道、初地に在り。三には修道、二地上に在り。四には無學道、佛地に在り。或は開して五と爲す。前の四の中に於て、方便道を開して以て種性、解行の別と爲す。故に五種有り。或は分つて六と爲す。『地持』に説くが如し。一には種性地、二には解行地、三には淨心地、四には行跡地、五には決定地、謂はく、八地、九地なり。六には畢竟地、謂はく第十地なり。『涅槃經』の中に、「六住を諸菩薩と爲す」と言ふは、此に據つて言を爲すなり。或は復七と説く。廣くは上に辨ずるが如し。前の六の中に於て、決定地を開して以て決定及び決定行と爲す。故に七種有り。亦八を分つことを得。前の七の中に於て、種性地を分つて以て習種、性種の別と爲す。故に八有るなり。亦九を分つことを得。前の八の中に於て、畢竟地を分つて以て畢竟及び如來地と爲す。故に九種有り。或は十三を分つ。『地持論』佳品の中に説くが如し。彼十地の上に種性住、解行住及び如來住を加ふと。故に十三有り。亦開分して以て十四と爲すことを得。前の十三の中に、種性住を開して以て習種、性種の別と爲す。故に十四有り。經の中には、或は四十二賢聖を説く。廣くは則ち無量なり。是等の廣略は各一宜に隨ふ。今は且く七を論ず。七地是の如し。

八戒齊の義に七門分別あり。一には名を釋し數を定む。二には相を辨ず。三には具得の因縁。四には界趣の分別。五には形報の分別。六には境に對する分別。

七には受持の義。

【七六】淨法聚第七十一段に八戒齊の義を明すに七門の分別あり。第一に釋名定數。

八戒齊とは、謂ゆる、不殺、不盜、不婬、不妄語、不飲酒、不歌舞唱伎、不著香熏衣、不上高廣床、不過中食は是れ其名なり。此等は防禁の故に、名けて戒と爲す。潔清を齊といふ。問うて曰はく、『彼五戒の中に於ては不邪婬と言ふ。今此には何が故に直に不婬と言ふや。』釋して言はく、『五戒は是れ在家の人の在家の戒を持すれば、唯邪婬を制して自妻を防がず。是義を以ての故に、但不邪婬と言ふ。論の八戒は是れ在家の人の出家の戒を持することを得れば、但邪を制するのみに非ず。自妻も亦防ぐ。故に不婬と説く。』問うて曰はく、『是中所離に九有り。何の義を以ての故に、但八戒と言ふや。』釋して言はく、『以有り。若し『毘曇』に依らば、不著熏衣、不上高床の此二は同じく是れ莊嚴處に起る。之を合して一と爲す。故に説いて八と爲す。若し『成實』及び『大智論』に依らば、前の八は是れ戒、後の一は是れ齊なり。戒齊は合して説く。是故に名けて八戒齊と爲すなり。』此門竟

【毘曇】 雜心第十
【大智論】 第十三

【七六】 第二に八戒齊の相を辨ず。中に五、一に體具を分別す。

次に、其相を辨ず。中に於て五有り。一には體具を分別す。不過中食は是れ齊にして、亦齊支なり。餘は是れ齊支にして、是れ齊に非ず。八聖道の正見は是れ道にして亦是れ道支、餘は是れ道支にして是れ道に非ざるが如し。此も亦是の如し。不殺等を以て惡を防ぎ、罪を禁じて齊法を助成す。齊法を助くる中、差別不同なり。故に齊支と名く。斷食の法に

【一には等】 二に
遮性分別。

【論】 雜心論第十

【三には等】 三に
道福分別。
【成實】 第九。

【四には等】 四に
具に就いて分別す

【五には等】 五に
所防を分別す。
【毘曇】 雜心第十
【成實法】 論第九

非ず。故に齊と名けず。不過中食は是れ斷食の法なるが故に、名けて齊と爲し、前の七種を別つが故に、齊支と名く。二には遮性を分別す。前の四種は性惡を遠離し、不飲酒等は遮罪を遠離す。問うて曰はく、「性惡に乃ち七種有り。始め殺生より乃ち綺語に至る。何んが具に離れずして、但前の四を離る。」綺語等は防護すべきこと難く、在家の人は離すること能はざるを以ての故に。故に論に説いて言はく、「出家の者尙離すること能はず。何に況んや在家をや」と。又綺語等は法に應ぜざるが故に、通じて妄語と名く。但妄語を離れて餘の者皆隨ふが故に、別して論ぜず。又前の四種は重きが故に、偏に明す。餘の者は輕きが故に、所以に説かず。一問うて曰はく、「遮罪の差別は無量なり。何んが離を説かずして、偏に飲酒等を遠離することを言ふや。」亦餘過は、在家の人防護し難きを以ての故に。又飲酒等は過を生ずる處重きが故に、偏に離を説く。餘過は輕きが故に、所以に論ぜず。三には道福を分別す。「成實」に説くが如し。前の五過を離る、是れ福の因縁なり。後の三罪を離る、是れ道の因縁なり。在家の者は未だ能く得道せざるを以て、是故に道の因縁を説くなり。通じては則ち齊等なり。四には具に就いて分別す。具とは、謂はく、三業なり、不殺、不盜、不婬、不飲酒、不著薰衣、不上高床、不過中食は、是れ其身業なり。不妄語は是れ其口業なり。不歌舞は身口業に通ず。五には所防を分別す。「毘曇」の如きに依らば、初の四は戒支にして、性惡を遠離す。不飲酒は是れ不放逸支にして、放逸の因縁を離る。餘は是れ持支にして、餘の遮過を離る。成實法の中にも、亦分つて三と爲す。名字異らず。

彼に説かく、「初の四は實惡を遠離す。不飲酒は諸惡の門を離れ、餘は放逸の因縁を遠離す」と。此二門竟る。

【八〇】第三に得戒の因縁差別を明す

【彼偈】 雜心論第十。

【優婆塞素】 ウパワーサ (Uparisa) 聖道に近きて住する義又は八戒齋を持つもの義。

【成實法】 論第九

九。【彼論】 成實論第

次に、得戒の因縁差別を明す。『毘曇』の如きに依らば、八の因縁有り。故に彼偈に言はく、「謂はく、優婆塞素と受と時と他と二説と具足と一日夜と離嚴飾威儀となり」と。優婆塞素は是れ一の因縁なり。此八戒は是れ優婆塞受け、出家の者に非ざることを明す。出家の人は能く盡形戒を受持するに堪ふるを以ての故に。言ふ所の受とは、是れ二の因縁なり。此八戒は要す受くれば乃ち得、禪戒、無漏戒等に同じからざることを明す。言ふ所の時とは、是れ三の因縁なり。此八戒は清旦の時受け、餘時に得ざることを明す。一日夜を具足せしめんと欲するが故に。成實法の中には何の時に在るに隨つても、皆之を受くることを得。言ふ所の他とは、是れ四の因縁なり。此八戒は要す他に從つて受け、自ら誓つて得ざることを明す。『成實』は此に異なり。故に彼論に言はく、「若し人無き時は心に念じ、口に言つて亦之を受くることを得」と。二説と言ふは、是れ五の因縁なり。此八戒は二説方に得、戒師前に教へ、受者後に隨ひ、戒師前に問ひ、受者後に答ふ、是を二説と爲すことを明す。『成實』は此に異なり。故に彼論に言はく、「自ら解せざるが故に、師の教授を須ふ。若し自ら解すれば、何んが師の教を假らん。是義を以ての故に二説を須ひず」と。具足と言ふは是れ六の因縁なり。此八戒は具受は乃ち得、分受は得ざることを明す。成實法の中には具せざるも亦得。故に彼論に言はく、「力の堪能に隨つて多少不定なり」と。一日夜と

は、是れ七の因縁なり。此八戒は時分唯一日一夜に在つて、増せず減ぜざることを明す。

『成實』は同じからず。故に彼論に言はく、「若し八戒は定んで一日夜なりと説かば、是事

然らず。時に随つて多少あり。或は半日乃至一月なるべし。竟に何の咎か有らん」と。離

言威儀は是れ八の因縁なり。此八戒は要す種種の嚴身の具を離れ、方便して受持すること

を明す。在家の者は分に随つて出家の戒を修學するを以ての故に。論に不同なりと雖も、

受くる者は宜く『毘曇』に依つて之を受くべし。多くは諸經の所説と同じが故に。此三門

次に、界趣に就いて其相を分別す。界とは、謂はく、三界なり。欲界に受くることを得。

上二界に非ず。趣とは、謂はく、五趣なり。『毘曇』の如きに依らば、三天下の人は八戒を

受くることを得。覺知の心に捷疾力あるを以ての故に、餘趣及び憍單趣に通ぜず。若し『成

實』に依らば、人天鬼畜皆之を受くることを得。故に彼論に言はく、「天帝多く八戒を受

け、龍等も亦受くるが如し。局つて人に在らず」と。此四門

次に、形報に就いて其相を分別す。『毘曇』の如きに依らば、男女受くることを得、餘形

は得ず。成實法の中には、黃門、二形、不能男等も亦之を受くることを得。男女に局るに

非ず。此五門

次に、界に對して其通局を辨す。當に知るべし、八戒は普く一切衆生の邊に於て得し、

別縁を得せざることを問うて曰はく、「現在の一切の衆生の邊に於て得すとや爲ん、三世の

衆生の邊に於て得すとや爲ん。』論釋不同なり。若し『毘曇』に依らば、唯現在の衆生の邊

【六】 第四に界趣
別す。

【毘曇】 雜心第十
九七善律儀品。

【彼論】 成實論第
九七善律儀品。

【六】 第五に形報
について其相を分
別す。

【毘曇】 雜心論第
十。

【六】 第六に界に
對して其通局を辨
ず。

【六四】第七に八戒を受持するの義を明す。

【六齊日】一、二、三、四、五、六、六ヶ月の八日、十三日、十五日、二十三日、二十五日、三十日、二十九日、四天王天下を、此日するを以て、身を慎み心を淨め、持戒すべしといふ。

に於て得ず。成實法の中には、普く三世の衆生の邊に於て得ず。過未の衆生は殺すべからず、盜等すべからずと雖も、之を緣じて亦善惡を起すことを得るが故に。此六門

(八四)次に、八戒を受持するの儀を明す。戒を受けんと欲する者は、應に先に其生死を厭ひ、心に涅槃を求むるの意を起すべし。然して後に之を受く。此受くる所は出家の戒なるを以ての故に。受法は云何。六齊日の清日の時に於て戒師の所に詣り、先に三寶を禮し、次に戒師を禮し、戒師の前に在つて、長跪合掌して先に諸罪を懺し、然して後に戒を受く。戒師之に教へて三たび三寶に歸せしむ。三たび歸を稱へ竟ること、五戒、沙彌戒を受くると同じ。然して後に上に列ぬる所の法を題して其能不を問ふに、言はく、「一に不殺生は是れ優婆塞戒なり。若し女人受くれば、應に是れ優婆夷戒と言ふべし。今時より明清旦に至つて、一日一夜に受く。諸佛の如く能く持するや不や」と。受者應に答へて言ふべし、「能くす」と。是の如く乃至不過中食も、問答同じく兩なり。一遍にして便ち足る。竟に已つて禮して去る。護持の法は出家の戒と同じ。嚴身の具は悉く宜く之を去るべし。男女は室を同うして宿することを得ず。八戒是の如し。』

大乘義章卷第十二

大乘義章 卷第十三

遠法師撰す

淨法聚の因法の中、此卷に九門有り。八禪定の義。八解脱の義。八勝處の義。八行觀の義。九次第定の義。九斷知の義。九

八禪定の義に四門分別あり。一には通じて八禪を解す。二には別して八禪を釋す。三には定具を明す。四には定難を明す。通の中別して八門を以て分別す。名を釋し性を辨ず一。諸地を定別し、并に味淨無漏等の別を辨ず二。支因の有無三。所滅の不同四。得捨の成就五。入縁の不同六。四縁の分別七。大小の不同八。

【一】淨法聚第七十二段に入禪定の門に明す中、第一を明すに八門の分別あり、第一に釋名辨性。中に二、先づ一に釋名。【神】ドヤーナ(Dhyana)

第一に、名を釋し、其體性を辨す。先に其名を辨す。名別不同にして、略して七種有り。一には名けて禪と爲し、二には名けて定と爲し、三には三昧と名け、四には正受と名け、五には三摩提と名け、六には奢摩他と名け、七には解脱と名け、亦は背捨と名く、禪とは、是れ其中國の言にして、此には翻じて名けて思惟修習と爲し、亦は功德叢林と云ふ。思惟修とは、因に從つて稱を立つ。定境界に於て審意籌慮するを、名けて思惟と曰ひ、思惟漸く進むを、説いて修習と爲す。剋定に從ふを、思惟修寂と名く。亦是此言は當體を名と爲すべし。禪定の心正く所縁を取るを、名けて思惟と曰ひ、思惟増進するを、説いて修習

【三昧】 サマーデー (Samādhi)

【奢摩他】 シヤマ (Samatha)

【龍樹の等】 大智論第二十一。

【毘曇】 雜心論第八。

【彼論】 雜心論第八。

【地論】 第五。

と爲す。功德叢林とは、果に從つて名と爲す。智慧、神通、四無量等は、是れ其功德なり。衆徳の積聚を、説いて叢林と爲す。定は能く之を生ず。因は果に從つて目く。是故に説いて功德叢林と爲す。言ふ所の定とは、當體を名と爲す。心一縁に住して散動を離るるが故に、名けて定と爲す。三昧と言ふは、是れ外國の語にして、此には正定と名く。定は前に釋するが如し。邪亂を離るるが故に、説いて正と爲す。正受と言ふは、正は前に釋するが如し。法を納むるを、受と稱す。三摩提とは、是れ外國の語にして、三摩、三昧は本是れ一の名なり。之を傳ふる音の異なるなり。此には正定と名く。定用現前するを、三摩提と名く。奢摩他とは、亦外國の語にして、此には翻じて止と名く。心を攝して縁に住す、之を以て止と爲す。解脫と言ふは、絶縛の稱なり。背捨と言ふは、下過を背離するが故に、背捨と云ふ。又捨は龍樹の云はく、「五欲を背淨して著心を捨離するを、名けて背捨と爲す」と。問うて曰はく、「此等所名の法は、一とや爲ん、異とや爲ん。」釋するに通別有り。通じて之を論ずれば、一切の禪定、皆此名を具す。中に於て別して分たば、經論等しからず。「毘曇」の如きに依らば、四禪を禪と名け、八解脫を、名けて背捨と爲し。四無色定、滅盡、無想を、通じて正受と名け、空、無相、無願を、三摩提と名く。故に彼論に言はく、「諸禪及び背捨、正受、三摩提、此四名を用て、表して諸定を分つ」と。若し「成實」に依らば、四禪を禪と名け、四空を定と名け、八解説をば、名けて解脫と爲し、一切の禪定の用現在前するを、三摩提と名く。此四名を以て、名けて諸定を別つ。若し「地論」に依らば、四

【次に等】 二に體性を辨ず。

【彼論】 成實論第十四。

【龍樹の等】 大智論第三十六。

【涅槃】 第二十七師子吼品。

禪を禪と名け、四無色定を、説いて解脱と爲し、四無量心を、名けて三昧と爲し、五神通をば三摩提と名く。此四名を用て、名けて諸行を別つ。又更に分別せば、四禪を禪と名け、四空を定と名け、空、無相、無願を、名けて三昧と爲す。得理相應を正受と名くるが故に、滅盡無想を、名けて正受と爲す。是處に心無く、身に法を納むるが故に、四無量心を、三摩提と名く。衆生縁の中に用現前するが故に。八解脱をば、名けて解脱と爲す。下縛を絶するが故に、又下過に背くが故に、背捨と云ふ。一切の禪定の始習方便、意を止めて縁に住するを、奢摩他と名く。一名字是の如し。此一門に體性を辨ず。宗別不同にして、所説各異なり。若し、毘曇に依らば、此八禪定は定數を體と爲す。餘の心心法は定と相應す。是れ定の眷屬なり。故に通じて定と名く。若し『成實』に依らば、唯心を體と爲す。心外に別に定數有りと言かず。故に彼論に言はく、「若し定數に由つて、心をして住せしむれば、定數も亦應に他に由るが故に住すべし」と。然も彼定數自ら能く縁に住し、他に從つて住せず。心も亦是の如く、自ら能く縁に住す。何ぞ定數に從はん。故に知んぬ、彼論は唯心を體と爲す。大乘法の中には、心に麤細有り。心に隨つて定を辨ず。差別等からず。「云何が等しからざる。」心に三種有り。一には事識、二には妄識、三には眞識なり。事識の中の定は、定數を體と爲すこと「毘曇」と同じ。故に龍樹の云はく、「譬へば池水に象の入れれば則ち濁り、明珠の中に置けば水澄淨を得るが如し。心も亦是の如く、煩惱中に入れば、心則ち渾濁なり。定數中に在れば、心則ち澄清なり」と。「涅槃」にも亦云はく、「十大地

の中の心数は、之れ定數なり一と。明けし、「毘曇」に同じことを。眞教の中の定は、唯心を體と爲す。更に別の數無し。故に「維摩」に云はく、「若し一切の數を離すれば、心虚空の如し」と。安設の中の定義に兩處行り。是は則ち彼定數を用て體と爲し、細は則ち唯心識を用て體と爲す。「此れ云何が知る。」馬鳴の説くが如くんば第七識の中の義別に六種あり。無明地より初禪に至る。此六重の中、根本の四重は心外に數無し。中に於て定を辨じ、心を活して體と爲す。後の兩重は心と數と異なり。中に就いて定を辨じ、定數を體と爲す。體性是の如し。

【二】第二に諸地を定別し、並に淨無漏等の別を別す中、一に禪地の相を辨ず。初に毘曇の所説。

第二門の中、義別に三有り。一には禪地の相を辨じ、二には味淨無漏等の別を明し、三には禪地に就いて、味淨等の通局の義を明す。禪地とは云何。「宗別不同にして、辨ずる所各異なり。」毘曇の如きに依らば、末を攝して本に従へば、禪地に八有り。謂ゆる、四禪、四無色定なり。末を分つて本に異すれば、禪地に十門有り。謂ゆる、八禪、未來、中間なり。八禪は知るべし。未來禪とは、是れ初禪が家の方便の定なり。欲界地より初禪に向ふ時、九無礙、九解脱道を修して欲界の結を斷ず。然して後に初禪の定體を證得す。彼九無礙、九解脱道は、未來より彼根本定體に至る。故に未來と名く。其れ未だ根本定に至らざるを以ての故に、論の中には亦未來禪と名くるなり。中間禪とは、初禪地より二禪に向ふ時、覺を除けども觀在るを、中間禪と名く。問うて曰はく、「是中覺を除くの時、何を用て治と爲すぞ。」釋して言はく、「是中彼二禪の方便内淨を用て、以て治と爲すのみ。故に

【若し等】次に成
實の所説。
【成實】第十五。

『地論』に云はく、「内淨對治は覺觀禪を滅すなり」と。問うて曰はく、「是中初禪の觀有り、復禪二禪方便内淨有り。正く何者を用て中間禪と爲すや。」釋して言はく、「正くは初禪の殘觀を用て、中間の體と爲す。初禪定と同じく、一處に在つて果報を受くるが故に。問うて曰はく、「若し初禪の殘觀を用て中間禪と爲さざれば、是れ則ち初禪の方便覺觀にして、欲界の結を斷ず。應當に彼欲界の殘結を用て、未來禪と爲し、初禪の方便覺觀を以て、未來禪と爲さざるべし。」釋して言はく、「類せず。欲界の殘結は定法に非ざるが故に、之を説いて未來禪と爲すことを得ず。初禪の殘觀は是れ禪法なるが故に、説いて中間と爲す。問うて曰はく、「未來及び中間禪は、八禪地の中には何の地の攝ぞや。」釋して言はく、「此二は是れ初禪が家の眷屬定なるが故に、初禪に攝屬す。問うて曰はく、「何が故に初禪地の中獨り此二を分つて、餘は是の如くならざる。」釋して言はく、「初禪は創めて下過を背し、多く功力を用ふるが故に、未來を立てて以て息處と爲す。餘は是の如くならざるが故に、廢して立てず。又復初禪より二禪に向ふ時、有覺有觀の二種の過患に覺を除けども、觀在るが故に、中間を立つ。餘禪の相向ふには、單に一過有り。之を除いて盡くる處は、即ち是れ後地なるが故に、中間無し。若し『成實』に依らば、末を攝して本に従ふは、禪地に九有り。謂ゆる、八禪及び欲界の中の如電三昧なり。故に『成實』に云はく、「須尸摩經』に説くが如し。欲界に更に如電三昧有り」と。末を分つて本に異すれば、禪地に十有り。初禪の中に於て、中間を分出す。餘に通じて十なり。

【大乘法の等】次
に大乘法の所説。

【龍樹の等】大智
論第二十六。

【次に等】二に味
浄無漏等の別を分
つ。

【雑心】論第七。
【次に等】三に禪
地に就いて味浄等
の通局の義を明す

故に『成實』に云はく、「初禪の梵王能く中間に至る」と。如電三昧は『毘曇』に論ぜず。末來禪は『成實』に説かず。見別なるが故に爾なり。大乘法の中には、末を攝して本に從はば、禪地に九有り。「成實」と同じ。言ふ所の異とは、『成實』には唯欲界地の中に、電光定有つて、餘の三昧無しと説く。大乘には、欲界地の中に無量定有りと宣説す。故に龍樹の云はく、「佛常に欲界定の中に住するを、無不定と名く」と。「此れ電光と何の差別か有る。」釋して言はく、「聲聞暫く彼相を得るを、説いて電光と爲し、更に別法無し。」末を分つて本に異すれば、禪に十一有り。謂ゆる、八禪、末來、中間及び欲界定なり。禪地是の如し。此一門つぎ。次に、味浄無漏等の別を辨ず。『毘曇』の如きに依らば、禪に三種有り。一には淨定、二には無漏定、三には味定なり。世俗道に依つて下結を斷除し、而して上靜を得るを、名けて淨定と曰ひ、即理定靜を、無漏定と名く。味定と言ふは、義釋に三有り。一には通相に具に論ず。上二界の中の一の煩惱境に著する義有るを、悉く名けて味と爲し、定地の法なるが故に、之を説いて定と爲す。二には強を簡んで弱に異す。諸の煩惱の中の愛境に著すること強ければ、偏に説いて味と爲す。定の義は前に同じ。又愛著の境は禪定に相似するが故に、説いて定と爲す。三には體を簡んで伴に異す。上二界の中の一の煩惱相應の定数は、是れ味定の體なり。故に『雜心』に云はく、「味は則ち愛の相應なり」と。此二門つぎ。次に、禪地に就いて、味浄等の通局の義を明す。中に於て、且く末來、中間、八禪地に就いて説く。淨禪は寬通して、一切地に遍す。無漏禪とは、『毘曇』

【三】 第三に支因の有無を明すに二あり、一に諸地の支因の有無を明す

の如きに依らば、前の九地に有り、非想地に無し。故に「雜心」に云はく、「無漏の大王は邊地に居せず。欲界非想を、名けて邊地と爲す。非想地は心志微劣なるを以ての故に、無漏無し」と。若し「成實」に依らば、非想は増觀無漏無しと雖も、願舊遊觀の無漏無きに非ず。故に彼論に説かく、「滅定三昧に入るは、必ず非想の無漏心より入る」と。餘は「毘曇」に同じ。若し大乘に依らば、無漏は遍く一切地の中に在り。「云何が知ることを得る、非想も亦有ることを。」「龍樹の説くが如し。」云何が菩薩の非想處定なる。「實相と俱なる、是を菩薩非想處定と爲す。實相と俱なるは、是れ無漏なること明けし。若し味定を論ずれば、八禪地の中は、一向に定んで有り。未來、中間には、有無不定なり。」「是義云何。」「味に二種有り。一には正受愛、二には受生愛なり。彼八禪の根本定を得已つて、中に於て著を生ずるを、正受愛と名け、上界の生を求むるを、受生愛と名く。八禪地の中には、此兩愛を具す。未來、中間には、正受愛無し。但受生連貫の愛有るが故に、不定と云ふ。」「何が故に此處に正受愛無き。」「未來は彼初禪地の中の根本を求めて、未だ得ず。中間は彼二禪地の中の根本を求めて、未だ得ず。貪著すべきもの無きが故に、此愛無し。」

第三門の中、義別に二有り。一には諸地の支因の有無を明し、二には味淨無漏禪等の支因の有無を明す。諸地の有無の相狀は如何。四根本禪は、一向に支有り。經論大いに同じ。未來、中間は、一向に具せず。未來は但覺、觀、捨根有り。更に餘支無し。中間は但觀及び捨根有り。亦餘支無し。故に不具と云ふ。何が故に未來は更に餘支無き。彼未來

【次に等】二に味
淨無禪等の支因の
有無を辨ず。

【成實】 第十五。

は未だ欲惡を出でざるを以ての故に、喜樂無し。未だ初禪根本定を得ざるが故に、其一心無し。問うて曰はく、『一心は是れ其禪體なり。彼既に禪と名く。何が故に體無き。』釋して言はく、『應に有るべし。微なるが故に説かず。』何が故に中間に其餘支無き。』中間禪は上を求めて未だ得ざるを以ての故に、喜樂無く、未だ二禪の根本定を得ざるが故に、其一心無し。理も亦應に有るべし。微なるが故に説かず。彼四空定は、經論不同なり。若し『瓔珞』に依らば、齊く五支有り。謂ゆる、想、護、止、觀、一心なり。舍利弗阿毘曇の中に依らば、同じく四支を具す。四禪と同じ。自餘の經論は、並に皆説かず。當應に俱に有るべし。名は四禪に同じく、更に別異無し。所以に論ぜず。此一門つぎ。次に味淨無漏禪等の支因の有無を辨ず。淨禪に具に有り。味禪には功德法を具するに非ざるが故に一向に定んで無し。無漏禪とは、經論不同なり。『毘曇』大乘は淨禪と同じく、『成實』は少く異なり。『異相は如何。』無漏の初禪に、樂の一心有り。覺觀、喜無し。一心は定體なり。故に一心有り。無漏の法の身に在るを、樂と名く。故に樂支有り。』何の義を以ての故に、其覺觀無き。』無漏は必ず禪定の中の根本定に依つて生ず。所依の淨禪一心に至る時、已に覺觀を捨す。所生の無漏焉んぞ之有ることを得ん。故に覺觀無し。』何が故に喜無き。』彼『成實』の二禪品に説くが如し。喜は必ず假名を取るに從つて生じ、我に著するが故に起る。聖人は之を離するが故に、喜を生ぜず。問うて曰はく、『若し無漏の喜無くんば、七覺支の中には應に喜支無かるべし。又若し聖人喜を生ぜずんば、何が故に經に、『佛衆生の

【彼論】 成實論第
十五。

【論】 成實論第十
五。

【彼論】 成實論第
十六。

善を修するを見て、則ち喜ぶ」と言ふや。又若し喜無くんば、亦應に其無漏の猗樂無かるべし。【彼論に釋して言はく、「何が故に喜覺支有ることを得ん。覺支に二有り。一には是れ有漏、二には是れ無漏なり。有漏には喜有り、無漏には則ち無し。但無漏の支は、有漏より生ず。本因に仍るが故に、應に喜支と名くべし」と。佛の喜と言ふは、論に自ら釋して言はく、「佛は常に捨を行す。憂無く喜無し。化衆生の樂に隨つて、喜有りと言ふ」と。云何が無漏の猗有るを得るとならば、論に自ら説いて言はく、「無漏を得る時、慶重の過を離れて身心調適なるが故に、猗有ることを得」と。何が故に無漏の樂有るを得るとならば、論に言はく、「無漏智の外に、別に更に樂有りと説かず。但無漏法は初より來、身に在る義を説いて樂と爲すが故に、之有ることを得」と。問うて言はく、「當に一切の聖人皆悉く喜無かるべしとや爲ん、獨り無學のみとや爲ん。』論に言はく、「學人は觀に入れば則ち無く、觀を出づれば則ち有り。無學の聖人は、入出常に無し」と。第二禪の中には、樂内淨及與び一心有り。其喜支無し。彼内淨は即ち二禪の體なるを以ての故に、内淨有り。餘は前の釋に同じ。第三禪の中には、略して安慧無し。餘は皆具足す。彼安慧は念の中に攝入するを以ての故に、別に論せず。故に彼論に言はく、「三禪の後分の中には、安慧の支無し」と。』何者か後分なる。』無漏は其有漏禪に従つて生ずるが故に、無漏を名けて、以て後分と爲す。聖慧は正念と俱なることを彰さんが爲の故に、念の中に攝す。第四禪の中に、四支具足す。此れ乃ち論者の立意同じからざればなり。以て消息し難し。』支因の縁の

【四】第四に所滅の不同を明すに二あり、一には染障を滅す。

【二には等】二には亂障を滅す。

有無、之を辨ずること難なり。

第四門の中には、所滅の不同なり。所滅に二有り。一には染障を滅す。八禪、皆十使の煩惱を滅す。初禪を得て、欲界地の十使の煩惱を滅し、二禪を得る時、初禪地の九使の煩惱を滅し、乃至非想定を修得する時、無所有の九使の煩惱を滅するが如し。初禪の上には瞋恚無きを以ての故に、但九使を滅するも、亦樂障と爲し、通じて其得を斷ず。二には亂障を滅す。經の中に説くが如し。初禪に語言を滅し、二禪に覺觀を滅し、三禪に喜を滅し、四禪に樂を滅し、空處に色想を滅し、識處に空想を滅し、無所有處に識想を滅し、非想非非想處に無所有想を滅す。此滅亂障は但行せざらむる、之を名けて滅と爲す。其得を捨てず。善法は上を得して、下を捨てざるが故に。問うて曰はく、「覺觀は是れ言説の因なり。覺觀の心は、初禪に未だ盡さず。云何が已に語言を滅することを得る。」一論釋同じからず。若し「毘曇」に依らば、覺觀に二有り。一には禪を成ず、欲に背き靜を求む。二には禪を壞す、靜に背き説を起す。初禪の中には、但成禪覺觀の心有りて、壞禪の者無きが故に、語言を滅す。若し「成實」に依らば、彼初禪の根本定を得る時、已に覺觀を離す。覺觀無きが故に、言語生ぜず。之を名けて滅と爲す。「若し爾らば、初禪も亦覺觀を滅す。何が故に但語言を滅すと云ふや。」釋して言はく、「初禪の根本定の中に覺觀無しと雖も、前後に之有るが故に、滅と名けず。」「若し爾らば、前後にも亦語言有り。何が故に滅と説く。」釋して言はく、「覺觀は能く初禪の與に方便と作るが故に、滅と言ふことを得ず。語言は唯

障にして方便に非ざるが故に、語言滅すと説く。問うて曰はく、『初禪若し語言を滅すれば、初禪の人云何が起説することを得るや。』釋して言はく、『入定には語言を滅すと雖も、出る時は彼欲界地の中の威儀心を用て説き、或は初禪の威儀心を用て説くが故に、言を起すことを得。』問うて曰はく、『語言は能く初禪を障す。初禪を得竟つて、欲界心を以て語言を起す時、初禪を失するや不や。』釋して言はく、『失せず。』問うて曰はく、『語言は欲界の結と同じく初禪を障す。初禪を得て、人は欲界の心を以て言説を起す時、禪を失せずといはば、欲界の結を起すも亦應に失せず。』釋して言はく、『染障と亂障とは異なり。下染は正く土地の淨と違するが故に、欲染を起して、初禪を退失す。語言は直に是れ修を妨ぐるが故に障す。是れ正く違するに非ざるが故に、言を起すと雖も、初禪を失せず。諸地の染亂例して皆同じく爾なり。』問うて曰はく、『初禪は猶威儀覺觀の心有るが故に、言を起すことを得べし。二禪已上は、此覺觀無し。何に依つて説を起すや。』論釋同からず。若し『毘曇』に依らば、初禪地の威儀心を借つて説く。此借ると言ふは、上の威儀心の流類、初禪の心に似たるが故に、之を名けて借と爲す。彼より來るにあらず。』問うて曰はく、『上禪は唯下の威儀の心を借ることを得るや。亦善を借ることを得るや。』釋して言はく、『唯威儀を借ることを得。下善を借ることを得ず。』何が故に然るや。』良に威儀は是浮漫の心なるを以て、力屬して生ずるに非ず。土地の所起の流類は、下に同じきが故に、説いて借と爲す。善生するに、力屬地に隨つて各別なり。土地の所起は、下と同じからざ

【五】第五に得捨成就を明す、中に三、一に得を明す。

るが故に、借と名けず。若し『成實』に依らば、上地は皆欲界の心を用て説く。上に欲界の心を寄起することを得るが故に。」

第五門の中、差別するに三有り。一には得の義を明し、二には捨の義を明し、三には成就を明す。言ふ所の得とは、先に無くして今起る、之を説いて得と爲す。諸論不同なり。

『毘曇』には、淨定に二種の得有り。一には是れ斷得なり。欲界の結を斷じて初禪を得、是の如く次第に乃至無所有の結を斷じて非想定を得。二には是れ生得なり。二禪に生ずる時初禪を捨す。有漏は上に生じて、必ず下を失するが故に、後に還つて退下して初禪の中に生じ、本失する所を得るを、名けて生得と爲す。乃至非想の下に生ずるも、類して然なり。

『成實』、大乘には、但斷得有りて、其生得無し。彼宗は有漏は上地に生ずると雖も、下を失せざるが故に。『云何が彼有漏は上に生じて、下を失せざることを知らん。』彼に説かく、上界も亦下地の法を寄起することを得るが故に」と。無漏禪とは、『毘曇』の如きに依らば、二種の得有り。一には是れ斷得、下の煩惱を斷じて上の無漏を得。二には退得、退に二種有り。一には退果得、聖果を證する時、向の無漏を捨し、後に果を退する時、本失する所を得るを、退果得と名く。二には退根得、根を轉ずるの時、利を得して鈍を捨し、後に根を退する時、本失する所を得るを、退根得と名く。『成實』、大乘には、但斷得有つて、其退得無し。彼宗は無漏には退轉無きが故に。又彼宗の中には、得果の時因滿するを果と爲し、前の因を捨せず。轉根の時、鈍を轉じて利と爲し、前の體を捨せず。故に退得

【次に等】二に捨の義を明す。

無し。若し味禪を論ずれば、但退得有り。人有つて第二禪を修得する時、初禪の中の味禪煩惱を捨す。後に二禪を退して、本失する所を得るを、名けて退得と爲す。乃至非想の退得も同じく爾なり。問うて曰はく、「非想は三界の中の極なり。何の處にか退し來つて亦退得有る。」毘曇の如きに依らば、羅漢果を退して彼味定を得るが故に、退得有り。「成實」には、非想に此退得無し。問うて曰はく、「淨禪は何の義を以ての故に、其退得無き。」釋して言はく、「淨定は上を修得する時、下を失せず。故に上を退するの時、下は新得に非ず。」問うて曰はく、「無漏は何の義を以ての故に、其生得無き。」無漏は上に生じて、下を失せず。故に其生得無し。又復聖人は所生の處に隨つて、退下の義無きが故に、生得無し。問うて曰はく、「味禪は何が故に其生斷の二得無き。」釋して言はく、「味禪は身下地に在つて、上地の中の所未斷の處に於て一切成就し、結を斷じて方に始めて得ることを得ざるが故に、其斷得無し。彼上地より退して下に生ずる時、要す先づ退して下地の味定を起し、然して後に受生す。退する時已に得て、生じて始めて得るに非ざるが故に、生得無し。」此一門、次に、捨の義を明す。言ふ所の捨とは、先に成じて今失する、之を名けて捨と爲す。論釋同じからず。「毘曇」には、淨定に二種の捨有り。一には是れ退捨、先に禪を得已つて、後に還つて退失す。二には是れ生捨、上地に生ずる時、下法を失す。有漏は上に生じて、必ず下を失するが故に。「成實」、大乘には、唯一の退捨なり。無漏禪とは、「毘曇」の如きに依らば、三種の捨有り。一には是れ退捨、先に得て退失す。二には得果

捨、四果を得る時、向の無漏を捨す。三には轉根捨、轉根の時、利を得て鈍を捨す。若し無餘涅槃の時の捨に通ずれば、則ち四種有り。『成實』には、唯一の涅槃の時に捨あり。餘の三は皆無し。大乘法の中には緣照無漏は、入證の時に捨す。眞は則ち捨無し。味定は唯斷滅の時に捨有り。問うて曰はく、淨禪には何が故に、其得果、轉根及び斷捨無きや。『釋』して言はく、此れ向果の法に非ざるが故に、果を得て捨せず。有漏の法は、同地の中に於て證令重習すとも、唯純熟すべく、捨得の義無し。是故に其轉根の時の捨無し。煩惱に非ざるが故に、斷時の捨無し。』問うて曰はく、何が故に無漏の轉根に、得有り、捨有るや。『淨禪は爾らず。解に兩義有り。一には無漏の法は轉根の時、具に無礙解脫の道を以て、障を斷じ根を轉ず。階別皆定まるが故に、轉根の時に得有り、捨有り。有漏は無礙解脫を以て、障を斷じ根を轉せず。數習すれば便ち利にして、久く廢すれば、還つて鈍なり。階別不定なるが故に、得捨無し。一義是の如し。二には無漏は力大なれば、自地の法に於て能く得捨す。有漏は力微なれば、自地の中に於て同類の法裁斷して、全く別異ならしむること能はざるが故に、得捨無し。煩惱に非ざるが故に、斷時の捨無し。』問うて曰はく、『無漏には何が故に其生斷の二捨無き。』釋して言はく、『無漏は是れ不繫の法にして、上地に生ずと雖も、下を失せざるが故に、生時の捨無し。煩惱に非ざるが故に、其斷捨無し。』問うて曰はく、『味定には何が故に、其退失の得果、轉根の捨無きや。』釋して言はく、『下地の結を退起する時、上味を失せざるが故に、退捨無し。凡天上生するは、必ず

【次に等】 三に成就を明す。

先に定を得。定を得るの時、已に下味を捨す。生じて始めて失するに非ざるが故に、生捨無し。餘義は前の淨禪の中に釋するが如し。此二門つぎに、成就を辨す。身に隨つて失せざるを、名けて成就と爲す。諸論阿からず。毘曇法の中には、一切の淨定、身下地に在つて、上地の中に於て、所得の處に隨つて皆悉く成就す。身、上地に在つては、則ち下を成ぜず。是義を以ての故に、身は欲界及び初禪の中に在つて、八禪を成ずることを得。身、二禪に在つては上の七地を成じ、乃至身、非想地の中に在つては、唯非想定を成就することを得。下は悉く成ぜず。成實、大乘には、一切の淨定、下は上を成ずることを得、上は亦下を成ず。無漏定とは、一たび修得して已後、三界の中に於て、身に隨つて何の處にも皆悉く成就す。若し味定を論ずれば、毘曇法の中には、身、下地に在つて、上地の中に所未斷の處に於て、皆悉く成就す。斷は則ち成ぜず。若し身上に在つて、下地の中に於て、一切成ぜず。成實、大乘には、聖人の上に生ずるは、毘曇と同しく、下地の中に於ては、一切成ぜず。結を斷じて生ずるが故に。凡夫、上に生ずるは、猶下味を成ず。結を伏して生ずるが故に。

【六】 第六に入縁の不同を明すに四あり、一には入定の不同を明す。

第六門の中、義別に四有り。一には入定同じからず。二には定縁に異有り。三には入の所爲を明す。四には入人を辨定す。入定の不同とは、毘曇の如きに依らば、二十四種有り。一相狀は如何。二有漏定の中、次第及び超に其八種有り。無漏も亦然なり。有漏、無漏の間に、復八有り。是故に通じて二十四種有り。有漏の八とは、次第に四有り。超越も亦

然なり。次第の四とは、一には是れ順入、初禪より入つて、次第に上昇して、乃ち非想に至る。二には是れ逆入、非想より入つて、次第に下に轉じて、初禪に至つて出づ。三には逆順入、初禪より入つて第二禪に至り、却いて初禪に入つて、次第に上昇して第三禪に至り、却いて二禪に入つて、次第に上昇して第四禪に至る。是の如く却入して、復上昇す。乃ち非想に至るまで、類して亦同じく然なり。四には順逆入、非想より入つて無所有に至り、却つて非想に入つて、次第に下に轉じて其識處に至り、是の如く却入して、復下轉して、初禪に至つて出づ。超中の四とは、一には是れ順超、初禪地より超えて三禪に入り、是の如く漸く超えて、乃ち非想に至る。問うて曰はく、「何が故に唯一地を越ゆるや。」一聲聞は禪を越ゆること、一を過ぎざるが故に。二には是れ逆超、先に非想に入り、超えて識處に入る。是の如く下に超えて、初禪に至つて出づ。三には逆順超、謂はく、初禪より超えて三禪に入り、却いて二禪に入つて、超えて四禪に入り、却いて三禪に入つて、超えて空處に入る。是の如く却入し、復上超して、乃ち非想に至る。四には順逆超、作法は前に同じ。下に向ふを異と爲す。有漏既に然なり。無漏も亦爾なり。問中の八とは、次第に四有り。超越も亦然なり。次第の四とは、一には順出入、先に有漏の初禪に入り、次に無漏の二禪に入る。是の如く翻迭して、乃ち非想に至る。二には逆間入、作法は前に同じ。下に向ふを異と爲す。三には逆順出入、有漏の初禪より無漏の二禪に入り、却いて無漏の初禪に入り、次に有漏の二禪に入つて、復無漏の三禪に入り、却いて無漏の二禪に

【次に等】次に諸禪緣境の差別を明す。先づ相狀。

【作法は等】二に作法を明すに、一に能縁について分別す。

入り、次に有漏の三禪に入り、復無漏の四禪に入り、却いて無漏の三禪に入り、次に有漏の四禪に入つて、復無漏の空處に入る。是の如く却入し、復上昇して、乃ち非想に至る。四には順逆間入、作法は前に同じ。下に向ふを異と爲す。超中の四とは、一には順間超、有漏の初禪より超えて無漏の三禪に入り、無漏の四禪を超えて、有漏の空處に入る。是の如く間超して、乃ち非想に至る。二には逆間超、作法は前に同じ。下に向ふを異と爲す。三には逆順間超、有漏の初禪より却いて無漏の二禪に入り、超えて有漏の四禪に入り、却いて有漏の三禪に入り、無漏の空處に入る。是の如く却入し、復上超して、乃ち非想に至る。四には順逆間超、作法は前に同じ。下に向ふを異と爲す。聲聞是の如し。諸佛菩薩は、或は一乃至至衆多を超ゆ。是れ則ち入定にして、四無量を具す。此一門つて、諸禪緣境の差別を明す。中に於て、亦二十四種有り。『相狀は如何。』『成實』の如きに依らば、八禪は同じく欲界乃至非想地法を以て、以て境界と爲す。毘曇法の中には、四禪は前に同じく、四無色定は唯自地及び上地の法を緣じて、以て境界と爲し、下地を緣ぜず。故に『雜心』に云はく、「無色は下の有漏種を緣ぜず」と。今此には且く初禪の一地に就いて、二十四を論ず。餘は類して知るべし。『作法は如何。』『略して二門有り。一には能縁に就いて分別し、二には所縁に就いて分別す。能縁と言ふは、能縁の心に其有漏、無漏の別有り。有漏の初禪は、九地の法を緣す。其に八句有り。無漏の初禪は、九地の法を緣す。亦八句有り。有漏無漏間の縁にも、亦八あり。是故に合して二十四種有り。有漏の八とは、次第

に四有り。超縁も亦四有り。次第の四とは、一には順次第、謂はく、初禪を以て欲界の法を縁じ、上非想に至る。二には逆次第、始め非想を縁じ、下欲界に至る。三には逆順次第、先に欲界を縁じ、次に初禪を縁じて、却いて欲界を縁じ、次第に上縁して第二禪に至り、却いて初禪を縁じ、次第に上縁して第三禪に至る。是の如く却縁し、復上縁して、乃ち非想に至る。四には順逆次第、先に非想を縁じて無所有に至り、却いて非想を縁じ、次第に下縁して其識處に至り、却いて無所有を縁じ、次第に下縁して其空處に至る。是の如く却縁し、復下を縁して、乃ち欲界に至る。超中の四とは、一には是れ順超、先に欲界を縁じ、超えて二禪を縁す。是の如く上超して、乃ち非想に至る。二には是れ逆超、作法は前に同じ。下に向ふを異と爲す。三には逆順超、先に欲界を縁じ、超えて二禪を縁じ、却いて初禪を縁じ、超えて三禪を縁す。是の如く却縁し、復上超して、乃ち非想に至る。四には順逆超、作法は前に同じ。下に向ふを異と爲す。有漏是の如し。無漏の八とは、上に類して知るべし。有漏無漏間に八と爲すとは、次第に四有り。超越にも亦四有り。次第の四とは、一には順次第、先に初禪の有漏の心を以て、欲界の法を縁じ、次に無漏を以て、初禪の法を縁じ、復有漏を以て二禪の法を縁す。是の如く翻迭して、乃ち非想に至る。二には逆次第、作法は前に同じ。下に向ふを異と爲す。三には逆順次第、先に有漏を以て欲界の法を縁じ、次に無漏を以て初禪の法を縁じ、却いて無漏を以て欲界の法を縁じ、次に有漏を以て初禪の法を縁じ、復無漏を以て二禪の法を縁じ、却いて無漏を以

【次に等】二に所縁について分別す

【次の等】三に入の所爲を明す。

て初禪の法を縁じ、次に有漏を以て、二禪の法を縁じ、復無漏を以て、四禪の法を縁す。是の如く却縁し、復上縁して、乃ち非想に至る。四には順逆次第、作法は前に同じ。下に向ふを異と爲す。超中の四とは、一には是れ順超、先に有漏を以て欲界の法を縁じ、次に無漏を以て二禪の法を縁じ、復有漏を以て四禪の法を縁す。是の如く翻送して、超えて非想に至る。二には是れ逆超、作法は前に同じ。下に向ふを異と爲す。三には逆順超、先に有漏を以て欲界の法を縁じ、次に無漏を以て超えて二禪を縁じ、却いて無漏を以て初禪を縁じ、次に有漏を以て、三禪を縁じ、却いて有漏を以て、第二禪を縁じ、復無漏を以て超えて四禪を縁す。是の如く却縁して、復上超し、乃ち非想に至る。四には順逆超、作法は前に同じ。下に向ふを異と爲す。上來直に能縁の心に就いて、有漏無漏相對分別して、二十四と爲す。次に所縁に就いて、有漏無漏に二十四と爲す。『毘曇』の如きに依らば、欲界、非想は一向に有漏なり。餘は有漏及與び無漏に通ず。初禪心を用て彼有漏を縁するに、其八句有り。彼無漏を縁するも、亦八句有り。有漏無漏間の縁にも、亦八句有り。其中の作法は、前と相似す。唯所縁の境界の中に就いて、其有漏無漏を明すを、異と爲す。初禪既に然なり。餘禪類して爾なり。此二門、次の第三門に、入の所爲を明す。『毘曇』の如きに依らば、所爲に三有り。一には滅定に入らんが爲に、先づ其心を調へ、二には正受に遊戯して、自ら心力を試み、三には般涅槃せんと欲して、此を以て身に薰じ、人をして遺身の舍利を尊重せしむ。是三種の中、若し滅定及び般涅槃に入らば、但有漏の諸禪定の中に

【次に等】 三に入人を辨す。

【七】 第七に四縁分別す。中に二、一に四縁を明す。

【次に等】 二に四縁に就いて八禪を分別す。第一に淨定を論ず。先づ淨を淨定に聖むるに就いて三を分つ。一に具縁の多少。

於て、順逆次第及與び超越なり。若し正受到遊戯すれば、則ち具に之を爲す。若し、成實に依らば、滅盡定に入るは、唯順次第なり。超越を須ひず。餘は「毘曇」に同じ。此門竟つに、入人を辨す。「毘曇」の如きに依らば、佛及び利根の阿羅漢の人は、是の如きの二十四種の遊戯諸禪に堪能なり。鈍者は能はず。那含の人の滅盡定を得る者は、有漏禪に於て、六種の入を能くす。謂ゆる、順入、逆入、逆順逆入、順超、逆超、逆順超なり。餘は能く堪へず。大乘法の中には、文に説かずと雖も、諸佛菩薩一切皆能くす。

第七門の中に、四縁分別す。中に於て二有り。一には四縁を明し、二には四縁に就いて八禪を分別す。四縁と言ふは、一には是れ因縁、二には是れ縁縁、三には是れ縁縁、四には増上縁なり。「釋心」の中の如きは、六因を離合して、以て四縁と爲す。六因と言ふは、一には所作因、諸法起る時萬法障せず。二には自分因、一切の諸法同類相起す。三には相應因、心法起る時、同時の心法相扶けて用有り。四には共有因、諸法起る時、同時の法相扶けて體立す。五には遍因、苦の下の見、疑及び無明、集の下の見、邪見、見取、疑及び無明、此十一遍く有漏に迷つて、諸結を増長するを、名けて遍因と爲す。六には報因、善惡等の業は苦樂の報を得。六の中、後の五を説いて因縁と爲し、初の一の所作を、説いて三縁と爲す。心法相生するを、次第縁と名け、六塵心を生ずるを、名けて縁縁と爲し、六根心を生じ、及與び一切の諸法起る時、萬法障へざるを、増上縁と名く。四縁是の如し。此一門つに、次に、四縁に就いて、諸禪を分別す。先に淨定を論ず。淨を淨定に望めて、

【二には等】二に地に就いて分別す

三句分別す。一には具縁の多少なり、此れ因縁を具す。自分相生するは是れ其因縁、比次相起するは是れ次第縁、淨定を境と爲し、還淨定を生ずるは、是れ其縁縁、前を意根と爲し後の定心を生ずるは是れ増上縁なり。二には地に就いて分別す。因縁の一種は唯當地に在り。若し他地に望むれば、則ち因の義無し。淨定は有漏にして、繫地別なるが故に、自分因無し。異地相望むれば、是れ相應、共有の法に非ざるが故に、相應因及び共有因無し。餘の三は寛く通ず。自地に望め、及び他地に望むれば、皆之有ることを得。次第を他に望むれば、大小不同なり。小乘法の中には、近くは一地を生じ、遠くは二地を生ず。次第正受は、近く一地を生ず。初禪より二禪を生じ、第二禪より初禪を生ずるが如し。是の如きの一切なり。超越正受は、遠く二地を生ず。初禪より第三禪を生ずるが如し。是の如きの一切なり。聲聞の超禪は一に過ぎざるが故に、多地を生ぜず。大乘法の中には、近くは一地を生じ、遠くは一切を生ず。次第正受は、近く一地を生じ、超越正受は、遠く一切を生ず。初禪より非想定を生じ、非想定より初禪等を生ずるが如し。佛菩薩の禪は自在なるを以ての故に。縁縁を他に望むれば、諸論不同なり。若し「毘曇」に依らば、色界地の中の一切の淨定を上下相望めて、皆縁縁と爲す。色界定は能く廣く縁するを以ての故に、無色界の中、上地を下に望めて、縁縁と爲すことを得。下を上に見るに非ず。無色は下の有漏を縁せざるが故に。故に「雜心」に云はく、「無色は下の有漏種を縁せず」と。若し「成實」に依らば、無色も亦能く下の有漏を縁す。復之を縁すと雖も、心通暢せず。

【三には等】三に品數を分別す。

【淨を等】淨定の中第二に淨を無漏に望む、中に亦三、一に具縁の多少等前の分別に同じ。

【淨を等】淨定を論ずる中第三に淨を味定に望む、亦具縁の多少等三の分別あること知るべし。

筋草を燒くが如し。是れ則ち彼宗は、色無色界の一切の淨定を、上下相望めて、皆縁縁と爲すなり。増上を他に望めては、觀縁不同なり。意根増上は、之を名けて觀と爲し、萬法不障を説いて、以て味と爲す。中に於て觀とは、異地相望むれば、次第と同じく、味とは、八禪迭互に相望めて、皆増上と爲す。障へざるを以ての故に。三には品數を分別す。因縁の一種は等及び勝に望むれば、是れ其因縁なり。下に望むれば、明ち非なり。自分に非ざるが故に。餘の三は寛く通じて、上下を簡ばす。此一門に望むるも、亦三句の説有り。一には具縁の多少なり。其因縁を除いて、餘の三種有り。淨の無漏を生ずるは

就いて分別す。自地、他地皆縁と爲すことを得。前の門の中の後の三縁と同じ。三には品數を分別す。淨と無漏と、異類相生す。其上中下の別を分つべからず。但通じて一切所生の與に、三縁の異と爲すことを知る。此兩門淨を味定に望むるも、亦三句の説有り。一には具縁の多少なり。亦因縁を除いて、餘の三種有り。淨より染を生ずるは、自分に非ざるが故に、其因縁無し。餘の三は寛きが故に、所以に有ることを得。二には地に就いて分別す。自他の味に望めて、三縁を具することを得。下に望むるも、亦然なり。謂はく、退轉の時下味を生ずるが故に、次第縁及び増上縁有り。他界縁の使は上を縁じて起るが故に、縁縁有り。土地の味に望むれば、次第縁、縁縁の義無く、但増上縁なり。何が故に上に望むれば、次第縁無き。土地の味定は自地に愛著して、心は土地の有漏心より生ずるが故

【次に等】四縁に就いて諸禪を分つ中、二に無漏を辨ず。中に先づ無漏定に望めて明す、中に三、一に具縁の多少、二には等次に就いて分別。

に、下の淨定の得ざるを、上の與に次第縁と爲す。何故に上に望むれば、其縁縁無き。一切の煩惱は自地及び上地を緣にして生じ、下を緣ぜざるが故に。何故に上に望むれば、増上縁有る。意根の觀生増上無しと雖も、萬法障へず。増上縁は寛きが故に、之有ることを得。三には品數を分別す。縁と爲る處に於て、上中下品の差別を分たず。此淨定次に、無漏を辨ず。無漏は還つて無漏の定に望むれば、三句の分別有り、一には具縁の多少なり。四縁を具足す。自分相生するは是れ其因縁、比次相生するは是れ次第縁、道諦を境と爲すは是れ其緣縁、前を意根と爲し、後の無漏を生ずるは是れ増上縁なり。二には地に就いて分別す。無漏は是れ繫地の法に非ざるが故に、自地に望め、上に望め、下に望めて、皆因縁を具す。中に於て、因縁は他地に望めて、通じて局らず。云何が局らざる。八禪の中に於て、無漏處有り。迭互に相望めて、皆因縁と爲す。中に於て、亦因縁に非ざる者有り。復當に之を辨ずべし。次第、増上を他地に望むれば、淨禪の中の他地の淨に望むると、其義相似せり。緣縁を他に望むれば、諸論不同なり。若し「眞基」に依らば、一切の無漏を色界の中の無漏の定心に望めて、悉く緣縁と爲す。彼廣縁なるが故に、無色界の無漏の心に望むれば、是有り、非有り。是非は如何。無色の無漏は、唯自地及び上地の中の對治の無漏を緣じて、以て境界と爲す。彼の緣する所の者は、是れ其緣縁にして、彼の緣ぜざる者は、則ち緣縁に非ず。何故に故に下地の對治を緣ぜざる。無色の心微にして、下の有漏法を緣すること能はざるが故に。亦下の有漏の對治をも緣ぜず。成實、大乘

【三には等】次に品數を分別す。

【無漏を等】無漏定を辨する中、二に無漏を淨に望む中に三句の別あること知るべし。

【無漏を等】次に味に望むるに、亦三句の説あり、知るべし。

【次に等】因縁に就いて諸禪を説く中、第三に味定を明す。中初に味を味定の説あり、一には具縁の多少。

には、一切の無漏皆普く縁するが故に、迭互に相望めて、悉く縁縁と爲す。三には品數を分別す。因縁の一種は等及び勝に望むれば、是れ其因縁なり。下に望むれば、則ち非なり。下に望むれば、是れ自分因に非ざるが故に。若し剛らば、何が故に下地の無漏の心の與に、因縁と爲すことを得るや。釋して言はく、「無漏は禪地に約して、以て上下を分たす。乃ち治亂に約して、以て勝劣を分つ。或は下地の無漏の心能く上過を治する有り。即ち名けて上と爲す。故に彼に望めて、説いて因縁と爲すことを得。」餘の三縁は具義寛く通じて、上下を簡ばす。此一門に、無漏を淨に望めるも、亦三句の説あり。一には具縁の多少なり。其因縁を除いて、餘の三種有り。異類相生するは、自分に非ざるが故に、其因縁を除く。餘の三は義寛きが故に、之有ることを得。二には地に就いて分別す。自地、他地皆縁と爲すことを得。三には品數を分別す。縁と爲る處に於て、上中下品の差別を分たす。此門に、無漏を味に望むるも、亦三句の説有り。一には具縁の多少なり。唯縁縁及び増上縁のみ有つて、餘の二種無し。無漏縁は無漏を縁じて起さしむるが故に、縁縁有り。味に於て障へざるが故に、増上有り。自分に非ざるが故に、其因縁無く、觀く生ずるに非ざるが故に、次第縁無し。二には地に就いて分別す。自地の味及び他地の味に望めて、向の二縁を説き、他の上地、下地の無漏を縁じて、皆結を生ずることを得るが故に、縁縁有り。増上縁は寛きが故に、之有ることを得。三には品數を分別す。縁と爲る處に於ては、上中下品の差別を分たす。此無漏に、次に、味定を明す。味を味定に望むるも、亦三句の説有り。一に

【二には等】地に就いて分別す。

【三には等】次に品數を分別す。

【味を淨】味定を淨定に望む、中に三句の説あること知るべし。

は具縁の多少なり。此れ四縁を具す。上の淨等に准じ、同類して知るべし。二には地に就いて分別す。自地に望むれば、四縁を具足す。上を下地に望むれば、其因縁を除いて餘の三種有り。煩惱は地に繫す。異地相望むれば、自分に非ざるが故に、其因縁を除く。退轉の時上味、下を生ずるが故に、次第及び増上縁有り。然るに此上味は下地の中の一切の味定に於て、悉く次第、増上縁の義有り。近遠を簡ばす。謂はく、上地の中の染汚の心起つて、下の一切地の染心生ずるが故に、上縁の使は上を緣じて起る。故に縁縁有り。下を上地に望むれば、一切皆無し。下味有る時、上地の味は但成就すべし。現に生ぜざるが故に。三には品數を分別す。一切の煩惱は上中下品迭互に相望むれば、皆四縁と爲す。問うて曰はく、「何が故に、淨、無漏の中には、等及び勝に望めて其因縁を説き、下品に望めず、此味定の中には、通じて下品に望めて因縁を説くや。」釋して言はく、「善法は本無く今有り。方便習生す。習生の法は、微より著に至るが故に、下は勝の因にして、勝は下の因に非ず。勝より下を生ずるは、是れ退の次第にして、生の次第に非ず。是を以て因に非ず。一切の煩惱は久習性成して、互に相熏發す。故に上を下に望むれば、亦因と爲すことを得。又上より退して下結を起す時、九品の煩惱一切頓に得。先に起すべきに隨つて、即ち以て因と爲す。故に上を下に望むれば、因の義有ることを得。此一門に望むれば、亦三句の説有り。一には具縁の多少なり。其因縁を除いて、餘の三種有り。二には地に就いて分別す。自地の中に於て、三縁を具足す。下に望むるも、亦爾なり。上の味心は

【味を等】次に味定を無漏に望む、亦三あり、知るべし。

【八】以下、第八門に大小の不同について知るべし。

後に下の淨定を起す。自地の退を防ぐが故に、下の淨に望むれば、其次策、増上縁の義有り。下の淨定に依つて上味を擧觀して、苦集の觀を爲すが故に、上地の味を下の縁縁と爲す。上の淨定に望むれば、縁縁、増上の義有ることを得。『是義云何。』『他人の上淨は我下味を縁じて厭惡の心を生ず。故に、縁縁有り。我味は他人の上淨を障へざるが故に、増上有り。三には品數を分別す。縁と爲る處に於ては、上中下品の差別を分たす。此門竟み。三には品數を分別す。縁と爲る處に於ては、上中下品の差別を分たす。此の義は自分に非ざるが故に、其因縁無く、觀く起すに非ざるが故に、次第縁無し。二には地に就いて分別す。同地に望むれば、其縁縁及び増上縁有り。下に望むるも、亦爾なり。上地の味定は苦集の境と爲るが故に、縁縁有り。上は下を障へざるが故に、増上有り。上の無漏に望むれば、下の無漏の與に亦前の二を具す。我味は他の上地の無漏の與に、苦集の境と爲るが故に縁縁有り。我味は他の上の無漏を障へず。故に増上有り。三には品數を分別す。縁と爲る處に於ては、上中下品の差別を分たす。縁別是の如し。

第八門の中、大小不同は略して十三有り。一には體性の不同、小乘の禪定は事識を體と爲す。大も亦始習は事識を體と爲す。次に事識を除いて、妄識を體と爲し、終に妄識を除いて、眞識を體と爲す。二には常無常の異、小乘の所得は一向に無常なり。大乘法の中には、始修は無常、終成は是れ常なり。眞を體と爲すが故に。三には漏無漏の別、小乘には、初禪より無所有に至つて、漏無漏に通ず。非想の一地は、唯是れ有漏なり。『成實』には、

設たひ有あるとも、但ただ順じゆん舊きゆ遊ゆう觀くわんの無む漏ろう有あり。大乘だいじやうには、八は禪ぜん皆みな有あ漏ろう及および無む漏ろうに通つうず。故ゆゑに龍りゆう
 樹じゆの言いはく、「云い何かが菩ぼ薩ざつ非ひ想じやう處ち定ぢやうなる。實じつ相じやうと俱ともなる是こゝれ菩ぼ薩ざつ非ひ想じやう處ち定ぢやうと名なく」と。四しに
 は滅めつ障じやうの不同ふどう、小せう乘じやうの禪ぜん定ぢやうは、但ただ能よく四し住じゆの亂らんを滅めつ除じゆし、大乘だいじやうの禪ぜん定ぢやうは、能よく一切いっさいを滅めつ
 す。五ごには深えん淺せんの不同ふどう、小せう乘じやうは定ぢやう淺せんなり。緣えんの爲ために動どうすべし。故ゆゑに龍りゆう樹じゆの説とく、「大だい樹じゆ緊きん那な
 羅ら王わう瑠る璃りの琴きんを鼓こすれば、迦か葉せつ起つて舞まふ。阿あ難なん歌か吟ぎんす。定ぢやう淺せんなるを以もつての故ゆゑに」と。諸しよ
 の菩ぼ薩ざつは、禪ぜん定ぢやう深えん靜じやうなり。乃な至し天てん雷らいも發はつ動どうすること能あたはず。六ろくには緣えん心しんの不同ふどう、小せう乘じやうに
 は、禪ぜん定ぢやうには想じやう有あり。緣えん有あり。大乘だいじやうには、始し習じゆには想じやう有あり、緣えん有あり、終じゆう成じやうに緣えんを離りす。故ゆゑ
 に『地ち持ぢ』に云いはく、「佛ぶつ先せんに迦か旃ぜん延えんの爲ために説とくが如ごとく、比ひ丘きゆうは一切いっさいの修しゆ禪ぜんに依よらず。云い何か
 が依よらざる。若しは地ぢ地ぢを除のぞき、乃な至し一切いっさい一切いっさい想じやうを除のぞく」と。七しちには緣えん境じやうの不同ふどう、凡ふん夫ふの禪ぜん
 定ぢやうは、事じ相じやうを境じやうと爲なし、二に乘じやうの禪ぜん定ぢやうは、苦く無む常じやう等とうの法ほふ相じやうを境じやうと爲なし、諸しよ佛ぶつ菩ぼ薩ざつは、實じつ性じやうを
 境じやうと爲なす。八はちには出しゆつ入にふの不同ふどう、小せう乘じやうの所しよ得とくは、出しゆつ有あり、入にふ有あり。大乘だいじやう法ほふの中ちゆうには、始しには
 出しゆつ入にふ有あり、成じやうずれば則すなはち爾しからず。一切いっさい時じに於おて、定ぢやうならざることを無なきが故ゆゑに。九きゆうには超じやう越じやう
 の不同ふどう、小せう乘じやうの超じやう禪ぜんは、一いっ地ぢに過すぎず。諸しよ佛ぶつ菩ぼ薩ざつは、一いっ切ぢ地ぢに於おて其その多た少せうに隨したがひ、皆みな悉じつ
 く能よく超じやうす。十じゆには受じゆ生じやうの不同ふどう、二に乘じやうの得とく禪ぜんは、欲じやく界がいに廻めぐり來きたつて受じゆ生じやうすること能あたはず。
 菩ぼ薩ざつは悉じつく能よく禪ぜん定ぢやうの中ちゆうに於おて、繫けい縛ばくを離りるが故ゆゑに。十一じふいちには起き行じやうの不同ふどう、小せう乘じやうの修しゆ
 禪ぜんは但ただ自じ樂らくの爲ためにし、大だい乘じやうは俱ともに利りす。十二じふにには生じやう徳とくの不同ふどう、小せう乘じやうの禪ぜん定ぢやうは但ただ能よく少せう分ぶんの
 功く徳とくを出しゆつ生じやうし、菩ぼ薩ざつの禪ぜん定ぢやうは一切いっさいを出しゆつ生じやうす。故ゆゑに『地ち持ぢ』に云いはく、「菩ぼ薩ざつの禪ぜん定ぢやうは功く

【九】下第二に別して八禪を解するに、先づ第一に四禪を解するに六門を辨定す、第一に淨禪に就いて四分あるべし。

德を出生し、聲聞辟支は其名を知らず。況んや復能く起さんや」と。十三には得果の不同、二乗の禪定は但小果を得、菩薩の所修は大菩提を得。不同是の如し。

上來第一に通じて八禪を解す。下の第二より別して解す。八禪の中先づ四禪を解し、後に四空を解す。四禪を解する中、別に六門有り。一には所釋を辨定す。二には開合して相を辨す。三には支因の同異、先後、體具多少の廢立なり。四には道品に約對して、共通別を彰す。五には修成の相にして、六には文に隨つて義を釋す。先づ所釋を定む。禪に三種有り。一には味、二には淨、三には是れ無漏なり。味は是れ煩惱にして、功德の法に非ず。今は廢して論ぜず。無漏は禪果なれば、今亦釋せず。且く淨禪を解す。淨に四分有り。一には退分、二には住分、三には勝進分、四には決定分なり。退分と言ふは、釋に兩義有り。一には下品の淨定は下の煩惱に隣つて、喜を下地の煩惱の爲に敗らるるが故に、退分と名く。此れ退すべきが故に、之を名けて退と爲す。是れ已に退するに非ず。二には自地の煩惱の爲に雜せらるるが故に、退分と名く。謂はく、淨定より味煩惱に入り、味煩惱より還つて淨定に入る。欲界の中の微力の善心、還つて欲界の惡法の爲に雜せらるるが如し。此も亦是の如く、復、彼煩惱の爲に雜せらるると雖も、失定と名けず。同地の法なるが故に。住分と言ふは、釋に兩義有り。一には堅く自地を守つて、下地の煩惱の爲に敗せられざるが故に、名けて住と爲す。上の初の退に簡ぶ。二には堅く淨心を守つて、自地の煩惱の爲に雜せられざるが故に、名けて住と爲す。上の後の退を簡ぶ。勝進分とは、

【二〇】四禪を解する中、二に開合辨相。

自地の過を厭ひて上禪に趣順す。決定分とは、諸法の苦無常等を學觀して聖道に趣順し、而も未だ聖を得ず。

第二門の中、開合して相を辨ず。開合不定なり。總じては唯一禪なり。謂はく、三學の中は、唯一の定學なり。六度の中は、唯一の禪度なり。或は分つて二と爲す。一には是れ遠離、二には是れ寂滅なり。『地持』に説くが如し。初禪に欲惡不善を遠離するを、名けて遠離と爲し、二禪已上に覺觀等を息むるを、名けて寂滅と爲す。或は分つて三と爲す。三に兩聞有り。一には受到約して三を分つ。初禪、二禪を喜俱禪と名け、三禪は樂俱、四禪は捨俱なり。二には覺觀の有無に就いて三を分つ。初禪を名けて有覺有觀と爲し、中間を名けて無覺有觀と爲し、二禪已上は無覺無觀なり。或は分つて四と爲す。謂ゆる、四禪の六義不同なり。故に分つて四と爲す。一には滅障の不同、初禪には欲惡不善を遠離し、二禪地の中には覺觀を滅除し、三禪には喜を滅し、四禪には樂を滅す。二には滅受の不同、經の中に説くが如し。初禪には憂を滅し、二禪には苦を滅し、三禪には喜を滅し、四禪には樂を滅す。問うて曰はく、『初禪には憂苦並に滅す。今云何が初禪には憂を滅し、二禪には苦を滅すと言ふや。』『若し『毘曇』に依らば、初禪地の中には、眼耳鼻の三識有り。身は此三識在り。身は苦根の所依なるが故に、滅と説かず。』『若し兩らば、意識は憂根の所依なり。初禪に意有り。應に憂を滅せざるべし。』釋して言はく、『憂根は共過疊重なれば、定んで欲界に在り。是故に初禪に憂を滅すと宣説す。』『云何が疊重なる。』『憂は欲界の貪

欲心より起る。欲界の五欲の境界に貪著して、彼に散壞せられて方に憂を生ずるが故に。○
 苦は是の如くならざるが故に、滅と説かず。又復憂根は定を退して方に生ず。苦は則ち爾
 らず。定を出でて便ち起る。是が爲に類せず。『成實』に論する所は、初禪に三識身有るに
 由るが故に、苦を滅せざるにあらず。但彼初禪は欲界地の不定の心に近し。不定心の中に
 能く苦受を生ずるが故に、苦を滅せず。『若し欲界に近ければ、亦應に憂を生ずべし。何
 が故に滅と説くや。』釋して言はく、『憂は貪喜の心より起り、定を退して方に生ず。若し
 欲に著せざれば、終に憂を生ぜず。苦は是の如くならざるが故に、苦受有つて憂根を滅
 す。』三陀は別地の法の異、初禪の覺觀は餘禪に異り、二禪の内淨、三禪の安慧、四禪地の
 中の不苦不樂は、皆各別異なり。所以に須く分つべし。四には定心の麤細、故に四禪
 を分つ。經の中に説くが如し。初禪の定心は、蜜を釀に和するが如し。心性は散動し、法
 を以て攝持するが故に、能く緣に住す。二禪の定心は、山頂の泉水の中より出でて、外よ
 り來らざるが如く、三禪の定心は、池中の華の如く内外に盈溢し、四禪の定心は、密室の
 燈の如く怡然として動ぜず。五には受果の不同、故に四禪を分つ。初禪は能く梵衆、梵輔、
 大梵天の果を得、二禪は能く少光、無量光、光音の果を得、三禪は能く少淨、無量淨、遍
 淨の果を得、四禪は能く禪愛、福生乃至阿迦尼吒天の果を得。第六には住處の寬狹不同の
 故に四禪を分つ。『毘婆沙』に説くが如し。彼に二論有り。一家の説に言はく、『初禪の住處
 は一四天下の如く、二禪の住處は一千界の如く、三禪の住處は二千界の如く、四禪の住處

は三千界の如し」と。復一説有り、「初禪の住處は一千界の如く、二禪の住處は二千界の如く、三禪の住處は三千界の如く、四禪の住處は無量無邊なり」と。斯不同を以ての故に、分つて四と爲す。若し法に隨つて別たば、亦五を分つことを得。謂ゆる、覺、觀、内淨、安慧、不苦不樂なり。地別の不同にも、亦六を分つことを得。謂はく、未來、中間、根本の四禪なり。心數の不同にも、亦九を分つことを得。初禪の五支を、即ち五數と爲す。覺は是れ覺數、觀は是れ觀數、喜は是れ受數、樂は是れ持數、一心は定數なり。第二禪の中、一の内淨を加へて、前に通じて六と爲す。此内淨の支は、「阿毘曇」に依らば、是れ其信數なり。下の覺觀は動亂して多過ありと信じ、二禪の法は寂靜安穩なりと信ず。「大智論」の中にも、亦説いて信と爲す。喜樂一心は初禪と同じ。第三禪の中、更に捨、念、安慧の三數を加へて、前に通じて九と爲す。捨とは、是れ其善大地の中の捨數なり。念と安慧とは、是れ通地の中の念慧の兩數なり。樂は前の喜と同じく、是れ受數なり。一心は前の一心の支と同じきが故に、別して論せず。第四禪の中の捨念清淨は、三禪の中の捨念の支と同じく、不苦不樂は、前の喜と同じく、一心の支は、前の一心に同じ。是が爲に説かず。行名の不同は、離分して十と爲す。初禪の五支を、即ち以て五と爲し、内淨を六と爲し、捨念安慧を、前に通じて九と爲す。三禪の中の樂は、心數分別は前の喜と同じく、行名分別は前の樂と同じ、不苦不樂を、前に通じて十と説く。此不苦樂は、心數分別は前の喜支と同じく、是れ受數なり。故に別して論せず。行名分別は前の喜樂に異なり。

是を以て別して説く。第四禪の中の捨念一心は、名上に異らざるが故に、別して説かず。行義の不同に、十一を離分す。「毘婆沙」に説くが如し。前の十が中に就いて、樂を分つて二と作す。故に十一有り。向が故に分つといはば、初二禪の樂は是れ其猗樂、三禪の中の樂は是れ其受樂なり。所以に之を分つ。若し「地論」に依らば、滅障等の別には、則ち十六有り。初禪に四有り。一には滅障、謂はく、欲惡を滅す。二には對治、謂ゆる、覺觀なり。三には利益、謂ゆる、喜樂なり。四には彼二、三昧に依止す。謂ゆる、一心なり。初禪既に然なり。餘の三類して爾なり。故に十六有り。支別の不同を、分つて十八と爲す。前の行名十種の中に就いて、覺、觀、內淨、安慧、不苦不樂は、當分に一を守る。即ち以て五と爲す。喜及び捨念を、各分つて二と爲す。前に通じて十一なり。喜を二に分つとは、謂ゆる、初禪、二禪の中の喜なり。捨念を分つとは、謂ゆる、三禪、四禪の捨念なり。樂を分つて三と爲す。前に通じて十四なり。初二三禪は、並に皆樂有り。故に三種を分つ。一心に四を分つが故に、十八有り。四禪地の中に各一心有るが故に、四種を分つ。實を以て具に論すれば、心法の不同に、二十三有り。謂はく、十通大地の想欲、觸、慧、念、思、解脫、憶、定及び受と、十善大地の、謂ゆる、無貪、無瞋、慚、愧、信、猗、不放逸、不害、精進、捨とに、覺觀心王を加へて、二十三と爲す。地別は具に論すれば、八十六有り。初禪地の中に三十三有り。後の三禪の中に、各二十一あり。其覺觀を除く。聞合是の如し。

【二】以下四禪を明す中第三に支因の同異先後體具多義別を明す中、少廢立を明す中、因の同異、一に支

第三門の中、義別に四有り。一には支因の同異、二には支因の先後、三には定の體具にして、四には支因の多少の廢立を明す。同異と言ふは、『毘曇』の如きに依らば、初禪の五支は體性各異なり。乃至四禪の支別も亦然なり。若し『成實』に依つて、始終通じて論ずれば、皆心に即して心外に數無し。其行相に隨はば、同異無きに非ず。初禪の中の覺觀の如き、體は同なり。前後を異と爲す。彼に説かく、「羸心の初思を覺と名け、細心の後思、之を説いて觀と爲す。而も體は是れ一なり」と。初二禪の中、喜樂は體同なり。故に彼論に言はく、「彼喜初より來、身に在るを樂と名け、後時を喜と名く」と。彼は、「初禪、二禪の中の樂も、亦是れ受樂なるが故に、喜と一なり」と説く。二禪の内淨の一心と同なり。故に彼論に言はく、「内淨支とは、即ち二禪の體なり」と。三禪の安慧は念體と同なり。故に彼論に言はく、「三禪の安慧と念と同じきが故に、後分の禪の中には、安慧を立てず」と。無漏の三禪を有漏の禪に望めて、説いて後分と爲す。又三禪の中の捨は樂と同なり。故に彼論に言はく、「我捨の外に別に更に樂有り」と説かず。即ち捨を樂と説く」と。第四禪の中は、四支各別なり。大乘法の中には、心識に三有り。一には是れ事識、二には是れ妄識、三には是れ眞識なり。彼事識の中、心は數と異なり。中に於て禪を説かば、支因各別なり。妄識の中には、義別に六重あり。馬鳴の説くが如し。根本の四重は心數に別無し。中に於て禪を説かば、支因は體同なり。末後の兩重は、心と數と異なり。中に於て禪を説かば、支因各別なり。眞識の中には、心數に別無し。中に於て禪を説かば、支因の體一な

【先後と等】以下
一に支因の先後を
明す。

り。此一門、先後と言ふは、『毘曇』の如きに依らば、初禪の五支は體性同時なり。用に先後在り。乃至四禪も類して亦同じく然なり。若し『成實』に依らば、初禪の五支は定んで先後在り、一時なることを得ず。彼は心數は同時ならずと説くが故に。同時ならざるが故に、前の四滅し已つて、方に一心を得。問うて曰はく、『若し前の四滅し已つて、方に一心を得と言はば、是れ則ち初禪は五支成ずるに非ず。又經の中に説かく、『初禪地の中に、五支俱に有り』と。云何ぞ先後あらん。又一心の時若し覺觀無くば、二禪と何の別かある。』『彼成實論』二禪品の中に、此義を釋通す。向に初禪は五成ずるに非ずと言ふは、我五支盡く是れ初禪なりと説かず。但初禪に近い覺觀等有るが故に、五支其初禪を成ずと説く。經に初禪は五支俱なりと言ふは、小く相違すと雖も、亦名けて俱と爲す。弟子と師と俱なりと言ふが如し。少く前後ありと雖も、亦俱と名くるなり。二禪と何の別有りやと云ふは、初禪は亂に近し。定未だ深靜ならず。出入に皆覺觀の心有り。二禪は爾らず。出入に皆無し。是故に不同なり。』問うて曰はく、『初禪は覺觀に近きが故に、説いて支と爲さば、亦五欲にも近し。何が故に五欲を説いて、支と爲さざる。』論に言はく、『五欲は背くが故に、名けて近と爲さず。又復五欲は不住を因と爲す。故に説いて近とせず』と。問うて曰はく、『若し一心に至る時、已に喜樂無しと言はば、喜樂は云何が二禪に至ることを得る。』釋して言はく、『彼宗は心法並せず。故に一心の邊に其喜樂無し。斷無に非ざるが故に、二禪の支に至る。初禪既に然なり。餘禪類して爾なり。彼論は偏に用相先後に執す。故に一

【龍樹の等】 大智
論第十七。

【體具と等】 次三
に體具を明す。

時に違す。大乘の所説は「毘曇」と同じ。故に龍樹の言はく、「譬へば晝日には衆星現せざれども、衆星無きに非ざるが如し。心法も是の如し。時に隨つて名を受く。諸數無きに非ず」と。此二門。體具と言ふは、「毘曇」に説くが如し。彼初禪の五支の中に就いて、一心支とは、是れ禪、是れ支なり。是れ禪と言ふは、是れ禪の體なり。是れ支と言ふは、是れ支の別なり。餘の四は是れ支にして、是れ禪に非ず。是れ其支の別にして、禪の體に非ざるなり。問うて曰はく、「此五は何に望めて支と説くや。」釋して言はく、「總じて初禪の位に望むるが故に、説いて支と爲す。一切の經論悉く此説に同じ。唯「瓔珞經」に、第六默然の心有つて、以て禪の體と爲すと説き、五支を因と爲す。何が故に不同なる。」當處に彼經には、凡聖通じて説くべきが故に、此論を爲すなり。前の五は是れ其世俗禪の心にして、之を説いて因と爲す。第六は是れ其聖默然の心にして、説いて定體と爲す。「成實」は云何。「一論に定判無く、人釋左右なり。有人釋して言はく、「瓔珞」と同じ。亦第六の默然を用て、體と爲す。一心等を以て、名けて支と爲す。故に是れ因にして體に非ず。若し「瓔珞」に依らば、凡聖通じて論ず。理も亦傷くること無し。若し當に直世俗禪の中に就いて、第六の默然を用て體と爲すと言はば、是義然らず。云何が非なるを知る。」彼論の中に、三昧の義を解して、心一緣に住するを、三昧の相と言ひ、一心支を解して、覺觀喜を離して一緣の中に住す、是を名けて禪と爲すと言ふが如し。三昧を解すると、其義相似せり。若し一心の外に、別に第六の默然を立てて體と爲さば、則ち三昧の外にも亦應に

【次に等】以下四に支因の多少廢立を明す。釋に二義一に障に對して辨釋す。

別に三味の體を立つべし。而して三味の中、一縁に住する外に、更に三味の體を立つべからず。禪の中も亦爾なり。一縁に住する外に、何ぞ更に默然を立てて體と爲すと爲ん。若し經の中に一心等を説いて禪支と爲すが故に、更に體を立つと言はば、是れ則ち經の中に七覺支を説くに、應に七覺の外に、別に覺の體を立つべし。又復經の中に八道分を説くに、應に八道の外に、別に道體を立つべし。彼既に別に無し。此も亦應に然るべし。何んが更に立つことを得ん。問うて曰はく、『若し一心を用て體と爲さば、何が故に支と名く。釋して言はく、『此れ初禪の總位に望めて支と説く。何ぞ妨げん。見位に望めて八正を分と名け、修道の位に望めて、七覺を支と名くるが如し。此も亦彼に同じ。中に於て別分するに、前の支は是れ支、後の一は是れ體なり。亦八正の正見は是れ體、餘は是れ因なるが如し。』問うて曰はく、『若し爾らば、則ち『毘曇』に同じ。云何が別に得ん。釋して言はく、『三成實』は但『毘曇』の五支同時なれども、一心に非ざるにあらざるを、以て禪の體と爲すに非ず。明かに知んぬ、共に用ふることを。初禪の五支は、體具既に然なり。餘禪類して爾なり。此三門次に、支因多少の廢立を明す。初禪、三禪は齊く五支を立て、二禪、四禪は同じく四支を立て。何が故に是の如くなる。釋に兩義有り。一には障に對して辨釋す。初禪、二禪は、同じく外亂を治し、三禪、四禪は、齊く内亂を治す。外亂に二有り。一には欲惡不善、二には初禪の中の三識の身なり。初禪に外亂を對治するの初なれば、多く功力を用ふ。故に五支を立て。二禪に外亂を對治するの終なれば、功を用ふること微少なり。

【二には等】次に地法について。一に初禪。

【第二禪の等】二に二禪。

【第三禪の等】次に三禪。

故に四支を立つ。内亂に二有り。一には喜、二には樂なり。三禪は内亂を對治する中の初
なれば、多く功力を用ふ。故に五支を立つ。四禪は内亂を對治する中の終なり。故に四支
を立つ。二には地法應に爾るべし。初禪の中の如くんば、正く五を立つることを得、餘有
ることを得ず。彼は欲惡に背く。要す覺觀を須つて、以て對治を爲すが故に、覺觀有り。
所離有るを慶ぶが故に、喜樂有り。一心は定體にして、理必ず須らく立つべし。何が故に
其内淨支無きとは、彼には覺觀を治し、此には覺觀有るが故に、内淨無し。又此地の中に
は、三識身有り。熱濁泥には面像現ぜざるが如し。故に内淨無し。何が故に彼捨、念、安
慧無き。一彼と喜とは違す。此地には喜有るが故に、捨等無し。又一雜心に云はく、初
二禪の中の捨樂變動と捨とは相違す。故に捨支無し。一何が故に不苦不樂を立せざる。一
一彼は是れ受數なり。初禪の喜支も、亦是れ受數なり。兩受並せざるが故に、闕して立せ
ず。第二禪の中には、正く四を立つることを得。餘有ることを得ず。是義云何。一彼は覺
觀及び初禪地の三識身を治するが故に、須らく内淨を立すべし。所得有るを慶ぶが故に、
喜樂を立す。一心は定體にして、理須らく之を立すべし。何が故に覺觀を立して、支と爲
さざる。一此内淨は能く彼を治するを以ての故に。一何が故に捨、念、安慧を立せざる。一
一此は前に釋するが如し。喜と違するが故に。何が故に不苦不樂を立せざる。一亦前に釋
するが如し。此喜受と並することを得ざるが故に。第三禪の中には、正く五を立つること
を得、餘有ることを得ず。喜過を治するが爲の故に、捨、念、安慧の三支を立す。樂は是

【第四禪の等】次
に四禪。

れ利益にして、宜く立せざるべきこと無し。一心は定體にして、理以て須らく存すべし。
 『何が故に覺觀を立して、支と爲さざる。』『前に已に捨するが故に。』『何が故に内淨を立して、支と爲さざる。』『内淨は是れ其覺觀の對治なり。覺觀久く無し。復之を須ひず。人の病差ゆれば、復藥を須ひざるが如し。』『何が故に不苦不樂を立せざる。』『彼は是れ受數なり。此樂受と並ずることを得ざるが故に。第四禪の中に、正く四有ることを得、餘有ることを得ず。樂過を除かんが爲の故に、捨、念、不苦不樂を立す。是は此れ利益なり。理然も須らく立つべし。一心は定體なり。義在らざること無し。』『何が故に其覺觀、内淨無き。』『義は前の釋に同じ。』『何が故に喜無き。』『前に已に捨するが故に。』『何が故に安慧支を立せざるとは、若し『毘曇』に依らば、第四禪の中の不苦不樂は、無明に順ず。品安慧は性是れ明なり。是二相違す。是が爲に立せず。又三禪の中には、爲に二過を防ぐ。一には他地の喜、二には自地の樂なり。故に安慧を立す。此地には但他地の樂過を除く。是が爲に立せず。若し『成實』に依らば、四禪の安慧は念の中に攝入す。故に別に立せず。故に彼論に説く、『三禪の後分には、尙安慧無し。況んや、此四禪をや』と。『何が故に樂無き。』『此捨受と並ずることを得ざるが故に。』

【三】次に四禪を
解する中、第四に
道品に約對して其
通別を辨ず。今隱
顯に隨つて通別に
三あり、一に禪支
にして道品に非ず

第四門の中に、道品に約對して、其通別を辨ず。禪中の行體に、其十一有り。謂ゆる、
 覺、觀、喜、猗、一心、内淨、捨、念、安慧、受樂及び不苦不樂なり。道品の中の行體に
 十有り。謂はく、信、進、念、定、慧、思、戒、猗、喜、捨なり。彼此相望めて、理實に

【二には等】次に
道品にして禪支に
非ず。

【三には等】次に
亦禪亦道。

は齊く通ず。中に於て隠顯に、通別無きに非ず。通別に三有り。一には是れ禪支にして、
道品に非ず。謂はく、觀と樂と及び不苦不樂なり。二何が故に觀無き。三彼道の中には、慧
は始終に通じ、觀を假るの義徴なるを以ての所以に、説かず。何が故に樂無き。四樂の性
は縁に著して、道に於て順ぜず。是が爲に論ぜず。若し爾らば、道の中には、應に喜を立
せざるべし。喜は忻悅の行にして、憂の重過を治す。道を發す義強し。所以に之を立す。

一何が故に其不苦不樂無き。二不苦不樂は無明の因に順じ、相と道と違するを以てなり。
是が爲に説かず。二には是れ道品にして、禪支に非ず。謂はく、戒、精進なり。一何が故に
戒無き。一禪とは、名けて思惟修習と爲す。戒は心法に非ず。思惟の義無し。是が爲に説
かず。又復道の中、八正を總と名く。須く戒を假と爲すべし。禪は是の如くならざるが
故に、廢して論ぜず。一何が故に禪の中には、精進を説かざる。二精進は發動す。定に於て
順ぜざるが故に、隠して説かず。一若し爾らば、禪の中には、應に覺を立すべからず。一釋
して言はく、一覺とは、境に於て密に思し、能く龜過を制す。定を發する功強し。是以に
之を立す。三には亦は禪亦は道なり。謂はく、餘法なり。中に於て、喜捨及異び念慧は、
彼此名同じ。餘は名異なり。道の中の思とは、禪の中には覺と名く。思は是れ覺の義なり。
道の中の持とは、禪に名けて樂と爲す。持は龜苦を息むるが故に、説いて樂と爲す。道の
中の信とは、禪の内淨と名く。信は疑濁を離するが故に、内淨と名く。道の中の定とは、
禪に一心と名く。定は異縁無きが故に、一心と曰ふ。歷禪は別に説く。義の在ること知る

【三】四禪釋の中
第五に修成の相を
明す。先づ初禪。

べし。

【二禪に等】 次に
二禪。
【三禪に等】 次に
三禪。
【四禪に等】 次に
四禪。

【一】釋四禪の中
第六に文に依つて義
を釋す。一に初禪
【經】大智論第四
十四。

第五門の中に、修成の相を明す。龍樹の説くが如し。初禪に趣向するに、五法を遠離し、五法を斷除し、五法を修習し、五法を成就して、初禪地に入る。五法を遠ざくとは、謂はく、色、聲、香、味、觸等の五欲の法を離するなり。五法を斷ずとは、謂はく、貪、欲、瞋、睡眠、掉悔、疑等の五蓋の法を斷するなり。五法を修すとは、謂はく、欲、念、精進、功慧、及與び一心なり。上、靜を怖永する、之を名けて欲と爲す。下地の中の苦塵及び障を念じ、上地の中の止妙及び出を念するが故に、名けて念と爲す。定心を觀習するを、名けて精進と爲し、下過を分別し、上の勝益を知るを、名けて巧慧と爲し、意を守り縁を一にするを、稱して且心と曰ふ。五法を成すとは、謂はく、覺、觀、喜、樂、一心なり。廣くは後に釋するが如し。二禪に趣向するに、二法を斷除す。謂はく、覺、觀なり。五法を修習す。謂はく、欲念等なり。四法を成就す。謂はく、內淨、喜、樂、一心なり。亦後に解するが如し。三禪に趣向するに、一喜を斷除し、五法を修習す。謂はく、欲念等なり。五法を成就す。謂はく、捨、念、安慧、樂及び一心なり。四禪に趣向するに、一樂を斷除し、五法を修習す。謂はく、欲念等なり。定を求め因を要するが故に、通じて之を修す。四法を成就す。謂はく、捨念、清淨、不苦不樂、一心なり。

第六門の中に、文に依つて義を釋す。經に言はく、「初禪に欲惡不善の法を離す。有覺有觀、離生喜樂は、初禪の行に入る」と。欲惡不善を離するは、是れ滅障なり。釋に四義有

【經に等】次に第二禪に就いて。

り。一には欲界の惡不善の法を離するを、離欲惡と名く。二には『大智論』に依らば、五欲を遠離するを、名けて離欲と爲す。此れ猶是前の遠離五法なり。五蓋を斷除するを、離惡不善と名く。此れ猶是前の斷除五法なり。三には『毘曇』に依らば、五欲を遠離するを、名けて離欲と爲し、十惡を斷除するを、名けて離惡と爲し、五蓋を斷除するを、離不善と名く。四には『成實』に依らば、貪欲の心を斷するを、名けて離欲と爲し、殺、盜等の十不善業を離するを、離不善と名く。有覺有觀は、是れ其對治なり。麁思を覺と名け、細思を觀と名く。譬へば鈴を振るが如し。麁聲を覺に喩へ、細聲を觀に喩ふ。問うて曰はく、『毘曇』には、心所の法起ること同時に在りと説く。今何が故に麁聲を覺に喩へ、細聲を觀に喩ふと言ふ。』『龍樹釋して言はく、「諸の心心法の體は同時なりと雖も、時に隨つて名を受く。譬へば晝日に衆星現ぜざれども、衆星無きに非ず。心法も是の如し。故に説いて麁聲を覺に喩へ、細聲を觀に喩ふと言ふことを得」と。』離生喜樂は、是れ其利益なり。欲惡を離するを慶ぶ所以に、喜を生ず。此も亦得を慶ぶ離を慶ぶ心多きが故に、偏に之を説く。惡を離するを以ての故に、身心尙適なる、之を日けて樂と爲す。入初禪行は、是れ初禪の體なり。此れ猶經中の一心支なり。經に言はく、「二禪に覺觀を滅す。内清淨心一處、無覺無觀、定生喜樂は、二禪行に入る」と。覺觀を滅するとは、是れ滅障なり。覺觀は前に於ては是れ對治なりと雖も、後に望むれば能障なり。故に須らく之を滅すべし。内淨一處は、是れ其對治なり。内淨は治體にして、前の覺觀及び初禪地の三識の身

【經に等】次に第三禪に就いて。

を離し、二禪の法に於て證信清淨なり。故に内淨と曰ふ。心一處とは、是れ對治の相なり。釋に兩義有り。一には修に據つて以て釋す。内淨は常に續す。餘間の隔を離るるが故に、一處と言ふ。故に『地論』に言はく、「無漏を修して斷ぜざるを、心一處と名く」と。彼は菩薩所修の内淨を説くが故に、無漏と言ふ。若し餘人に就かば、直爾に内淨相續して斷ぜざるを、心一處と名く。二には境に約して、以て釋す。心は一境を緣するが故に、一處と言ふ。故に『地論』に言はく、「一境界を行するを、心一處と名く」と。『何者か一境なる。』彼「舍利昆曇」の中に釋するが如し。欲界地の中の心行に六處あり。謂ゆる、六塵なり。初禪に已に鼻舌二識、心行の四處を離し、二禪已上に復眼耳及び身識を離するが故に、心一處と名く。謂ゆる、一の法塵の境を行す。無覺無觀は、是れ其治能なり。謂はく、内淨心は能く覺爲く觀無し。定生喜樂は、是れ其利益なり。生喜を得るを慶ぶを、定生喜と名く。此れ亦離を慶び得るを慶ぶ心多きが故に、偏に之を言ふ。樂は前の釋に同じ。入二禪行は、是れ其禪の體一心支なり。經に言はく、「三禪に喜を離す。捨、憶、念、安慧、身受樂は、諸の賢聖能く説き、能く捨す。受樂を念じて三禪行に入る」と。喜を離するは、滅障なり。喜は禪地に於ては、是れ利益なりと雖も、後に望むれば妨亂なるが故に、須らく之を滅すべし。二禪は鹿なるが故に、但前の治を滅し、此禪は轉細なるが故に、前の益を滅す。捨念安慧は、是れ其對治なり。前の喜過を捨するが故に、名けて捨と爲し、受の捨に簡異するが故に、行捨と言ひ、前の喜過を念するが故に、名けて念と爲し、念と

【經に等】次に第
四禪。大智論第十
七。

憶と俱なるが故に、憶念と言ひ、前の喜過を知るが故に、名けて慧と爲し、定に隨ふの慧なるが故に、安慧と言ふ。身受樂等は、是れ其利益なり。納法、適を生ずるが故に、受樂と名け、此樂、意に在つて、快く身心に遍じ、前の心の喜を簡ぶが故に、身受と説く。此樂深重にして、唯諸の賢聖能く其過を説き、能く捨離するに堪へたり。餘は多く能くせざるが故に、賢聖能く説き、能く捨すと説く。此を擧げて樂の深を顯さんと爲るなり。念受樂等は、是れ其神體なり。自地の中の受樂の過を念じて、一心に趣入するを、念受樂入三禪行と名く。經に言はく、「四禪に苦を斷じ、樂を斷じて、先づ憂苦を滅す。不苦不樂捨念清淨は、四禪行に入る」と。苦を斷じ、樂を斷じて、先づ憂苦を滅するは、是れ滅障なり。前に二禪の中の所滅の苦は、此地にも亦無きが故に、斷苦と言ひ、三禪の樂は此地に親く除くが故に、斷樂と言ふ。問うて曰はく、「苦とは是れ二禪に斷ず。此に親く滅するに非ず。何が故に之を説くや。」『成實』に釋して言はく、「此禪は是れ不動禪にして、苦樂變絶することを彰さんが爲の所以に、之を擧ぐ。亦即ち三禪の樂を名けて、之を以て苦と爲すべし。彼樂を斷する時、即ち斷苦と名く。是故に説いて斷苦斷樂と言ふ」と。問うて曰はく、「彼樂を何が故に苦と名くるぞ。」『龍樹釋』して言はく、「鹿心に望むれば、彼を説いて樂と爲し、細心に望むれば、即ち大苦と爲す。人の指手を木を打つ等の事を、寤る者は樂と爲し、樂睡眠の者は用て大苦と爲すが如し。此も亦是の如し。憂受は先に初禪の中に在つて滅し、喜受は先に三禪の中に在つて滅す。故に先滅と言ふ」と。『若し爾ら

【二五】別して八禪を解す中第二門に別して三門あり、第一に空處定。

ば、苦は亦前地に滅す。何んが先と説かざる。『釋して言はく、『應に齊しかるべし。但憂と喜とは並に前地に滅するが故に、先づ滅することを彰す。苦は先に滅すと雖も、苦に對するの樂は、此地に始めて離す。若し當に説いて先に苦樂を滅すと云ふべくんば、樂も亦先なりと謂はん。是以に彰さず。』問うて曰はく、『憂喜既に前地に滅す。何が故に此く説く。』『成實』に亦言はく、『此禪は是れ不動禪にして、四受を免絶することを彰さんが爲の所以に、之を説く』と。不苦不樂は、是れ其利益なり。』問うて曰はく、『餘禪は皆先に治を彰す。何が故に此禪先に利益を明すや。』『前の便に乗するが故に、前の苦樂に對して、其不苦不樂を彰す。義便なるが故に、先に之を説く。此益は是れ其中容の受にして、前の苦樂を捨す。是故に名けて不苦不樂と爲す。』若し爾らば、此受も亦憂喜を捨す。何が故に不憂不喜と名けざる。』『釋に三義有り。一には苦樂は前に在るが故に、先に之に對して不苦樂と名く。二には苦に對するの樂は、此地に親く斷ず。是故に説いて不苦不樂と爲す。憂喜は並に此地に親く斷ずるに非ざるが故に、之に對せず。三には通を簡んで別を異にす。五受分別すれば、憂喜は苦樂の外に在り。三受分別すれば、憂と喜とは通じて苦樂と名く。苦樂通ずるが故に、今此に之に對して不苦樂と名く。捨念清淨は、是れ其對治なり。前の樂過を捨し、前の樂過を念するが故に、捨念と言ふ。前地に喜を治し、今復樂を治す。過を治すること畢竟するが故に、清淨と言ふ。入四禪行は、是れ四禪の體なり。』

【二五】四空を解する中に、別して三門有り。一には其相を辨じ、二には空識、一切入空識、二

解脫空識、二種定空識一切處の差別の相を明し、三には文に隨つて義を釋す。第一に、相を辨す。空處定とは、行者深く四禪地の中の色相惱礙を見るが故に、須らく之を修すべし。『修法は云何。』略して四種有り。一には方便道、二には無礙道、三には解脫道、四には是れ定體なり。方便道とは、其二種有り。一には遠方便、將に空定を修せんとす。先に住心を學し、住心を得已つて空想を學作す。始めて門戸井穴の中の空を緣じ、還り來つて心に住し、住し已つて復觀す。是の如く往返して、心をして空を見ること了了分明ならしめ、以て漸く之を廣くし、還り來つて心に住し、心に住し已つて復廣し。是の如く展轉して一切界を見るに、唯是れ一空にして、更に色相無し。二には近方便、亦住心に依つて、下法を學觀して苦塵障と爲し、上法を觀察して上妙出と爲す。還り來つて心に住し、住し已つて復觀す。是の如く往返して、極めて淳熟せしむ。此二は皆是れ想心の觀行にして、未だ實に法を見ざるが故に、方便と名く。無礙道とは、前の方便動修の力に由るが故に、住心の中に入り、智慧を發生して、實の如く下を見る。或は苦、或は羸、或は障の三が中、一に趣きて三を具することを須ひす。此を以て正しく四禪の結を斷ずるが故に、無礙と名く。解脫道とは、無礙心の後即ち上地を見る。或は止、或は妙、或は出の三が中、一に趣きて三を具することを須ひす。此れ累外に起るが故に、解脫と名く。是の如く九遍下を緣するを、無礙と爲し、九遍上を緣するを、解脫と爲す。定體と言ふは、前の三は皆是れ空處の方便なり。彼第九の解脫道の邊に於て、空處の法を得るを、名けて定體と爲す。

【識處定とは等】次に識處定について明す。

【無所有定とは等】次に無所有定に就いて。

【悲想定を等】次に悲想定を等について。

【二六】四空定を釋する中、第二に其空識一切入等の差別の相を明す。

爾時得ると雖も、而も未だ現ぜず、更に方便を作し、心を斂し趣入して、方に現在前す。識處定とは、前の空定外縁の苦を思ふるが故に、須らく之を修すべし。修に亦四有り。一には方便道、二には無礙道、三には解脫道、四には是れ定體なり。方便道の中にも亦遠近有り。遠方便とは、先に住心を得、此住心に依つて外空の縁を捨し、内の心識を緣じ、還つて住心に入り、住し已つて復緣す。是の如く往返して、心識に於て照見分明ならしめ、以て漸く之を廣くし、無邊の識を緣じて皆明了ならしむ。【何者か無邊なる。】『成實』に説くが如し。空無邊の故に、識も亦無邊なり。此れ乃ち前の空處定の中の無邊空の識を用て、境界と爲すなり。餘は前に釋するが如し。無所有定とは、前の識處廣縁の苦を思ふるが故に、復之を修す。修に亦四有り。名字は前に同じ。方便道の中にも亦遠近あり。遠方便とは、先に住心を得、彼住心に依つて唯一識を緣じ、還つて住心に入り、住し已つて復緣す。是の如く往返して、極めて明了ならしむるが故に、復之を捨す。非想定を修するにも亦四種有り。名字は前に同じ。方便道の中にも亦遠近有り。遠方便とは、先に其心に住し、次に住心に依つて前の所縁を捨し、無想の觀を作して、還つて住心に入り、住し已つて復觀す。是の如く往返して、極めて純熟ならしむ。近方便とは、彼住心に依つて、無所有を觀じて苦礙障と爲し、非想地を觀じて止妙出と作す。是の如く往返して、極めて純熟ならしむ。餘は前に釋するが如し。

第二門の中に、其空識一切入等の差別の相を明す。十一切入の中の空識一切入は、唯空

【七】 四空定を釋する中、第三に文に隨つて辨ず。一に空處定。【經】 大智論第十

識の二方便道を取る、能く廣く緣するが故に。餘は皆取らず。八解脫の中の空觀解脫は、唯空識の二解脫道及び彼定體を取り、餘は皆取らず。『何が故に是の如くなる。』『彼方便道は、未だ下過を離れざるが故に、解脫に非ず。無礙は下地の過を斷ずと雖も、未だ累を出づること能はず。亦解脫に非ず。又『雜心』に云はく、『無礙は下緣す。故に背捨に非ず。背捨に非ざるが故に、解脫と名けず』と。問うて曰はく、『當に一切空識の二解脫道及び彼定體、悉く是れ解脫とや爲ん。亦非なる者有りや。』釋に通別有り。通じては則ち皆是なり。中に於て別して分たば、聖の得る者は是なり、凡の得る者は非なり。故に龍樹の云はく、『空處乃至非想解脫は、四空定の如し。言ふ所の異とは、聖人の得る者を、名けて解脫と爲し、凡夫の得る者を、解脫と名けず。退轉有るが故に』と。解脫是の如し。八禪定の中の空識の二定は、義に通別有り。通じて之を論すれば、無礙解脫及び彼定體を、悉く名けて定と爲す。未來禪も亦名けて禪と爲すが如し。方便道とは、未だ上法を得ず。所以に取らず。別しては則ち唯空識の定體を取つて、之を以て定と爲す。方便、無礙及び解脫道は、是れ定の方便にして、正しき定體に非ず。所以に取らず。若し空識の二一切處を論ずれば、一切皆是なり。故に『成實』に云はく、『若は定不定、若は垢、若は淨、若は因、若は果、有漏無漏は、皆是れ空識の一切處なり』と。

第三門の中に、文に隨つて辨釋す。空處定とは、經に言はく、『一切の色想を過ぐれば、一切の有對の想を滅し、別異の想を念ぜず、色等の境界を分別せず。無邊の虚空を知れば、

即ち無邊虛空行に入る」と。色を過ぎ、乃至別異を念ぜざるは、是れ其減障なり。綠色の
 想を減す。問うて曰はく、「何が故に色體を減せずして、唯色想を減する。」釋して言はく、
 「心患は以て修斷すべきが故に、色想を減す。色體は離し難し。要す空處に生じて、方に
 能く之を捨す。故に此に論せず。」問うて曰はく、「何が故に受及び餘の心法を減すと言は
 ず、偏に想を減すと言ふや。」釋して言はく、「想とは、取相を義と爲す。彼色相を取るは、
 專ら是れ想過なり。故に想を減すと言ふ。想を減すと雖も、餘の心心法は、通じて亦宜に
 隨ふ。又四禪の中に、多く諸受を減す。四空定の中に、多く諸想を減す。故に偏に之を説
 く。想所縁の色は、離合不定なり。總じては、唯一色なり。或は分つて二と爲す。一には
 可見色、謂はく、眼の所行なり。二には不可見色、謂はく、耳鼻等の所行の色なり。或は
 分つて三と爲す。一には可見有對、謂はく、眼の所行なり。二には不可見有對色、謂はく、
 耳鼻舌身の所行の色なり。此等は皆是れ有對なり。有礙は色根の所對なり。故に有對と言
 ふ。三には不可見無對、謂はく、意の所行なり。無作の色は對礙の色根の所對と爲らず。
 故に無對と言ふ。或は分つて六と爲す。謂はく、六塵の色なり。眼の所行の者は色體を色
 と名け、餘根の所行は、色數を色と名く。或は十一を分つ。謂はく、五根、五塵及び無作
 色なり。細分すれば無量なり。今は一門に據つて、且く三種を論じ、之に對して以て三種
 の想を減することを明す。過色想とは、可見有對色の想減するなり。故に「地論」に言はく、
 「謂ゆる、眼識和合の想減す」と。減有對とは、不可見有對色の想減するなり。故に「地論」

【義決定とは等】
次に「義決定」に就いて。

に言はく、「謂はく、耳鼻舌身識和合の想滅す」と。不念別異想とは、不可見無對色の想滅するなり。故に「地論」に云はく、「謂ゆる、意識和合の想滅す」と。良に以れば、意識は一切の法を緣す。中に於て別分して、色を緣する邊滅す。故に別異と言ふ。初句は過と言ひ、第二は滅と言ひ、第三は不念綺して互に言ふのみ。問うて曰はく、「鼻舌二識の身は、初禪の中に滅す。眼耳身等の三識の身は、二禪の中に滅す。何が故に此に至つて、方に眼識乃至身識和合の想滅すと云ふや。」釋して曰はく、「對治に其四種有り。一には壞對治、謂はく、方便道及び無礙道は、下法の苦無常等を觀察して、破すべく壞すべし。二には斷對治、謂はく、無礙道は正く下過を斷ず。三には持對治、解脫を首と爲し、及び後の一切の無礙解脫は、前の無爲を持して、之をして失はざらしむ。四には遠分對治、解脫を首と爲し、及び後の一切の無礙解脫は、遠く能く前の所斷の諸過をして、更に重ねて起らざらしむ。今空處定を彼五識相應の想に望めて、持對治、遠分對治有るが故に、過滅すと説く。此義一切の諸論に大に同じ。唯「成實」の中、獨り異釋を爲す。彼に言はく、「過色想とは、彼色香味觸の想を過ぐ。滅有對とは、還つて色香味觸の想を滅す。彼對處なるを以ての故に、須らく之を滅すべし。不念別異想と道言ふは、聲を緣する想滅す。聲は衆緣より擊發して生ずるが故に、別異と曰ふ。彼宗は無作の色を立せざるが故に、此解釋を爲す。論經の意を考ふるに、當に前に解するが如くなるべし。色等を分別せざるは、是れ其對治なり。無邊の虛空を知るは、是れ其利益なり。無邊空行に入るは、是れ其定體なり。識處

【無所有定とは等】
次に無所有處定についで。

【非想定とは等】
次に非想非非想處定についで。

定とは、經に言はく、「無邊虛空の想を過ぎ、外の念の曇分別の過患を見、無邊識處の安穩を知り、無邊の識處行に入る」と。無邊空の想を過ぐるは、是れ其減障なり。論に言はく、「行者は深く色を厭ふが故に、空を以て治と爲す。色患既に除く。空治も亦捨す。人の河を度れば、並に船機捨をするが如く、亦賊を出づれば、之を捨てて遠く去るが如し。故に空想を減す」と。外の念の曇過を見るは、是れ其對治なり。識處の安穩を知るは、是れ其利益なり。無邊の識行に入るは、是れ其定體なり。無所有定とは、經に言はく、「無邊識の想を過ぎて、塵念の分別の過患を見、無所有の安穩を知れば、即ち無處有處の行に入る」と。無邊識を過ぐとは、是れ其減障なり。空無邊なるが故に、空を緣するの識も亦復無邊なり。識無邊なるが故に、苦も亦無邊なり。故に須らく之を減すべし、曇の分別の過を見れば、是れ其對治なり。無所有の安穩を知るは、是れ其利益なり。無所有に入るは、是れ其定體なり。非想定とは、經に言はく、「無所有の想を過ぎ、無所有の念分別の過患を見、非想非非想の安穩を知り、即ち非想非非想處の行に入る」と。無所有の想を過ぐとは、是れ其減障なり。念分別の過を見るは、是れ其對治なり。前の無所有は多想を捨すと雖も、猶少想有り。彼少想を見ること蠲の如く、瘡の如く、箭の如くなるが故に、復之を捨して非想を緣す。復一向に非想を過と爲すを見て、謂つて愚癡と爲し、非非想を緣す。亦但有想の過を滅むべくんば非想を緣す。聖人は理を以て、説いて有想と爲し、非非想と名く。非想の安穩を知るは、是れ其利益なり。非想の行に入るは、是れ其定體なり。

【八】次に八禪定を釋す。中第三に八禪定具を明す

上來第二に別して八禪を解す。

第三門の中に、其定具を明す。定を生ずるの因を、名けて定具と爲す。具の中の開合廣略不定なり。或は説いて四と爲す。謂はく、道品の中の四如意足なり。彼は皆定因なるが故に、定具と名く。後に當に廣く釋すべし。或は復五を論ず。上に廣く解するが如し。謂はく、欲、念、精進、巧慧、一心なり。或は説いて七と爲す。『地持』に説くが如し。一には淨戒を持し、二には根門を守り、三には食、量を知り、四には睡眠を減し、五には善人に近き、六には過を知つて犯ぜず、七には犯有れば能く悔す。彼に此七を説いて、善方便と爲す。當に知るべし、亦是れ定の具なり。或は十一を分つ。『成實』に説くが如し。一には淨戒を持し、二には善知識を得、三には根門を守り、四には飲食、量を知り、五には睡眠を減し、六には善覺を具し、七には善信解を具し、八には行者の分を具し、九には解脫處を具し、十には無障、十一には不著なり。初の戒を持すと、殺、盜等の七不善業を離る。若し復通じて論ずれば、十不善を離る。定は戒に由つて生ずるが故に、須らく戒を持すべし。第二の知識を得るとは、能く定法を以て人に授くるの者を、善知識と名く。定は師發に由つて生ずるが故に、知識を須ふ。故に經に説いて言はく、「善知識とは、得道の中に於て因縁を具足す」と。第三の根門を守るとは、眼等は是れ根なり。念慧心堅く六根を守り、塵賊をして中に於て善を壞せしめず。定は守に由つて成ずるが故に、須らく之を守るべし。『法は無量なり。何が故に唯用て念慧を守るや。』念は能く境を牽き、慧は能く分

別するが故に、用て之を守る。第四の食、量を知るとは、行者は色力、淫欲、美味の爲の故に食せず。但身を濟つて道を行ぜんが爲の故に食す。若し食過多なれば、煩惱を増長し、修定の意を妨ぐるが故に、須らく節量すべし。節幾許に至る。己が所食に於て、三分の二能く少しく善を益す。第五の睡眠を減すとは、行者自ら念す。大事未だ辨せず。事は慚に藉つて成ず。若し睡眠を樂はば、世事成じ難し。何況んや出道をやと。故に睡眠を減す。滅の法は云何。一身の無常、三惡道の苦、佛法滅せんと欲し睡眠利無しと念す。此觀心を以て、而して之を除遣す。第六の善覺を具すとは、八の惡覺を離る。謂ゆる、欲覺、瞋、憍、親里、國土、不死、族姓、輕侮なり。八種大人の覺を修習す。謂はく、少欲、知足、遠離、精進、念、定、智慧及び不戲論なり。第七の善信を具すとは、生死の法は鄙惡にして厭ふべく、泥洹は欣ぶべしと信す。第八の行者の分を具すとは、論の釋に五有り。一には信心、師の語を信受し、能く隨順して行す。二には不詔、善知識に於て、直言して曲ならず。故に論に説いて言はく、「詔曲は救ひ難く、質直は度し易し。世の病人の實に病狀を説くは、則ち治すべきこと易きが如し」と。三には少病、身力具足して能く禪定を修す。四には精進、定を求めて息まず。譬へば火を擯ること息まざれば、疾に得るが如し。五には智慧、能く有爲を厭うて、前の四行をして聖道の果を得しむ。此五を以て、名けて行者の分を具すと爲す。第九の解脱處を具すとは、論の釋に五有り。一には伽比丘等、其が爲に法を説いて、語義に達し、歡喜猗樂、心を攝して漏盡せしむ。二には首めて善く經

【一九】次第四に八
禪定難を明す。難
に輕重ある中先づ
輕難に略して十五
あること知るべし

を誦し、三には他の爲に法を説き、四には獨居して思量し、五には善く定相を取る。謂は
く、止舉作なり。五が中の初の三は是れ共聞慧、次の一は思慧、後の一は修慧なり。第十
の無障とは、謂はく、煩惱業報無きなり。已に四善輪を具するが故に、能く之無し。四輪
と言ふは、一には中國に生じ、二には善人に依り、三には自ら正願を發し、四には善根
を宿殖す。中國に生じ、善根を宿殖して能く報障を離れ、善人に依止して能く業障を離
れ、自ら正願を發して煩惱障を離る。第十一の不著とは、取著の心を離るるが故に、在
世の無礙は直に涅槃に向ふ。木の恆河に在つて、八因縁を離れて、直に大海に趣くが如
し。八縁を離るとは、一には此岸に著せず、二には彼岸に著せず、三には中流に沒せず、
四には陸地に出でず、五には人の爲に取られず、六には非人の爲に取られず、七には河瀆
に入らず、八には腐爛せざるなり。行者も亦爾なり。内の六人に於て我人を計せざるを、
此岸に著せずと名け、外の六人に於て我所を計せざるを、彼岸に著せずと名け、貪瞋癡を
離るるを、中流に沒せずと名け、慢高を起さざるを、陸地に出でずと名け、四業に近かざ
るを、人の爲に取られずと名け、戒を持し天を求めざるを、非人の爲に取られずと名け、
戒を退して家に還らざるを、河瀆に入らずと名け、重禁を犯せざるを、腐爛せずと名け、
定具是の如し。

【二〇】第四門の中に、其定難を明す。定を妨ぐるを難と名く。難に輕重有り。輕難は無量なり。
略して十五を論ず。一には多言定難、宜く默して少言すべし。二には多事定難、宜く止め

て爲さざるべし。故に「地持」に云はく、「多く遊行せず」と。三には多覺定難、宜く一縁に止むべし。四には顛倒定難、謂はく、多貪の人は慈悲觀を修し、多瞋は不淨觀を修習する等なり。宜く正に修習すべし。五には不等定難、緩急不停宜く善く之を調ふべし。六には不能善取定、相定難、謂はく、善く止擊捨の心を修せず。宜く善く之を修すべし。七には不適定難、或は内外の一切の諸觸に因つて、身をして不適ならしめ、或は貪愛の念に因つて、心をして不適ならしめ、當に自ら消息すべし。八には不樂定難、或は好師好法の處を得て、心に樂を愛せず、當に自ら呵嘖すべし。「是因縁を離れて、更に何の法に依つて、禪定を生ずることを得ん」と。又念す、「自身は性是れ苦法にして、復何れの處にか樂の稱すべきもの有るを知らん」と。九には慧覺定難、定を求めて得ざれば、便ち憂惱を生ず。當に自ら聞解すべし、「禪定の勝法大功徳ある者は、久く修して乃ち得。我は薄福の人なり。云何が始めて習し已つて禪定を得ん」と。又「禪定ある者は、得道の中に於て半を過ぎたりと爲す。若し修得し易ければ、道は勝法に非ず」と。十には怖畏定難、禪定の中に於て可畏の事を見、心に怖畏を生ず。當に念すべし、虚誑の妄心自作して、定法此に有り。應に畏を生ずべからずと。十一には異相定難、禪定の中に於て、或は佛像及び女色等を見ば、當に念すべし、心の作にして、心外に法無しと。十二には憎厭定難、禪定の中に於て不淨の相を見、憎厭過多にして飲食すること能はず。或は自殺せんと欲せば、當に更に改めて觀じて數息等を念すべし。律の中に説くが如し。十三には歡喜定難、禪定の中に於

【重難の等】次に重難を明すに成實論に依つて十種の三法を略擧するべし。

て、光明等を見て、心に歡喜を生ず。當に念すべし。「此は是れ禪定の羸相にして、勝上の法に非ず。應に喜を生ずべからず」と。又一設ひ禪を得るとも、是れ世俗の法なり。無常にして失し易し。何んが喜ぶべきに足らん」と。十四には慢高定難、禪定の中に於て、所得の法に隨つて自ら高擧せば、當に念すべし、此は是れ凡俗の羸法なり。無常にして失し易し。未だ恃むべきに足らず」と。又此法を觀じて得る者は、是れ誰ぞ。而も自ら高擧するや」と。十五には疑惑定難、法を得て識らず、好惡取捨の宜を知らずんば、當に明師に問ふべし。輕難是の如し。重難の中は、別して亦無量なり。「成實」に略して十種の三法を擧げて、以て定難と爲す。第一の三とは、謂はく、無慚愧及與び放逸なり。若し人惡を造つて内に羞恥無ければ、名けて無慚と爲し、外に恥懼無ければ、稱して無愧と曰ふ。無慚愧の故に、善を失ひ惡に隨ふを、名けて放逸と爲す。第二の三とは、謂はく、恭敬せず、與に語り難く、惡友に習ふなり。此は前に由つて生ず。放逸に由るが故に、師の誨を受けざるを、不恭敬と名け、師の言に違反するを、難與語と名け、善師長に遠ざかり惡人に親附するを、習惡友と名く。第三の三とは、謂はく、其不信、邪戒、懈怠なり。此れ前に由つて生ず。惡友に習ひ邪教を受くるに由るが故に、因果を信ぜざるを、名けて不信と爲し、其正因果を信ぜざるを以ての故に、烏雞鹿狗の戒等を受持するを、名けて邪戒と爲し、邪戒を受くるが故に、善は利無しと謂ひ、背て勤修せざるが故に、懈怠を生ず。此は「成實」の中には、第四門と爲す。然るに今は彼相生の次第に依つて、廻して第三と爲

す。第四の三とは、謂はく、善人を喜ばず、悪く正法を聞き、好んで他過を出だすなり。此れ前に由つて生ず。懈怠に由るが故に、善人を喜ばず、善人を喜ばざるが故に、眞實の行者無しと謂ひ、實の行無きが故に、悪く正法を聞き、悪く法を聞くが故に、正法を行ずるも皆邪法の如くにして、利益する所無しと謂ふ。故に好んで他過を出だす。此は『成實』の中には、是れ第三門なり。今は此れ相生の次第に依つて、廻して第四と爲す。第五の三とは、謂はく、調戲し、諸根を守らず、戒を破すなり。此れ前に由つて生ず。他過を出だすに由つて、心則ち浮動す。故に調戲を生ず。調戲を以ての故に、諸根を攝せず。根を攝せざるが故に、便ち破戒を起す。第六の三とは、謂はく、妄憶し、安慧を行ぜず、亂心するなり。此れ前に由つて生ず。破戒に由るが故に、妄に憶念を生ず。妄に憶念を生ずるが故に、安慧を行ぜず。安慧無きが故に、心則ち散亂なり。第七の三とは、謂はく、邪念、邪行、没心なり。此れ前に由つて生ず。心亂るるを以ての故に、便ち邪念を生ず。邪念を以ての故に、便ち邪道を行す。邪道を行するが故に、善法に迷没す。第八の三とは、謂はく、身見、戒取、疑なり。北れ前に由つて生ず。心善を没するが故に、便ち身見、戒取及び疑を起す。第九の三とは、謂はく、貪、瞋、癡なり。前の身見戒取及び疑に由るが故に、此三を起す。第十の三とは、謂はく、生、老、死なり。貪瞋癡に由るが故に、此三を生ず。此十種は前、後を生ずるを以ての故に、前を斷ずれば後滅す。問うて曰はく、『此等は何人か斷滅する。』『成實』に釋して言はく、「前の四種を斷ずるは、是れ在家の人淨なり。第

五を斷離するは、出家の人淨なり。第六を斷除するは、念處清淨なり。第七を斷除するは、煖等の清淨なり。第八を斷除するは、無相位の中の達分善淨なり。第九を除滅するは、是れ前の三種の沙門果淨なり。第十を除離するは、無學果淨なり」と。『八禪の義之を辨ずること麤爾り。』

【二〇】淨法聚第七十三段に八解脫の義を明すに六門の分別あり。第一に釋名辨相先づ釋名【經】大品般若經【大智論】第二十

【龍樹も等】大智論第二十一。

【相狀は等】二に相狀を辨ず。初に大智論に依る。【大智論】第十一

八解脫の義の六門分別。名を釋し相を辨ず一。體を論ず二。位に就いての分別三。處に就初に、名を釋し、相を辨ず。八解脫とは、經の中に、亦是八背捨と名くるなり。龍樹の釋するが如し。五欲を背淨し、著心を捨離するが故に、背捨と名く。又下過を背するを、亦是背捨と名く。羈縛を免絶するを、稱して解脫と曰ふ。解脫不同なれば、一門に八を説く。『八名とは是れ何ぞ。』一には内有色相觀外色、二には内無色相觀外色、三には淨色解脫、四には空處解脫、五には識處解脫、六には無所有處解脫、七には非想解脫、八には滅盡解脫なり。八が中の初の三は、色境に從つて名と爲す。中の四解脫は、論者不同なり。若し『毘曇』に依らば、體處に就いて名を彰す。彼論には、四空處定を宣説して、解脫と爲すが故に。龍樹も亦爾なり。若し『成實』に依らば、境處に就いて名を彰す。四空處を觀じて解脫を得るが故に。第八の解脫は、當體を名と爲す。滅盡の法を説いて、解脫と爲すが故に。名字是の如し。『相狀は如何。』宗別不同にして、所説各異なり。『大智論』に依らば、内有色相觀外色とは、自身を内と名け、他身を外と名く。内外の色に於て、未だ

滅せず、未だ壞せず。不淨想を以て、内外の色は悉く皆不淨なりと觀ず。是れ初の解脫なり。問うて曰はく、『是中の内外の色は、皆未だ滅壞せず。何が故に偏に之を説いて、内色を有と爲すや。』釋して言はく、『外色は初の三觀の中には、一向に未だ有を壞せず。前の三に通ずるが故に、初の中に就いて、偏に有と説かず。内色は爾らず。初には有り、後には無し。後の無を別たんが爲の故に、初の有を説く。』又問うて曰はく、『是中内外の色に於て、皆不淨を觀す。何が故に名の中には、偏に觀外と言ふや。』釋して言はく、『此は是れ隱顯して名を彰す。内の中には、有を彰して其觀の義を隱し、外の中には、觀を説いて其有の義を隱す。互に一邊を擧ぐ。現實には齊く通ず。又不淨觀は自身を厭はんが爲にして、内を觀するは知り易し。故に隱して論ぜず。又此觀は先に他身の死尸等の相を取つて、用て己體に方ぶ。初の方便に従ふが故に、觀外と言ふ。』内無色相觀外色とは、預め己身の未來の死相、虫食、火燒、滅壞等の相を取つて、もつて現在に方べて滅壞の相を作すが故に、内無と曰ふ。又現在に於て、分離破壞して乃ち微塵に至るも、亦所有無し。亦是内無と名く。外の不淨を觀するを、觀外色と名く。問うて曰はく、『何が故に外無を觀ぜざる。』釋して言はく、『自身は無常危脆にして、無の想成じ易きが故に、内無と説く。外の大地等は安固にして壞し難し。觀じて無と爲し難きが故に、之を説かず。又復自身は狭少にして盡し易きが故に、内無を觀ず。色は寛多にして、滅盡すべきこと難し。要す空處に至つて、方に能く之を滅す。故に此觀の中には、外無を觀ぜず。』問うて曰はく、『若し外

色は寛廣にして、無を觀じ難しと言はば、何が故に外色の不淨を觀することを得るや。釋して言はく、「不淨は是れ其有觀なり。有は前境に順ず。觀を爲すこと成じ易きが故に、外を觀じて以て不淨と爲すことを得。無觀は就り難し。是を以て外を觀じて無と爲すことを得ず。問うて曰はく、「何が故に初門の中には、通じて内外を觀じ、以て不淨と爲すや。」

「此は唯外を觀するのみ。論に言はく、「前には心を觀ず。未だ細ならざれば、一處に攝し難し。故に内外を觀ず。此心轉じて細にして、一處に攝し易し。故に唯外を觀ず。又前の門の中には、内色未だ無ならず。故に内外を觀ず。今此門の中には、内色已に無なるが故に、偏に外を觀ず。」問うて曰はく、「内に無ならば、唯ぞ外色を觀する。」論に曰はく、「此は是れ假想の觀なり。是れ實無に非ず。故に外を觀することを得」と。此前の二門は是れ不淨觀なり。淨解脫とは、皮肉を除去して、唯白骨を觀ず。又骨光を觀じて、其青黃赤白等の想を作すを、淨解脫と名く。觀法は云何。『先に金銀諸寶等の光を取つて、用て骨相に方べ、後に之を見ることを得。』問うて曰はく、「凡夫は不淨の中に於て淨を取るを、倒と名く。此れ亦不淨を觀じて淨と爲す。何が故に倒に非ざる。』論に言はく、「女色は實に是れ不淨なり。凡夫は淨を見て、中に於て染著す」と。所以に是れ倒なり。此淨觀とは、唯白骨を觀ず。骨を皮肉に望むるに、少しく淨相有り。所以に倒に非ず。又此觀の中に、其骨相を捨して、唯骨光を觀ず。骨光は清淨なり。所以に倒に非ず。又此觀の時、先に金銀諸寶の色光を取つて、以て骨色に方ぶ。所取の寶色は、實に是れ清淨なり。

【涅槃】 北本第三十一。

【龍樹等】 大智論第二十一。

【大品經】 大智論第八十。

【涅槃經】 北本第三十一。

【毘曇法の等】 次

【雜心】 第七十七

所以に倒に非ず。又淨を觀すと雖も、染著を生ぜず。是を以て倒に非ず。此れ『涅槃』の中には、身證解脫と名く、淨身を觀察して解脫を證得すれば、身證解脫と名く。此れ三色の觀なり。空處乃至非想解脫は、四空定の如し。言ふ所の異とは、龍樹釋して言はく、「彼四空定は、凡聖俱に得。此四解脫は唯聖人のみ得。其解脫は更に廻せざるを以ての故に」と。滅盡解脫とは、彼宗の中に於て、滅定を體と爲す。故に『大品經』六度相攝品に云はく、「菩薩の滅定を第八解脫と爲す」と。『涅槃經』の中も、亦此説に同じ。滅定の體相廣くは前に釋するが如し。問はく、「無想定は何の義を以ての故に、解脫と名けざる。」論に言はく、「此は是れ邪見人の入出するときは、則ち還つて退して邪見の中に入る」と。故に解脫に非ず。毘曇法の中には、初の三後の一は龍樹と同じ。四空解脫の文相少しく異なり。異相は如何。『大智論』の中には、四空解脫とは、四空定の與に通局をもて異を分つ。定は凡聖に通じ、解脫は唯聖なり。毘曇法の中には、寛狭をもて異を分つ。定の義は寛にして通ず。無礙解脫は、俱に名けて定と爲す。解脫の義は狭にして、無礙及び命終心に通ぜず。故に『雜心』には、四空處の九無礙道及び命終心を除いて、其餘の善法を、盡く背捨と説く。無礙は下縁するが故に、背捨に非ず。命終心とは、受生の處に向ふ。亦背捨に非ず。問うて曰はく、「文は異なり。其義云何。」釋して言はく、「義は齊し。之を語するに隱顯あり。龍樹は多く『阿毘曇』の義に依つて所論を爲すが故に。亦『毘曇』に、九無礙及び命終心を除くべきを解脫と爲すは、龍樹共に同じ。龍樹の所説に、八解は唯聖とい

【成實に等】次に成實論の所説による。
【成實論】第十五

ふは、『毘曇』に同じからず。『北義云何。』『雜心』に釋して「九無礙及び命終心を除いて、其餘の善法を盡く背捨と説く」と言ふが如し。若し凡の所得は背捨に非ざれば、盡説と名けず。『成實』に論ずる所は、前と全く別なり。彼論には、初の三の色空を觀察するを、名けて解脫と爲す。淨不淨等を觀察するを以て、名けて解脫と爲さず。故に『成實論』八解脫品に云はく、「有人説いて言はく、『初の二は不淨なり。第三は解脫を淨觀と爲す』とは、是義然らず。所以は何ん。淨觀及び不淨觀は解脫を得ること有ること無きが故に。又復外道も亦能く淨と不淨とを觀察す。明に解脫に非ず。但空觀を以て、名けて解脫と爲すのみ」と。問うて曰はく、『外道も亦空觀を作すと曰ふ。云何が解脫と名けざる。』『論』に言はく、「外道は但信解の觀にして、眞實の觀に非ず。要す實に空を見て、方に解脫と名く」と。然るに彼文の中、初の三解脫の文相極めて隱なり。相傳して釋して言はく、「内有色相觀外色とは、自身を内と名け、他身を外と名く」と。此内外五塵の色に於て、未だ其空を見ず。但内外の四大五根假名の色空を見る。是れ初の解脫なり。而るに名字の中には、五に一邊を擧ぐ。有は内外に通ずるも、内の中には偏に彰れ、觀は内外に通ずるも、外の中には偏に説く。前に辨ずる所の内有色相觀外不淨と、其義相似す。内無色相觀外色とは、内外五塵の色空を觀察す。是れ第二の解脫なり。而るに名字の中には、内の上に無を云ひ、外の上に觀を説く。言綺互するのみ。此二は欲界の色空を觀察す。淨解脫とは、色界の淨色を觀察して空と爲す。此三門の中には、亦心空を見る。後に別せんが爲の故に、偏に觀

【三】以下、第二に八解脱の體性を分別するに五義の分別あり。一に假實

【二には等】二には有爲無爲について分別。

色と言ふ。次の四解脱と前とは亦異なり。前とは、正く四空の定體を用て、四解脱と爲す。今此に論ずる所は、聖人は先に四空定を得已つて、隨つて何の禪に依つて無漏觀を發し、觀じ已つて得る所の四無色定を、苦無常空無我等と爲す。中に於て縛を離するを、名けて解脱と爲す。故に彼論に言はく、「聖人四無色定を得るに因つて、能く彼陰苦無常等を觀するを、解脱と名くるなり」と。第八解脱は、前とも亦異なり。前には滅定を説いて、第八解脱と爲す。成實法の中には、滅定は全く非なり。故に「成實」に言はく、「行者は泥洹を證得するの時、諸の煩惱滅して一切の事訖ぬるを、第八解脱と名く、一切の心心數滅するを説いて、第八解脱と爲さず」と。明に知んぬ、同じからざることを。又言はく、「學人は但滅定を得て、第八解脱を得ず。電光羅漢は第八解脱を得て、滅定を得ず」と。明に知んぬ、同じからざることを。彼論に復言はく、「滅盡解脱は無明等を滅し、滅盡定は想受等を滅す」と。明に知んぬ、同じからざることを。通じて之を論すれば、無學所得の二種の涅槃及び滅盡定は、是れ第八解脱なり。此の如きの解脱は、大乘にも亦行り。

【二】以下、第二に八解脱の體性を分別するに五義の分別あり。一に假實

【二には等】二には有爲無爲について分別。

「八解脱は唯假人を用て體と爲す。良に以れば、煩惱は假人を繫縛するが故に。人、腕を得れば、即ち腕の體と爲す」と。復有説には、唯實を體と爲す。此れ皆大いに偏なり。解脱の人を論ずれば、假者を體と爲し、解脱の徳を説かば、實法を體と爲す。故に經の中には、説いて慧脱心脱と爲す。義既に兩兼なり。何ぞ偏に取ることを得ん。二には有爲無爲に就

【三には等】三に漏無漏に就いて分別す。

【四には等】四に心非心相對分別。【五には等】五に三善を分別す。

いて分別す。毘曇法の中には、六俱に有爲なり。前の七は是れ其有爲心法にして、第八は有爲非色の法なり。成實法の中には、前の七は有爲にして、第八は無爲なり。彼に數滅を説いて第八と爲すが故に。大乘法の中には、隨事解脫は始は「毘曇」に同じく、終は皆無爲なり。觀空解脫は始は「成實」に同じく、究竟終成は一切無爲なり。不生滅なるが故に。三には有漏無漏に就いて分別す。毘曇法の中には、初の三、後の二は一向に有漏なり。前の三は事觀なるが故に、是れ有漏なり。非想は邊地聖にして、中に居せざるが故に、是れ有漏なり。滅定は非想に繫屬するの法なるが故に、亦是れ有漏なり。中間の三種は、漏無漏に通ず。成實法の中には、一回無漏なり。故に彼論に言はく、「是れ空性なるが故に、一切無漏なり」と。大乘法の中には、前の七種は始學は有漏にして、終成は無漏なり。第八の一種は、一向に無漏なり。故に「地持」の中には、滅盡定を説いて、以て聖住と爲す。四には心非心を相對して分別す。前の七は心法にして、第八は非心なり。五には三善を分別す。無貪瞋癡は是れ其三善なり。毘曇法の中には、初の三は是れ其無貪善なり。問うて曰はく、「初の三若し無貪の性ならば、何が故に經の中に、説いて觀色と爲すや。觀は是れ慧の性なり。云何が無貪なる。」釋して言はく、「此れ乃ち相近きをもて之を説く、無貪善根と慧とは、相隨つて方に能く貪を離る。故に強伴に従つて、之を説いて觀と爲す。説いて觀と爲すと雖も、無貪を主と爲す。貪欲を壊するが故に。」問うて曰はく、「初の二は是れ不淨觀なり。貪を壊すること爾るべし。第三の淨觀云何が貪を壊する。」釋して言は

く、「是中に淨觀を作すと雖も、貪欲を壊せんが爲の故に、無貪と名く。」問うて曰はく、「不淨食を壊すること足れり。何んが淨觀を須ふることを得る。」論に言はく、「行者自ら試んと欲するが爲なり。若し不淨を見て貪欲を生ぜざれば、未だ奇と爲すに足らず。淨を見て貪せざるを、方に乃ち奇と爲すが故に。此觀を爲す。又復行者若し淨を觀ぜずして、之に就いて貪を除かば、復淨色を見て或は貪を起すべし。是過を防がんが爲の故に、先に淨を觀じて、之に就いて心を調ふ」と。問うて曰はく、「不淨は能く貪欲を破す。復淨觀を須て、助けて貪を破すとは、觀想瞋を治す。何が故に觀想之を助くることをなさざる。」釋して言はく、「淨想は一向の過に非ず。佛身寶色等の相を觀するが如し。欲染を生ぜざるが故に、淨想を作し、助けて貪欲を破す。觀想は唯過なるが故に、之を爲さず。又貪は斷じ難きが故に、淨觀を須て、助けて之を破す。瞋恚は除き易し。故に唯觀想のみ獨り能く破遣す。」次の四解脱は、是れ無礙の性なり。慧を體と爲すが故に。故に「雜心」に云はく、「勝色想の如く、體性は是れ慧なり」と。第八は非心にして、三善に收めず。成實法の中には、前の七は慧の性なり。空觀なるを以ての故に。第八は無爲にして、三善に攝せず。大乘法の中には、隨事解脱は、「毘曇」と同じく、觀空解脱は、「成實」と同じ。體性は是の如し。

【三】以下、第三に位に就いて分別す。一に毘曇の所説。

第三門の中、位に就いて分別す。「毘曇」には、八解脱を釋するに二有り。一には聖を簡んで凡に異す。八解は唯是れ那含、羅漢の二人の所得なり。那含の人の中には、極多は八

を成じ、少は則ち不定なり。羅漢の人の中には、極多は八を成じ、極少は七を成ず。滅盡定を除く。滅盡定は俱解脱の人方に始めて得るを以ての故に。問うて曰はく、『八の中の初の三解脱は、貪欲の對治なり。那含、羅漢は已に貪欲を出づ。何が故に修するや。』釋して言はく、『此三は是れ防過の行にして、斷過の行に非ず。聖人は退して下の煩惱を起さんとを畏る。故に此三を修す。欲を斷せんが爲にあらす。』問うて曰はく、『云何が知る、此三種は斷過の行に非ざることを。』『論に言はく、『初の二は初禪、二禪に依つて修起し、第三は四禪に依つて修起す。貪欲の對治は、必ず未來に在り。故に知んぬ、此三は斷過の行に非ざることを。』問うて曰はく、『須陀、斯陀の人は、何が故に得ざるや。』釋して言はく、『初の三は四禪に依つて起す。後の五は四空地の中に在り。須陀、斯陀は八禪を得ず。是が爲に得ず。』問うて曰はく、『凡夫も亦八禪を得。何が故に得ざるや。』『其所得は退轉有るを以ての故に、解脱と名けず。』『大智度論に準すれば、此義決定す。』『二には凡聖通じて論ず。前の三の解脱及び四空地の有漏の解脱は、或は凡夫の得、或は那含、羅漢人の得なり。若し凡夫の時八禪を修得すれば、則ち凡夫の得なり。若し聖を得已つて、方に八禪を修すれば、則ち是れ那含、羅漢人の得なり。彼阿那含初めて成するを得と名け、阿羅漢の人有るが故に得と名く。空處、識處、無所有處、無漏の解脱及び滅盡解脱は、唯是れ那含、羅漢人の得なり。問うて曰はく、『此等を須陀、斯陀は、何が故に得ざるや。』『其れ八禪定を得ざるを以ての故に。』『毘曇』是の如し。『成實』は、八解は唯賢聖に在つて、凡夫に通ぜ

【大乘法の等】 三
に大乘所説。

【三】 以下、第四
に處に就いて分別
す、中に三、一に
依禪處。

す。賢聖の中に就いては、唯修道及び無學道に在つて、見諦に通ぜず。彼修道及び無學の
中に於ては、觀空の行を通じて解脫と名け、無礙解脫の別を簡ばす。中に就いて、初の二
は修起は斯陀舍の行に在つて、那舍の向に至る。欲界地の中の煩惱治するが故に、成は那
舍に在り。次の四は修成して羅漢行に在り。上二界の中の煩惱を治するが故に。非想解脫
は始修は羅漢行の中に在つて、成は無學に在り。滅盡解脫は、唯無學に在り。大乘法の
中には、種性以上一切具足す。若し復通じて論ずれば、善趣位の中にも亦分に之を得。位別
是の如し。

第四門の中には、處に就いて分別す。中に於て三有り。一には依禪處、二には處身處、
三には境界處なり。依禪處とは、毘曇法の中には、初の二解脫は初禪、二禪に依つて修起
す。何が故に是の如くなる。』論に言はく、「欲界に二種の欲有り。一には身欲、謂はく、
五識の中の食染の心なり。二には心欲、謂はく、意識の中の食染の心なり」と。故に初禪
に依つて、不淨觀を修して彼欲を對治す。初禪地の中にも、亦二欲有り。一には身欲、謂
はく、眼耳鼻身の三識身の中の食染の心なり。二には心欲、謂はく、意識の中の食染の心な
り。故に二禪に依つて、不淨觀を修して彼欲を對治す。二禪已上は身欲有ること無きが故
に、三禪の上は復之を修せず。又三禪の中の樂は、自地の樂なり。肯て彼不淨の事を觀ぜ
ず。第四禪の中は、心性寂靜にして、彼不淨の事を觀ずることを喜ばざるが故に、之を
爲さず。彼中に設ひ有るとも、少きが故に説かず。第三解脫は、第四禪に依る。何が故に

【依身處とは等
二に依身處】

是の如くなる。『不淨の法を觀じて、之を以て淨と爲すは、成就すべきこと難し。第四禪の中は、慧力増強にして、方に之を爲すに堪へたり。餘禪は慧劣なり。所以に起さず。又前の二種は欲界の色を觀じて、以て不淨と爲す。不淨は實觀近ければ、則ち成じ易く、之に遠ければ、就り難し。故に偏に初禪、二禪に在り。第三解脫は欲界の色を觀じて、之を以て淨と爲す。淨は是假觀遠ければ、則ち成じ易く、之に近ければ、就り難し。故に偏に第四禪の中に在り。下には設ひ之有るとも、微なるが故に説かず。次の四解脫は當地なり。知るべし、滅盡解脫は非想に繫屬す。『成實』には、八解は通じて四禪及び三無色に依る。初禪に依るが如き、欲界の色内外空寂を觀するを、初の二解脫と爲し、色界の空を觀するを、第三解脫と爲し、己が所得の無色定空を觀するを、四空解脫と爲し、彼初禪に依つて一切の生死の因果を斷滅するを、第八解脫と爲す。初禪に依るが如き、無所有に至るも類して亦同じく然なり。電光定に依つて、但前の三及び後の滅盡を得、中の四を得ず。『何が故に是の如くなる。』『論』に言はく、「聖人四空定を得て、然して後に之を無當苦空なりと觀するを、名けて解脫と爲す。電光羅漢は彼定を得ざれば、觀すべき所無し。是が爲に得ず。非想は心劣にして、增觀斷結の無漏を發さず。是が爲に依らず」と。大乘法の中には、觀空解脫は具に八禪に依る。大乘には、非想に無漏有るが故に。隨事解脫は、始は『毘曇』に同じく、行修純熟す。初の三解脫は、果に四禪に依る。次の四は當地なり。滅盡解脫は、一切地に依つて皆現に入ることを得。此一門、依身處とは、『毘曇』の如きに依

【次に等】三に境
界處を論ず。

らば、初の三解脱は、唯欲界に有り。三天下の人堪任して修起す。餘處の身に非ず。是れ欲界の貪欲の治なるを以ての故に、上界に在らず。問うて曰はく、「初禪に猶身心兩種の欲有り。何が故に上界に此治を修せざる。」釋して言はく、「初禪には二欲有りと雖も、然るに此れ正しく貪婬の患を治す。上界には已に離る。是が爲に修せず。欲界の六天には貪欲有りと雖も、著樂の情深くして修起すること能はず。鬱單越の人は著欲薄しと雖も、慧力微方なり。是が爲に修せず。餘趣は障礙有り。又禪定無し。是を以て起らず。次に四解脱は、三界の身の中に皆修起することを得。其有漏なる者は、下に從つて修起し、然して後に上生ず。其無漏なる者は、下及び當地に皆修起することを得。滅盡解脱は、欲界に修起す。上二界に非ず。問うて曰はく、「何が故に禪無色等の上に修起することを得る。」滅盡は爾らず。論に言はく、「禪定は三種の力を起す。一には内力、過の所修を自分因と爲すに由るが故に、現に能く起す。二には業力、今の修得は上に生ずる業なるを以ての故に、迭に相資發して、上に在りて能く起す。三には方便力、謂はく、火災等を怖れて修起せしむ」と。是三力に由るが故に、上に修起す。滅定は唯説力に從つて生ず。欲界には、佛有つて滅定の法を説くが故に、修起することを得、上には説者無きが故に、修起せず。『若し『成實』に依らば、初の二解脱は唯欲界の身にして、修起することを得。欲界の身を名けて、以て内と爲すが故に。第三に欲色に皆修起することを得、後の五解脱は、三界に皆起す。大乘法の中には、始は二乘に同じく、究竟終成は、一切處に皆一切を起す。此二門、次に、境處

を論ず。『毘曇』の如きに依らば、初の三解脱は、欲界の法を觀じて、以て境界と爲す。空處、識處、無所有處は、有漏の解脱は唯自地及び上地の法を緣じて、以て境界と爲す。彼解脱道は唯自地を緣じ、勝進道の者は上地を緣ずることを得。問うて曰はく、何が故に下法を緣ぜざる。『背捨に非ざるが故に。又下を緣ずる者は、是れ無礙道にして、解脱に非ざるが故に。此三處の中の無漏の解脱所緣の苦集は、唯自及び上なり。下地を緣ぜず。無色は下の有漏を緣ぜざるが故に、滅諦も亦爾なり。良に下の有漏を緣ぜざるを以ての故に、亦彼對治の滅を緣ぜず。道諦の中、自地及び上は一切皆緣す。下は則ち不定なり。若し下禪に依つて、無漏道を發して下過を治すれば、一切緣ぜず。亦下の有漏を緣ぜざるを以ての故に、彼治を緣ぜず。能く自地及び上過を治すれば、通じて之を緣ずることを得。非想解脱は、唯自地の有漏を緣じて境と爲す。滅盡は無緣にして、之を論すべからず。成實法の中には、初の二解脱は境は欲界に在り。第三の解脱は境は色界に在り。四空の解脱は境は四空に在り。滅盡は境無し。大乘法の中には、觀空解脱は『成實』と同じく、隨事解脱は『毘曇』と同じ。

【二四】以下、第五に八解脱の得捨成就得を明す。一に其

第五門の中に、其得捨成就の義を明す。先に其得を明す。先に無くして今有る、之を名けて得と爲す。『毘曇』の八解脱の義釋に二有り。一には聖を簡んで凡に異す。八解脱は唯是れ聖人の功德なり。中に於て、前の三及び四空處の有漏の解脱は、唯欲得を離る。下欲を離する時、上法を得するが故に。下の三空處の無漏の解脱に、二種の得有り。一には離

【次に等】二に捨の義を明す。

欲得、下欲を離する時、上法を得するが故に。二には退得、謂ゆる、退根、聖果を退する時、本法を得す。第八解脫は唯方便得なり。八禪を得し已つて、方便修習して、然る後に之を得す。問うて曰はく、「何が故に前の七解脫は離欲得有り、滅盡は爾らずして唯方便得なる。」釋して言はく、「前の七は是れ離欲の法にして、正く下欲に違す。是故に下地の欲を離する時、便ち待つ所無く、即便ち之を得す。滅盡解脫は、是れ滅心の法にして、下欲を離すと雖も、上心未だ已まず。是が爲に得せず。一には凡聖通じて論ず。凡夫の所得を、通じて解脫と名く。中に於て、前の三及び四空處の有漏の解脫に、二種の得有り。一には離欲得、義は前の釋に同じ。二には生得、凡夫は上より退して下に生ずる時、下法を得す。良に有漏は上に生じて、下を失するを以ての故に、下に生ずる時、還つて復之を得す。餘は前に釋するが如し。『成實』には、文無し。義に准じて之を論ずれば、前の七解脫は、唯離欲得なり。謂ゆる、永く下地の欲を斷ずる時、彼解脫を得す。第八は不定なり。中に於て、所有の有餘涅槃は、唯離欲得なり。無餘涅槃は、或は離欲得、或は方便得なり。當報の起らざるは、是れ離欲得なり。謂ゆる、非想の欲を遠離する時、即便ち之を得す。現報盡く滅するは、是れ方便得なり。邊際智を用て、通じて報を滅して得するが故に。羅漢の滅定は、亦方便得なり。大乘法の中には、隨事解脫は『毘曇』と同じく、觀空解脫は『成實』と同じ。此一門に於て、次に捨の義を明す。先に有りて今失するは、之を名けて捨と爲す。『毘曇』には、前の三及び下の三空處の有漏の解脫に、二種の捨有り。一には退捨、謂

【次に等】 三に成就を明す。

【五】 以下、第六に八解脱處の優劣を論ず。

ゆる、退して下地の欲を起す時、上の解脱を失す。二には生捨、上地に生ずる時、下法を失す。下の三空處の無漏の解脱に、三種の捨有り。一には退捨、彼宗は無漏に退失有るが故に。二には轉根捨、鈍の無漏を轉じて利根と爲す時、鈍根を失するが故に。三には得果捨、無學を證する時、學道を捨するが故に。第七、第八には、唯一の退捨あり。「成實」には、前の七は唯無餘涅槃に入る時捨す。第八は捨すること無し。大乘法の中には、縁修の解脱は眞證の時捨す。眞實の解脱は畢竟して捨すること無し。此二門次に成就を明す。所有の處に隨つて、名けて成就と爲す。毘曇法の中には、前の二解脱は二禪已還には身に隨つて、何れの處にしても一切成就す。上に生じては成ぜず。有漏は上に生じては、則ち下を失するが故に。第三解脱は四禪已還には、一切の處に成ず。上に生じては成ぜず。下の三空處の有漏の解脱は、自地及び下の一切に皆成ず。上に生じては成ぜず。彼三空處の無漏の解脱及び後の二種は、一切の處に成ず。然るに彼宗の中、前の七解脱は所成の處に隨つて、皆現に入ることを得。第八解脱は欲色界に在つて、成じて入ることを得。無色は成ずと雖も、而も入ることを得ず。彼には形色無し。若し復心を滅すれば命則ち盡くるが故に。成實大乘には、一切の解脱は一切の處に成ず。

第六門の中に、其優劣を辨す。中に於て、八勝處及び十一切入に約對して、以て優劣を辨す。八勝及奥び十一切入は、後に當に具に論ずべし。「毘曇」には、唯初の三解脱に就いて、八勝等に望めて、以て優劣を辨す。初の三解脱は總相觀なるが故に、最も以て下と爲

す。八勝は次に廣く説いて、以て中と爲す。十一切入は最も廣く觀するが故に、説いて以て上と爲す。「成實」は爾らず。彼論に宣説すらく「十一切入は假想觀なるが故に、最も以て下と爲す」と。八勝處は初は是れ有漏、後は是れ無漏なれば、説いて以て中と爲す。八解脫は唯是れ無漏なれば、説いて以て上と爲す。中に於て、下なる者は外凡に在り、中なる者は内凡已去に在り、上なる者は修道已上に在り。八解脫の義之を釋すること麤爾なり。

【六】淨法聚第七十四段に八勝處の義を明すに、四門の分別あり、第一に釋名辯相。

【大智論】 第二十

【龍樹等】 第二十一。 大智論

八勝處の義の四門分別。名を釋し相を辯ず一。體を論ず二。人に就いての分別三。處に就いての分別四。

第一に、名を釋し、相を辯ず。八勝處とは、經の中には、亦是八除入と名くるなり。此觀行を爲すは、能く貪欲の勝煩惱を息むる處なるが故に、勝處と云ふ。入とは、亦是れ處の別稱なり。煩惱を除く處なるが故に、除入と名く。勝處不同なれば一門に八を説く。

『八名とは是れ何ぞ。』一には内有色相外觀色少、『大智論』の中には、外觀色、若は好、若は醜勝、知勝見と名く。二には内有色相外觀色多、『大智論』の中には、外觀色、若は好、若は醜勝、知勝見と名く。二には内有色相外觀色多、三には内無色相外觀色少、四には内無色相外觀色多、五には青、六には黄、七には赤、八には白なり。八が中の初の二は、是れ第八解の中の第一の解脫なり。己身を内と名く。己が身分に於て、未だ滅せず、未だ壞せざるを、内有色と名く。外色の中に於て、始めて一身を觀じて以て不淨と爲すを、外觀少と名く。『何が故に多ならざる。』『龍樹釋して言はく、「學觀の始は心の攝し難きを畏れ

【龍樹等】 大智論第二十一。以下、第二に八勝處の體性を辯ずるに三あり、知るべし。

て、敢て多觀せず。譬へば鹿の遊ぶこと未だ調はざれば、遠く放つべからざるが如し。若は好醜とは、論に言はく、「彼外色の中に於て、善果を好と名くれば、惡果を醜と名く」と。又外色の中には、生姪の處は之を名けて好と爲し、生瞋の處は之を説いて醜と爲す。又彼三十六物の中には、骨相を好と名け、皮肉等の相を説いて、以て醜と爲す。又外色の中に、妄りに淨想を生ずる、之を名けて好と爲し、還つて不淨と見る、之を説いて醜と爲す。好に於て、醜に於て、貪瞋を生ぜず。但四大の因縁和合を觀するを、勝知勝見と名く。第二の内有色相外觀多とは、内有は前に同じく、觀心轉熟して能く廣觀を爲し、大地に周滿して悉く不淨と見るを、外觀多と名く。次の二勝處は是れ八解の中の第二の解脫なり。己が身分に於て、其死相、蟲食、火燒、盡滅の想を作すを、名けて内無と爲す。多少は前に同じ。青、黄、赤、白は、是れ八解の中の第三の解脫なり。外色の中に於て、皮肉を除去して其骨想を作し、後に此骨を觀じて其青、黄、赤、白等の想を作すを、四勝處と爲す。觀法は云何。『青觀を爲さんと欲せば、先づ四禪を得、次に外色に於て少の青相を取り、還つて定中に入つて、復彼青を觀ず。是の如く往返して、極めて純熟せしむるを、青勝處と名く。黄等も亦然なり。問うて曰はく、「此四と十一切人の中の青、黄、赤、白の四とは、一切入に何の差別か有る。』『龍樹釋して言はく、「一切入は廣く普く一切を緣じて、悉く青等と爲す。勝處は少しく緣ず。斯異有るのみ」と。』此一門。

次に、體性を辯ず。中に於て三有り。一には有爲無爲に就いて分別す。此觀は有爲なり。

【二八】以下、第三人に就いて八勝處を論ず。

【二九】以下、第四に處について八勝處を論ず。

【三〇】淨法聚第七十五段に八行觀の義を明すに二門の分別あり、第一に釋名辯相。

二には有漏無漏に就いて分別す。毘曇法の中には、一向に有漏なり。成實法の中には、漏無漏に通ず。故に彼『成實』八勝品に云はく、「始觀は有漏、終成は無漏なり」と。大乘も亦爾なり。三には心法を分別す。毘曇法の中には、是れ無貪の性なり。貪欲の治なるが故に。成實法の中には、是れ智慧の性なり。大乘法の中には、直に事を觀するは『毘曇』と同じく、兼ねて空を見るは『成實』と同じ。此二門竟る。

次に、人に就いて論ず。毘曇法の中には、或は是れ外道、凡夫修起し、或は是れ那含、羅漢修起す。『成實』に釋して言はく、「佛弟子は起すは、外道に通ぜず。佛弟子の中には、内凡の修起は、初は有漏、後は無漏なるを以ての故に」と。大乘法の中には、十信已去は皆能く修起す。此三門竟る。

次に、處に就いて論ず。處の中に四有り。一には依禪處、『毘曇』には、前の四は初禪二禪に依つて修起し、後の四は第四禪に依つて起る。彼『成實論』八勝品に云はく、「欲界の電光及び色界定に依つて、皆修起することを得」と。二には境界處、三には修起處、四には成就處なり。此等を具に辨ずれば、八解の中の初の三解脱と其義相似す。八勝是の如し。

八行觀の義の兩門分別。名を釋し相を辯ず一。位に就いての分別二。第一に、名を釋し、相を辨ず。八行觀とは、『地持』に説くが如し。八境界に於て涉求

するを行と名け、照察を觀と稱す。理實には通じて一切の諸法を觀ず。今は此れ且く一色に就いて之を論ず。餘は類して知るべし。『名字は是れ何ぞ。』一には色を觀じ、二には色の集を觀じ、三には色の滅を觀ず。亦は色の離と名く。四には色の道を觀じ、五には色の味を觀じ、六には色の過を觀ず。亦は色の患と名く。七には色の出を觀じ、八には色の第一義を觀ず。『地持』に説くが如し。八が中の前の七は、色の義を觀察す。謂ゆる、世諦の義を觀察するなり。後の一は、色の第一義を觀察す。前の七が中に就いて、初の四は正色の體義を觀じ、後の三は色の所生を觀察す。前の四が中に就いて、初に色を觀ずとは、色の體性苦無常等を觀ず。此は即ち是れ其苦諦觀なり。色の集を觀ずとは、色の因因、業煩惱を觀察す。此は即ち是れ其集諦觀なり。色の滅を觀ずとは、色の盡處、數滅無爲を觀ず。故に色滅と名く。色相を滅離するが故に、亦色離と名く。此は即ち是れ其滅諦觀なり。色の道を觀ずとは、彼色の對治の道を觀察す。此は即ち是れ其道諦觀なり。次に三觀の中、色味を觀ずとは、色の集を生ずるを觀ず。色を緣じて愛を生じ、境界に味著するが故に、色味と名く。色の過を觀ずとは、色の苦を生ずるを觀ず。所生の苦報は是れ過患の法なるが故に、色過と名け、亦は色患と名く。色の出を觀ずとは、經には亦は離と名く。出と離とは滅の異稱なるが故に。彼滅諦の四行の中に、或は説いて盡止妙出と爲す有り、或は復説いて滅止妙離と爲す。故に知んぬ、出離は滅の別稱なることを。此は色法を觀じて、能く滅を生ず。滅は是れ無法なり。云何が生ずべき。色を觀じて滅を得るを、義説して生と

【三二】以下、第二に位について論ず

【三三】淨法聚第七十六段に八大人覺の義を明す。

爲すなり。涅槃の中の涅槃修得を、不生と名けざると、其義相似す。何が故に色を觀じて道を生ずと説かさる。一、道は是れ後の第一義觀なり。全く説かさるに非ず。第八の色第一義とは、色の無我を觀す。無我に二有り。一には衆生無我、色の中に入無し。二には法無我、色の性空寂なり。八が中の前の七は是れ觀の方便、後の一は正觀なり。色を觀する、既に然なり。受想行等は、類して亦同じく爾なり。此一門

次に、位に就いて論ず。文に定判無し。義に准じて之を推すに、麤も亦知るべし。毘曇法の中には、初の四方便は、煖等已上漸く學して觀察す。苦忍已去は、正見分明なり。次の三方便は、斯陀行より去つて、漸次に觀察して無學を究竟す。第八門の中に、人無我觀二處通とは、成實法の中には、前の七は事觀にして、思慧地に在り、後の一は理觀にして、煖等已上に漸く學して修習し、無相已去に、正見分明なり。大乘法の中には、實に上下に通ず。相に隨つて別して分たば、前の七は方便にして地前に在り、後の一は正觀にして地上に在り。八觀行の義略して辨ずることは是の如し。

八大人覺の義。

八大人覺とは、佛は是れ大人なり。諸佛の大人此法を覺知して涅槃の因と爲すを、大人覺と名く。所覺不同なれば、一門に八を説く。八名とは是れ何ぞ。一には是れ少欲、二には是れ知足、三には樂寂靜、四には勤精進、五には守正念、六には修禪定、七には修智慧、八には不戲論なり。彼未得の五欲の法の中に於て、廣く追求せざるを、名けて少欲

【摩訶衍】淨法聚第七十七段に八法攝摩訶衍の義を闡す。マハヤーナ(Mahayana)

と爲す。已得の法の中には、受取限を以てするを、稱して知足と曰ふ。諸の積闇を離れて獨り空閑に處するを、樂寂靜と名く。諸の善法に於て數修無間なるが故に、精進と云ふ。法を守つて失はざるを、名けて正念と爲す。法に住して亂れざるを、名けて禪定と曰ふ。聞思修を起すを、説いて智慧と爲す。分別を證離するを、不戲論と名く。一に廣く辨ずれば、『遺教經』の如し。此八が中に就いて、前の七は方便、後の一は正證なり。八大人覺之を略して爾云ふ。

八法攝摩訶衍の義

八法攝摩訶衍は、『地持論』に出づ。摩訶衍とは、是れ外國の語にして、此には大乘と名く。大乘の行廣けれども、八法に統收す。斯れ其中に集るが故に、名けて攝と爲す。八名とは是れ何ぞ。一には名けて信と爲し、二には聞思と名け、三には思慧と名け、四には淨心に名け、五には初修慧行、六には修慧廣、七には修慧果成、八には畢竟出離なり。菩薩は種性、解行の位の中に、八解處に於て淨信成就するが故に、名けて信と爲す。何者か八勝なる。一謂はく、三寶の功德、諸佛菩薩の神通の力、種種の因果、眞實の義、得義、得方便なり。種種の因果とは、是れ世諦の法なり。眞實の義とは、是れ第一義なり。得義と言ふは、無上菩提なり。得方便とは、謂はく、諸菩薩所修の學道なり。此八處に於て、菩薩は皆信す。聞慧と言ふは、解行の初め出道を欲求して、出世の法に於て、具足して聽聞す。思慧と言ふは、解行の終り所聞の法に於て、具足して思量す。故に『地持』に

云はく、「菩薩の解行は、聞慧思慧思惟なり」と。淨心と言ふは、初地の始め無我の理を見て、證心清淨なり。故に淨心と云ふ。初修慧行とは、初地の滿心に十大願を起し、信等を修行す。此は即ち是れ其修道の所收なり。修道の始なるが故に、名けて初と爲す。修慧廣とは、二地已上乃至七地の修道漸く増するを、修慧廣と名く。修慧果成とは、八地已上に修行純熟するを、修慧果成と名く。畢竟出離とは、謂はく、如來地なり。如來永く一切の諸障を離るるを、畢竟出と名く。八法攝摩訶衍は、之を辨すること略して爾り。

九次第定の義。

九次第定とは、謂ゆる、八禪及び滅盡止受なり。龍樹の説くが如し。此九は唯根本定體を取つて、方便に通ぜず。根本定の時、轉じて相入るが故に。八禪滅定は、廣く上に釋するが如し。然るに此も亦九次第滅と名く。初禪の中に入つて欲界の心を滅し、二禪の中に入つて初禪の心を滅し、乃至彼滅盡定に入る時、非想の心を滅す。九次第定の名字是の如し。

【論】淨法聚第七十八段に九次第定の義を明す。大智論第二十一。

【五】次に淨法聚第七十九段に九想の義を明すに八門の分別あり。第一に辨相。

九想觀の義の八門分別。相を辨ず一。定體二。所緣三。治患の不同四。十想到約對して其同異定す七。修起の所爲八。

第一に、相を辨ず。「九想は云何。」「第一に死想行とは、姪欲の賊を破せんと欲するが爲

【大智論】 第二十

【六】以下、第二に體性を辨ず。大智論第二十一。

に、先に死想を觀ず。人の死する時、言語分別し出息返らず、忽然として便ち死するを見て、我も當に然るべく、所愛も亦爾なりと念じて、用て煩惱を呵す。第二には脹想、屍變脹して草裏の中の風の如く、本形に異なるを見て、我も當に然るべく、所愛も亦爾なりと念じて、用て貪欲を呵す。三には青淚想、彼死屍の風に吹かれ、日に曝され、色變じて青淚し、本の形色を壞するを見て、我も當に然るべく、所愛も亦爾なりと念ず。四には膿爛想、彼死屍青淚し已つて、後久しからずして膿爛し、臭弊惡むべきを見て、我も當に然るべく、所愛も亦爾なりと念ず。五には壞想、彼死屍風日に轉大いに破壊され、地に在りて膿血流出するを觀て、已も當に然るべく、所愛も亦爾なりと念ず。六には血塗想、死屍壞し已つて、血肉塗漫す。已も當に然るべく、所愛も亦爾なりと念ず。七には蟲食想、彼死屍を燒かず、埋めず、之を曠野に棄て、諸蟲狩の爲に食噉さるるを觀、己が身も自ら方に亦類し、所愛も亦爾なりと見る。八には骨鎖想、彼肉既に盡きて、唯骨鎖共に相連持するを見る。九には分散想、殘筋既に斷じ、骨鎖分離するを、分散想と名く。『大智論』の中には、一の死想を少き、一の燒想を加ふ。彼殘骨火の爲に燒かれ、終に灰燼と成るを見て、已も當に然るべく、所愛も亦爾なりと付る。問うて曰はく、「彼論には、何が故に死を除くや。」彼は初め死して形色未だ變ぜざるを以て、猶淨相を取る。是が爲に説かず。此一門次に體性を辨ず。論にははく、「此九は是れ想の自性なり。相を取るを以ての故に。若し終成に據らば、是れ無食の性なり。食欲の治なるが故に」と。此二門竟る。

【七】以下、第三に所縁を辨ず。

【六】以下、第四に九想治患の不同を明す。

次に所縁を辨ず。此九は唯欲界地の中の不淨の色を緣じて、以て境界と爲す。欲界の貪欲心を破せんが爲の故に。此三門

次に九想治患の不同を明す。九想は能く貪欲の病を治す。貪に二種有り。一には自身を愛す。五種の不淨を對治と爲す。前の五度章の中に、具に廣く分別するが如し。二には他身を愛す。九想を治と爲す。他身を愛する中、經論不同なり。「涅槃經」に依らば、四欲有りと説く。一には威儀欲、其進止、語言等の事を愛す。二には形色欲、其青、黃、赤、白等の事を愛す。三には處所欲、或は眼耳に著し、或は鼻口を愛し、或は腰身を貪る。是の如きの一切なり。四には細觸欲、其細滑、柔濡等の觸を愛す。此四種の欲は、九想別に治す。

初の威儀欲は、死想を治と爲し、形色欲は、青、濃、膿、血塗を治と爲し、處所欲は、眼、鼻、口、舌、齒、牙、爪、髮、毛、皮、肉、骨、髓、膿、血、汗、淚、涕、唾、痰、便、溺、屎、尿、糞、尿、骨、鎖、を治と爲す。『大智度論』に依らば、染に七種有り。一には威儀に著す、其進止を愛すなり。二には語言に著す、其音聲言語戲笑を愛すなり。此二は威儀に著す、其進止を愛すなり。三には形色に著す。猶前の四が中の形色欲なり。四には形

容に著す、其身形を愛すなり。猶前の四が中の處所欲なり。五には細滑、柔濡等の觸に著す。猶前の四が中の細觸欲なり。六には通じて前の五に著す。七には人相に著す、謂はく、男は女を愛し、女は男を愛する等なり。七が中の初の二は、死想を治と爲し、形色に著するは、青、濃、膿、血塗を治と爲し、形容に著するは、眼、鼻、口、舌、齒、牙、爪、髮、毛、皮、肉、骨、髓、膿、血、汗、淚、涕、唾、痰、便、溺、屎、尿、糞、尿、骨、鎖、を治と爲す。後の二種は、九想通じて治す。此九は貪を破

觸に著するは、骨瑣及與び燒相を治と爲す。後の二種は、九想通じて治す。此九は貪を破

觸に著するは、骨瑣及與び燒相を治と爲す。後の二種は、九想通じて治す。此九は貪を破

【三九】以下、第五に十想に對して其同異を辨ず。【龍樹の等】大智論第二十一。

す。瞋等も諸經も、皆亦微薄なり。此四門

次に十想到對して、其同異を辨ず。十想は後の十想章の中に、具に廣く分別するが如し。

九想を彼に望むれば、同有り、異有り。言ふ所の異とは、龍樹の説くが如し。九想は初學、

十想は終成にして、初學を因と爲し、終成を果と爲す。又復九想は未得定の人の婬欲の心

を遮し、十想に能く滅す。九想に能く遮するは、賊を縛するが如しく、十想の能く滅するは、

賊を斬るが如し。言ふ所の同とは、同じく食欲を治して涅槃の因と爲す。中に於て相攝す

ること、論者不同なり。有人釋して言はく、「彼十想の中の不淨想とは、具に九想を攝す」

有人復言はく、「十が中の不淨食とは、世間不可樂想を厭ひ、具に九想を攝す」復有人の言

はく、「彼九想觀は、通じて十想を攝す」と。彼死相分に變異するを觀するは、即ち無常

想なり。若し此法に著すれば、無常を壞する時、則ち苦惱を生ず。即ち是れ苦想なり。無

常は苦なるが故に、自在を得ず。即ち無我想、彼死想を觀す。九想身を觀するに、一の淨

相無し。不淨なるを以ての故に、食口に在りと雖も、腦涎流下して、合して味と成り、咽

より腹に入つて、即ち不淨と成る。食著すべきこと無し。即ち厭食想なり。是九想は世間

を厭離するを以て、即ち是れ世間不可樂想なり。九想身の無常敗壞を觀するは、即ち是れ

死想なり。此九想に能く煩惱を斷ずるを知るは、即ち斷想と名け、此九想を用て、諸の煩惱

を遮するは、即ち離想と名く。九想觀を以て、陰をして生ぜざらしむるは、即ち是れ盡想

なり。亦は滅想と名く。同異是の如し。此五門竟る。

【四】以下、第六に諸禪に對して先後を辨定す。

【龍樹の等】大智論第二十一。

【二】以下、第七に道品に對して其本末を辨ず。

【三】以下、第八に所爲を明す。

【三】淨法聚第八十段に九斷智の義を明すに五門の分別あり、第一に釋名辨相、一に釋名【雜心】論第四使品。

次に諸禪に對して先後を辨定す。論の中に説くが如し。九想は是れ其諸禪の方便なり。先に九想を修して煩惱を折伏し、然して後に禪に入る。問うて曰はく、「經の中には、多く先に禪を説き、後に九想を説く。今云何が九想は是れ其趣禪の方便と言ふや。」龍樹釋して言はく、「先に諸禪を讚して、人をして愛樂せしむ。所樂の禪定は、九想に出つて成ず。故に先に之を成ず」と。此六門

次に道品に對して、其本末を辨ず。龍樹の説くが如し。九想の觀は身念處を開き、身念處は後の三念處を開導し、四念處を以て、餘の道品を開き、三十七品を以て涅槃門を開く。此七門

次に所爲を明す。論の中に説くが如し。小乗の人は涅槃に入らんが爲の故に、九想を修す。菩薩は一切衆生を憐み、諸の佛法を集めて之を度脱せんが爲の故に、九想を修す。九想の義厥趣粗兩り。

九斷智の義の五門分別。名を釋し相を辨ず一。道に約しての分別二。處(目三)に、名を釋し、相を辨ず。九斷智の義は、「雜心」に説くが如し。煩惱の盡處、之を名けて斷と爲す。斷は是れ智果なり。果は因に仍つて名く。故に斷智と號す。故に「雜心」に云はく、「智は是れ智なりと雖も、斷は是れ智果なり。故に斷智と説く」と。其れ猶業果を亦名けて業と爲すがごとし。問うて曰はく、「彼斷云何が智果なる。」釋に兩義有り。一

【體相は等】 次に
辨相。

【四義あり、一に見
約して分別するに
修二道に約す。】

には無礙道に望め、智に由つて障を斷ず。彼斷を得るが故に、名けて智果と爲す。『若し爾らば、見諦の煩惱の盡處は、忍の斷得に由つて應に斷忍と名くべし。何の義を以ての故に、亦斷智と名くるや。』釋して言はく、『忍は是れ智の眷屬なれば、通じて名けて智と爲す。通じて智と名くるが故に、忍が家の果も亦斷智と名く。二には解脫道に望め、智の爲に證得せらるるが故に、智果と曰ふ。問うて曰はく、『彼智緣じて證とや爲ん、當に緣ぜざるべしとや爲ん。』釋して言はく、『緣ぜず。集法智の如し。當に之を起すべき時、欲界の集を緣ず。彼斷を緣ぜずして、而も能く之を證す。故に智は緣ぜず。是の如きの一切なり。』名義且爾なり。『體相は云何。』『斷智に九有り。欲界地の中の苦集諦の下の煩惱の盡處に、一の斷智を立つ。滅道諦の下の煩惱の盡處に、各別を一を立つ。前に通じて三と説く。上界も亦然なり。前に通じて六と説く。三界の修道の煩惱の盡處に、各別に一と爲す。前に通じて九と説く。問うて曰はく、『何が故に上二界の中、見惑の盡處は界別に隨はずして、修惑の盡處は界を逐うて分つや。』論に自ら釋して言はく、『上界の見惑の對治は同じきが故に、界別に隨はず。修治は別なるが故に、界に隨つて之を分つ』と。『是義云何。』『見惑は除き易し。若し忍の心に比すれば、一念現する時、上二界の中の迷苦の煩惱一時に頓に斷ず。餘の忍も亦爾なり。故に同治と曰ふ。修惑は遣り難く、境界各別に斷ず。故に別治と云ふ。』

【前四門の中は、道に約して分別す。具に四義有り。一には見修二道に約して分別し、

【次に等】二に法比に依つて分別す

【次に等】三に忍智の二門に約す

【次に等】四に有漏無漏に就いて分別す

二には法比に依り、三には忍智に約し、四には有漏無漏に就いて分別す。見修と言ふは、無礙道に望むれば、前の六は是れ其見道斷智なり。見道の無礙に障を斷じて得るが故に。後の三は是れ其修道斷智なり。修道の無礙に障を斷じて得るが故に。解脫道に望むれば、前の五は是れ其見道斷智なり。見諦道の中に解脫して證するが故に。次の三は是れ其修道斷智なり。修道門の中に解脫して證するが故に。後の一は是れ其無學斷智なり。無學果の中に解脫して證するが故に。此一門、次に法比の二門に依つて分別す。初の三斷智は、唯是れ法忍法智の果なり。無礙道に望むれば、是れ法忍の果、解脫道に望むれば、是れ法智の果なり。次の三は比忍比智の果なり。無礙道に望むれば、是れ比忍の果、解脫道に望むれば、是れ比智の果なり。次の一は、唯是れ法智の果なり。欲界の修惑は法智斷なるが故に。後の二斷智は、或は法智の果、或は比智の果なり。若は欲界の滅道の法智を以て、上の修惑を斷ずるは、是れ法智の果なり。四の比智を用て、上の修惑を斷ずるは、是れ比智の果なり。是を則ち其に論ずれば、法智に其六斷智の果有り。見三、修に三なり。比智に其五斷智の果有り。見三、修に二なり。此二門、次に忍智の二門に約して分別す。無礙道に望むれば、前の六は忍果なり。忍を無礙と爲し、障を斷じて得るが故に。後の三は智果なり。智を無礙と爲し、障を斷じて得るが故に。故に『雜心』に云はく、「三斷は是れ智果にして、餘は則ち是れ忍果なり。解脫道に望むれば、俱に是れ智果なり。同じく皆智の爲に證知せらるるが故に」と。此三門、次に有漏無漏に就いて分別す。等智は有漏、理觀は無漏

【四五】第三に處に
ついで分別す。中
に四、一には三界
處について。
【次に等】二に禪
地について分別す

なり。無漏には、具に九斷智果有り。無漏は能く一切の結を斷ずるが故に。有漏には、唯二斷智果有り。謂ゆる、聖人は世俗智を以て、欲界、色界の修道の惑を斷ずるが故に。故に『雜心』に云はく、「世俗道の果に二有り。聖の智果に九有るなり」と。道に約すること
是の如し。

第三門の中に、處に就いて分別す。中に於て四有り。一には三界處、二には禪地處、三には道位處、四には集斷處なり。三界處とは、欲界に四有り。見斷の三と、修斷の一となり。上界に五有り。見斷の三と、修の二となり。此一門次に禪地に就いて分別す。斷智は未來禪に依らば、九斷智を具す。未來は能く一切の結を斷ずるが故に。四根本禪及與び中間は、論者不同なり。瞿沙の説に依らば、八斷智を具す。欲界の中の五の下結の盡を除いて、餘は皆具足す。欲界の中の修道の煩惱は未來禪に斷じ、四根本及び中間に非ざるを以ての故に。法勝の説に依らば、五斷智を具す。謂はく、上二界の見の三と、修の一となり。彼説かく、「欲界の一切の結を盡すことは、唯未來に依つて、四禪及び中間に依らざるが故に、所以に論ぜず」と。此の如きの説は、四根本及び中間禪に依る。聖道に入る者は、但上界の見修の煩惱を斷じて、欲結を斷ぜず。欲結は先に除く。彼空處の方便の道に依つて、色界の修惑の盡處の一種の斷智を具することを得。第四禪の中の修道の煩惱を、彼能く斷ずるが故に。四空の中の下三空處に依つて、無色の煩惱の盡處の一種の斷智を具することを得。彼無漏を用て、能く無色の修道の惑を斷ずるが故に。非想は全く漏無漏無きが故

【次に等】三に道位處を辨ず。

【次に等】四に集斷處を明す。

此二門次に位處を辨ず。始め外凡より乃ち見道の五心に至る已來、一向に未だ斷智の果有らず。彼集法智、集比忍の時、一の斷智を成す。集比智、滅法忍より來は、二斷智を具し、滅法智、滅比忍より來は、三斷智を具し、滅比智、道法忍より來は、四斷智を具し、道法智、道比忍より來は、五斷智を具し、須陀洹果は、六斷智を具す。斯陀含果は、其義不定なり。若は超越の人は見諦道に入つて、斯陀含に向ふ。須陀洹向の中と相似せり。若は次第の人は斯陀含に向つて、六斷智を具す。須陀洹果の中と相似せり。若は超越の人は見諦道に入つて、阿那含に向ふ。須陀洹向の中と相似せり。若は次第の人は、阿那含に向ふ。須陀洹果の中と相似せり。阿那含果は、一の斷智を成す。謂はく、五の下結の盡處の斷智なり。問うて曰はく、那含は但欲界の貪欲、瞋恚二種の下結を斷す。自餘の身見、戒取及び疑の三種の下結は、先に已に斷除す。今云何が五の下結の盡處の斷智を成すと言ふや。釋して言はく、身見、戒取、疑等は、先に斷除すと雖も、此處に集るが故に、合して一斷と爲す。羅漢向の中の色愛の未だ盡きざるは、唯一を成就す。那含と同じ。色愛盡くる者は、二を成就することを得。羅漢果の中は、唯一を成就す。謂ゆる、三界の一切結盡なり。應に九を成就すべし。此處に集斷するが故に、但一と云ふのみ。竟る。次に集處を明す。前の別得を捨して、總じて一得と爲すを、集斷智と名く。集處に二有り。謂はく、那含果及び羅漢果なり。問うて曰はく、餘處は何が故に集まらずして、唯此二處のみなる。論に

【四六】 第四に其得捨成就を明す中、一に其得を明す。

言はく、「得果及び度界處は、方に集斷智なり。那含、羅漢は是れ得果處及び度界處なるが故に、集斷智なり」と。「何が故に此二の得果は度界なるや。」彼阿那含は五の下結盡す。阿羅漢の人は五の上結盡すが故に、此二處の得果は度界なり。「五の上下結は、前の煩惱の中に、具に廣く分別す。須陀、斯陀は是れ得果處にして、度界に非ず。色愛の盡處は是れ其度界にして、得果に非ず。餘は得果に非ず、亦度界に非ず。是が爲に集らず。處別是の如し。」

第四に、其得捨成就を明す。先づ其得を明す。先に無く今成ず、之を謂つて得と爲す。所得は不定なり。或は一を得する有り、或は二、或は六なり。一を得すと云ふは、凡そ九處有り。彼羅漢十六心の中に於て、第六、第八、第十、第十二、第十四、第十六の心、一一起る時、各一の斷を得す。即ち是れ六處なり。次第に那含果の心現する時、一の斷智を得す。前に通じて七處なり。羅漢向の中に色愛盡くる者は、一の斷智を得す。前に通じて八處なり。羅漢果起つて、一の斷智を得す。前に通じて九處なり。二を得すと云ふは、謂はく、羅漢の人は無色の結を退して、下結盡及び色愛盡の二種の斷智を得す。六を得すと云ふは、那含、羅漢は欲界の修道の惑を退起する時、見諦の中の六種の斷智を得す。此一門次に其捨を明す。先に成じ今失する、之を名けて捨と爲す。捨の中は不定なり。或は一を捨する有り、或は二、或は五、或は復六を捨す。一を捨すと云ふは、凡そ三處有り。一には羅漢果を退して一の斷智を捨し、二には色愛盡の阿那含の人、彼結を退起して一の斷智

【次に等】 二に其捨を明す。

【次に等】三に其成就を明す。

を捨し、三には色愛未盡の阿那含の人、欲結を退起して一の斷智を捨す。二を捨すと言ふは、具に兩處有り。一には羅漢を得する時、五の下結盡及び色愛盡の二種の斷智を捨し、二には色愛盡の阿那含の人、欲結を退起して二の斷智を捨す。五を捨すと言ふは、超越の那含得果の時、頗に向中の五種の斷智を捨す。六を捨すと言ふは、次第の那含得果の時、前の所成の六種の斷智を捨す。此二門次に成就を明す。所得を失せざるを、名けて成就と爲す。多少不定なり。或は一を成ずる有り、或は二、或は三、或は四、或は五、或は復六を成す。一を成すと言ふは、凡そ三處有り。一には集法智の時、二には那含果の時、三には羅漢果の時、皆一を成就す。二を成すと言ふは、其兩處有り。一には集比智の時、二には色愛盡阿羅漢向、皆二を成就す。三を成すと言ふは、滅法智の時なり。四を成すと言ふは、滅比智の時なり。五を成すと言ふは、道法智の時なり。六を成すと言ふは、道比智の時なり。

【第七】第五に其建立の所以を明す。【論】 帶心論第四

第五に、其建立の所以を明す。論の中に説くが如し。見道斷智は四の因縁をもて立つ。一には雙因滅、二には俱繫離、三には得無漏解脫得、四には缺第一有たり。雙因滅とは、苦集諦の下の見疑無明を、彼此相望めて互に遍因と爲すが故に、雙因と名け、兩因俱に斷するを、雙因滅と名く。俱繫離とは、苦集諦の下の遍使の煩惱互に相緣縛するを、名けて俱繫と爲し、彼此齊く斷するを、俱繫離と名く。得無漏解脫得と言ふは、解脫道起つて無漏を證得するを、得無漏解脫と名く。缺第一有とは、所斷の結、上非想に徹するを、缺第

一有と名く。苦法忍の時は、四義俱に無し。故に斷智を立てず。苦法智、苦比忍の時は、無漏解脫の得を得すと雖も、餘縁を具せず。故に亦立てず。集の下の煩惱未だ斷除せざるが故に、雙因未だ滅せず。俱繫未だ離せず。上二界の中の迷苦の惑在り。是故に未だ缺第一有と名けず。問うて曰はく、「苦比忍の心は上二界の迷苦の煩惱を斷ず。何が故に缺第一有と名けざる。」釋して言はく、「所斷の煩惱の時、猶忍と俱なり。故に未だ缺と名けず。苦比智、集法忍の時、無漏解脫得及び缺第一有を得と雖も、雙因未だ滅せず、俱繫未だ離せず。故に亦斷智の名を興へず。集法智の時四義具足するを、方に斷智と名く、「云何が具足する。」迷苦の煩惱は、先に已に斷除す。迷集は今盡す。故に雙因滅し、俱繫も亦斷す。彼苦法智、苦比智、集法智の時、已に無爲を證するを、得無漏解脫と名く。苦比智の時、第一有を缺くが故に、名けて具と爲す。集比智、滅道法智、滅道比智も、皆亦是の如く、四の因縁を具して、齊く斷智を立つ。問うて曰はく、「何が故に一切の忍の邊に斷智を説かざる。」無漏解脫得を得ざるが故に。修道斷智に五の因縁を立つ。謂はく、前の四に上の一界永斷を加ふ。欲欲界の中の九品の修惑、展轉相縛して、乃ち非想に至る。地地皆爾なり。彼欲界の中、一品を斷するより八品に至る來、無漏解脫及び曾の缺第一有を得と雖も、餘義を具せざるが故に、一に斷智を立てず。第九微品の惑有るを以ての故に、雙因未だ滅せず、俱繫未だ離せず、界未だ永く斷ぜず。九品斷の時、五義方に具して、乃ち斷智を立つ。初禪地の中、一品を斷するより八品に至る來、亦二縁を具す。謂はく、得無漏解

脫得及び缺第一有なり。餘の三は具せざれば、斷智を立てず。九品斷の時、四の因縁を具す。界未だ永く斷せざれば、亦名を與へず。二禪、三禪の義も亦同じく爾なり。第四禪の中、八品斷より來、前と相似せり。九品斷の時、五義備足し、方に斷智を立つ。四空地の中は、前に類して解すべし。修道の中に互の因縁を具して、斷智を立つるを以ての故に、凡夫の時、等智を以て諸の煩惱を斷ずと雖も、無漏解脫得を得ず。亦未だ缺第一有を具せず。故に斷智に非ず。若し凡時に在つて、曾て煩惱を斷じ、後に聖道に入つて、無漏智の爲に印證せらるれば、斷智と名くることを得。云何が印證する。『謂はく、凡夫の時欲界の中の六品の煩惱を斷じ、後に見道に入つて、道比智の時先の無爲を印するを、即ち斯陀解脫の果と爲す。若し凡に在る時、欲界の中の九品の惑を斷じ盡し、後に見道に入つて、道比智の時、先の無爲を印すれば、阿那含解脫の果と爲す。故に印證と名く。欲界の中の餘品の盡處及び上二界の煩惱の盡處に於ては、則ち印證せず。得果休息の處に非ざるを以ての故に。問うて曰はく、『印する時は縁すとや爲ん、印して當に縁せざるべしとや爲ん』と釋して言はく、『縁せず。修道の比智は上界の道を縁じて、欲界の煩惱の盡處を證す。是以に縁せず。』九斷智の義の大況盡然り。

昭和六年五月一日印刷
昭和六年五月十日發行

昭和國譯大藏經 宗典部
第二十卷

不許複製

編纂者

昭和國譯大藏經編輯部
代表者 三井品史

發行者

東京市神田區一ツ橋通町二番地
株式會社 東方書院
代表者 三井品史

印刷者

東京市神田區表神保町十番地
同興舍
代表者 井波康三郎

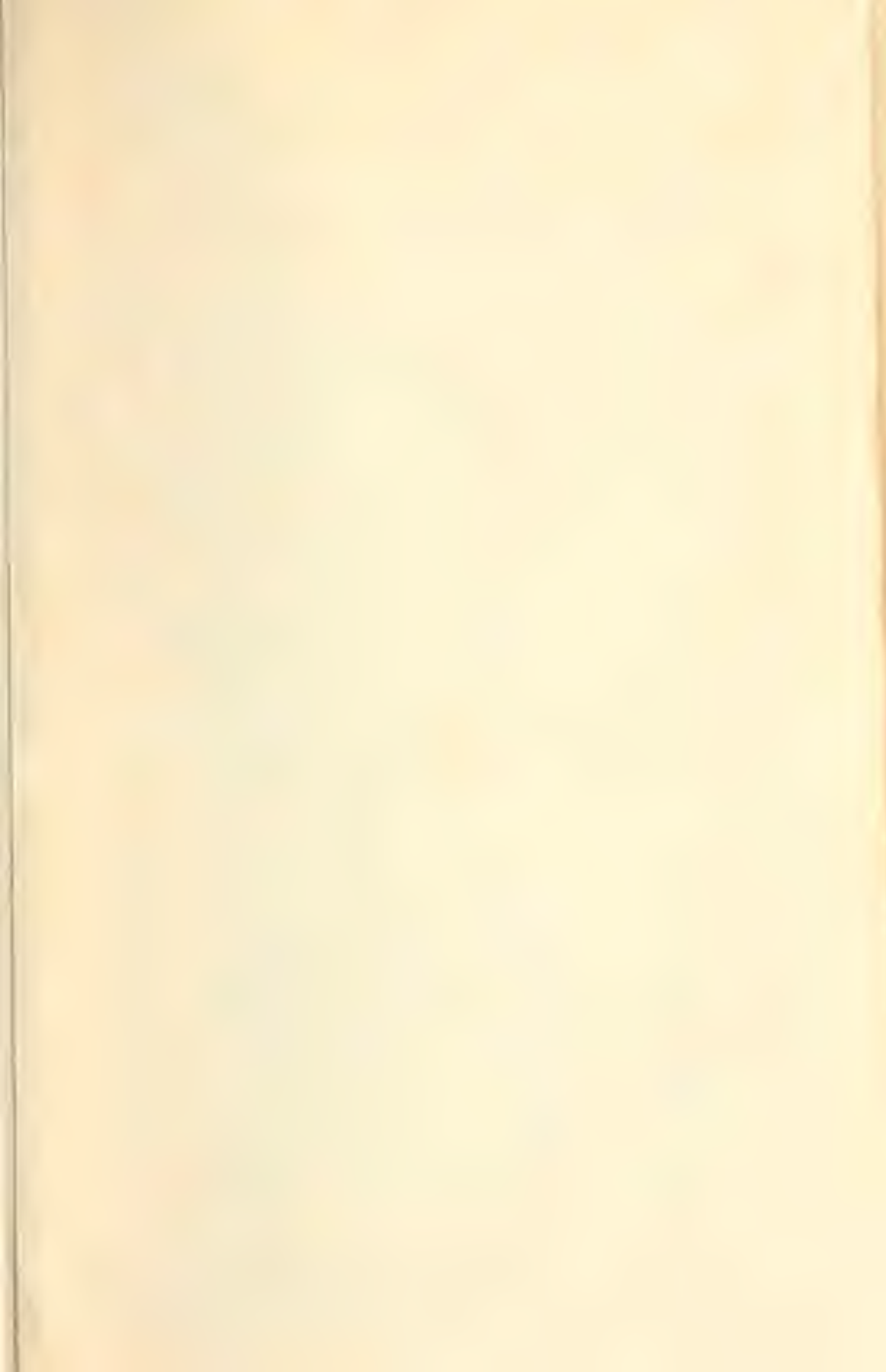
發行所

東京市神田區
一ツ橋通町二

株式會社 東方

書院

電話九段三八四二
振替東京六八六一一



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 3506